

ありふれない怪物は、
やがて英雄へ

シロマダラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界トータスに突然召喚された学生たち。それと同時に未来の地球からも召喚された男がいた。

その名は、ユキ・ロスリック。かつて光の英雄と共に戦い、光の英雄に敗れた男である。

彼を待ち受けるのは新たな出会い、過去との再会、未知への戦い――

「俺たちの『勝利』を示すために。」

さあ、絶滅闘争を始めよう」

※注意事項

- ・ありふれないアマツの絶滅闘争（非公開中）のリメイクです
- ・シルヴァリオシリーズのプレイ済み推奨です。
- ・独自解釈が入ります
- ・Web版を参考に描いています
- ・ありふれ零は未読なので、原作との矛盾がある可能性があります
- ・タグの追加、変更等が入る可能性があります
- ・不定期更新です

目次

| | | | |
|-------------|----|-----------------|-----|
| プロローグ | 1 | 第十話 奈落の底の封印部屋 | 86 |
| 第一章 | | 第十一話 星辰光 | 95 |
| 第一話 異世界トータス | 9 | 幕間 悪夢再び | 100 |
| 第二話 思わぬ再会 | 16 | 幕間 強欲竜団 | 107 |
| 第三話 ステータス | 26 | 第十二話 語らい | 113 |
| 第四話 情報収集と訓練 | 33 | 第十三話 最奥の英雄 | 120 |
| 第五話 月下の語らい | 39 | 第十四話 真の歴史 | 135 |
| 第六話 オルクス大迷宮 | 45 | 第十五話 新たなる旅立ち | 142 |
| 第七話 ベヒモス | 54 | 幕間 帝国と王女と勇者達 前編 | |
| 第八話 絶望と希望 | 67 | 幕間 帝国と王女と勇者達 後編 | |
| 第九話 奈落の底 | 74 | 一章人物詳細・設定補足 | 172 |

| | | | |
|-----|-------|-------------|-----|
| | 第四十八話 | 三体の化物 | 524 |
| | 第四十九話 | ありふれた職業で邪竜討 | |
| 伐 | 第五十話 | 神の使徒 | 533 |
| | 第五十一話 | 罪と罰 | 545 |
| | 第五十二話 | 闇術師の末路 | 558 |
| | 第五十三話 | フューレン、再び | 571 |
| 586 | 第五十四話 | 黒竜から見た怪物 | |
| 602 | 第五十五話 | 錬成師、パパになる | |
| 611 | 第五十六話 | 予言通りの敗北 | |
| | 第五十七話 | 魔法の言葉 | 625 |
| | 第五十八話 | 影の薄い男の奮闘 | 635 |
| | 第五十九話 | 前世の因縁 | 655 |
| | 第六十話 | 真実の一端 | 665 |
| | 第六十一話 | 審判者よ、怪物の殲嵐に | 676 |
| | 散るべし | | 686 |
| | 第六十二話 | 静寂と帰還 | 696 |
| | 第六十三話 | 抑えていた思い | 708 |
| | 第六十四話 | 怪物の真実 | 718 |
| | 第六十五話 | 狂気と嫉妬 | 728 |
| | 第六十六話 | ヒカリの導き | 737 |

三章人物紹介・設定補足 | 751

第四章

第六十七話 大砂漠とトラブル

756

第六十八話 アンカジ公国 |

767

外章

前日譚 星辰戦争 |

776

プロローグ

少年は生きていた。

時には盗んで、時には体を売って、時には死んで…

それでも、少年は必死に生きていたんだ。

全ては、元の世界に帰るために…

少年は生き続けた。

時には友を作り、時には戦い、時には死に…

それでも、少年は必死に生き続けた。

全ては、憧れた背中を追うために…

軍事帝国アドラー政府中央棟の地下で、二人の男が向かい合っていた。

第37代総統クリストファー・ヴァルゼライド。

帝国軍第一近衛部隊隊長ユキ・ロスリック。

スラムの頃からの親友である二人は、ここで決着をつけようとしていた。

「本当に俺と戦うつもりか、ユキ」

「そうだ。歪みを正し、この世界をあるべき形に戻して見せる。そのために」

ユキはそう言いながら自分の武器である太刀を抜き、それに反応してヴァルゼライドも自分の太刀を抜く。

「そうか、ならば是非もない。来るべき聖戦のため、俺はここで死ぬわけにはいかんだ」

「それはこちらと同じだ。カグツチ等人造惑星と雌雄を決する戦いがクリスの聖戦ならば、この星辰戦争こそが、俺の聖戦。故に、求めしものはただ一つ——」

「“勝つ”のは、俺だ!!」

そして、二人はぶつかり合う。互いの譲れぬ信念のために。

『『勝つ』のは、俺だ!!』』

顔をして、

『あり、がとう、クリスマス。お前、たちに、会えて、本当に、よかった』

そうして、ロスリックさんは息を引き取った。

私はその光景が、不謹慎だけど少しだけうれしかった。

いつも戦いの後、ロスリックさんは涙を流して悲しそうな表情をする。だから、安心した表情をしているのがうれしかった。

すると、私の視界が光に包まれていった。いつもの、目が覚める証拠だ。

いつもと違うことがあったから、今日は少し違うお話が雫ちゃんとできるかな。

目を開けると、見えてくるのは白い天井。私の部屋の天井だ。

「いつもと違う夢だったな」

夢で見たことを思い出す。あのユキさんは幸せになったのかな。

「香織く、朝ご飯よ〜」

「あ、は〜い」

お母さんに呼ばれて朝ご飯を食べるために部屋を出る。

なにか、今日はいつもと違うことが起きる気がする。私、白崎香織はそう思った。

「おはよう、雫ちゃん！」

朝、通学路を歩いている雫ちゃんを見かけて、挨拶をする。

「香織、おはよう」

「ねえ、雫ちゃん。あの夢のことなんだけど」

「ええ、これまでとは違う終わり方だったけど……」

この女の子は私の幼馴染の一人の八重樫雫ちゃん。私がああ夢を見るとときにはいつも同じ夢を見ているらしい。それに雫ちゃんはロスリックさんの――

「おはよう、香織、雫」

「よ、香織、雫」

「おはよう、光輝君、龍太郎君」

「おはよう、光輝、龍太郎」

声の聞こえた方を向くと、二人の男の子が立っていた。二人は私の幼馴染の天之川光輝ちゃんと坂上龍太郎くん。光輝くんは正義感が強いけど、時々強すぎて融通が利かないことがあって困ってる。

「なんの話をしてたんだ？」

光輝君が聞いてくるけど、夢のことは一部の人にしか話してない。疲れてるとか言っ

てまともに聞いてくれないと思うから光輝くんと龍太郎くんには話してない。

「女同士の会話にあまり入ってくるものじゃないわよ」

そういう話をしながら学校に行くと、教室の前で男の子が立っているのが見えた。

「おはよう、ハジメくん！」

「おはよう、南雲君。毎日大変ね」

「お、おはよう、白崎さん」

この男の子は南雲ハジメくん。ライトノベルを読もうと思ったときに本屋にいたところを話しかけて知り合つて、それからよく話しかけるようになった。夢を見ていることを知っている一人で、よく相談に乗ってもらつてる。

「今日も眠そうだね」

「うん、ゲームしてたら遅くなっちゃつて」

そんな話をしてるとチャイムが鳴つたから自分の席に着く。昼休みに今日見た夢について相談しようかな。

昼休み、ハジメくんに相談しようと思つて、ハジメくんに話しかける。

「ねえ、ハジメくん。あのことで相談があるんだけどいいかな」

「あ、うん。いいけど、お弁当は食べないの？」

「食べながら相談しようと思ってただけど、ハジメ君は？」

「僕はもう終わったから大丈夫だよ」

そう言いながら空になったゼリー飲料をヒラヒラさせながら見せてくる。

「もしかして、それだけなの？ 駄目だよ、ちゃんと食べないと。ほら、私のお弁当分けてあげるから」

そうして私のお弁当を分けてあげようとすると、光輝君達が近づいてきて、

「香織、こつちで一緒に食べよう。南雲はまだ眠いらしいからさ。せつかくの香織のおいしいお弁当を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよ？」

光輝君がよくわからないことを言っているけど、

「え？ なんで光輝君の許しがいるの？」

そう聞き返すと、雫ちゃんが「ブフツ」と吹き出した。それよりも光輝君達のことを止めてほしい。

結局光輝君達も一緒に机で食べることになった。ただハジメくん相談したかっただけなのに、なんでこうなっちゃったんだろう。

そう思っていると、急に足元に輝く幾何学模様が現れた。まるで魔法陣のようで、金縛りにあつたみたいに体が動かない。

「皆！ 教室から出て！」

教室にいた畑山愛子先生が叫ぶのと同時に、魔法陣の光が強くなって私たちを飲み込んだ。

ギガントマキア
星辰戦争は終わりを告げた。

でも、彼の戦いはまだ終わらない。

雷霆に敗れた怪物は新たな世界で目を覚ます。

過去の^{きのう}、現在の^{いま}、未来^{あした}を歩む怪物よ。

人々の未来を切り拓くため。

人々を神の支配から救うため。

かつての夢を再び目指すため。

敗北^{しょうり}の越えたその先で、本当の勝利を掴む為――

さあ、絶滅闘争^{テイタノマキア}を始めましょう。

第一章

第一話 異世界トータス

光が治まると、私たちは知らない場所にいた。

最初に目に入ってきたのは巨大な壁画。後光を背負った金髪の中性的な人物が描かれていた。

周りを見渡してみると、白い大理石のようなものでできた建築物にいるみたいだった。

隣には、一緒に教室にいた雫ちゃんやハジメ君たちもいた。

すると、一人の老人が近づいてきた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。ご歓迎いたします」
勇者？ 歓迎？ 何のことなの？

私たちがそう混乱していると、私たちがいる場所がまた光り出した

「ご安心してください。エヒト様がもうお一人召喚なさるのです」

その言葉と共に光が溢れ光が収まった時、そこには一人の男の人が立っていた。

その人は私たちが何年も夢で見てきた、ユキ・ロスリックさんだった。

誰かに呼ばれた気がして、目を開けた。

そこは見たことない空間だった。

ここは何処だ？ 俺は政府中央棟^{セントラル}の地下にいたはずだ。

そもそも、俺はあの時、確実に死んだはずだ。

「ようこそ、トータスへ。使徒様。ご歓迎いたします。」

すると一人の法衣を来た老人が俺に話しかけてきた。

よく見ると、17〜18くらいの少年少女たちが周りにいた。

「……何者だ？ 貴様が俺やこの子たちをこの世界に呼び出したのか？」

ここが地球ではなく誰かが俺たちを召喚したことだけは、なんとなくだが気が付いた。

ずっと昔、新西暦に飛ばされた時と同じ感覚がしたからだ。

「いえ、あなた方を召喚したのはエヒト様です。」

私はイシユタル・ランゴバルドと申します。あなた方達には我ら人間族を救っていた
だきたいのです」

落ち着いて話を聞くためにはテーブルがいくつも並んだ大広間に案内された。

全員が着席すると、カートを押しながらメイドが入ってきて飲み物を給仕してきた。

どうやら少年たちはメイドを見るのが初めてだったらしく、メイドたちを凝視している。

そんな少年たちを少女たちは冷ややかな目で見ていた。

俺は見慣れていることもあるが、それよりも二人の少女とメイドの一人がこつちを見ていることが気になって仕方がない。

というより、あのメイドに見覚えがある気がする。

全員に飲み物が行き渡ると、イシユタルが話を始める。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますので、まずは私の話を最後までお聞きください」

そう言い、イシユタルは説明を始めた。

この世界はトータスと呼ばれ、人間族、魔人族、亜人族の三つの種族が存在し、人間族が北一带、魔人族が南一带を支配、亜人族は東の巨大な樹海の中でひっそりと生きている。

この内、人間族と魔人族は何百年も戦争を続けており、人間族が数、魔人族が個々の実力に優れ、勢力差は均衡していた。

だが、魔人族が魔物を使役するようになってから均衡が崩れ始め、このまま戦争が続けば人間族は滅びの危機を迎える。

魔物とは野生動物が魔力を取り入れ変質した存在らしく、強力な魔法も使える凶悪な害獣らしい。

この危機を回避するために、人間族が崇める聖教協会の唯一神にして、トータスの創世神エヒトが勇者を召喚たこのことだ。

「あなた方には是非ともその力を発揮し、邪悪なる魔人族を打倒し我ら人間族を救って頂きたい」

イシユタルは信託を聞いた時のことをを思い出しているのか、恍惚とした表情を浮かべている。

そのことに猛然と抗議するために、一人の女性が立ち上がった。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争をさせようってことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く返して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずですよ！ あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

確か、畑山愛子先生だったか。理不尽な召喚理由に怒り立ち上がったのだが、イシュタルの言葉に生徒達も凍りついた。

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の期間は現状では不可能です。

先ほども言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えません。あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様のご意思次第ということですね」

この言葉に、生徒達はパニックになる。

(当然だろう、突然家に帰れなくなっただから)

ユキは生徒達を横目に見ながら、状況の整理を始める。

(この子供たちは見たところ、武器など持ったことのないのだろう。せいぜいナイフや包丁程度。命の危機など感じたこともないのだろう。つまり、現状まともに戦えるのは俺一人だけか……)

それにあのイシュタルの表情、あれは狂信者ジャパニストと同じ顔だ。この世界の人間が全員同じではないと思うが、信用はできない)

そう考えていると、バンツとテーブルをたたきつける音がした。

ユキがその方向を見ると、天ノ河光輝が立ち上がった。

「みんな、ここでイシュタルさんに文句を言っても意味はない……俺は、俺は戦おう

と思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間族を救うために召喚されたなら、救済さえ終われば返してもらえるかもしれない。……イシユタルさん、どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主様の願いを無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですよね？ここに來てから妙に力が張っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救って見せる!!」

「……何を言っているんだ彼は？ 世界を救う？ みんなを救う？」

戦うということが、誰かを傷つけるということを理解していないのに、何を言っている？」

生徒達が次々と光輝の意見に賛同していく。

（この子たちもそうだ。戦うことをわかっていない。現実逃避したくなるのは理解できるが、人殺しをしろと言われていることをわかってない。正しく理解しているのは数人だけか）

そう思いながらユキは理解できているだろう数人に目を向ける。

「あなたも、それでいいですか？ えっと、」

「ん？ ああ、ユキ・ロスリックだ。そうだな……」

突然話しかけられ、注目を浴びるユキはイシユタルに話しかける

「なあ、ランゴバルド殿。つまり、俺に“悪”を滅ぼしてほしい。そういうことでいいんだな？」

「はい、その通りでございます」

「…… わかった。いまいち納得できないが、悪を滅ぼせというなら受け入れよう」

（まあ、なにが“悪”かどうかの判断は俺にさせてもらうがな）

結局、全員が戦争に参加することになってしまった。

ユキは正しく理解している一人、南雲ハジメに興味を持ち、それとは逆に天ノ河光輝、イシユタル・ランゴバルドの二名を要注意人物として認識するのだった。

第二話 思わぬ再会

魔人族との戦争に参加することが決まり、まず戦う術を身に着けるため聖教協会本山のある神山の麓にあるハイリヒ王国に向かうことになった。

王国は聖教協会と密接な関係があり、国の背後に協会があることからそのつながりの強さがわかる。

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん——『天道』」

イシュタルが唱えると足元の魔法陣が輝き出し、台座が地上に向けて斜めに下って行った。

王宮にたどり着くと、真っ直ぐに玉座の間に案内された。

道中、騎士、文官、使用人など様々な人とすれ違ったが、皆一様に期待に満ちた、あるいは畏敬の念に満ちた眼差しを向けてくる。生徒たちは居心地が悪そうにしていたが、ユキはアドラーにいたところから向けられていた眼差しだったため、平然としていた。巨大な両開きの扉の前に到達すると、扉の両サイドに立っている兵士の二人がイシュタルと勇者一行が来たことを大声で告げ、中の返事も待たずに扉を開け放った。

扉を潜った先には、真っ直ぐ延びたレッドカーペットと、その奥の中央に玉座があつ

た。玉座には初老の男性が立ち上がって待っていた。

その隣には王妃と思われる女性、10歳前後の金髪の美少年、14、15歳の金髪の美少女が控えていた。更にレッドカーペットの両サイドには武官、文官らしき人達が並んで立っていた。

イシュタルが国王の隣へ進んだ。国王はイシュタルの手を取り、軽く触れない程度のキスをした。それを見たユキは国を動かしているのが国王ではなく、神であることに確信していた。

そこから国王たちの自己紹介が始まった。

国王エリヒド・S・B・ハイリヒから始まり、王妃ルルアリア、第一王子ランデル、第二女王リリアーナといい、今は国外に行っている第一王女シェリアがいるらしい。

後は騎士団長、宰相など、高い地位にある者たちの紹介がされ、その後には晩餐会が開かれた。

光輝と香織、そしてユキの三人は常に貴族などに囲まれている状況が続いていた。

晩餐会の終了後、各自に与えられた部屋に向かいほとんどの生徒たちが疲れから寝てしまったが、ユキは部屋でとある人を待っていた。

——コンコン——

「空いてるぞ」

予想していた通り部屋にやってきた人に鍵が開いていることを告げる。

「失礼します」

そう言い部屋に入ってきたのは、イシユタルの説明中ユキのことを見ていたメイドだった。

「… 久しぶりだな、アヤメ」

「… はい、隊長。いえ、今は「勇者様」の方が正しいですね」

「やめてくれ、分かっているだろ？ 俺は勇者なんて柄じゃないし、もう隊長じゃない」

「ではご主人様とお呼びします」

「… まあいいか。それより、まさかアヤメがこの世界にいるとはな」

「それに関しては私も驚きました。ループするならともかく異世界に転生しているとは予想していませんでした。」

「… 気になっていたのですが、少々若返ってませんか？ 二十歳くらいに見えるんですが」

「それは俺も思ったことだが、異世界とか転生とかに比べたら気にすることでもない。」

ところで、まさかと思うが、第一王女のシエリアって…」

「はい、ご想像の通り、シエリア・ハムです。それにデイルグもこちらの世界に転生しています」

アヤメ・キリガクレ、シエリア・ハム、デイルグ・ロートレク。新西暦でのユキ直属の部下三人であり、ユキの正体含め過去を知っている。

アスクレピオスの大虐殺で三人とも死亡したはずだが、三人ともトータスに転生しているらしい。

「俺が召喚されることを予想してたみたいだが、まさか魔法か？」

「シエリアの天職が預言師なんです。預言した結果、ご主人様が召喚されることが分かりました」

「天職？　なんだ、それは？」

「才能のようなものです。詳しくは明日にメルド団長が説明するはずなのでその時に」

——コンコン——

アヤメと話をしていると、扉をノックする音が聞こえた。

「空いてるぞ」

アヤメの他に来客の予定があつたかと思ひながら空いていることを伝えると、

「し、失礼します」

入ってきたのは、アヤメと同じようにユキのことをずっと見ていた香織と雫の二人

だった。

「君たちは：：確か白崎香織さんと八重樫雫さんだったか」

「は、はい：：そうですけど、なんで私たちの名前を：：」

二人は自分の名前を教えていないのに知っていることに疑問を覚えるが、

「畑山教諭に教えてもらった。仮にも同じ召喚された身だ、君たちの名前は全員覚えさせた。

そんなことより、こんな時間に何の用だ？ 女の子が二人で、さすがに不用心だぞ」

「すみません。ちよつと、聞きたいことがあるんです：：」

「聞きたいこと？」

「はい。ユキさんの本当の名前って、」

「天津悠姫さんあまつゆうきですよね？」

私、八重樫雫には幼馴染がいる。

香織、光輝、龍太郎の三人だけど、実はもう一人天津悠姫という男の子がいた。

悠姫くんとは親同士の仲が良く、私たちも年が同じだったこともあって、よく一緒に遊んでいた。

周りの子供たちより少し大人びていて、気付いたら目で追っていて好きになっていた。

ただ、旅行中に事故に遭って行方不明になってしまった。

原因不明の事故で、悠姫くん一人だけが行方不明になってしまい、そのことを聞いた私は悲しくて、しばらくの間部屋に引き込まってしまった。

今では香織たちもがいるから良くなったけど、当時はひどい状態だったらしい。

そして、小学3年生になったころから私と香織は不思議な夢を見るようになった。

その夢はある男の子の一生と言えるもので、その男の子の名前が天津悠姫。行方不明になった私の幼馴染本人だった。

明らかに現代とは思えない世界だったけど、ただの夢とは思えなかった。同じ夢を香織が見ていることもあるけど、何より私自身が生きていることを信じたかっただけかもしれない。

どうやら言葉が通じないようで、大人の男の人に暴行されて殺されてしまったり、人攫いに捕まって奴隷として一生を終えてしまったりと、まるでゲームのように何度も死んで、そのたびに子供のころから繰り返し返しているようだった。

夢を見るようになってから、私たちが小学生、中学生と成長していくように、「ユキ・ロスリック」と名乗るようになっていたり、軍人になって戦っていたり、私の知ってい

る頃とはずいぶん変わっていた。：恋仲の女性がいるのは複雑だけど。

そして、高校生になった私たちは異世界に召喚された。

突然だったけど何より驚いたのが、私たちの後にユキさんも召喚されてきたことだった。

夢で見てた頃より若返っているようだったけど、どうやら最後に見た夢の後みたいだった。

説明だったり、晩餐会だったり時間がなかったので夜にユキさんの部屋に行つて、悠姫くんなのかどうかを聞きに行つた。

私の幼馴染みは幻の存在なんかじゃないのだと、私たちが見ていた夢はただの想像なんかじゃないのだと、私たちの想いは偽物なんかじゃないのだと、証明したかったから。「ユキさんの本当の名前つて、天津悠姫さんですよね？」

：…
なに？ 俺の直属の部下たちと、クリスやアルしか知らないはずなんだが。なぜ彼女たちがそのことを…

「……さて、やはり君は……」

八重樫隼、という名前は聞いたことがあった。少なくとも、新西暦で純日本人の名前を聞くことはない。

ならば当然、聞いたのは俺が新西暦に飛ばされる前であり、

「お、覚えてるんですか?」

八重樫さんの反応からして俺の知り合いだったらしい。

だが、

「すまないが、西暦にいた頃のこととは覚えていないんだ。」

彼女には申し訳ないが、俺にとっては数万年以上前のことだ。

父親がいたらしい。母親がいたらしい。友達がいたらしい。俺の中には、その程度の記録しか残ってない。

「ッ! ……そう、ですよね」

「隼ちゃん……」

「……そ、それなら! これから、また覚えてもらえばいいですよね!

それで、日本に帰りましょう! 厳げんさんと日向ひなたさん、ユキさんのお父さんとお母さん

だって、今だってユキさんのことを待ってますから!」

……強いな、この子は。生きるのを諦めていた頃の俺とは大違いだ。

「：ああ、それならきつとね」

それから話を聞いていると、夢で俺の人生を見ていたという話を聞いた。

さすがに信じ難い話ではあるが八重樫さんと白崎さん、雫と香織の二人が俺の戦いや、死に戻りに関して知っていることを考えると本当なのだろう。

もしかしたら彼女が関わっているかもしれないが、確かめる術がない今ではどうでもよいことだ。

「さあ、もう夜も遅いし、二人とも部屋に戻った方がいい。明日も早いからな。」

「アヤメ、二人を」

「はい、そうですね。おやすみなさい」

「おやすみなさい、ユキさん」

「かしこまりました。おやすみなさい、ご主人様」

そう言い、三人は自分たちの部屋へ戻っていった。

アヤメだけじゃなく、日本にいたころの知り合いにも会うなんてね

まあ、これだけはエヒト神に感謝しておこう

明日から大変そうだが、やることはこれまでと変わらない。

人がより良い未来を歩めるように。
それを邪魔するなら倒すだけだ

”勝つ”のは、俺だ」

第三話 ステータス

翌日から訓練と座学が始まった

まず全員に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。

騎士団長メルド・ロンギスがそのプレートについて説明する。

「全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれているアーティファクトだ。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。身分証代わりになるから絶対に無くすなよ。アーティファクトというのは現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。

プレートに刻まれている魔法陣に、一緒に渡した針で血を一滴垂らしてくれ。所持者が登録がされる。“ステータスオープン” と言えば自分のステータスが表示されるはずだ」

説明の後に、各自ステータスプレートに血を垂らしてステータスを確認していく

ユキも自分のステータスを確認した。

|||||

ユキ・ロスリック ??歳 男 レベル：1

天職：神子

筋力：500

体力：500

耐性：500

敏捷：500

魔力：15000

魔耐：12000

技能：星辰光・■■■■・魔力操作・魔力変換・気配感知・魔力感知・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「全員見れたか？ 説明するぞ？ まず、最初に”レベル”があるだろう？ それは各の上昇と共に上がる。上限は1000でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の限界値を示していると思ってくれ。レベル1000ということは、人間としての潜在能力の全てを發揮した極地ということだからな。そういう奴はそうそういない」

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている」

なるほど、魔物を倒しただけで上昇するわけじゃないのか。

「次に、”天職”ってのがあるだろう？ それはいうなれば”才能”だ。末尾にある”技能”と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦闘系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによつちやあ万人に一人の割合だ。非戦闘系も少ないと言えば少ないが・・・百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持つてる奴が多いな」

ユキは自分のステータスを見る。

“神子”？ 確かに神の使徒と考えればおかしくはないが……

それに、技能の一つが正しく表示されてない……年齢は……まあいいか

「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！ 全く羨ましい限りだ！ あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

（さすがに魔力と魔耐の値がおかしくないか？ いや、星辰体との感応量≒魔力と考えれば、そんなにおかしくないのか？）

ユキが様々な考察をしていると、光輝が自分のステータスプレートを報告しに行つて

いた

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

天ノ河光輝 17歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100

敏捷：100

魔力：100

魔耐：100

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か……。技能も普通は二つ三つなんだがな……。規格外な奴め！ 頼もしい限りだ！」

「どうやら彼の天職は勇者だったらしい。昨日見た感じ、如何にもらしい天職だと思っただが、エヒトが召喚した。神子ではないとなれば、ユキは自分の天職はまずいのではないな」

いかと思った。

（神が絶対であるこの国で天職が神子なのはまずいか。自由に動けなくなる可能性が高い。）

それに、勇者より高いステータス。公表はしない方がいいか）
するとユキにメルド団長が近づいてきて

「後はお前だけだぞ？」

どうやら全員報告し終えたらしく、まだ報告していないユキのところに来たようだ。

「申し訳ない、メルド団長。ステータスの報告は拒否させてもらう」

「なに？ どういうことだ？ ステータスを報告してくれなきゃ、訓練内容が組めないだろう」

「俺は軍人だ。自分の訓練ぐらい自分でできる。それに、これでも激戦区上がりでね。死線はいくつも潜り抜けてきたつもりだ」

「しかし…」

「それに、なぜ自分の弱点になりえる情報を自分から開示しなきゃならない？ 戦いで最も重要なのは情報だぞ」

「…… わかった。だが、内容はともかく訓練には参加してもらおうぞ。他の者たちの訓練相手になることもできるだろう？」

「ああ、それでいい」

そう言いながらユキは周りを見渡すと、一部の者が騒がしいことに気が付いた。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：錬成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：錬成・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

どうやら、南雲ハジメのステータスが一般人と同等だったらしい。

ユキはハジメのステータスを見ながらハジメに話しかけた

「良い技能じゃないか」

「え？ でもこんなステータスじゃ…」

「ステータスなんて後からどうにでもなる。低いなら後方支援に徹していれば良い。

錬成、というのは鉄鋼業技術者、鍛冶師のようなものだろう。だったら出来ることはるかに多い。重要なのは、自分に出来ることをどう使うかだ」

そい言いながら、ユキはハジメの錬成について考える

（錬成、か。鍛冶師つてことは鉱石の加工もできるつてことか。使い方によつては銃の生産もできるんじゃないか？ もしそうならすさまじい技能だ。

俺の発動体の調律の問題もある、昨日の様子のことも含めて彼なら信用できるな）

一方、ハジメ自身もユキの言葉に感謝しながら、ユキに憧れの視線を送っていた。（ここ）まで考えてくれる人がいるなんて思わなかった。自分に出来ることをどう使うか、か…

よし、錬成で出来ることをしっかり考えよう。そしてみんなを見返してやろう）

みんなとのステータス差に軽く絶望していたハジメだったが、ユキの言葉に気を持ち直し前向きに考えていこうと決意した。

第四話 情報収集と訓練

召喚から二週間、ユキは訓練と座学を行う合間に、トータスの情報を集めるため図書館に行っていた。

(七大迷宮、オルクス大迷宮、ハルツィナ樹海か。ほんとにファンタジーみたいだな)

七大迷宮とはトータスに存在している有数の危険地帯のことで、オルクス大迷宮、ハルツィナ樹海の二つも含まれている。

「ハジメ、そっちはどうだ？」

「うん、こっちは大体調べ終わったよ」

二週間前のステータスの一件から、ユキとハジメの二人は親交を深め、お互いにとって会話できる程には仲が良くなっていた。

「やっぱり、亜人族は差別されてるみたい。海人族だけは例外みたいけど…」

(自分とは違う者を差別するのは、どの世界でも変わらないんだな)

亜人族は魔力を一切持っていない。そのため、神から見放された種族として人間族、魔人族の両方の種族から差別の対象になっている。

但し、エリセンという街に住む海人族だけは、産物のほとんどをがエリセンから供給

されているため、例外として王国に保護されている。

「二度はケモミミを見てみたいけど、基本的に樹海から出てこないみたいだし無理かな？でも、せめてマーメイドは見てみたいな。男のロマンだよ」

「そうなのか？　そういうことには疎くてな」

「へえ、意外だなあ。ユキさんって何でも知ってるようなイメージだからなあ」

「そうでもないぞ？　他人より知識や経験が多いのは認めるが、知らないものは知らないぞ？」

それより、そろそろ訓練の時間だ。準備しろ」

「え？　ほんとだ！」

時間が迫っていることに慌てながら、ユキとハジメは訓練場に向かった

ユキは教官側として参加しているため、メルド団長たちの方へ向かい、ハジメは一人で訓練場へ向かった。

訓練場に到着すると、既にほかの生徒達が談笑したり自主練したりしていた。

ハジメは自主練しながら待とう思っていると、後ろから衝撃を受けて、たたらを踏んだ。

後ろを振り向くと、檜山大介率いる小悪党四人組が立っていた。地球にいたところからちよつかいをかけていたが、それは召喚されてからも変わっていないなかった。

「よお、南雲。なにしてんの？ お前が訓練なんてしても意味ないだろうが。マジ無能なんだしよ〜」

「ちよつ、檜山言い過ぎ！ いくら本当だからってさ〜」

「なんで毎回訓練出てくんだよ。俺なら恥ずかしくて無理だわ!」

「なあ、大介。こいつさあ、もう哀れだから、俺たちで稽古つけてやんね?」

「おいおい、信治、お前マジ優しすぎじゃね? まあ、俺も優しいし? 稽古つけてやってもいいけどさあ〜」

「いいじゃん。俺ら超優しいじゃん。無能のために時間使つてゆるとかさあ。南雲〜マジ感謝しろよ〜?」

何が面白いのかニヤニヤ、ゲラゲラと笑う檜山達。

しかも稽古してやると言いながら、馴れ馴れしく肩を組み人目のつかない方へ連行していく。

「いや、大丈夫だよ。僕のこととは放っておいていいからさ」

やんわりと断るハジメだが、

「はあ? お前、無能のくせに何様のつもりだよ。俺たちが稽古をつけてやるって言っ

てんだから、お前はただありがとうございますって言つてればいいんだよ！」

そう言いハジメを殴り飛ばそうとする檜山だが、

「お前こそ、何様のつもりだ？」

急に聞こえてきた声に固まる檜山達。その声が聞こえてきた方向には、メルド団長たちと話を終えてきたユキが立っていた。

「稽古をつけてやる？ お前たちに他人に稽古をつけるほどの才能なんてないはずだが？」

「ッ！ うるせえ！ てめえこそ何様だよ！ いきなりしやしやり出てきやがって！ 目障りなんだよ！」

少しくらい強いからって、調子に乗んな！ ここに風撃を望む——『風球』——

急に現れたユキにイラつきながら檜山は魔法を放つ。魔法自体は下級魔法であり、ただ風の球を打つだけの魔法だが、それでもプロボクサーが殴る程度の威力はある。

その風球をユキは、帯刀している太刀で斬り払った。

「……は？」

「なんだ、その顔は？ 剣術を修めている者ならこの程度造作もない」

檜山達はそのことに啞然とする。選ばれた者である自分たちの魔法を破られたこと

が信じられないのだろう。

「それより、訓練でもないのに攻撃してきたんだ。それなりの覚悟はあるんだろうな」
殺気を込めながら言うユキに、顔を青くしていく檜山達だったが、

「何をやってるの!？」

その声に「やべっ」という顔をする檜山達。その女の子は檜山達が惚れている香織であり、雫、光輝、龍太郎の三人もいた。

「いや、俺たちはただ南雲の訓練に付き合っただけでやろうとしてただけで…」

「ユキさん! ハジメ君!」

檜山の弁明を無視して、香織はユキとハジメに駆け寄る

「訓練ね。南雲君の訓練はユキさんに一任されてるはずだけど?」

「いや、それは…」

「待ってくれ、雫。きつと檜山達だつて南雲のためを思つてのことなんだろう? 南雲ももう少し真面目になつた方がいい。訓練がない時は図書館にこもつてばかりじゃないか。俺なら少しでも強くなるために空いている時間も鍛錬にあてるよ」

「ちよつと、光輝。それは…」

「それはつまり、俺が間違つてると言いたいのか? メルド団長たちにも許可はとつているんだが?」

光輝の言葉にユキが反論する

ハジメは後衛職だったこともあり、唯一ハジメを高く評価していたユキに訓練を一任されていた。

「い、いえ、そうは言いませんが、南雲のステータスは低いんだからほかの人よりもっと訓練しなきゃいけないじゃないですか」

「ハジメは後衛職だ、前線で戦うこと基本的にはない。もしそうなれば俺がフォローに入ればいいだけだ。」

だからハジメに教えているのは基本以外は護身用の技術だけだ。あとは知識をつける方に時間を割いた方が効率がいい」

「で、でも…」

「光輝、そこまでよ。南雲君はユキさんが訓練するって決まってるんだから。あなただって他人を気にしてる暇はないでしょ」

雫の言葉を一応受け入れた光輝だったが、その表情は納得がいていない顔だった。

その日、檜山達はユキのことを睨みつけながら訓練をしていたが、ユキはさっきのメルド団長たちとの話の内容が気になっていたため気付いいなかった。

それは、訓練終了後の夕食時に、メルド団長から告げられる内容で、明日から実施訓練として「オルクス大迷宮」へ行くと言うものだった。

第五話 月下の語らい

〔オルクス大迷宮〕

全百層からなるといわれている七大迷宮の一つであり、階層が深くなるにつれ強力な魔物が出現する。

その性質上、冒険者や傭兵、新兵の訓練に非常に人気があり、地上の魔物より遥かに良質な魔石体内に抱えているためである。

魔石とは、魔物の力の源であり、強力な魔物ほど良質な魔石を備えている。

この魔石を粉末状にして使用することで魔法陣の効果を上昇させたり、日常生活用の魔道具の原動力としても使われるため需要の非常に高いものでもある。

また、良質な魔石を備えている強力な魔物ほど固有魔法を使用する。固有魔法とは、詠唱や魔法陣を使用できない魔物が使える唯一の魔法であり、魔物が油断できない原因である。

ユキたちはオルクス大迷宮で実施訓練をするために、大迷宮近くにある宿屋場ホルアドに着いた。新兵訓練にも使われるようで、王国直営の宿に泊まる。

二人一部屋で、ユキはハジメと同室だった。

この二週間ユキはハジメの訓練の担当をしたり、一緒に図書館で本を読んでいたりにしているため、ペアとして認識されている。

今回は二十階層まで行き、ハジメがいても騎士団でカバーできる階層らしい。

明日に備えて情報を纏めるため、借りてきた魔物図鑑を読んでいたユキとハジメだったが、少しでも体を休めるために眠りに入ることにした。

——コンコン——

(来客? 誰だこんな時間に。もう深夜だぞ?)

『ユキさん、ハジメくん、起きてますか? 白崎と八重樫です』

『こんな時間にすいません。少しいいですか?』

なにか話なんて在ったかと思えながらハジメを見ると、ハジメは目を開きながら硬直していた。

ユキはとりあえず部屋に入れようかと思つて扉を開け、香織と雫を中に入れた。

「……なんでやねん」

ハジメがなぜか関西弁で突つ込みを入れる。

香織と雫はネグリジエにカーデイガンを羽織つて立つてるため、衝撃的だったのだから。

「どうしたんだ、こんな時間に。なにか連絡でもあったのか?」

「い、いいえ。その、ユキさんたちと話したくて……迷惑でしたか?」

「いや、俺は構わないが……ハジメは大丈夫か?」

「う、うん。大丈夫だよ」

ユキたちの部屋に入った香織と雫は窓際に設置されたテーブルセットに座った。

香織たちの相手をハジメに任せ、ユキはお茶の準備をした。

四人分のお茶を準備したユキは三人に出し、壁際に立って話しかけた。

「で、話ってなんだ? 明日のことか?」

ユキが話を切り出すと、香織と雫は思いつめた様な表情になった。

「明日の迷宮なんですけど……二人には町で待つてほしいんです。教官達やクラスの皆には私達が必ず説得します。だから! お願いします!」

興奮したように身を乗り出して説得してくる香織にハジメは困惑し、ユキは眉を顰める。

「……どうゆうことだ? 確かにハジメのステータスは低いし、お前達にとつては足手まといだろう。だが、だからこそ俺がサポートに入っているんだぞ。俺の実力ならお前たちは見てたからこそ、良く知っているとと思うが?」

「ち、違うんです。足手まといとかそういうんじゃないかと……」

香織の言葉にユキが反論する。ハジメのステータスが低いのは周知の事実だが、ユキ

の戦いを見ていた二人は少なくとも、ユキの強さをクラスで一番理解していた。そのユキがハジメのサポートに入ることと納得していたはずだが、前日になって行かないでほしいという二人の言葉に疑問を抱く。

香織は足手まといとかではないといい、雫が理由を話し始める。

「夢を、見たんです。二人が大きな何かに立ち向かおうとしていて……声を掛けても全然気づいてくれなくて……最後は……」

「……最後は？」

「……二人とも消えちゃうんです……」

雫と香織は泣きそうな顔をして、俯いてしまう

夢で見た。それだけなら夢だったで済む話だが、二人の場合はユキの戦いを夢で見ていたことがあったため、ありえないと言い切れない部分があった。

「……なるほどな。夢で見たならありえないと言えないな。事実、何年も俺の戦いを見ていたんだしな。だからこそ、知ってるはずだ。俺を殺せるのは英雄だけだ。そんな訳の分からんものには負けないし、ハジメだって俺なら守れる」

それでもまだ不安そうな顔をする二人に、ユキは小さく息を吐き口を開いた。

「……なら、お前達が俺達を支えてくれ」

「……支える？」

その言葉に香織と雫はきよんとした。

「ああ、俺を殺せるのは英雄だけだと言っても、あくまで俺一人の場合だ。ハジメを必ず守り切れるわけじゃないし、ハジメが傷ついたら俺にはどうすることもできない。」

それでも、二人がいれば俺も安心して戦える」

ユキの言葉を三人は黙って聞いている。

「そもそも、俺達は一人じゃない。ピンチになったら、素直に助けてくれって言えばいいんだから」

ハツとする三人。

実際、ハジメはいじめられていたこともあって誰かに頼ることをしなかったし、香織と雫も幼馴染がアレなため頼ってこなかった。自分たちがしつかりしなければならぬということ認識もあつたのだろう。

「お前達がピンチの時は俺達が支える。だから俺達がピンチの時は、二人で俺達を支えてくれ」

「そ、そうだね。武器の手入れくらいなら僕だって出来るしね」

二人の言葉に香織と雫は固まっていたが、少しすると、

「はい！」

憧れのユキに頼りにされているのが嬉しいのだろう、トータスに転移してから一番の

笑顔で返事をした。

それからしばらく雑談し、香織と雫は部屋に帰っていき、ユキは二人を見送った。

その時、ユキは別の方向から殺気の込もった視線を感じていた。

(：： たぶん天ノ河か檜山だろうな。殺気が込もつてるところを見ると、たぶん檜山か。手を出してこないなら別にいいが、明日は面倒なことになりそうだな)

向けられる殺気に、明日は面倒になりそうだとため息をついた。

そして、日が明ける。

勇者が仲間にいるためか、迷宮の前に立つ少年少女達の眼に不安はなかった。

その日、最悪の一日になるとは知らず：：

第六話 オルクス大迷宮

オルクス大迷宮の中は薄ぼんやりと発光しており、緑光石という発光する特殊な鉱物の鉱脈を掘って出来ているらしい。

一行が隊列を組みながら迷宮内を進んでいくと、ドーム状の広間に出た。すると、壁の隙間から灰色の毛玉が湧き出てくる。

「よし、光輝達が前に出る。他は下がれ！ 交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！ あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」

メルド団長が言い終え、光輝たちが前に入る。

まず前衛の光輝、龍太郎、雫の三人が武器を構え、後衛である香織、中村恵理、谷口鈴が魔法を発動させるための準備に入る。

光輝が持つのは純白に輝くアーティファクト「聖剣」。光属性の性質が付与されており、聖剣から発せられる光が敵を照らすと、敵を弱体化させると同時に自分の身体能力を強化させるという、いかにも「聖なる」能力を持っている。

龍太郎は天職が「拳士」であるため、籠手と脛当てを付けている。決して壊れない

アーティファクトであり、衝撃波を放つことができる。

雫は「剣士」の天職を持ち、刀とシャムシールの中間のような剣で魔物を切り捨てていく。

生徒たちが光輝たちの戦いぶりに見蕩れていると、詠唱が響き渡る。

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ——」

三人同時に発動した螺旋状に渦巻く炎がラットマン達を吸い上げるように巻き込み燃やし尽くしていく。断末魔の悲鳴を上げながらパラパラと降り注ぐ灰へと変わり果て絶命する。

気がつけば、ラットマンは全滅していた。他の生徒の出番はなしである。どうやら、召喚組の戦力では一階層の敵は弱すぎるらしい。

「うん、まあ、よくやったぞ！ 次はお前等にもやってもらうからな、気を緩めるなよ！」生徒の優秀さに苦笑いしながら気を抜かないよう注意するメルド団長。しかし、初めての迷宮の魔物討伐にテンションが上がるのは止められない。頬が緩む生徒達に、しようがないとばかりにメルド団長は肩を竦めた。

「それとな……今回は訓練だからいいが、魔石の回収も念頭に置いておけよ。明らかにオーバーキルだからな？」

メルド団長の言葉に魔法支援組は、やりすぎを自覚して思わず頬を赤らめるのだっ

た。

ハジメはユキにサポートをされながら戦っていた。弱った魔物を相手にしたり、地面を錬成して落とし穴にはめて串刺しにしたりして魔物を倒した。

騎士団員達としては、錬成を利用して確実に動きを封じてから、止めを刺すという見たことがない戦法で確実に倒していくので驚きを隠せていなかった。錬成師は鍛冶職とイコールに考えられているため、実戦で錬成を利用することなどあり得なかった。

そしてユキ自身も騎士団員から注目されていた。硬い敵や素早い敵でも技能や魔法を使わず両断するその技量は、数年程度の訓練では身に付けられない。使用している太刀も特殊な合金を使用しているだけで、聖剣のような力があるわけではない。結果、それだけの経験があるのだろうと認識されていた。

そのままは特に問題もなく交代しながら戦闘を繰り返し、順調よく階層を下げて行った。

そして、一流の冒険者か否かを分けると言われている二十階層にたどり着いた。

現在の迷宮最高到達階層は六十五階層らしいのだが、それは百年以上前の冒険者があった偉業であり、今では超一流で四十階層越え、二十階層を越えれば十分に一流扱いだ

という。

ハジメ達は戦闘経験こそ少ないものの、全員がチート持ちなので割かしあつさりと降りることができた。

「お前達、ここから先は一種類の魔物だけでなく複数種類の魔物が混在したり連携を組んで襲ってくる。今までが楽勝だったからと言ってくれぐれも油断するなよ！ 今日はこの二十階層で訓練して終了だ！ 気合入れろ！」

一行は二十階層を探索していく。

すると、先頭に行く光輝達やメルド団長が立ち止まった。どうやら魔物のようで、訝しそうなクラスメイトを尻目に戦闘態勢に入る。

「擬態しているぞ！ 周りをよく注意しておけ！」

メルド団長の忠告が飛び、その直後、前方でせり出していた壁が突如変色しながら起き上がった。壁と同化していた体は、今は褐色となり、二本足で立ち上がる。そして胸を叩きドラミングを始めた。どうやらカメレオンのような擬態能力を持ったゴリラの魔物のようだ。

「ロックマウントだ！ 二本の腕に注意しろ！ 豪腕だぞ！」

メルド団長の声が響く。光輝達が相手をするように、飛びかかってきたロックマウン

どうやら気持ち悪さで青褪めているのを死の恐怖を感じたせいだと勘違いしたらしく、怒りをあらわにする光輝。それに呼応してか彼の聖剣が輝き出す。

「万翔羽ばたき、天へと至る」

「ストップだ、天之川」

大上段に振りかぶった聖剣を一気に振り下ろそうする光輝の腕をつかんで阻止し、ユキがロックマウントに接近し両断する。

「いやー、助かったぞユキ」

「こんなところで大技使われて、崩落を起こされても困りますから。」

どうやら自覚はあるらしく「うっ」と声を詰まらせ、バツが悪そうに謝罪する光輝。香織達が寄ってきて苦笑いしながら慰める。

その時、ふと香織が壁の方に視線を向けた。

「……あれ、何かな？ キラキラしてる……」

その言葉に、全員が香織の指差す方へ目を向けた。

そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。香織を含め女子達は夢見るように、その美しい姿にうっとりとした表情になった。

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

グランツ鉱石とは、言わば宝石の原石みたいなもので、特に何か効果があるわけでは

ないが、その涼やかで煌びやかな輝きが貴族のご婦人ご令嬢方に大人気であり、加工して指輪・イヤリング・ペンダントなどにして贈ると喜ばれるらしい。求婚の際に選ばれる宝石としてもトップ三に入るとか。

「素敵……」

香織が、簡単な説明を聞いて頬を染めながら更にうつとりとする。そして、誰にも気づかれない程度にチラリとユキに視線を向けた。

もつとも、ユキ自身と雫は気がついていなかったが……

「だったら俺らで回収しようぜ！」

「……」 勝手なことをするな！ 安全確認もまだなんだぞー！

そう言って唐突に動き出したのは檜山だった。グランツ鉱石に向けてヒヨイヒヨイと崩れた壁を登っていく。それにメルド団長は慌てるが、檜山は聞こえないふりをし、鉱石の場所に辿り着いてしまった。

同時に騎士団員の一人がフェアスコープで鉱石の辺りを確認し、一気に青褪めた。

「団長！ トラップです！」

「ッ!?!」

しかし、メルド団長も、騎士団員の警告も一歩遅かった。

檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。グランツ鉱石の輝

きに魅せられて不用意に触れた者へのトラップだ。

魔法陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していった。

「くっ、撤退だ！ 早くこの部屋から出る！」

メルド団長の言葉に生徒達が急いで部屋の外に向かうが、一步遅く間に合わなかった。

部屋の中に光が満ち、ユキ達の視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。

ユキ達は空気が変わったのを感じた。次いで、ドスンという音と共に地面に叩きつけられる。

尻の痛みに呻くハジメを尻目にユキは周囲を見渡し警戒する。クラスメイトのほとんどはハジメと同じように尻餅をついていたが、メルド団長や騎士団員達、光輝達など一部の前衛職の生徒は既に立ち上がって周囲の警戒をしている。

どうやら、先の魔法陣は転移させるものだったらしく、転移した場所は巨大な石造りの橋の上だった。ざっと百メートルはありそうで、天井も高く二十メートルはある。橋の下に川などなく、全く何も見えない深淵の如き闇が広がり、まさしく奈落の底といった様子だ。

橋の横幅は十メートルくらいありそうだが、手すりどころか縁石すらなく、足を滑ら

せれば掴むものもなく真つ逆さまだ。ユキ達はその巨大な橋の中間にいた。橋の両サイドにはそれぞれ、奥へと続く通路と上階への階段が見える。

それを確認したメルド団長が、険しい表情をしながら指示を飛ばす。

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

雷の如く轟いた号令に、わたわたと動き出す生徒達。

しかし、迷宮のトラップがこの程度で済むわけもなく、撤退は叶わなかった。階段側の橋の入口に現れた魔法陣から大量の魔物が出現したからだ。更に、通路側にも魔法陣は出現し、そちらからは一体の巨大な魔物が……

そして、現れた巨大な魔物を呆然と見つめるメルド団長の呻く様な呟きがやけに明瞭に響いた。

——まさか……ベヒモス……なのか……

第七話 ベヒモス

階段側の魔法陣からは、骨格だけの体に剣を携えた魔物、トラウムソルジャーが溢れるように出現した。空洞の眼窩からは魔法陣と同じ赤黒い光が煌々と輝き目玉の様にギョロギョロと辺りを見回している。その数は、既に百体近くに上っており、尚、増え続けている。

だが、ユキとハジメはもう一方、通路側に出現した魔物の方が危険だと感じていた。

通路側の魔法陣からは体長十メートル級の四足で頭部に兜のような物を取り付けた魔物が出現した。もっとも近い既存の生物に例えるならトリケラトプスだろうか。ただし、瞳は赤黒い光を放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭部の兜から生えた角から炎を放っているという付加要素が付くが…

メルド団長が呟いたベヒモスという魔物は、大きく息を吸うと凄まじい咆哮を上げた。

「グルアアアアアアアアアア!!」

「ッ!?!」

その咆哮で正気に戻ったのか、メルドが矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「アラン！ 生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！ カイル、イヴァン、ベイ
ル！ 全力で障壁を張れ！ ヤツを食い止めるぞ！ 光輝、お前達は早く階段へ向かえ
！」

「待つて下さい、メルドさん！ 俺達もやります！ あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバ
イでしょう！ 俺達も……」

「馬鹿野郎！ あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ！ ヤツは六十五階
層の魔物。かつて、『最強』と言わしめた冒険者をして歯が立たなかつた化け物だ！
さつさへ行け！ 私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ！」

メルド団長の鬼気迫る表情に一瞬怯むも、「見捨ててなど行けない！」と踏み止まる。
どうにか撤退させようと、再度メルド団長が話そうとした瞬間、ベヒモスが咆哮を上
げながら突進してきた。このままでは、撤退中の生徒達を全員轢殺してしまうだろう。

そうはさせないと、ハイリヒ王国最高戦力が全力の多重障壁を張る。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を
通さず——『聖絶』!!』」

二メートル四方の最高級の紙に描かれた魔法陣と四節からなる詠唱、さらに三人同時
発動。一回きり、一分だけの防御であるが、何物にも破らせない絶対の守りが顕現する。
衝突の瞬間、凄まじい衝撃波が発生し、ベヒモスの足元が粉碎される。橋全体が石造

りにもかかわらず大きく揺れた。撤退中の生徒達から悲鳴が上がり、転倒する者が相次ぐ。

トラウムソルジャーは三十八階層に現れる魔物だ。今までの魔物とは一線を画す戦闘能力を持つている。前方に立ちほだかる不気味な骸骨の魔物と、後ろから迫る恐ろしい気配に生徒達は半ばパニック状態だ。

隊列など無視して我先にと階段を目指してがむしやらに進んでいく。騎士団員の一人、アランが必死にパニックを抑えようとするが、目前に迫る恐怖により耳を傾ける者はいない。

その内、一人の女子生徒が後ろから突き飛ばされ転倒してしまった。「うっ」と呻きながら顔を上げると、眼前で一体のトラウムソルジャーが剣を振りかぶっていた。

「あ」

そんな一言と同時に彼女の頭部目掛けて剣が振り下ろされた。

死ぬ——園部優花がそう感じた次の瞬間、トラウムソルジャーを一振りの攻撃が吹き飛ばした。そのそばには武器を振り抜いたユキが立っていた。

そのまま数体のトラウムソルジャーを吹き飛ばし、優花の手を引っ張り立ち上がらせる。

「大丈夫か？」

「は、はい。ありがとうございます」

「ならしつかりしろ。さすがに次は助けられんぞ」

（チツ！ 誰もがパニックになって周りを見てない。このままじゃ死者が出るぞ）

ユキが周りを見渡すと、ハジメも周りを見渡しながら考える

「なんとかしないと…：必要なのは…：強力なりーダー…：道を切り開く火力…：天之河くん！

ユキさん！ 天之河くんを呼んでくる！ それまで何とかこらえて！」

「…：分かった。だが急げ、長くは持たないぞ」

ハジメは踵を返してベヘモスと相對している光輝達の元に向かって走っていく。

ベヒモスは依然、障壁に向かって突進を繰り返していた。

障壁に衝突する度に壮絶な衝撃波が周囲に撒き散らされ、石造りの橋が悲鳴を上げる。障壁も既に全体に亀裂が入っており砕けるのは時間の問題だ。既にメルド団長も障壁の展開に加わっているが焼け石に水だった。

「ええい、くそ！ もうもたんど！ 光輝、早く撤退しろ！ お前達も早く行け！」

「嫌です！ メルドさん達を置いていくわけには行きません！ 絶対、皆で生き残るんです！」

「くっ、こんな時にわがまを…。」

「光輝！ 団長さんの言う通りにして撤退しましょう！」

雫は光輝を諫めようと腕を掴むが、

「へっ、光輝の無茶は今に始まったことじゃねえだろ？ 付き合うぜ、光輝！」

「龍太郎……ありがとな」

「状況に酔ってんじゃないわよ！ この馬鹿ども！」

「雫ちゃん……」

苛立つ雫に心配そうな香織。

その時、一人の男子が光輝の前に飛び込んできた。

「天之河くん！」

「なっ、南雲!？」

「ハジメくん!？」

驚く一同にハジメは必死の形相でまくし立てる。

「早く撤退を！ 皆のところにも！ 君がいないと！ 早く！」

「いきなりなんだ？ それより、なんでこんな所にいるんだ！ ここは君がいていい場

所じゃない！ ここは俺達に任せて南雲は…。」

「そんなこと言っている場合かっ！」

ハジメを言外に戦力外だと告げて撤退するように促そうとした光輝の言葉を遮って、ハジメは今まででない乱暴な口調で怒鳴り返した。

いつも苦笑いしながら物事を流す大人しいイメージとのギャップに思わず硬直する光輝。

「あれが見えないの!?! みんなパニックになつてる! リーダーがいないからだ! ユキさんがどうにかしているけど、長くは持たないんだ!」

光輝の胸ぐらを掴みながら指を差すハジメ。

その方向にはトラウムソルジャーに囲まれ右往左往しているクラスメイト達がいた。

ユキが何とか対処をしているが、クラスメイト達が好き勝手に動いたため流石に手が足りていない。

「一撃で切り抜ける力が必要なんだ! 皆の恐怖を吹き飛ばす力が! それが出来るのはリーダーの天之河くんだけなんだ! 前ばかり見てないで後ろもちゃんと見て!」

呆然と、混乱に陥り怒号と悲鳴を上げるクラスメイトを見る光輝は、ぶんぶんと頭を振るとハジメに頷いた。

「ああ、わかった。直ぐに行く! メルド団長! すいませ——」

「下がれえ——!」

「すいませ、先に撤退します」——そう言おうとしてメルド団長を振り返った瞬

間、その団長の悲鳴と同時に、遂に障壁が砕け散る。

暴風のように荒れ狂う衝撃波がハジメ達を襲う。咄嗟に、ハジメが前に出て錬成により石壁を作り出すがあつさり砕かれ吹き飛ばされる。

舞い上がる埃がベヒモスの咆哮で吹き払われた。

そこには、倒れ伏し呻き声を上げる団長と騎士が三人。衝撃波の影響で身動きが取れないようだ。光輝達も倒れていたがすぐに起き上がる。メルド団長達の背後にいたことと、ハジメの石壁が功を奏したようだ。

それ光景を見ていたユキは流石に限界だと感じ、そばにいる優花にここを任せるように言う

「時間がないか：： 園部、少しここを任せる」

「え、任せるって、ロスリックさんは」

「あれの相手をする」

ユキはその身に宿す力を解放し、ベヒモスへ突撃していく。

ベヒモスによって障壁が破られ、ベヒモスが咆哮を上げる。

「ぐっ……龍太郎、雫、時間を稼げるか？」

光輝が問い、それに苦しそうではあるが確かな足取りで前へ出る二人。団長たちが倒れている以上自分達がなんとかする他ない。

「やるしかねえだろ！」

「…なんとかしてみろわ！」

二人がベヒモスに突貫しようとしたその時、ベヒモスの頭部に何かがぶつかる。

それは風を身に纏ったユキの姿があった。

「口、ロスリックさん！　なんでここに」

「ユキさん、その風ってまさか……」

「お前たちは戻って退路を作れ。ベヒモスは俺が受け持つ」

「で、でも！　俺たちも」

「光輝！　ここはユキさんに任せて戻りましょう！」

光輝は階段の方へ目を向け、悔しそうな顔をしながら生徒たちの方へ走り出す。

それに続くように光輝の後を追って階段へ向かっていく。

それを尻目にユキは再度ベヒモスに突撃していく。

（さて、どうしようか。無理すると橋が崩れるな）

ボロボロの橋の上で全力を出せば崩れる可能性があるため、倒そうとしているわけではない。

ただ時間を稼ごうとしているだけだった。
そこにハジメが走ってきた。

「ユキさん！」

「ッ！ ハジメ!? なんでも来た！」

「待つてください、考えがあります！」

その考えは『錬成』によってベヒモスの足元を固めベヒモスの動きを止めその後、後方のクラスメイト達によって魔法を撃ち奈落の底に落とす作戦だった。

ユキ役目はハジメが錬成をするための隙を作るためにベヒモスの気を逸らすことで、他に考えがなかったユキはそれに賛同する。

「わかった……無理はするなよ。行くぞ！」

「はい！」

ユキはもう一度ベヒモスに突撃していった。

「後衛組は遠距離魔法準備！ もうすぐ坊主の魔力が尽きる。アイツが離脱したら一斉攻撃で、あの化け物を足止めしろ！」

ビリビリと腹の底まで響くような声に気を引き締め直す生徒達。中には階段の方向

を未練に満ちた表情で見ている者もいる。

無理もない。ついさつき死にかけたのだ。一秒でも早く安全を確保したいと思うのは当然だろう。しかし、団長の「早くしろ!」という怒声に未練を断ち切るように戦場へと戻った。

その中には檜山大介もいた。自分の仕出かした事とはいえ、本気で恐怖を感じていた檜山は、直ぐにでもこの場から逃げ出したかった。

しかし、ふと脳裏に迷宮に入る前日、ホルアドの町で宿泊していたときの情景を思い浮かべる。

緊張のせいか中々寝付けずにいた檜山は、トイレついでに外の風を浴びに行った。涼やかな風に気持ち落ち着いたのを感じ部屋に戻ろうとしたのだが、その途中、ネグリジェ姿の香織と雫を見かけたのだ。

初めて見る香織の姿に思わず物陰に隠れて息を詰めていると、二人は檜山に気がつかずに通り過ぎて行つた。

気になって後を追うと、二人はとある部屋の前で立ち止まりノックをした。その扉から出てきたのは……ユキだった。

檜山は頭が真っ白になった。檜山は香織に好意を持っている。しかし、自分とでは釣り合わないと思っており、光輝のような相手なら、所詮住む世界が違うと諦められた。

だが、ユキは異世界に召喚された時に現れた、全くの無関係者だった。いきなり現れたくせに香織のそばにいるなんておかしい。それなら自分でもいいじゃないか、と檜山は本気で持っていた。

ただでさえ溜まっていた不満は、すでに憎悪にまで膨れ上がっていた。香織が見蕩れていたグランツ鉱石を手に入れようとしたのも、その気持ちが焦りとなってあらわれたからだろう。

その時のことを思い出した檜山は、ベヒモスを抑えるユキとハジメを見て、今も祈るようにユキを案じる香織を視界に捉え……ほの暗い笑みを浮かべた。

その頃、ハジメはもう直ぐ自分の魔力が尽きるのを感じていた。既に回復薬はない。チラリと後ろを見るとどうやら全員撤退できたようである。隊列を組んで詠唱の準備に入っているのがわかる。

ユキが与えたダメージとハジメの足止めによって、ベヒモスとそれなりの距離があることを確認した二人は階段の方へ走り出す。

憤怒の色が宿っている眼を二人に向けたベヒモスは怒りの咆哮を上げ、二人を追いかけようと四肢に力を溜めた。

だが、次の瞬間、あらゆる属性の攻撃魔法が殺到した。

夜空を流れる流星の如く、色とりどりの魔法がベヒモスを打ち据える。ダメージはやはり無いようだが、しつかりと足止めになっている。

ここで、予想外のことが起きた。

放たれた致死性の魔法。そのうちの 하나가、急に進路を変えて二人の方に落ちたのだ。

明らかに二人を狙い誘導されたものだ。

(ツー・まさか、ここでフレンドリーファイア！ 正気か！)

ユキはハジメを抱えて火球を避ける。しかし、それが悪手だった。

ベヒモスに放たれた無数の魔法と二人に放たれた火球によって、ボロボロだった橋が……ついに崩壊を始める。

「グウアアアア!」

悲鳴を上げながら崩壊し傾く石畳を爪で必死に引っ掻くベヒモス。しかし、引っ掛けた場所すら崩壊し、抵抗も虚しく奈落へと消えていった。ベヒモスの断末魔が木霊する。

ユキも脱出をしようとするが、ハジメを抱えていることにより能力を使えず、瓦礫を足場にジャンプしながら登ろうとしている。

しかし、ここでもう一度、火球が二人に向かって放たれた。火球はユキが飛び移ろう

としていた瓦礫を破壊し、ユキは体勢を崩す。

足場を崩され奈落へ落下していくユキとハジメ。

落下する中で、ユキが生徒たちの方へ目を向けると、香織と雫が飛び出そうとして光輝や龍太郎に羽交い締めになれているのが見えた。他のクラスメイトは青褪めたり、目や口元を手で覆ったりしている。メルド達騎士団の面々も悔しそうな表情で二人を見ていた。そして、一人の男が卑しい笑みを浮かべていた。

そのことに気付くも、当然ユキとハジメは奈落に落ちていく。

徐々に小さくなる光に手を伸ばしながら……

第八話 絶望と希望

響き渡り消えゆくベヒモスの断末魔。ガラガラと騒音を立てながら崩れ落ちてゆく石橋。

そして：

瓦礫と共に奈落へと吸い込まれるように消えてゆくユキとハジメ。

その光景を、まるでスローモーションのように緩やかになった時間の中で、ただ見ていることしかできず、どこか遠くで聞こえていた悲鳴が、実は自分のものだと思いがついた香織は、急速に戻ってきた正常な感覚に顔を顰めた。

「離して！ 二人の所に行かないと！ 約束したのに！ 私があ、私たちが守るって、支えるって！ 離してえ！」

飛び出そうとする香織を雫と光輝が必死に羽交い締めにする。香織は、細い体のどこにそんな力があるのかと疑問に思うほど尋常ではない力で引き剥がそうとする。

「香織！ 君まで死ぬ気か！ 南雲とロスリックさんはもう無理だ！ 落ち着くんぞ！ このままじゃ、体が壊れてしまう！」

それは、光輝なりに精一杯、香織を気遣った言葉だったが、今この場で香織には掛け

るべき言葉だった。

「無理つて何!? 二人は死んでない! 行かないと、きつと助けを求めてる!」

誰がどう考えてもユキとハジメは助からない。奈落の底と思しき崖に落ちていつたのだから。

しかし、その現実を受け止められる心の余裕は、今の香織にはない。言つてしまえば反発して、更に無理を重ねるだけだ。龍太郎や周りの生徒もどうすればいいか分からず、オロオロとするばかり。

「香織つ、香織!」

香織は光輝を振り払うが、雫は絶対に離さないように強く抱きしめて声を掛ける。

「雫ちゃんつ! 二人が! 早く助けに行かないと!」

「わかつてるわよ、そんなこと! だからお願い待つて…。香織まで行つちやったら、私が一人になつちやうじゃない…。」

「雫ちゃん…。」

誰よりも助けに行きたいのは雫なのだろう。なぜなら雫は一度、悠姫を失っているのだから。だが、今助けに行くことはできないと理解していた。

香織は雫の言葉を聞いて、冷静さを取り戻していく。

「あの二人ならきつと大丈夫よ。死んじやったりしないわ」

「でもー」

「ユキさんの強さなら私たちはよく知っているわ。それに、ユキさんが言ってたじゃない。『俺を殺せるのは英雄だけだ』って。だからユキさんも南雲くんも、絶対大丈夫よ」それはホルアドの宿での夜、ユキが言っていた言葉。何年もユキの戦いを夢で見ているからこそその信頼の言葉だった。

「雫ちゃん…うん、そうだね…そうだよ。ありがとう、雫ちゃん。もう大丈夫だよ」香織が落ち着いた様子を確認すると、メルド団長は声を張り上げる

「…お前たち！ ぼさつとするな！ 早く撤退するぞ！ これ以上犠牲を出すわけにはいかん！」

「ちよ、ちよつと待ってください！」

そこで優花がメルド団長の一喝に待ったをかける

「…檜山は、どうするんですか？ 檜山が、二人を魔法で落としたいんですよ？」

その言葉に全員が息をのみ、静寂が訪れる。檜山は顔を蒼くしながらうろたえる

「は、は？ な、なに言ってるんだよ！ そんなことするわけねえだろ！」

「いい加減にしなさいよ！ 誰も魔法を使つてないときだったのよ！ ごまかせるわけないじゃない！ この場の全員があなたを見てたのよ！」

檜山はさらにうろたえ、周りを見るがクラスメイトは目を逸らす。それは無言で肯定

しているようだった。

「香織に雫も、なんで何も言わないのよ！ とつくに気付いてるじゃない！」

「優花、大丈夫よ」

「二人は大丈夫だって信じてるもん、私たち。…でも——」

香織はそこで言葉を止め、香織と雫は檜山に顔を向ける。その顔は人を見る目ではなく、哀れな何かを見るよな表情だった。

「——絶対に許さない」

二人に檜山は蒼褪めた顔を真っ白になった。

「メルド団長、脱出しましょう」

「あ、ああ。そうだな。さあ、立ってお前たち！撤退するぞ！」

雫の言葉にメルド団長は我に返り、全員を連れて迷宮を脱出するために歩き出す

その足取りはとても重い。それもそうだろう、仲間が二人奈落に落ちて知ったのだから当然だ。

そして、二人を失い、生徒たちの心に大きな傷を残して迷宮から脱出を果たし、ホルアドへと戻ることができたのだ。

「我らの英雄に並ぶ怪物よ。^{英雄}あなた達が救われる世界を作りだそう。

すべては心一つなり」

「宝を寄こせ！　すべてを寄こせ！

俺は此処にいるぞ！　怪物よ！^{テュボエウス}　クハハヒヒアッ！」

光を尊ぶ亡者達が、トータスで産声を上げていた。

早朝、一行は高速馬車に乗って王国へ帰還した。

二人の死を伝えられた王国と教会の反応は安堵だった。　「無能」と呼ばれていたハジメと、勇者を越える実力を持つ「未知」のユキ。　光輝が「無敵の勇者」であるには、特にユキの存在は邪魔だったのだ。

もちろんメルド団長を含め抗議する者もいた。あの二人がいたからこそ我々は生き残れたのだ、と。結局、二人を罵った者は処分を受けたものの、考え自体が変わることはなかった。

そして当然、二人を奈落へ落とした檜山が罪に咎められることはなかった。光輝に縫り付いて謝り、その光輝もきつと錯乱していただけだろうと言つて責めなかったからだ。

何より、雫と香織が抗議しなかったことも大きい。最も、何を言っても無意味だとは理解しており、どうでもよいと思っただけだ。

謁見後、雫と香織は部屋に戻るとそこにはユキの専属メイドであり部下、アヤメ・キリガクレが立っていた。

「……やはり、ご主人様は戻られなかったのですね」

やはりということは、アヤメは知っていたのだ。ユキがオルクス大迷宮から戻ってこないことを。

「……知って、いたんですね」

「死んでいないことも知っていますよ。……これからどうするんですか？」

戦うのか、戦わないのか、ユキとハジメを追いかけるか、待ち続けるか、という意味だろう。

もちろん追いかけたい。だが、今の二人では力不足。少なくとも、ベヒモスを倒すことができないと足手まといになる。

「アヤメさん。私たちに戦い方を教えてください」

アヤメは新西暦でユキの部下、元軍人である。ちなみに誰にも言っていないが、トータスで冒険者として活動していたこともある。ランクは金。つまりトータス最高レベルである。師事する相手としては間違いなく相応しいだろう。

「……厳しいですよ?」

「覚悟しています」

「このままでいるのは嫌なんです。だから」

「お願いします」

「……分かりました。明日から始めますよ」

「はい!!」

メルド団長への説明、パーティ再編成、二人の訓練と、明日から忙しくなりそうだとため息をつくものの、アヤメの表情は何処か嬉しそうにしていた。

第九話 奈落の底

「い、いやだ！ 死にたくない！ 死にたくない——」

——死んだ

「そ、そんな！ なんで、いや——」

——死んだ

「ああ、また駄目だった——」

——死んだ

何度も死に続ける少年ゆめを観た。暴漢に殴られる少年ゆめを観た。人攫マンハントいに捕まって奴隷になる少年ゆめを観た。

死んで、殺され、死んで殺され死んで殺され死んで殺され……

まだ地獄は終わらない。

英雄ヒカリに出会う前、怪物が人間だった頃の出来事。

「たす、けて——」

「——しずくちゃん——」

ザアーと水の流れる音がする。

頬に当たる硬い感触と下半身の刺すような冷たい感触にユキは目を覚ました。

「ぐッー！」

目を覚ました時にまず、全身の痛みを感じた。骨が数ヶ所折れているらしいが、動くなら問題ないと思い、状況を確認した。

「確か、檜山に落とされたんだったか……ッ！ ハジメは！」

周りを見渡すが、ハジメの姿はない。滝から飛ばされた時に、手からハジメの感触がなくなったことは認識していたが、近くに流れ着いてはいないようだった。

「チッー……ここがさつきよりも下の階層なら、魔物の強さもさらに上がってる……ハジメ一人ならすぐにやられる。急いで探さない」と

軋む身体にムチを打ちながら立ち上がり、探索を開始する。

そして、探索を開始してから約10日が経過した。

探索の中で分かったことがいくつかあった

まず、ここは未到達の迷宮であること。整備された道はなく、洞窟という表現が正し

いのかもしれない。

そして、予想していたことではあったが、魔物の強さが更に上がっていること。

放電する二尾の狼、岩も砕く蹴りを放つ兎、それらの魔物が本能的に逃げだすほどの熊。

大きいだけで単調な攻撃しかなかったベヒモスよりも余程強く見える。

ハジメを抱えたときに、とっさに発動体の武器を納めていたので素手ではなかったが、最低限の安全を確保できるまでは戦うべきではないと判断し、岩陰に隠れながら探索していた。

そして、ようやくハジメの物と思われる痕跡を発見した。

そこには、砕かれた壁と金属の筒状の物だった。

(これは…銃弾か?)

現在のトータスの技術力では銃の製造はできていない。

つまり、奈落の底である此処に落ちているのはハジメの生存を示唆するものだった。

ドパンツ!

ガアアア!!

迷宮内に銃声と、魔物の悲鳴が響き渡った。

「ツ! ハジメ!」

ユキは銃声と悲鳴のした方へ駆け出した。

「俺の糧になれ」

その言葉と共に白髪の男が引き金を引く。銃弾は爪熊の頭部を打ち砕き、白髪の男と爪熊の勝敗に決着をつけた。

「ハジメー！」

ユキは白髪の男に言葉を投げかける。自分の知っている南雲ハジメとは姿が変わっていたが、ユキは不思議とハジメであると確信していた。

「ツ！ ユキ……さん……」

ハジメは突然の再会に動きを止めるが、再び警戒を始める。

「いや、ちげえ……今更そんな騙しに引つかかるかよ！」

「ツ！」

ハジメは銃口をユキへと向け、躊躇なくトリガーを引く。ユキは銃口を向けられた瞬間に、視線から体を逸らす。

「チツ！ 避けやがったか！ あの爪熊より強えな、ぜつてえ食らつてやる！」

攻撃を避けられたことに舌を打ち、再度攻撃を再開する。

銃口を向けられた瞬間に、ユキは射線から反れて銃弾を避け続ける。何度も避けられることにイラつきながらハジメは叫ぶ。

「ふざけんな！ ユキさんを真似すんじゃねえ！」

「……」

「ユキさんだけが俺の味方だったんだ！ ユキさんだけが俺を助けようとしてくれたんだ！ 俺の支えを真似てんじゃねえ！」

「……ああ、そうか」

無能と呼ばれた自分に可能性を与え、誰よりも真摯に接してくれた人こそユキだった。

そんな自分のヒーローであるユキの真似をする魔物が許せなかった。

ハジメの叫びに、ユキは新西暦に飛ばされたころの自分と重ねていた。

知らない世界、知らない土地、友 ヴァルゼライド 人に出会うまで孤独だったこと。

だからこそ、ハジメの思いを理解できた。

「弾切れか！ チッ！」

ハジメは銃——ドナーの弾が切れると、纏雷を使いながら格闘戦に移行する。

ハジメの拳を受け流す。纏雷が身を焦がすが、ハジメに声をかける。

「……どんな理由があっても、俺がお前の手を離してしまったのは事実だ」

ハジメの蹴りを受け流す。再び纏雷が身を焦がすが、ハジメに声をかける。

「その髪、左腕、とても苦しい思いをしてきたんだろう。」

守ると言っておきながら守れなかった。誹謗中傷、罵詈雑言すべて等しく受け止めよう

ユキが言葉を掛けるたびに、ハジメは無意識に攻撃を止め——

「…遅くなつてすまない。助けに来た、ハジメ」

「…ユキさん…俺は…」

——敵意を完全になくした。

トータスに召喚されて一ヶ月程度の付き合いしかないのに、この人は本物のユキ・ロスリックであり自分を助けに来てくれたのだと。

こうして、奈落の底で二人は奇跡の再会を果たした。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ユキ・ロスリック ??歳 男 レベル：23

天職：神子

技能：錬成「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探查」「＋鉱物分離」「＋鉱物融合」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」・風爪・言語理解

|||||

「……すごいな、このステータス……」

ユキはハジメのステータスプレートを見ながらそうつぶやく。

ユキとハジメの二人は、ハジメが拠点にしている横穴で情報交換を行っていた。

…… 爪熊の肉を頬張りながら。

魔物の肉は、魔石から流れる魔力によつて猛毒になっているため、人間が食べると死亡するのが常識だった。

実際、ハジメも食べたときは激痛が走り死亡するはずだったが、神水を飲むことで死亡を回避した。

神水とは、神結晶と呼ばれる魔力が千年かけて結晶化した石のことで、そこから流れる液体を飲んだ者はどんな怪我も病も治ると言われている。

結果、ハジメは魔物の肉による肉体の破壊と神水による再生を繰り返し、強靱な肉体と能力を手に入れた。

ハジメと同じように、ユキも魔物の肉を食べるが激痛が走ることはなかった。が、ス

テータスに変化が出ることもなかった。

ユキ曰く、エスプレント星辰奏者として強化されていることに加え、再強化手術も施しているためだと言ったが、正直なところ理由は分かっていない。

ただ、他の人間と違うのはエスプレント星辰奏者であるかどうかであるため、それが理由ではないかとは思っていた。

「これからどうするかなんだが、上階に続く道が見当たらなかった。だが、」
「階下への道は見つけた、と… それなら下に降りてった方がいいな…。」

そう、ハジメを探すために約10日間迷宮内を回った結果、ユキは探索をほとんど終わらせていた。しかし、階下への道しか見つけられなかった。

「そうになると、魔物もさらに強くなっていくと思うが」

「上等だ、なんだろうと殺して、絶対に脱出してやるさ！」

「… そうだな。俺たちなら絶対できるさ」

ユキとハジメが再会してしばらくたち、二人は五十層にいた。

二人のステータスは現在こうなっていた。

|||||

ユキ・ロスリック ??歳 男 レベル：71

天職：神子

筋力：1600

体力：1600

耐性：1600

敏捷：1600

魔力：15000

魔耐：12000

技能：星辰光・■■■■・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・魔力
 変換「+身体強化」「+部分強化」「+治癒力変換」「+衝撃変換」・気配感知「+特定感
 知」・魔力感知「+特定感知」・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：49

天職：錬成師

筋力：880

体力：970

耐性：860

敏捷：1040

魔力：760

魔耐：760

技能：錬成「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探査」「＋鉱物分離」「＋鉱物融合」「＋複製錬成」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」・風爪・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ここまで遭遇してきたいろいろな魔物と戦い、食べてきた影響で二人のステータスは上昇し続けていた。

ハジメは技能も増え、ユキも技能に派生技能が付いている。

そんな二人は五十層の探索をほとんど終え、まだ探索していない異様な扉の前に立っている。

高さ三メートルの装飾が施された両開きの扉。扉の脇には二対の一つ目巨人の彫刻がある。

「扉を開けたり触ったりしたら多分動くよな……」

「ああ、こういうのは定番だからな。先にぶっ壊すか」

あきらかに動き出しそうな二つの彫刻を破壊すると、案の定中から魔石が現れた。

どうやらこの魔石が扉の鍵になっているらしく、魔石を扉にはめ込むと扉に刻まれた魔法陣に魔力が注がれ扉の鍵が開いた。

… 心做しか一つ目巨人が涙目になっているように見えるのは… 気のせいだろう

ユキが周囲を警戒し、ハジメがそつと扉を開けた。

扉の奥は光一つなく真つ暗闇で、大きな空間が広がっているようだ。

ユキは手前の部屋の明りで少ししか見えませんが、ハジメは「夜目」で中を確認する。

部屋の中は幾本もの太い柱が規則正しく並んでおり、まるで協会のような造りをして
いた。

そして、部屋の中央には立方体の石が置かれており、立方体の前面の中央辺りから何
かが生えているのに気がついた。

ユキもようやく目が慣れてきたところでその「何か」に気が付き、部屋に差し込んだ
光がその姿をさらす。

「人……… なのか？」

「生えていた何か」は人だった。

第十話 奈落の底の封印部屋

「……………だれ？」

掠れた、弱々しい女の子の声だ。上半身から下と両手を立方体に埋めたまま顔だけが
出ており、長い金髪が垂れ下がっていた。そして、その髪の間隙から紅眼の瞳が覗のぞ
いている。年の頃は十二、三歳くらいだろう。随分やつれてはいるが、絶世の美少女と
言えるほどには整った容姿している。

「すいません。間違えました」

考える間もなくハジメが扉を閉めようとする。それを金髪紅眼の女の子が慌てたよ
うに引き止める。もつとも、その声はもう何年も出していなかったように掠すれて眩ぶ
やきのようなだったが……

ただ、必死さは伝わった。

「ま、待って！ ……お願い！ ……助けて……」

「嫌です」

そう言つて、ハジメはやはり扉を閉めようとする。

「ど、どうして……なんでもする……だから……」

「こんな奈落の底の更に底で、明らかに封印されているような奴を解放するわけないだろう？ 絶対ヤバイって。見たところ封印以外何も無いみたいだし… 脱出には役立つそうもない。という訳で…」

「いや、そうでもなさそうだぞ」

ハジメが躊躇いなく切り捨てようとするところをユキが否定した。

「あの眼は本気だ。それに嘘をつける状況じゃないことくらい理解できるはずだ。少しでも情報はあつた方がいい」

「… それもそうだな… 分かった」

ハジメはユキの言葉に考え直し、少女に向き合った

「おい、いいか。事情を話せ。嘘は許さねえ。はぐらかすのも許さねえ。俺たちに真実をすべて話せ」

ハジメは少女にドンナーを突き付ける。

少女は自分が封印された理由を語り始める。

「私、先祖返りの吸血鬼… すごい力持つてる… だから国の皆のために頑張った。でも… ある日… 家臣の皆… お前はもう必要ないって… おじ様… これからは自分が王だって… 私… それでもよかった… でも、私、すごい力あるから危険だって… 殺せないから… 封印するって… それで、ここに…」

「お前、どつかの国の王族だったのか？」

「……（コクコク）」

「殺せないってなんだ？」

「……勝手に治る。怪我しても直ぐ治る。首落とされてもその内に治る」

「……そいつは凄まじいな……。すごい力ってそれか？」

「これもだけ……。魔力、直接操れる……。陣もいらぬ」

ハジメは「なるほどなく」と一人納得し、ユキも話を聞いて思案した。

魔力を直接操れる、つまり魔力操作の技能も「すごい力」なのだろう。

（やはりステータスを公開しなかったのは正しかったか）

もしもステータスを公開していれば、ユキは協会から異端者に認定されていただろう。

「…… たすけて……」

ハジメが一人で思索に耽ふけり一人で納得しているのをジッと眺めながら、ポツリと女の子が懇願する。

「……」

ハジメはジッと女の子を見た。女の子もジッとハジメを見つめる。どれくらい見つめ合っていたのか……

やがてハジメはガリガリと頭を掻き溜息を吐きながら、ユキの方へ顔を向ける。

「その子を封印していることを考えると、おそらく魔力を吸い取る石だ。行けるのか？」

ユキはハジメに問いかけるが、ハジメは無言で少女のほうに向きなおし、立方体に手を置いた。

「あつ」

女の子がその意味に気がついたのか大きく目を見開く。ハジメはそれを無視して錬成を始めた。

ハジメの魔物を喰ってから変質した赤黒い、いや濃い紅色の魔力が放電するように迸る。

しかし、イメージ通り変形するはずの立方体は、まるでハジメの魔力に抵抗するように錬成を弾いた。迷宮の上下の岩盤のようだ。だが、全く通じないわけではない。少しずつ少しずつ侵食するようにハジメの魔力が立方体に迫っていく。

「ぐつ、抵抗が強い！……だが、今の俺なら！」

ハジメは更に魔力をつぎ込む。詠唱していたのなら六節は唱える必要がある魔力量だ。そこまでやってようやく魔力が立方体に浸透し始める。既に、周りはハジメの魔力により濃い紅色に煌々と輝き、部屋全体が染められているようだった。

ハジメは更に魔力を上乗せする。七節分……八節分……。女の子を封じる周りの石が

徐々に震え出す。

「まだまだあー！」

ハジメはそう吼えながら魔力を九節分つき込む。属性魔法なら既に上位呪文級、いや、それではお釣りが来るかもしれない魔力量だ。どんどん輝きを増す紅い光に、女の子は目を見開き、この光景を一瞬も見逃さないとでも言うようにジツと見つめ続けた。

ハジメは初めて使う大規模な魔力に脂汗を流し始めた。少しでも制御を誤れば暴走してしまいそうだ。だが、これだけやつても未だ立方体は変形しない。ハジメはもうヤケクソ気味に魔力を全放出している…

そして、女の子の周りの立方体がドロツと融解したように流れ落ちていき、少しずつ彼女の枷を解いていく。

それなりに膨らんだ胸部が露わになり、次いで腰、両腕、太ももと彼女を包んでいた立方体の流れ出す。一糸纏わぬ彼女の裸体はやせ衰えていたが、それでもどこか神秘性を感じさせるほど美しかった。そのまま、体の全てが解き放たれ、女の子は地面にペタリと女の子座りで座り込んだ。どうやら立ち上がる力がないらしい。

ハジメも座り込み、肩で息をしている。神水で回復しようと、震える手で容器を取り出す。少女の震える手がその手を掴む。

ハジメが横目に様子を見ると少女が真っ直ぐにハジメを見つめている。顔は無表情

だが、その奥にある紅眼には彼女の気持ち溢れんばかりに宿っていた。

「……ありがとう」

その言葉を贈られた時の心情をどう表現すればいいのか、ハジメには分からなかった。ただ、荒れ果てた心に微かな、しかし、消えることのない光が宿った気がした。

「……名前、なに？」

「ハジメだ。南雲ハジメ。お前は？」

少女は「ハジメ、ハジメ」と、さも大事なものを内に刻み込むように繰り返し呟いた。そして、問われた名前を答えようとして、思い直したようにハジメにお願いをした。

「……名前、付けて」

「は？ 付けるってなんだ。まさか忘れたとか？」

少女はふるふるとして首を振る。

「もう、前の名前は知らない……ハジメの付けた名前がいい」

「……はあ、そうは言ってもなあ」

恐らく、何かを切っ掛けに新しい人生を歩む区切りとして、新しく名前を変えるのと同じようなものだろう。天津悠姫という名前を捨て、ユキ・ロスリックとして歩み始めたように。

「ユエなんてどうだ？ ネーミングセンスないから気に入らないなら別のを考える

が……」

「ユエ？ …… ユエ……… ユエ………」

「ああ、ユエって言うのはな、俺の故郷で月を表すんだよ。最初、この部屋に入ったとき、お前のその金色の髪とか紅い眼が夜に浮かぶ月みたいに見えたんだな…… どうだ？」

思いのほかきちんとした理由があることに驚いたのか、女の子がパチパチと瞬きする。そして、相変わらず無表情ではあるが、どことなく嬉しそうに瞳を輝かせた。

「……… んっ。今日からユエ。ありがとう」

「おう、取り敢えずだ………」

「？」

礼を言う少女改めユエは握っていた手を解き、着ていた外套を脱ぎ出すハジメに不思議そうな顔をする。

「これ着とけ。いつまでも素っ裸じゃあなあ」

「………」

そう、ユエは裸で封印されていたため、解かれたばかりの今も裸なのである。外套を渡すとユエも今の状態を改めて意識したことで顔を真っ赤にして外套で体を隠す。

「ハジメのエッチ」

「………」

二人のやり取りを見ながらユキは近づいていく。

「お疲れ、ハジメ。君もな」

ユエはユキを見た後に、ハジメに問いかける

「ハジメ、この人は？」

「ユキ、ユキ・ロスリックだ。一人だった俺を助けてくれた、俺の仲間だ。」

照れそうにユキの紹介をするハジメに苦笑しながら、ユキはユエに話しかける

「ユエ、だったな。ユキ・ロスリックだ、よろしく」

「ん。よろしく、ユキ…」

お互いに自己紹介を済ませると、ユキが発動させている「気配察知」で魔物の気配を察知した。同時にハジメも気配察知で気付いたようで、ユエを抱きしめて二人は後方に移動した。直後、さっきまでいた場所にズドンツと地響きを立てながら魔物が姿を現した。

体長五メートル程、四本の長い腕に巨大なハサミを持ち、八本の足をわしやわしやと動かしている。そして二本の尻尾の先端には鋭い針がついていた。サソリ、と表現するのが一番近いだろう。

ハジメが戦闘態勢に入ろうとするとところで、ユキが前に出る。

「ここは俺がやる。ハジメとユエは休んでろ」

「一人でやるつもりか？」

「ハジメはユエの封印を解くので魔力が空だろ、次は俺の番だ。」

それに、俺の星辰光アステリズムをちゃんと見たことはないだろう」

ユキはそう言いながら刀状の発動体を抜き、切っ先を魔物に向けた。

「キシイアアアアアアア!!」

「さあ、怪物の怒りを見るがいい

“創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星”

そして、ユキは詠唱ランゲージを紡ぎだした。

第十一話 星辰光

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

紡がれる詠唱。ランゲージ

星辰体感応奏者でありながら星辰体感応奏者をはるかに凌駕する星が現れる。

「大神たいしんが振るう勝利の光。それは巨神から篡奪せし覇者の王冠。

雷は天地に轟き、人々はその背に新世界の影を見た。

それは、古き神々を廃する叛逆の世界」

怪物が台風の名を冠することを証明するかの如く、そこに暴風が、台風が作られる。

大気が荒れる、空間が軋む。吹き荒れる旋風は、あらゆるものを削り取る。

「故に、母なる大地は怪物を産み落とす。

宇宙そらを飲み込む終末の天災、怨嗟の咆哮。此処に試練は訪れた」

「我は山を穿ち、海を裂き、天を喰らう。遂に神々は逃げおおせ、残るは大神たいしん一人のみ。

轟く雷霆、金剛の大鎌、いずれの武器を用いても我を討つには程遠い」

「それでも潰えぬその闘志、なんと雄雄しいことだろう。

ならばその光輝で怪物ヤミを断ち、輝く未来あすへ進むがいい」

古き神話において、天頂神と戦った怪物は無常の果実を口にすることで敗北したとき
れる。

それはつまり、果実さえなければ、天頂神すらも勝つことができないということに他
ならない。

「聖戦は此処に在り。さあ神々よ、我が骸を越えるのだ。

約束された繁栄を、光の下で齎そう」

天頂神すらも地に墮とし闇に封じる、最強の怪物。

その名は――

「^{Meta}超^{inova}新星」

――^A殲^p嵐^oの^c齋^aす^y終^p焉^sに、^T光^yは^p無^hく^o」

――怪物^{テュボエウス}。ユキ・ロスリックの星辰光^{アステリズム}が、世界の終焉を呼ぶ怪物が、トータスに顕現
した。

――消えた

ユキを見ていた者はそう感じただろう。

実際、ハジメとユエはそう感じていた。

サソリモドキも標的を見失ったようで、顔を上下左右に振ってユキの姿を探してい

る。

瞬間、サソリモドキの背に衝撃が走り地面に叩きつけられる。

「キシヤアアアア!!!」

「チツ、硬いな」

背に立っていたユキを振り払うように身をよじる。

ユキはサソリモドキの背から飛び退き、ハジメたちの前に降り立つ。

そこには、ベヒモス戦の時のように風を纏ったユキの姿があった。風、というより暴風ではあったが、感じる威圧は桁外れに膨れ上がっていた。雷も発生しているらしく、バチツと雷も纏っている。

ハジメたちがユキを見失った理由は単純だ。発動値^{ドライブ}への跳ね上がりが大きく、眼で追えなかっただけである。

「キイイイイイ!!」

サソリモドキが絶叫を上げる。ユキはその場を飛び退くと、周囲の地面が波打ち、轟音を響かせながら円錐状の刺が無数に突き出してきた。

完全にユキ一人しか認識していないようで、円錐の杭はユキを追い続ける。

避けまわりながらユキは、先ほど攻撃した箇所視線を向ける。そこには不自然な傷を負ったサソリモドキの外殻がある。

(単純に斬り付けただけなんだがな…)

斬られた、というより抉られたという傷を見て、アダマンタイト発動体に風を纏わせる。

「——ふっ！」

再び死角を狙いつつ回避から攻撃へ移る。一撃、三撃、六撃斬り付けた結果、ユキのアステリズム星辰光に対する防御力を備えていないということが分かった。つまり、

「グウギイヤアアアアアア!？」

単純に雷を叩きつけるで決着する。サソリモドキが絶叫を上げる。サソリモドキの外殻が融解し、雷が体内にまで貫通したのか地に沈んでいる。

かすかに息が残っているサソリモドキにアダマンタイト発動体を突き刺し、再び雷を流し込む。サソリモドキは断末魔を上げる暇すらないまま絶命した。

サソリモドキが絶命したことを確認すると、ユキはハジメたちのもとへ戻りアステリズム星辰光を解除した。

瞬間、

「ッ！ げほっ、ごほっ——かはっ」

ユキは口から大量の血を吐き出した。

「ツ！ おい、大丈夫か！」

ハジメたちが急いで駆け寄るがユキは制止する。

「い、いや。大丈夫だ、こういう能力だからな」

これは、アステリズム 星辰光の発動に付き纏うエスベラント星辰奏者の基本仕様だ。

アブレージ平均値から発動値への移行に従って出力が急上昇するものの、その上がり幅が大きければ大きいほどにその反動は大きくなる。

ユキのアステリズム星辰光はその上がり幅が非常に大きく、同じ上がり幅を持つエスベラント星辰奏者は数えるほどしかないほどには稀少だ。

「いや、だが…」

「あとで説明するぞ。」

とりあえず、此処を離れよう。ユエだつてここには居たくないだろう」

そうして、三人はサソリモドキと、いつの間にか彫刻から魔物に戻っていた一つ目巨人の素材や肉を持って、拠点に戻っていった。

幕間 悪夢再び

光輝達勇者一行は、再び「オルクス大迷宮」にやって来ていた。但し、訪れているのは光輝達勇者パーティーと、小悪党組、それに永山重吾という大柄な柔道部の男子生徒が率いる男女五人のパーティー、そしてメイドのアヤメ、香織、雫の三人のパーティーだけだった。

理由は簡単だ。話題には出さなくとも、ユキとハジメの死が、多くの生徒達の心に深く重い影を落としてしまったのである。『戦いの果ての死』というものを強く意識させられてしまい、まともに戦闘などできなくなつたのだ。一種のトラウマというやつである。

当然、聖教会関係者はいい顔をしなかつた。実戦を繰り返し、時が経てばまた戦えるだろうと、毎日のようにやんわり復帰を促してくる。

しかし、それに猛然と抗議した者がいた。愛子先生だ。

彼女は当時遠征には参加していなかつた。作農師という天職のため、実戦訓練よりも、農地開拓を行っていたのだ。

だが、帰ってきて届いたのはユキとハジメ二人の死亡。そのショックに彼女は寝込んで

でしまった。

しかし、だからこそ彼女は戦えなくなつた生徒をこれ以上戦場に送り出すことなど断じて許せなかつた。愛子は作農師という天職の重要性を十二分に發揮して協会側に抗議をし、愛子との関係の悪化を避けたい協会側はその抗議を受け入れた。

結果、自ら戦闘訓練を望んだ者たちのみが訓練を継続することになったのだ。

そして、なぜアヤメがパーティーとして香織、雫と行動しているのかというと、二人がアヤメに師事しているからだ。

メルド団長は、アヤメが金ランク冒険者として活動していたことを知っているため、特に反論せず三人のパーティーを許可した。

だが、それを受け入れない男がいた。光輝だ。

「俺たちのパーティーにいた方が安全だ」

香織と雫は一切聞き入れずアヤメに師事を乞い、当然のように光輝は抗議した。勇者である自分たちと訓練した方がいい、むしろアヤメも自分たちのパーティーで戦おう、と

そのため、アヤメは光輝に一つの条件を出した。

その日の訓練の前に一回だけ、自分と模擬戦を行う。たとえどんな理由があつても、相手に膝をつかせた方が勝利。

勝つた方が香織と雫の訓練を行う、と。

光輝はその条件を受け入れ、今日まで毎日模擬戦をしてきた。

結果は当然のように、アヤメの全勝。

香織と雫の訓練はアヤメが行い、今回のパーティーも三人で組まれた。

そして、迷宮攻略六日目。

現在の階層は六十層。確認されている最高到達階数まで後五層である。

しかし、光輝達は現在、立ち往生していた。正確には先へ行けないのではなく、何時かの悪夢を思い出して思わず立ち止まってしまったのだ。

そう、彼等の目の前には何時かのものとは異なるが同じような断崖絶壁が広がっていたのである。次の階層へ行くには崖にかかった吊り橋を進まなければならない。それ自体は問題ないが、やはり思い出してしまふのだろう。

正直、香織と雫は、ユキとハジメの生存を信じて疑っていないなかった。だが、傍から見ればあの悪夢を思いだし、足が竦んで動かないように見えるのだろう。

それは当然、光輝の眼にもそう映っていたようで、

「……香織、雫、俺は大丈夫さ。俺は絶対に死んだりしない。俺が皆を守ってみせるさ」

光輝のカッコいい台詞を吐く中、香織と雫は、アヤメが奈落を見つめながら驚いた顔

をしていることに気が付いた

「……アヤメさん？　どうかしたんですか？」

「……朗報ですよ、二人とも。あの方の星を感じました。」

「ツッ！　本当ですか！」

そう、ちょうどユキが星辰光を発動させたとき、その星をアヤメは感じ取っていた。

そしてそれは、ユキの生存を証明することに他ならなかった。

「ええ。ハジメくんの方は分かりませんが、ご主人様がいるなら大丈夫でしょう」

根拠はないが、確信に満ちた言葉は不思議と二人は心から安心した。

「香織ちゃん、雫ちゃん、私、応援しているから、出来ることがあつたら言つてね」

「そうだよ、鈴は何時でもカオリンとシズシズの味方だからね！」

アヤメの言葉を理解できていないが、何かに安心したことを感じ取つて話しかけてきたのは中村恵里と谷口鈴だ。

二人共、高校に入ってからではあるが香織達の親友と言つていい程仲の良い関係で、光輝率いる勇者パーティーにも加わっている実力者だ。

中村恵里はメガネを掛け、ナチュラルボブにした黒髪の美人である。性格は温和で大人しく基本的に一步引いて全体を見ているポジションだ。本が好きで、まさに典型的な図書委員といった感じの女の子である。実際、図書委員である。

谷口鈴は、身長百四十二センチのちみっ子である。もつとも、その小さな体には、何処に隠しているのかと思うほど無尽蔵の元気が詰まっております、常に楽しんでチョロリンと垂れたおさげと共にぴよんぴよんと跳ねている。その姿は微笑ましく、クラスのマスコットの存在だ。

「うん、恵里ちゃん、鈴ちゃん、ありがとう」

「ありがとう、私たちは大丈夫よ」

そして、一行は特に問題もなく、遂に歴代最高到達階層である六十五層にたどり着いた。

「気を引き締めろ！　このマップは不完全だ。何が起こるかわからんからな！」

付き添いのメルド団長の声が響く。光輝達は表情を引き締め未知の領域に足を踏み入れた。

しばらく進んでいると、大きな広間に出た。何となく嫌な予感がする一同。

その予感は的中した。広間に侵入すると同時に、部屋の中央に魔法陣が浮かび上がったのだ。赤黒い脈動する直径十メートル程の魔法陣。それは、とても見覚えのある魔法陣だった。

「ま、まさか……アイツなのか!？」

光輝が額に冷や汗を浮かべながら叫ぶ。他のメンバーの表情にも緊張の色がはつきりと浮かんでいた。

「マジかよ、アイツは死んだんじゃないやなかったのかよ!」

龍太郎も驚愕をあらわにして叫ぶ。それに応えたのは、険しい表情をしながらも冷静な声音のメルド団長だ。

「迷宮の魔物の発生原因は解明されていない。一度倒した魔物と何度も遭遇することも普通にある。気を引き締めろ! 退路の確保を忘れるな!」

いざと言う時、確実に逃げられるように、まず退路の確保を優先する指示を出すメルド団長。それに部下が即座に従う。だが、光輝がそれに不満そうに言葉を返した。

「メルドさん。俺達はもうあの時の俺達じゃありません。何倍も強くなったんだ! もう負けはしない! 必ず勝ってみせます!」

「へっ、その通りだぜ。何時までも負けっぱなしは性に合わねえ。ここらでリベンジマッチだ!」

龍太郎も不敵な笑みを浮かべて呼応する。メルド団長はやれやれと肩を竦め、確かに今の光輝達の実力なら大丈夫だろうと、同じく不敵な笑みを浮かべた。

「: : : アヤメさん。私たち二人でやらせてもらってもいいですか」

「: : : : いいでしょう。危険だと判断したら援護します。いいですね」

「はっ」

香織と雫は、アヤメに確認を取り、誰よりも先に飛び出す。

慌ててメルド団長が止めようとするが、アヤメがそれを制止する。

「おまちください、メルド団長」

「しかし、危険だぞ！」

「あの程度にやられるほど、私は柔な鍛え方をしていません」

（それに、あの男たちにも見せつけておかねばなりませんね）

それは、この場をのぞき見しているであろう、ある男たちに向けられた言葉だった。

光を尊ぶあの男たちにとって、勇者という存在は格好の獲物であるはずだから。

幕間 強欲竜団

「全てを切り裂く至上の一閃——『絶断』！」

先手は雫。魔法によって切れ味を増したアーティファクトの剣がベヒモスの顔に鋭い一閃を入れる。

「グルウガアアア!!」

悲鳴を上げその巨体を揺らし、顔に刻まれた傷には赤黒い血が流れ落ちる。

ベヒモスは自分に傷をつけた相手を睨みつけ、踏み込みで地面を粉碎しながら突進を始める。

「グルウアアア!!」

「全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を通さず——『聖絶』！」

香織が前に出て、絶対の防御を発動させ、ベヒモスの突進を受け止める。

凄まじい衝撃音と衝撃波が辺りに撒き散らされ、周囲の石畳を蜘蛛の巣状に粉碎するが、障壁にはヒビの一つも入らない。

殺気に満ちたベヒモスの眼光が香織を捉えるが、香織は一步も引くことはない。

ユキとヴァルゼライドの戦いを見てきた香織や雫にとって、その程度の殺気では堅い意志を揺らすことはできない。

そこからは文字通り一方的だった。

攻撃はすべて香織に受け止められ、高速で動く雫をベヒモスは捉えることはできない。

全身に傷が増えていき、とうとう、ベヒモスはその巨体を地に沈める。

だが、まだ死んでいるわけではない。その巨体を支えきれなくなっただけである。

そこに、香織がとどめを刺すべく、炎系上級攻撃魔法をベヒモスに放った。

「『炎天』」

香織一人で発動させているにもかかわらず、膨大な魔力が込められた超高温の炎が球体となり、さながら太陽のように周囲一帯を焼き尽くす。ベヒモスの直上に創られた『炎天』は一瞬で直径八メートルに膨らみ、直後、ベヒモスへと落下した。

絶大な熱量がベヒモスを襲う。地に伏せてしまっているベヒモスは逃げることもできず、『炎天』はその堅固な外殻を融解していった。

「グウルアガアアアア!!!」

ベヒモスの断末魔が広間に響き渡る。いつか聞いたあの絶叫だ。鼓膜が破れそうなほどのその叫びは少しずつ細くなり、やがて、その叫びすら燃やし尽くされたかのよう

に消えていった。

そして、後には黒ずんだ広間の壁と、ベヒモスの物と思しき僅かな残骸だけが残った。
「す、すごいじゃないか、二人とも！ だけど、あまり無t y」

「どうでしたか、アヤメさん」

光輝の心配を無視して、香織と雫は誰よりも先にアヤメに声を掛ける。

実は今回は一種の試験でもあり、これまで訓練を行ってきた、どこまで強くなったかの確認でもあった。

「よくやりましたね。この短期間でここまで強くなれば十分です」

「はい！」

そのやり取りに光輝は苦い顔をするが、そこでクラス一の元気っ子が飛び込んできた。
た。

「カツオリ〜ン！ シツズシズ〜！」

そんな奇怪な呼び声とともに鈴が香織にヒシツと抱きつく。

「ふわっ!?!」

「すごいよ〜！ 二人だけで倒しちゃうなんて〜」

「も、もう、鈴ちゃんつたら。つてどこ触ってるの!」

「げへへ、ここがええのんか？ ここがええんやつへぶう!?!」

鈴の言葉に照れていると、鈴が調子に乗り変態オヤジの如く香織の体をまさぐる。それに雫が手刀で対応。些か激しいツツコミが鈴の脳天に炸裂した。

「いい加減にしなさい。誰が鈴のものなのよ……香織は私たちのよ?」

「雫ちゃん!?!」

「ふつ、そうはさせないよ、カオリンとピーでピーなことするのは鈴なんだよ!……」

たち?」

「鈴ちゃん!?! 一体何する気なの!?!」

「おうおう、凄いいじゃないか。まさか二人だけでアレを倒しちゃうとはな。感心したぜ」

突如、聞いたことがない声が六十五階層に響く。メルド団長と騎士団員が警戒し、慌

てて光輝たちも警戒する。

すると広間の奥の方に無数の魔法陣が現れ、そこから騎士団員も見ることがない魔物

たちが出現した。

「……やはり来ましたか、フアグニル強欲竜団」

見たことがない魔物に全員がうろたえる中、アヤメが確信したように言うと、また虚

空から男の声が響く。

「今回は殺りあうつもりはねえ。ただ勇者つてのを見に來ただけなんだが、なかなか面

白いもんを見させてもらったぜ。

勇者つてのより、よほどいいじゃねえか」

「な、なんだと！ 何者だ、姿を見せろ！」

激昂する光輝に対してなのか、それともその面白いものを見せた香織と雫に対してなのか、男は名乗った。

「ファヴニル・ダインスレイフ。強欲竜団の首領つてのをしているんだが、今はそんなことでもいい」

ダインスレイフと名乗ったその男は、くつくつと笑いながら話をつづけた。

「英雄譚を始めるには少し早いが、面白いもんを見せた礼だ、受け取っておけ嬢ちゃんたち」

「もうじき真の怪物と大地が目覚め、絶滅闘争が幕を開ける。奴をどこまで輝かせるか、嬢ちゃんたちの本気を見させてもらうぜ」

怪物たちの足元にまた魔法陣が現れ、怪物たちをどこかに転移させていく。

「さあ、勇者。英雄譚までまだ時間はある。俺の目的は怪物だが、審判者のためにももっと強くなっておくんだな」

「な、まて！」

光輝の叫びに意味はなく、ダインスレイフはそう言い残し、広間には静寂だけが残った。

フアヴニル、英雄譚、審判者。
ラダマンティス。

ダインスレイフが残した言葉はその大半を理解できるものではなく、多くの謎を残していった。

それは香織と雫も同じで、テュホエウス、ガイア、テイタノマキア、大地、絶滅闘争など…

疑問は多かったが、再会でできればなにかわかるだろうと、さらに強く決意するのであった。

それがフアヴニル・ダインスレイフの目的なのだとしても…

第十二話 語らい

「そうすると、ユエって少なくとも三百歳以上なわけか？」

「…… マナー違反」

「さすがにそれは失礼だぞ……」

ユエが非難を込めたジト目でハジメを見る。女性に年齢の話はどの世界でもタブーらしい。

三人は現在、拠点で消耗品を補充しながらお互いのことを話し合っていた。

ハジメの記憶では、三百年前の大規模な戦争のおり吸血鬼族は滅んだとされていたはずだとのこと。実際、ユエも長年、物音一つしない暗闇に居たため時間の感覚はほとんどないらしいが、それくらい経っていてもおかしくないと思える程には長い間封印されていたという。二十歳の時、封印されたというから三百歳ちよいということだろう。

「吸血鬼って、皆そんなに長生きするの？」

「…… 私が特別。『再生』で歳もとらない……」

聞けば十二歳の時、魔力の直接操作や『自動再生』の固有魔法に目覚めてから歳を

とっていないらしい。普通の吸血鬼族も血を吸うことで他の種族より長く生きるらしいが、それでも二百年くらいが限度なのだそうだ。

「……そういやユキの年齢もおかしなことになってたが、あれどうなってんだ？」

「……私、それ知らない。どうゆうこと？」

「ああ、そうだな。いろいろと複雑なんだが、ハジメは、香織と雫から夢について相談されてたんだっただな？」

ハジメはユキのステータスプレートの年齢の部分を思いだし問うと、突然香織と雫に夢について相談されていたことを聞いてきた。

「あ？　　そういやそうだったか？」

「その夢は、全部が実際に在ったことなのさ」

「は、は？　　どういうことだ？」

香織たちが見ていた夢は、ユキが実際に経験していることを説明する。当然のように理解されていないため、さらに説明する。

「死に戻り、とでも言っておこうか。俺は新西暦に移してしまっただから、死亡するまでの、所謂一生を何度も繰り返し返していたのさ。」

だから彼女たちが夢で見たように、何度もヴァルゼライドと戦ったし、その約三十年間を何度も生きたから年齢がおかしいことになっているのさ」

二人は絶句していた。正確にはユエはよくわかっていないが、凄まじいことを言っていることは分かった。

「そ、それって何回くらいだ？ 十回とか二十回じゃないだろ」

「回数なんて数えてないさ。数百、数千、それ以上かもしれないな」

それはつまり約三十年を数百、数千回繰り返し返していたわけで……

「……私なんかよりおじいちゃん？」

「ぐっ！…… 事実だから何も言えん」

ユエの何気ない一言でユキの鋼の心に傷をつける。そのやり取りにハジメが苦笑してしまうが、本来聞きたかったことをユエに尋ねる。

「ユエはここがどの辺りか分かるか？ 他に地上への脱出の道とか」

「…… わからない。でも…… この迷宮は反逆者の一人が作ったと言われている」

「反逆者？」

聞き慣れない上に、なんとも不穏な響きに思わず錬成作業を中断するハジメ。ハジメの作業をジツと見ていたユエも合わせて視線を上げると、コクリと頷き続きを話し出した。

「反逆者…… 神代に神に挑んだ神の眷属のこと…… 世界を滅ぼそうとしたと伝わっている」

ユエ曰く、神代に、神に反逆し世界を滅ぼそうと画策した者たちがいたそうだ。しかし、その目論見は破られ、彼等は世界の果てに逃走した。

その果てというのが、現在の七大迷宮といわれているらしい。この【オルクス大迷宮】もその一つで、奈落の底の最深部には反逆者の住まう場所があるとされているのだとか。

「……そこなら、地上への道があるかも……」

「なるほど。奈落の底から迷宮を上がってくるとは思えない。神代の魔法使いなら転移系の魔法で地上とのルートを作ってもおかしくないってことか」

（それに、本当に反逆者は世界を滅ぼそうとしていたのか？ 聖教協会が世界を支配しているなら歴史なんてどうにでもできる。都合のいいように真実を隠すのは権力者の特権だ）

（そもそもエヒト神は元の世界に帰す気があるのか？ 俺たちを召喚できる以上、何らかの方法で現世に干渉できるはず）

（それなのに、わざわざ別の世界から勇者となる存在を召喚する必要があるのか？ 人間族に加護や技術を与えればいいだけじゃないのか）

ユキは一人でユエの説明を元に思考を巡らせるが、

（……いや、仮説にもならない憶測を立てたところで仕方がないか……まずはこの大

迷宮から脱出することが先だな)

「目先の目的が変わってきている、と考えを元に戻した。すると、

「ユキはどうするんだ?」

「:.. ん? ああ、悪い。聞いてなかった、何のことだ」

「ユエを俺たちの世界に連れていくってことだ。で、ユキはどうするんだ。死んじまったら召喚されただろ」

「どうやら、迷宮から脱出したらどうするのかという話だったようだ。確かに、ユキは星辰戦争に敗北して死亡した直後に召喚されている。帰る場所などないに等しい。」

「:.. ハジメたちについていくさ。元々はそっちが故郷なんだしな」

「数百、数千、それ以上の年月を新西暦で過ごしたユキだが、もともとハジメたちが生きる西暦が故郷だ。そのため、本当の意味で帰る場所は西暦なのだ。」

話を続ける中で、ハジメは作業を完了させ新しい武器、シユラーゲンを完成。一段落したところで食事をする事とした。

「ユキ、ユエ、メシだぞ:.. って、ユエが食うのはマズイよな? あんな痛み味わせる訳にはいかんし:.. いや、吸血鬼なら大丈夫なのか?」

「ハジメとユキは魔物の肉を食うのが日常になっていたので、軽くユエを食事に誘った

のだが、果たして喰わせて大丈夫なのかと思ひ直し、ユエに視線を送る。

ユエは、ハジメの発明品をイジっていた手を止めて向き直ると「食事はいらぬ」と首を振った。

「まあ、三百年も封印されて生きてるんだから食わなくても大丈夫だろうが…… 飢餓感とか感じたりしないのか？」

「感じる…… でも、もう大丈夫」

「大丈夫？ 何か食ったのか？」

腹は空くがもう満たされているというユエに怪訝そうな眼差しを向けるハジメ。ユエは真っ直ぐにハジメを指差した。

「ハジメの血」

「ああ、俺の血。 ってことは、吸血鬼は血が飲めれば特に食事は不要ってことか？」

「…… 食事でも栄養はとれる…… でも血の方が効率的」

吸血鬼は血さえあれば平気らしい。先ほどハジメから吸血したので、今は満たされているようだ。なるほど、と納得しているハジメを見つめながら、何故かユエがペロリと舌舐りした。

「…… 何故、舌舐りする」

「…… ハジメ…… 美味……」

「び、美味ってお前な、俺の体なんて魔物の血肉を取り込みすぎて不味そうな印象だが……」

「…… 熟成の味……」

「……」

ユエ曰く、何種類もの野菜や肉をじっくりコトコト煮込んだスープのような濃厚で深い味わいらしい。

そういえば、最初に吸血されたとき、やけに恍惚としていたようだったが気のせいではなかったようだ。飢餓感に苦しんでいる時に極上の料理を食べたようなものなのだろうから無理もない。

「…… 美味」

「…… 勘弁してくれ」

いろいろな意味で、この相棒はヤバイかもしれないと、若干冷や汗を流すハジメであった。

筋力：3 0 0 0

体力：3 0 0 0

耐性：3 0 0 0

敏捷：3 0 0 0

魔力：1 5 0 0 0

魔耐：1 2 0 0 0

技能：星辰光・■■■■・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・魔力
 変換「+身体強化」「+部分強化」「+治癒力変換」「+衝撃変換」・気配感知「+特定感
 知」・魔力感知「+特定感知」・言語理解

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：76

天職：錬成師

筋力：1 9 8 0

体力：2 0 9 0

耐性：2 0 7 0

敏捷：2 4 5 0

魔力：1780

魔耐：1780

技能：錬成「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探査」「＋鉱物分離」「＋鉱物融合」
 「＋複製錬成」・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」・風爪・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・熱源感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・金剛・威圧・念話・言語理解

二人のステータスは現在こうなっていた。

魔物を喰うことでハジメのステータスは上昇し続けたが、固有魔法に関してはそのほどこ増えなくなっていた。ステータスが上がって肉体の変質が進むことに習得し難くなっているのかもしれない。

ユキに至っては、技能派生は増えてはいないがレベルが100に到達し、メルド団長の説明曰く人間としての潜在能力の全てを發揮した極地にいるらしい。

しばらくして、全ての準備を終えた三人は、百層目へと続く階段へと向かった。

百層目は、無数の強大な柱に支えられた広大な空間だった。柱の一本一本が直径五メートルはあり、一つ一つに螺旋模様と木の蔓が巻きついたような彫刻が彫られている。柱の並びは規則正しく一定間隔で並んでいる。天井までは三十メートルはありそ

うだ。地面も荒れたところはなく平らで綺麗なものである。どこか荘厳さを感じさせる空間だった。

しばしその荘厳な光景に見惚れつつ足を踏み入れると、全ての柱が淡く輝き始めた。ハツと我を取り戻し警戒するハジメ達、柱はハジメ達を起点に奥の方へ順次輝いていく。

ハジメ達はしばらく警戒していたが特に何も起こらないので先へ進むことにした。感知系の技能をフル活用しながら歩みを進める。二百メートルも進んだ頃、前方に行き止まりを見つけた。否、行き止まりではなく、全長十メートルはある巨大な両開きの扉が有り、これまた美しい彫刻が彫られている。特に、七角形の頂点に描かれた何らかの文様が印象的だ。

「…これはまた凄いな。もしかして…」

「… 叛逆者の住処？」

いかにもラスボスの部屋といった感じだ。実際、感知系技能には反応がなくともハジメの本能が警鐘を鳴らしていた。この先はマズイと。それは、ユエも感じているのか、うつすらと額に汗をかいている。

ユキも同じく危険だと感じてはいるものの、それ以上に奇妙な気配を感じている。異世界であるはずなのに、懐かしいと。

「ハッ、だったら最高じゃねえか。ようやくゴールにたどり着いたってことだろ？」
ハジメは本能を無視して不敵な笑みを浮かべる。たとえ何が待ち受けていようとやるしかないのだ。

「…んっ！」

ユエも覚悟を決めた表情で扉を睨みつける。

そして、三人揃って扉の前に行こうと最後の柱の間を越え…。ようとした直前に、ユキの足元に魔法陣が現れた。

ハジメはその魔法陣に見覚えがある。トータスに転移する際に教室に現れた、転移の魔法陣だ。

「なッ！」

突然の事態に焦りハジメはユエを抱き寄せ、ユキにも手を伸ばそうとするが間に合わない。

そのユキ自身は先ほどの懐かしさを魔法陣の先を感じ取り、
(ああ、なるほど。そういうことか…)

その正体に気付いた直後、魔法陣がユキを別の空間へ転移させた。

神話の戦い。この光景を見たものはそう感じるだろう。

だが、その感想は決して間違っていない。

竜巻が吹き荒れ、稲妻を鳴り、大気が揺らぐ。荒れ狂う嵐は空間すらも引き裂かんとしている。

そして、その嵐すら切り裂く黄金の極光。

これを神話と言わずしてなんと表すのだろうか。

なにより有り得ないのが、

「オオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

たった二人の男がこの神話の創り出しているということだろう。

その一人、ユキ・ロスリックが放つ一振りには新たな竜巻を生み、触れる者全てを薙ぎ払う。

だが、その常識を覆すのが「英雄」というもの。

その英雄、金髪の偉丈夫が放つ光の剣閃は、文字通り竜巻を斬り飛ばした。

「……さすがだな、クリストファー・ヴァルゼライド。紛い物とはいえ、この程度じゃ殺れないか」

そう、この金髪の偉丈夫が、英雄、クリストファー・ヴァルゼライド。

ユキ・ロスリックの親友にして、アドラー最強の星辰奏者。

ユキが転移した先で待ち構えていたのが、この男だった。無論、この男はクリストファー・ヴァルゼライド本人ではない。

反逆者の一人が、ユキ・ロスリックのために配置した、ホムンクルスだ。

ヴァルゼライドは竜巻を斬り飛ばした後、ユキに斬りかかる。

直撃どころか掠り傷ですら致死に繋がる死の極光、合計七本の太刀を巧みに操り、一閃、二閃、三閃……手数で勝るヴァルゼライドの攻撃を、ユキもまた巧みに捌き攻守が逆転する。

一刀対七刀、手数で劣るのならば他で補えばよい。ユキの斬撃と同時に放たれる多段の鎌鼬。常人ならば数瞬で肉片に変わるであろう怒涛の刃だが、当然この程度で倒せる

はずもなく、極光の一振りで鎌鼬を掻き消す。

そこから幾度と攻守の逆転を繰り返し鏢迫り合いが発生する。

「……ふざけているのか」

「何？」

突如ヴァルゼライドが口を開く。

「俺は偽物。この時の為に生みだされた存在だ。当然、本物には到底及ばないだろう」

「お前は幾度と本物のヴァルゼライドを斃してきたはずだ。だということになぜ偽物のヴァルゼライド程度に梃子摺っている」

「ッ！ それは——」

ユキは対ヴァルゼライドにおいて圧倒的な経験値がある。なのに攻めきれず、この鏢迫り合いでさえ僅かに押され気味になっている。それは、

「いつまで過去に縛られているつもりだ」

最後の星辰戦争において、ヴァルゼライドに敗れたという事実。結果、英雄が怪物に負けるわけがないという考えがユキの根底に根付いたことで、それが無意識にユキの剣筋を鈍らせていた。

「その醜態で悪を討つ？ 神を倒す？ 嘗めるなよ」

鏢迫り合いに押し負け後方に飛び退こうとするも、透かさずヴァルゼライドが追撃す

ることで態勢を整える隙を与えない。

軸を崩され完全に後手に回ってしまった今、先ほどのような拮抗になるはずもなく、
「その程度の覚悟しか抱けぬのなら——」

「ッ、しま」

「——試練で死ぬ」

断罪の極光が振り下ろされた。

ヴァルゼライドの視線の先には、壁に寄りかかっているユキが居た。床には血溜まり
が広がっている。

殲滅光ケラウノスに身を焼かれ、死の淵を彷徨っているユキの意識はすでに消える寸前だった。

（…俺の、負け、か）

放射能分裂光ガンマレイイが肉体を蝕み続けユキを敗死に導く。怪物は再び英雄に敗北し、奈落の
底で永い眠りにつき——

(まだだ)

——否、まだ死んでいない。武器を握り、アステリズム 星光はまだ輝き続けている。まだ死ぬわけにはいかない。

(日本に帰ると、約束したから)

一度敗北したからなんだというのだ。過去は過去、いま 現在はいま 現在だ。負けたのならば、また勝てば良いのだから。

「父さんと母さんが、まだ俺を待つてるらしくてな」

故に死ねない、死ぬわけにはいかない。

ユキは太刀を杖のようにして立ち上がり、視線はヴァルゼライドを捉える。

ユキが立ち上がることを待っていたようにヴァルゼライドは立っていた。実際、待っていたのだろう。これは試練なのだから。故にここからが本当の戦いである。

「この手に『勝利』を掴むため。皆と明日へ往くために。俺は過ヴァルゼライド 去を越える！」

それに呼応するようにユキが自らのアステリズム 星光の能力を解放する。

「『ハイドロリアクター 純粋水爆星バースト 辰光、解放』」

化学反応制御能力。化合物分解、融合分裂を操る能力。

核融合、核分裂すらも行える究極の星光。それが、ユキ・ロスリックの星光の正

体だった。

自らが致命傷を負うことも関係なく放たれた自爆技。その爆発は部屋を完全に飲み込み……

一方、ハジメとユエの二人は、ユキが転移した直後に出現した迷宮のボス、ヒュドラと戦っていた。

そして、激戦の果てに二人はヒュドラに勝利した。しかし、その代償は大きく、ハジメは片目を失う結果となっていた。

「流石に…… もう…… 限界だ」

「わ、私も…… 魔力…… ない」

二人は疲労の果てに座り込む。ハジメに至っては片目を失い魔力も尽きたために気を失う寸前だった。

意識を手放そうとしたその瞬間、壁の一部が吹き飛んだ。

「ッ！ なんだ！」

突然のことに意識は覚醒するが、疲労からか神水を取り出そうにも腕すら動かない。マズイ、とユエを傍に引き寄せ壁の方を睨み警戒するが、そこから吹き飛んできた人

物に驚いた。

「ぐ、うッ!」

「ユ、ユキ!」

吹き飛んできたのは、ユキであった。ボロボロになり、苦悶の声を上げている。最大出力で放った影響で、星辰光はすでに解けてしまっている。

ユキはハジメの方へ一瞥した後、壁の方へ視線を向ける。そこから現れたのは、ユキと同じくボロボロになりながらも悠々と歩いてくるヴァルゼライドの姿だった。

「… 致命傷を負いながらも自爆技か。それでも潰えぬその雄姿、見事だ」

「… 当たり前だ。この程度で勝てるほどお前は弱くないさ。」

それでも、俺は勝つ。そして、ハジメたちと生きて帰る!」

「… いいだろう。その覚悟、試練を越えるものと認めよう。」

ならばこそ、俺を打ち倒し、その力を示して見せろ」

「言われなくとも!」

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

そして二人は再び、同時に詠唱を紡ぎだす。

両者が謳い上げるのは似て非なるもの。片や全能の証明。片や最強の証明。両者は再び神話を再現する。

「天霆の轟く地平に、闇は無く」
 「殲嵐の齎す終焉に、光は無く」

初手はユキの一閃、同時に放たれる高密度の風弾。

以前、檜山が放った魔法と同様の攻撃だが、威力に圧倒的な違いがあった。魔法がプロボクサーのパンチ程度なら、こちらは砲弾クラスの威力がある。

ヴァルゼライドはその風弾を、空間ごと圧倒的な剣威で斬り飛ばしユキの一閃を避けると同時に放つ極光斬。

直撃すれば間違いなく敗死する極光斬を紙一重で躲す。返し放たれるユキの斬撃、音を置き去りにして大気を引き裂く。

次いで放つ鎌鼬、水弾、爆炎。黄金の極光はまたもや消し飛ばす。

幾度繰り返しても変わらない光景。

都合数分にも亘って繰り返される神速の剣戟。

より速く、より鋭く、より強く。

斬、斬、突、斬、強、弱、突、弱、斬——と、ユキによつて放たれる怒涛の連撃。現

状、ユキがヴァルゼライドに唯一勝るのは技量のみであり——

——両者の決着は唐突に訪れた。

そもそも、このヴァルゼライドは試練のために生みだされたホームクルスであり、最

最終的にユキに負けることを前提にしている。

そして、そのことを本人も自覚しており、その運命を受け入れている。

敗北を受け入れるヴァルゼライドと、勝利を求めるユキ。実力が拮抗している以上、結果は決まっております、

「オオオオオオッ!!」

渾身の袈裟斬り。幾度と繰り返した戦いでヴァルゼライドを斃してきた一撃はその身体を切り裂き――

「ッ、ハアア――ッ!」

――同時に放たれたヴァルゼライドの一撃はユキの太刀を砕き、胴体を切り裂いた。

切り裂かれた胴体から放射能分裂光^{ガンマレイイ}が肉体を蝕みユキを滅びへ誘う。

加えてユキは発動体を砕かれた。発動体を失った星辰奏者は星辰光を使えない。

星の力をなくした星辰奏者など身体能力の高いだけであり、なおも星を纏うヴァルゼライドの勝利が揺るぐはずがなく、

「まだだ」

この瞬間を待っていた、と言うように太刀を振り下ろすこともできない懐に潜り込む。

幾度と斃しているといっても、一度破られているのだ。ならばその程度で斃せるわけがない。

虚を突かれたヴァルゼライドは一瞬止まってしまい、その一瞬が勝敗を分けた。袈裟斬りによってできた斬傷に右手を差し込み――

「俺の、勝ちだ！」

――核しんぞうを抉り出す。

この瞬間、英雄譚を覆し、怪物の勝利は決まった。

試練を乗り越え、ヴァルゼライドこを打ち倒したのだ。

「……見事だ。貴様なら、あの神の支配を、越えられるだろう。」

さあ、進むがいい。この世界の真実が、そこにある」

そう言い残し、ヴァルゼライドは息絶える。

ユキはヴァルゼライドこを乗り越えた。

そして、扉の先で世界の真実を知る。新たな再会と共に……

第十四話 真の歴史

ヴァルゼライドを倒したユキはポロポロの体を引きずりながらハジメとユエの元に
向かっていく。

「二人とも、大丈夫か？」

「ああ、右目をやられたがなんとかな」

「そういう、ユキは？」

「なんとかな」

三人で労い合っていると、広間の奥の扉が独りでに開いていく。

ハジメとユエは新手かと構えるが、ユキはそれを無視するように扉に向かって歩いて
いく。

「行くぞ、二人とも」

「お、おい。新手かもしれないだろ」

「クリスが先に進めって言ってたから大丈夫だ。」

そう言いながら歩いていくユキに、ハジメとユエは追いかけて三人で扉をくぐる。

その先には、地下深くとは思えない空間が広がっていた。

まず目に入ったのは太陽だ。もちろんここは地下迷宮であり本物ではない。頭上には円錐状の物体が天井高く浮いており、その底面に煌々と輝く球体が浮いていたのである。僅かに温かみを感じる上、蛍光灯のような無機質さを感じないため、思わず「太陽」と称したのである。

「すごいな、これは…」

「ここって迷宮だよな…じゃああれって人工太陽か？」

「これが、反逆者の住処」

次に、注目するのは耳に心地良い水の音。扉の奥のこの部屋はちよつとした球場くらいの大きさがあるのだが、その部屋の奥の壁は一面が滝になっていた。天井近くの壁から大量の水が流れ落ち、川に合流して奥の洞窟へと流れ込んでいく。滝の傍特有のマイナスイオン溢れる清涼な風が心地いい。よく見れば魚も泳いでいるようだ。もしかすると地上の川から魚も一緒に流れ込んでいるのかもしれない。

川から少し離れたところには大きな畑もあるようである。今は何も植えられていないようだが…その周囲に広がっているのは、もしかしなくても家畜小屋である。動物の気配はしないのだが、水、魚、肉、野菜と素があれば、ここだけでなんでも自炊できそうだ。緑も豊かで、あちこちに様々な種類の樹が生えている。

「あとは、あの家だな」

三人は視線の先にある石造りの家に向かつていった。全体的に清潔感があり、エントランスには、温かみのある光球が天井から突き出す台座の先端に灯っていた。薄暗いところに長くいたユキたちには少し眩しいくらいだ。どうやら三階建てらしく、上まで吹き抜けになっている。

取り敢えず一階から見て回る。暖炉や柔らかな絨毯、ソファのあるリビングらしき場所、台所、トイレを発見した。どれも長年放置されていたような気配はない。人の気配は感じないのだが……言ってみれば旅行から帰った時の家の様と言えはわかるだろうか。しばらく人が使っていないなかったんだなとわかる、あの空気だ。まるで、人は住んでいないが管理維持だけはしているみたいな……

更に奥へ行くと再び外に出た。そこには大きな円状の穴があり、その淵にはライオンぽい動物の彫刻が口を開いた状態で鎮座している。彫刻の隣には魔法陣が刻まれている。試しに魔力を注いでみると、ライオンモドキの口から勢いよく温水が飛び出した。

「まんま風呂だな。こりゃいいや。何ヶ月ぶりの風呂だか」
「確かに、久しぶりに風呂に入りたいな」

思わず頬を緩めるハジメとユキ。最初の頃は余裕もなく体の汚れなど気にしていなかったハジメだが、余裕ができると全身のカユミが気になり、大層な魔法陣を書いて水を出し体を拭くくらいのことではしていた。

しかし、ハジメも日本人だ。例に漏れず風呂は大好き人間である。安全確認が終わったら堪能しようと頬を緩めてしまうのは仕方ないことだろう。

そして、ユキも例外ではなく、出身は日本であるため風呂好きであった。やはり血は争えないということだろう。

そんな二人を見てユエは、

「…ハジメ、一緒にいる…？」

「…のんびりさせて？」

「むう……」

そんな二人のやり取りをユキは苦笑して見ていた。

それから、二階で書斎や工房らしき部屋を発見した。どちらも扉に封印が施されているらしく開けることはできなかった。

そして、三階には一部屋しかなかった。扉を開けると、そこには直径七、八メートルの精緻で繊細な魔法陣が部屋の中央の床に刻まれていた。

そして、その魔法陣の向こう側、豪華な椅子に座った人影、骸だった。既に白骨化しており黒に金の刺繍が施されたローブを羽織っている。

おそらく、この骸が反逆者なのだろう。魔法陣しかないこの部屋で座ったまま朽ち果てたその姿は、まるで誰かを待っているようにも見える。

「……怪しい……どうする?」

「……あと調べられるのはこの部屋だけだからな……俺とユキの二人が調べるから、ユキは待つててくれ」

ハジメとユキの二人は魔法陣へ向けて踏み出した。瞬間、カツつと純白の光が爆ぜ部屋を真っ白に染め上げる。

二人はまぶしさに目を閉じる。直後、何かが頭の中に侵入し何かが頭の中に侵入し、まるで走馬灯のように奈落到落ちてからのことが駆け巡った。

やがて光が収まり、目を開けた二人の目の前には、黒衣の青年が立っていた。

「試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えばわかるかな?」

彼が反逆者、オスカー・オルクス。このオルクス大迷宮を創った張本人らしい。

「ああ、質問は許して欲しい。これはただの記録映像のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。だが、この場所にたどり着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか……メッセージを残したくてね。このような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい……我々は反逆者であつて反逆者ではないということ」

そうして始まったオスカーの話は聖教教会で教わった歴史やユキに聞かされた反逆

者の話とは大きく異なり、ユキにとつて予想通りの内容だった。

この世界で起こっている種族間の戦争は、神の遊戯として仕組まれたものであること。

その真実を知り、何百年も続く戦争を終結させるために「解放者」として立ち上がったこと。

神が人々を巧みに操り、「解放者」たちを「反逆者」として追い詰められたこと。

残った「解放者」たちは各地に迷宮を創り、その攻略者に自分たちの力、「神代魔法」授けることにしたこと。

いつか神の遊戯を終わらせるものが現れることを願つて……

長い話が終わり、オズカーは穏やかに微笑む。

「君が何者で何の目的でここにたどり着いたのかはわからない。君に神殺しを強要するつもりもない。ただ、知つておいて欲しかった。我々が何のために立ち上がったのか……君に私の力を授ける。どのように使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないで欲しい。話は以上だ。聞いてくれてありがとう。君のこれからが自由な意志の下にあらんことを」

そう締めくくり、オズカーの記録映像はスッと消えた……と思われたが、もう一度オズカーの記録映像が浮かび上がる。先ほどの映像と違う表情をしているため、別の映像

なのだろう。どこか、安心したというような表情だ。

「この映像は、特定の試練がクリアされた場合にのみ流れる仕様になっている。つまり、彼女が配置したホームンクルスを倒されたということだ。

初めまして、ユキ・ロスリック。実際に会えないことが残念だ。」

「ッ！」

オスカーの言った名前前にハジメとユエが驚いて身構えた。

ありえない。オスカー・オルクスは神代の人間、ユキのことを知ることはできないはずなのだから。

しかし当のユキは、それすらも予想通りだと言わんばかりに落ち着いて、まるで続きを促すかのにオスカーをじっと見つめている。

「彼女から記録映像を預かっている…。どうか、彼女を頼む。」

そう言い残し、オスカーの映像は消え、代わりに一人の女性が映る映像が浮かび上がった。

母。そう思わせるだけの母性を、ハジメとユエは女性から感じた。

黒い長髪を揺らしながら女性は告げる。

「…私はガイア。西暦の時代、大和が造りだした人造惑星^{プラネテス}。そして、解放者として迷宮

の奥で一人の男を待ち続ける者よ。」

第十五話 新たなる旅立ち

西暦2578年——その年、世界は崩壊した。

アストラル
星辰体技術の争奪に端を發した第五次世界大戦は、全世界規模の空間震災と、地球環境の改変を引き起こした大破壊により幕を下ろす。
カタストロフ

有史以来最大となる空前絶後の災禍を前に、既存文明は一新されたのだ。

大戦末期に誕生した、一体の人型人造兵器と一体の装置を残して……

西暦末期、蠅にすら命中する精度の誘導ミサイル、世界を幾度も滅ぼせる量の核爆弾。地球という惑星はすでに限界を迎えていた。

更に後押しするように、当時の日本軍タカ派が生み出した初のアストラル運用兵器
迦具土神壺型。

地球の崩壊を危惧して、極秘裏に日本軍ハト派が生み出したアストラル運用環境改竄
システム
装置、大地母神。それが彼女の正体であった。

だが、大破壊の発生により大破した彼女はセントラル地下に転移し、星辰奏者、アダ
カタストロフ

マンガツチとガイアはお互いの協力者を探し、選ばれたのが……

「ユキだったわけか…」

「結構真剣な話だった…」

オスカーの拠点でハジメとユエは、ガイアについての話を聞いていた。

最初は男ユキと女ガイアの関係を知りたかっただけが、思いのほか真面目な話だったことに驚いていた。

「ガイアの協力者はただの人間では担えない。大量の星辰体アストララルに耐えられる存在でなければならぬからな」

世界中を隈無く探せばいたかもしれない。だがガイアはセントラル地下から動くことができない。故に条件の合う人間を待つしかなかった。

「俺は大破壊カタストロフの発生によって西暦から新西暦に転移してる。その時に超高濃度の星辰体アストララルに感応したことでその資格を得た。だから俺が選ばれた」

無論、それだけが理由ではないだろう。大破壊カタストロフを生身で受けている以上、第二太陽アマテラスの一部になってもおかしくはなかったはずだが…

「…恨んだことはないのか？ 結局のところ、そのガイアとかを造った連中のせいな

んだろ？」

ハジメの疑問はもつともだった。言ってしまったえば他国の戦争に巻き込まれて、急に別の世界に飛ばされ、何度死んでも戦うことを強制されたのだから。

異世界に強制召喚されたハジメたちも大概だが、ユキほど異常な人生を経験しているものなどまずいない。

「…どうだっただろうな。生きるのに必死だったし、恨む相手も知らなかったからな。確かに、『家に帰りたい』『家族に会いたい』とは思ってた。でも、」

ヴァルゼライドという光^{ヒロー}に出会ってしまったからだろうか、『恨む』ということを忘れ、光に憧れた。

当時のユキは5、6歳、単純にかっこいいものに憧れる年齢だ。しかも、^{ヴァルゼライド}本物を見てしまったのならなおさらだ。

そして、なにより

「泣いてたんだ、ガイアは。『私たちのせいで辛い目にあわせてしまって、ごめんなさい』って。そんなの見たら、怒る気にもなれないさ」

「はふうく、最高だあ〜」

「ああ、生き返るようだ」

その日の晩、男二人は風呂に入っていた。

ハジメは天井の太陽が月に変わり淡い光を放つ様をぼんやりと眺め、ユキも同じく眺めながら考え事をしていた。

「……………」

「… あの話か？」

「… ああ」

ユキはガイアが残したメッセージのことを考えていた。

『ユキ…いいえ、悠姫。私は神山、聖光協会の総本山にある迷宮にいます』

『きつと過酷な旅になるでしょう。でも、必ず迎えに来てくれると信じています』

『あなたは怪物。ならばこそ、あなたを討てるのは英雄だけなのだから』

『待つてるわ、いつまでも…』

オスカーが託されたというガイアからのメッセージ。

全幅の信頼を寄せた、しかし一種の狂気染みたメッセージではあったが、ユキにとつてはこれで十分。

この世界にガイアがいる。故に、自らの使命は明白だと。

「『全能神エヒトを討ち、絶滅闘争テイタノマキアに勝利せよー

』ああ、いいさー」

「勝つのは、怪物モだ」

『勝つのは、怪物あなたよ』

「どうする？ 神山って、俺たちが召喚された場所だろ。ここを出たら向かうか？」

「…いや、まだ早いだろう。聖光協会、おそらく今の聖教協会のことだろう。複数人の神代魔法の使い手がいて敵わなかった相手だ。今の俺たちでもまず勝てないだろう」

正確には協会が信仰している神に、ではあるが、協会に手を出せば神あるいは神の手先が介入してくることは確実だろう。

「そんな相手に挑んだって無駄死になるだけだ。他の迷宮を攻略して神代魔法を手に入れたほうがいい」

「…まあ、そうなるか…」

ガイアも過酷な旅になると言っていた。つまり、自分の元にたどり着くには様々な条件が必要だということだろう。

ハジメはユキの言葉に納得するが、ユキはそれよりガイアの言葉の方が気になってい

た。

(なんでガイアはユキを悠姫に言い直した？ 一体何を伝えたいんだ?)

そうユキは考えたが答えが出なかった。すると、脱衣所の方から誰かの気配を感じたため、風呂を上がるために立ち上がった。

「俺は先に出る。ハジメはもう少しゆつくりしていけよ。じゃあ、あとは二人でゆっくり。……あまりはしやぎすぎるなよ」

「おう。……ん？ 二人？ おい、どういうこと……」

ハジメを無視してユキは先に風呂を出る。途中ユエとすれ違い、その後風呂の方からハジメの悲鳴が聞こえたが、ユキはそれも無視して出ていった。

それから二ヶ月、ユキとハジメは、ヒュドラと戦った場所でお互いに武器を構えながら向き合っていた。

「……行くぞ、ハジメ」

「おう、来い、ユキ」

一拍置き、ユキはハジメに斬りかかる。一瞬で距離を詰めるが、ハジメも後方へ飛び下がることで攻撃を回避する。同時にドンナーで牽制するが、ユキは電磁加速された弾

丸すらも容易く切り払いながら距離を詰める。

「チツ！」

牽制は効果がないと判断し、「縮地」を使って逆にユキの懐に潜り込む。さすがにユキも懐に入られたら武器を振ることはできない。ハジメが「豪腕」を使い、

「甘い」

投げられた。

ユキは懐に入られた瞬間に武器を手放し、柔道の如くハジメを投げ飛ばした。そのまま首元に短刀を突き付ける。

「……参った。俺の負けだ……」

「いや、焦ったぞ。それより、義手の調子はどうだ？」

こうして模擬戦をしていたのは、ハジメが左腕に着けている義手が理由だった。

この義手は封印された工房にあったオスカー作のアーティファクトで、魔力の直接操作で本物の腕と同じように動かすことができる。疑似神経が備わっており、魔力を通すことで触った感触もきちんと脳に伝わる様に出来ている。

この模擬戦は義手と体を馴染せるためと、戦闘で使えるかを確かめるようだった。模擬戦自体はすぐに終わってしまったが……

「ああ。問題なさそうだ」

この二ヶ月の間で三人の実力や装備は依然とは比べ物にならないほどに充実していた。

例えば

|||||

ユキ・ロスリック ??歳 男 レベル：???

天職：神子

筋力：15000

体力：15000

耐性：15000

敏捷：15000

魔力：15000

魔耐：12000

技能：星辰光・■■■■・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・魔力
 変換「+身体強化」「+部分強化」「+治癒力変換」「+衝撃変換」・気配感知「+特定感
 知」・魔力感知「+特定感知」・言語理解

|||||

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：???

天職：錬成師

筋力：10950

体力：13190

耐性：10670

敏捷：13450

魔力：14780

魔耐：14780

技能：錬成「+鋳物系鑑定」「+精密錬成」「+鋳物系探查」「+鋳物分離」「+鋳物融合」
 「+複製錬成」「+圧縮錬成」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」
 「+調律」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・夜目・
 遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配
 遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪
 腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治癒力」・限界突破・生
 成魔法・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

二人のステータスはこうなっていた。

ハジメは魔物の肉を喰いすぎて体に変質し過ぎたのか、ある時期からステータスは上がれどレベルは変動しなくなり、遂には非表示になってしまった。さらに、ようやく調律を習得したため、ユキの発動体の調律もできるようになった。

ユキに関して言えば、ハジメよりも異常だった。おそらくヴァルゼライドとの戦いで幾度と覚醒を果たしたせいだろうが、なぜ本当にステータスに反映されているのだろうか。

ちなみに、勇者である天之河光輝の限界は全ステータス1500といったところである。限界突破の技能で更に三倍に上昇させることができるが、それでもハジメとは約三倍、ユキとは約四倍の開きがある。しかも、ハジメも魔力の直接操作や技能で現在のステータスの三倍から五倍の上昇を図ることが可能であり、ユキは星辰光でハジメ程ではないが大幅なステータスの上昇ができるため、二人が如何に規格外な存在になってしまったかが分かるだろう。

義手の他にも工房にはいろいろなものが保管されていた。様々な鉱石や見たこともない作業道具、理論書などが所狭しと保管されており、錬成師にとっては楽園かと思ふほどである。発動体も保管されており、おそらくユキのために準備されていたのだろう。刀、太刀、短刀、いろいろな形状が保管されてあったため、同調率はともかく、最低限全て使えるようにハジメに調律してもらった。そのほかにも“宝物庫”という指

輪型アーティファクトを手に入れた。

書齋の方では、脱出の方法が見つかり、他の迷宮や「解放者」たちのことについて書かれたオスカーの手記も見つけた。手記によると、他の「解放者」たちも迷宮の最深部で攻略者に神代魔法を教授する用意をしているようだ。生憎とどんな魔法かまでは書かれていなかったが、おそらく元の世界に帰る方法も見つかるだろう。

これで、今後の指針は完全に決まった。

その準備として、ハジメは「魔力駆動二輪と四輪」を製造した。

つまるところ、魔力で動くバイクと車である。ドンナーの最大出力でも貫けないだろう耐久性に、魔力を直接操作して駆動するため速度は魔力量に比例する。

次に、「魔眼石」というものを開発した。

ハジメはヒュドラとの戦いで右目を失っている。生成魔法を使い、神結晶に「魔力感知」「先読」を付与することで通常とは異なる特殊な視界を得ることができ、魔眼を創ることに成功した。これに義手に使われていた擬似神経の仕組みを取り込むことで、魔眼が捉えた映像を脳に送ることができるようになった。魔眼では、通常の視界を得ることはできないが、魔力の流れや強弱、属性を色で認識できるようになった上、発動した魔法の核が見えるようになった。しかし、常に発光してしまうので、黒い眼帯をつけてる。

他にも様々な装備・道具を開発した。しかし、装備の充実に反して、神水だけは遂に神結晶が蓄えた魔力を枯渇してしまった。そのため、魔力を蓄えられる性質を利用してアクセサリーとしてユエに贈られた。

「……プロポーズ？」

「なんでやねん」

「それで魔力枯渇を防げるだろ？ 今度はきつとユエを守ってくれるだろうと思ってな」

「…… やっぱりプロポーズ」

「いや、違えから。唯の新装備だから」

「…… ハジメ、照れ屋」

「…… 最近、お前人の話聞かないよな？」

「…… ベッドの上でも照れ屋」

「止めてくれますか?! そういうのマジで!」

「ハジメ……」

「はあ…… 何だよ？」

「ありがとう…… 大好き」

「…… おう」

そんなやり取りをしていた。

なにはともあれ、ようやく準備は整った。

それから十日後、遂に三人は地上へ出る。

3階にある魔法陣を起動させながらハジメはユキとユエに声をかける。

「ユキ、ユエ：：俺の武器や俺達の力は、地上では異端だ。聖教教会や各国が黙っているということはないだろう」

「まあ、当然だろうな」

「ん：：」

「兵器類やアーティファクトを要求されたり、戦争参加を強制される可能性も極めて大きい。教会や国だけならまだしも、バックの神を自称する狂人共も敵対するかもしれない」

「覚悟の上だ」

「ん：：」

「世界を敵にまわすかもしれない危険な旅だ。命がいくつあっても足りないぐらいな」

「今更だ」

「ん：： 本当に今更：：」

ユキとユエの言葉に苦笑いをするハジメ。真つ直ぐハジメを見つめてくるユエに、ユエのふわふわな髪を優しく撫でるハジメ。そんな二人を見ながらユキはさらに二人を守ろうと決意する。

「たとえ何が来ようと関係ない。勝つのは俺たちだ。全てなぎ倒して、世界を越えよう」
(ガイア、必ず迎えに行く。待っていてくれ……)

——ええ、待ってるわ——

どこからかガイアの声が聞こえた気がして、ユキは思わず苦笑してしまった。

ユキの言葉にハジメとユエは強くうなずき、

「……よし。じゃあ、行こう」

「おう！」

「んっ！」

魔法陣が光り輝き、三人を包んでいく……

幕間 帝国と王女と勇者達 前編

ユキたちが最後の試練を乗り越えた頃、勇者一行は、迷宮攻略を一時中断しハイリヒ王国に戻っていた。

道順がわかっている今までの階層と異なり、完全な探索攻略になるため、攻略速度が一気に落ちたこと、また、魔物の強さも一筋縄では行かなくなってきたため、メンバーの疲労が激しいことから攻略を一時中断して休養を取るべきという結論に至った。

もつとも、休養だけなら宿場町ホルアドでもよかったが、ヘルシャー帝国から勇者一行に会うために使者が来るのだという。

元々、エヒト神による「神託」がなされてから光輝たちが召喚されるまでほとんど間がなく、同盟国である帝国に知らせが届く前に勇者召喚が行われ、召喚直後の顔合わせができなかったのだ。

もつとも、帝国側は勇者の存在を認めてはいなかった。帝国は三百年前にとある名を馳せた傭兵が建国した国であり、冒険者や傭兵の聖地とも言うべき完全実力主義の国である。そのため、突然現れ、力も示せていない相手を認めることをせず、興味すら持たなかったのである。

しかし、今回のオルクス大迷宮攻略で、記録上の最高記録である六十五層が突破されたという事実をもって帝国側も光輝たちに興味を持ったため、是非会ってみたいと知らせが来たのだ。

一行が乗った馬車が王宮で、全員が降車すると王宮の方から一人の少年が駆けてきた。十歳位の金髪碧眼の美少年、ハイリヒ王国王子ランデル・S・B・ハイリヒだ。

「香織！ よく帰った！ 待ちわびたぞ！」

ランデル殿下は大声で叫びながら一目散に香織の元へ駆け寄っていった。

実は、召喚された翌日か、香織はランデル殿下から猛烈なアプローチを受けていた。と言つても、香織から見れば小さい子に懐かれています程度にしか思っていない。もとより、香織は想いを寄せる相手ユキがすでに居るため、ランデル殿下の想いが実ることはないのだが……

「ランデル殿下。お久しぶりです」

そんな事実すら露知らず、香織の笑みにランデル殿下は一瞬で顔を真っ赤にしながら、それでも精一杯男らしい表情を作つてアプローチを掛ける。

「ああ、本当に久しぶりだな。お前が迷宮に行つてゐる間は生きた心地がしなかつたぞ。

怪我はしてないか？ 余がもつと強ければお前にこんなことさせないのに……」

「お気づかい下さりありがとうございます。ですが、私なら大丈夫ですよ？ 自分で望んでやっていることですから」

「いや、香織に戦いは似合わない。そ、その、ほら、もつとこう安全な仕事もあるだろう？」

「安全な仕事ですか？」

「う、うむ。例えば、侍女とかどうだ？ その、今なら余の専属にしてやってもいいぞ」
「侍女ですか？ いえ、すみません。私は治療師ですから……」

「な、なら医療院に入ればいい。迷宮なんて危険な場所や前線なんて行く必要ないだろう？」

医療院とは、国营の病院のことであり、王宮の直ぐ傍にある。つまり、ランデル殿下は香織と離れるのが嫌なのだ。

しかし、香織はいつかユキと再会した時のために強くなろうとしているのであって、ランデル殿下の提案は余計なものであった。

どうしようか悩む香織だが、そこに助け船が出された。

「ランデル。いい加減にしなさい。香織が困っているでしょう？」

「あ、姉上!? ……し、しかし」

「しかしではありません。皆さんお疲れなのに、こんな場所に引き止めて……相手のことを考えていないのは誰ですか？」

「うっ……で、ですが……」

「ランデル？」

「よ、用事を思い出しました！ 失礼します！」

逃げるように背を向けて去っていくランデル殿下。その背を見送りながら、第二王女リリアーナはため息をついた。

「はあ……まったく。数日後には姉上も帰国するとううの……」

香織、弟が失礼しました。代わってお詫び致しますわ」

リリアーナの謝罪でこの騒ぎ？ は収まった。

彼女の話によると、帝国の使者が到着するまであと数日かかるらしく、使者団と共に第一王女シェリアも帰国するらしい。

このあとに天ノ河^勇光輝^者のキザなセリフによる褒め言葉、ベヒモス討伐による歓声、愛子先生が「豊穰の女神」と呼ばれている話題による身悶えなどいろいろあったが、光輝たちはゆつくり迷宮攻略で疲弊した体を癒した。

そんな中でも、香織と雫はアヤメによる指導を続けていた。ユキたちに追い付けるように……

このハイリヒ王国にはシエリア・S・B・ハイリヒという第一王女がいる。

リリイやランデル殿下と同じ金髪碧眼の女性で、年齢は二十代。

通称、ハイリヒ王国最大戦力と言われ、金ランクの冒険者として活動していたこともある。王女としての立場に甘えることはなく、完全実力主義の帝国でもトップクラスの実力を誇る女性らしい。

なぜこんなことを言っているのか、それは今、八重殿様私がシエリア王女と手合わせをしているからだ。

事は王宮に戻った日から三日後、遂に帝国の使者が訪れた。

私たち、迷宮攻略に赴いたメンバー、王国の重鎮たち、イシユタル率いる司祭数人が謁見の間に勢ぞろいし、レッドカーペットの中央に帝国の使者が五人ほど、そしてシエリア王女が立ったままエリヒド陛下と向かい合っていた。

「使者殿、よく参られた。勇者方の至上の武勇、存分に確かめられるがよかろう。そして、シエリア。良く戻った」

「は、父上」

「陛下、この度は急な訪問の願い、聞き入れて下さり誠に感謝いたします。して、どなたが勇者様なのでしょう？」

「うむ、まずは紹介させて頂くか。光輝殿、前へ出てくれるか？」

「はい」

そこから、光輝の紹介が行われ、いつの間にか使者の護衛の一人と光輝が模擬戦をすることになっていた。

光輝の相手は、なんとも平凡そうな男だった。高すぎず低すぎない身長、特徴という特徴がなく、人ごみに紛れたらすぐ見失ってしまいそうな平凡な顔。一見すると全く強そうに見えない。でも、私はどこかその姿に違和感を感じていた。

そう思っていると、隣に立つアヤメさんが私と香織に問いかけてきた。

「あの男、あなたたちはどう見えますか？」

男は刃引きした大型の剣をだらんと無造作にぶら下げており、構えらしい構えもとつていなかった。

傍から見れば不真面目な、手を抜いているように見えるだろう。

「：： 一見すると強そうには見えません。でも、」

「光輝くんよりも、いえ、私たちよりも強いです。：：」

私と香織は、少なくとも光輝よりも強いという自負がある。ステータスで負けていても、覚悟や経験でずっと勝っていると思っている。でも、あの男の人には勝てない様に思ってしまう。

「：： そうですね。経験が違います。一対一ならあなた達でも勝てないでしょう」

そう話していると、模擬戦が始まっていた。結果は私たちの予想通り、光輝が一撃で吹き飛ばされた。その後も何度も挑んだものの、光輝の剣が当たることは一度もなかった。

「：： 話にならねえな」

そう言い、男の人は右の耳にしていたイヤリングを取った。すると、霧がかかったように男の人の周囲がボヤけ、それが晴れる頃には、全くの別人が現れた。

四十代位の野性味溢れる男だ。短く切り上げた銀髪に狼を連想させる鋭い碧眼、スマートでありながらその体は極限まで引き絞られたかのように筋肉がミッシリと詰まっているのが服越しでもわかる。

その姿を見た瞬間、周囲が一斉に喧騒に包まれた。

「ガ、ガハルド殿!」

「皇帝陛下!？」

そう、何を隠そうこの男の人が、ヘルシャー帝国現皇帝ガハルド・D・ヘルシャーその人だった。

「どういいうおつもりですか、ガハルド殿」

「これは、これはエリヒド殿。ろくな挨拶もせず済まなかった。ただな、どうせなら自分で確認した方が早いだろうと一芝居打たせてもらったのよ。今後の戦争に関わる重要なことだ。無礼は許して頂きたい」

謝罪すると言いながら、全く反省の色がないガハルド皇帝。それに溜息を吐きながら「もう良い」とかぶりを振るエリヒド陛下。

「それより、ベヒモスを倒したのはお前じゃないだろ。誰だ?」

「そ、それは…」

ガハルド皇帝の言葉に光輝は言葉を詰まらせて、チラツとこつちに視線を向ける。

「: : ハア。私たちですよ」

アヤメさんに目を向けて頷いたことを確認して、私と香織は一步前に出た。

「お前たちか: :。二人だけか?」

「ええ、そうですよ」

鋭い視線を私たちに向ける。

「…嘘じやなさそうだな。なら、俺と手合わせ」

「お待ちください、ガハルド皇帝。その手合わせ、私にやらせてもらえませんか」

ガハルド皇帝の言葉を遮り、シエリア王女が割り込んできた。無礼になるはずなのに、シエリア王女は遠慮せずに話を続ける。

「勇者さまと手合わせをしたではありませんか。ここは譲っていただけませんか？」

「…仕方ねえ。ここは譲ってやる」

ガハルド皇帝が折れ、私がシエリア王女と手合わせをすることになった。

幕間 帝国と王女と勇者達 後編

「よろしくね、八重樫雫さん」

「……お手柔らかにお願いします」

私は今、シエリア王女と刃を潰した武器を構えて向かい合っている。私は直剣を両手で構え、シエリア王女は曲剣を一本構え、もう一本腰に差している。本来は二刀流なのだろうか。

気さくな挨拶とは逆に、その構えから漂う気配はまさしく強者だ。

「先手は譲るわ。どこからでもかかってきなさい」

「……それでは、お言葉に甘えてッ」

この人は自分よりもはるかに強い。いや、ここにいる全員の中でも一番強いかもしれない。ガハルド皇帝の言葉を遮ったことから明らかだ。

様子見などしたところで効果は薄いだろう。ゆえに、ただ愚直に正面から仕掛ける。技能を使わず自分の出せる最高速で斬りかかる。

だが、それをシエリア王女は半歩ずらすことで回避する。間髪入れず続けた二撃三撃もまた同様。

「綺麗な太刀筋ね。努力の跡が見えるわ」

「シッ！」

それならば、と“縮地”とフェイントを使いながら斬りかかるが効果はない。“縮地”による移動は全て見切られて、フェイントにも一切かからない。

どうにかして罅迫り合いにまで持ち込むと、私にしか聞こえない声量で話しかけてきた。

「大抵の相手なら対応できない速さ、ベヒモスも切り裂ける攻撃。さすがアヤメが鍛えただけあるわ」

「… 知っているんですね。アヤメさんに鍛えてもらっていること」

「他にもいろいろ知ってるわよ？ あなた達とベヒモスの戦いとか、あなた達が強欲竜団と遭遇したこと、隊長が奈落に落ちたことも」

「ッ！ 知っていたならなんで！」

「あの人がその程度で死ぬわけじゃないじゃない。あなた達もそう思っているんじゃない？」

「それは…」

「私たちは隊長を信じているわ…。だからお願い、あなた達も信じて」

シエリア王女から掛けられる言葉には一切の迷いが無い。文字通り、心から信じてい

ることがわかる。

「とりあえず、そろそろ終わらせましょうか」

「ッ！」

——マズイツ——

そう思つて後ろに下がろうとしたときには遅かった。足を踏まれて後ろに下がれず、胸に強い衝撃が走り少し遅れて痛みが走つた。

「——かはっ」

肺から一気に酸素を吐き出す。たたらを踏むことで何とか耐えるが、

「——ッ」

一瞬で平衡感覚が奪われた。何かを打ち抜いたような左手の影が見えたため、おそらく脳を揺さぶられたのだろう。

先ほどの掌底は耐えることができたが二度目は耐えられず、私は膝から崩れ落ちた。

「——ッ」

「私の勝ちね」

首元に曲剣が添えられる。

決着は一瞬だった。私を含めてほとんどの人が呆然としている。王国最高戦力の呼び名は伊達はないということだろう。

私立ち上がるのを待つてからシエリア王女は

「正面からの攻撃からフェイントや『縮地』での攻撃に切り替える思い切りはよかったわ。

でも、あの程度で動揺しちゃいけないわよ」

「……はい、ありがとうございます」

悔しくないといえば嘘になる。でもシエリア王女の言っていることは事実だ。この程度で動揺しているようじゃ……

「あ、これからは私もあなたたちと同じパーティーに入るわ。よろしくね」

「はい……はい？」

そのままなし崩しで模擬戦は終わり、その後に予定されていた晚餐で帝国からも勇者を認めるとの言質をとることができ、一応、今回の訪問の目的は達成されたようだ。

さっきのシエリア王女の言葉は文字通りだったようで、本当に私たちと同じパーティーに入るようだった。曰く、

「同じパーティーの方が指導しやすいじゃない。女四人で丁度いいし。」

ああそれと、気軽にシエリアでいいわよ」

らしい。もちろん光輝がなにか言っていたがシエリアさんは一蹴していた。

その日の晩、私と香織はシエリアさんの部屋を訪れていた。

「そういえば、お二人はどうやってユキさんと出会ったんですか?」

ふと香織が二人にユキさんと会った時のことを聞いた。確かに気になる。アヤメさんにもそう言ったことを聞いたことはなかった。

「.:. そうですね。シエリアからどうぞ。ご主人様に会ったのはあなたが先でしょう」
「そうですね。」

私の場合、当時からしたらそんなに珍しくないわよ?

私が隊長に出会ったのは、隊長が東部戦線に配属されていた頃。当時の私、スラム出身なのよ。ええ、場所はちがうけど、隊長や総統閣下と同じね。人攫いマンハントに捕まっただけに売り飛ばされそうになってたところを、まだ兵卒だった隊長と総統閣下に救出されたの。その時の姿はがとてまかつこよくて帝国軍に志願したのよ。つまり、憧れね。もう一度あの人に会いたいっていう、よくあることよ。それで、隊長の元に配属されたのよ。

私は、そうですね。

シエリアとは逆に、当時の私は貴族だったんです。私の家、淡家は傲慢な性格が多い一族でして、私の姉はそれが特に顕著でした。まあ、あの時代では特に珍しくない選民思想だったんですが、私はそれが嫌で帝国軍に入隊しました。一種の家出ですね。それからしばらくして、淡家は改革の標的として肅清され、私はキリガクレに性を変えました。ご主人様に出会ったのは、淡家が肅清される少し前です。肅清の対象から外すために私を部下にしたらしいですね。

話を聞き終えた私と香織は一言も話すことができなかつた。それもそうだろう。ユキさんの人生を見てはいたが、それもあくまでユキさんだけだった。二人とも予想以上に壮絶な過去を背負っていたんだとはじめて知った。

「……ごめんなさい。そんな昔があるなんて」

ようやく言えた言葉は謝罪しかなかつた。気軽に聞いていいことじゃなかつたはずなのに、

「謝ることなんて何も無いわよ。その過去があつたから隊長に出会うことができたのよ」

「ええ、シエリアの言う通りです。後悔したことなんて一度もありません。

もし、それでも悪いと思つているなら強くなりなさい。あの人に認められるように、

「私たちもそうであったように」

「……はいー！」

次の日の朝、私たちは皇帝陛下一行を見送ることになった。用事はもう済んだ以上留まる理由もないということだ。本当にフットワークの軽い皇帝だ。

ちなみに、早朝訓練中どこを気に入っただのか、ガハルド皇帝が私を愛人に誘ったり、香織とシエリアさんが「私たちの物」発言をしたりとハプニングもあつたが、私自身も丁重にお断りしておいた。

一章人物詳細・設定補足

・ユキ・ロスリック

(天津悠姫)

本作の主人公。八重樫雫の幼馴染。本名は天津悠姫。

5歳の時に大破壊カタストロフの影響で発生した飛行機事故によって次元の歪みに巻き込まれ、新西暦に飛ばされる。

死に戻りという現象の中心にいる一人であり、ユキが死亡するたびに新西暦の時間がユキが転移した時間まで巻き戻る。そのため、数千、数万単位での人生を経験している。何回も繰り返している中でヴァルゼライド、アルバートと出会いアドラー軍に入隊する。

ヴァルゼライドがカグツチに会った同時刻にガイアに出会い、ヴァルゼライドに続く2番目の星辰エスベラント体感応奏者になる。

後に星辰戦争ギガントマキアを発生させヴァルゼライドを相手に戦い、勝利したのち死亡、死に戻りによって幼少期から繰り返す。

星辰戦争ギガントマキアに敗北し死亡した後、トータスに地球組と同時に召喚される。記憶は直前の

死亡した時点だが、肉体は20歳頃まで若返っている。

・大地母神^{ガイア}

本作のメインヒロイン。

西暦の日本で製造された人造惑星の一体。^{プラネテス}カグツチのような戦闘兵器ではなく、地球再生用人造惑星として製造されテラフォーミングシステムを保有している。

テラフォーミングシステムとは、第五次世界大戦によって傷ついた地球を再生するためのシステムであり、エネルギー等の問題さえ解決すればそれこそ人類誕生前の地球に戻すこともできる。

カグツチと同じく大破壊^{カタストロフ}の被害を受けたため自身とカグツチの修復を行いながら協力者を待ち続け、カグツチとヴァルゼライドの邂逅と同時にユキと出会う。

死に戻りの中心にいる一人であり、ユキの死と同時に死に戻りをしている。

星辰戦争の敗北後、トータスに起動前の状態で転移し当時の解放者たちに起動させられる。その後は解放者たちと共に戦うが敗北する。現在は神山の迷宮で本体の修復を行っている。

・アヤメ・キリガクレ

ユキに仕える部下の一人。

キリガクレと名乗っているが、本来はキリガクレではなく、貴種の淡家の人間。淡家のような降るまいに反対し軍へ入隊。ユキの部下として配属され忠誠を誓う。肅清によつて淡家の唯一の生き残りとなつたが、家名を捨てキリガクレになる。アスクレピオスの大虐殺によつて死亡。

トータスに転生し、現在はハイリヒ王国王宮のメイドとして、普段はシエリアに仕えている。

メイドになる前はシエリア、デイルグの三人と冒険者として活動しており、金ランク「幻姫」と呼ばれている。

・シエリア・ハム

(シエリア・S・B・ハイリヒ)

ユキに仕える部下の一人。

新西暦で帝都のスラムで生活していたが、人攫いに遭つたときにユキによつて救出、ユキに憧れ軍へ入隊した。アスクレピオスの大虐殺によつて死亡。

転生後の名前はシエリア・S・B・ハイリヒ。

トータスにハイリヒ王国王女の長女として転生し、アヤメ、デイルグの三人と冒険者

として活動しており、金ランク「光姫」と呼ばれている。「シエリア・ハム」は冒険者として活動するときの名前として使用している。

・デイルグ・ロートレク

ユキに仕える部下の一人。アスクレピオスの大虐殺によって死亡。

トータスに転生し、アヤメ、シエリアの三人と冒険者として活動しており、金ランク「不落」と呼ばれている。

・事故

原因不明の飛行機事故であり、現代最大の怪奇事件。

ある旅客機が原因不明の異常事態により不時着、乗客の一人が行方不明になった。誰かが外に出た形跡もなく、シートベルトは着けられたままで、まるで神隠しに遭ったようだと報道された。

現在でも何も判明しておらず、現代最大の怪奇事件だと言われている。

実際の原因は現代より未来の西暦末期、大破壊カガストロフによって発生した空間振動の余波によるもので、偶然天津悠姫一人だけが未来へ飛ばされた。

・死に戻り

ユキ（悠姫）が新西暦に飛ばされた時から起きている現象。アマテラス第二太陽含む新西暦の時そのものが戻っており、まさしく神の御業ともいふべきもの。

新西暦1005年が起点になっており、ユキ（悠姫）が死亡するたびに新西暦1005年まで時間が巻き戻る。ユキ（悠姫）とガイアだけは記憶が保持されるため、目的の達成まで何度も繰り返すことで無数とも言える経験をしてきている。

ギガントマキア
・星辰戦争

ユキとガイアが計画し起こした戦いであり、ユキが聖戦と称する通り、新西暦におけるユキの最終目的。

「ヴァルゼライドとカグツチを倒し、世界の歪みを正す」と言っているが、ギガントマキア星辰戦争の終わりはユキの敗北であり、ユキの発言と大きな矛盾が生じている。

第二章

第十六話 大峽谷と残念ウサギ

魔法陣の輝きに包まれ、光が収まって視界に映ったものは…

洞窟だった

「なんでやねん」

ハジメが思わず半目になって突っ込みを入れていた。

「仮にも反逆者の住処直通の道だからな。隠されてるのは当然だろ」

「そ、そうか。確かにそうだな」

相当浮かれていたらしい。まあ当然だ。ハジメや俺にとつては数ヶ月、ユエにとつては実に三百年ぶりの地上なのだから、期待してしまっただろう。

とりあえず先に進むことにする。緑光石の輝きもなく真つ暗な洞窟であるため、夜目がきかない俺はハジメとユエの後ろについて行く。

途中、幾つか封印された扉やトラップがあつたが、オルクスの指輪が反応して解除されていく。そして、遂に外の光を見つけた。

ハジメとユエは、それを見つけた瞬間、思わず立ち止まりお互いに顔を見合わせた。

それから互いにニツと笑みを浮かべ、同時に求めた光に向かって駆け出した。俺は苦笑しながら歩いてそのあとを追った。

【ライセン大峽谷】

地上の人間にとつて、そこは地獄にして処刑場だ。断崖の下はほとんど魔法が使えず、にもかかわらず多数の強力にして凶悪な魔物が生息する。深さの平均は一・二キロメートル、幅は九百メートルから最大八キロメートル、西の【グリュューエン大砂漠】から東の【ハルツィナ樹海】まで大陸を南北に分断する。

俺たちは、そのライセン大峽谷の谷底にある洞窟の入口にいた。地の底とはいえ頭上の太陽は燦々と暖かな光を降り注ぎ、大地の匂いが混じった風が鼻腔をくすぐる。たとえどんな場所だろうと、確かにそこは地上だった。呆然と頭上の太陽を仰ぎ見ていたハジメとユエの表情が次第に笑みを作る。

「……戻って来たんだな……」

「……んっ」

「……ああ、俺たちは間違いないく戻ってきたんだ」

ようやく実感が湧いたのか、太陽から視線を逸らすとハジメとユエはお互い見つめ合

い、

「よっしやあああ——!! 戻ってきたぞ、この野郎おおお——!!」

「んっ——!!」

そして思いっきり抱きしめ合ってくる廻る。しばらくの間、そこには二人の笑い声が響き渡っていた。ケラケラ、クスクス笑い合う二人を見つめる俺は、近づいてくる気配を感じて発動体を抜きながら声を掛ける。

「嬉しいのは分かるが、敵だ。準備しろ」

周囲を見渡すと魔物に囲まれていた。

「まったく無粋なヤツらだ。まあいい、新武器の試し打ちさせてもらうぜ」

ハジメは新生ドンナー・シユラークを抜き、その流れのまま魔物を打ち抜いた。その一発を皮切りにユキも魔物の群れに飛び込む。

異常というレベルをはるかに超えたステータスを持つ二人を相手にしている以上、もはや殲滅というよりただの蹂躪だった。ハジメの銃撃は魔物の頭部を容易く吹き飛ばし、ユキに一閃は首や胴体を斬り落としていく。三分もかからないうちに辺り一面は魔物の骸で埋め尽くされていた。

ドンナー・シユラークを太もものホルスターにしまったハジメは、首を僅かに傾げながら周囲の死体の山を見やる。

「：：　なんか弱すぎねえか？　ここの魔物」

「奈落の魔物や俺たちが強すぎるだけだ。奈落クラスの強さの魔物に魔法も使えないなんて、流石にバランスがおかしすぎる」

オルクス大迷宮を踏破した際に、オスカーは「試練を越えて」と言っていた。つまり各迷宮は試練なのだ。そして、試練であるというならば、おそらく目的とも言えるコンセプトが存在する筈だ。推察でしかないが、オルクス大迷宮が「強い魔物との戦闘を経験する」がコンセプトなら、ライセン大峡谷は「魔法が使えない状況での戦闘」だろう。

正確には、魔法が使えないというより魔力が分解され散らされてしまうのである。もちろん、ユエの魔法も例外ではない。力づくで発動させれば使えないこともないらしいが、およそ十倍ほどの魔力が必要になり射程も相当短くなるらしい。

「とりあえず、西の砂漠側より東の樹海側を探索しよう。そっちの方が街に近いだろう」
「おう」

「ん」

俺の提案に特に反対が上らない。この絶壁を上ることもできなくはないだろうが、どのみち大峡谷の探索は必要なのだから反対する理由もないのだろう。

俺とハジメは「宝物庫」から魔力駆動二輪を取り出す。俺は一人で、ハジメの後ろは

ユエが横乗りする。

ライセン大峽谷は基本的に東西に真つ直ぐ伸びた断崖だ。そのため脇道などはほとんどなく道なりに進めば迷うことなく樹海に到着する。そのため迷う心配が無く、迷宮への入口らしき場所がないか注意しつつ、軽快に魔力駆動二輪を走らせていく。車体底部の錬成機構が谷底の悪路を整地しながら進むので実に快適だ。

しばらく走らせていくと、それほど遠くない場所で魔物の咆哮が聞こえてきた。魔力駆動二輪を走らせ突き出した崖を回り込むと、双頭のテイラノサウルスモドキとその足元を半泣きで逃げ惑うウサミミを生やした少女がいた。

「…何だあれ？」

「…兎人族？」

どうやら兎人族の少女らしい。だが、兎人族が此処にいるのはおかしい。王宮で調べていた時に得た情報だと、亜人族は基本的にハルツィナ樹海に住んでいるはずだ。

「なんでこんなところに？ 兎人族って谷底に住処なのか？」

「犯罪者として落とされたとか？ 処刑の方法としてあつたよな？」

「ああ、なるほど。それならば納得だ」

「…悪ウサギ？」

大昔にはライセン大峽谷に罪人を突き落とすという処刑方法があつたらしいが、ハジ

メはさほど興味がないらしい。どう見ても見捨てる気満々だった。

「やっどみづけまじだ〜！だすけでくだぎ〜い！」

やっど見つけた。まるで俺たちがここに来ることを知っていたような言い方だ。

「うわ、こつち来たよ…」

「…迷惑」

それでもハジメに助ける気はないらしくユエもまた同じ。魔力駆動二輪を反転させて去ろうとする。

「…はあ、仕方ないか」

だが、仮にも俺は元軍人。敵でない以上見捨てるという選択はさすがにない。それに試したいこともある。

「身体強化」を使って接近し、テイラノサウルスモドキの双頭を斬り落とす。どうやら魔力を外に放出しなければ問題ないらしい。

兎人族の少女の掴みハジメの方へ投げ飛ばす。

「ふえ？」

「ちよ、おまー」

ハジメが慌てながらも少女を受け止めたのを確認し、テイラノサウルスモドキの後方へ向かう。まだ後ろの方に追いかけている魔物がいるらしく、試すには丁度いいかと

アステリズム
星辰光を輝照させる。

トータスにおいて、星辰光アステリズムは一種の魔法に分類されるらしい。より正確には、複合魔法になる。星辰ほしの特性、異能に当たる魔法と身体強化の魔法の二つが合わさることで、トータスでの星辰光アステリズムは成り立つ。

そして、このライセン大峽谷では魔力が分解、身体の外に放出された魔力が分解される性質がある。これが星辰光アステリズムに当てはめるとどうなるのか、試したいこととはその事だ。

結果から言うならば、想定どおりではあつた。身体能力は上がったが、肝心の能力の燃費が悪い。維持性の低さもあり、おそらく数分、場合によつては一分で星辰光アステリズムが解けるだろう。

むやみやたらと星辰を使うわけにもいかない。その事が分かつただけで十分だろう。魔物を掃討しはじめたちの元へ戻ると、先ほどの少女がはじめに縋り付いているところだった。

「先程は助けて頂きありがとうございます！ ございました！ 私は兎人族ハウリアの一人、シアといえます！ 取り敢えず私の仲間も助けてください！」

さつきまで死にかけていたというのに、なかなか凶太い神経の持ち主のようだ。

これが、新しい仲間になるシア・ハウリアとの出会いであつた。

第十七話 シア・ハウリアの懇願

事情はシアを魔物から助け出したあとに聞いた。

シアから聞いた話を要約すると、

彼女らハウリア族と名乗る兎人族は〔ハルツィナ樹海〕にて数百人規模の集落を作りひっそりと暮らしていた。とても温厚な種族で他の亜人族に比べてスペックが低く、同じ亜人族の中でも格下として見下されている。

そんな中、シア・ハウリアという異端児が誕生した。亜人族は本来魔力を持つておらず、それ故に人間族、魔人族両方の種族から差別の対象とされている。そのなかでシアは魔力を持つて生まれてきた。さらに直接魔力を操ることができ、加えて固有魔法「未来視」まで使える。当然だが、本来なら迫害の対象になる。しかし、基本的に温厚で家族の情が深いハウリア族はシアを十六年間もの間ひっそりと育ててきた。だが、先日とうとうばれてしまい、樹海を出ることになった。

山の幸があれば生きていけると考えて山脈地域を目指すことにしたが、樹海を出て直ぐに偶然帝国兵に見つかってしまい南に逃げるしかなかった。温厚なハウリア族と訓練された帝国兵、比べるまでもないほどの戦力差があるため、気がつけば半数以上が捕

とらえられ、それでも必死に逃げ続け、苦肉の策として峡谷に逃げ込むと今度は魔物に襲われてしまう。そこで助けを呼んで来ようとシア一人で飛び出して、「未来視」を頼りにユキたちの元まで逃げてきた、ということらしい。

「気づけば六十人はいた家族も、今は四十人程しかいません。このままでは全滅です。どうか助けてください」

悲痛そうな表情を浮かべ、シアは三人に頭を下げる。鬱陶しそうな、実際に鬱陶しく感じているハジメがユキのほうを向く。助けたんだから何とかしろ、と。

「…事情は分かった。だけど、はい了解しました、なんて簡単には言えない」

頭を下げたままユキの言葉にピクリと反応しながらシアは話を聞く。

「俺は元軍人だ。だから助けて、と言われれば助けてやりたい。だが、その後はどうする？ 自分の身を守れないような者たち、しかも約四十人をいつまで守ればいい？ 端的に言つてメリットがない」

単純に他国の問題に容易に首を突っ込みたくない、というのもある。今の自分たちは後ろ盾はなく、いつ異端者としてトータス中に手配書が回ってもおかしくない立場だ。むやみに自分たちの首を絞めるようなことはしたくない。

「…わかつています。でも、私たちの希望はあなたたちしかないんです。私にできることなら何でもします。お願いします」

さて、どうしたものか、ユキが悩んでいると、

「…助けてください。ディルグ兄さま」

小声でシアが呟く。星^{エスベラント}辰奏者であるユキにはしっかりと聞こえ、

「…ハジメ、ユキ、連れて行こう」

「ユエ?」

突然のユエの言葉にハジメ訝しそうにする。

「…樹海の案内に使う」

「あゝ」

確かに、樹海は亜人族でなければ必ず迷うといわれているため、兎人族の案内があるなら心強い。だが、兎人族が抱える厄介ことも多い。

「…賛成だ」

今度はユキがユエの言葉に賛同した。シアの呟きで何やら考え事をしていたようだったが話はしっかりと聞いていたようで、

「案内は確かに必要だろう。自分たちから進んで案内してくれるなら、そのほうがいい。

しかしまあ、世界は広いようで狭いか。なるほど面白い」

ユキはユキで別の理由がありそうだが、ハジメとしては二人が良いというならまあ良いか、と納得する。

そして、新たにシアを含め四人は兎人族救出へと向かうのだった。

「で、どういう風の吹き回しだよ」

四人になつたため、魔道四輪に変えて兎人族の場所へと向かう。道中、ハジメが運転中のユキに先ほどのことを尋ねた。

「理由はさつき言った通りさ。あとはまあ、」

と、後ろでユエに三人のこれまでのことを聞いているシアに、

「なあ、シア。さつき、デイルグ兄さまって呟いてたのをきいたんだが」

「は、はい。∴私の兄です。私が小さいころまで一緒に暮らしていたんですが、ある日突然村を出て行ったきり戻ってきていないんです」

話を聞くと、シアには年の離れた兄がいて、突然村を出て行ったきり行方不明らしい。温厚なハウリアとしては珍しく好戦的な性格で、逃げ続けることしかないハウリアに不満を持っていたという。

デイルグという名前からして、おそらくユキの部下の一人、デイルグ・ロートレクのことだろう。世界が広いようで狭いとはこのことだった。アヤメの話だと金ランク冒険者として活動しているらしいので、そこまで心配するようなことではないだろうが、

そのことを知らないシアからしたら何者かに捕まっているか、死んでいるかと思ってしまうだろう。

「出て行ったとしても、私たちにとってはかけがえのない家族なんです。でも、きつともう」

「家族だつていうなら信じてやれよ。希望があるって考えるだけで、何とかなるって思えんだぞ」

シアはハジメの言葉に黙ってしまうが、すぐに遠くから咆哮のようなものが聞こえた。

「ッ！ 魔物の声！ 父様たちです！」

「わかつてる、飛ばすぞ」

ユキはアクセルを踏み込み、一気にスピードを上げる。同時に、いつでも飛び出せるようにハジメはドンナーを構える。

それから約二分、飛竜のような魔物ハイベリアに今まさに襲われようとしているハウリア族のもとにたどり着いた。

第十八話 越える一線

近づいてくるユキたちに、まだ兎人族とハイベリアは気付いていない。

ならば先手必勝。ハジメの銃撃がハイベリアの頭部を打ち抜き、悲鳴とともにハイベリアは今まさに喰らおうとした兎人族の脇へ崩れ落ちる。

呆然とする兎人族たちを後目に、先行したハジメがハイベリアの群れへ飛び込み蹂躪する。同時、魔道四輪が兎人族をハイベリアから守るように停車し、今度はユキがハイベリアの群れに切り込む。

「い、いったいなにが？」

再び家族を失おうという瞬間、ハイベリアが突然倒れ謎の男や謎の物体ハジメやらと急展開に頭が追いつかない。それこそ、上空を飛び交うハイベリアが仲間の死に咆哮しても、そのことにも気が付かないほどだ。

自分たちに襲い掛かっていたハイベリアが次々と倒されていく様を呆然と眺めていると、目の前の魔道四輪から今朝がた姿を消した仲間が飛び出してきた。

「みんな、助けを呼んできましたよ」

『シア!?!』

「シア、飛び出さない」

共に金髪の少女が出てくるが、それよりもシアが生きていたことが嬉しく、シアに兎人族が集まる。

「シア！ 無事だったのか！」

「父様！」

兎人族たちの中から初老の男性が真つ先に飛び出してくる。どうやらシアの父親のようだが、現状では不用心としか言いようがない。

一人飛び出してきたシアの父親を狙ってハイベリアが急降下してくるが——
「いきなり飛び出るな、危険だろうが」

ユキによって首と翼が胴体から切り離される。すぐに残りのハイベリアに向かうもののすぐの片が付き、ハジメと共に兎人族のもとに向かうと、シアと話は終わったようにユキたちの方へ向き直る。

「ユキ殿とハジメ殿、でよろしいでしょうか。私はカム、ハウリア族の長です。此度はありがとうございました、シアのみならず我々まで助けていただいて。しかも脱出まで助力してくださいませんか……」

カムと名乗った兎人族の族長が深々と頭を下げ、続くように残りの兎人族も頭を下げる。

「そういう契約だからな。君たちを助ける代わりに樹海の案内をしてもらおう、それがシアとつけた条件だ。聞いているな？」

そこからは予定調和の如く話が進んだ。

ユキたちは家族シニアを助けてくれた。ならばそのお礼はしなければならぬと、むしろ進んで案内役を一族総出で買って出た。

こうして、シアからの救援による兎人族の救出劇は一旦幕を閉じた。

四人から一気に四十六人に増えた一行は、とりあえずライセン大峽谷の出口を目指し歩を進めた。

道中、兎人族を狙って幾度か魔物に襲われるものの、次の瞬間にはハジメの銃撃によつて撃ち落とされていく。試し斬りとばかりにユキが斬り込むこともあったが、当然として一匹たりとも生き残った魔物はいなかった。

そうしている間に、ようやくライセン大峽谷から脱出することが出来る階段が見えてきた。

「帝国兵はまだいるでしょうか？」

「どうだろうな、流石に全滅したと思つて帰つたんじゃないか」

シアの不安な声にハジメは気だるげに返す。

「そ、その、もし、まだ帝国兵がいたら……ハジメさんやユキさんは……どうするのですか?」

「? どうするつて何が?」

「当然、斬るが?」

ハジメはピントきていないようだったが、ユキは一切の迷い無く斬ると言った。

「え? で、ですが、」

「あくなるほど。人間、というより同族を相手にどうすんのかつてことか」

その返答はさすがに予想外だったようで、シアも驚きを隠せず、ようやくどういう意図の質問なのかハジメも気が付いた。

「俺たちが帝国兵をどうするのか、未来視でもう見てるんだろ?」

「はい、帝国兵とお二人が相對して……」

「分かつてるじゃないか。問題ない、これでも割り切つてるからな」

帝国からハウリアを護る以上、ユキたちは帝国に、人間族に敵対すると認識されてもおかしくない。

で、だから?

「敵だから、生きるために、或いはあいつが気に入らないから。大義名分なんて極論その程度だ。だから同族でも戦争をする。」

「つまりはそういうことだ。必要だから殺す。それだけだ」

「な、なるほど」

「そういう話をしながら階段を登りきると——」

「おいおい、マジかよ。生き残つてやがったのか。隊長の命令だから仕方なく残つてただけなんだがなあ、こりやあ、いい土産ができそうだ」

「三十人の帝国兵がたむろしていた。周りには大型の馬車数台と、野営跡が残つている。全員がカーキ色の軍服らしき衣服を纏つており、剣や槍、盾を携えており、ユキたちを見るなり驚いた表情を見せた。」

「だが、それも一瞬のこと。直ぐに喜色を浮かべ、品定めでもするように兎人族を見渡した。特に女性の兎人族には下卑た視線を向けている。」

「——ハジメ、いいな？」

「ああ、大丈夫だ」

「短く、小声で行われたやり取り。それは、ハジメが人を殺せるのかということ。ユキはともかく、ハジメは人を殺したことなどない。とはいえ、これから旅をするには不殺を貫くことは不可能だ。」

だが決断はすでに済ませた、だからあとは一線を越えるだけ。

「ああ？ お前ら誰だ？ 兎人族……じゃあねえよな？」

「ああ、人間族だ」

「はあ？ なんで人間が兎人族と一緒にいるんだ？ しかも峡谷から。ああ、もしかして奴隷商か？ 情報掴んで追っかけたとか？ そいつあまた商売魂がたくましいねえ。まあ、いいや。そいつら皆、国で引き取るから置いていけ」

「断る」

「……今、何て言った？」

「断ると言った。彼ら兎人族の身は俺たちが保証している。それに、仮に奴隷として扱っても、所有権は俺たちにある。諦めて国に帰るといい。ああそれとも、力の差が理解できないほど脳が空っぽなのか、ヘルジャー帝国の帝国兵様は」

容赦ないユキの言葉に小隊長の額に青筋が浮かぶ。が、後ろで立っているユエの姿を見たときに、再び下卑た表情になる。

「ああなるほど、よおしくわかった。てめえらが唯の世間知らず糞ガキだつてことがな。ちよいと世の中の厳しさってヤツを教えてやる。くつくつく、そっちの嬢ちゃんえらい別嬪じゃねえか。てめえらの四肢を切り落し——」

話の途中だったが、破裂音ともに小隊長の頭部が消し飛び、残った小隊長の体が後ろ

に倒れる。

それを皮切りにユキも帝国兵の後方へ一気に斬りかかる。さすが訓練された帝国兵と言ったところか、次々に武器を構え後衛へ指示を出す。もう遅い。

「て、てめえら。こんなことして分かってんのか！俺たちは——」
「黙れ」

帝国兵が何かを言おうとしたが、ユキの一刀により首と胴体が斬り離される。

「己の我欲を満たすことしか真がない蛆虫が」

「貴様ら風情が帝国兵ぐんじんを名乗るなど烏滸バンデットがましい」

「消えろ、いや死ね、盗賊。惨めに泣き叫びながら朽ち果てろ」

時間にして十数秒、三十人いた帝国兵は一人を残して肉塊へと姿を変えていた。

残った一人も戦意などすでになく、恐怖で泣きじやくりながら尻もちをついて後ろに下がり懇願するばかりだった。

「た、頼む！殺さないでくれ！な、何でもするから！頼む！」

「状況を理解できていないようだな。」

他の兎人族はどうなった？ 結構な数が居たはずだ……全部、帝国に移送済みか？

「は、話せば殺さな——ぎゃ」

「意見できる立場じゃないと言ったばかりだろうが。本当に脳が空のようだな」

ユキが帝国兵の頭部を踏みつけ徐々に力を加える。帝国兵の悲鳴と共に、何かにひびが入るような音が鳴り響く。

その状況にハジメですら息を飲み誰もが言葉を発しない中、悲鳴とひび割れる音だけがリアルに響いていた。

「た、多分、全部移送済みだと思う。人数は絞ったから……」

人数は絞った。つまり老人や売れそうにない傭人族は殺した、ということだ……

「……屑が」

さらに足に力を入れ、ひび割れる音が加速する。

「た、助けてくれ！ な、何でも話す！ 帝国のことだつて話す！ だ、だから、」

「今、俺たちの情報が帝国に知れ渡るのはまずいんだ。死人に口無し、目撃者は少ない方がいい。今なら魔物に襲われて全滅した、そういうことになるだろう。」

まあ、ようするにさ——」

「——顔見られたから、死んでくれ」

そのまま柘榴の如く頭部を踏み潰す。ハウリアから悲鳴が上がるがユキは微動だにしない。

そのときのユキの表情を見たハジメ曰く、感情のない能面のようだったという。

第十九話 ハルツィナ樹海

ユキが最後の帝国兵を容赦なく踏み潰し、その場には一時の静寂が漂っていた。「あ、あのさっきの人は見逃してあげても良かったのでは……」

シアが絞り出すように問いかける。ユキが振り返ると兎人族が恐怖の眼で見ている。「……さっき言ったとおりだ。今、俺たちの情報が帝国に知られるのはまずいんだ。

三十人の帝国兵が二人の男に全滅させられた、なんて笑いものだ。帝国は完全実力主義、嘗められたら終わりなんだよ。

だから次は部隊ではなく軍になってハルツィナ樹海に押し寄せてくる。それでもかまわないのか？」

「うっ」

もしもハルツィナ樹海に帝国軍が押し寄せてた場合、それは兎人族だけでなく亜人族全体の問題になる。そのことを想像し、シアたちは一斉に顔を伏せる。

「……そもそも、守られているだけのあなた達がそんな目をハジメたちに向けるのはお門違い」

そこにユエが怒りを宿しながら兎人族たちを睨みつける。助けを求め、実際に助けら

れておきながら恐怖の感情を抱くのはお門違いというものだろう。

「申し訳ない。別に、あなた方に含むところがあるわけではないのだ。ただ、こういう争いに我らは慣れておらんのでな……少々、驚いただけなのです」

「構わないさ、それだけのことをしている自覚はある」

一行は帝国兵が残した馬車を魔道四輪で牽引してハルツィナ樹海へ向かっていた。道中シアが奈落での話を聞いて号泣したり、ついていく宣言したりしたが、ユキは終始無言だった。別にユキを恐れているであろうシアに気を遣って黙っている訳じゃない。単純に、今のユキにはその余裕がない。

トータスに召喚されてから度々、ユキは昔の夢を視る。加えて、オルクス大迷宮を攻略したときから頻度が増している。最近は夢どころか、こうした平時でも脳裏によぎることがある。

思えばトータスに召喚されてから自分の体に妙なことが起きている。記憶に対して肉体的年齢が若返っていること、魔物の肉を食しても異常が出ないこと、レベルの最大

「——い、おい！ ユキ！」

「——ハジメ？」

気が付けば既にハルツイナ樹海に到達しており、どうやらユキの様子がおかしいと感じたハジメが呼び掛けているらしい。周囲を見渡してみればユエとシア、窓の外からは他のハウリア一族も心配そうな表情を浮かべている。

「心配をかけたな、すまない。もう大丈夫だ、行こう」

「ユキ」

窓に張り付いていたハウリアを退けながら外に出る。これ以上心配をかけまいと気丈に振るって見せて先へ進む。その背中にハジメは呼び止めようとしたが言葉が出ず、ユキはそのまま進んで行きハウリアの数人もその後続いた。

一行は徒歩で樹海の中を進んでいく。当然樹海にも魔物がいるものの、ユキ、ハジメ、ユエの三人に手も足も出るわけがなく、出てきた瞬間には物言わぬ骸と化す。それから数時間、警備隊の虎人族に見つかり一触即発の状態になるが力の差を見せつけることで解決。亜人族の長老の一人と会うことになった。アルフレリック・ハイピストと名乗っ

た森人族の長老は、ユキの名前を聞いたとき

「おぬしが、あの。本当に……」

と、驚いていた。どうやら亜人国フェアベルゲンの長老には代々継がれる伝承があり、その中には解放者のほかにもユキの名前もあるらしい。とは言っても、ユキたちにはそれほど驚きはない。オスカーはユキのことを知っていたのだから、解放者たち全員がユキのことを知っていてもおかしくはない。ユキ・ロスリックという名前が残されているくらいなのだから、解放者たちは相当怪物ユキに期待しているのだろう。

その後、真の迷宮であろう大樹ウーア・アルトの元に行くには一定周期を待たなくてはならないらしく、次の周期である10日後になるまでフェアベルゲン近郊に留まることになった。

それから10日間何をしているのかというと、ハウリアが今後生きていけるようにハジメがハウリア改造計画れんけいを、ユエがシアに特訓をすることになった。

では、ユキは何をしているのかというと、基本的にハジメたちから離れ周囲の樹海の探索をしていた。帝国兵との一件が尾を引いているらしく、ハウリアの大半がユキを見る目には恐れが混じっていたため、それでは訓練にはならないと判断した。

そうして遠くからハウリアの訓練を見ているユキに近づいている影があった。その

ことに驚く様子もなく、ユキは気楽に声をかけた。

「…みんなに会わなくていいのか？ 家族だろ、ハウリアは」

「…まだ会うべきじゃない。俺は一族を捨てたのだから」

返答したのは兎人族の男。数年前に一族を飛び出したという、

「久しぶりだな、デイルグ。また会えて嬉しいよ」

デイルグ・ロートレク、いやデル・ハウリア。トータスに転生したユキの部下の一人であり、シアの実兄になる。筋肉隆々の体にウサミミが生えているという一見シユールな見た目をしているが、それでも金ランク冒険者でもある一流の実力者の一角になる。

「隊長も変わらないな。…いや若返ってるか」

「気にするな」

元隊長と元部下という上下関係であるものの、その距離感は気楽なものだった。

同じ男同士ということもあり、アヤマやシエリアとは話せないようなことも話せるので当然ではある。

近況報告もかねて談笑する二人の話題は、ハウリアの訓練へと移っていた。

「ハウリアの様子を見てすぐに分かった、お前がハウリアを出て行った理由」

「…ああ、優し過ぎるといふか、温厚すぎるといふか」

フェアベルゲンに到達する前の段階でハウリアは温厚すぎる一族だとは思っていた

が、訓練を始めてからは想定以上に温厚すぎる一族ということが顕著に表れた。

小さな魔物一匹倒すたびに行われるドラマ、お花さんや虫さんをつぶしてしまわないように気を付ける等々。ふざけているのかと問いただしたくなる光景だが、彼らは至極真剣にやっていた。その結果ハジメがぶちぎれて、今では超スパルタ訓練に変貌している。

「…シアはいいのか？ 会いたがってたが」

「まだその時じゃない」

「…いつか会うつもりならいいさ」

「——師匠せんせい」

「時間だな…」

遠くからユキを呼ぶ声が聞こえてくる。同時にデイルグは立ち上がり、この場を離れようとする。たとえシアではなくともハウリアに会う気はないらしい。去り際に、

「ではまた、妹を頼む」

「ああ、またな」

お互いに一言交わした後、デイルグはこの場を去った。代わりに現れたのは二人のハウリアの子供だった。少女はメイ・ハウリア、少年はロン・ハウリア。いまだユキを怖がるハウリアが多い中で、数少ないユキに平然と接する、ハジメよりユキに訓練を付け

てもらおうことを望んだ二人だ。ハウリアに漏れ無く温厚な性格だったが、他種族や魔物から家族を守りたいという一心で殻を破った前途有望な二人。おそらく道を違えることもないだろう。

「あれ、誰かいたんですか？」

「…いや？ それより、休憩は終わったのか？」

「はい！」

太刀を片手に立ち上がり、ユキは二人のもとへ歩いていく。そしてハジメとは違う方面による特訓が再開された。基本戦闘力が低いため、二人での連携を前提として特訓を付けていく。こうして、周期が訪れるまでの10日間が過ぎていった。

第二十話 豹変のハウリア

「怯えろ！ 竦め！」

「ヒヤッハー！ 悲鳴が心地いいぜえー！」

「狙った獲物は逃がさねえ、「必滅」の名に懸けてな！」

「いや、こうはならないだろ」

「あの優しかった、お花大好き。パールくんが……」

「シア姉、みんなが怖い……」

ディルグとの再会后、ユキたち三人はハジメの訓練が超スパルタ訓練に変わったところまでは見届け、それから残りの日数を三人での訓練に費やした。そしてハジメたちと合流したときに言葉、ちなみにユキ、ロン、メイの順である。

ユキたちの目に最初に入ったのは、文字通り精神的改造がなされた兎人族であった。ユキが知っている兎人族は少なくとも、あのような世紀末に生きているようなオーラは持っていないかった。ユキから訓練を受けたメイとロンは「覚悟を決める」という精神的

成長をしているが、あれは違う。明らかに別のなにかに変化している。それも悪い方に。

「ボス、お題の魔物を狩ってきやしたぜ」

「あ、あの…え、とうさ、え、誰？」

どうやらシアも困惑しているようだ。たった今ハジメをボスと呼んだのはシアの父、カムである。筋肉隆々の身体、強者のオーラ。デイルグの父というのは本当らしい。話を聞いてみると、

・魔物一体だけの予定だったが、大量に現れたためすべて狩ってきた

・いい声で鳴いた、晒してやればよかった

・バラバラにしてやったから良しとしよう

などなど。

「…ハジメ、何をした？ アドラーうちでも、さすがにああはならないぞ…」

「いや、な…」

ハジメ流ハ〇トマン式訓練の結果である。アドラーでも罵詈雑言を浴びせる訓練方式自体はある。ただし、入隊希望者が英雄信者であったり、誇りをもって軍服に袖を通すもの、あるいは生活のためがほとんどなので性格が歪むことも少なく、あそこまで行けばむしろ軍に討伐される側になる。

とはいっても戦闘力自体は高いようで、最低限本来の目的は達しているようである。その証拠に、五十人近い熊人族の一団を襲撃すると言っている。

「メイ、ロン。お前たちが最後の砦だ。…頼む、ああならないでくれ」

「はい！」

いい返事である。それはもういい返事である。

ハウリアに残された平和的最終防衛線、メイ・ハウリア（十歳）、ロン・ハウリア（十歳）。ハウリアの（良い意味での）未来は君たちの肩にかかっている！

次回、「暴虐のハウリア。みんな、もうやめて、（胃が）限界だから！」

来週もこの時間に、メタルノヴァ！

などという謎の怪電波を受信したが即座に忘れ、目の前の現実を意識を戻す。どうやら先の宣言通り熊人族の襲撃に行ったようで、シアが盛大に泣き崩れているのがわかる。

とりあえず残った全員でハウリアを追いかけるが、まあ想定通りの地獄が広がっていた。

「…ハジメ」

「…はい。やりすぎました」

「いや、攻めるつもりはないさ。たかだか怖がられてるだけでハジメに任せたのは俺だ

からな。失敗は次に生かせばいい。…次がない方が本当はいいんだけどな」

とりあえず事態を収束させるためにハジメが熊人族を、ユキがハウリアの矯正のためにそれぞれの元に向かう。

熊人族の方はハジメに任せても良いだろう。当面はフエアベルゲンに関わらない以上、ユキでもハジメでも貸し一つの言伝で終わるだろう。変わるのは脅すか脅さないかの違いがあるだけ。

問題はハウリアの方だ。訓練前はユキに怯えていたハウリアであったが、訓練で自信がついたのかむしろ獰猛な笑みを浮かべている。

「調子よさそうじゃないか」

「おお、兄貴。どうですか？ 一緒に遊びませんか、こいつらで」

「ああ、そうだな。遊ぼうかな、お前たちで」

「？ なにを―」

「気づいてないのか。お前たちを襲つてた帝国兵と同じような顔してるぞ、お前たち。殺しに快楽を、他種族を見下すことに優越感を感じてる顔だ」

「―なッ！」

全員が一斉に血まみれの手を頬に当てる。伝わってくるのは口元の吊り上がり具合、嗤っている顔だった。そのことに気づいたときにはハウリア全員が膝から崩れ落ちて

いた。周りではハジメ、ユエ、シアに加えロン、メイ、熊人族も黙って聞いている。

「怖がられていることに甘えてハジメに任せていた手前、あまり強く言うことはできないけどな。もう少し自分を見つめ直せ。何が大切なのか、何のために力を身に着けたのかを思い出せ」

「……」

「……昔、俺も奴隷になったことがある。帝国兵のような人攫いにつかまって、二束三文で売られ、碌な飯も与えられずに強制労働。地獄だった。そんな地獄を味合わせないために、守るために力を付けたんだろ」

「……そうだ、そうだ！ 我々は、家族を守るために強くなったんだ！」

カムの口から出た叫びに、そうだそうだと周りのハウリアも次々と同意の叫びを上げている。

「わかったならそのために力を使え。奴らのような悪党に墜ちるんじゃない」

「……我々が、間違っていました」

「いいさ、誰しも一度は間違えるものだ。次に墜ちそうになったら殴ってでも止めるいな？」

「……はい、兄貴！」

呼び名は兄貴で定着したらしい。まあ怖がられるよりはましかと納得し、多数の尊

敬の眼差しを振り払い後ろ向くと、似たような目線を多数送られていた。シア、メイ、ロンの三人からはより一層強い眼差しが向けられている。

「「あ、あに——」」

「やめろ」

この熊人族襲撃は結果で言うならばハウリアの戦意喪失、フェアベルゲンに対する貸し一つと共に熊人族は撤退になった。

異様に濃い十日間の末、ようやく本来の目的である大樹の元へたどり着く。が、そこにはすでに枯れ果てた大樹と、開かない大迷宮の入り口と思われる扉があった。扉にあつた印に、オスカー・オルクスの指輪を嵌めたら次のメッセージが浮かび上がる。

“四つの証”

“再生の力”

“紡がれた絆の道標”

“全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう”

四つの証は大迷宮の攻略の証、オスカー・オルクスの指輪のようなものが合計で四つ必要という意味、紡がれた絆は、おそらく唯一ここまでたどり着ける亜人族と友好関係を結べるか、ということだろう。再生の力というのは、生成魔法のような所謂、神代魔法を取得している必要がある、ということか。

とにかく、現状ではこの迷宮の攻略は不可能である、ということが分かった。無駄足になつたかもしれないが、神代魔法の情報が手に入っただけでも収穫ではある。そのため近くにあるブルツクの町に寄つて、物資補給やまともな食事といった諸々をしてからライセン大峽谷、そこにあると思われる迷宮へ向かうことになつた。

そしてまたもやトラブル発生。とはいえ、単純にハウリアが旅に着いていききたいと言ひ出しただけで、もちろん却下。鍛えたのはハウリアだけで生きていくためであり、旅に着いていくためではない。多少の問答の末、次にハウリアの元を訪れたときに使えるようであればハジメの部下にする、ということが決まつた。ちなみにロンとメイの二人は、自分たちから他のストッパーとして残ると言っている。まさにハウリアに残つた良心である。冗談抜きでハウリアの良い意味での未来は二人の肩にかかつているかもしれない。

なお、シアが着いてくることは既に決まつているらしい。ユエというハジメに対する

強力な後ろ盾を携えて、ハジメに対する告白と同時に着いていくと宣言、見事に勝利をもぎ取ったとのことだ。ユキとしては、ディルグから任されたこともあり、自衛ができる程度の實力があるなら問題ないと判断し、旅の人数が四人になり一行はブルツクの町へ向かった。

第二十一話 ブルックの町

魔道四輪を走らせていると、やがて周囲を柵や堀で囲まれた町、ブルックの町が見えてきた。街道に面した場所に木製の門があり、数人の衛兵が立っている。衛兵が常駐しているあたりそれなりの規模ではあるらしく、充実した買い物ができるだろう。

それなりの距離に近づいたら徒歩に切り替える。さすがに魔道四輪で近づけば、騒ぎどころか警戒から通報まですぐに行われてしまうはずだ。

「ハジメ、ステータスプレートは隠蔽したか？」

「おう、大丈夫なはずだ」

道中で最低限の準備は済ませてはある。ステータスプレートには隠蔽機能が付いている。冒険者などにとって、戦闘力の露呈はまず避けたい事態だからだ。加えて、ユキとハジメのステータスは化物の一言で片付く状態ではあるし、ユキはさらに天職・神子レベル及び技能一部バグ表示など、壊れたと言いつくすには厳しいだろう。ユエとシアの二人は紛失した、そもそも持っていないということにすればいい。

もう一つの準備としてシアには位置特定機能付きの黒い首輪を付けてもらっている。人里における亜人族という立場から、誰かの所有権を主張するためだ。なお、その所有

者はハジメである。シアは、特に愛玩用奴隷として知られている兎人族、さらに十人中十人は振り向くであろう高い容姿という、人攫い等に狙われ続けることは間違いない要素の塊なのだ。

異世界人二人　＋　滅びたはずの吸血姫　＋　魔力持ち兎人族という異端しかいない一行はようやく門の前にたどり着く。門番に隠蔽済みステータスプレートを見せて、一行は遂にブルツクの町へ入ることができた。ユキの天職を見たときに一悶着あったものの、教会を敵に回すかもしれないと思ったのか黙認してくれた。

まずは冒険者ギルドへ行くことにした。門番が言うにはそこで町の地図をもらえ、一行の目的でもある換金も行えるらしい。

ギルドに辿り着いて中に入ると、当然だが一気に注目を浴びた。見慣れない恰好をした連中だと思っただろうが、女性二人を見たときに男たちの視線は釘付けとなった。中には感心する者や、ボーっと見惚れる者、女冒険者に殴られている者もいた。そのまま視線を釘付けにしたまま受付に向かう。受付のカウンターには恰幅のいいおばちゃん受付嬢がいた。

「おやおや、ずいぶんな色男たちじゃないか。カップル同志のパーティーかい？」

「残念だけど俺と三人だよ」

「おや、そっちが両手に花かい。愛想を着かされないようしなさいよ」

「……肝に銘じておく」

この説教じみた光景はこのギルド恒例なのか、見ていた冒険者たちからも生暖かい視線を向けられた。いわゆる、母は強しというやつなのだろうか。この肝つ玉の強さには屈強な冒険者たちでも敵わないのだろう。

「さて改めて、ようこそ冒険者ギルドブルック支部へ。今日はどんな用件だい?」

「ここで町の地図がもらえるって聞いてね。あと魔物の素材の買取を」

「じゃあまずは素材の買取だね。ステータスプレートを出してくれるかい?」

「ステータスプレートか?」

「ん? なんだい、あんたら冒険者じゃないのかい? 買取ならステータスプレートの

提示は必要ないけど。冒険者だと確認できれば買取価格が一割増になるんだよ」

他にもギルドと提携している店舗では割引になったり、馬車を使用する時もランクによつては無料になるなどの特典もあるらしい。

「なるほど、それじゃあ一緒に登録してもらえないか? 登録料は買取額から引いてく

れ。あいにく四人して文無しでさ」

「可愛い子が二人もいて文無しなんてなにやってるんだい。ちゃんと上乗せしておくから、不自由させるんじゃないよ?」

ユキとハジメの二人はステータスプレートを差し出した。冒険者はランク分けて、

青、赤、黄、紫、緑、白、黒、銀、金の九ランクに分かれている。ちなみにアヤメ、シエリア、デイルグの三人は金ランク、つまり最高ランクということになる。黒ランクが非戦闘系天職の上限ランクであり、天職が預言師であるシエリアは黒ランクにとどまるはずなのだが、ヘルジャー帝国からの要請もあり例外的に金ランクになっている。実力主義国家である以上、黒ランク以下の実力しないと認識されては困るという考えがあるのだろう。

戻ってきたステータスプレート为天職欄の隣に職業欄ができており、そこに冒険者の文字と青ランクを示すマークがついていた。

「男なら黒を目指しなよ。お嬢ちゃんたちにカツコ悪いところ見せないようにね。そっちのお兄ちゃんは…いや、後は買取だね」

「ああ、ここですでできるのか?」

「ああ。あたしは査定資格を持つてるからね。そこに素材を出してちょうだい」

ユキの天職を見たのか一瞬言いよどむが、ただでさえ冒険者ではない文無し四人なのだ。何か事情があるのだろうかとうと話を進めた。ハジメがあらかじめ袋に入れておいた樹海の魔物の素材をトレーに置いて提出すると、ひどく驚いて慎重に査定を始めた。

「まさかこれは…。樹海の魔物だね?」

「やっぱり珍しいか?」

「そりゃあねえ。樹海じゃ人間族は感覚を狂わされるし、迷ったら出てこれられない。ハイルスクを冒してまで入る人はいないだろうね」

そう言いチラリとシアを見た。亜人族が案内すれば少なくとも樹海で迷う可能性は小さくなる。その亜人族であるシアが仲間にいるので迷うことなく探索できたのだからと推察していた。

そのまま素材の査定が終わり買取も終わった。四十八万七千ルタ、額としては結構なものだ。

次いで町の地図を貰った。簡易な地図だと聞いていたはずだが、有料でもおかしくないレベルの地図。書士の天職だから落書き程度ということらしいが、はつきり言つて辺境の町にいる受付嬢じゃない。

ギルドを出たユキたちは、受付嬢（キャサリンというらしい）におすすめされた「マサカの宿」という宿に向かった。料理がおいしい、防犯もしっかりしてる、風呂にも入れるなど。準高級宿といった具合だが、金額面は問題はない。

宿に着いた一行の部屋割りには、一悶着（主にユエシアの暴走と看板娘の妄想）あったが2：2の男女分けになった。

この一日は非常に疲れたと言えただろう。ピー音が横行していた様子を多数の宿泊客が見ていたからか、夕飯で食堂に向かった数時間後でも全員いるその時の宿泊客から

の視線、ユキのことなど知らないとはばかりに男女で分けているのに風呂に突撃してくる女二人+覗き一人、寝る時でも部屋に突撃してくる女子二人（ユキが部屋に戻らせた）。翌日の男二人の精神的疲れは酷かった。少なくともハジメは一日部屋で作業しようと思うほどだ。

というわけで、この日はハジメが宿で作業、残り三人は買い出し兼情報収集をするこ
とになった。

なお、看板娘が昨晚の覗きによつて妄想が暴走して腐つたらしい。

町に出た三人はユキが食料と道具メイン、ユエとシアが衣類と他雑貨メインで分かれた。

朝早い方だったからか混雑していたものの、早々と買い出しを済ませたユキはそこそこ賑わっている酒場で情報収集することにした。古今東西、酒場や娼館というのは情報が集まる場所であり、異世界だろうとそれは変わらない。

「いらつしやいませー。うわ、なかなかの色男」

「あら？ マサカさんのところで噂になった男性のお一人ではありませんか？」

「ああ、あの酒池肉林の限りを尽くした挙句、ソーナちゃんを腐女子に墜としたっていう」

「なるほど昨晩では足りなかったということですね。でしたら、双子井スペシャルセツトはいかがですか」

「オプシオンで生クリームと蜂蜜のトッピングもどうですか。かしこまりましたー。にっし」

酒場に入った途端に放たれた金髪の子ウエイトレスによるマシンガントーク。不穏極まりない話が含まれていたような気がしないでもないが、似たような体験をしたことがあるためスルーする。

「とりあえずおすすめのお酒を。あとお酒に合うつまみを少々」

カウンターに座る。お酒とつまみを食べながらユキは周囲の会話に耳を傾け、

「隣、いいかね?」

と、ユキの隣に男が座ってきた。カウンター席はまだ空いているし、わざわざユキの隣に座ってきたのだから目的は明確だろう。ユキはチラリと男を見て納得した。声で誰かは分かっていたが、自分と同じ黒い軍服、整った容姿に眼鏡を掛けたその姿はまさしく自分の元同僚だ。

「偽物、ではないな。トータスこっちにいるということは、敗死でもしたのか」

「ああ。私は貴方が知っている人間だ。まあ、一種の逆襲を受けてしまってね」

「珍しい。お前ほど完璧な奴が計画を失敗するのか」

「私は凡庸な男だからな。閣下や怪物あなたなら、逆襲すらも覆すだろう」

男もユキと同じ注文して、届いたつまみを食べながら二人で乾杯した。普通なら昼間から酒を飲む酔っ払いに見えてしまうだろうが、粗野な冒険者などではなく容姿の整った男軍人二人が酒を飲むその様子は一種の神秘性を秘めているのか、周りは一線引いて誰も近づこうともしなかった。

当の二人はその周りの反応など気にしていない。

「こつちでも極楽浄土エリユシオンを目指すのか？」

「ゆくゆくは。だが、まずは天を墜とさなければ進まぬだろう」

皮肉だな、とユキは思った。他者に天翔を求めているのに、まずは天墜しなければ始まらないというのだから。とはいえ、その天墜の算段もある程度ついてはいるのだろう。この男の優秀さは身をもって体験済みだし、おそらくその算段に自分たちも含まれているはずだ。ならばそれを利用してもらうとしよう。

「それなら、何か有力な情報はないか？ 情報の精度はともかく、こつちが何を知りたい

のかは分かるだろう」

「そうだな…強欲竜団フエブニルという傭兵団を知っているかね？ その首魁が魔人族側に着いて

いる」

「強欲竜団？ というと、ファブニル・ダインスレイフだったか。英雄を目の敵にしている奴が…勇者か」

「いや、あなたのようなのだ。怪物と英雄は表裏一体の存在だ。閣下が英雄なら、さしずめ貴方は英雄と言ったところか」

「だったらお前は策略家か？ 竜の心臓を喰らった覚えなどはないんだけどな。まあ遭遇すれば俺が狙われる、ということ覚えておけばいいだろ」

「ああ、あともう一つ。魔族族領にあるシユネー雪原、その氷結洞窟は大迷宮だ。今私を知る限りで攻略者は二人、一人は分かるだろう」

「邪竜、か。宝は？」

「さて、そこまでは…だが破壊されているということはないだろう」

それならまだ望みはある。宝に細工をしていないかが気になるどころだが、魔族側に着いている現状では心配ないだろう。

他にも噂を含め色々聞いた。王国最強の王女が勇者たちに合流した、勇者たちはオルクス大迷宮の攻略を続けている、どこかの町周辺で竜を見たなどなど。

「私はそろそろ行くでしょう。では、怪物。またどこかで」

「ああ、またな審判者。敵にならないことを祈るよ」

これが異世界で初の怪物テュホエウスと審判者の邂逅。情報としては十分すぎるほどだ。審判者が敵になるか味方になるか、そのどちらでもないか、今はまだ分からないが警戒しておくに越したことはないだろう。

酒場を出ると何やら内股気味になっている男が多いのが気になったが、特に問題なく宿に戻った。丁度ユエとシアも戻ったようので四人で合流した後、宿のチャックアウトを済ませて再び外に出た。

目指すはライセン大峽谷、七大迷宮の一つが眠るとされている場所だ。

第二十二話 大峽谷、そして迷宮へ

ライセン大峽谷の谷底には溢れかえらんとばかりに魔物の死体が転がっていた。犯人等はもちろんユキたち四人。ブルツクの町を出て早五日、幾度と魔物の襲撃を受けながらも、一行は大峽谷にあると言われている迷宮を探していた。

ブルツク出発前に渡されたハジメ製ハンマー・ドリユツケンを振るうシア、魔力に物を言わせて魔法を放つユエ、的確に魔物をドンナーで狙撃するハジメ、さながら忍者のように木々や壁を足場に縦横無尽に駆け巡り魔物を切り伏せるユキ。

魔力分解作用も相まって地獄と評されるはずのライセン大峽谷の光景とは思えない。鎧袖一触、という言葉すら過分ではないだろうか。単純に襲われたから迎撃しているだけで、本人たちは迷宮探しの片手間でしかないのだが。

そして日が暮れた夜。一行はハジメ謹製キャンプ一式アーティファクトで野営をしていた。生成魔法を駆使して作られた一式は通常の宿すら超える快適さを実現し、魔力操作が必要なため防犯性能も抜群。国宝級の品々だ。

そんな国宝級アーティファクトを使った野営とは思えない夕食を終え、就寝準備に入る。最初の見張りはユキ。ハジメたち三人は無駄に快適なテントに入ろうとしたとこ

ろで、シアが一人テントから出た。

「ちよつとお花摘みに」

「谷底にお花はないぞ？ ツテ」

「デリカシーが無いぞハジメ。ユエに嫌われるぞ」

「悪い悪い」

と、デリカシーの無い発言をするハジメの小突くユキ。場所に似合わない和氣藹々とした空気が四人を包んでいた。シアはそのまま谷の壁面の方へ向かい……

「ハ、ハジメさくん！ ユエさくん！ ユキサくん！ 大変ですう！ こっちに來てく
ださあ〜い！」

シアの大声が夜の谷底に響き渡った。いくら気配遮断の効果がある改造テントを使つていても完全ではない。あれでは魔物呼び寄せる可能性は十分ある。それでも大声で三人を呼び出したのだ。よほどのことなのだろう。

三人がシアの元へ向かうと、その壁面には身を隠せそうなほどの大きさの隙間があつた。シアはその前で大きく手を振り、ハジメを隙間へ引つ張つていく。ユエとユキも隙間に入ると、ある程度の広さがある空間があり最奥の壁には看板、だろうか。

“おいでませ！ ミレディ・ライセン、システイ・ライセン姉妹のドキワク大迷宮へ



まさに驚愕という一言に尽きるだろう。

「…本物、だよな」

「…名前からして、おそろく」

看板にはミレディ・ライセン、システイ・ライセンという二人の名前。

この大峽谷の名前の通り “ライセン” は世間一般に知られている。ただし “ミレディ” と “システイ” という名前は、四人はオスカー・オルクスの手記でのみ知った名前だ。かつてエヒトに戦いを挑んだオスカーの仲間たち、つまり解放者だ。

そう、ここがライセン大峽谷にある大迷宮の入り口だった。

とはいえ、シアを除いた三人からすれば別の意味で疑わしく感じている部分もある。

看板から滲み出る軽薄さでも言えばよいのだろうか。小馬鹿にしているような気を感じさせる文は、オルクス大迷宮での緊張感や解放者のイメージを壊すには十分だ。

「どこかに入り口があるんだ、ふぎや！」

オルクスでの苦勞を思い出して渋い顔をしている三人を尻目に、シアは大迷宮の入り口を探していた。とはいえ周囲にあるのは変わらぬ壁のみ。スイッチでもあるのかとペシペシと壁を叩いていると、シアが急に消えた。いや、ガコツという音と共に回転し

た壁の向こうへ吸い込まれていった。

「…あゝ」

「…当たり？」

「…間違いないな」

消えたシアを追つて三人も回転扉に潜る。三人を出迎えたのは先に潜つたシア、ではなく矢のトラップ。だがその程度は易々と迎撃する。なお、シアは回転扉に縫い付けられる形で生きていた。その時に足元が濡れていたのは…割愛しよう。

次いで現れたのは一枚の石板。

“ビビった？ ねえ、ビビっちゃった？ チビつてたりして、ニヤニヤ”

“それとも怪我した？ もしかして誰か死んじやった？ ……ぶふつ”

“まさかこんなトラップに引つかかるわけないよね？ プークスクス”

「ムキキー！」

さすがにシアが切れてドリユッケンで粉々に砕く。親の仇と言わんばかりの勢いで何度も叩きつける。砕け散つた石板のあつた地面には、

“残念でゝした。この石板は一定時間で自動修復するよゝ”

“無駄な労力お疲れさまでゝす”

「ムキキー！」

さらに激しくドリユツケンを叩きつけた。まあ、シアの気持ちも分からなくもないため、気が晴れるまで待とうと思っていたユキだが、地面をよく見ると小さく別の文が彫ってあることに気が付いた。

「お姉さまがすみません。うざくて本当にすみません…」
「苦労、していたんだな…：システイ・ライセンス」

このライセンス大迷宮はオルクスとは別の意味で、非常に厄介な迷宮だった。

まず、魔法まともには使えない。谷底よりも強力な魔力分解作用が働いているように、魔法特化のユエでも上級魔法以外は殆ど使えない。ハジメは戦闘時に使っていた「空力」や「風爪」といった魔法が使えず、主兵装のドンナー・シユラークも半分以下の威力しかない。最も高い身体能力を持つユキは星^{アステリズム}辰光が使えず、そもそも破壊力に欠けている。

結果、身体強化という点において天才的な素養を持ち、ドリユツケンというハンマーを振るうシアが最も適任ということになる。

で、その肝心のシアはというと…

「絶対に殺ルですよ。住処を荒らして殺るですよ」

と、殺意が絶頂状態だった。

ハジメやユエも殺意が滲み出ており、ユキは三人を見て苦笑していた。本来なら「冷静さを欠いては」と注意するところだが、少なくとも道中のトラップやミレディ・ライセンの煽り看板のことを考えれば無理もないと思っていた。看板の隅に小さくあるシステイ・ライセンの謝罪文がばければ、ユキも多少荒れていたかもしれない。いや、三人ほどでないだけでユキも多少気が立っていた。

それほどまでに様々な意味で凶悪なトラップの数々が、彼らを襲っていた。

入口から進んだ彼らを襲った最初のトラップに引つかかったのは、意外にもハジメだった。ハジメが足元の床トラップを踏み抜いて作動させ、右から首ほどの、左から腰ほどの高さから回転鋸が飛び出してきた。

「回避！」

ハジメとユキは仰け反りながら、ユエは背が小さいのでしゃがんで回避した。慌てる声が聞こえてくるのでシアも何とか回避したようだ。ただその仰け反った瞬間に、ユキが天上から何か光るものが見え咄嗟に叫んだ。

「頭上にトラップ！ 回避！」

ハジメがユエを掴んで前へ、ユキがシアを掴んで後へ飛んだ。その一拍後に高速で振

動する無数の刃が四人がいた場所に落ちてきた。最初の回転鋸を回避して安心したところを死角から追撃する凶悪なトラップ。それも高速振動しているあたり、並大抵の盾では一瞬の時間稼ぎもできないだろう。

「完全な物理トラップか……こんな環境だ、魔力感知の効果は薄いか」
「つてことは俺の魔眼石には反応しないな」

もちろん完全な無駄ではないだろう。ただ魔眼石で分からない完全物理トラップでは見切ることが出来ない。

となれば四人で最も危険なのはシア、次いでユキになる。先のトラップで言うならば、ハジメは義手で受け止めることはできたかもしれないし、ユエは「自動再生」があるので易々とは死にはしない。ユキは身体能力は高いが防御力は低く、シアも同様。

「……最初でこの危険度だ……一層慎重に進むぞ」

ユキの言葉に三人が頷く。即死級の危険なトラップ。

その「ただ危険なトラップ」というのが序の口であったと知るのももうすぐだった。

その四人の様子を遠見のアーティファクトで見ている二人の影があった。

ユキの半分程度の三頭身のフォルムをしたその見た目は、明らかに生身の人間の姿ではない。

「やつと……本当に来たね、"シーちゃん"」

「はい、"ミーねえさま"。ようやく役目を果たせます」

そこに響く声は年若い二人女性。数百年、あるいは数千年か、それほど昔から彼女たちはこの迷宮に訪れる挑戦者を待つていた。いつか自分たちの意志を引き継ぐ者が現れることを信じて。そして、

「つてことは、あの黒髪が噂の"怪物"かな？　なんか怪物つて雰囲気じゃないけど」

「ですが、確かに強いですね。魔法やアーティファクトを使っている様子もないですし」

「シーちゃんの先輩になる人だけど、シーちゃん的にはどう思う？」

「どう、と言われても困ります、ミーねえさま。ですが"母様"の言葉通りなら——」

——きっと、わたしたち解放者の期待に伝えてくれる。

だつてあの人は怪物なんだから。

第二十三話 ライセン大迷宮 前編

四人はトラップに注意しつつ、*“マーキング”*しながら奥へ進む。

このマーキングはハジメの*“追跡”*の固有魔法のこと。可視化することで他三人にも見え、魔力を直接付与しているので分解作用の影響外らしい。

今のところ魔物は出てきていない。トラップの誤作動を防ぐためか、この環境は魔物も影響を受けるからか。ユキとハジメが奈落到ちるきつかけの一つになったモンスタールハウス系のトラップもあるかもしれない。警戒はするが出ないに越したことはないだろう。

「うう、何だか嫌な予感がします。私のウサミミにピンピン来るんですよ」

と、階段を進んでいるとシアがそのようなことを言い出した。確かにシアがウサミミを立たせ左右へせわしなく動いている。

フラグとしか言えない台詞だが、元々警戒心の強いハウリアが言うのだ。四人は立ち止まって周囲を見回しながら警戒をめた。

すると、ガコンという音と共に階段の段差が消えてスロープになった。加えてタールのようによく滑る液体が流れだしてきた。

「まじか!？」

「ちっ、くそー!」

「!? ……フラグウサギツ!」

「わ、私のせいじゃ——はわわわッ?!」

ハジメは義手と靴底の鉋石をスパイクに錬成して踏ん張り、ユエはハジメに飛びついて落下を防ぐ。ユキも“宝物庫”から取り出した短刀をスロープ突き立てるが、シアはバランスを崩したまま落下していく。

「!? シアー!」

ユキがシアの腕を何とかつかむが、落下エネルギーとシア+ドリユツケンに短刀が耐えられず、スロープから外れてしまった。もう一度突き刺そうとするが、落ちる勢いが付きすぎて突き刺せない。

「ユキ!？」

落ちていく二人に驚いてハジメもユエを連れたままスパイクを外して、二人の後を追う。シアが落ちる先を見ると、途中で途切れていることに気が付いた。

「ユキさん! 道が!」

「ッ、ユエ!」

「んッ!」

勢いのまま中空へ飛び出される。

「来翔！」

その一瞬にユエが初級魔法「来翔」を使い、数秒のみその場で静止する。ハジメが義手からアンカーを射出して天上からぶら下がる。しかしそれで助かるのはハジメとユエのみ。

「ハジメ！ 撃て！」

「ユキさん!?!」

「おう！」

「ハジメさん!?!」

ユキの掛け声とともに、ハジメがユキに向けてドンナーを撃つ。位置としてはハジメ達より僅かながらユキの方が上にいる。ユキの腰に腰にしがみついているシアが叫ぶ声を無視して、ユキは「宝物庫」から大剣を取り出し、

「ッ！」

そのまま大剣の腹で受け止める。弱体化しているとはいえ素で高威力のドンナー。当然受け止めた大剣は罅が入り砕ける寸前だが、衝撃により勢いを付けることはできず。その勢いのまま大剣と交換した直剣を壁に突き刺した。

ひとまず落下を阻止してホッと一息ついた。そして下を見ると大量の何かが蠢いて

いる。

カサカサカサ、ワシヤワシヤワシヤ、キイキイ、カサカサカサ

「うわ…」

「ひええ」

思わず引き攣った声が口から漏れた。

体長10cmくらいのサソリだった。それも大量なんてレベルではなく、一切の隙間も見えない様子はさながらサソリの海のようにもあつた。さらには目を逸らすためにも上を見ると、

“彼等に致死性の毒はありません”

“でも麻痺はします”

“存分に可愛いこの子達との添い寝を堪能して下さい、プギャー!!”

“ごめんなさい。毒では死ぬことはないはずなので…すみません”

ここに落ちた人はサソリに全身を這い回られながら麻痺に苦しみ、藁にも縋る想いで天上の方へ向けばこの挑発文を見ることがなるのだ。

迷宮入り口の文から察するに、最後の文はおそらくシステイ・ライセンなのだろう。ミレデイのうざさとしステイの苦勞人氣質が感じ取れた。

「…性質たちが悪すぎるぞ、ミレデイ・ライセン」

第一の関門を突破した一行は意気揚々と進み破竹の勢いで迷宮を攻略していった。とは当然なるはずがなく、むしろトラップと精神を逆撫でする煽りの挑発文によってストレスと疲れが溜まる一方だった。突如落ちてくる天井、全方位から飛来する毒矢、硫酸入り落とし穴、アリジゴク＋ワーム型魔物などなど。最後に小さく書いてあるシステイの謝罪文に、もはやユキ以外は気付いていない。

現在、螺旋状になっているだろう一本道のスロープを下っているが、ただの通路でないのはこれまでから十分わかる。むしろ、ここまできるとどのようなトラップなのかは大体察せるようになっていた。

突然ガコンという音がしたかと思うと、上の方からゴロゴロと重い音が響いてくる。四人が後ろを見ると、まあ定番と言うか予想通りと言うか幅一杯の岩の大玉が転がって

きた。轆かれれば即死なのはすぐにわかる。急いでユエとシアが逃げようと踵を返すが、ユキとハジメはそのまま立ち止まって動かない。

「……ハジメ？ ユキ？」

「何やってるんですか?! 早くしないと潰されますよ?!」

ユキは太刀に手を添え抜刀の構えをするが、二人の声に答えずハジメはユキの前に出て左腕を引き絞った。義手からは機械音が響いている。

「いつもいつも、やられっぱなしじゃあ！ 性に合わねえ！」

ハジメは限界まで引き絞った左腕を思い切り岩玉に叩きつけた。激突による凄まじい轟音が通路に響き渡り、岩玉に亀裂が走り粉々に砕け散る。

義手への負担が大きく本来ならば切り札の一つなのだが、溜まっていたストレスが爆発したのだろう。その証拠にハジメはスッキリしたと言わんばかりに、満面の笑みを浮かべている。

「ハジメさくん！流石ですう！カツコイイですう！すつごくスッキリしましたあ！」

「……ん、すつきり」

「まあな、これでここら辺は……」

ドスン、ゴロゴロゴロと、上の方から妙にたつた今体験したような重い音が鳴り響いた。

ハジメたち三人が固まり、顔を引き攣らせながら岩玉が転がってきた方を向くと、黒光りする鋼鉄製の大玉がカーブの先から姿を現した。

「うそん」

「あ、あの。気のせいじゃなければ、何か変な液体撒き散らしながら転がって……」

「……床が溶けてる」

「二段構え……しかも危険度も格段に上がってる。本当に悪質だなこの迷宮は……」

そう言い、今度はユキが大玉の前に立ちはだかった。手には太刀ではなく、鉄塊と言われそうな巨大な大剣。

踵を返して走り出した三人は、鉄塊剣を構えたユキに驚いて少し進んだ先で足を止めた。

「おい、ユキ?!」

「解放者たちは怪物に期待しているらしいからな」

まあガイアの影響なのだろうが、オスカーの住処にユキ用の大量の武器が保管されていたことが、期待しているということを実に表している。

そう、怪物ユキが期待されているのならば、

「真正面から叩き伏せる!」

怪物らしく振舞ってやろうじゃないかと、鉄塊剣を鉄球に叩きつける。これでも

英雄と比肩すると自負しているのだ。トラップの一つや二つ、真正面から打ち破らな
いと怪物の名が廃るといふもの。

魔力変換の“衝撃変換”を併用して叩きつけた一撃は、金属同士の甲高い衝撃音を響
かせた。溶解液に触れた鉄塊剣から異臭と溶ける音がするが、無視してそのまま振り抜
く。拮抗は一瞬のみ、僅かな傷を与えて一メートルほど弾き飛ばすが、すぐに転がって
迫ってくる。

「まだまだッ！」

一度でダメなら二度。二度でダメなら三度、四度、五度……と、何度も連続で鉄塊剣
を叩きつける。鉄球が罅割れていく様子を、ハジメたちは茫然と見ていた。

そして、叩き付ける度に徐々に溶けていく鉄塊剣よりも先に鉄球の方が限界を迎え、
轟音と共に砕け散った。

「や、やつぱりすげえな……」

「……でも星辰光アステリズム使つてないから、逆にこの程度しか出来ないとも言える」

「私、ユキさんのこと怒らせないようにします……」

通路を抜けると広い部屋に出た。左右には無数の窪みと騎士甲冑が並んでいる。そ

して突き当りには荘厳な扉と黄色い水晶が設置された祭壇があった。

「いかにも、といった場所だな。ここが最奥の住処ってことか?」

「いや、どちらかと言えばその一、二歩手前といったところだろ」

「つてことはまあ、この甲冑はお決まりか」

「……大丈夫、お約束は守られる」

「それって襲われるってことですよ? 全然大丈夫じゃないですよ?」

やはりお決まりはやはりお決まりだったようで、部屋の中央付近まで進むと、おなじみとなりつつあるガコンという音が鳴り、騎士甲冑が動き出した。およそ五十体ほど。

「ははっ、ホントにお約束だな。動く前に壊しておけばよかったか?」

「今さらだ。まあ、やるしかなさそうだな」

「んっ」

「か、数が多すぎませんか? いや、やるしかないんですけども……」

ユキ、ハジメ、ユエは意気揚々と、シアは消極的に構える。この中で実戦経験が一番少ないのはシアなのだから無理もない。

「シア」

「は、はい! な、何でしょう、ハジメさん」

緊張に声が裏返っているシアに、ハジメは声をかける。緊張をほぐすためか、どこと

なく声質が柔らかい。

「お前は強い。俺たちが保証してやる。こんなゴーレム如きに負けはしないさ。だから、下手なこと考えず好きに暴れな。ヤバイ時は必ず助けてやる」

「……ん、弟子の面倒は見る」

「可能な限りフオローする。ミスは出来るときに経験しておくものだぞ」

三人の言葉にシアは息を呑む。三人と出会った時から、主に二人からの扱いが雑だったため、旅に付いてきたこと自体迷惑だったんじゃないかと不安だった。実際、最初は迷惑だと感じていただろうが、今は仲間だと認めている。

そして小さく笑みを浮かべながら気合を入れなおすようにドリユッケンを構える。

「はい、やってやりますよー」

それと同時に、ゴーレム騎士たちが四人に向かって襲い掛かった。

第二十四話 ライセン大迷宮 中編

騎士甲冑改め、騎士ゴーレムの動きは二メートル程度と言う巨体に似合わず俊敏。それも約五十体が一齐に動く様は、ユキからすればカンタベリー聖教皇国の聖騎士パラティンを彷彿させた。

だが所詮は自動人形ゴーレムの群れに過ぎない。

「——シッ——」

一振りで首を斬り飛ばす、胴を断つ。ユキの力は何も星辰光アステリズムだけではない、むしろ無限に鍛え上げた戦闘技能こそがユキの真骨頂とも言える。

加えて仲間が三人もいるのだ。故に苦戦などもつての外、赤子の手をひねるかのよう
に騎士ゴーレムを相手に立ち回る。

だからだろうか。これは？ 両腕を断つ ではこれは？ 膝下を断つ こうするとどうだ？ 唐竹割 と、様々な手法で騎士ゴーレムを斬り飛ばしていく。

さながら実験のように、騎士ゴーレムの反応を確認しながらユキは別の手法で騎士ゴーレムを両断する。これは死に戻りによって同じ人生を繰り返してきた弊害だった。繰り返すからこそ様々な選択を試し最適な方法を取ろうとする。新西暦では失敗すれ

ば死に戻りするだけだったからこそやっていたので、トータスに召喚されてからは失敗しても問題なような余裕のある時にしかやらないが。

そして都合十体ほど破壊したときに、一部の騎士ゴーレムの様子が変わった。

「…なんだ？」

十体の騎士ゴーレムが一瞬だけ停止すると、さらに俊敏になつて動き出した。どこか機械らしさがあつた先ほどまでの動きと違い、今度はフェイントを織り交ぜたりした人間らしさを感じさせた。それこそ、中に誰かがいるようだ。

ハジメたちの方に迫る騎士ゴーレムは変わった様子が見られない。つまりユキに迫っている騎士ゴーレムの動きだけが変わっているということだ。

加えて、一向に騎士ゴーレムが減っているように感じない。四人が倒した数、戦っている数を合わせれば、優に五十は超えるはず。

これはさすがにおかしいと、ハジメ達に合流する。

「ユキ、こいつら核を持ってねえ！」

「なるほど、それに再生すると」

さらに聞くとこの騎士ゴーレムは、感応石という鉱石で出来ており遠隔操作されているのだという。ということは、動きが変わった騎士ゴーレムは操縦者が変わったということだろうか。

見ると破壊された騎士ゴーレムが壊れた部分を繋ぎ合わせて復活している。床が所々窪んでいるのは騎士ゴーレムの再生に使ったからだだろう。つまり終わりが見えない状況であり、いくら余裕があるとはいえこのままではジリ貧だ。ならだ取る選択肢は一つ。

「強行突破！」

奥の祭壇の先、扉の方へ向かう。祭壇の方、前方への道をユキが切り拓き、後方の追つてをハジメが手榴弾で薙ぎ払う。

ユキは扉に最初に到達したため一足先に扉を調べる。

「…開く？」

「いや、ダメだな。封印されてる。おそらく水晶をこの窪みに嵌めればいいと思うが…」

「…ユキはハジメの方に行つて。ここは私がやる」

「すまない。任せる」

扉の開錠をユエに任せて、ユキはハジメとシアの元に合流した。

「ユエが扉を開けるまで食い止める」

「おう。錬成じや魔力が馬鹿にならなそうだしな」

「はい！ ここから先は通しません！」

と、防衛戦が始まったもののやはりそれなりに余裕はある。トラップを警戒して手榴

弾などは使っていないが、それでも雑談しながら対処している。

というのも、先の動きが変わった十体の騎士ゴーレムがユキを執拗に狙ってくるからだ。騎士ゴーレムを引き連れて階段を離れる。

やはりこの十体の動きは無駄に良い。スリーマンセル又はツーマンセルでユキに迫ってくる。唯一の救いは剣と盾しか持っていないことか。

「まずは、一組！」

一体の両腕を断ち切り盾にして、一体の胴を横薙ぎ、一体を唐竹割りにて両断する。

これで残り七体、だが時間を掛ければ三体も復活するだろう。

(これは、面倒な)

そうして相手をするに数分。

「開いたぞー！」

「了、解！」

太刀を突き刺した騎士ゴーレムを足場に、祭壇の方へ跳躍する。着地点は階段の中断付近。着地と同時に階段の騎士ゴーレムを薙ぎ払いつつ、開いている扉へ向かう。

ハジメが置き土産と手榴弾を数個放り投げ、二人同時に部屋の奥へ飛び込む。騎士ゴーレムが迫ってくるも既に遅い。手榴弾の爆発による衝撃にたたらを踏んで止まり、その際にシアとユエが扉を閉めた。

部屋は特に装飾も何も無い、四角い部屋だった。よく観察してみても、特に手掛かりになるようなものもない。

「これは…これ見よがしに封印してたけど、特に何も無い部屋でしたって感じか？」

「…あの性格ならあり得る」

「うう、ミレディめえ。何処までもバカにしてえ！」

「それにしても今入ってきた扉しかないが…閉じ込められたか？」

すると、いつもの仕掛けが作動する音が鳴り、部屋自体が揺れると同時に横向きのGが襲い掛かった。

「っ!? 何だ!? この部屋自体が移動してるのか!？」

「……そうみたッ!？」

「うきや!？」

「うおっ!？」

今度は真上からGが掛かる。次は横に、下に、斜めに、回転と、何度も方向転換しながら約四十秒ほど移動して急停止した。

「止まった、な…ユエ、大丈夫か」

「…ん。問題ない」

「ハ、ハジメさん…私は…」

「とりあえずシアは喋るんじゃない。ハジメに不名誉なあだ名をつけられるぞ」

「うう、はい…うつぶ」

ハジメはユエを抱えてスパイクで、ユキは体勢を低く膝をついて移動に耐えていたが、シアは部屋を転がり続けていたので酔っていた。なのでシアが落ち着くのを待ちつつ、部屋を再度観察する。が、やはり変化がない。

「ということは、やっぱりあの扉か…」

「さて、鬼が出るか蛇が出るか…」

「…ん。何が出ててもハジメは守る。ユキと…あとシアも」

「…聞こえてますよお…うつぶ」

「頼りにしてるぞ。ハジメのついでに守ってくれ」

「…ん」

そして扉を開け出ると――

「………何か、見覚えはないかこの部屋？」

「………ある。あの石板とか…」

「………最初の部屋、じゃないですか？」

——そう。回転扉から入った最初の部屋である。

その証拠に、石板にある挑発文も見たことがあるものだ。

“ねえ、今、どんな気持ち？”

“苦勞して進んだのに、行き着いた先がスタート地点と知った時って、どんな気持ち

？”

“ねえ、ねえ、どんな気持ち？　どんな気持ちなの？　ねえ、ねえ”

「……」

ハジメ達の顔から表情がストーンと抜け落ちる。能面という言葉がピッタリと当てはまる表情だ。さすがユキでさえ頬が引き攣っている。三人とも、微動だにせず無言で文字を見つめている。すると、更に文字が浮き出始めた。

“あつ、言い忘れてたけど、この迷宮は一定時間ごとに変化します”

“いつでも、新鮮な気持ちで迷宮を楽しんでもらおうというミレディちゃんの心遣い
です”

“嬉しい？　嬉しいよね？　お礼なんていいよお！　好きでやってるだけだからあ

！”

“ちなみに、常に変化するのでマッピングは無駄です”

“ひよつとして作っちゃった？　苦勞しちやった？　残念！　プギヤア”

「は、ははは」

「フフフフ」

「フヒ、フヒヒヒ」

三人から壊れた笑いが漏れ、次の瞬間迷宮を震わす大絶叫が響き渡ることは言うまでもなかった。

一方ユキはハジメ達が読んだ挑発文とは別の、メツセージを読んで笑みを浮かべていた。それは先ほどの引き攣った様子ではなく、ミレディとは別の意味での挑発を受けたからこそその笑みだった。

「申し訳ございません。あなた方には初めから攻略していただきます」

「文句は姉さまにどうぞ……最奥でお待ちしています」

「…怪物なら…できますよね、先輩？」

「……………ああ。なるほど。そういうことかシステイ・ライセン」

明らかに個人ユキに向けたメツセージを見つけたユキはそう呟く。

そうか、システイ・ライセンは最奥そこにいるのか。

ならばよかろうさ。彼女ガイアに何を聞いたのかは知らないが、そこまで怪物が望みなら見せてやろう。

怪物を倒すのはいつだって英雄だと決まっているのだから。

だからこそ、

「勝つのは、俺だ」

そして、迷宮攻略冒頭に戻ることになる。

だが、まだこの時は、**■****■****■****■**など誰も想像もしていなかった。

第二十五話　ライセン大迷宮　後編

迷宮に挑戦して約一週間が経過した。

入口に戻されること7回、致死性のトラップ48回、意味の無い嫌がらせのトラップ168回。最初はミレデイへの怒りで満たされていた三人だったが、四日ほど経過してから吹っ切れたのか、半ば投げやりな境になっていた。これまでの7回が無駄だったという訳でもなく、迷宮の構造変化にはある程度パターンが決まっていることが分かり8回目の挑戦中だ。

現在は珍しくトラップが一つもない安全な部屋で休息をとっていた。

「信頼されてるなハジメ。一応、大迷宮内部なんだがな」

「まったくだ。俺みたいな奴のどこがいいんだ…」

ハジメの両サイドには、ハジメの腕に抱きつく形でぐっすり眠っているユエとシアがいる。完全に安心しきっているようで、とても緩んだだらしない表情をしている。

ハジメは優しい顔をしながら抱きしめられている腕を抜いて、ユエの髪をなでている。

「そもそもシアを助けたのはユキだろうが。なんで俺なんだ」

「何だ彼んだで最初に泣きついた相手がハジメだからな。それに、弱音を吐いても諦めない所は気に入ってるんだろ？」

「…まあ、な」

そう言い、ハジメはユエと同じようにシアの髪を撫でたりウサミミをモフモフする。ユエにしたときと同じように自然と手付きも優しくなり、非常に優しい気な表情を浮かべている。

「むにゃ……ハジメしゃん、大胆ですう、お外でなんてえ〜」

「……」

シアの寝言に一瞬でハジメの瞳の奥から光が消えた。スツとユキが無言で離れると同時に、ハジメが優しい手付きのまま、そつとシアの鼻と口を塞いだ。穏やかな寝顔が段々と苦しそうな表情に変わっていくがハジメは止めず塞ぎ続ける。

「んんー?! んんー!! ぷはっ! はあ、はあ、な、何するんですか! 寝込みを襲うにしても意味が違いますでしよう!」

「……んう……うるさい…変態ウサギ…」

「ユエさん?!」

ぜはぜはと荒い呼吸をしながら飛び起きたシアはハジメに抗議を入れる。そしてシアが騒いだことでユエも目を覚ましシアを罵倒する。

「……ッ、ハハッ」

コント染みたやり取りにユキは思わず吹き出して笑ってしまった。それぞれが信頼し合っているからこそそのやり取りを、ユキは羨ましそうに眺めている。

クリスとアル、貧民窟^{スラム}で出会った二人と、今のハジメ達のように笑い合うような日々を送った時があったのだろうか。未来を変えようと進んでいたあの時の自分に余裕がなかったのか、それとも自分が覚えていないだけなのだろうか。

だからハジメ達の今が羨ましいと感じてしまう。そして血で染まりきっている自分は、あの輪に入ってはいけないと思ってしまう。

ふと、三人のやり取りを眺めるユキの眼には別の光景が映った。

ガラス越しにこちら^{ユキ}を見つめる女性の姿。慈愛に満ちた眼をしながらも、泣きそうなその表情をしたその女性はガイアに似て……

(ッ、まただ)

俺にこのような記憶はない。知らないはずだ。

このような特徴的な光景を忘れるはずがない。でも知らない。

「……大丈夫か？」

「……ああ、大丈夫だ」

急に笑ったかと思えば今度は顰めた顔をしているユキに、ハジメが心配そうに声を掛

けた。ユエとシアも心配そうな表情でユキを見ていた。

「十分な休息はできただろう。そろそろ行こう」

「…ユキ」

心配は掛けないと、ユキはハルツィナ樹海の時のように半ば強引に行こうとする。が、ハジメがユキを呼び止めた。ここで止めなければ、ここではつきりさせなければ何が手遅れになると、ハジメはそう感じていた。

「ユキのことは八重樫や白崎から聴いてはいた。だけど俺はその夢を見ていたわけじゃないから詳しくは知らねえよ」

「それでも、俺はユキを信用してるし信頼してる。それはユエも、シアも、八重樫や白崎だって同じだろうさ」

「俺にとつて、ユキ・ロスリックは英雄だ。無能だの馬鹿にされてた俺に道を示してくれた、唯一無二の希望ヒカリなんだよ」

「だけどそれ以上に、今は大切な仲間だ。進む道を間違えたならぶん殴つてでも止めるし、絶対引き戻してやる」

「それに奈落に落ちる前、ホルアドでも言つてたじゃねえか。俺達は一人じゃない。ピンチになったら、素直に助けてくれって言えればいい”つて。」

俺達は何度もユキに助けられた。だから今度は俺達がユキを助けてえ」

「だから、その、なんだ」

「前から何に悩んでるのか知らねえけどな、少しくらい俺達のことを信じてくれてもいいじゃねえか？」

「…ん」

「です！」

ハジメの言葉にユエとシアも同意する。二人にとって、ハジメが想いを寄せる相手
で、助けてくれた恩人でも、ユキもまた助けてくれた恩人なのだから。恋に盲目とは言
えど、恩を忘れるほど恥知らずではない。

「……ありがとう」

「…存在しない記憶、か……大丈夫か、頭？」

「……やっぱり言わなければよかったか…」

「冗談だ」

迷宮攻略を再開したが、これと言った進捗があるという訳ではなかった。

ただ見慣れたトラップばかりになっているため、最初より楽にはなった。そこでユキが抱えていた悩みについての話をしていた。

とはいえこちらは何かが解決するという訳でもない。当の本人が知らないのだから他人が知る訳がない。

「つて言っても、ユキ自身全部を覚えてるわけでもないんだろ」

「それは当然だ。最初の頃は殆ど忘れてるし、新西暦に飛ばされる前なんて一切覚えてないしな」

「まあそうだよな……」

唯一判明した、というより既に明らかだったのは、神山に眠るガイアが深く関わっているということ。

そもそも、ガイアに関してはユキも知らない謎が多い。

なぜユキの死に戻りを共に体験していたのか。

なぜユキに星辰戦争ギガントマキアを持ちかけたのか。

なぜユキが西暦から来たという秘密を知っていたのか、などなど。

挙げだせばキリがない。

とはいえ悩んだところで解決するわけでもない。再開してから聞き出せばいいと割り切るしかないだろう。

「そういえば、あのガイアって日本で造られたんだよな？　なんでギリシヤなんだ？　日本なら記紀神話とかじゃないのか？」

「知らないさ。当時の技術者に聞いてくれ。」

まあ、対のイザナギがいなくて、敵対派閥が製造したのがカグツチだからイザナミは相性悪いとか、地球環境改竄に黄泉の神は合わないとか、そんなところじゃないか？」

そんな話をしていると、最初に迷宮攻略をリスタートさせられた原因の部屋。つまり騎士ゴーレムの部屋に着いた。あの一回以降、一度もこの部屋に遭遇することがなかったことを考えるなら、やはり迷宮攻略は進展しているのだろう。その証拠と言うべきか前回とは違って、封印されていた扉は既に開いて、部屋ではなく道が続いているのが見える。

「誘われてると思うか？」

「十中八九、誘われてるだろうな。だが他に道もない。生憎ゴーレム自体はそこまで問題じゃない、このまま扉まで突っ切るぞ」

「んッ！」

「はいです！」

ユキ達が走り出し部屋の中程まで到達したところで、前回同様騎士ゴーレムが一斉に動き出した。だが既に騎士ゴーレムの強さは知っているし、扉を開けるために時間稼ぎ

をする必要もない。

よって、前方の騎士ゴーレムを蹴散らしてしまえば、進行を塞ぐ騎士ゴーレムはいなくなり、ユキ達は特に問題なく扉を通過した。

そう、ユキ達は特に問題なく通過できたが、残った騎士ゴーレムも扉を通過し天井や壁を走りながらユキ達を追いかけてきた。

「天井を、走ってる!？」

「冗談にもほどがあるだろ!？」

「…びっくり」

「重力さん仕事してくださいさあ〜い!」

咄嗟にハジメが解析をするがこれといった鉱石が使われているわけでもない。

その時、天井を走る騎士ゴーレムの一体が天井を足場にジャンプした。するとユキ達から見て落下するように突撃してきた。

「ちッ! 回避ッ!」

ハジメがドンナーで迎撃するも、半壊した騎士ゴーレムはその残骸ごとユキ達に突撃してくる。

屈んだり跳躍して回避すると、その残骸は壁や天井、床に激突しながら転がっていった。

「おいおい、やっぱりまるで…」

「ん…『落ちた』みたい」

「重力さんが適当な仕事してるんですね、わかります」

「いや、おそらく魔法だろうな。さしずめ『重力魔法』と言ったところか」

騎士ゴーレムにのみ反応しているということ、鉱石による効果ではないということを考えるならば、消去法的に魔法になるだろう。それもユエの反応からして現代で知られていない魔法、つまり神代魔法の一つなのだろう。

これまでの騎士ゴーレムの対処には余裕があったが、一気に手強い相手へと変わった。天井は遠距離攻撃手段のあるハジメとユエにしか基本対処できず、突っ込んできた騎士ゴーレムをユキやシアが対処しても騎士ゴーレムは再構築によつて復活する。そして復活するというならば当然。

「そりゃあ前を塞ぐよな」

「面倒だな」

「むう…ハジメ、どうする?」

「は、挟まれちゃいましたね」

数の暴力というのは恐ろしく、騎士ゴーレムが壁となつて道を塞ぐ様子はある意味、壮観ですらある。

とはいえ立ち止まるわけにもいかない。このままではジリ貧だというならば前回のゴーレム部屋同様、

「ハジメ、すまないが頼む」

「おうよ」

強行突破しかない。

ハジメが新たに“宝物庫”から取り出したのは“十二連式回転弾倉型ミサイル&ロケットランチャー：オルカン”。

「全員、耳塞げ！ ぶっぱなすぞ！」

そして発射されたミサイル群は騎士ゴーレムの壁に直撃、轟音と共に大爆発し、原形をとどめないほど粉々に砕け散った。側壁や天井の騎士ゴーレムもまとめて吹き飛んであり、再構築にもそれなりの時間がかかるはずだ。

その隙に一気に騎士ゴーレム達の残骸を飛び越えて行く。

「ウサミミがあゝ、私のウサミミがあゝ!!」

と、並走しながらウサミミをべたんと倒して涙目になっているシアがそこにいた。兎慌てていたためハジメの指示に反応できず、着弾の爆音が直撃したようだ。人族は、亜人族の中で一番聴覚に優れた種族、この爆音のダメージはユキ達とは比較にならないはずだ。少なくとも数分は何も聞こえないだろう。

そして通路を走ること約五分。この通路の終わりらしき場所が見えた。どうやら巨大な空間が広がっているようだ。通路は空間の入り口で途切れ、十メートル先に正方形の足場が見える。

「抜けたら飛ぶぞー！」

そして勢いをつけたまま、入口のギリギリから足場に向けて跳び、特に危なげなく全員が跳び移ることに成功した。

ユキ達が入ったこの空間は巨大な球状になっているようで、直径五キロメートルはありそうだ。この空間には様々な形状、大きさの鉱石ブロックが重力を無視して不規則に移動している。

だがこの空間の異常性はさほど問題ではない。重力を操作する魔法であると仮定すればある程度の説明はできる。

よって問題なのは、ユキ達を追いかけてきた騎士ゴーレム達の動きが激しくなってきたということ。

先ほどの砲弾のように落下するような単調な動きではなく、縦横無尽に飛び回っている。並の生物では方向転換でかかるGで死亡するだろうと思えるほどに激しい。

「ここが最奥ってことでいいんだろうな……」

騎士ゴーレム達はユキ達がいるブロックの周りを旋回しているだけで、なぜか攻撃し

てこない。

不審ではあるが、これ幸いと周りを見渡して観察する。

その次の瞬間、

「ッ！ 逃げてえ！」

突然シアが絶叫する。

シアに問いたただす暇もなく、瞬時に今のブロックから別のブロックに飛び退いた。

その直後、まるで隕石かと勘違いしてしまうような巨大な何か、先までいたブロックに落下して破壊した。

シアの警告がなければ、あの何かの直撃を受けていたかもしれないと考えると、ユキ達は冷や汗を流した。

「シア、助かったぜ。ありがとう」

「・・・ん、お手柄」

「ああ、さすがに今のはやばかった」

「えへへ、未来視が発動して良かったです。代わりに魔力をこっそり持って行かれましたけど・・・」

シアの固有魔法「未来視」。任意で発動することもできるが、シアの命の危険が伴う場合には自動発動する。今回はその自動発動によって助かったということだ。

すると、先ほど落下してきた何かが、下から猛烈な勢いで上昇してきた。

その何かの正体は、

「おいおい、マジかよ」

「でかいな」

「…すごい…大きい」

「お、親玉って感じですね」

それは宙に浮く巨大な騎士ゴーレム。全長およそ二十メートル弱。全身甲冑の姿はそのままだが、右腕はヒートナックルとでもいうべきなのか赤熱化しており、左腕には鎖が巻き付いて、フレイル型のモーニングスターを持っている。

そしてその巨大な騎士ゴーレムの肩には、これまた別の騎士ゴーレムが立っていた。大きさはこれまでの騎士ゴーレムと同じ二メートル弱。だが手にはそれぞれ槍を一本ずつ持っている。

周囲を旋回していた騎士ゴーレム達が一斉に止まり、囲むように整列して胸の前で大剣を立て構えた。

それはまるで王への敬礼のようで、つまり今現れた二体の騎士ゴーレムがこの迷宮の最奥の主ということを暗に示していた。

一気に緊張感が高まり、まさに一触即発のこの状況。誰かが動いた瞬間に戦いが始ま

ると、そう思わせる張り詰めた空気を破ったのは――

「やほく、はじめましてく、みんな大好きミレディ・ライセンだよおく」

「台無しです姉さま。システイ・ライセンです。お見知りおきを」

「「…は？」」

「はあ…やっぱりか…」

――巨大な騎士ゴーレムのふざけた挨拶だった。

第二十六話 ライセン姉妹

「やほ、はじめまして、みんな大好きミレデイ・ライセンだよ〜」

「台無しです姉さま。システイ・ライセンです。お見知りおきを」

「「…は？」」

「はあ…やっぱりか…」

ユキ達を出迎えたのは二体のゴーレムと、その一方の巨大な騎士ゴーレムのふざけた挨拶だった。

ハジメ達三人は口を開けてポカンと呆け、ユキはため息を吐いて呆れていた。

「あのねえ、挨拶したんだから何か返そうよ。最低限の礼儀だよ？ 全く、これだから最近の若者はさあ…もつと常識的になりたまえよ」

やれやれだと言うように無駄に人間臭い動きで肩を竦めている。

この二体のゴーレムはそれぞれミレデイ・ライセン、システイ・ライセンと名乗った。つまりはそういうことなのだろう。

「これは失礼した、ミス・ミレデイ。」

既に貴方は故人だと聞いていたし、生きていたとしてもゴーレムになっているとは

思っていないかったが故、どうかご容赦していただきたい」

「私はユキ・ロスリック。元軍事帝国アドラー……と、過去の肩書は必要ないか。

貴方達に“怪物”などと呼ばれている、始まりの星辰感応奏者の片割れだ」

「お、おう。まさかの紳士的な返し方をされてミレデイさんもびつくりしちゃった…

ガイアかあさんから君のことは聞いてるし、普通に話してくれていいよ」

「姉さまの言う通りです。それに私と貴方は同じガイアかあさまの使途。先輩さきと後輩あと、敵味方という関係でも、立場を上下で分ける関係ではないでしょう」

「…なるほど。それでは遠慮なく」

いまだ呆けている三人を置いて、ユキはライセン姉妹と相対した。

肉体を捨てゴーレムの身体を得ているとは思っていないかったが、アドラーでも人造感星という似たような者がいることを考えてみれば、まだ想定範囲内といえるかもしれない。

「…おい待てよ。さっきの反応から察するが、ユキはミレデイが生きてるのを知ってたのか？」

「生きているという表現が正しいのかは怪しいが、少なくとも最奥にいるのは察していた。システイ・ライセンが最奥にいる、それならその姉のミレデイがいると思うのは自然だろうか？」

「…まあそれは分かるが、なんで俺等に教えなかったんだよ」

「別に教えても良かったが…あの様子キレ具合を見たら、なあ？」

「……………」

思わず三人は黙って眼を逸らした。

自分たちを散々煽り散らかしたミレデイ自身が生きていると知れば一体どうなるか。明確な対象が生きているからこそモチベーションが上がるかもしれないが、少なくともストレスは今以上になっただろう。邂逅早々に暴走しても不思議じゃない。

「ええ〜まさかミレデイちゃんを案じてくれたの〜？ やつさし〜」

「寝言は寝て言えよ。俺もそれなりにキレてるんだよ。むしろシステ後輩イ先輩の胃の方が心配だ」

「ええ本当に、姉さまには振り回されて…はあ…。姉さまは自業自得です、それなりには反省してください」

「ええ〜シーちゃんは薄情だなく。んん〜まあいいや。それで、ハジメ君達達は何のために此処に来たのかな？」

攻略中の様子を見てたけど、いろんな見たことないアーティファクトを持つてるよね？ ということはオーちゃんの迷宮を攻略して、生成魔法で作ったってことだと思っただけど、それならあのエヒトクソ神のことも聞いてるはずだ。

まあユキは分かるよ。ガイアが解放者わたしたちに関わつてゐるなら、その足跡が残る迷宮に来ないはずがない。でも、君達三人は違うはずだ。

何のために此処に来て、何のために神代魔法を求めろ？」

ミレディが纏う空気が切り替わる。嘘偽りは一切認めないと、ふざけた様子は一切消えて問いかける。それに続くようにシステイもまた纏う気配の重圧が増す。こちらが本当の彼女達なのだろう。トータス世界の平和の為にエヒト世界の敵となり、たとえ敗北しても肉体を捨てて、遙か未来に希望を残すために何百年も意志を保ち続けるという彼女達の精神力は尋常ではない。

「元の世界に帰りたい。言つちまえばそれが全てだ。狂った神なんざ知つたことじゃない。だがそれと同じくらいに、俺はユキの役に立ちたい。無能だと罵られてた俺に寄り添つてくれた無二の希望ヒカリ、その輝く先を見てみたい」

「…私は、ハジメと一緒にいる…」

「わ、私も、ハジメさんと一緒にいたいです！」

三人の答えを聞いたミレディは何か納得したのか、小さく頷いた。

「そつか…よろしい、それでは戦争だ！ 君たちが神代魔法を受け継ぐにふさわしいか、ここで見定めてやろう」

「私たちが」ときに勝てない様では、話になりませんから」

先の真剣な雰囲気霧散して、再びふぎけた様子でミレデイが宣言した。

話は終わりだ、その力を示して見せろと言外に告げてくる。

「ハッ！ 言つてくれるぜ」

「…ん」

「絶対殺るデス！」

「お望みなら見せてやるさ。怪物を打ち倒すのはいつだつて英雄だ。お前たちに、怪物は滅ぼせない。勝つのは俺たちだ」

全員がそれぞれの武器を構え、両者の視線が火花を散らす。

そして、ライセン大迷宮の最終戦が始まった。

「死ね！」

初撃はハジメが放つオルカンの弾幕雨。全弾がミレデイに直撃し、爆音と共に爆煙がミレデイの前身を包み込む。

「やりましたか!？」

「……シア、それはフラグ」

ユエの言う通り、当然この程度で終わるはずがなく、煙幕からシア目掛けてシステイが槍を構えながら突撃してきた。その切先はシアの眉間を狙っており、油断したシアはそのまま串刺しに――

「やらせるわけがないだろ」

――そこに割り込んだユキが槍を弾いて迎撃する。その妨害を読んだのか、弾かれた勢いのままもう片方の槍でユキを薙ぎ払う。それを仰け反って回避し、隣の浮遊ブロックにシステイを部分強化して蹴り飛ばす。

ほんの数秒の攻防、ユキの頬には一筋の赤い線が刻まれていた。システイの横薙ぎの際に、僅かに掠ってしまったらしい。

ユキとしては見誤ったつもりはなかったのだが、事実として回避しきれなかったということは、システイの槍術はユキの想像以上なのだろう。

するとシステイに続くように、ミレディは赤熱化した右腕で煙幕を払いながらをモーニングスターを射出してきた。予備動作がなく、重力魔法によって操作されている為か別のブロックに回避しても追尾してくる。ハジメがドンナーの連射で弾くことで、ようやくミレディの手元に戻った。

「おお、さすがだね。まあこの程度は、軽く乗り越えてもらわないとね。」

ミレディは、オルカンの直撃で所々が砕けた右腕を近くの浮遊ブロックを使って修復する。飛ばされたシステイも既に立ち上がって槍を構えている。

「でもいったいどれだけ持つかな？　総数五十体の復活するゴーレムに、私とシーちゃん。同時に捌けるかな？」

浮いていた騎士ゴーレムたちが一斉に動き出した。突きの体制で構え、数体ずつ時間差で突撃してきた。ユエが水筒の水を圧縮した“破断”で、ハジメが宝物庫から取り出した別のアーティファクト、ガトリング砲：メツエライで騎士ゴーレムを無残な鉄屑へと変えていく。弾幕を抜けた騎士ゴーレムはユキが切り払う。

同時にシアは上からミレディへと突撃した。大きく振りかぶったドリユツケンを、咄嗟に横へと叩き付けた。

「ごめくん。ブロックもあつたね。操作できるのはゴーレムだけじゃないからね。」

シアは横から浮遊ブロックが迫ってきていることに気付いたから、浮遊ブロックにドリユツケンを叩き付けたということだった。浮遊ブロックは砕けたが代わりに勢いを失って、明らかな隙を晒す。

悪びれた様子など一切出さず、空中のシアを燃え盛る右手で殴りつけた。

「ッ、あああああ！」

ドリユツケンに搭載された爆裂機能の爆発力で勢いをつけ、ミレデイのヒートナックルを迎撃する。その威力は咄嗟の行動でもシア自身の身体強化を合わさって、騎士ゴレム数体は軽く粉碎できるほど。

ただ、今回は相手が悪かった。

「^今ゴレムが^私パワーで負けるわけないよね〜」

ヒートナックルとドリユツケンがすさまじい轟音を出しながら衝突した。激突による衝撃は近くの浮遊ブロックを吹き飛ばす。数秒程拮抗するが、やはりゴ^{ミレ}レムの脅力には勝てず、振り切った拳にそのままシアは弾き飛ばされた。

「きゃあああ!!」

シアが悲鳴を上げる。その先に浮遊ブロックはなく、そのまま落下するかというところで、横からユエが来翔を使って救出した。

「……くそッ、かなり強いな……」

「ああ、さすがは解放者というところか。——ッ!」

シアとユエの無事を確認して、ハジメとユキは改めて解放者という者達の強さを感じていた。先の騎士ゴレムの波状攻撃、縫うようにして作った一緒の隙を突けば浮遊ブロックやミレデイ、システイの妨害が入る。

これまでは魔物を相手に戦ってきたために、いわば野生の本能を把握していれば対応

できたが、今回は違う。明確な知性を持った人間が相手、それも戦闘巧者である解放者となれば駆け引きの一つ一つが生死に関わる。

そこにシステイがユキに向かって突貫してきた。ユキは咄嗟に防御して鏢迫り合いに移行する。

「私を忘れないで下さい。一曲いかが？」

「はッ！ よろこん、で！」

ユキとシステイは、数ブロック離れた場所へ移動する。

共にガイアの加護を受けた者同士、ハジメ達やミレディとは別の二人だけの戦争が始まった。

第二十七話 処刑者システイ・ライセン

ハジメ達から離れ二人だけの戦争を始めた両者は、己の獲物を構えたまま向かい合っていた。

「ッ、強い」

ユキと対峙するシステイはそう呟いた。

ハジメ達をミレ^姉テイが相手をしている今、敵はユキ一人。対してこちらは騎士ゴーレムが十数体と浮遊ブロック、そして能力^{スベック}値でも勝るとも劣らないシステイ自身。優勢は明らかにはずなのに、槍がユキに届いたのは最初の一回だけ。

ユキの無限に等しい経験と鍛え上げられた技量が、数の優劣を跳ね返していた。

しかしよく考えれば当然なのかとも思う。オルクス大迷宮を攻略したということは、自分も倒せなかったあのヴァルゼ^{ホム}ラ^ムゼ^ンライド^クも倒したということだ。それも神代魔法を一つも用いずに。しかも本物はさらに強いというのだから、その本物にすら勝っていたというユキは明らかに異常だろう。

(これが光狂い…)

これが光を仰いだ化物の一人。

だがそうでなければ、神に剣は届かない。このトータスの未来を覆すことはできない。

素の実力は理解できた。ならば次だと、双槍を固く握りしめた。

(強い…)

相対するユキもまた、システイを強者と認めていた。

開戦直後に頬に一筋の傷は貰ったが、それ以降は掠り傷一つ負っていない。そのことから分かる通り、練度も経験もユキが圧倒的に上。それなのにユキの太刀はシステイを切り裂くことができている。

しかし、それも当然だと理解していた。

「さすがに卑怯じゃないかそのゴーレム。全然刃が通らない」

「それでは素直に負けを認めますか？」

「まさか」

速く、強く、頑丈なだけなら獣と変わらない、ならば斬るなど容易いこと――

——というのはアドラーの断刃ムラサメの言葉ではあるが、あまりにも硬すぎれば物理的に斬れないのは当然だろう。

しかし打つ手なしかといえどそういっわけでもない。何も攻撃手段は斬ることだけ

ではないのだから。斬れないならば穿つ、穿てないなら叩き壊す、などと。

この戦いで何かが変わる。

永年ながねんの経験による直観がそう囁き、ユキは太刀を固く握りしめた。

「…見下すような言い方になります、お見事と言いまししょう。この大迷宮でこれほど苦戦するとは思いませんでした」

「お褒めに預かり恐悦至極、とでも言おうか。まあ不利だからあつさり負けました、なんてあまりにも情けないだろ」

互いに軽口を叩きながらも、警戒は一切緩めていない。数ブロック離れた先ではハジメ達が戦っている。

質で勝るユキと数で勝るシステイの戦力差はほぼ同列。だが時間を掛ければユキはその経験で戦力差を埋められる。

「…ならば」

切札を使うほかないと、システイは判断した。元々そのつもりでシステイはユキと対峙している。

話に聴いていた怪物の力を、今ここで知るために。準備は整った。さあ、私の星辰を見るがいい。

「一切手は抜きません。——かかつてこい、光狂い。貴方がガイアに選ばれた怪物ならば、その力を見せてみる！」

そう叫ぶと、システイは手に持つ双槍を構え——

「天■せよ、■が守■星——鋼の■■に■■を■せ」

——起動詠唱を紡ぎだした。

「我らは邪神の支配に抗いし解放者。彼の邪神は数多の祈りを、数多の命を磨り潰した」
「神ならば命を弄ぶことが許されるのか、認められるのか」

「否。決して許されていいことじゃない、認めていいことじゃない」

込められた思いは神への怒りと未来への希望。

かつて解放者と呼ばれた彼女たちは、現在では反逆者という名で歴史に刻まれている。世界を滅ぼそうとした邪悪な眷属として。それはあながち間違いではない。

トータスを支配する存在^{エヒト}を討てば世界は混乱に陥る。人間族の九割以上が信仰している教会の唯一神がエヒトなのだからなおのこと。教会は唯一神を失うことで機能しなくなり、支配から解放されたことで世界から秩序が消えるだろう。

「私たちは生きる権利がある。生きる自由がある」

「手を取り合い、情を交わし、笑い合おう」

「それらは決して罪ではない。私たちは邪神の玩具じゃない」

それでも、これからも邪神に弄ばれるというのなら是非もない。必ず邪神を打ち倒そう、と。

その先の未来で、国も種族も関係ない。皆が笑える世界になると信じて。

「されど私たちは敗北者、英雄に非ず。ならば次代へ繋げよう。神をも墮とす怪物へ」

しかし、その目論見は瓦解する。それもエヒトによつて扇動された人々によつて。守るべき人々に力を振るうことができない解放者たちは討たれていき、残ったメンバーは大陸の果てで迷宮を創り潜伏した。

いつの日か、自分たちの力を受け継ぐ者が、そして怪物が現れることを願つて。

「願わくば——人が自由な意思の元に、生きられる世界になりますように」

これがトータスで最初の星辰体感応募者、システイ・ライセンの星辰光。かつて大峽谷の処刑者一族ライセン家の末妹として生まれ、姉であるミレディ・ライセンと共に立ち上がった反逆者。

怪物を試すべく、怪物を打倒すべく、ここに彼女の星辰光が顕現した。

「『超新星』——『絶滅闘争、魔殺の底で次代へ繋ぐ解放者』！」

基準値から発動値への変化に伴い双槍の振るわれる速度も上昇し、ユキもまた星辰光^{アステリズム}を輝照する。

ユキにとつてシステイが星辰光^{アステリズム}を保有していること自体はそこまで驚くことではない。星産みの力を持つガイアが関わっているのだからむしろ予想通りですらある。重要なのはシステイが宿す星辰光^{アステリズム}の能力。

一見するだけでは判断ができない。炎が噴き出るわけでもなければ、光が溢れるわけでもない。ならば自己強化という線もあるが、当たれば決着する系統の能力である可能性も捨てきれない以上、むやみに防御をするわけにもいかない。故に回避に重点を置くのだが、それはそれで容易ではない。

重力魔法によつて飛来する浮遊ブロックに加え、速度の上がつたシステイの槍撃。ただでさえギリギリの戦いをしてきたのだから、天秤はシステイに傾き始める。無論ユキも防戦一方のままではいるはずもないが、ユキの動きが徐々に鈍り始めた。

それが顕著に出たのはシステイの攻撃を回避しきれずに防御した時だった。槍を受け流すために接触した瞬間、一気にユキの力が減衰したのだ。攻撃を受け止める膂力、踏ん張る力、飛び退く脚力、すべてが接触した瞬間に減少した。

出力の減少かとも思ったが、ユキの星辰光アステリズムは揺らいでいない。むしろその大元、ステータスそのものに影響が出ていた。加えてシステイの動きも加速、というより出力が上昇していた。ユキの力の減少、相対的にシステイの出力が上昇したという事実。すなわち――

「――ッ！ ステータスドレイン能力値篡奪能力か！」

「()まで奪とえれば、さすがに分かりますか！」

――限定的能力値篡奪能力。それがシステイ・ライセンが得た星辰光アステリズムだった。生物のステータスステータスが数値化されるトータスだからこそ発現した能力であり、トータスで新しく誕生した現状唯一の星辰光アステリズム。拡散性の低さから効果範囲は数メートル、だが直接触れた者からはさらに多くステータスを奪い取る能力で、トータスで生きるものにとって絶望的なまでに相性最悪の能力だ。

しかし、だからと言って諦めるという選択はユキに無い。

魔力分解作用と維持性によって、ユキの星辰光アステリズムは持つて数秒。さらに時間が経過すればするほど互いの能力値は広がっていく。

迫りくる処刑槍、浮遊ブロック。弱体化するユキと強化されるシステイ。もはや覆しようなない絶望的状况。故に、

「まだだッ!!」

また一つ、限界という壁を粉碎する。すでにレベルという制限の枠組みを超えているユキは能力値ステータスをさらに上昇させる。

常識を無視した覚醒はユキの骨身を軋ませユキを敗北へと誘う。しかし、それすらも次の覚醒の起爆剤へと変化させる。まだだ、まだだ、まだだ、と。ユキをさらに怪物へと変貌させていく。

「ええそうです！　まだでしょう！　怪物あなたの力はこの程度ではないはずだ！　もつと、もつと、もつとその力を私に見せてみる！」

「オオオオオオッ!!」

連続して強化されていく出力ほか能力値ステータスは減少度を上回る。魔力分解作用すら無視して迷宮最深部に展開されるユキの破局災害アポカリプスは、しかしユキとシステイにのみ影響を与えながら縦横無尽に駆け回る。もはやハジメ達にはユキ達の残影すら目に映らない。それほどまでにユキは強化され決着に近づいていくのは必然と言えた。

そう、そのような覚醒不条理を続けければ――

「――ッ」

身体からだが耐えられないのもまた必然とも言えた。度重なる覚醒に身体が耐えきれず、発動体を振るっていた右腕うでがはじけ飛ぶ。

そもそも、ユキ・ロスリックは生身だ。システイ達のようにゴーレムであったり、骨

格がアダマンタイトや神星鉄オリハルコンであったならばまだ耐えきれたかもしれないが、生身である以上これは当然の結果であり、気合や根性という精神論では覆せない人間兵器エスプレアントとしての限界値だった。

「——ッ、——」

右腕がはじけ飛び、発動体が離れてしまったため星辰光アステリズムが解除されたが、左腕で発動体を掴み再び感応させ——感応できない。どれだけ感応しようとしても感応できず星辰光アステリズムを発動することが出来ない。その隙を逃すはずもなくシスティの豪槍が放たれる。宙に浮遊し、片腕を失い星光ほしすらも解除されたユキに逃れるすべなどあるはずがなく、身体を捻らせて回避しようとするものの左足を斬り飛ばされた挙句、そのままブロックの一つに叩きつけられる。

ブロックの上に仰向けに倒れるユキの姿は、常人なら目を背けてしまうであろう悲惨な姿だった。右腕左足を失い、ブロックに叩きつけられた衝撃で残った身体もボロボロになった。まだ息があるのはまさしく奇跡だろう。

アステリズム
なぜ星辰光アステリズムが使えなかったのか、それは単純に感応する魔力がないからだだった。

|||||||

ユキ・ロスリック ??歳 男 レベル:???

天職：神子

筋力：1

体力：1

耐性：1

敏捷：1

魔力：1

魔耐：1

技能：星辰光・■■■■・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・魔力
 変換「＋身体強化」「＋部分強化」「＋治癒力変換」「＋衝撃変換」・気配感知「＋特定感
 知」・魔力感知「＋特定感知」・言語理解

|||||

トータスにおける^{アステリズム}星辰光は、体内の魔力と大気中の魔力を感応させることで発動でき
 る魔法になる。つまり、どちらか一方が欠ければ機能することはない。

システイの^{アステリズム}星辰光は文字通り、能力値を奪い取る。奪われた能力値は全てシステイの
 能力値へと変換され、両者の力の差は開いていく。あくまで一時的な奪取なので、シス
 テイが^{アステリズム}星辰光を解除すれば奪われた^{ステータス}能力値は元の持ち主に戻る。

同時にユキの星辰光アステリズムが一瞬だけでも解けたことで発動値へになったことによる能力値の上昇値がリセットされてしまった。そこに追撃するシステイの星辰光アステリズムによる能力値篡奪。それらが噛み合った結果が、現在のユキの無惨な姿だった。

トータスにおける一般人のレベルの平均ステータスは10だと言われている。つまり、ユキは正真正銘トータス最強の人間から最弱の存在へと転落していた。

「……なにか言い残すことはありませんか?」

システイがユキに向けて最期も言葉を掛ける。そこに憐れみなどの感情はない。

聞いていた通りの、いやそれ以上の強さだった。ライセン大峽谷という環境、単純な能力の相性という、経験だけでは覆せないはずの隔絶した状況下でここまで戦ったのだ。まさしく怪物の異名にふさわしいだろう。

「……システイ・ライセン…君は、君達は、英雄か?」

告げられたのは、英雄かどうかという質問。

もうじき死する状況で聞くべきではない、予想外の理解できない言葉にシステイは疑問を抱きながらもはつきりと答えた。

「違います。私は処刑人。私達は神に負けた敗北者で反逆者。決して英雄などではありません」

そう、システイ達は反逆者である。かつては人々に希望を齎したのかもしれないが、

少なくともこの現代では真逆の存在なのだ。

その返答に満足したのか、ユキは死まで秒読みでありながらも不敵に笑い、「なら何も問題ない。勝つのは俺だ」

「ッ！」

悪寒を感じたシステイは重力球を作りユキにとどめを刺す。もはや動くことすらできないユキに回避する術などあるわけがなく、受け身すら取れずに重力球をその身で受ける。

重力球はユキを飲み込み、重力球が消えた頃にはユキの姿は微塵も残ってなく、この瞬間ユキ・ロスリックはトータスから完全に消滅した。

第二十八話 天津悠姫

西暦2578年——その年、世界は崩壊した。

アストラル星辰体技術の争奪に端を發した第五次世界大戦は、全世界規模の空間震災と、地球環境の改変を引き起こした大破壊により幕を下ろす。カタストロフ

有史以来最大となる空前絶後の災禍の前に、既存文明は一新された。

だがその転換期の裏側である一人の少年の、永く不可思議な物語が始まっていた。

西暦2005年——その年、一人の少年が忽然と姿を消した。

飛行機という密閉空間で忽然と姿を消した少年。後に現代最大の怪奇事件として語られる謎の飛行機事故。少年——天津悠姫は一体どこへ消えてしまったのか。

その原因こそが西暦2578年に発生した大破壊。カタストロフ時空間を引き裂いた大災害は、遙か数百年前の地球に僅かながら影響を及ぼし、偶然その座標にいた天津悠姫を高位次元へ飲み込んでしまった。

西暦2575年——その年、世界は震撼した。

世界中が抱えるエネルギー不足。その問題を、極東の島国、日本が高位次元からのエネルギー抽出に成功。星辰体アストラルと名付けられた無尽蔵のエネルギーにより、世界中のエネルギー不足は解消されるかと思われたそのとき、日本は星辰体技術アストラルの独占を宣言。後の第五次世界大戦の引き金となった。

その時代の裏側で、ある一人の少年が世界に現れた。その少年こそ天津悠姫。存在し
ていながら存在していない、この時代において未知の結晶と言える少年だった。

高度に文明が発展したこの時代、国民として国が認知していない人間は限りなく少ない。それは落第者ドロップアウトした人間や浮浪者も含んでおり、出生記録から一国民として認識されている。そして人命がより尊重されるようになったことで、先の落伍者や浮浪者でも、むやみに行方不明や処分を行うことができなくなっていた。

増えていく人口とエネルギー不足。

日本が高位次元から星辰体アストラルの抽出に成功することでエネルギー問題は解決したものの第五次世界大戦へと繋がり、加えて使えない人的資源リソースの活用に頭を悩ませるのは国家

の宿命とも言えた。

様々な対策が行われる中、アストラル星辰体と高位次元を利用した方法で、地球そのものを書き換えようと試みる計画があった。

プロジェクト・テオゴニア。

環境改竄装置《テオゴニア》を用いて地球を包み込むあらゆる穢れを浄化して、地球を新天地へ作り替えようという計画。

選ばれた神々支配者によつて統治された新世界。

人々の衣食住、思想、職業、そして寿命さえも神々に管理された、オリエンボス管理世界を生み出そう。

とはいええそう簡単に実行できるものではない。事実、この計画には克服しなければならぬ幾つかの問題あった。

一つはエネルギー。新たに発見されたエネルギー、アストラル星辰体を用いることを前提としたこの計画に必要なアストラルジネレータは、最低でも次元間相転移式核融合炉に相当する。

もう一つが高位次元とアストラル星辰体に関する情報が足りていないということ。いくら独占しているとはいえ、アストラル星辰体と高位次元は日本にとつても未知の領域。故に、アストラル星辰体が人体に与える影響、感応量による力の推移、それらが不明。

だがそのための臨床実験を行おうと知れば、人権問題が壁となって立ちほだかる。

そのため一向して進まず、計画凍結の危機すら迫ったその時に、一筋の光が差し込まれた。

高位次元を生身で漂った為、アストラ星辰体と半ば同化している一人の少年。過去から渡ってきた故に戸籍などがあるはずもなく、法としては存在していないことになる男の子。

それが天津悠姫。未来の事象によって過去から現れた少年だった。

その身柄はすぐに取り抑えられた。

それはまるで肉塊に群がる飢えた猛獣のようで、鎖で繋がれ幽閉され闇の深奥へ封じ込められた。

彼が実験体モルモットなつて行われた実験は数知れず、人命を無視した苛烈な実験がほとんど。何故なら悠姫が得てしまった特異体質が、悠姫を死から遠ざけていたから。

心臓の鼓動が停止する。脳に送られる酸素が途絶え、この世界で唯一無二である悠姫はその生に幕を降ろす——ことは無く、心臓は動き出し、脳は再び活性化し、悠姫は死の淵から掬い上げられた。

手足が切断される。まるで達磨となった悠姫は、芋虫のように地べたを這い回り——数分後には切断された手足は元に戻り、悠姫はその二本の足で立っていた。

壁と壁に圧縮され血肉が潰される。目玉が飛び出て、内臓が口から逆流する。壁に染みる血肉ミンチの華となり——数分後には染みは消え、傷一つない悠姫がそこにいた。

死んでは生き返る。傷つけばすぐに治る。

ではどのように？ 生き返る法則は？ 斬殺撲殺刺殺銃殺轢殺、結果の違いは？ 薬

物の効力は？ などなどと…

悠姫は幼く、そして無力。故に一切の抵抗もできず実験体にされ続けた彼の心が、次第に砕けていくのは必然だった。そのためなのか、それとも別の理由あるからなのか。ある一時を越えたあたりで肉体の再生能力が機能しなくなった。

そこで悠姫の扱いは主に三つに分離した。

一つはこのまま殺してしまおう。未知の塊である悠姫の存在は、様々な面で爆弾となりえるのだと。

もう一つはこのまま標本にしよう。悠姫の存在はまさしく神の奇跡。その御加護が失せたとしても、唯一無二であることに違いはないと。

そして三つ目であり、結果として選ばれた天津悠姫の有効活用。

生体ユニツトとして、環境改竄管制機に繋いでしまおう。

仮にも高位次元と繋がっているのだから、エネルギー源としてこれ以上の素材は存在しないと。

そして肉は削がれ骨が断たれ、シリンドーに浮かぶ脳髓のみとなった、人だった何か。これが、天津悠姫の成れの果て。新たな星の生み出すための生贄として捧げられた少

年の末路だった。

星^{アストラル}辰体や高位次元への知見を得て、天津^{ジュエネレータ}悠姫も確保した。いざ高位次元と接続して新世界を——となることはなく、プロジェクト・テオゴニアには残り一つの課題が残っていた。

それはテオゴニアの制御機構。いくらエネルギーを確保しようとも、制御できなければ意味がない。当初はIAによる制御を行おうとしていたが、エネルギー源が生体ユニットになったことで感情による不安定が問題視されていた。それは奇しくも後の新時代に誕生する■■■と似たようで、即ち天津^{ジュエネレータ}悠姫との星^{アストラル}辰的同調率が高い生体ユニットが必要だということでもあった。

だが、まだ星^{アストラル}辰体が発見されただけの時代。天津悠姫だけでも奇跡の産物であり、易々と見つかるはずもないと思われていたが、またもや奇跡は訪れた。

それはプロジェクトに参加していた研究員の女性。プロジェクトの研究員で唯一、天津悠姫を人として接していたからこそなのか、天津^{ジュエネレータ}悠姫との同調率がまるで親類ではと思うほどに高かった。そして、彼女も悠姫と同じように、制御用生体ユニットとしてテオゴニアに繋がれた。

二つの生体ユニット、個体名称：カオス、ガイアの二体が揃ったことで、西暦257

8年——プロジェクト・テオゴニアの要石、環境改竄装置《テオゴニア》が完成した。

そして同年、世界の崩壊が始まった。別の星^{アストラル}辰体^{カタストロフ}研究チームが管理する次元間相転移式核融合炉の暴走によって引き起こされた大破壊^{カタストロフ}。その大破壊による空間震災は容赦なくテオゴニアが存在する研究所を飲み込み、起動前のテオゴニアは後の第二太陽^{アマテラス}として同化する、はずだった。

ここである複数の要因が重なることで、このテオゴニアのみが別の動きをした。

まず一つとして、天津悠姫という少年は西暦2005年から西暦2575年に、生身で高位次元を渡ってきていること。そのため、如何なるものよりも高位次元への親和性が高く、第二太陽^{アマテラス}とは別の特異点として独立したこと。

そしてもう一つ、天津悠姫の存在自体が、どの時間でもあやふやであるということ。

「未来（西暦2578年）の事象により過去（西暦2005年）から現在（西暦2575年）に飛ばされた」

というのが天津悠姫の経歴。それはつまり現在過去未来すべての時間軸の影響を受け、なおかつこの大破壊^{カタストロフ}に飲み込まれているときは過去と現在、二人の天津悠姫がいるということになる。そしてこの過去の悠姫は再び大破壊^{カタストロフ}によって更に過去の天津悠姫と……という、即ちブートストラップパラドックスに嵌ってしまった。

卵が先か鶏が先か、という方が確だろうか、これらがバグとして蓄積された結果、全ての時間軸で存在しながら存在していないというなにかに変質した。

その結果、天津悠姫と実質的な融合していたガイアの二人は第二太陽では無い、存在しながら存在していない始まりにして異端の特異点、原初神話として生まれ、誰にも観測されないまま高位次元に浮かび続けることになった。

そして時は流れ新西暦1005年。軍事帝国アドラー、帝都の貧民窟に一人の子供が流れ落ちた。

その名前は天津悠姫。西暦2005年からここに飛ばされたという記憶を持つ少年だった。

少年はとても特殊な存在だった。なぜなら少年が死亡した瞬間に、この時代に少年が現れた時まで世界の時間が巻き戻るようになっていいるからだ。そしてまた同じ物語を歩むことになる。

それはまるでゲームのようで、Aの道を進めば死亡、最初から始めて、再びAに進めば死亡、Bを進めば次の選択へ、といったよう。もちろんB、またはBより先で死亡す

ればまた初めから。

死亡して道を覚え、死亡して道を覚え、それを繰り返していくうちに悠姫の心は同時に死んでいった。この地獄の終わりは分からない、だというのに自分は死を繰り返す、死んで戻る。

そして死リセットに戻りが百を超えたあたりで少年の心は完全に力尽きた。初期地点に座り込んだまま動かない。更にはこれも選択の一つとして機能しており、やがて悠姫は大人数人に身包みを剥かれることになる。抵抗することもなく身包みを剥がされ、鬱憤晴らしなのか複数人からナニや暴行を受け、再び死リセットに戻りをするかというとき――

「そこまでだ、悪党ども」

――光明が差す、とはこのことなのだろうか。歳は悠姫とは離れていないだろう、金髪の少年がそこに立っていた。その姿に、既に死んでしまったはずの悠姫の心にある感情が満ちた。

(すごい、かつこいいい…僕も、俺も、あんなふうにな)

希望か、憧れか、少なくともこの天津悠姫の人生にとって最大の分岐点ターニングポイントになったこととは間違いない。結局のところ、この悠姫の身体は既に限界であり、すぐに死に戻ることになる。だが、その瞳には強い信念が宿っていた。

この時の少年こそ、クリストファー・ヴァルゼライド。正史において軍事帝国アド

ラー第三十七代総統閣下の地位に着き、旧暦の遺物と聖戦を約し逆襲撃に敗れる男であった。

そう、正史において。つまりこの世界は異物によって狂ってしまった。

時は戻り、前を進むことを決めた悠姫。そこから数回の死に戻りでクリストファー・ヴァルゼライドの名前と、帝国軍へ入隊するという目的を知りその手助けをすることを決めた。というのも、決して彼の道に無関係ではないという言い知れぬ何かを感じたからでもある。

そこからの悠姫の行動は合理的ではあるが、人としては常軌を逸していた。

無限に人生を繰り返すというこの状況は、知識を集めるという点においては有効だと考え、人生一回分約数十年を一つの知識を集めることに当てることにしていた。十年ないし二十年を数回繰り返し返して医学を、歴史をなどなど。身なりを整えれば悠姫はかなりの容姿であるため、男娼になったこともあれば貴族に取り入ったこともあった。

合計ですでに約千年分は体験しているであろう悠姫だが不思議と衰えはなく、やがてユキ・ロスリックと名前を変え、ヴァルゼライドともう一人の新しい親友、アルバート・ロデオンと出会う。三人はそれぞれユキ、クリス、アルと呼ぶほど仲が良くなり、そして三人は帝国軍に入隊した。

入隊後、軍学校でも三人の關係は変わらず、知識という点においては明らかに群を抜くユキ、あらゆる不条理を乗り越え続けるヴァルゼライド、その異常な二人についていけるアルバートは様々な意味で目立った。軍学校卒業後に配備された東部戦線での新しい仲間、天才のギルベルト・ハーヴェスが加わったことで勢いはさらに増した。

傭兵団「神風の虹」の制圧、東部に深く根付いていた巨大麻薬組織「ニルヴァーナ」の壊滅、それに伴う前線の押し上げなど、少なくとも当時の権力層に目を付けられる程度にはすさまじかった。

やがて東部戦線から帝都へ移され、所謂飼い殺し状態になったとき、ユキとヴァルゼライドはそれぞれ己の人生を変える者と出会うことになった。

旧暦日本の遺物、ガイアとカグツチ。

このガイアとの出会いが、ユキ・ロスリックを未来を決定づけた。

ガイアによって語られたのはユキ・ロスリックとクリストファー・ヴァルゼライドを結んでいる因果律。

『正史に存在しないユキ・ロスリックという異物が紛れていることで、クリストファー・ヴァルゼライドは道半ばで倒れることになる』

ありえない、と思いつながらにも納得してしまった。知識を付けるために奮闘していた約千年間、ニユースなどにおいてクリストファー・ヴァルゼライドの名前を聞いたことが

なかった。東部戦線の押し上げなど、何回聞いたことがある？ 隣で駆け抜けたからこそ分かる異常性。ブレーキが壊れた暴走列車のように前へ進み続ける彼が、ユキがいないだけでアドラーの玉座に座れないことなどあるだろうか？ むしろそちらの方がありえない。

ただし、不条理を覆すヴァルゼライドの覚醒進軍を因果という何かによつて防がれているのならば最低限の納得は出来る。

ではなぜユキとヴァルゼライドの因果律などが構築されているのか。それはガイアのみが知ることであり、それが語られることはなかった。しかし重要なのは過程ではなく、この現状。自分の存在が英雄の進軍を妨げるといふならば是非もなし。この歪みを正して世界をあるべき形に戻してみせよう。

そして計画されたのが星辰戦争ギガントマキア。二人を繋ぐ因果律を断ち切るために、クリストファー・ヴァルゼライドという英雄ゼウスがユキ・ロスリックという怪物テュホエウスを打ち倒す英雄譚。

それも、ただユキが敗れるだけでは何の意味もない。文字通り、因果律を断ち切る何かが必要だった。そうして、幾度と星辰戦争ギガントマキアは繰り返された。数百数千と繰り返し、遂に完全な形で星辰戦争は終わりを告げた。思えばこの時すでに、ヴァルゼライドは■
としての片鱗を見せていたのかもしれない。

この無限に近い死に戻りを二人の少女が見守っていたことも知らず、ユキ・ロス

リック、天津悠姫は新西暦にて息を引き取った。

第二十九話 創世せよ、原初の創星宇宙論

「——アアああああ！」

「ハ、ハジメ！」

ユエの静止すら無視してハジメは鬼神の如く暴れまわる。無理もない。無能と馬鹿にされた自分を支え、隣で歩み続けてくれたユキの存在は、ハジメにとつて希望であり英雄だったのだから。そのユキが殺された、助けられたはずなのに。自分はその時何をしていた？ ミレデイに妨害されて助けられなかったなどただの言い訳に過ぎないだろう。

「俺は、俺は、俺は！」

「隙だらけだよ！」

「ッ！ ハジメ、ダメ！」

怒りによつて視野が狭くなっていたためか、迫りくる浮遊ブロックと騎士ゴーレムに気づかなかつた。迎撃しようとドンナーを向けるが弾が出ない。弾切れにも気付かなかつたらしい。

「させ、ない！」

「ですうー！」

ユエとシアによつて迎撃されたが、

「これはどうか、な！」

「もらいました」

間髪入れずライセンス姉妹による追撃が来た。システイの横薙ぎは弾けたがミレデイのヒートナツクルまでは避けられない。ハジメは二人を抱えて身を盾にし「金剛」で直撃に耐え抜いた。

「ガッ！」

「ハジメ（さん）！」

ユエの「来翔」によつて墜落は避けられたが、さすがのハジメでも無傷で耐えることはできなかつたようで、体の至る所から血を流して荒い息を吐いていた。とはいえ、さすがに冷静さを取り戻し確かな眼で二人を睨みつけた。

「お仲間一人やられて頭に血が上つちやつたのかなー？ 冷静さを忘れるなんて、まだ

まだだね」

「姉様。さすがに不謹慎です」

「分かつてるよシーちゃん。でもクソ神と戦うなら、この程度覚悟しないと」

ミレデイはエヒトに犠牲無しで勝つのは不可能だと暗に仄めかす。事実、まだ静観し

ている真の神の使途は非常に強い。ならば当然、その神の使途を従えているエヒトが弱いわけはなく、ならば仲間の死を覚悟しておかなければならないだろう。

ハジメはその覚悟ができていなかった。なまじ異常なステータスを持ち、既に世界最強と名乗つても不思議ではないほどに強いために、そのハジメが希望ヒカリだと信じるユキが死亡するということを考えられなかった。

「…そうだよな。まだだよな」

「ハジメ？」

「ハジメさん？」

ハジメはぼそりと何かを呟く。

覚悟ができていなかった？ その通りだ。仲間を失う覚悟ができていなかったのだろう。だが、それが今を諦める理由にはならないはずだ。

「済まねえな、ユエ、シア。情けねえ姿を見せちまった。ああそうだ、諦めるわけにはいかねえよな」

不滅の光をその眼に宿し、決意と共に立ち上がり叫んだ。

「いくぜ！ まだ俺たちは負けてねえ！」

瞬間——

「どうだったかな、僕の人生は」

「どうだった、俺の人生は」

少年と男の声が、謎の空間に響き渡る。

一方では輝く星が昇り、暗き星が沈む。一方では赫き星が別の星々を呑みこみ、蒼き星は別の星々と銀河を巡る。そのような、世のすべてを混ざり合わせたかのようなこの空間を一言で表すならば、渾沌と言えるだろう。

そして、この空間を漂いながら声を受け取っているのはシステイ・ライセンに殺されたはずの男、ユキ・ロスリック。

「…最悪だろ。あんなもの見せるなんて趣味が悪い」

「はは、必要なことだったんだから許してよ」

「それに、俺たちの趣味ってことはお前の趣味でもあるんだぞ」

三人の会話は奇妙で、まるで同じ人間同士が会話をしているようだ。というのも当然、この三人は厳密には違うものの、同じ人間同士なのだから。

西暦2575年に現れたのは、真正正銘本物の天津悠姫。

新西暦1005年に現れたのは、原初^カ神話^オから三次元上に転写された、いわば複製体。トータスに召喚されたのは、同じく原初^カ神話^オからトータスに転写された複製体。

原初^カ神話^オと化したのが天津悠姫ならば、その存在^ア定義^カを使用されて生まれたのがユキ・ロスリックだ。結果的に三人は同一人物であり、同時に記憶を共有している他人ということになる。

「冷静に考えれば不可解なことはいくつかある。なぜクリスなのか、なぜ死に戻りなんてしていたのか、そもそもなぜ未来に飛ばされたのか、とかな。一つくらいは偶然なんだろうが、明らかに意図的すぎる。まあ多分、」

「『大方ガイアが悪い』」

その通り。クリストファー・ヴァルゼライドと繋がっていた因果関係、死に戻りによる無数の繰り返し、その他天津^{ユキ・ロスリック}悠姫に関わる諸々、その殆どの根本的原因是ガイアにある。

ではユキはガイアを恨んでいるのか、憎んでいるのかといえば、別にそうではない。永く苦しみだらけの人生だったが無駄ではなかった。トータスへの召喚、旧友との再会、今まで戦い続けたその意味が、ここまで導いたのだから。その恩人に対し感謝こそして、憎むなどあるはずがない。

「さあ、僕たちの真実は見せたよ」

「俺達の勝利は、一体なんだ」

それに何より——

「：勝利とは■■■こと。だが、今はただハジメ達と先に進みたい」

「ガイアは？」

「助ける」

「彼女が原因だとしても？」

「それならなおさらだろう。色々聞き出さなきゃならないこともあるが、なにより俺は彼女と一緒にいたい。永いこと待たせてしまっているらしいしな。それに、」

『私たちのせいで辛い目にあわせてしまって、ごめんなさい』

——セントラル地下でガイアに会った時、彼女は泣いていた。

彼女から見れば、天津悠姫という少年は偶然巻き込まれてしまった被害者に過ぎない。それなのに人類の為になどと実験台にされ、加えただの死より屈辱ともいえる人生の終わりを経験した。その一端を担ってしまった自分が憎い。そして何より、彼をそうさせてしまった世界が■■■ない。だからせめて、彼を■■■■■■■■■■と願った。

あの涙が偽りとは到底思えない。それがこの状況を作り出してしまったことへの罪悪からの涙なら、笑い飛ばしながら拭うのもユキの役目だろう。

「これは、俺たちの旅路だ。彼女がいなければ意味がない」

共に生き、共に死に、共に繰り返し返してきた二人。ならばこそ、ユキ・ロスリックの旅路はガイアと旅路と言つても過言ではない。永い旅路で見つけた勝利は、二人で掲げる方が最も相応しい。

「ならば——」

これは歓喜の絶叫か、渾沌が産声を上げるかのように震える。事実、これは産声だった。本来の星辰を宿し、ユキ・ロスリックは天津悠姫として新生する。

さあ、真の怪物、渾沌の化身よ。トータスに自由を与え、ガイアを救い、そして——

「星辰の系譜をここに」



「創生せよ、天に描いた極晷を——我らは神代の流れ星」

「神祇降臨・顕星開始」

——突如、虚空に詠唱が響き渡る。ハジメも、ユエも、シアも、そしてミレディとシ

ステイも、一斉に動きを止めた。そして全員が同じことを考える。この声に聞き覚えがある、だが先ほど死んだはずなのに、と。

システイは黒天を落としたその場所に目を向けた。そこにはただの黒い穴が浮かんでいるだけで……黒い穴？

「千古不易を約束されし宇宙を彷徨い幾星霜。光闇の射さぬ空の異界、裂目に吞まれ幼く無力な我が総身は血肉の一片残らず渾沌に溶け落ちた」

瞬間、その黒い穴を覆いつくすように黒い結晶体が生えてきた。とてつもないエネルギーを放つそれは、まるで神代魔法そのものが結晶になったとでも云うような。

「独り成るは造化の三神、神代の二神。高天に座するは陰陽六柱の十二神。

裂目より出でよ八百万、溶けた我が魂を贄として

さあ、新世界の幕開けである」

「混ざり固まるは実り豊かな大地の化身。万夫不当を謳うは幾億幾千の星の海

滅ぼす程の大戦が起きようとも、

黄金の稲穂が朽ちることなどありはしない

人間の輝き、人間の未来、人間の可能性は無限なのだから」

「覚醒せよ、飛翔せよ、開闢せよ。特異の極点は此処にあり」

この場で唯一、この状況を正しく認識できるのはシステイのみ。■■■■の眷属である

からこそ感じ取れた、感じ取つてしまつた。彼がトータスに召喚されてから今までの戦いはただの前哨戦に過ぎなかつた、真の絶滅闘争は此処からだ。

怪物は死んだ？ 違う、これが真の怪物なのだ。

「夫、混元既凝、氣象未效、無名無爲、誰知其形——渾沌万歳」

そして

「超新星」——「神統記紀・創世せよ、原初の創星宇宙論」

——原初の星辰、渾沌の怪物、天津悠姫がトータスに生まれ落ちた。

結晶体——黒星昌鋼が砕け、その中から天津悠姫が現れた。

ユキ・ロスリックとしてトータスに召喚されたときよりもさらに若返り、それこそハジメたちと同年代の容姿になっている。しかしその容姿とは裏腹に、その身体から滲み出ている気配は先ほどとは桁違いに膨れ上がっている。

太刀を片手に構えるその姿、顔を上げた悠姫のその眼に言い知れぬ虚無を感じ——

「——ッ、アアアアアッ！」

咄嗟のミレデイの静止すら振り切り、全力でシステイは悠姫に槍を突き出しながら突撃する。一種の恐怖による火事場の馬鹿力の影響か、ゴーレムという身体でありながらこの突撃は過去最高速度だった。悠姫まで残り一メートル、対処するにはもう遅く直撃は免れないはずで、

「なッ——ッが！」

地面から突然現れた黒星晶鋼アキシオンがシステイの槍を受け止めた。表層に数センチだけ突き刺さったが、それ以上は微塵も進まず、今度は逆にシステイの反対側——悠姫の鋭い一突きが黒星晶鋼アキシオンを砕きながらシステイを襲った。

砕かれた黒星晶鋼アキシオンからおよそ数十センチ、さらには驚くべき事態が連続していることに対処に考えが回らず、砕かれた黒星晶鋼アキシオンが弾丸の如く襲い掛かり、同時に悠姫の一突きが直撃した。そのままシステイは数ブロック先へと突き飛ばされる。

二転三転と切り替わる目の前の出来事に動けないハジメたちに、

「ハジメ」

「あ、ああ」

「——ただいま」

「ッ、おせえぞ！」

悠姫は己の帰還を告げた。

容姿は変わってもその信用は変わっていない。むしろハジメは先ほどの無様さを恥じているくらいだ。奈落に落ちたときも、ユキはハジメの生存を疑っていなかったのに。今回の場合はユキが消滅する瞬間を見ていたのだから無理はないが。

むしろ驚いているのはミレデイたちの方だ。死んだはずの人間が生き返った、いやそもそも生き返りなのか？ ミレデイの眼光であろう部分が点滅しているあたり、かなり動揺しているのだろう。

「——驚きました。どうやって、ありえないなどとは言いません。さすがは怪物、私たちの予想を覆してきますね」

そこに、突き飛ばされたシステイが戻ってきた。

一撃を貰ったからか又は時間がたつたからかシステイは冷静になつて状況を見据えている。システイとて死から蘇るのは想定外、だが想定外を起こすからこそ怪物だと。

「怪物を打ち倒すのは、いつだって英雄でなければならぬ」、ですか。なるほど、英雄ではないと宣言している私たちに、怪物あなたを倒すことなどできないのは道理ですね」

「それじゃあ、おとなしく負けを認めるか？」

「それこそありえないでしょう」

システイは再び槍を構え、悠姫も太刀を構える。

「ハジメ、ユエ、シア。ミレデイそっは任せろ」

「姉様。ハジメたちは任せます」

「ふッ」

「せあー」

状況は最初とそれほど変わってはいなかった。太刀と双槍、当然手数はシステイが優勢ではあるものの、それを覆せるほどの実力が悠姫にはある。では悠姫が優勢なのかと言えば、特段そういうわけでもない。双槍と同時にシステイが重力魔法にて操作するブロックや複数のゴーレムが、時には死角から襲い掛かり、時には壁として表れて行く手を遮ったりと、決定的な攻撃には繋がらなかった。

とはいえこの状況が続くわけでもない。新しい身体の使い方も覚え、新生した悠姫の真価が発揮されはじめる。

「さて、見てわかると思うが俺は生まれたばかりだね。悪いが慣らしに付き合ってもら

うぞ。

” 分裂型爆発星辰光”、一掃しろ”

大気成分を化学反応にて燃焼起爆させ、周囲のゴーレムへ放たれた。小規模、しかし高出力の爆撃は、それなりの防御性能を持つはずのゴーレムを瞬時に鉄屑へ変えた。

「まだ残ってますよ、それにゴーレム程度、すぐ元に戻るー」

新たに投入されたゴーレムの一体に太刀を突き刺した悠姫に、復活した三体のゴーレムが迫る。その場で太刀を手放しゴーレムの攻撃を回避するが、そこに双槍を構えたシステイも迫る。太刀、つまり発動体を手放したということは、星辰光アステリズムが解けたということでもある。故にシステイは好機であると判断したのだが、

「怪物を基礎知識おれじょうしきで見るとよ。

” 自爆星辰殲滅光”、吹き飛ばし

それは通常の星辰奏者の話であり、今の悠姫に発動体は必要ない。自身を基点に自爆することでゴーレム諸共システイを吹き飛ばす。悠姫はその一瞬で太刀を回収、システイは体勢を整えるため吹き飛ばされた勢いのまま後方へと退避する。

悠姫は下がるシステイを追わずその場で納刀、

「” 星環境変性”

——” 超新星”

——” O r o t i n o a r a m a s a T y r f i n g
拔 刀 ・ 天 羽 々 斬 空 真 劍 ”

そのまま前方へ抜刀三閃、一拍おいて更に二閃。宙を斬ったはずの剣閃は、離れているシステイを斬り刻むために襲い掛かった。

「なッ！ツああ！」

斬撃を飛ばしてくるとはさすがに予想外ではあった。ただ、この状況下で無意味な行動はしないだろうと悠姫の一拳一動を警戒していたことで、最初の三閃を槍で弾き、続く二閃を一拍の間に騎士ゴーレムを挟ませることで防いだ。

しかし、騎士ゴーレムの陰になってシステイから悠姫の姿が見えなくなったその一瞬、悠姫はシステイの懐に潜り込み、

「『星環境変性』
オルタレーション

—— 『超新星』
Metainova

—— 『神罰観面、神敵粉碎、豪放磊落。』
Megin, Gjin, Gjo, rd, Mj, l, n, i, r

先とは異なる星辰による鉄拳をシステイに叩き込む。

「ガッ」

筋力強化された拳による重い一撃は初撃の一突きのようにシステイを殴り飛ばした。だが今度は同時に振りぬいた悠姫の左腕を斬り飛ばすことに成功していた。

即座に立ち上がり体勢を整えたシステイが見たのは、先の自爆技によりぼろぼろになり左腕を欠損した悠姫の姿。誰が見ても重症だと言うであろうほどの傷を負っている。

だが次の瞬間、悠姫の全身を黒星晶鋼アキシオンが覆ったかと思うと、先ほど現れたときのように

に傷一つ負っていない悠姫が現れた。

「ツ……なるほど……自動回復、いえ自動修復ですか。そのうえこの大峽谷でも尽きない魔力、さきほどの黒い穴。常に黒い穴あから魔力を供給されている、といったところですか」

「おおむね正解だ。その黒い穴は、この三次元と高位次元を繋ぐ可視化された門のようなもの。高位次元に漂う無垢のエネルギーに不純物を加えて三次元上に放出する役割がある。そうやって放出されるのが――」

「――魔力」

あるいは星アストラル辰体と呼ばれるもの。

例えるなら水が近いだろう。不純物の存在しない純水というのは味がなく、電気を通さない。そこにミネラルであったりビタミンなどが混ざること、飲料水などに代わる。

これが星アストラル辰体や魔力に当てはめるとこうなる。高位次元の無垢のエネルギーに、「空気抵抗増大」「金属低効率一律ゼロ」などの要素が加えられたのが新西暦を覆う星アストラル辰体、別の要素を加えられたのがトータスを覆う魔力になる。

それが魔力が多い≡星アストラル辰体感応率が高い、というステータスの正体だった。元々の姿が同じなのだから、ステータスがある程度共有されていても不思議ではない。

「そして、これが俺の本当の星辰光^{アステリズム}。第二太陽が照らす森羅の元に生まれた星光^{ほし}たちの星辰^{テオゴニア}の系譜。俺達が語り継ぐ物語^{こゝもたち}だ」

星辰光^{アステリズム}は、各々の星辰奏者^{エスベラント}が己を最小単位の星と定義し、その星の環境を身に宿した能力というもので。では、環境を自由に變えることができたらどうか？ その答えこそが本来の悠姫の力。

星辰体結晶化能力・変性型。

星辰体^{アストラル}と感応する己の性質を變化させることで、状況に合わせて異なる星辰光^{アステリズム}を輝照できる能力。高位次元という渾沌に直接取り込まれあやふやな存在に、決まった形がないからこそ身に宿した、異端にして始まりの星辰光^{アステリズム}。

「…ああ、過去の自分を殴り飛ばしたい気分です。先ほどの評価を全て撤回します。予想以上の強さだった？ 言い残す？ 何を馬鹿なことを」

なぜ上から目線で語ることができるのか。私は知っていたはずだ。光を信じる者の異常性を。

まさか死から蘇るなど想像のしようもないが、実際に目の当たりにして確信した。この男はどんな不条理も覆す、それを認めさせる力も、それを可能にする力もある。今がまさしくそうなのだ。

事実、システイは自身の星辰光^{アステリズム}を解いていない。

正確には、ユキ・ロスリックが死亡したときに一度解いているが、天津悠姫が現れたときに再び輝照し、それから一度も解いていない。悠姫がシステイの双槍を捌いているときも、システイが悠姫の腕を切り落としたときも、星光は変わらず輝いていた。

なのにシステイのステータスが強化することはなく、また悠姫が弱体化している様子も感じられない。いや、遅々とだがシステイの星辰光アステリズムは効力を発揮している。だが使用者だからこそ微かに分かるという程度で、傍から見れば全く効果が発揮されていないように見える。その使用者でさえ強化を実感できるには接触し続けても前の数十倍は掛かる、それほどまでに効果が減衰している。

そこにどのような要因があるのか、システイと悠姫は理解していない。だが少なくとも、星光ほしによるシステイの優位性は失われたこと、そしてその優位性をシステイが取り戻すことが不可能だということは理解していた。星光ほしが効いていない要因が分からない以上、対処のしようがないからだ。

さらに高位次元から供給される無尽蔵の魔力で大峡谷の性質を攻略している。最早現在の悠姫は、不利という言葉とは完全に対極に位置している。

「…力業で状況を覆すなんて」

不利からの覚醒、敗死からの復活、そして不条理を無理やり押し返すその在り方はまさしく英雄らしく。同時に怪物らしく。

「……とても野蛮、でも——」

——どこまでも惹かれる。

この男なら、私たちの悲願を成し遂げてくれるのではないか。いや、必ず成し遂げてくれるはずだ。なぜなら彼は、私たちの■ ■なのだから。

「ひとつ質問を。あなたは、英雄ですか？」

それは先とは立場の逆転した同じ質問。システイは、はつきりと違うと答えた。己は処刑者であり逆逆者であると。対する悠姫の答えは、

「知らないさ。英雄かどうかを決めるのは周りだ。誰かにとつての英雄は、別の誰かにとつては怪物になる。それが現実だ。」

だが、神の遊戯が希望を閉ざすのなら、俺は支配秩序を破壊する怪物になる」

『彼は全てを■ ■。だから彼は、みんなの■ ■になる。覚えておいて、システイ。誰かにとつての英雄は、別の誰かにとつては怪物になる。その逆もまたしかり。』

だから、悠姫妹の正体が一体何なのか、それはあなたの目で確かめて、そしてあなた自身が決めなさい』

（ああ、本当に、あなたは）

ガイアは、この状況を読んでいたのだろうか？ ユキ・ロスリツクの敗北と、天津悠姫の誕生を。

そして、私のこの想いを。

「さて、あつちは終わつたみたいだ。こつちもそろそろ決着を付けよう、システイ・ライセン」

悠姫の視線の先には胸に杭を穿たれて倒れているミレ^ねデイ^{えさま}の残骸と、その傍らに立ちこちらを見ているハジメ、ユエ、シアの三人。

「…ええ、決着を付けましょう、天津悠姫」

彼に名前を呼ばれるだけで、なぜだか気分が高揚してくる。彼の名前を口にするだけで、なぜだか笑みが止まらない。憧れのヒーローに会えた男の子のような、白馬の王子様に恋をする乙女のような。

「英雄^{怪物}」

既に、システイは己の敗北を悟っていた。先ほどまでの強化値はユキ・ロスリックが消滅したときに同時に戻っている。ただ限界まで強化されたという事実は変わっておらず、その反動でシステイのゴー^かレム^ら体^だは軋みを上げている。あと少し無茶をすれば先のユキのように自壊してしまうだろう。

システイの星光^{ほし}は効かず、大峽谷の性質も実質無効化されている。不死身の悠姫に、時間経過で自壊するシステイ。更に悠姫の星光^{ほし}は輝き、その能力は無限の選択を秘めている。もはやシステイの勝機は絶無といえる。

だがそのようなことは全く問題ではない。迷宮の主として姉妹の敗北も問題ではない。むしろこれこそ解放者わたしたちの勝利だ。天津悠姫は必ずこのトータスに新しい時代を齎してくれる英雄怪物になるのだと信じられるから。

そして――

「星環境変性」

―― “超新星”

―― “焔翼たれ、蒼穹を舞う天駆翔・紅焰之型”

爆炎を連続噴射して急加速を繰り返すことで騎士ゴーレムの攻撃を掻い潜り、

「星環境変性」

―― “超新星”

―― “狂い哭け、罪深き銀の人狼よ”

振動操作によつて超高周波ブレードと化した太刀が双槍ごとシステイの両腕を断ち

切り、

「星環境変性」

―― “超新星”

―― “雷霆の轟く地平に、闇は無く”

雄々しく輝く殲滅光がシステイを消滅させた。

第三十話 回りだす運命の歯車

「終わったな……」

胸部に漆黒の杭を叩き込まれて横たわる巨大な騎士ゴーレムがいた。

それはハジメ達三人と戦っていたミレデイ・ライセンであり、瞳の光が失われていることから、ハジメ達が勝利したことが分かる。

三人は疲労困憊の様子で、最後の一撃を叩き込んだシアはドリユツケンを支えにしてようやく立てるほどだった。

三対一。それも化物ステータスのハジメ、魔法に関しては天才のユエ、身体強化でハジメに匹敵するシアの三人。

さすがは世界を敵に回した^{解放者}反逆者と言うべきか、小国相手であれば正面からでも戦える程の戦闘力を誇るパーティを相手に、単独で戦い追い詰めたミレデイもまた化物と言えるだろう。

「それにしても……すごいですね」

離れた場所で斬り合う悠姫とシステイを見ながら、シアがぼそりと呟いた。

よく考えてみれば、ユキもとい悠姫の本気をシアが見たのは初めてではないだろうか。

シアにとってユキ・ロスリック天 津 姫という男は、ハジメやユエと同じ大切な仲間であり、ハウリア全体の恩人。でも同時に、今一つ理解しきれない不思議な人間でもあった。

ハジメのようにアーティファクトを作れるわけでもなく、ユエのように吸血鬼だったり魔法が優れているわけでもない。

ただ純粹に巧く強いという良く言えばシンプル、悪く言えば地味。

それにトータスの外から召喚されたのに、解 放 者 反逆者に知り合いがいる。

更には消滅から若返って復活。それどころか魔力分解作用をものともせず色々なアステリスム星辰光まで使用している。竜巻を起こす、斬撃を飛ばす、火弾、風弾、電撃放射、などなど。

正直、本当に同一人物なのかすら疑わしい。

でも怪しさや危機感を感じない。むしろあの背中を見ているとどこか安心感さえ感じてくる。まるでかつて守ってくれていた兄デイルグの影を見ているようで……ハッ！

「私はハジメさん一筋ですよ！」

「なんだいきなり」

浮気ではありませんとばかりに否定から入るシアに、そもそも付き合つてすらいねえ

という視線を送るハジメ。神妙な雰囲気など一瞬で消し飛んだ。

「まあ、姿形がどうであれユキはユキだ。心配するようなことはねえだろ」

「うん、本当だね。光は光だし、怪物は怪物だ。それは絶対に変わらない数式だし、見た目が違うから仲間じゃないというのは、本当の仲間とは言えないよね」

突然三人に話しかける別の誰か。その声の主はすぐに見つかった。というより一人しかいないというべきか。

「まだ生きてんのかよ」

「まあね。こんな簡単に消えるミレディちゃんじゃないか——」

——ちよ待つて待つて！ 試練はクリア、私に戦う力なんて残ってないから！ どうにかして君たちと話せるように力を絞り出してるだけだから！

力を絞り出しているという言葉の通り、焦るように瞳が点滅を繰り返すだけで体自体はピクリとも動いていない。

重力魔法すら使っている様子もないあたり嘘はないのだろうと、構えたドンナーやドリユツケンを降ろす。

「で、なんだよ。まあ大方アツチの話しなんだろうが」

そう言いハジメは悠姫とシステイの方を向いた。

これまでの解放者たちの期待ぶりからして、悠姫とシステイを繋ぐ縁、そして本来の

姿を得た悠姫の話だろうことは想像に難くない。

そう考えると自分達は悠姫のおまけのように思えてきて腹が立ってきた。だがその考えをミレディはお見通しのようである。

「確かにそうだけど、君達の事でもあるんだよ？」

今の悠姫^彼だったら私とシーちゃんの二人同時でも問題ないはず。それでも私の相手を、君たちに任せるって言ったんだ。

それだけで、彼が君たちのことを信用しているのは理解できるし、そんな君たちをおまけなんて思わないよ」

ハジメ達は思わず目を点にして驚いた。

「どうやらミレディからの評価は以外にも高かったらしい。

「だから教えてほしい。君達にとつて、悠姫^彼は何？」

さつき言ったけど光は光で、怪物は怪物。だから彼はそうなるだろうし、そうするよ」
「元の世界に戻りたいという君の願いは、全ての神代魔法を集めれば確かに果たせる。でもその前に必ずエヒト^神が立ちはだかる。もしかして君は彼をその囿にするつもり？」

嘘は許さないと言外に告げるものの、戦闘前のような威圧は感じない。どちらかと言えば再確認の意味合いが大きい。

そのことを理解してなのか、ハジメは鼻で笑いながら言い放った。

「馬鹿を言え、てめえは三歩歩いたら忘れる鶏か？」

お前が自分で言ったんだろうが。光は光で、怪物は怪物。だったら仲間は仲間だ。囃や道具は仲間じゃねえ」

「変な道を行きそうになつたらぶん殴つてでも止めてやる。だからエヒトクツと戦うつてんなら、俺達も一緒に戦う」

「——ッ」

一切迷いなく言うハジメと、当然だと言わんばかりに頷くユエとシア。それに息を呑むかのように驚いた後に、優しい声色でミレデイは告げた。

「…そつか。それだけの啖呵が切れるなら…十分かな…安心して…逝くことが…できる」

残り僅かな時間しか残っていないのか、次第に言葉が途切れ途切れになっていく。もう限界なのだろう。

「おい待て。行くならせめて他の迷宮はどこにあるのかだけ教えてくれ。いくつかは目星はついてるが、正確な場所は失伝してて殆ど分かってねえ」

「そつか…迷宮の場所が…分からなくなるほど、時間が経つて…ことだね。じゃあ一回しか言わないからよく聞いておいてね」

そうしてポツリポツリと神代魔法が眠る迷宮の所在を語っていく。

数ヶ所は想像通りの場所ではあったが、逆にいかにもらしい場所にあるとも思えた。

「…以上だよ。頑張つてね。そして、ガイア母さんをお願い」

先程とは比べ物にならないほどしおらしく、これが最期だと言わんばかりの様子のみレディ。ハジメは冷めた目で見ているが、ユエとシアは若干目尻に涙を浮かべている。

「それじゃあ…先に行くね…シーちゃん」

「君達のこれからが……自由な意志の下に……あらんことを……」

そして、瞳は光は消え、ライセン大迷宮の最終試練であるミレディ・ライセンは、完全に沈黙した。

しんみりした空気の中、システイと決着をつけた悠姫が合流した。そして、いつの間にか壁の一角が光を放っていることに気が付く。

ブロックの一つに四人で跳び乗ると、足場になっている浮遊ブロックが動き出し、光

る壁まで悠姫達を運んでいく。このタイミングで壁が光りだしたということは、その先がライセン姉妹の住居なのだろう。

四人が近づくと、壁は自動ドアのように勝手に開き、浮遊ブロックはそのまま向こう側へと進んでいった。

くぐり抜けた壁の向こうには……

「あ、あの！ シーちゃん?! さすがのミレデイさんでも、これはちよつと恥ずかしいんだけどー!」

「安心してください。そんなツルペタボデイ(笑)に欲情する殿方なんていませんよ……多分」

「そういう話じゃないんだけどなー!」

亀甲縛りされて天井から吊り下げられてるコ〇助(姉)と、それを見上げるように見ている〇口助(妹)がいた。

「…うわあ…」 b y ハジメ

「——(言葉が出ない)」 b y ユエ

「ひえ…」 b y シア

「…ミレデイ・ライセンって…そういう趣m」

「違うから!」

悠姫の一言にミレデイが条件反射で答えたことでシステイが四人が来たことに気が付き、ミレデイをそのままに四人に向き直した。

「ライセン大迷宮の攻略、お疲れさまでした。変態ねえさまに代わって、皆様のご対応をさせていただきます」

「あれー? もしかしてこのまま? というより私の呼び方おかしくなかった?」

「まずは神代魔法を。…ああ、そのへんた、変態はお好きにどうぞ。調子に乗った罰です。いい薬です。治らないと思いますけど」

「変態って言ったね?! 言い直してないよね?!」

ハジメは薄々感づいていたようだが、ユエとシアは先のシリアスシーンがミレデイによる茶番だったと気が付いたようだ。一瞬だけ目からハイライトが消え、次には口が三日月のように吊り上がった。

自分達をコケにする態度をとる相手が身動きを取れないでいる。家族公認システイ、仲間黙悠姫認、ならばやることなど一つだろう。

「——え、あの…や、優しくしてくださいさあああああ!」

薄気味悪い笑い声を出しながら、獲物を見つけた獣のように眼を光らせた三人はミレデイへと群がり……

閑話休題

「とういうわけで、改めて攻略おめでとう！　ご褒美にさっきのイジメは見逃してあげる！　ミレディさん優しいね！」

「自業自得だな」

「自業自得です」

「まだ足らねえか」

「ん」

「デス」

「んく殺意高いなあ」

全員からバツサリと言われ、やれやれと肩を振るコロ○。

先のやり取りの通り、この二体が今のライセン姉妹。騎士ゴーレムはあくまで遠隔操作していただけであり、ミレディのあの今にも消えそうな様子はただの演技に過ぎない。

ミレデイ曰く、

「騙された？ プルクスクス。やっぱりミレデイちゃんは演技派だな〜（笑）」

とのこと。その後、数名によって叩かれることは言うまでもない。

茶番は終わり、それは兎も角悠姫達四人は新たな神代魔法を手に入れた。

重力魔法。これまでブロックや騎士ゴーレムが空中を飛び回っていた正体だ。つま

り、これで四人は飛行手段を手に入れたのかと言えば、そうでもなかった。

理由は単純に適正不足。

ユエの適性は十分。修練すれば十全に使いこなせる。問題は残りの三人。

シアは体重の増減くらいは出来るだろう、ハジメは悲しいくらいに才能がないから生

成魔法で補え、とミレデイが言う。

「そして悠姫^君なんだけど…予想通りというか、予想外というか…。

本当に何なの君？」

「何なのと言われてもな…」

分からない、というのがミレデイから見た悠姫の適性だった。

色々と規格外な存在だからこそ、単純な適正など分からないだろうと思っていたよう

で、事実その通りだった。

実は、召喚されてから悠姫（ユキ）まともに使用できた魔法は、身体強化しかない。

使い方は分かる、才能が無いという訳でもない、でも使えない。これは生成魔法も同じで、今回の重力魔法も同じだった。と言うことは残りの神代魔法も同じく使えない可能性は大きいだろう。

でもどうでもいいというのが当の本人の認識であり、そもそも何なのかと言われても分からないとしか言えないのだ。

「これで全員、重力魔法の取得は終わりましたね？」

それでは報酬を準備していますので、あちらにどうぞ。姉さま」

「こっちだよ」

最後に悠姫が重力魔法を取得し終わると同時に、奥でシステイが攻略の証や各種鉱石を準備しており、ミレディがハジメ達を先導して連れて行った。

悠姫も続こうとしたところをシステイに呼び止められた。

「…数々の無礼、申し訳ありません」

「気にしてない。エヒトって言うのは狡猾なんだろう？」

守るべき人々を盾に、そして武器として振るわれれば、執れる行動は二つに一つ。勝つために殺して前へ進むか、敗けを受け入れて後ろに下がるか。

だから解放者は敗けを受け入れた。そして未来に希望を託したんだ」

「……はこ」

「ああ、託されたさ。君達が灯した希望の光で、俺達が世界を照らすと誓おう。

君達が選んだ旅路を無駄なものになどさせはしない。その決意が、覚悟が、勝利の軌跡だったと謳い上げよう」

「…はい」

「人々の希望、幸福、未来、輝き。守り抜き、そして切り拓かんと願う限り俺達は無敵だ。

例え相手が神であろうとも、勝つのは俺達だ」

「…ありがとうございます」

無機物の身体へと変えながらも生き続けたシステイは、今までのすべてが無駄ではなかったのだと確信した。

嗚咽が止まらない、既に失ったはずの瞳の奥が熱く感じる。

そんなシステイを、悠姫は優しく抱擁した。

父母のような温かさを感じ、姉に心配を掛けまいと封印してきた感情が溢れ出す。システイは生まれて初めて、声を上げて泣いた。

この日、運命の歯車は回りだした。

小さな小さな砂粒など歯牙にもかかず、強靱な歯車は運命へと導いていく。

第三十一話 新たな戦いへ

悠姫とシステイがしんみりとした空気の中、何やら言い合いが聞こえてきた。

半ば分かっていたことだが、ハジメとミレデイだ。

もつと珍しい鉱石があるだろ、迷惑料だ全部よこせ。これは迷宮の修繕、維持管理の為なんだからダメ。よこせ、ダメ、よこせ、ダメ——

悠姫としてもハジメの気持ちは分からないわけではないが、さすがにこれ以上は無視できないと、ハジメを止めた。

「それ以上はもう強盗だ。その程度にしておこう」

「……だけどうよう」

「ミレデイは兎も角、システイの為にも見逃してやってくれ」

「……それなら、まあ」

兎も角とはなんだー！ と騒ぎ立てるミレデイとキラキラした目で悠姫を見つめるシステイ、少々不満ながらも引き下がるハジメ。

先ほどまで壮絶な戦いをしていたとは思えない緩んだ空気に笑ってしまうのは、決し

て間違つてはいないだろう。

「はあく。まったく、この可愛いミレデイちゃんがこんな目に合うなんて…もう、いいや。君たちを外に出すからね」

ミレデイは天井から下がっている紐を掴み、そのまま下に引つ張り…引つ張…

「あ、あの…シーちゃん？ 手を放してくれないかなあつて、ミレデイちゃんは思つたり…？」

「船くらい用意しろよ、このク○姉が。排○物かなにかと勘違いしてんのか、こ○ら」
「さつきから感情の上下が激しくないかな？」

ミレデイには、システイの背後に般若が立っているように見える。

おかしい…私の可愛い妹はこんなじゃなかったはず…

全てはあの孫を見るように微笑んでいる悠姫^{怪物}せいだ。あのおじいちゃん、じゃなかった…あの男がシーちゃんを変えたんだ！

迷宮に彼用の準備をしている私達の期待も大概だけど、こんな期待はしてないんだぞ！

「なに睨みつけてんだよ。さつきと準備しろよ駄姉」

「シーちゃんがグレたく…。…はい。これに入つて…」

反応するのも疲れたと、消沈しながらミレデイは何かを取り出した。

ミレデイが取り出したのは船と言うより、複数人が入れる程度の透明なカプセル。

「下に地下水脈が流れてるから、その流れに任せていけば外に出られるよ。本当はそのまま流してやりたかったんだけど……うん、なんでもない。さ、入って入って」

チラツとシステイの顔を見てすぐに訂正する。鬼の顔なんて見ていない見えていない。

ハジメ、ユエ、シアと順番に入り、最後に悠姫が入ろうとしたところで、ミレデイが悠姫を呼び止めた。

「……絶対に、^{母さん}ガイアを助けてね。そしてお願い……^世トータス^界を、変えて」

「……ああ。必ず」

悠姫がカプセルに入り――

「願わくば、人が自由な意志の元に生きられる世界になりますように」

――ライセン大迷宮から脱出した。

地下水脈をカプセルで漂うことしばらく、特に大きな問題は起きることなく一行は無事に地上に出られた。道中、シアが人面魚がしゃべったと騒いでいたが、疲れて幻覚を見たに違いない。

出た場所は、ブルツクの町から一日程度の位置にある湖。

丁度、隣の親戚に会いに行っていたマサカの宿の看板娘ソーナ・マサカ、依頼帰りの冒険者三人、服屋を営む筋肉モリモリマツチョウマン、クリスタベルの五人が近くで休憩していた為、厚意に甘えてブルツクの町で準備を整えることにした。

ブルツクの町までの道中はかなり賑やかだった。

前にブルツクの町に来た時は、悠姫はユキだった。当然、そのことについてソーナ（＋ギルドで見たらしい冒険者）から質問攻めに遭う。とはいえ、まさか「一回死んで蘇った」などと言えるはずもなく、のらりくらりと躲すしかない。最終的に、頑張ったご褒美として良い雰囲気になっているハジメとシアに、ソーナを擦り付けていた。

次いで、クリスタベルが悠姫を気に入ったということもある。悠姫は、男性としては中性的な容姿になる。スラム時代はその容姿を使って体売っていたこともあるほどだ。そんな悠姫の容姿がクリスタベルのタイプに直撃したらしく、とても気に入ったようだった。

なお後日、様々なジャンルの衣類が悠姫にプレゼントされ、他数人と共にファッシュンショーが開かれたとか開かれていないとか・・・

——とある地方都市——

陽は既に落ち、静まり返った夜の都市。その水面下で蠢く陰がそこにはあった。

「——さて、そろそろ仕上げと行くか」

「——」

人間。否、人型の怪物たち。

巨大な籠手から長い爪が生えたような籠手剣ジヤマダハルを手にした魔劍ダインスレイフ。その隣で唸り声を鳴らす二体の新種の魔物。そして魔劍ダインスレイフの視線の先にある一枚の依頼書。

「指名依頼：金ランク 「光姫」「幻姫」」

「さあ、戦乙女フルキユール、お前たちの本気を魅せて見ろッ！ ハハハヒヒヒアアッ!!」
怪物の帰還を待ち望む二人の少女に、邪竜の魔の手が迫っていた。

幕間 奇跡は笑顔のために

「あれがテルス…」

「予想以上に大きい街ですね」

「古都と言われているくらいです。歴史は相当ですよ」

悠姫たちがライセン大迷宮を攻略した頃、雫たち四人は王都から程遠い街、古都テルスに向かっていた。テルスはハイリヒ王国建国前から存在し、王国屈指の歴史の長さを持つ街だ。

ではなぜそんな街に雫たちが向かっているのか。それは一つの依頼が、冒険者であるアヤメとシエリアに来たからであり、雫と香織がそれに同行しているからだ。

とはいえ、その依頼内容は非常に奇妙な物だった。

「始めて確認された強力な魔物が出たから倒してほしい…でもテルスにも守備隊はいるんですよね？」

「はい。神殿騎士や王国近衛兵にも引けを取らない実力の守備兵や冒険者が配備されます」

「それなのにアヤメさんたちに依頼が来るんですか？」

「これでも金ランク、トータスでも指折りの実力者ですからね。そんな私達に直接と言うことは、つまりそれほど強い魔物ということでしょう」

或いは力を恐れた何者かの罾か、それとも魔人族の仕業か。

何にしても、行ってみなくては分からない話だ。

「光輝くん達は連れてこなくてよかったですか？」

「冒険者へ依頼を、勇者だから、という理由で奪うのはさすがに越権行為という物でしょう。」

「まさか肉壁として、とか考えてます？」

アヤメの指摘にすつと眼を逸らす香織と雫。その二人を呆れた眼で見るアヤメと笑いを堪えているシエリア。緊張感の欠片もなく、四人はテルスに辿り着いた。

テルスに入った雫たちを迎えたのは、未知の魔物に怯える人々：ではなく、笑顔で大通りを往来する人々と、大通りで元気に露店を開いている商人たち。

いたって普通の、人気の観光地という風の賑わいだったため、おもわず雫と香織はぽかんとしてしまう。

「…えっと、魔物に襲われてる様子は…」

「…ない、ですよね…?」

依頼主はこのテルスに先祖代々住んでいるという、ファーンムという老人。

話を聞くと、夜な夜な街を徘徊する謎の影があるという。しかもその影は、何故か一部の人のしか見えていないようで、見えている人たちに特に共通点は無い。

丁度、銀ランク冒険者のパーティが気づいていたようで、その影に戦いを挑んだところ、成す術もなく負けてしまったらしい。重傷を負ったが命に別状はなく、その時に見たこともない魔物だと分かり、銀ランク冒険者でダメなら金ランク冒険者を、ということらしい。

聞けば聞くほどに奇妙な、というより怪しい内容だ。

まずアヤメとシエリアの二人が、影が見えることを前提に話が進んでいる。勿論、ダメ元で呼んでいるということもあるかもしれないが、どうやらその考えはないようだった。

そして何より、早とちりしていただいだけかもしれないが、実害がほとんど出ていないということもある。

建造物が壊されたわけでもなく、銀ランク冒険者パーティが重傷を負った以外は怪我人もなく、行方不明や死者が出たわけでもないのだ。そのパーティとて自ら戦いを挑ん

だ結果と言うことを踏まえれば、魔物による被害はゼロと言っている。

ここまでくると魔物の存在さえ怪しくなってくる。

その後、街を探索してみるが特に変わった様子などなかった。

大通りだけでなく、住宅街や街はずれ、路地裏なども周ったが気になるようなこともない。一通り街を見て周ったその日の夜、宿の一室に集まって話をしていた。

やはり罨だったのか？ 確かに怪しさしか感じていないが、フアーナム老人や話しをきいた銀ランク冒険者が嘘を吐いている様子はなかった。

「…さて、では話を纏めましょうか」

アヤメの一言に三人が頷く。

一つ、自分たちは未知の魔物の被害に遭っているから助けてほしい、という依頼を受けて古都テルスに来た。

二つ、実際は被害など殆ど無く、魔物の姿は見える者と見えない者に別れている。

三つ、魔物は夜に現れ、夜の内に姿を消す。

「…やはり罨ということでしょうか？」

「それなら犯人の狙いはアヤメさんとシエリアさん？」

「…魔人族か悪戯と言った方が納得できるわね」

犯人を絞り込むには、情報量自体は十分と言える。ただし、絞り込める犯人像はあま

りにも候補が少なすぎる。

まず前提として、古都テルス是一種の治外法権区に相当し、余程の権力者出ない限りは口を出すことは出来ない。その上で、昼間の様子から情報統制はされている考えれば、余程の権力者に相当すると考えられる。

そして、アヤメとシエリアを指名したということは、狙いは二人。だが、王位継承権を捨てているとはいえシエリアはハイリヒ王国の第一王女、シエリアを狙うということは国家反逆罪になる。

更に、姿を消すことができ、銀ランク冒険者パーティを倒せるほど強い魔物。

国家反逆罪を被る危険性を冒す最高位権力者。それが以上から絞り込める犯人像になるが、そんな存在がいるのだろうか？

可能性としては聖教会。だが協会の名を出せばよいだけで、やることが遠回り過ぎる。

次点で、ヘルジャー帝国。だが実力主義の国家が、帝国最強シエリアにこのような罠を掛けるとは考えられない。

では魔族、或いは悪戯なのかと考える。

だが、魔族では魔物による被害が殆ど出ていないことに疑問が残る。

目撃者が限られることから悪戯とも思えるが、実際に重傷者が出ていることが事実だ

と語っている。

結果、犯人像が振出に戻る。

(まさか、いや)

(あり得るわね、あの男なら)

そこで、一つの情報を変えてみた。

狙いは二アヤメとシエリア人ではなく二人香織と半ではないか？

四人に共通するのは一人の男を慕っているということ。後者二人に共通するのは、その一人の男に恋していること。

いるではないか。その一人の男怪物を狙う、未知の魔物を従えた邪竜光の奴隷が。

ベヒモスを倒したあの日、この二人香織と半を気に入つたと言つた魔ダインスレイフ劍が。

国を敵に回すことに本気戸惑いが無いのテロリスト強欲が。

二人が同じ考えに辿り着いた瞬間、街の方から爆発音と悲鳴が聞こえてきた。

「ッ！ まさか魔物が?!」

「急いで外へ!」

時間が惜しいと、部屋の窓から飛び出した四人は悲鳴が聞こえた方へ急いだ。

現場に着いた四人が見たのは、血を流して倒れ伏すテルスの住民と、逃げ惑う人々、そして爆発があつただろう場所に佇む見たことが無い一体の魔物だった。

すぐに武器を構える。だが、雫と香織の手は震えていた。恐怖だ。

これまで死を感じたことはある。でも死を見たことはなかった。

理解はしている、戦わなければ死ぬと。覚悟もしている、人の死を見ることになる。だが、いくら覚悟をしていても実際に直面すれば戸惑うものだ。それ故に、二人は、死というものに恐怖した。

「二人とも落ち着いて」

「魔物は私達が引き受けます。二人は住民の避難を」

「は、はい」

短剣を構えたアヤメと、曲剣を二本構えたシエリアが魔物と相対する。

そして、シエリアが仕掛け戦いが始まった。

雫と香織は、戦いの様子を少し眺めた後、住民の避難を促した。

正直な気持ちを出すならば、あの魔物との戦いを任せてほしいという思いはあった。

ただ、少し眺めて自分達では歯が立たないという結論に達した。金ランク二人に未だ勝てない現状で驕るつもりなどないが、魔物最強と言われていたベヒモスを倒せるほどの実力はあると自負している。

それでも勝てないという確信を持ち、魔物の出何処を考えながら二人は住民の避難の先導した。

視界の端では、アヤメたちと魔物が戦っている。その魔物に竜のマークが刻まれていることに、雫たちは気が付かなかつた。

「おかくさくん！」

「なんで俺達がこんな目に遭うんだ！」

「教会は何をしてるんだ！」

「誰でもいいから助けてよ！」

一時的に設けられた避難所である大聖堂は、昼間の賑やかな喧騒とは逆に阿鼻叫喚に溢れていた。

死傷者も多数出ており、アヤメたちが到着するまでに被害も相当出ていた。

だが、当然大聖堂だけで都市の人間を全員収容できるはずもなく、まだ避難できていない人は大勢いる。

「お姉ちゃん……大丈夫……？」

「ええ。大丈夫よ、ありがとう」

「ごめんなさい。ありがとう」

「いいえ。もうすぐで避難所です」

雫と香織は怪我をして足を引きずっていた親子を背負って、大聖堂とは別の避難所に向かっていた。あの一帯の避難民はこの親子で最後のはずだ。そして避難所が見えてきた。

「…本当にありがとうね」

「…お姉ちゃん、これあげる」

男の子はポケットから何かを差し出した。それは男の子のポケットに入る程度の大さきの黒い結晶のようなもの。

「これを、私たちに？」

「今日の朝見つけたんだ。とつてもきれいだったから」

目一杯の笑顔で男の子は言った。

男の子の言う通り、思わず見とれてしまうほどこの結晶はきれいだった。ただどこか、それだけではない何かを感じる。

「でも、本当に良いの？」

「うん。お母さんを助けてくれたお礼」

男の子が女性に宝石をプレゼントする、というプロポーズ宛らな絵だが、悲しいことに女性二人には想い人がいるし、男の子もまだこの手の行為は理解していない。

男の子の母親だけが、あらあらまあまあと見ているが、

—— オオオオオオツツ!!

「ツツ?!」

突如聞こえた雄叫びに驚いて、全身が硬直したかのように固まった。

すると、雫たちから少し離れた建物の陰から、重い足音を立てながら先程の魔物が現れた。

「なんで此処に?! あれはアヤメさんたちが?!」

「でも、戦闘音はまだ聞こえてる!」

つまり二体目。二人は直ぐに武器を構える。

あの日以来の、あの日以上の死の恐怖に体が震える。でも——

(私達が引けば、この子が犠牲になる)

—— 男の子が震えながら香織を見つめている。恐怖に満たされた、今にも泣きだしそうな目だ。こんな時、あの人ならなんて言うのか。

顔を上げた香織は、同じことを考えていたのか、同時に顔を上げた雫と目が合った。二人してきよんとんとして吹き出して笑った。

私達が知っているあの人なら、きつとこう言うだろう。

「大丈夫、私達がいるよ。だから、」

「絶対に助けるから。だから、」

「走って!!」

ここにいるのは雫たち二人と、男の子と足を怪我しているお母さん。

少なくとも、私達ではこの魔物には勝てないだろう。でも、時間稼ぎ程度なら出来るはずだ。この親子が避難所に逃げ込めるまで、そしてアヤメさんたちが来るまでの時間を。

意識が朦朧とする。

全身が砕けているのでは思う程痛い。

この程度の傷で済んでいるのは、召喚された神の使途としての単純なスペックのおかげだろう。トータス基準の人間では即死している。

端的に、雫と香織は時間稼ぎに失敗した。

親子は避難所に逃げ込むことはできた。だが魔物が想定以上に強く、二人は避難所まで投げ飛ばされた。その衝撃で意識が飛びかけ、避難所の出入り口は魔物から丸見えになつてしまい、避難民を見つけた魔物が近づいてくる。

幸いなのは、その魔物がゆっくりと近づいてくることだろう。だから意識と整える時間ができる。

最悪なのは、身体をピクリとも動かせないことだ。現に今も、先の男の子が泣きながら香織を揺さぶっている。

一歩ずつ魔物が近づくと共に、避難民たちの悲鳴が大きくなり、今度はどんどん悲鳴が少なくなってきた。

もうだめだ助からないここで死ぬんだ。生きることを諦めた人たちが増えていく。それでも男の子は香織を揺さぶり続ける。

悲鳴が小さくなり、死神が近付くように魔物の足音がはつきりと聞こえてくる。

ここで終わるのか？

私達がいると言っておいて？

助けると口にしておきながら？

(まだまだ!!)

そうまだまだだ。まだ終わっていない。

(誰でもいい！ 私に、私達に、この人達を助ける力を！)

(あの笑顔を守る力を！)

本来ならばどこにも届かぬ思い。

だが、この都市の歴史、一人の男との関係、男の子からもらった黒い結晶。それらが、一つの奇跡^{必然}を引き寄せた。

『——ならば私が力を貸しましょう。貴方達も私の愛しい子供達なのだから』

——瞬間、音を置き去りにした何か、男の子に伸ばした魔物の腕を通り抜けた。横には納刀している雫の姿。そして鮮血を散らしながら落下する魔物の腕。

そう、雫の一刀が魔物の腕を切断していた。

一瞬呆けた魔物だったが、斬られたと認識した瞬間雄叫びをあげて残った腕を雫へ振り上げた。しかし何を感じたのか、大きく後ろへ飛び去るといふ後退の行動をとつてい

た。

魔物からすれば、万全でも自身に劣る小娘二人が、瀕死の状態から覚醒したという体に見える。本能によって怒りに染まったものの、残った僅かな理性が危険だと告げ後退させていた。

そして、その理性は正しかった。

後退した魔物を雫が追撃する。

地面に反発されるように飛び出した雫は一種の弾丸と化し、そのまま魔物の胸部を下から斬り上げた。そしてその斬傷は一瞬にして塞がり、回復を通り越して腐敗し始める。

これこそ、奇跡が与えた二人の星辰光。

「^{Meta}革新星^{nova}——^{La}世を覆うst災厄^{El}の果て、^P一縷の希望ⁿを^d与えて^oくれ^r!!」

高速の斬閃が魔物を斬り裂いていき、斬傷から魔物の身体を腐敗させる。腕を振り上げ足で蹴り上げ、もう遅い。四肢の筋繊維は断ち切られ、もはや魔物は身動き一つ取る事ができない。

命運は決した。雫が魔物の心臓を剣で突き刺し、二人は届かぬ筈の勝利を手にしたのだった。

「——」

気が抜け、星辰ほしが解けた瞬間、全身を襲う激痛が二人を襲った。曲がりなりにも瀕死の身体、そこに加わる星辰光アステリズムの負荷。アドレナリンが分泌していたことで痛みを無視していただけで、本来は立ち上がることにすら困難なほどだ。

だがこれで戦いは終わった。この街を、この避難所の人々を、この男の子の笑顔を守る事ができたと安心し——

——絶望は再びやってきた。

「——さ、三体、目」

「そん、な……」

先の二人を見て学習しているのか、既に戦闘態勢を取っている。二人の一挙一動は見張られ、先ほどのような奇襲紛いの攻撃は効かないだろう。

正しく絶体絶命。だが逃げるわけにもいかない、守ると決めているのだから。

激痛を堪え、二人は武器を構える。この場を乗り越えるには星辰光アステリズムしかない。使い方はあの一回で分かった。苦しみなど無視すればいい。互いに顔を合わせ、頷き——

「——天■せよ、■が守■星——」

——魔物の胴体に光の矢が生えた。

香織と雫は驚いて起動詠唱ランゲージを止めてしまった。その光の矢は二人の力ではない。ならば残る二人の力であり。

「よく頑張ったわね」

「後は私たちに任せてください」

アヤマの短剣が魔物の片目を斬り裂き、胴を貫くシエリアの光矢が三本六本と増えていく。

痛みに悶え暴れる魔物から離れ、アヤマとシエリアは香織と雫の前に降り立った。

アヤマは短剣のままだが、シエリアは曲剣の柄尻を合わせて弓のような形状にする。

二人の背中を見た香織と雫は安心して、その意識を闇に落とす。

二人が目を覚ましたのは、その数日後。

死傷者は数千人。都市人口から見てもそれなりの人数で、それをたった三体の魔物による被害だと考えれば、とても恐ろしいことだと感じてしまう。

その魔物の正体もはつきりした。

強欲竜団^{フアヴニル}、魔族側に就いているフアヴニル・ダンスレイフが率いる傭兵団。ベヒモスを倒したあの日に現れた集団だった。

目的は不明。だが、何かをテストしているようだった、とアヤメ達と言う。

なにはともあれ、依頼は達成した四人は王都に帰還する。

香織と雫の手首にはブレスレットにした黒^{黒い}星^星晶^{結晶}鋼^鋼が輝き、それ以上に二人の顔は晴れ晴れとしている。それは街を出る前にもらった、守り抜いた最上級の報酬^{笑顔}。

——ありがとう！ お姉ちゃん！

二章人物詳細・設定補足

・天津悠姫

本作主人公。

ユキ・ロスリックが、ライセン大迷宮最深部での戦いによって一度死亡し、復活した姿。肉体が雫や香織と同年代にまで若返っている。

悠姫が飛ばされたのは新西暦ではなく西暦末期、後に大破壊カタストロフと呼ばれる大災害が発生するより前の時代。プロジェクト・テオゴニアの研究者に捕まり、人権を無視した無数の実験カタストロフをされていた。

大破壊カタストロフに吞まれるが、その瞬間に「過去から飛ばされてきた悠姫」と「テオゴニアの核となった悠姫」という二つの同一存在アカウソント定義が重なった結果、バグとして第二太陽アマテラスから外され観測不能の特異点となった。

ライセン大迷宮で復活したこの身体はカンタベリー聖教皇国の神祖と同じ性質の為、不死身の身体と無限の星辰魔カ体を有している。

・大地母神^{ガイア}

未だまともに登場していない本作メインヒロイン。

神山で悠姫が来るのを待っている。

星辰光^{アステリズム}を創造する「星産み」の星辰光^{アステリズム}を保有し、他者に与えることができる。

元は西暦末期で、悠姫が実験体になっていた計画の研究者の一人。

後に悠姫と同じ実験体になり、大破壊^{カタストロフ}によって悠姫と共に特異点になっている。

悠姫が新西暦に現れたこと、ヴァルゼライドとの関係、トータスに召喚されたことな

ど、悠姫に起きた大体の事象の根本的黒幕。

全ては悠姫を ■■■■■■。

・八重樫雫

幕間で活躍中の本作サブヒロイン。

アヤメ、シエリア、香織の四人パーティで行動している。
 古都テルスでの戦いで、制約付きだが^{アステリズム}星光を得ている。

世^{L a s t E i p i s}を覆う災厄の果て、一縷^Pの希望^aを与えておく^dれ^{r a}

基準値：D

発動値：C

集束性：A A

操縦性：E

維持性：D

拡散性：E

付属性：C

干渉性：C

磁界生成能力

香織と同名別種の能力。

能力そのものは強力だが、雫には自在に操れるほどの素養も知識もない。そのため、自分と地面を反発することで急加速、居合の際に刀身と鞘に付与することで抜刀速度を上げる、などの使い方をしている。

香織と同時に且つ、共にいないと使用できないという制約がある。

・白崎香織

幕間で活躍中の本作サブヒロイン。

アヤメ、シエリア、雫の四人パーティーで行動している。

古都テルスでの戦いで、制約付きだが^{アステリスム}星辰光を得ている。

世を覆う災厄の果て、一縷の希望を与えておくれ

基準値：D

発動値：C

集束性：E

操縦性：A A

維持性：D

拡散性：C

付属性：C

干渉性：E

生体回復能力

雫と同名別種の能力。

接触対象に回復効果を与える星^{アステリスム}辰光。

味方には回復を、敵には過剰回復をすることで崩壊を行える、生物に対して無類の強さを誇る。しかし、非生物に対しては効果が無く、干渉性が低いため遠隔発動は不可能。拡散性と付属性は平均的な為、自ら敵に近づくか味方の武器や魔法に付属するというのが基本戦法になる。

雫と同時且^かつ、共にいないと使用できないという制約がある。

・システイ・ライセン

かつて解放者の一人として戦っていた、ミレディ・ライセンの実妹。

トータスで誕生した最初の星^{エクスベラント}辰体感応奏者であり人^{プラネットス}造惑星。

ガイアを通して悠姫と間接的に繋がっており、ある意味悠姫の真実に一番近い位置にいる。

ガイアから聴かされていたことで悠姫には憧れに近い感情を持っていたが、戦闘後の会話で崇拜に近い感情を向けるようになってきている。

・ 古都テルス

ハイリヒ王国建国前から存在している比較的大きな街。

そのため歴史的建造物が多く、それが古都の由来となっている。

かつてはエヒトではない何かを信仰していたという逸話が存在しているが、今では全くの出鱈目と言われており、現在ではエヒトが信仰されている。

だが未知の魔物による事件以降、聖教協会の教えではない考え方をする者たちが増えてきている。

ギガントマキア
・ 星辰戦争

ユキとガイアが計画した戦いであり、新西暦におけるユキの最終目的。

「ヴァルゼライドに倒されて、世界の歪みを正す」ことが本来の目的。

その目論見通りに、ユキが死亡した後の新西暦では逆襲撃による英雄の崩御、古都での超人対戦、聖教皇国での神殺しが起きている。

なお、ユキの死に戻りが終わった要因の一つではあるものの、死に戻りの原因自体は別にある。

第三章

第三十二話 ブルックの町、再び

「おや、今日は四人一緒かい？」

ライセン大迷宮攻略から約一週間、ブルックで準備を整えた四人はギルドにいた。ギルドに四人が共に顔を出すことはかなり少ない。悠姫、ハジメが一人で来るか、ユエ、シアが二人で来るのが大体だ。

「ああ、明日にでも町を出るつもりだね。貴方には色々世話になったから挨拶をしに来た。ついでに、目的地関連で依頼があったら受けておくかとも思ってる」

「そうかい。最近賑やかになってきた分、寂しいね」

キャサリンの疑問に答えたのは悠姫だ。

世話になったというのは、ハジメが重力魔法と生成魔法を組み合わせたアーティファクトを創るために、ギルドの一室を無償で借りていたことだ。なお、悠姫、ユエ、シアの三人は町の郊外で星辰光^{アステリズム}や重力魔法の鍛錬をしていた。

「勘弁してくれ。宿屋の娘は変態、服飾店も変態、ユエとシアに踏まれたい、悠姫に甘えたいとか言って町中で突然土下座してくる変態共、お姉さま”とかお兄さま”連呼

しながら三人をストーキングする変態共、決闘を申し込んでくる阿呆共……碌なヤツいねえじゃねえか。出会った七割が変態で二割が阿呆とか……どうなってんだこの町」

「ハジメが鞭ばつかり与えるから、俺にその皺寄せが来てるんだよ」

「なら悠姫も鞭を打てばいいだろ」

「鞭に鞭は拷問ですらないからな」

現在、ブルツクの町には四大派閥が出来ており、「ユエちゃんに踏まれ隊」「シアちゃん奴隷になり隊」「お姉さまと姉妹になり隊」の三派閥が日々しのぎを削っているらしい。町中で「踏んで下さい!」「奴隷にしてください!」と絶叫しながら土下座してくるのはもはや恐怖である。そして二人と姉妹になるために、ハジメを排除しようとナイフ片手に突っ込むという過激行動に出る少女まで現れるのである。当然、ハジメに軽くあしらわれ町中に「次は○します」の張り紙と共に晒される。

そして「お兄さまに優しくされ隊」。三派閥に加え、二人を手に入れようとハジメに決闘を申し込み、ユエに股○を潰されたり（通称、股○スマツシャー）ハジメに檻樓雑巾のようにされた者達（通称、決闘スマツシャー）が、アフターケアのように悠姫に優しくされて生まれた派閥である。ユエとハジメ（スマツシュ・ラヴァーズ、通称スマ・ラヴ）の被害者が増えれば増えるほど、派閥の人数が増えるという性質があるため、三派閥に危険視されている。

なお余談ではあるが、クリスタベル漢女の服飾屋にて単独ファッションショーが開かれ、その一件を機に各派閥とは全く別に悠姫のファンが激増しているらしい。そのファン達によって新しい派閥が出来るまでそう遠くない。

「ま、まあ、活気づいたのは事実さね」

「嫌な活気だな」

「それで、何処に行くんだい？」

「フューレンだ」

フューレンは中規模商業都市だ。次に向かう七大迷宮「グリューエン大火山」がある。グリューエン大砂漠の途中に位置し、大火山に挑む前に寄っておこう、と考えていた。なお、大火山を攻略したら、そのまま大砂漠を抜けた先の海にある大迷宮、「メルジーネ海底遺跡」に挑む予定だった。

「ちよつと待ってね：お、ちようどいいのがあつたよ。商隊の護衛依頼があるよ。ちようど二人分の空きがあるけど、受けるかい？」

キャサリンから依頼書を受け取って確認する。特に変な部分はない、普通の商隊護衛の依頼のようだ。中規模の商隊で、護衛も十五人程度を求めている。ユエとシア冒険者として登録していないので、悠姫とハジメの二人で丁度になる。

「連れの同伴は可能なのか？」

「問題ないよ。普通の冒険者でも荷物持ちを雇ってることもあるからね。あまり大勢だと苦情が出るかもしれないけど、ユエちゃんもシアちゃんも結構な実力者だしね。二人分の依頼料で四人の実力者を雇えるなら、基本は断らないさ」

「なるほど……俺はこれで良いと思うが、三人はどうだ？」

悠姫が三人に振り返りながら聞いた。悠姫としては、一般的な冒険者というのを知っておいて不都合はないと思っっている。

「……急ぐ旅じゃない」

「そうですねえ、たまには他の冒険者方と一緒にいうのもいいかもしれませんが。ベテラン冒険者のノウハウというのものもあるかもしれませんが？」

「それが俺達に役立つかは分からねえけどな。まあ急いでも仕方がないし、いいと思うぜ」

悠姫は三人の意見を聞いて、キャサリンに依頼を受けることを伝える。

「あいよ。先方には伝えとくから、明日の朝一で正面門に行つとくれ」

「どうも」

悠姫が依頼書を受け取ると、キャサリンはユエ、シア、ハジメへと目を向ける。

「あんた達も体に気をつけて元気でやりよ？ その子に泣かされたら何時でも家においで。あたしがぶん殴ってやるからね」

「……ん、お世話になった。ありがとう」

「はい、キャサリンさん。良くしてくれて有難うございました！」

「あんたも、こない子達泣かせんじやないよ？」

「言われなくても承知してるよ……ありがとうな」

そして最後にキャサリンは悠姫に一枚の封筒を差し出した。

「これは？」

「あんた達、色々厄介なもの抱えてそうだからね。町の連中が迷惑かけた詫びのようなものだよ。他の町でギルドと揉めた時は、その手紙をお偉いさんに見せな。少しは役に立つかもしれないからね」

それは彼女が封筒一枚で、他ギルドのお偉いさん方に影響を及ぼせる程の人物である事を示唆している。

「おや、詮索はなしだよ？ いい女に秘密はつきものさね」

「……わかったよ。有り難く貰っておく」

と、悠姫は封筒を懐に仕舞った。

「素直でよろしい！ 色々あるだろうけど、死なないようにね」

それでギルドを出ようとすると、キャサリンは悠姫だけを呼び止めた。ハジメたち三人を先に行かせて、悠姫はキャサリンから話を聞いた。

「…あんだ、「ケイオス」って知ってるかい？」

「ケイオス？…いや、知らないが」

ケイオス、別名、カオス。つまり、知る者からすれば悠姫のことではと思うが、キャサリンがそのことを知っているととは思えない。つまり悠姫とは無関係なことだということになるが…

「金ランク冒険者三人で構成されたパーティの名前なんだけどね。その三人が、ある人に仕えてるって言ってるんだよ。そのある人の特徴が、あんだによく似ててね」

…十中八九、アヤメ、シエリア、デイルグの三人だろう。三人が金ランク冒険者というのを知っていたが、まさかこんなところで三人の事を聞くとは思っていなかった。とはいえ、それが自分だ、などいえるわけもない。

「他人の空似だろ。その金ランク冒険者が誰なのかは知らないけど、少なくともこんな若造に仕えるわけがないさ」

「…まあ、そういうことしておくさね」

何となくだがキャサリンも分かっているようで、二人で笑っている。

それを最後に、悠姫もギルドを後にしてハジメ達を合流した。

「お、おい…残りの四人って、「スマ・ラブ」と「ユウキちゃん」の事かよ！」

「マジか！ 嬉しさと恐怖が一緒くたに襲ってくるんですけど！」

「な、生ユウキちゃん…生お兄さま…？…カフツ…」

「おいやべえ！ 生ユウキちゃんを見ただけで一人死んだぞ！」

「後光が眩しくて、目を開けられねえ!!」

翌朝、依頼の集合場所に向かっただけでこれである。

なおユウキちゃんとは、ファツションショーで悠姫が女装した姿を見てファンになった者達からのファンネームである。それを初めて聞いた時に、悠姫の目が死んだのは言うまでもない。

「君達が最期の護衛かね？」

「…ああ。これが依頼書だ」

悠姫が懐から依頼書を取り出して商人に渡す。

「ふむ、確かに。私の名はモットー・ユンケル。この商隊のリーダーをしている。君達のランクは未だ青だそうだが、キャサリンさんからは大変優秀な冒険者と聞いている。道中の護衛は期待させてもらおうよ」

「……もつと、ユンケル…？ 大変なんだな…」

商人の名前を聞いたハジメは、ハジメの時代にある日本の栄養ドリンクを思い浮かべ

て、ハジメの眼に同情を帯びる。なぜ、そんな眼を向けられるのか分からないモットーは首を傾げながら、「まあ、大変だが慣れたものだよ」と苦笑い気味に返した。同様に意味が分かかっていない悠姫も、ハジメに聞いて納得していた。

「……まあ、期待は裏切らないと約束しよう。俺は悠姫、こっちはハジメ、ユエ、シアだ」「それは頼もしい。……ところで……その兎人族。彼女を売る気はないかな？ いい値段をつけさせてもらおうが」

モットーがシアを値踏みするようを見る。シアはその視線に呻きながらハジメの背に隠れた。予想通りの提案ではあるが、当然受けるわけがない。

「ほう、とても懐かれていますようですな。中々、大事にされているようだ。ならば、私の方もそれなりに勉強させてもらいますが、いかがですか？」

「ま、あんたはそれなりに優秀な商人のようだが……それなら答えはわかるだろ？ 例え、どこぞの神が欲しても手放す気はない。力づくで奪おうとするなら、力づくで叩き潰す。理解してもらえたか？」

「……ええ。そこまで言われれば、引き下がるしかありません。ですが、その気になったときは是非、我がユンケル商会をご鼻屑に願いますよ。それと、もう間も無く出発です。護衛の詳細は、そちらのリーダーとお願います」

「俺が行こう。ハジメ達は準備していてくれ」

ハジメの宣言に護衛の冒険者達や商隊の女性陣がざわつくのを尻目に、悠姫は護衛隊リーダーと話をする。

そして、商隊はフューレンを目指して出発した。

第三十三話 冒険者らしい仕事

ブルツクの町から中立商業都市フューレンまでは、およそ馬車で六日の道のり。

そして現在には出発から三日、日程の半分を消化している。既に日は落ち、商隊や護衛の冒険者たちは各々に野營の準備を進めていた。

その夕食時、冒険者達は護衛依頼とは思えないほどに賑わっていた。

「カッター、うめえ！ ホント、美味しいわあ、流石シアちゃん！ もう、亜人とか関係ないから俺の嫁にならない？」

「ガツツガツツ、ゴクンツ、ぷはっ、てめえ、何抜け駆けしてやがる！ シアちゃんは俺の嫁！」

「はっ、お前みたいな小汚いブ男が何言ってるんだ？ 身の程を弁えろ。ところでシアちゃん、町についたら一緒に食事でもどう？ もちろん、俺のおごりで」

「な、なら、俺はユエちゃんだ！ ユエちゃん、俺と食事！」

「ユエちゃんのスプーン……ハアハア」

「な、生ユウキちゃん……グハッ！」

「や、やべえ！ 生ユウキちゃんを見てまた倒れたぞ！」

「あいつ何度も倒れてんな」

事の発端はシアと悠姫が他冒険者達に、夕食をお裾分けするようになったことにある。

このトータスでの商隊護衛などの依頼での夕食風景は、非常に静かでも質素なのが一般的なのだ。冒険者達は食事時でも警戒しなければならぬし、凝った食事を用意しようとすれば荷物が增える。結果として干し肉など長持ちする簡易的な食事しか出来なくなるのだが、悠姫達は例外だった。冷房石を用いたトータス版冷蔵庫と宝物庫のおかげで、食材も料理器具も一切の問題なく運ぶことができる。

故に、この護衛依頼でも質素な食事をとる冒険者達の隣で、しっかりと調理した食事をとっていた。当然のように冒険者達は涎を垂らしながら血走った目で見ると、その様子に居心地が悪くなったシアがお裾分けを提案した、ということだった。

悠姫は当初から、夕食を分ける代わりに冒険者としての話しを聞いていた。最も多かったのは、俺はベテラン冒険者として云々という武勇伝だったのは言うまでもない。

最初はどこか遠慮しながら食べていた冒険者達だったが、だんだん慣れてきたのか調子に乗ってシアやユエを口説き始め、ハジメに締められるまでもはやワンセットになつていった。

「ユ、ユウキちゃん……町に着いたr……」

「ごめんなさい」

訂正。悠姫も口説かれていた、男冒険者に。どうやらガ○恋状態にまで墜としていたらしい。

さらに二日進んで五日目。その日、それは起こった。

「敵襲ですッ、数は百以上！ 森の中から来ます！」

最初に気が付いたのはシアだ。街道沿いの森の方へウサミミを向けピコピコと動かし、緩んでいた表情を一気に引き締めて警告を発した。

その警告に冒険者達に動揺が走る。いくら何でも数が多すぎる。

そもそもこの街道はそこまで危険な道ではない。大陸一の商業都市へ繋がっている道なのだからそれは当然であり、魔物に襲われたとしても、二十や三十が限度だったはずだ。

「くそつ、百以上だと？ 最近、襲われた話を聞かなかつたのは勢力を溜め込んでいたからなのか？ つたく、街道の異変くらい調査しとけよ！」

護衛隊リーダー、ガリティマは悪態を吐きながらも状況を分析している。

護衛の数は十七人。百以上の魔物を相手しながら商隊を守るのは不可能だ。ならば護衛の大半で足止めして、商隊を急がせた方がいいか、と考え始めると…

「迷ってんなら、俺らがやろうか？」

「まあ、それが最善だろうな」

「…え？」

ハジメと悠姫の提案にガリティマは思わず聞き返した。

「迷っているようなら、俺たちで全部相手するっていつてんだよ」

「い、いや、それは確かに、このままでは商隊を無傷で守るのは難しいのだが…で、出来るのか？ このあたりに出現する魔物はそれほど強いわけではないが、数が…」

「百やそこらなんて問題じゃない。ユエがすぐ終わらせる。頼めるか？」

「ん…」

と、ハジメが隣に立っていたユエの肩に手を乗せると、彼女も問題ないとばかりに頷く。

「…わかった。初撃はユエちゃんに任せよう。仮に殲滅できなくても数を相当数減らし

てくれるなら問題ない。我々の魔法で更に減らし、最後は直接叩けばいい。みな、わかったな！」

「「了解！」」

これが冒険者かと、悠姫は感心していた。

ユエやシアを口説いたり、ハジメに締められて土下座したりと、あのふぎけていた様子は微塵も無く、全員が緊張感のある引き締まった顔つきをしている。ベテラン冒険者という自称に偽りはないのだと思えた。決してデレデレしながら悠姫を口説こうとしていた様子に呆れていたわけではない。

そして魔物の群れとの接触まで一分、悠姫達は商隊の馬車の上に待機していた。

「ユエ、念のため詠唱だけはしておけよ」

「…詠唱…詠唱？」

「それっぽい感じがいいんだ。面倒ごとが増えるよりはいい」

「…ん」

「接敵、十秒前です」

ユエは森の方へ右手を掲げ――

「彼方より現れし希望、常闇を照らす導きとならん、古の牢獄を打ち砕き、障碍の尽くを退けん、最強の一片を担いしこの力、希望と共にありて、天すら墜とす光となれ、雷

龍
”

——詠唱の途中から立ち込めていた暗雲から、雷の龍が現れた。

まるで咆哮のように響いた雷鳴と共に、雷龍が魔物の群れを飲み込んだ。

雷龍が消えたとき、そこに魔物は塵一つ残っていなかった。

「……ん、少しやりすぎた」

「おいおい、あんな魔法、俺も知らないんだが……」

「ユエさんのオリジナルらしいですよ？ ハジメさんから聞いた龍の話と例の魔法を組

み合わせたものらしいです」

「俺がギルドにこもっている間にそんなこと……悠姫は出来るか、あれ？」

「同等威力の雷撃放射は可能かもしれないが……効果範囲は俺の方が劣るし、あの形は

無理だな」

「因みに詠唱は私達三人の出会いと未来を謳ってみた」

ブイ、とピースしながらドヤ顔をするユエ。

そんな話しをしていると、始めて見る、あまりにも強力な魔法を見て壊れていた冒険者達が一斉に騒ぎ立てていた。

その中で正気に戻っていたガリティマが、盛大に溜息を吐きながら近づいてきた。

「はあ、まずは礼を言う。ユエちゃんのおかげで被害ゼロで切り抜けることが出来た」

「今は仕事仲間だろう。礼なんて不要だ。な？」

「……ん、仕事しただけ」

「はは、そうか……で、だ。さっきのは何だ？」

ガリティマが困惑を隠しきれずに尋ねる。

「……オリジナル」

「オ、オリジナル？　自分で創った魔法ってことか？　上級魔法、いや、もしかしたら最

上級を？」

「……創ってない。複合魔法」

「複合魔法？　だが、一体何と何を組み合わせればあんな……」

「……それは秘密」

「ツ……それは、まあそうだろうな。切り札のタネを簡単に明かす冒険者などいないからな……」

再び深い溜息と共に、追及を諦めたガリティマ。（自称）ベテラン冒険者なだけに暗黙のルールには敏感らしい。肩を竦めると、まだ壊れている仲間を正気に戻しにかかり、一行はフューレンへの歩みを再開した。

それからというものの、特に何事もなく一行は、中立商業都市フューレンへ到着した。現在は都市内に入るための検問待ちの列に並んでいるところである。

列が進むまで暇を持て余した四人は、馬車の上で各々に寛いでいた。ハジメはシアを侍らせながら、ユエに膝枕をしてもらい、悠姫は発動体太の手入れ刀をしている。すると、なにやら話があるのか、モットーが四人の元にやってきた。

「まったく豪胆ですな。周囲の目が気になりませんか？」

周囲には、ハジメが美少女二人を侍らせているようにしか見えない。

実際、フューレンの玄関口であるこの場所は人の眼も非常に多く、好奇と嫉妬、そしてユエとシアへの値踏みの視線に後が絶えない。

「まあ、煩わしいことは確かだが、仕方がねえ」

「フューレンに入れば更に増えると思えますが？」

「もう一度言うが、仕方がねえ。俺達にも目的がある」

「ふむ……やはり彼女を売r」

「——そこまでにしてほしいな、ウンケル商人」

まるで蛇に睨まれたかのようにモットーが竦み上がる。

声の方を見ると、モットーに視線も向けずに手入れを続ける悠姫がいる。

「商売根性逞しいのは良いことだが、相手は選んだ方がいい。」

奴隷が認められている世界だ。貴方が言っているのは割と一般的な発言かもしれないが、それでも奴隷という仕組みが嫌いな人間として存在しているのだから」

「彼女は俺達の仲間だ。誰が何と言おうがそれが事実、仲間を金で売る塵屑に墜ちたつもりは欠片もない」

「……失礼しました……では、もう一つ……貴方のもつアーティファクト。やはり譲つてはもらえませんか？ 商会に来ていただければ、公証人立会の下、一生遊んで暮らせるだけの金額をお支払いしますよ。貴方のアーティファクト、特に宝物庫は、商人にとって喉から手が出るほど手に入れたいものですからな」

喉から手が出るほどほしい、というその言葉は決して誇張でもなんでもない本心なのだろう。事実、シアを見ていた時よりも一層、鋭い目つきをしている。とはいえ、当然ながら渡すつもりなど微塵も無い。

「それも同様だ。一つたりとも譲る気はない」

「……はつきりと言わせていただくならば、一個人が持つには有用すぎます。いらぬ危険を呼び寄せるかもしれませんぞ？」

「それに、たとえ貴方達が持ったところで、身の丈に合わない力は破滅に繋がるだけだ。断れない商談吹っ掛けられて、担保として大切な物を奪われて、ついでに商会の利権パイヤもむしやむしやと……」

「……なるほど……日夜襲撃や商敵に怯える日々が始まる、と……確かにそうかもしれないませんが……」

手を伸ばせば届きそうな位置に黄金が転がっているのだ。モットーとしても諦めきれないのも当然と言えるだろう。

悠姫はその様子に目を伏せ、大きな溜息を吐いて言った。

「二度目は見逃した。最初の一步だからな、間違いもあるだろう。二度目も見逃そう。お互いの距離感を測るためにも譲歩は必要だ。三度目はない。俺達の害敵として認識しよう。で、貴方はどうする？」

「ッ……」

暗に、悠姫は次はないと告げている。

仮に手を出してきた他商人等がいた場合も同様、二度目までは見逃すということだ。だが、違法に手を出しているならば一度目で処断されることは言うまでもない。

今回、道中で数回交渉を持ちかけているモットーが、まだ無事であるのは、あくまで護衛依頼中であり、トータス基準で奇麗な商人だからに過ぎない。

「…確かに割に合わない取引でしたな。私も耄碌したものだ。欲に目がくらんで竜の尻を蹴り飛ばすとは…グランセニック商会の坊ちやまなら、このような愚は犯さないでしょうな」

竜の尻を蹴り飛ばす。それはトータスの諺の一つで、竜、正確には竜人族は全身を頑強な鱗に覆われており、一度眠ってしまったらよほどの事が無い限り起きない。ただし、唯一尻の辺りだけは鱗が無く、そこを攻撃すると烈火の如く怒り出すと言われている。それにちなみ、手を出さなければ無害な相手に下手に手を出して痛い目に遭う、という意味がある。

それより悠姫は最後の、非常に深い性癖カルマを抱えた男がいそうな名前の方が気になっていた。

「…グランセニック？ その坊ちやまつて特殊性癖もつてないか？ ド○とか○リコンとか」

「…詳しいことは分かりませんが…まあ、一般的に好まれる女性が好みではない様ですが…お知り合いで？」

「いや、昔の知人かと思つてね…」

ハジメが眉を顰めて悠姫を見ている。悠姫が知っている坊ちやまを軽く説明すると、信じられないものを見るような眼でドン引きしていた。

「そう言えば、ユエ殿のあの魔法も竜を模したものでしたな。詫びと言ってはなんですが、あれが竜であるとは、あまり知られぬがいいでしょう。竜人族は、教会からはよく思われていませんからな。まあ、竜というより蛇という方が近いので大丈夫でしょうが」

「そうなのか？」

「ええ、人にも魔物にも成れる半端者。なのに恐ろしく強い。そして、どの神も信仰していなかった不信心者。これだけあれば、教会の権威主義者には面白くない存在というのも頷けるでしょう」

「なるほどな。というより、随分な言い様だけど、不信心者と思われませんか？」

「私が信仰しているのは神であって、権威をかさに着る人ではありません。人は客ですな」

「……いいね、根っからの商人だ。やっぱり貴方は、信用できる。どうか俺達の敵にならないでほしいな」

「肝に銘じておきます」。

「…それでは、なにか入用なら、我がユンケル商会をご利用ください。ご期待に沿えるよう尽力いたします」

そして、モットーは元の列へと戻っていった。

最初より好奇と嫉妬、そして値踏みの視線は遥かに増えていた。十中八九、面倒ごと
に巻き込まれる。そう確信して、悠姫とハジメは深い溜息を吐いた。

第三十四話 中立商業都市フューレンにて

中立商業都市フューレン

大陸一の規模を誇る商業都市。様々な業種が、日々しのぎを削っており、成功を収め巨額の富を得た者、逆に無一文になってフューレンを後にする者も少なくない。観光に訪れる者も含めれば、人の出入りの激しさも大陸一と言えるだろう。

フューレンはおよそ、都市の行政や手続関連の施設が集まっている中央区、娯楽施設が集まった観光区、武器防具はもちろん家具類などを生産、直販している職人区、あらゆる業種の店が並ぶ商業区の四つの区画に分かれている。

商隊と分かれてフューレンに入った悠姫達は、中央区にある冒険者ギルドに依頼完了の報告をし、ギルドに併設されているカフェテリアで軽食を取りながら、そんな話を案内人であるリシーという女性から聞いていた。

「——ですの、一先ず宿を取るのでしたら観光区をお勧めしますわ。中央区にも宿はありますが、働いている方向けの最低限の宿になっていますので、サービスは観光区とは比べ物になりません」

「なるほど、なら素直に観光区の宿にしとくか。どこがおススメなんだ？」

「お客様のご要望次第ですわ。様々な種類の宿が数多くございますから」

「それもそうか。なら、飯が美味くて、あと風呂があれば文句はない。立地とかは考慮しなくていい。あと、そうだな…」

「それなら、責任の所在が明確な場所がいい。なにか揉め事に巻き込まれたときに、完全な被害者なのに責任を吹っ掛けられても困るからな」

ハジメが言った最初の二つは良くある要望なので、リシーは条件に合う宿をリストアップしていくが、悠姫の言った責任の所在というところで「？」と首を傾げた。

「そうそう揉め事なんて起きないと思います…」

「普通ならそうかもかもしれないが、俺達は何かと目立つからな。観光区となればハメを外す奴は多いだろうし、商売根性逞しい奴とか、金に物を言わせて、ダメなら力や権力で、なんて奴も少なくないだろうからな」

「な、なるほど…それでしたら、警備が厳重な宿はいかがですか？　そういうことに気を遣う方も多いですし、いい宿をご紹介できますが…」

「それでもいいけど、結局は警備員も人間だ、理性が敗けることだってある。それならこつちから物理的に沈めた方が早い」

「ぶ、物理的…な、なるほど…それで責任の所在を…」

ようやく意図を理解したりシー、そこにユエとシアが、混浴貸切やら大きいベッドやら要望を重ねていく。二人の追加要望の意図も理解して顔を赤くするが、さすが案内人をしていただけはあり、すぐさま条件に合う宿を頭に次々とリストアップしていった。

周囲の男達から嫉妬の視線や注目を受ける四人（悠姫は半ば濡れ衣）だが、その中により一層強い視線を感じた。特にユエとシアに対しては、ねっとりとした粘着質な視線だった。アイコンタクトをとった悠姫とハジメがその方向へ目を向けると、そこにいたのは護衛らしき男を連れた肥え太った男だった。

無駄な贅肉によつて軽く三桁はいくであろう体格に、脂ぎった顔、豚鼻とベツトリとした金髪。遠目でもわかるいい服から、それなりに高い身分なのだろうと推察できる。そのブタ男が、ユエとシアを濁った眼で見ている。早速、面倒ごとが舞い込んだ。

悠姫とハジメが別の方を見ていることに気が付いたりシーが同じ方を見て、「げっ！」と営業スマイルも忘れてる。

ブタ男は重たい体をゆっさりゆっさり揺らしながら真つ直ぐ悠姫達に向かつてくる。そして悠姫達のテーブルのすぐ傍までやって来ると、ニヤついた目でユエとシアをジロジロと見やり、シアの首輪を見て不快そうに目を細めた。そして、今まで一度も目を向けなかった悠姫とハジメに、さも今気がついたような素振りを見せると、これまた随分と傲慢な態度で一方的な要求をしてくる。

「お、おい、ガキ共。ひや、百万ルタやる。この兎を、わ、渡せ。それとそっちの金髪はわ、私の妾にしてやる。い、一緒に来い」

そう言つてブタ男がユエに手を伸ばしてくるが、その瞬間、ハジメから尋常ではない殺気が周囲に向かつて放たれる。周囲のテーブルにいた者達は顔を青ざめさせて椅子からひっくり返り、後退りしながら必死にハジメから距離をとり始めた。

ブタ男に至つては「ひい!？」と情けない悲鳴を上げると尻餅をつき、後退ることも出来ずにその場で股間を濡らし始めた。

「行くぞ。場所を変えよう。ほら、あんたもだ」

「……え、え?」

ハジメが三人とリシーに声をかけて場所変える為に席を立つ。警告を含めて周囲へと放たれたハジメの「威圧」の対象から、ピンポイントにリシーだけを外していた。ハジメが「威圧」を解いて四人がギルドを出ようとしたところで、ブタ男がキィキィ騒ぎ出した。

「そ、そうだ、レガニド! そのクソガキを殺せ! わ、私を殺そうとしたのだ! 糺り殺せえ!」

「お、おい、レガニドつて「黒」のレガニドか?」

「「暴風」のレガニド!? 何で、あんなヤツの護衛なんて……」

「金払じゃないか？」「金好き」のレガニドだろ？」

そのレガニドと呼ばれた男だが、雇い主や周囲の声に一切反応せず、冷や汗を流しながら腰の長剣に手をかけていた。その視線の先には、席から立ちあがっただけでまだ一歩も動いていない悠姫がいた。悠姫もまた、視界の中心にレガニドを捉えていた。

(な、なんだこのガキ…あの眼帯のガキも大概だが、こいつの方がやべえ感じがする…)

「…抜かないのか？」

「ツアア！」

まるで感情が籠っていない悠姫の問い掛挑発けに、緊張感に耐えられなかったレガニドが咆哮しながら長剣を上段に構えた。離れたところから見ていたリシーや周囲から悲鳴が上がる。

すると、ユエが放った風刃が長剣を弾き飛ばし、一気に懐に潜り込んだシアの回し蹴りがレガニドに直撃し、周りのテーブルやイスを巻き込みながら吹き飛んだ。

「助けてくれてありがとう」

「…よく言う」

「私とユエさんがこうすること知ってたんですか？」

「いや？　ただユエなら、守られるだけじゃないと周知させる、とか言いそうかなって」

「…むう…嵌められた」

「ま、まあ。これで手を出そうとする人が減ったと思えばいいじゃないですか」

三人がハツハツと笑っていると、周りがざわめき始めた。ハジメがツカツカと歩き出したのだ。ギルド内にいる全員の視線がハジメに集まる。ハジメの行き先は……ブタ男のもとだった。

「ひい！ く、来るなあ！ わ、私を誰だと思っている！ プーム・ミンだぞ！ ミン男爵家に逆らう気かあ！」

「……地球の全ゆるキャラファンに謝れ、ブタが」

ハジメは、ブタ男の名前に地球の代表的なゆるキャラを思い浮かべ、盛大に顔をしかめると、尻餅を付いたままのブタ男の顔を勢いよく踏みつけ——ようとしたところで、なにか考えて静かに足を降ろし、さっきの数段強い“威圧”をぶつけた。

「……ぴぎゅ」

ブタ男は可愛げの欠片もない悲鳴を出しながら、白目を向いて意識を失っていた。

再びギルドに静寂がやってきた。悠姫は一人怯えた表情をするリシーを見て、これ以上案内を頼もうとするのは酷だろうと思ひ、さてどうしようかと考えていた。

そこに、ギルド職員が駆けつけて話しかけてきた。

「あの、申し訳ありませんが、あちらで事情聴取にご協力願います」

なお、この時点で事が是非がどうなっているのかは火を見るより明らかではあった。

権力を盾に女性二人を奪おうとした男爵。更には、ただ立っているだけの青ランク冒険者に対して、長剣を振り下ろそうとしていた黒ランク冒険者。それらは多くの人の眼に映っており、正当防衛によつて意識は刈り取られているとはいえ、もはや弁明の余地は無かつた。

この職員もそれは把握しているのだが、ギルド内で起きた問題は、当事者双方の言い分を聞いて公正に判断する、というのが規則であり、悠姫とハジメも冒険者故に従つてもらわないと困るといふのがギルド側の言い分。それを咄嗟で思い出したからこそ、ハジメは踏み付けから「威圧」に変えていた。

これ以上に揉めても仕方がないかと、素直に事情聴取に従おうとしたところで、鋭い声が響いた。

「何をしているのです？ これは一体、何事ですか？」

そちらを見てみれば、メガネを掛けた理知的な雰囲気を漂わせる細身の男性が厳しい目で悠姫達を見ていた。

「ドット秘書長！ いいところに！ これはですね……！」

職員達がこれ幸いとドット秘書長と呼ばれた男のもとへ群がる。ドットは、職員達から話を聞き終わると、悠姫達に鋭い視線を向けた。

どうやら遅かつたようで、余計に面倒な事が起こりそうだった。

第三十五話 支部長の依頼

ドット秘書長と呼ばれた男は、片手の中指でクイツとメガネを押し上げると落ち着いた声音でハジメに話しかけた。

「話は大体聞かせてもらいました。証人も大勢いる事ですし嘘はないのでしようね。やり過ぎな気もしますが……まあ、死んでいませんし許容範囲としましょう。取り敢えず、彼らが目を覚まし一応の話を聞くまでは、フューレンに滞在はしてもらおうとして、身元証明と連絡先を伺っておきたいのですが……それまで拒否されたりはしないでしようね？」

「ああ、もちろん構わない。だが、連絡先は……まだ滞在先が決まってないんだよな……そっちで融通してくれるならお互いに手間が省けるんじゃないか？」

「そう言いながらハジメはステータスプレートを差し出す。

「抜け目ないですね……ふむ、青ですか。向こうで伸びている彼は黒なんですけどね……そちらの方達のステータスプレートはどうしました？」

「そう言い、ドットは悠姫、ユエ、シアの三人に視線を向けた。

悠姫はステータスプレートを取り出し、ドットに手渡しながら話した。

「俺はこの通り持つてる。こつちの二人はステータスプレートは紛失してな、再発行はまだしていない。ほら、高いだろ？」

「しかし、身元は明確にしてもらわなッ……いと……。記録をとっておき、君達が頻繁にギルド内で問題を起こすようなら、加害者・被害者のどちらかに関係なくブラックリストに載せることになりますからね。よければギルドで立て替えますが？」

悠姫のステータスプレートを確認しながら、恐らく天職を見たのだろうドットは一瞬だけ驚いて詰まらせ、余計に警戒するような眼で悠姫を見ながら話した。

それでも、神子という教会に属するべき天職の悠姫を、警戒するだけで留めているのは、これまでに訳ありの冒険者を多く見てきたからなのだろう。

しかし、やはり身分証明は必要らしい。ユエとシアのステータスプレートを作成すれば解決するのだろうが、ここで作成すれば隠蔽前に固有魔法や神代魔法のことが発覚してしまう。そうなれば騒ぎになるのは避けられないし、ここまで異常な者達が一パァーティとして集まっていれば、怪しさを通り越して異端の域に入ってしまう。そして騒ぎどころではなくなり……と、面倒ごとが絶えなくなる。

ハア……と溜息を吐いた悠姫は懐から一通の手紙を取り出して、ドットに手渡した。

「ハレハレ」

「身分証明になるかは分からないが、とあるギルド職員から渡された手紙だ。厄介事に巻き込まれたら、ギルドのお偉いさんに渡しなつて言われててな」

「知り合いのギルド職員、ですか？ ……拝見します」

受け取つたドットは、丁寧我便箋から手紙を取り出し静かに読み始めた。最初は訝し気に呼んでいたドットだったが、徐々に目を皿のようにして、何度も繰り返して読み始めた。やがて、手紙を折りたたみ、丁寧に便箋に入れ直すと、コホンと悠姫達に向いた。「この手紙が本当なら確かな身分証明になりますが……この手紙が差出人本人のものか私一人では少々判断が付きかねます。支部長に確認を取りますから少し別室で待つていてもらえますか？ 少々お時間は取らせません。十分、十五分くらいで済みます」

「その程度であれば構いません」

「ありがとうございます。職員に案内させます。それでは、また後で」

応接室に案内されて十数分、扉がノックされた。悠姫が返事をしてから一拍置いて、扉が開かれた。入ってきたのは、金髪をオールバックにした鋭い目付きの三十代後半くらいの男性と先ほどのドットだった。

「お待たせして申し訳ない。冒険者ギルド・フューレン支部支部長イルワ・チャングだ。ユウキ君、ハジメ君、ユエ君、シア君……でいいかな？」

「ええ、そうです。名前はあの手紙に？」

「その通りだ。先生の手紙に書いてあったのさ。随分と目をかけられている……というより注目されているようだね。将来有望、ただしトラブル体質なので、出来れば目をかけてやって欲しいという旨の内容だったよ」

「トラブル体質……まあ、確かにブルックではトラブル続きだったけど……」

「ああ、それと、別に王族と話しているわけじゃない、もつと軽く話してくれて構わない」
「……それじゃあ、遠慮なく」

“先生”などと呼ばれているキャサリンだが話を聞くと、キャサリンはかつて王都のギルド本部でギルドマスターの秘書長をしていたという。更に、教育係をしていたこともあるらしく、現在の支部長のおよそ半分はキャサリンの教え子らしい。

「はあくそんなにすごい人だったんですね」

「……キャサリンすごい」

「只者じゃないとは思っていたが……思いつきり中枢の人間だったのか」

「まさかそこまで影響力が大きいとは……次にブルックに行くときは、何か手土産を用意した方がいいな……」

何故か脳裏にサムズアップをするキャサリンが浮かんでくる。ありがとう、キャサリン。

と、これで不要は疑いは解けたはずだ。

「まあ、それはそれとして、身分の証明はできただろう？　ならもう行っていいよな？」

「いや、少し待ってくれるかい？」

と、ハジメが言ったが、イルワはそれを引き留める。イルワが隣に立つドットから一枚の依頼書を受け取って、提示してきた。

「実は、君達の腕を見込んで、一つ依頼を受けて欲しいと思っている」

「……………断ると言ったら？」

「終わったのは身分証明だけ。諍いに関しては別件だよ」

「……………話を聞けば即開放。断れば面倒が増える、か……………はあ……………わかった、聞こう」

“依頼を受ければ”ではなく“話を聞けば”と言っているだけマシだろう。

四人は改めて座り直すと、イルワが話を始めた。

「ありがとう。さて、依頼内容だが、そこに書いてある通り、行方不明者の捜索だ。北の山脈地帯の調査依頼を受けた冒険者一行が予定を過ぎても戻ってこなかった。そのため、冒険者の一人の実家が捜索願を出した、というものだ」

イルワの話を纏めるところなる。

最近、北の山脈地帯で魔物の群れを見たという目撃例が何件か寄せられ、ギルドに調査依頼が来た。

北の山脈地帯は、一つ山を超えるとほとんど未開の地域となっており、大迷宮の魔物程ではないがそれなりに強力な魔物が出没するので高ランクの冒険者がこれを引き受けた。だが、この冒険者パーティーに本来のメンバー以外の人物がいささか強引に同行を申し込み、紆余曲折あつて最終的に臨時パーティーを組むことになった。

その本来のメンバー以外の人物が、捜索依頼が出ている件の行方不明者、クデタ伯爵家の三男ウイル・クデタだ。

そして北野山脈地帯に行った結果戻つてこず、更には伯爵家の意向を受けてウイルの動向を監視していた監視員とすら連絡がつかなくなり、クデタ伯爵家は捜索依頼を出したと言う事だ。

「伯爵は、家の力で独自の捜索隊も出しているようだけど手数は多い方がいいと、ギルドにも捜索願を出した。つい、昨日のことだ。最初に調査依頼を引き受けたパーティーはかなりの手練でね、彼等に対処できない何かがあったとすれば、並みの冒険者じゃあ二次災害だ。最近だと、とある地方都市に未知の魔物が現れ、銀ランクパーティーが敗走したという噂もある。相応以上の実力者に引き受けてもらわないといけない。だが、生憎とこの依頼を任せられる殆ど冒険者は出払つていてね。つい昨日、金ランクが一人受け

てくれたけど、それだけだ。そこへ、君達がタイミングよく来たものだから、こうして依頼しているというわけだ」

「俺とハジメのランクは『青』、という言い訳は無理か」

「そうだね。さつき『黒』のレガニドを一撃で倒したばかりだからね。それだけで『黒』相当の実力はあると証明している。生存は絶望的だが、可能性はゼロではない。伯爵は個人的にも友人でね、できる限り早く捜索したいと考えている。どうかな。引き受けてはもらえないだろうか？ 報酬は弾ませてもらうよ？ 依頼書の金額はもちろんだが、私からも色をつけよう。ギルドランクの昇格もする。君達の実力なら一気に『黒』にしてもいい」

報酬としては明らかに破格だろう。しかし、通常の依頼という形にして考えれば、ランクが上がるだけしかメリットがない。ランクが上がることによるメリットも、アーティファクトがあるのでメリットにならない。

「却下だ。俺たちにとってメリットが薄い」

「なら、今後、ギルド関連で揉め事が起きたときは私が直接、君達の後ろ盾になるというのはどうかかな？ フューレンのギルド支部長の後ろ盾だ、ギルド内でも相当の影響力はあると自負しているよ？ 君達は揉め事とは仲が良さそうだからね。悪くない報酬ではないかな？」

「……なぜそこまで、その坊ちゃんに肩入れする？ 強引にパーティーに同行して事故に遭ったというなら、はつきり言って自業自得だ」

「彼に……ウイルにあの依頼を薦めたのは私なんだ。調査依頼を引き受けたパーティーにも私が話を通した。異変の調査といっても、確かな実力のあるパーティーが一緒なら問題ないと思った。実害もまだ出ていなかったしね。ウイルは、貴族は肌合わないのと、昔から冒険者に憧れていてね……だが、その資質はなかった。だから、優れた冒険者と一緒に、そこそこ危険な場所へ行つて、悟つて欲しかった。ウイルに冒険者は無理だ。昔から私には懐いてくれていて……だからこそ、今回の依頼で諦めさせたかったのに……」

「どうやら相当に切羽詰まっているらしい。金ランクが依頼を受けたと言っても、結局は一人。焼け石に水にしかならないだろう。悠姫はまたもや溜息を吐いて、指を二本立てながらイルワに言った。

「……条件、というより報酬の上乗せだ」

「……内容は？」

「二つ、ユエとシアのステータスプレートを作成、及びその内容の口外禁止。二つ、ギルド関連に関わらず、貴方のコネクションを全て使つてでも、俺達の要望に応え便宜を図る」と」

一番の目的は、二人のステータスプレートだ。今回のように、二人を狙って面倒ごとが起きるのは確実だろう。その度に、身分証明の為に拘束されるのは避けたいところだ。

「何を要求する気かな？」

「そんなに気負わないでほしい。無茶な要求はしないさ。ただ俺達は少々、いや結構特殊だ。ほぼ確実に、教会に目をつけられると思うが、その時、伝手があった方が便利だと、そう思ったただけだ。面倒事が起きた時に味方になってくれればいい。ほら、指名手配とかされても施設の利用を拒まないとか……」

「指名手配されるのが確実なのかい？　ふむ、個人的にも君達の秘密が気になって来たな。キャサリン先生が気に入っているくらいだから悪い人間ではないと思うが……そう言えば、そちらのシア君は怪力、ユエ君は見たこともない魔法を使つたと報告があつたな……ユウキ君はケイオスとの関わりも……その辺りが君達の秘密か？　そして、それがいずれ教会に目を付けられる代物だと……大して隠していないことからすれば、最初から事を構えるのは覚悟の上ということか……そうなれば確かにどの町でも動きにくい……故に便宜をと……」

流石は大都市のギルド支部長。頭の回転は早い。イルワは、しばらく考え込んだあと、意を決したように悠姫に視線を合わせた。

「犯罪に加担するような倫理にもとる行為・要望には絶対に応えられない。君達が要望を伝える度に詳細を聞かせてもらい、私自身が判断する。だが、できる限り君達の味方になることは約束しよう……これ以上は譲歩できない。どうかな」

「十分だ。理性的な判断に感謝する」

「もしかして、誘導されたかな？」

「はは、まさか。実に健全な交渉だろ？ 証拠は最悪、遺品でも構わないな？ 勿論、生きていれば本人を連れて帰るが」

「本当に、君達の秘密が気になってきたが……それは、依頼達成後の楽しみにしておこう。ユウキ君の言う通り、どんな形であれ、ウイル達の痕跡を見つけてもらいたい……ユウキ君、ハジメ君、ユエ君、シア君……宜しく頼む」

イルワは最後に真剣な眼差しで悠姫達を見つめた後、ゆっくり頭を下げた。大都市のギルド支部長が一冒険者達に頭を下げる。そうそう出来ることではない。キャサリンの教え子というだけあって、人の良さがにじみ出ている。

「ああ」

「あいよ」

「……ん」

「はいっ」

その後、支度金や北の山脈地帯の麓にある湖畔の町への紹介状、件の冒険者達が引き受けた調査依頼の資料を受け取った。最後に部屋を出る前に、ハジメは思い出したようにイルワに尋ねた。

「念のために聞いておきたいんだが、搜索依頼を受けたっていう金ランクは誰なんだ？共有できる情報は共有しておきたい」

ハジメとしてはただの疑問だったのだろう。何かの拍子に、再び疑われても困る、という程度だ。しかし、それが兄妹を引き合わせる要因になるとは、誰も思っていなかっただろう。

「ディルグ・ロートレク。金ランクパーティー「ケイオス」の一人、「不落」の異名を持つ、最硬の冒険者だ」

第三十六話 湖畔に集いし者達

時を遡ること数日。とある湖畔の町ウルに向かっている数台の馬車があった。それは今現在、およそ三つに分裂している地球召喚組の一つ、農地改善・開拓組の馬車だった。

「農作師」畑山愛子を筆頭に、その護衛ハニートラップ要員であるイケメン神殿騎士達、その神殿騎士に対する「愛ちゃんをイケメン軍団から守る会」である生徒数名で構成されていた。そして園部優花もまた、その一人だった。

園部優花は、あの日の事件以降、オルクス大迷宮に向かわず、王宮に残っている、所謂居残り組の一人だった。

もちろん、死という恐怖に怯えているのはあるし、ある一件が無ければ優花の心は折れていたままだっただろう。それでもオルクス大迷宮に行かないのは、「勇者」天之河光輝の事が信じられなくなった、ということが理由だ。

あの日、ユキ・ロスリックと南雲ハジメが奈落に落ちていった原因が、檜山大介というのは誰もが知っている。注意を無視してトラップに引っかけたこと、わざと、火球

“を当てて二人を落としたこと、あの日の事件の全ての原因の筈なのだ。

それなのに、檜山は無罪として赦された。錯乱してただけだ、仲間だから罪には問わないと。全く道理が合わないだろう。

拳句の果てには、あの二人が落ちたのは二人の責任、力不足だったとまで言い始めている。その二人に助けられて、私達は生き残ったというのに。

そしてその檜山は、仲間たちの為にといい名目の元、香織の気を引くために勇者組の一人としてオルクス大迷宮に潜っている。

嫉妬から仲間を殺す檜山と一緒に戦うなどできるわけがないし、その檜山を信用しているなどという天之河もまた、信用できない。

そういうこともあり、優花はオルクス大迷宮には行っていないかった。だが、ただ王宮に引きこもっていただけという訳ではない。時折、王宮の外の魔物と戦っているし、情報収集だって欠かしていない。

ただ、王宮に残って情報収集するにも限界を感じていた。そんな時に、畑山愛子先生、愛称「愛ちゃん先生」が各町村に行つて農地開拓をするという話を聞いた。そして、神殿騎士からの護衛として愛子に同行し、今に至るといふ訳だった。

「——しつかし、意外だな」

「え？ なにが？」

その日の野営で優花は、同じく同行している玉井淳史からそんなことを言われた。この場に集まっているのは、愛子、優花、淳史、菅原妙子、すがわらたえこ宮崎奈々、相川昇、仁村明人、しみずゆきとし清水幸利の八人。つまり、この地球召喚組の農地開拓組全員だった。

「だって、園部が愛ちゃん先生と一緒に行く、なんて言い出すなんて思わなくてよ」

「あーそれは確かに。なんて言うか、あの日以降、ほとんどが塞ぎ込んだじゃったしね…」私達も…と心の中で呟いたのは妙子。

この場にいるメンバーの内、愛子と優花以外は、頑張つて励まそうとする愛子に元気づけられて立ち上がっていた。だから、それより前に立ち上がり、でも勇者組に加わらなかつた優花が気になったのだろう。

「それで、何かあつたの?」

「……一回ね、雫と香織に聞いたことがあるの。なんでそんなに頑張れるんだって。そしたら——」

『ユキさんと再会するまでにずっと強くなるために』

「——つて言ったの」

「ユキさんつて…ロスリックさんだよ。でも…」

「うん。あの日に亡くなつた。誰もがそう思つてたのに、あの二人は、全然そう思つてなかつたの」

『あんなことで、あの人は絶対に死んだりしないよ。あの人を倒せるのは、たった一人だけ』

『どんなことがあっても、最後に“勝つ”のは、あの人のよ』
羨ましかった。初対面の筈の人をそこまで信頼できることが。

眩しかった。必ずそうだと信じているその希望が。

だから――

「生きてるって、“勝つ”って二人みたいな事を言うのかなって思ったの。これまでの事を受け止めて、それでも上を向いて歩くことが、“勝つ”ってことなんだって。だから私も、せめて自分にできることを頑張ってみようと思っただけ」

「「……………」」

「…あ、あの、何か言ってる？ 恥ずかしいんだけど」

急にシンとなつて、優花はどんどん恥ずかしくなってきた。というか、自分で考えても恥ずかしくなってきた。無意識にポエムチックな告白をしていたという事実に、顔が茹蟠のように赤くなってくる。

「――うううう。感ツ動しました!!」

「ふえ?! あ、愛ちゃん?!」

「そんなことを考えていたんですね！ 私は、私はくッ」

愛子が、お酒に酔ったように泣きながら優花に絡みついてくる。もちろんお酒なんて一滴も摂ってないし、アルコールだつて全く摂取していない。完全に泣きすぎて我を失っているだけだつた。

そうして夜は更け、日は変わり、また馬車に揺られ、そして数日後には湖畔の町ウルに到着した。

「農作師」の愛子を筆頭に、数日前のポエム告白で仲間内での株が上がり、「愛ちゃんをイケメン軍団から守る会」のリーダー的ポジションになった優花やその他生徒達の方によつて農地開拓は順調に進んだ。

そして、事件は起きた。生徒の一人、清水幸利が失踪したのである。

大事な生徒が失踪したことで愛子は酷く取り乱し、農地開拓を放り出して搜索を始めた。優花もまた、あの日のような悲劇は繰り返さないと、大切な仲間を搜索した。その先で、思わぬ再開と、本気の化物に会うことなど、誰も予想していなかった。

夜の帳が落ち、音が消えたように静けた深夜。

北の山脈、そこに流れる川の上流にある洞窟。そこには黒い竜が眠り更けており、その竜を囲むように数人の男や魔物が立っていた。

その一人、黒ローブを着た少年は隣に立つ、浅黒い幅の男に不安そうに問いかけた。

「ほ、本当に、大丈夫なんだよな？」

「ええ。真の勇者様である貴方様であれば決して不可能ではありません。それに、竜は一度眠ると中々目を覚ましませんし、より深い眠りに入るように睡眠系の魔法も使っています。存分にお力を発揮ください」

「そ、そうだ。俺は選ばれたんだ、俺が主人公なんだ……い、いくぞ」

そして黒ローブの少年は詠唱を唱え、黒い竜に魔法をかけ始めた。浅黒い男が少年を嘲笑するように見ていることに、当の少年は気づいていない。

その様子を冷めた目で見ていた別の男は、洞窟から出て夜空を見上げた。はだけた胸元に、冷たい夜風が直撃する。それに身悶えする様子などは一切なく、来たるべき未来へと熱い視線を送り——あと数日。

「さあ、会いに来たぜ、英雄^{シグルド}。いざ、英雄譚をはじめようぜ」

光の亡者、ファヴニル・ダインスレイフは、箆^{ジャマダール}手剣を鳴らしながら甲高く笑った。

同じ北の山脈にある森に、遠くから甲高い笑い声をそのウサ耳で捉えていた、一人の筋肉粒々な男が居た。

いくら兎人族として聴覚が優れているのだとしても、十数キロも離れた場所の音など普通は聞こえるはずがない。

「それでもよく聞こえるものだな、邪竜の笑いはい」

特殊合金を用いた槍を担いで休憩する男はそう呟いた。それだけ特徴的なのか、単純に爆音なのか、聞こえていると錯覚しているのか。

だが、もし錯覚だとすれば、それはあの男がいる筈だと期待している証拠なのだろう。「さあ、神に仇名す世界の敵にならんとする者達よ。その可能性を見せてくれ」

主君やその仲間たちの到来を待ちながら、「金」冒険者、デイルグ・ロートレクは不敵に笑った。

「神域」

それは人が認知することすらできない、文字通り神の領域。つまり、このトータスにおける唯一神、エヒトがいる領域でもある。

「——ふむ。なかなか興味深いことになってきたか」

その神域に響き渡る、あらゆる生物が本能のままに跪くことを強いる、神の声。

「——ノイント」

「は」

主の命に現れたのは、銀髪碧眼の神秘的な雰囲気的美女。彼女こそが、真の神の使途。ハジメ達のように、エヒトによって召喚され使途となった者達とは違い、使途として製造された、本当の神の使途だった。

「事は理解しているな？ あの黒髪の男、イレキユラー例外を排除しろ」

「主命、受諾いたしました」

エヒトからの主命を受け、ノイントは地上へと降り立ちイレキユラー例外と呼ばれた男、天津悠姫の元へと向かっていった。

その様子を見ていたエヒトはくつくつと嗤いながら見ていた。

「ああ、排除して見せろよ。出来るものならば」

それは、ノイントが敗北する未来を知っているかのようなだった。

だが、エヒトはそのような未来を全く理解していない。それどころか、たった今自分が言ったことの意味すら分からず、更にはハジメ達とは別にユキ・ロスリックを召喚したという事実さえ分かっていない。

それはまるで痴呆のようで、

「全ては完全なる管理^{オリエンボス}世界創造の為に」

今の言葉もまた、忘却の彼方へと消えていった。

そして、このトータスに刻まれる新たな神話の一ページが、幕を開けようとしていた。

第三十七話 湖畔の町での再会と小さな雷

広大な平原のど真ん中に、来たに向けて真つ直ぐ伸びる街道がある。街道と言つても、碌な整備も舗装もされておらず、馬車や人が何度も通つたことで雑草が剥げただけの、一種の畦道に過ぎない。

その街道を猛烈なスピードで駆け抜ける二頭の黒い鉄の馬、もとい二台の魔道二輪がいた。当然、悠姫達だ。

片方にはハジメが運転し、その前にユエ、後ろにシアが乗っている。そしてもう一方は悠姫が一人で乗っている。

大峽谷のように魔力が阻害されるようなことがないため、魔道二輪のスペックを存分に發揮し、時速八十キロ近いスピードで爆走している。

現在の位置は、依頼の搜索範囲である北の山脈に一番近い街まで、あと一日程度といたところ。休憩を挟まずに、このままノンストップで走らせれば、日没までにはその街に入れるだろう。その街で一晩過ごし、明朝から北の山脈へ向かつて搜索を開始する予定になっていた。

「でも、意外ですね。悠姫さんなら兎も角、ハジメさんも積極的に行動するなんて」

シアが言う。これはあくまで依頼ではあるが、極論、ただの人助けだ。それも必ず生きて連れ戻せとも言われてない。どちらかといえばお人好しの部類に入る悠姫なら兎も角、ハジメが依頼に前向きに行動しているのが疑問に思ったのだろう。

「ああ、生きているに越したことはないからな。その方が、感じる恩はでかい。これから先、国やら教会やらとの面倒事は嫌つてくらい待つてそうだからな。盾は多いほうがいいだろう？ いちいちまともに相手なんかしたくないし」

「……なるほど」

実際、イルワの影響力がどれほどなのかは分からない。そのため、盾としてどれほど機能するのも分からないが、無いよりはかまじだろう。

だが、積極的なのはそれだけではなく、

「それに聞いたんだがな、これから行く町は湖畔の町で水源が豊かなんだと。そのせいか町の近郊は大陸一の稲作地帯なんだそうだ」

「……稲作？」

「おう、つまり米だ米。俺達の故郷、日本の主食だ。こつち来てから一度も食べてないからな。同じものかどうかは分からないが、早く行って食べてみたい」

トータスでの主食はパンが主流だ。もちろんパンがダメという訳ではないが、日本生

まれ日本育ちの日本人であるハジメにとっては、米があるなら米を食べたいと思うのも自然だろう。そしてそれは、（一応）日本生まれの（一応）日本人の悠姫も同じだった。

「もしも売ってるなら、是非とも買ひ込んでおきたいな」

「……ん、私も食べたい……」

「出来るなら、レシピも知りたいですね」

食への期待を込めて、四人は街道を真っ直ぐ進んでいった。

ウルスの表通りをトボトボと歩いているのは、召喚組唯一の教員、畑山愛子だ。普段の活気づいた様子はなりを潜め、今は、不安と心配に苛まれて陰鬱な雰囲気漂わせている。その原因は、生徒の一人、清水幸利が失踪したからだだった。

「はあ、今日も手掛かりはなしですか……清水君、一体どこに行ってしまったんですか……」

「愛子、あまり気を落とすな。まだ、何も分かっていないんだ。無事という可能性は十分

にある。お前が信じなくてどうするんだ」

「そうですね、愛ちゃん先生。清水君の部屋だって荒らされた様子はなかったんです。自分で何処かに行った可能性だって高いんですよ？ 悪い方にはかり考えないでください」

気を落とした愛子に声をかけたのは、愛子専属護衛隊隊長の神殿騎士デビッドと「愛ちゃんをイケメン軍団から守る会」、通称「愛ちゃん護衛隊」の園部優花だ。

愛子専属護衛隊とは、農地開拓のために各地を周る愛子の護衛として教会から派遣された、神殿騎士で構成された護衛隊のことだ。全員が非常に整った容姿を持っており、誰が見ても明らかのように、護衛と同じ以上にハニートラップ要因として集められている。だが、当の愛子は全く靡かないどころか、逆に護衛隊全員が愛子に墜とされているという、色々な意味で驚きの護衛隊だった。

ちなみに、「愛ちゃんをイケメン軍団から守る会」の「イケメン軍団」とは、主にこの神殿騎士達のことを言っている。

その両護衛隊は今も愛子の周りにいて、彼等も口々に愛子を気遣うような言葉をかけている。

清水幸利が失踪して既に二週間と少し。時には隣の町村にまで搜索範囲を広げてみたが、情報の欠片も入ってこない。だが、生徒達や騎士達はそれほど心配しているわけ

でもなかった。清水幸利は「闇術師」という天職を持っており、闇系魔法に特別才能を持っている。その他の系統魔法にも高い才能を持っているため、その辺のゴロツキ程度にやられることはないだろう。

「…皆さん、心配かけてごめんなさい。そうですよ。悩んでばかりいても解決しません。清水君は優秀な魔法使いです。きつと大丈夫。今は、無事を信じて出来ることをしましょう。取り敢えずは、本日の晩御飯です！ お腹いっぱい食べて、明日に備えましょう！」

オーツ！ と、握り拳を振り上げる。無理しているのは丸分かりだが、気合の入った掛け声に生徒達も「はくい」と素直に返事をする。騎士達は、その様子を微笑ましげに眺めた。そして、宿泊している高級宿「水妖精の宿」に向かっていった。

「えっ?! それって、もうこのニルシツシル（トータス版カレーライス）食べれないってことですか?」

「申し訳ありません。何分、材料不足なものでして…」

宿に帰った一行が食事時に聞いたのは、香辛料を使った料理は、今日限りというもの

だった。それには、カレー好きな優花が、悲痛な声を上げて一層驚いていた。

「いつもならこのような事がないように在庫を確保しているのですが……ここ一ヶ月ほど北山脈が不穏ということで採取に行くものが激減しております。つい先日、調査に来た高ランク冒険者の一行が行方不明となりました、ますます採取に行く者がいなくなりました。当店にも次にいつ入荷するかわかりかねる状況なのです」

「……不穏っていうのは具体的には？」

「何でも魔物の群れを見たとか……北山脈は山を越えなければ比較的安全な場所です。山を一つ越えるごとに強力な魔物がいるようですが、わざわざ山を越えてまでこちらには来ません。ですが、何人かの者がいるはずのない山向こうの魔物の群れを見たのだとか」

「それは、心配ですね……」

「しかし、その異変ももしかするともう直ぐ収まるかもしれませんよ」

「どういうことですか？」

「実は、今日のちようど日の入り位に新規のお客様が宿泊にいらしたのですが、何でも先の冒険者方の搜索のため北山脈へ行かれるらしいのです。フューレンのギルド支部長の指名依頼らしく、相当な実力者のようですね。もしかしたら、異変の原因も突き止めてくれるかもしれません」

愛子たちはピンと来ていない様だったが、騎士達はそれを聞いて感心したように声を漏らした。フューレンのギルド支部長というと、冒険者ギルドでも上級幹部クラスだ。その直々の指名がされるほどとなると、「黒」か「銀」、もしかしたら「金」の可能性が高い。そうなるのである程度は絞り込めるだろうと、騎士たちはあり得そうな人物をリストアップしていく。

すると、二階の方から若い男女の声が聞こえてきた。

「おや、噂をすれば。彼等ですよ。騎士様、彼等は明朝にはここを出るそうなので、もしお話になるのでしたら、今のうちがよろしいかと」

「そうか、わかった。しかし、随分と若い声だ。金に、こんな若い者がいたか?」

デビットが疑問の声を上げると、徐々に男女の会話が聞き取れるようになってくる。

「もうつ、何度言えばわかるんですか。私を放置してユエさんと二人の世界を作るのは止めて下さいよお。ホント凄く虚しいんですよ、あれ。聞いてます? ハジメさん」

「聞いている、聞いている。見るのが嫌なら一人別室にしたらいいじゃねえか」

「んまつ! 聞きました? ユエさん。ハジメさんが冷たいこと言います。悠姫さんも何か言ってくださいよう」

「……ハジメ……メツ!」

「まあまあ、若いんだから。もっと青春を謳歌しなさいよ」

「爺か。てか、肉体的には悠姫も十分若いだろ」

それを聞いた愛子の心臓がビクリと跳ね上がった。今、少女はなんといつていた？ ハジメと言っていないかったか？ それに少年の片方の声は、自分達が知るハジメという少年の声に似ていなかったか？ そう考えたのは愛子だけではなく、優香達生徒も同じだった。それに悠姫と呼ばれた少年の声も、あの男性の声に似ているようだった。

反射的に愛子は駆け出し、その少年等と仕切っていたカーテンを勢いよく開けながら叫んでいた。

「南雲君?! ロスリックさん?!」

「……………先生?!」

「……………畑山教諭?!」

愛子の前に現れたのは眼帯をした白髪の少年と、中性的な見た目の黒髪の少年。記憶にある姿とは大きく変わっているが、白髪の少年は間違いなく生徒の一人、南雲ハジメだった。黒髪の少年も、自分達と同時に召喚されたユキ・ロスリックのように見える。

「……………本当に…一人…何ですぬ…? 生きて、いたんですね……」

目に大粒の涙を浮かばせて、今にも号泣しそうになっている。いきなり名前を呼ばれたことで驚いていた二人も、自分達の知る人だと気づき、更に泣き出しそうな様子を見ると、すぐさま冷静に戻っていた。

「……誤魔化せると思うか？」

「……無理だろ、名前も読んだし……それにこの人、梃子でも動かないタイプじゃなかったか？」

「……ああ、そうだった……」

当の二人は、愛子から顔を逸らしてボソボソと相談していた。だがこうなってしまう以上、無かったことには出来ないだろうと、覚悟を決めて愛子たちに向き合った。

「……うん、まあ……久しぶりだな、先生」

「どうもお久しぶりです？ いや、この体では初めまして？ かな、畑山教諭」

ようやく帰ってきた返答は、愛子が最も期待したものだった。そう、愛子が知る南雲ハジメとユキ・ロスリック？ ということが明らかになったのだ。そう思った愛子は、溜まった涙を滝のように流しながら、二人に抱き着きながら口を開いた。

「こ、こんなところで何をしていますか？ 何故、直ぐに皆のところへ戻らなかつたんですか？ それにその格好……何があつたんですか？ 答えなさい！」

愛子の怒声に、奥の方から生徒達や騎士達が駆けつけてくる。その生徒達は二人の顔を見ると、先の愛子のように硬直し、騎士達は愛する愛子が男二人に抱き着いている姿を見て硬直している。

さすがに騒ぎが大きくなってきたのか、野次馬が沢山集まってきた。下手に注目され

ているし、愛子には抱き着かれているため動けないし、だからと言って無理やり引きはがすわけにもいかないしと、ハジメと悠姫は困り果てていた。

「……離れて、二人が困ってる」

「な、何ですか、あなたは？ 今、先生は二人と大事な話を……」

「……なら、少しは落ち着いて。いい年した女が男二人に抱き着いて、はしたない」

そこに急に割り込んできたユエに、反論するように愛子が声を上げるものの、最後の「はしたない」の一言で自分の状態を理解したのか、顔を真っ赤にして慌てながら二人から離れる。

ようやく自由になった二人は少し距離を取って、改めて愛子達に向き直した。

「すいません、取り乱しました。……やっぱり、生きていたんですね？」

「ああ、なんとか生きてるよ」

「よかった……よかった……」

愛子の後で見ていた生徒達も、「やっぱり南雲って……」「でも、ロスリックさんって、もつと……」と、状況を把握し始めていた。

その愛子や生徒達のことなど知らぬとばかりに、悠姫達四人は近くの席に着いてメニューを開いている。

「えっと、良いんですか？ 元の世界のお知り合いでは？」

「ハジメにとつてはそうだな。俺は召喚されてからだから、ユエとシアの方が付き合いは長いな。まあ、どうせ数日はウルに滞在するんだ。今すぐする話でもないだろう。……園部、何かおすすめるはあるか？」

「えッ！　そ、それならニルシツシルが……」

「ああ、たしかカレーライスみたいな奴か……じゃあニルシツシル、一つ」

「まあ、そうだな………俺も同じで」

「……私も同じで」

「はあ……あ、私も同じでお願いしまゝす」

急に声を掛けられた優花は反射的にニルシツシルと答え、悠姫達もそれならとニルシツシル四人分を注文している。そこに当然のように、愛子が待ったをかける。

「二人とも、まだ話は終わっていませんよ。何を物凄く自然に注文しているんですか。大体、こちらの女性達はどちら様ですか？」

「悪いけど、こつちは依頼を受けて丸一日ノンストップでここに来たんだ。ご飯くらいゆっくり食べさせてくれ。それと、彼女たちは……」

「……ユエ」

「シアです」

「ハジメの女」「ハジメさんの女ですう！」

「お、女？」

「ふむ……ユキ・ロスリック改め、天津悠姫。ハジメの親友だ」

「し、親友？」

「そこは驚くなよ」

愛子が若干どもりながら「えっ？ えっ？」とハジメと二人の美少女を交互に見る。後ろの生徒達も困惑したように顔を見合わせている。いや、男子生徒は「まさか！」と言った表情でユエとシアを忙しなく交互に見ている。

「おい、ユエはともかく、シア。お前は違うだろう？」

「そんなんっ！ 酷いですよハジメさん。私をこんな体にしたくせに！」

「……ハジメ、メッ！」

「いや、こんな体って、ユエも『南雲君？』……何だ、先生？」

そこに、シアの「こんな体にした」という言葉に愛子が反応し、声が一段階低くなる。ハジメが二人の美少女を両手に侍らして高笑いしている光景が再生されているようだった。表情がそれを物語っている。わなわなと震わせてから上げた顔には「非行に走る生徒を何としても正道に戻してみせる！」という決意に満ちていた。そして、愛子の怒り” という小さい雷がウルに、”水妖精の宿”に落ちた。

「お、女の子に傷物にした挙句、ふ、二股なんて！ すぐに帰ってこなかったのは、遊び

歩いていたらなんですか！　もしそうなら・・・許しません！　ええ、先生は絶対許しませんよ！　お説教です！　そこに直りなさい、南雲君！」

子犬のようにきやんきやんと吠える愛子を尻目に、面倒な事になったとハジメは深い深い溜息を吐くのであった。なお、何故か標的から外れた悠姫は口を押えて、笑いそうになるのを堪えていた。

第三十八話 愛子の悩み

愛子が散々吠えた後、他の客の目があるからというところで、悠姫達はVIP席の方へ案内された。そこで、愛子や園部優花達生徒から怒涛の質問を投げかけられるが、神殿騎士達もいる手前、解放者や神の遊戯云々など言えるはずもない。そもそも、愛子達にそれを教える必要も今はない。その結果、

Q、橋から落ちた後、どうしたのか？

A、二人して生き残ることができたので、脱出する手段を探した結果、ハジメが左目と左腕を失いながらも、脱出することができた。

Q、なぜ白髪なのか

A、魔物の肉を食べたことによる、激痛とストレスの結果？

Q、ユキは何故若返っているのか

A、色々あった。だが、天津悠姫ちが本来の姿

(肉体を再構成するにあたって、地球召喚組との邂逅によって生じていた

タイムパラドックス
 時間的矛盾を解消した)

Q、なぜ、直ぐに戻らなかったのか

A、オルクス大迷宮からの脱出した際に、他にやるべきことができた

Q、やるべきこととは？

A、言えない

Q、戻ってこないのか

A、戻るつもりはない

「おいお前！ 愛子が聞いているのだ、真面目に答えんか！」

「大真面目だとも。そもそも、戻ってこないのか？ 逆になんで戻ってくると思ってる？」

望む答えが返ってこなかったことで愛子が気を落とす様子を見て、デビッドが怒声を上げる。だが、悠姫達としては十分大真面目に答えたりもりだったし、戻ってこないのか、という質問に対し、悠姫はそのことを逆に愛子に聞き返す。

「なんでつて…南雲君たちは仲間で…」

「俺達はその仲間に裏切られて、殺されかけて、今こうしてる。まさか、自分達を殺そうとした奴らの元に戻れと？ もしかして、今度こそ殺されろと？」

「そんなこと思つてません!」

「そう言つてるのと同じだよ。…あの後に何があつたか、当ててやろうか? 天之河は檜山を赦した。仲間だからとか、混乱してたとか、そういう言い訳を立てて、俺達の死は認め、檜山の殺人を否定した。違うか?」

「それは…合つて、ます」

悠姫の言つている理屈は至極単純。

裏切り者は信用できない。その裏切りをよく分からない理屈で正当化しようとする者も信用できない。そして、そいつ等に付いていく者達も信用できない。そもそもだ、子供でも罪だと分かる殺人^{もの}を目の当たりにしているのに、認める認めないなどと話すこと自体が可笑しいのだ。

「呆れて何も言えん。罪を犯したならば裁かねばならん。それは何時の時代、どの国、どの世界だろうと変わらぬ真実だろうが。『勇者』の仲間だから? 混乱してた? だから何だよ。それに、そういう間違いを正すのが貴方^{教師}の役目じゃないのか?」

悠姫の声に徐々に怒りが含まれていき、ハジメはその通りだと首を大きく縦に振つてゐる。その様子に愛子達は委縮してしまう。それどころか、愛子は言外に教師失格だと言われてるようにも感じていた。そこでふと頭によぎり、悠姫はもしかしてと、愛子達にあることを聞いた。

「…まさかと思つて聞くが、天之河達はまだオルクス大迷宮にいるのか？」

「え？ は、はい。そう聞いてます。八重樫さんと白崎さんは、キリガクレさん達と冒険者として依頼を受けてたりしますけど…」

それを聞いた悠姫とハジメは絶句して、更に深い溜息を吐いた。

「…はあ、呆れた。『勇者』なのに、まだそんなことしてるのか」

「貴様！ 無礼だろうが！」

「ちよつと、デビッドさん！ ロスリックさん？ 天津君？ えつと、そんなことつてい

うのは…」

「天津でいい。まだオルクス大迷宮で訓練なんかしてるのか、つてことだ」

悠姫の言葉に、愛子達は頭に「？」と疑問を浮かべた。訓練するのは当然ではないのかと、全員が考えるが、

「皆の為に、誰かの為に、仲間の為に、世界の為に。ああ素晴らしいとも、まさしく勇者の言葉だ。で？ 言うだけ言つて、今は何やってる？ 訓練？」

「訓練すると誰かの為になるのかよ？ オルクス大迷宮を攻略すれば、世界は救われる

のかよ？ トータスの人間の十数倍のステータスを持っていて、最強の聖^{アーティファクト} 剣も持っていて、それで何のために迷宮に行つてるのさ」

そこでようやく、悠姫が何を言いたいのかが分かったようで、愛子達はハツとした表

情で驚いていた。

「敵は魔人族で、悪なんだろう？ その敵に立ち向かわず、訓練で迷宮に籠つてる奴の、何処が『勇ましい者』なんだよ。いい加減に気づけよ、矛盾してるだろ」

つまるところ、一体いつまで訓練をしているのか、ということだ。既に召喚から数か月は経過している。初めの一月は、王宮や迷宮という整えられた空間で訓練を行うのは理解できるが、それ以上の時間を迷宮で費やしたところで経験値とお金にしかならないし、勇者が言うような「世界を救う」ことに繋がることはない。仮に百層まで攻略したところで、そこから続く真オルクス大迷宮を見つけ、その攻略を——などと、不可能に挑むことになるのは、容易に想像できる。

さらに言えば、一方的に蹂躪できる魔物を相手に訓練したところで、大した経験にもなりはしないだろう。つまり、訓練という側面で見ても現状は非効率的としか言いようがない。もつとも、知っている範囲で強い魔物が、オルクス大迷宮にしかないということもあるのだろうか。

改めて悠姫は深い溜息を吐いた。さつきから溜息しか吐いていない気がする、と思いつながら、話は終わりだと食事を再開した。そして四人ともニルシツシルを食べ終えると席を立った。

「一応言っておくが、俺はあんたらのことはどうでもいいと思ってる。だからあの日の

ことも、これまでの事も、もう興味はないし恨んでもいない。ここには仕事に來ただけで、終わればまた旅に出る」

「…やっぱり、戻るつもりは」

「ない。それに俺は、俺達は、悠姫恩人に着いていくって決めてるんでな」

つまり、このパーティの核となっている悠姫を説得できればどうにかできると思い、期待を込めた目で愛子達は悠姫を見る。

「……まあ、トータスに召喚されたのも何かの縁だ」

「?! それなら!」

「でも、俺の考えはさっき言った通りだ。それに、やるべきことができたとも言っていない。俺達は俺達で行動する」

そしてそのまま四人は階段を上って、各自の部屋に戻っていった。地球召喚組の心には皆一様に悲しみと失意が沈み、それが晴れることはなく、その日はそのまま解散となった。

その日の深夜。皆が寝静まった頃、愛子は眠れずにいた。無論、夕食時の事だ。亡くなった筈の南雲ハジメと天津悠姫ユキウスリックが生きていた。それはとても喜ばしいことだ。しかし、ハジメも悠姫ユキの姿は変わっているし、ハジメに至っては性格すら豹変している。こちらがどうなろうと興味がない。完全な無関心とまでなっていないのは、悠姫がそばにいたからなのか。穴に落ちた先で、どれだけ壮絶な経験をしてきたのか。片腕と片目を失って、性格まで変えなければ生きられないほど過酷な場所だったのか。なぜ先生として、生徒が苦しんでいるときに何もしてやれなかつたのか、と。

そのままぼんやりと暖炉の火を見つめながら、いろいろと考えているのか百面相を浮かべていると、ふいに扉がコンコンと静かにノックされる。

「はッ、はい?!」

「先生、起きてるか?」

その音にハツとした愛子が声を上げると、ハジメの声が聞こえてくる。

「な、南雲君? こんな夜更けに一体…」

「ああ、悠姫も一緒だ。さすがに騎士達がいる手前、話せないことがあつてな。とりあえず、開けてくれないか? 最悪、このままでも構わないが」

「は、はい。ちよつと、待つてください」

一瞬、夜分に女性の部屋を男が訪れるという意味を考え、顔を真っ赤にするが、すぐにその考えを消してドアに向かい、鍵を開けてドアを開ける。そこにはハジメと悠姫が立っていた。

「悪いな」

「夜分遅くに失礼」

「ど、どうぞ。…一体どうしたんですか？ それに、こんな時間に女性の部屋を訪れるのは感心しませんよ？」

顔が赤くなっているままだったので、完全に虚勢を張っているのは明らかだったが、二人は何も言わずに入ってドアを閉めた。

「まあ、それはそうなんだがな。やるべきことについて話しておこうと思ってな」

「え、でも、二人は私達のこととは…」

事情を話してくれるということに、もしかしたら戻ってきてくれるのでは、と期待を寄せるが、

「悪いけど、戻るつもりがないのは本当だ。でも、もう無関係だからはいさようなら、と言つて切り捨てるほど、不義理を働くつもりもない。貴方に話すのは、あくまで一番冷静に受け止めてくれる相手だと判断したからだ。この話を聞いてどうするのは、貴方に任せる」

そして、近くの席に座ると、ハジメと悠姫は話し始めた。

狂った神とその神の遊戯のこと。天津悠姫という人間のこと。かつて解放者と呼ばれた者達のこと。その解放者の中に悠姫のパートナーがいて、今も神山に眠っていること。

荒唐無稽としか言いようのないその話を聞き、愛子は再び呆然としてしまう。

「ふ、二人は、もしかして、その狂った神をどうにかしよう……旅を？」

「俺達はさっき言った通り、悠姫に着いていく。その先で狂った神が立ちはだかるなら、その狂った神もぶっ倒す」

「俺はガイアを迎えに行つて神を、エヒトを倒す。それが託されたものとしての役目だし、地球に帰るための最善の近道だ」

つまり、戦うつもりなのだ、この二人は。『神』などという、人知の及ばぬ存在に。そして『勝つ』つもりなのだ。そう理解して、ようやく愛子は細々と絞り出した。

「……わ、私に、なにか、できることは、ないですか？」

畑山愛子は大人であり、教師である。そして愛子は『生徒の味方である』ことが最も教師として重要だと考えている。たとえハジメの姿と性格が変わってしまったとしても、愛子にとつては味方でなければならぬ生徒なのだ。そして悠姫も同じ。ハジメ達と同い年であり、ならば大人として擁護すべき子供なのだ。

しかし、今の自分では力不足であるということは俄然明確、でも指を啜えて待つてゐるのは違うだろうと。

「……今はない。だけどいつか、貴方の力が必要になる。それまで待つてほしい」
「……わかり、ました」

そして、話すことは話したと二人は立ち上がり、部屋を出ようとドアへと向かった。

「——八重樫さんと白崎さんはッ！」

愛子が出した二人の名前に、悠姫は振り返らずに足を止めた。

「二人は、天津君と南雲君が生きっていると信じて、強くなろうと努力してます。だから——」

「時期が来たら迎えに行く」

そして、悠姫は肩越しに顔だけ振り返った。慈愛、そして感謝、愛子はその目に、そんな想いを感じた。

「あれから、約十年だったか。それでも生きていますと信じ続けてくれて、今もなお生きていますと云っている。感謝の念が絶えないよ」

「だからいつか改めて迎えに行く。その時に、この想いを告げるさ」

それだけ言つて、今度こそ悠姫とハジメは部屋を出ていった。

部屋に残つた愛子は暫く二人が出ていったドアを見ていたが、

「……よしッ！」

やるべきことは多い。まずは失踪した清水幸利の捜索、次いで農地改革。

そして、たった今知った世界の真実と、それに立ち向かう二人。今できることはなくとも、いつか自分の力が必要になると言った。ならばそのいつかに向けて頑張ろう！

オー！ と、握り拳を振り上げた。

第三十九話 北の山脈地帯

夜明け。東の空がしらみ始めた頃、悠姫、ハジメ、ユエ、シアの四人は旅支度を終えて、ウル町の北門に向かっていた。その北門から伸びる街道が北の山脈地帯に続いているのだ。馬で約一日程度であることを考えれば、魔道二輪で二、三時間で着くだろう。そして四人が北門に着いた時、その門前に七人の人影、愛子と六人の生徒達が仁王立ちの如く立っていた。

「……大体想像はつくが一応聞こう。何の用だ？」

「私達も行きます。行方不明者の捜索ですよね？ 人数は多いほうがいいです」

「却下だ。行きたきや勝手に行けばいい。が、一緒は断る」

「な、なぜですか？」

「単純に足の速さが違う。仮にも人命が掛かってんだ。遅い方に合わせて進んたら、ここ迄急いだ意味がない」

愛子達の後を見ると、七人分の馬が準備されているようだ。だが、四人の移動手段は時速八十キロで爆走する魔道二輪。普通の馬が着いてこられる速度ではない。おまけ

に、アーティファクトである魔道二輪は、生物である馬と違って疲れ知らずということもある。一日を二、三時間に短縮できる性能は伊達ではないのだ。

だが、当然七人はそんなことを知るはずもない。完全に拒絶されたと思つたのか、優花は怒つて食つて掛かるうとしたが、悠姫とハジメが「宝物庫」から魔道二輪を取り出すと、言葉を失つたようだった。

「これで分かつたか？ 文字通り、足の速さが違うんだよ」

そういうことで、と三人と一人が魔道二輪に乗るが、愛子はその前に立ちほだかつた。愛子としては、何としても連れてつてもらわなければならぬ理由がある。

一つは、昨晚の話しについて。悠姫達のやるべきことは聞いたし、何をするのかまでは一通りは聞いた。だから、それがどれだけ危険なことなのかも大体は見えてはくる。ただ、「先生」として本当に出来ることはないのか、もしあるなら、可能な限り力に成りたいから。

もう一つは、失踪している清水幸利しみずゆきとしについて。周辺の町まで広げた搜索範囲だが、唯一未搜索なのは、北の山脈地帯のみ。ならば、その山脈地帯に向かう悠姫達に同行して、あわよくば清水幸利の搜索に手を貸してほしい。

大まかな理由を聞いたハジメは非常に嫌そうな顔をするが、一つ目の理由に關しては、自分たちが蒔いた種でもあることを考えると、一概に拒絶できない。話さなかつた

ら話さなかったらで、余計に面倒事になったような気もするが…

もしここで断れば、あの神殿騎士も利用してこちらを探してくるかもしれない。そうなれば、早々に教会に目を付けられることになるだろう。覚悟はしていたが、さすがにそれは早い。

どうしたものかと、ハジメは悠姫を見た。悠姫は溜息を吐きながら、フューレンでイルワにしたように、指を四本立てて言った。

「……はあ…条件だ。一つ、こちらの指示には従うこと。文句や反対意見があらうと関係ない。二つ、最低限は自分の身は自分で守れ。仮にも召喚された神の使徒様だ。こちらの魔物にやられるようでは、そもそも護衛など務まらない。三つ、畑山教諭、話が終わったら道中寝てろ。寝不足で山登りなど、死に行くようなものだ。最悪一時間でもいい。四つ、七人全員、このアーティファクトを着けてもらう」

化粧で誤魔化していた寝不足を見破られ、恥ずかしくなって顔を赤くするが、悠姫が取り出した七つの腕輪を見て首を傾げた。

それは、中心に黒星^{アキシオン}晶鋼が埋め込まれた、とてもシンプルな腕輪。腕輪部分を作ったハジメによって、多少の装飾は施されているものの、その異常ともいえる膨大な内包魔力を隠蔽する以外の機能は付いていない。

「えっと……これはっ！」

「分かりやすく言うと、発信機だ。その結晶黒星晶鋼が俺と繋がってる」

黒星晶鋼アキシオンの体外作成の練習のついでで作った産物であり、体外作成した黒星晶鋼アキシオンが、どれほどの間形状を保持するのか、“宝物庫”で消えるとどうなるのか、といった実験中でもある。

なお、発信機としての機能の他に、遠隔操作可能な爆弾としても使用できることは、七人には黙っておく。

七人が腕輪を着けたことを確認すると、悠姫とハジメは魔道二輪を仕舞い、代わりに一台の魔道四輪を出した。アーティファクトが出たり消えたり、先ほどから七人の驚きの声は絶えていない。

「乗れ。余った奴は荷台だ。悠姫はどうする？ 走るか？ そっちの方が早いだろう」
「走らん。荷台に乗る。なにやら話したそうにしてるみたいだしな」

ハジメの茶化しに、苦笑しながら悠姫は優花を見る。そして、運転席にハジメ、隣に愛子、後部座席にユエ、シア、菅原妙子、残りが荷台に乗り、総十一名は北の山脈地帯に向けて出発した。

北の山脈地帯に向かって爆走している魔道四輪。その荷台に乗っている者達の間には、なんとも言えない空気が漂っていた。正確には、悠姫にどう接すればいいかわからない五人に漂っていた。それを察していた悠姫は、まずその要因だろう部分を解消しよう、口を開いた。

「とりあえず、改めて自己紹介でもしておこう。」

俺の名前は天津悠姫。少し前までユキ・ロスリックと名乗っていた男だ。詳しくは話せないから暈させてもらうが、まあ色々あった。一応、君達と同時に召喚されたユキ・ロスリックと同一人物だと思ってもらって構わない」

突然の自己紹介に驚くが、天津悠姫の名前に聞き覚えがあったのか、玉井淳史が聞き返した。

「天津悠姫って…テレビで聞いたことが…ほら、たしか飛行機事故で一人突然消えたっというー！」

「あ、俺も知ってる！ 現代最大のミステリーとか言われてる、あのー！」

「へえ…そんなに有名になってたのか…。その天津悠姫という認識で合っているぞ」

雫や香織から聞いていた以上に、その事件は有名だったようだ。まあ、空間災害が原

困だった、など誰も考えないだろうし、他の乗客や機体が無事だったことを踏まえれば当然でもある。

「もしかして、異世界に召喚された、みたいな感じなんですか？」

「似たようなものだよ」

正確には未来に飛ばされた、ではあるが、大体は同じと見ていいだろう。そのような感じで、気楽に話してある程度笑いも増えてきたところで、本題だと悠姫が優花に話しかけた。

「言いたいことは纏まったか？ 園部」

「え、えっと。はい」

突然話しかけられて驚いたが、今までの会話が緊張をほぐすためのものだったことに気が付いた。

「…お礼を言いたかったんです」

「…正直に身に覚えはないんだが」

優花はお礼と言うが、悠姫には優花からそのように言われる理由に覚えはなかった。「ベヒモスが現れて慌ててた時に、トラウムソルジャーにやられそうになったところを助けてもらいました。それに、あの日にロスリックさんがいなかったら、私達は全滅してたかもしれません。だから、ありがとうございました」

頭を下げる優花に続いて、慌てるように他の四人も、ありがとうございました、と言いながら頭を下げた。ユキがいなければ全滅していたというのは、他四人も同じなのだ。悠姫はそれに慌てることはなく、合点がいったというように手を叩いた。

「ああ、そんなこともあったな。まあ気にすることはない、誰も死んではいないんだ。：俺も、ハジメも：」

最後の一言に肩をビクリと震わせて、五人は縮こまるように肩を窄めた。悠姫は五人を見て、逆効果だったかな？ と笑っている。そして時間は過ぎ、北の山脈地帯に近づいていった。

北の山脈地帯。

それは一方では紅葉が広がり、別一方では緑が生い茂る。その奥では枯れ木が、と、様々な環境が混ざり合ったような不思議な場所だ。日本でいうところの、四季が全て広がっているような場所で、見方を変えれば、時期に関係なく様々な山の幸が採れるとい

うことでもあるだろう。

そんな場所を、ハジメが製作した鳥型無人偵察機を道標に十一人は進んでいた。それなりの実力がある冒険者達が行方不明になったというならば、上空からでも確認できる、戦闘などの痕跡が見つかる筈。故に、様々な方向へ偵察機を飛ばしつつ、ハイペースで山脈を上る。

それから、おおよそ一時間と少し。六合目に到着した悠姫達は、一度そこで立ち止まった。理由は、辺りに痕跡がないか調べる必要があつたのと……

「はあはあ、きゅ、休憩ですか……けほつ、はあはあ」

「ぜえー、ぜえー、大丈夫ですか……愛ちゃん先生、ぜえーぜえー」

「うえつぷ、もう休んでいいのか？ はあはあ、いいよな？ 休むぞ？」

「……ひゅうーひゅうー」

「ゲホゲホ、南雲達は化け物か……」

悠姫達四人を除いた七人の体力が限界だったため、休憩するためでもあつた。隔絶したステータスの差が如実に表れているとも言える。とはいえ、非戦闘職の愛子でもトータス一般人の数倍のステータスを持つ。たとえ六合目まで登山してもここ迄息が切れることはない。これは、悠姫達の進行速度が速すぎたため、愛子達がほぼ全力疾走していたためだった。

川沿いの探索もするつもりだったからな、と七人が座り込むところを見つつ、悠姫達は愛子達に川の場合だけ教え、山道を逸れて先に四人で川に向かった。

その川は小川と呼ぶには規模が大きかった。索敵能力が高いシアが周囲を探り、ハジメが念の為無人偵察機を飛ばすが魔物の反応はない。取り敢えず息を抜いて、川岸の岩に腰掛けつつ、今後の捜索方針を話し合った。

その途中で、ユエが「少しだけ」と靴を脱いで川に足を浸けて楽しむというわがままをしたが、どちらにしる愛子達が未だ来てすらいないので大目に見る。ついでにシアも便乗した。

「さて、これからどうする?」

「とりあえず上流に向かえば何かあるだろう」

「まあ、そうだな。わかりやすい痕跡でもあれば助かるんだがな」

「それなら、この上流に戦闘痕がある。冒険者たちの装備もそこに落ちてる。なんなら、下流の滝壺裏の洞窟でウイルの坊ちゃんが生きてるぞ」

「ツ! まじか! そんな情報知って…ん…なら、先…に…ツ!」

絶望的だった捜索対象が生きていると知ったハジメは、恩が高く売れると喜んだものの、その情報を口にした誰かが知らない声だったことに驚いて、思わずユエとシアの方へ飛び退りながらドンナーを構えた。

突然のことにユエとシアも驚くが、シアはそれ以上に、その人物の姿の方に驚いた。そこで、ようやく愛子達も合流したが、ハジメが殺気を放ちながらドンナーを構えている様子に息を呑んだ。だが、一方で笑いを堪えている悠姫もいて、状況が掴めず誰も口を開かない。

川のせせらぎだけが一帯に響き、川岸の岩に腰を下ろしていた正体不明の男が立ち上がる。筋肉粒々の身体に、特徴的なウサミミ。一見するとシユールな姿だが、明らかな強者のオーラを纏っている。この人物こそ、ハジメの超スパルタ訓練によつて狂化改造された首狩^{ハウリア}一族、その族長の子にしてシアの兄――

「……デイルグ……兄さま?」

――デル・ハウリア。又はデイルグ・ロートレク。

イルワ・チャングの依頼を受け、悠姫達より先行して山脈地帯に入っている、「不落」の異名を持つ「金」冒険者だった。

第四十話　ウサミミの守護者と救助

「…デイルグ…兄さま？」

無意識に出たシアの問い掛けが、張りつめられた空間に響き渡る。その問い掛けに反応するように、川岸の岩から立ち上がった男はゆつくりとシアの方へと向き、返答した。

「…大きくなったな、シア」

「ッ！ デイルグ兄さまッ！」

脱兎の如く駆けだしたシアは、泣きながらデイルグに抱き着いた。シアに生き別れの兄がいると知っていたのは悠姫、ハジメ、ユエの三人だけ。昨夜会ったばかりの愛子達七人はそのことを知らないものの、兄妹と、大きくなったという言葉から大体の事情は察したのか、目元に涙を浮かべ鼻を噉っている。

気の抜けたハジメは、構えていたドンナーを降ろして、笑いを堪えて肩を震わせながら近づいてきた悠姫に、不満げな様子を一切隠すことなく言った。

「…知ってたんなら、言ってくれても良かったんじゃないか？」

「先に金ランクのデイルグ・ロートレクが山脈地帯に入ってるのは聞いてただろ？」

「あー…そういうやそうだったな…忘れてた。だけどまさか、気配を全く感じられないとは思わなかったけどな…」

「新西曆むかしから気配を殺すのは巧かったからな。それに、ハウリアに転生して、一層磨きがかかったようだな。隣に座られるまで気が付かなかった」

「それを言われたら、俺は話しかけられるまで気が付かなかったんだけどな…」

泣いているシアの頭を撫でてなだめる様子は、まさしく兄妹だった。シアが泣き止むまで、それは続いた。

新たにデイルグを加えて十二人になった一行は、川の上流を目指して歩いていった。デイルグが言った、ウィル・クデタがいるという滝壺は下流方面だが、先に戦闘痕を確認しておこうということだ。

その進行ペースは、最初のペースとは比べる必要がないほどにゆっくりだった。理由の一つは、愛子達の体力がそれほど回復していないこと。二つ目は、ウィル・デクタの生存、安全が確認されていること。故に、特別急ぐ必要性が無くなった。そして、

「——それで——ハジメさんが——ユエさんも——」

「ああ、そうか。シアはよく頑張ってるな」

兄妹の時間を確保するためだ。この搜索依頼が完遂すれば、悠姫達四人は「グリューエン大火山」に向かうことになっているし、デイルグはデイルグ自身の目的の為に、四人に同行することは出来ない。シアとデイルグの目的が違う以上、これは当然のことであるし、ならば今のうちに十数年分の会話を楽しみたい。

普段からシアに当たりが強い（最近ユエのお願いもあつて甘くなってきた）ハジメも、今回ばかりは見逃すかと、周囲の警戒と探索をしていた。

そして歩くことしばらく、デイルグの話しにあつた戦闘痕と冒険者の装備が見つかった。無惨に散らされた剣や盾、鎧、そして激しさを物語る破壊の跡が広がっている。

「……これは……」

「……相当激しい戦闘……いや、一方的な蹂躪か……デイルグ、こんなことが出来る魔物に覚えは？」

「ない、な。正確には、俺が知る限りでは知らん。海の向こうや迷宮などを含めればいるかもしれないが……」

「現実的ではない、か……」

そう言い、悠姫は直線状に抉られた跡を見る。半ば炭化していることから、超高熱の攻撃、レーザーのような攻撃が放たれたことが想像できる。

だが、そのような攻撃ができるような魔物は、デイルグが言った通りこの付近には存

在していない。それどころか、地上に存在していることすら怪しい。

悠姫やハジメ、ユエに言わせるならば、裏オルクス大迷宮最下層^{九+}クラスの魔物だ。そんな魔物が突然生まれるとは考えにくい。

と、視界の端に川岸に引つかかっている、光るものを見つけた。拾い上げてみると、それは少し古そうなロケットペンダントだった。中には美しい女性の写真が嵌っている。誰かの妻か恋人か、落ちていた場所から無関係ではないだろうと、回収した。

そして、遺留品を大体の回収したところで、下流の滝壺裏で既に生存を確認しているというウィル・クデタの元へ向かった。

いざ滝壺裏に着くと、そこには気絶するように横に倒れ、しかし体を冷やさないように上着のようなものを掛けられている青年を発見した。上に掛けたのはデイルグだという。愛子達が心配そうに見る中、悠姫が青年の頬をペチペチと叩いて起こす。何度か行くと、ようやく意識を取り戻したようで、呻きながら目を開けた。

「う……あ、あれ？　ここは……」

「起きていきなりで悪いが質問だ。あんたはウィル・クデタか？　クデタ伯爵家三男の」「うわ！　き、君たちは一体？　どうしてここに……」

目覚めたら十二名もの男女に囲まれているのだ。驚くのも無理はないだろうが、これをはつきりさせなければ話は進まない。

「俺は天津悠姫。冒険者ギルドフューレン支部支部長イルワ・チャングの依頼を受けて、ウイル・クデタの搜索に来た。もう一度聞くぞ、あんたデタ伯爵家三男、ウイル・クデタか？」

「あ、は、はい！ 私がウイル・クデタです！ そうか…イルワさんが…また借りを作ってしまったな…」

それから、各々の自己紹介と、ウイルから何があつたかを聞いた。話を纏めるところだ。

およそ五日前、五合目でブルータルという、オーガやオークのような魔物の群れに襲撃された。犠牲を出しながらもなんとか捌いていき、撤退していった先が、先ほど悠姫たちがいた六合目付近。そこで、今度は漆黒の竜に襲撃された。前方には竜、後方にはブルタールの群れという絶体絶命で、竜の放つたブレスでウイルは吹き飛ばされ、この滝壺まで川に流された、ということだった。

つまり、あの扱られた跡は竜のブレスによるもので、冒険者達はあの場所で全滅してしまつたのだろう。

ウイルは、話している内に、感情が高ぶつたようですり泣きを始めた。無理を言つて同行したのに、冒険者のノウハウを嫌な顔一つせず教えてくれた面倒見のいい先輩冒険者達、そんな彼等の安否を確認することもせず、恐怖に震えてただ助けが来るのを待

つことしか出来なかつた情けない自分、救助が来たことで仲間が死んだのに安堵している最低な自分、様々な思いが駆け巡り涙となつて溢れ出す。

「わ、わだじはさいでいだ。うう、みんなじんでしまったのに、何のやぐにもただない、ひつく、わたじだけ生き残つて……それを、ぐす……よろこんでる……わたじはっ！」

洞窟の中にウイルの慟哭が木霊する。誰も何も言えなかつた。顔をぐしやぐしやにして、自分を責めるウイルに、どう声をかければいいのか見当がつかなかつた。生徒達は悲痛そうな表情でウイルを見つめ、愛子はウイルの背中を優しくさする。ユエは何時もの無表情、シアは困つたような表情、デイルグは面倒くさそうな表情をしている。

が、ウイルの言葉が途切れ、泣き声だけが残つた時、悠姫が四つん這いに蹲るウイルの前でしやがみこんだ。

「……自己嫌悪は終わつたか？ もう行くぞ」

え？ と誰かの眩きが漏れた。恐らく愛子達七人の誰かだろうが、少なくとも、悠姫なら元気づける言葉をかけると思つていたのか。当のウイルも、目を真つ赤にしながらかキョトンとしながら顔を上げる。顔を上げたウイルの目に映つたのは、呆れたと言わんばかりの表情の悠姫だつた。

「何だよその顔。別に手足が折れてるわけでもないだろ？ ほら早く立て」

「あ、あの……天津君？ ウイルさんは……」

ウィルの気持ちなど知ったことではないと急かす悠姫に、それはないだろうと愛子が口を挟む。

「後悔なら今じゃなくてもできる。今するべきなのは、ここを離れること。そしてウィルをイルワの元に連れて帰るのが俺達が受けた依頼だ。それとも、お前のわがままで、今度は俺達を殺すのか？」

「ッ！ そんな、こと、は……」

「天津君！ そんな言い方はッ！」

「事実だ。……まあ、そうだな。敢えて言うことがあるとすれば——」

遠回しにウィルのわがままで誰かが死んだと悠姫が言う。無論、その誰かが冒険者のことであることは明確であり、一切遠慮なく言う悠姫に愛子が再び口を挟む。生徒達六人も剣呑な雰囲気を出している。しかし悠姫は訂正することはなく、だが敢えてと一言置いて、

「——生きる。そして忘れるな。たとえ誇りを捨てても生きる。その冒険者達の名前、共に過ごして学んだこと、その冒険者達が生きていたという軌跡を、たとえ誰が忘れてもお前だけは忘れるな。それが、お前にできる唯一の贖罪だ」

そして、その罪を正当化しようとする唇には堕ちてくれるなよ、と。

最後の一言を聞いた時、悠姫が抱える闇の一片が垣間見え、全員の背筋が凍るように

感じた。

ユキ・ロスリック
天津悠姫は、誰よりも英ヴァルゼライド雄の背中を追い続け、誰よりも英ヴァルゼライド雄の隣に立ち続け、そして誰よりも英ヴァルゼライド雄を肯定した男なのだ。ならば当然、それ相応の歪みを抱えているのだから。

それからしばらくして、ウィルも落ち着いたのかゆつくりと、だが確かな足どりで立ち上がる。日の入りまでおおよそ一時間と少し、急いで下山すれば暮れには麓に辿り着けるだろう。

だが、事はそう簡単には進まない。滝壺から出てきた一行を熱烈に歓迎するものがないからだ。

「グウルルルル」

低い唸り声を上げ、漆黒の鱗で全身を覆い、翼をはためかせながら空中より金の眼で睥睨する……それはまさしく「竜」だった。

第四十一話 黒き竜

その竜の体長は七メートル程。漆黒の鱗に全身を覆われ、長い前足には五本の鋭い爪がある。背中からは大きな翼が生えており、薄らと輝いて見えることから魔力で纏われているようだ。

そして、何よりも印象的なのはその瞳だった。爬虫類らしく縦に割れたその黄金に光る瞳からは、剣呑さと美しさが感じられる。その黄金の瞳が、空中より悠姫達を睥睨していた。低い唸り声が、黒竜の喉から漏れ出している。

蛇に睨まれた蛙のごとく、愛子達は硬直してしまっている。特に、ウィルは真つ青な顔でガタガタと震えて今にも崩れ落ちそうだ。脳裏に、襲われた時の事がフラッシュバックしているのだろう。

黒竜はその視界にウィルを捕らえると、キュウワアアアと言う不思議な音と立てながら、その口に魔力を収束させていく。上流の破壊痕や冒険者達を消し飛ばしたブレスだ。

「ッ！ 退け、ッ！ ハジメ、盾だ！」

「ッ！ クソッ！」

悠姫が退避と叫ぼうとしたところで、後ろにいる愛子達を見て変更した。愛子と生徒達、そしてウイルの八人は、いまだに硬直から戻っていない。

ハジメが“念話”でユエとシアに指示しつつ、ハジメが“宝物庫”からハジメ製の大盾を取り出し、地面に固定して構えた。

そして、黒竜からレーザーの如き黒いブレスが放たれる。音すら置き去りにし、一瞬で大盾へと到達したブレスは、すさまじい圧力と轟音、熱波を出して、大盾を構えるハジメを押し返そうとする。

「ぐうー！ おおおおお！！」

ハジメが雄叫びを上げながら耐える。しかし、黒竜の注意は完全にハジメ達に向いている。その隙に黒竜の真下から悠姫は飛び上がり、その無防備な腹に回し蹴りを叩き込んだ。

「グウルアアアア!？」

突然の衝撃に驚いて黒竜はブレスを中断し、衝撃が来た方へ首を向ける。そこには、抜刀の体勢をとった悠姫が。

「シッ！」

そのまま黒竜の側頭部に音速を超えた抜刀を叩き込む。腹に喰らった衝撃よりも、更

に強い一撃を頭部に入れられ、黒竜は叫びを上げる。しかし、その強固な竜鱗には、一筋の薄い傷しか入らない。

「“禍天”」

それでも、黒竜をその場に留め、他の者が攻撃する時間は確保できている。ユエが重力魔法 “禍天” を黒竜の頭上に展開し、落下するように押しつぶすと、黒竜を地面に叩き落とした。黒竜は猛烈な勢いで地面に縫い付けられ、さらに強まる “禍天” によって、黒竜は地面に陥没していく。

「止め、ですうッ！」

身動きが取れない黒竜の頭部に、シアが雄叫びを上げながらドリユッケンを振り下ろす。重力魔法を付与されたことで、更なる破壊力を得たドリユッケンの一撃は、まともな直撃すれば、致命傷に近いダメージを与えるだろう。

しかし、

「グルアアア!!」

自身を地面に縛り付ける重力の鎖を、黒竜は驚異的な膂力によって引き千切り、頭部へ振り下ろされていたドリユッケンを回避。同時に黒竜が展開した火炎弾をユエに向けて飛ばしつつ、地面に食い込んだドリユッケンを持ったシアの横腹に、高速で一回転することで勢いをつけた大質量の尾を叩き付けた。

「なッ！」

「あつぐう!!」

重力魔法で空中に浮いていたユエは、下に加重することで火炎弾を回避し、シアは引き抜いたドリユッケンの柄を盾にすることで、木々の向こうまで吹き飛ばされた。そして、再び口に魔力を収束し、抜刀しようとする眼前の悠姫にゼロ距離のブレスを叩き込んだ。

悠姫が膝下を残して消し飛んだことを確認した黒竜は、その黄金の瞳はハジメを…素通りして、その奥のウィルに向けた。既に大盾は仕舞い、ドンナー・シユラークを構えている。

「な、南雲君！ あ、天津君が！」

悠姫が消し飛んだところを目撃して、愛子や生徒達、ウィルがこれまで以上の悲鳴を上げている。彼らから見れば、たった今悠姫は死亡したようにしか見えないが、そんなことはない。

「——無視、するな！」

オルタレイション
星環境変性——

—— // 樂園を照らす光輝よ、正義たれ //
アキシオン

黒星晶鋼に包まれて復活した悠姫が、再び無防備な黒竜の側頭部に抜刀を叩き込み、

ダメ押しだと同時に付与エンチャントした衝撃を多重化、黒竜の側頭部を七重の衝撃となつて襲い掛かった。

「グルアアアア!!」

小さな斬傷も、何重にも重なれば大きな傷となる。先ほどから同一箇所に入れられた傷は、最後のダメ押しによつて竜鱗を砕き、出血を引き起こした。

体制を整えるためか、黒竜は大きな翼を羽ばたかせて暴風を起こし、誰も近づけないようにしつつ後方に下がった。その黄金の瞳は、それでもウィルを中心に捉えている。

ここまできると最早異常だ。堅牢な竜鱗すら砕くことができる存在悠姫が目の前にいるというのに、常に狙いはウィル一人。

「…洗脳されているのか」

悠姫が出した結論は、この黒竜が何者かに洗脳されているということ。丁度、竜という強力な存在を洗脳できる可能性才を持った「闇術師」の生徒が一人、失踪しているという事実もある。

だが、逆に言えば、この竜の洗脳を解けば、その生徒に繋がる情報を手にできるかもしれない。竜も洗脳下でなければ、無暗に敵対することもないだろう。

「デイルグ、ユエはウィル達の護衛を」

「了解」

「…わかった」

「ハジメは中距離から俺の援護を頼む」

「おう」

先程から、生き返った悠姫の姿に愛子達が騒ぎ立てているが、それを一切無視して悠姫は黒竜へと突貫し、黒竜は再び口に魔力を収束する。

「何度も同じ手を、使わせるか!」

星環境変性^{オルタレイション}——

—— 降り^J注^uげ、火^gの落^e涙^m。正義^eの滅^tびた大地^eへと^r”

突貫と同時に展開した四つの爆熱火球^{ブラズマ}を一拍置きつつ、黒竜の口に向けて投射する。

黒竜は魔力集束を中断し、空中に飛び上がりながら、爆熱火球^{ブラズマ}を迎撃すべく大量の火炎弾を展開するが、もう遅い。ハジメのドンナー・シユラークによって火炎弾の方が先に撃ち落され、爆熱火球^{ブラズマ}はそれぞれ別の方向から黒竜を襲う。

「グルアアアア!!」

爆熱火球^{ブラズマ}が黒竜に直撃する。だが、仮にも竜、雷熱に対してさえそれなりの耐性も備えている。そのため、爆熱火球^{ブラズマ}ではそこまで大きなダメージにはならないが、想定通り。

わざわざ爆熱火球^{ブラズマ}を迎撃しようと思いついた時点で、この展開は想定通りなのだ。そのまま黒竜の懐に潜り込み、黒竜の腹を斬りつける。当然、刃は通らず、先ほどのように

多重化もしていない攻撃は、意味をなさないように思えるが、黒竜は翼を襲った衝撃に驚き、飛行能力を維持できず墜落した。

星環境変性^{オルタレーション}

—— // ^De ^ad ^en ^d ^St ^r ^ay ^ed
色即絶空空即絶色、撃滅するは血縁鎖”

黒竜の腹に叩き込まれた衝撃は、“衝撃操作”の星辰^{ほし}によって、黒竜の翼の一点を襲い、翼の制御を不可能に陥れたのである。

黒竜にとつて、謎の攻撃で飛行能力を奪われた以上、目の前の人間^{天津悠姫}は、洗脳による標的^{ウィル・クデタ}よりも排除すべき敵へと変わっている。しかし、もう遅いのだ。

こうなれば最早ワンサイドゲームだ。表面が硬かろうとも、衝撃は無効化出来ないし、身体の内부를攻撃されれば、強靱な防御力も意味を成さない。更にはどの部位を攻撃しても、黒竜の全身を攻撃できる“衝撃操作”によって、悠姫はもう、攻撃をどこかに当てるだけでいい。仮に火炎弾を吐こうが、ブレスを吐こうが、この黒竜に悠姫は殺せない。

「す、すげえ…」

その光景を見ている玉井淳史が無意識に言葉を漏らす。それは愛子や他の生徒達、ウィルも同じで、七人全員がコクコクと首を縦に振って、一方的な戦闘に眼を離せずにした。先ほど一度死んだという事実も合わせて、普通ならば“化物”と罵られ、忌避さ

れたとしても全く不思議ではない。しかし、愛子と生徒達七人が感じるのは驚愕であり、ウイルにいたっては、一種の憧憬を感じている。

そして、決着は訪れた。所々、竜鱗は砕け、全身から血を流す黒竜は、その巨体を地に伏せた。

「ッ！ や、やった！」

「な、待て！ 行くな、バカか！」

ウイルが喜んで立ち上がり、黒竜に近づこうと走り出した。咄嗟にデイルグが制止しようとするも手が届かず、黒竜に向けて走っていく。

「グウガアアアアア!!!」

「ひッ！」

それを見た黒竜が、最後の足掻きと言わんばかりに咆哮を上げながら全身から魔力を放出、それによって悠姫を吹き飛ばすと、黒竜はウイル目掛けて爆進する。ウイルはその黒竜に驚いて腰を抜かして、倒れ込んでいる。

「シアー！」

「今度は、外しません!!!」

いつの間にか戻ってきていたシアが、今度こそドリユツケンを振り上げる。そしてその超威力の一撃を、黒竜の頭部に叩き込んだ。その衝撃で黒竜は、頭部を地面にめり

込ませ、突進の勢いそのままに半ば倒立でもするように下半身を浮き上がらせ逆さまになると、一瞬の停滞のあと、ゆっくりと地響きを立てながら倒れ込んだ。

それから約一分後、黒竜は意識を取り戻した。これで洗脳が解けていなかったならば仕方がない、ウイルを狙ってウルに来られては困るため、止むを得ないがここで仕留める必要があるが――

『……ぬう……うう……ここ……は？ わ、妾は……一体何を……う？』

——理解できる言語を話し始めた。

これには思わず、悠姫やハジメも硬直した。オロオロという雰囲気を出す黒竜と、硬直して誰も動かない中、ユエがハツと気づいた様に口を開いた。

「……もしかして、竜人族？」

第四十二話 竜と人と邂逅と

「……もしかして、竜人族？」

『ぬ？ いかにも……妾は竜人族の一人じゃ』

ユエがポツリと呟いた。

竜人族。このトータスで、五百年以上前に滅びたとされる種族だ。しかも、竜人族の生き残りではなく、一人と言ったあたり、他にも竜人族が生きることが窺える。

「……なぜ、こんなところに？」

「確かに、滅んだはずの竜人族が何故こんなところで、しかも洗脳までされて、一介の冒険者を襲っていたのか……教えてほしいところだな」

『う、うむ。そうじゃな……』

ユエとしては自分と同じ、滅んだとされる種族として気になるのだろう。

すると、黒竜を黒い魔力の光が繭のように包み込む。その繭が小さくなっていき、人間一人程度になると始めるように魔力が霧散した。

そこには、黒髪金眼の美女がいた。腰まで伸びる艶やかなストレートの黒髪、見た目

は二十代前半くらいで、身長は百七十センチ近くあるだろう。黒い着物を身に纏い、見事なプロポーションを誇っている。胸部のそれはシアを越えている。

黒竜の正体は、黒髪金眼の巨○美女だった、という事実には、思春期真っ只中の男子生徒三人は腰を引いて前屈みになる。それによって女子生徒の男子生徒を見る眼が、汚物を見るような眼に変わる。

その着物から覗く腕や顔に、小さい痣を確認した悠姫は、女性に神水を手渡して飲みせつつ、女性が落ち着くのを待った。

「おお……傷が癒え、魔力も回復しておる……何から何まで、感謝するぞ。妾の名は、ティオ・クラルス。最後の竜人族、クラルス族の一人じゃ」

そして、ティオと名乗った女性は話し始めた。

ティオを含む竜人族は、とある隠れ里でひっそりと暮らしていた。だがある日、魔力感知に長けた竜人族が、世界単位の召喚魔法の発動を感じ取った。それが、ハジメ達が地球から召喚された日だ。ティオは、その調査の為に隠れ里から出て来たらしい。

そして、市井に紛れて調査を行う目に休息を取ろうと、とある洞窟で竜の姿で寝たのだという。その寝ているときに、黒いローブを着た男が現れて、一日かけて洗脳や暗示といった闇系魔法を駆使して、ティオを洗脳したということらしい。さらにティオが言うには、そのローブの男の隣に、魔人族の男と、別の人間族らしき男の姿もあったとい

う。

「恐ろしい男じゃった。闇系統の魔法に関して天才と言っているいいレベルじゃろうな。そんな男に丸一日かけて間断なく魔法を行使されたのじゃ。いくら妾と言えど、流石に耐えられんかった……」

「…それはつまり、調査に来ておいて丸一日、魔法が掛けられているのにも気づかないくらい爆睡していたって事じゃないのか？」

全員の目が、何となくバカを見るような呆れた目になる。テイオは視線を明後日の方向に向け、何事もなかったように話を続けた。ちなみに、なぜ丸一日かけたと知っているのかというと、洗脳が完了した後も意識自体はあるし記憶も残るところ、本人が「丸一日もかかるなんて……」と愚痴を零していたのを聞いていたからだ。

そして、山脈の向こう側の魔物の洗脳を手伝わされていたらしいのだが、その時に山の調査に来ていたウィル達と遭遇、目撃者を消せとの命令を受けてウィル達を襲撃、先ほどの戦闘中も命令に従う形でウィルを常に狙っていた。

そして、気が付けば悠姫達にボロボロにされ、最後のシアの一撃で意識が覚醒した、というこららしい。

「……ふざけるな、操られていたから……ゲイルさんを、ナバルさんを、レントさんを、ワスリーさんをクルトさんを！ 殺したのは仕方ないとも言おうつもりかっ！」

「……………」

ウイルはテイオの話を聞いて、怒りに震えていた。どうやら、状況的に余裕が出来たせいか冒険者達を殺されたことへの怒りが湧き上がったらしい。激昂してテイオへ怒声を上げる。そのテイオも、ウイルの怒声を静かに受け止めていた。

「大体、今の話だつて、本当かどうかなんてわからないだろう！ 大方、死にたくなくて適当にでつち上げたに決まつてる！」

「……………今話したのは真実じゃ。竜人族の誇りにかけて嘘偽りではない」

その言葉にウイルが反論しようとした瞬間、ユエが口を開く。

「……………きつと、嘘じゃない」

「ツ、一体何の根拠があつてそんな事を……………」

食つてかかるウイルを一瞥すると、ユエはテイオを見つめながらぼつぼつと語る。

「……………竜人族は高潔で清廉。私は皆よりずつと昔を生きた。竜人族の伝説も、より身近なもの。彼女は『己の誇りにかけて』と言つた。なら、きつと嘘じゃない。それに……………嘘つきの目がどういふものか私はよく知つている」

ユエはかつて、孤高の王女として祭り上げられていた。だがその実、ユエの周りには『嘘』が溢れていたのだろう。最も身近にいた者達ですら、ユエのいう『嘘つき』であり、その嘘から眼を逸らし続けてきた結果が、封印されるという『裏切り』だったのだ。

「ふむ、この時代にも竜人族のあり方を知るものが未だいたとは……いや、昔と言ったかの？」

「……ん。私は、吸血鬼族の生き残り。三百年前は、よく王族のあり方の見本に竜人族の話を聞かされた」

「何と、吸血鬼族の……しかも三百年とは……なるほど死んだと聞いていたが、主がかつての吸血姫か。確か名は……」

「……今はユエと名乗ってる。そっちを使ってくれと……今は嬉しい」

だが、それでもウィルにとって親切にしてくれた、先輩冒険者達の無念を思い言葉を零してしまふ。

「……それでも、殺した事には変わりないじゃないですか……どうしようもなかったってわかっただけですけど……それでもっ！ ゲイルさんは、この仕事が終わったらプロポーズするんだって……彼らの無念はどうすれば……」

頭ではその言葉が嘘でないと理解している。しかし、だからと言って責めずにはいられない。心が納得しない。ハジメは内心、「また、見事なフラグを立てたもんだな」と変に感心している。そこに、今まで黙っていたデイルグが口を挟んだ。

「貴様、俺達冒険者を馬鹿にするのか？ 武器を持たぬ一市民が襲撃を受けて死亡した。それならばその怒りは正当だ、認めよう。だが、これは違うだろう。常に死と隣り合わ

せの冒険者が、*「魔物の群れの調査」*という依頼を受けた。ならばその死は、その冒険者の責任だ。操られたという事実があるうがなかるうが、それは変わらん」

ウイルが悔しそうに俯いた。イルワは、ウイルには冒険者としての素質がないと言っていた。その理由の一つは、このように人の死を割り切れないという側面もあるのだから。

「で、でも！ もう一度洗脳されたらー！」

「そんなに心配なら今ここで、お前の手でトドメを差せよ」

今度は悠姫が言った。そして、その言葉にウイルは絶句する。出来るわけがない、ではなく、なぜ自分が殺さなければならぬと考える。

「それが出来ないなら黙っている。誰かを殺める覚悟の無い奴が、殺す殺されるなど口にするな」

そして今度こそ、ウイルはその口を閉じた。

「操られていたとはいえ、妾が罪なき人々の尊き命を摘み取ってしまったのは事実。償えというなら、大人しく裁きを受けよう。だが、それには今しばらく猶予をくれまいか。せめて、あの危険な男を止めるまで。あの男は、魔物の大群を作ろうとしておる。竜人族は大陸の運命に干渉せぬと掟を立てたが、今回は妾の責任もある。放置はできんのか……勝手は重々承知しておる。だが、どうかこの場は見逃してくれんか」

魔物の大群、というティオの言葉に全員が驚く。

ティオが言うには、ティオを洗脳したローブの男は、群れのリーダーの魔物を洗脳して支配下に置き、そのリーダーに従う形で多数の魔物が着いてくる。その結果として三、四千の魔物が実質的な支配下にあるという。さらには、ローブの男は、「これで自分は勇者より上だ」などと口にしていたという。

闇系魔法に天才的な力を持つ、「勇者」に執着する男。ここまでくれば、愛子達もローブの男が誰なのか、察したのだろう。現在失踪しているという清水幸利しみずゆきとで間違いない。

そこに、先ほどから無人偵察機を飛ばしていたハジメから、新たな一報が入る。

「…見つけたが…三、四千なんてものじゃない。桁が一つ追加される規模だぞ」

ハジメの報告に全員が目を見開く。しかも、どうやら既に進軍を開始しているらしい。方角は間違いなくウルスの町がある方向。このまま行けば、半日もしない内に山を下り、一日あれば町に到達するだろう。

「は、早く町に知らせないと！ 避難させて、王都から救援を呼んで…：それから、それから…：」

事態の深刻さに、愛子が混乱しながらも必死にすべきことを言葉に出して整理しようとする。いくら何でも数万の魔物の群れが相手では、通常の数倍のステータスとはいえ

トラウマ抱えた生徒達と戦闘経験がほとんどない愛子、駆け出し冒険者のウィルでは相手どころか障害物にもならない。

と、皆が動揺している中、ふとウィルが呟くように尋ねた。

「あの、ユウキ殿達なら何とか出来るのでは……」

その言葉で、全員が一斉に悠姫の方を見る。その瞳は、もしかしたらという期待の色に染まっていた。しかし、これはそんな単純な問題ではないのだ。

「可能か不可能かといえば、可能だ。ただし、その魔物たちが、さっきのテイオと同じように洗脳されているのだとすれば、俺達を気に留めず町に向かう可能性は高い。だったら、急いで町に戻る方がいい」

そんな中、思いつめたような表情の愛子がハジメに問い掛けた。

「南雲君、黒いローブの男というのは見つかりませんか？」

「ん？ いや、さっきから群れをチエックしているんだが、それらしき人影はないな」

愛子は、ハジメの言葉に、また俯いてしまう。そして、ポツリと、ここに残って黒いローブの男が現在の行方不明の清水幸利なのかどうかを確かめたいと言い出した。しかし、現状で数万の魔物がいるというのに愛子を残していくこのなどできるはずがない。当然、生徒達は猛反発するが愛子はなかなか首を縦に振らない。

「畑山教諭、戦う力を持たないあなたがここに残ったところで、無駄死になる」

「それは分かっています！」

「いいや分かっている。生徒を大切に想うのは素晴らしいことだ。だが、今も七人の生徒が着いてきている。その生徒達もここで死ぬことになるんだよ。無意味に死体を増やすな。そういうのは、出来る奴に任せればいい」

悠姫の視線に反応して、デイルグがコクリと頷く。今生でのデイルグは兎人族、気配を読み取ることに関しては、亜人族の中でもトップクラスだ。しかも、金ランクとして活動できるほどの高い実力も持つ。

「まあ、ユウキ殿の言う通りじゃな。あれだけの魔物を迎え撃つにも準備がいる。まずは町に危急を知らせるのが最優先じゃろ」

ティオの言葉が後押しになり、一行は急いで下山することになった。

山の麓まで走って下山していた。デイルグはその途中で別れ、ロープの男を確保するべく、山を駆け回っている。ステータスの差で一番足が遅いウィルを悠姫が抱えているが、悪寒を感じた悠姫はウィルをハジメに投げ渡した。

「ッ！ すまんハジメ！」

「はッ?!」

第四十三話 ハジメの決意

平原を、魔道四輪と魔道二輪が爆速で駆け抜ける。本来ならば、「錬成」による整地機能があるのだが、「錬成」が速度に追い付かず、魔道四輪の荷台に乗っている生徒達はリアルシエイクを味わっている。その魔道四輪に悠姫の姿は見当たらず、魔道二輪はシアが運転し、その後ろにテイオが乗っている。

そう、今もお、悠姫は襲撃者ダインスレイフと戦っている。

「な、南雲君。本当に天津君を置いてきてしまっているんですか？」

「いいも何も、俺達が残ってたらむしろ邪魔になる」

ファヴニル・ダインスレイフ、傭兵団「ファヴニル」の首領。聞いていた以上に危険な男だということとは、一目見て直ぐに理解した。光の奴隷、最強の人造プラネテス機竜とはよく言ったものだ。何を仕出かすか想像できない。ならば、ダインス未知レイフには悠姫を未知ぶつけるしかないだろう。

その時、ハジメの脳裏に、悠姫の声が響いてきた。

『聞こえるか？』

「ッ！ 悠姫か?！」

「…今どこ?」

「え? 天津君?」

ユエは聞こえていらしいが、愛子には聞こえていないらしい。窓の外を見ると、魔道二輪で並走しているシアとテイオも驚いている様子から、ハジメ、ユエ、シア、テイオの四人にだけ聞こえているようだ。

『まだダインスレイフと交戦中、だッ!』

『おいおい、一体誰と話してるんだよ? 俺達の逢瀬に、部外者は必要ねえだろッ!』

チッ! と悠姫の舌打ちと、激しい剣戟が聴こえてくる。悠姫とダインスレイフの戦場は、既に山脈の奥地へと移行している。

『悪いが手短にいくぞ、これからの事だ』

『依頼を完遂しつつ俺達が自由に動くには、この場を丸く収めるしかない。そしてそのためには、あの数万の魔物を殲滅する必要がある』

ウィルに言った通り、決して不可能ではない。あくまで総数が数万なのであり、その全てが洗脳されているという訳ではないのだ。洗脳されているのは群れの頭であり、その頭が倒されれば、その群れは崩壊する。

だが、魔物の大群を殲滅したところで、丸く収まるとは思えない。異常な戦闘力を保

有する異端者として、教会に指名手配されるだろう。それ自体は覚悟していることだが、今はまだ早すぎる。

その考えを読んだのか、悠姫はハジメにあることを教えた。

『畑山教諭のことなんだが、園部達が言うには最近、民衆に“豊穰の女神”と呼ばれてるらしいぞ?』

ハツと、悠姫の言いたいことを理解したハジメは、助手席に座る愛子をちらりと見た。愛子はハジメが見てきたことに気が付いて、「?」とかわいらしく首を傾げている。

“農作物”である彼女の有用性は、文字通りトータスを揺るがすことになるだろう。民衆が真に求めるのは、姿形が見えぬ偶像^{理想}よりも、実りと幸福を与える現実。そして、豊穰は最強不変の信仰なのだから。

『畑山教諭には悪いが、大切な生徒のためだ。存分に利用させてもらおうとしよう』
だが――

ウルに到着すると同時に、ウィルと愛子達は足をもつれさせる勢いで、魔物の大群に

ついて報告すべく役場へ駆けていった。

ハジメは愛子達をすぐに追いかけることをせず、これからのことを考えていた。それは、最後に悠姫が言ったことについてだった。

『だが、ウルをどうするのかはハジメに任せる。どのみち、魔物まぶつの大群おほぐんはハジメ達に任せられないからな』

『別にウルを見捨ててもいい。茨の道に入るのは覚悟の内だろう』

『俺達は仲間だ。どんな“選択”をしても、俺達はそれを尊重する』

正直に、ハジメにとつて、この町がどうなろうと知ったことでない。せつかくの米がもつたいたい、という程度は思うが、大きな面倒になるくらいなら仕方がない。

奈落なごを経験して変化したこの価値観は、他者への優しさを否定するものだ。ただ、悠姫ユキに助けられ、ユエに出会って、仲間を愛することを覚えた。シアに出会い、ブルツクの人達に出会い（変態ばかりだったが）、誰かと触れ合うことを思い出した。

ここで“選択”を間違えたら、取り返しのつかないことになる気がする。

ハジメは瞑想するように眼を閉じて、一回、深呼吸をして心を落ち着かせた。

それから少しして、愛子達を追いかけて役所に入ったハジメ達が見たのは、ウルのみ

ルド支部長や町の幹部、教会の司祭達が集まつて、愛子達に詰め寄る様子だった。皆一様に、信じられない、信じたくないという表情をしている。

それもそうだろう。数万もの魔物の大群が町に迫ってきている、明日にはこの町は滅ぶのだ。などと言われて、それを正直に信じる者など普通はいない。しかし、それと言つてきた者が“神の使途”で“豊穰の女神”である愛子ならば話は別だ。さらに、魔人族が魔物を操るといふ情報まで出てきている最近においては、無視できることではない。

そんな中、ハジメ達が来たことに気が付いたようで、ウイルがハジメに詰め寄つた。

「ハ、ハジメ殿！ 今この方たちに説明を——」

「んなことしてる時間はねえだろうが。隅っこでおとなしくしてろ」

ウイルの話を一ツサリと斬ると、ハジメは愛子の元へ真つ直ぐに歩いていった。それに気付いた愛子は、覚悟を決めた表情でハジメと相對する。二人の様子に、周りの騒めきも自然と治まり、その場の全員が二人に注目している。そして、周囲にも聞こえるようにハジメが先に話し始めた。

「俺達は、あの魔物を殲滅することが出来る」

再び周囲が騒めきだす。何を言っているのだ、という疑惑の視線がハジメに刺さるが、当のハジメも、相對する愛子も、それに一切の反応を出さず、愛子は答えるように

口を開いた。

「……戦って、くれるのですか？」

「先に仲間が戦ってるからな。だが、この町を守るかどうかは、先生しただい」

そして一拍置いて、

「昨日言った通り、俺はあんた達のことはどうでもいい。この町なんざ捨てて、すぐに悠姫を助けに行つて、フューレンまでウイルを連れてくことだつて考えた」

「だけど、本当にそれでいいのかとも考えた。どこまでも自分達を優先して、だれか周囲を切り捨てる。でもそれじゃあ、あいつ等と同じじゃねえかつて」

そのあいつ等が誰のことを言っているのか、生徒達はすぐに察した。オタクと蔑まれ、無能と罵られ、そして裏切られた。その実行犯が誰なのかを知らない生徒は、一人もない。

「それに、地球に帰ることが出来ても、そんな生き方は通用しない。父さんに、母さんに、胸を張つて『帰つてきた』なんて言えるわけがない」

大切な者以外を切り捨て続けるその生き方が、地球に戻つても通用するわけがない。そこに居場所などあるはずがなく、その先ではハジメだけでなく、ユエ達にも幸せをもたらさない。

ならば、『神の使途』として教会の走狗として振舞うのが正解なのか？

「でも、もう裏切られるのは二度とごめんだ！ 体のいい道具みたいに使われて、理不尽に捨てられるのも嫌なんだよ！」

ハジメは怒りを込めて咆哮した。無意識に溢れた「威圧」が、その場の全員を襲う。誰もが、腰を抜かして倒れたり、怯えた表情で後ずさりする中、少し顔を青くしながらも、愛子はハジメの顔をじつと見据えている。

「だから俺達はこの道を行く！ 俺達の大切なものを奪おうとする敵には容赦しない！」

それでも、不条理に苦しむ誰かの涙を、見捨てる外道には墜ちたくない。本当に助けられる命なら、助けたい。あの日、奈落地獄まで助けに来てくれた、悠姫ユキのように。

そこで愛子が口を開く。先ほどと同じ覚悟を決めた、だが女神の如く優しい目でハジメを見つめている。

「——それでも、私は南雲君の『先生』です」

先生の役目は、生徒の道を決めることではない。生徒が幸せになれる道へ進めるように手伝うことだ。その道が、その生徒にとって幸せを得られるならば、たとえ先生が納得できなくても構わない。

「だから、南雲君がどんな『選択』をしても、先生はそれを尊重します」

「……たとえ、俺が血と罪に濡れてもか？」

「当然です！」

一瞬の躊躇いもなく愛子は即答した。

ハジメはユエとシアの二人をチラリと見る。真つ直ぐに静かな瞳で見つめるユエと、少し不安そうな表情をしているシア。しかし、二人がハジメと目が合うと、二人とも優しい顔で微笑んだ。それに釣られて、ハジメも笑みがこぼれる。

どのみち、茨の道になることには変わりないのだから、何よりも大切な仲間達が幸せになれるというのなら、道を抜けた先の光景を良くするためにも、一肌脱ぐ程度はどうということもない。

ハジメは二人の頭にポンと手を置いて優しく撫でた後、外に向けて歩き出した。急に撫でられて驚いた二人も、ハジメの後についていく。

「な、南雲君？」

そんなハジメに、愛子が慌てたように声をかけた。ハジメは振り返ると、愛子の「覚悟」には参ったとでもいうように肩を竦めて言葉を返す。

「数万の大群を相手取るなら、ちよつと準備しておきたいからな。話し合いはそつちでやってくれ」

「南雲君！」

ハジメの返答に顔をパァーと輝かせる愛子。そんな愛子にハジメは苦笑いする。

「最初にも言ったがな、仲間がまだ戦ってるんだ。ただ、『先生』からの本気の忠告だ。こいつらの為にも、あいつの為にも、まあ、しっかり考えてみるよ。取り敢えず、今回は魔物の大群をどうにかするよ」

ああ、だけど、と言い、

「殲滅に関しては一切を任せてもらうし、先生にも大立ち回りしてもらうからな。生徒俺達の為にも、手伝ってもらおうぜ。まあ、そっちの話しが終わったら来てくれよ」

そして、ハジメは二人を連れて役場を出ていった。『威圧』を出していた張本人がいなくなり、再び役場は騒がしくなる

三人が出て行った扉を、愛子は嬉しそうな顔……ではなく、複雑そうな顔で見っていた。平気で人の命を見捨てるような人にならずに済んだことが嬉しい反面、結局、危険な戦場に生徒を送り出すという自分に嫌悪している。

そして、それまでのやり取りを見ていた一人、ティオは、興味深い顔で扉を見ていた。山脈地帯でのやり取りで、ハジメの基本的なスタンスや性格は、大体理解できた。その上で、そのハジメを制御する悠姫の存在に興味を沸かした。

そつと、頬に手を添える。一族でも屈指の耐久を有する、自身の硬い竜鱗を貫いた衝撃。そのようなこと苦もなく行えるものなど、そうはいない。それこそ、真の神の使徒と同等か、それ以上だろうと。

(彼ならきつと、我ら竜人族の悲願を…)

そして妾を…と、頬を赤く染めながら、テイオは考えた。

第四十四話 開戦直前

ウルの町。北に山脈地帯、西にウルデア湖を持つ資源豊富なこの町は、昨夜までは存在しなかった。『外壁』に囲まれて、異様な雰囲気にも包まれていた。

ハジメが魔道二輪でウルの外周を走り、『錬成』によつて築いたものだ。高さは約四メートル。大型の魔物であればよじ登る程度は出来るだろうが、当のハジメ達はそこまです魔物を到達させるつもりなどはない。

町の住民達には、既に魔物の大群が迫っていることは伝えられている。進行速度から、夕刻には町に到達するだろうと。

当然、町はパニックに陥った。町の重役に罵詈雑言を浴びせる者、泣き崩れる者、隣の者と抱きしめ合う者。それ以外にも、彼方此方で喧嘩まで起きている。明日この町は滅びます、留まれば貴方も死んでしまいます、などと急に言われて、冷静でいられる者などそうはいないだろう。

だが、そこで一人の女性が立ち上がり、彼等の心を取り戻させた。『豊穡の女神』畑山愛子だ。大まかな事情説明を受けた神殿騎士を従えて、高台に立って声を張り上げ

た。恐れることなど何もない。何故ならば、「豊穰の女神」の仲間が、この町を守るからだ。その凜とした姿勢に、元々の知名度もあつてか、住民は一先ずの冷静を取り戻した。

そして、冷静さを取り戻した住民達は二つに分かれた。故郷は自分たちが守るのだ、という居残り組と、救援が来るまで逃げ延びる、という避難組だ。

居残り組の中でも女子供だけは避難させるといふものも多くいる。愛子の魔物を撃退するという言葉を信じて、手伝えることは何かないだろうかと居残りを決意した男手と万一に備えて避難する妻子供などだ。深夜を当に過ぎた時間にもかかわらず、町は煌々とした光に包まれ、いたる所で抱きしめ合い別れに涙する人々の姿が見られた。

避難組は、夜が明ける前には荷物をまとめて町を出た。現在は、日も高く上がり、せつせと戦いの準備をしている者と仮眠をとっている者とに分かれている。居残り組の多くは、「豊穰の女神」の仲間が何とかしてくれると信じてはいるが、それでも、自分達の町は自分達で守るのだ！ 出来ることをするのだ！ という気概に満ちていた。

ハジメは外壁の上に腰かけて、アーティストの整備をしていた。その隣には、ユエとシアが腰を掛けている。そこに、生徒達と神殿騎士、ティオとウィルと共に、愛子がやってきた。

「南雲君、準備はどうですか？」

「大丈夫だ、問題ねえよ」

愛子が尋ねるが、ハジメは振り返ることなく答えた。その態度に我慢できなかつたデビッドが食つてかかる。

「おい、貴様。愛子が……自分の恩師が声をかけているというのに何だその態度は。本来なら、貴様の持つアーティファクト類の事や、大群を撃退する方法についても詳細を聞かねばならんとところを見逃してやっているのは、愛子が頼み込んできたからだぞ？ 少しは……」

「デビッドさん。少し静かにしてもらえますか？」

「うっ……承知した……」

しかし、愛子に「黙っている」と言われると、まるで忠犬のようにシユンと落ち込みながらも、しつかり黙る。心なしか垂れ下がる犬耳と犬尻尾が幻視できる。全く可愛くない。

「天津君やロートレクさんから連絡は……」

「いや、帰り以降は来てねえけど、まあ悠姫なら大丈夫だろ」

そもそも、黒ローブを追っているデイルグとの連絡手段は、今はない。一応、愛子の元に連れてくるということにはなっているので、魔物殲滅戦で巻き込んだりしない限りは問題ないだろう。

所謂、「俺に任せて先に行け！」という死亡フラグを立てている悠姫に関して、特に心配していない。相手が危険極まりないが、不老不死の悠姫なら問題ないだろうと、ハジメは全幅の信頼を寄せている。

「ふむ、よいか。妾もお主達に話が……というより頼みがあるのじゃが、聞いてもらえるかの？」

話が終わったのを見計らって、今度は、テイオが前に進み出てハジメに声をかけた。

「頼み？」

「えっとじゃな、お主達は、この戦いが終わったらウィル坊を送り届けて、また旅に出るのじゃろ？」

「ああ、そうだ」

「うむ、それでな……その旅に妾も同行させてほしいのじゃ」

ハジメは訝しげにテイオを見る。

「テイオはテイオで旅の目的があるんじゃないのか？」

「それはそうじゃが、お主等と共にいた方が効率よさそうじゃしの……」

テイオが里から出たのは、世界の外から召喚された者達の調査。無論の事、ハジメと悠姫も、その調査対象だ。それに……とテイオは続け、

「我らの悲願も、果たせそうな気がするのじゃ」

「悲願？」

「遊戯者の打倒じゃ」

思わずハジメは目を見開いて驚いた。神殿騎士がいる手前、遊戯者が誰とは口にしなかつたが、テイオが何を言っているのかは、すぐに分かつた。

しかし、考えてみれば当然かもしれない。実際にテイオと戦つたからこそよく分かるが、竜人族は非常に強い。それこそ、並の実力者では太刀打ちできないほどに。それなのに、五百年前に滅んだのだ。ならば、そこに神が関わっていることは、想像に難くない。

しかし、竜人族は生き残っていた。神に滅ぼされそうになつたという、過去を抱えて。ゆえに、神の打倒という悲願にも納得できる。

ただ、ハジメはそれ^{悲願}だけではな^いように思っている。恐らく…

「…悠姫だな？」

「う、うむ…何と言つたらよいか…これほど強い男に出会つて、なおかつ、心を奪われたのは初めてじゃ…」

「…つまり？」

凶星を指されたテイオは、顔を赤くしながらモジモジし始めた。大体察したユエが、確認を込めて聞く。

「ゆ、ユウキ殿の事を『主殿』と呼び、身も心も捧げたいのじゃ！ 恋をしたのじゃ！ 好きになったのじゃ！ 生涯を共に過ごしたいのじゃ！」

勢いに任せ、テイオが大声で悠姫に告白した（悠姫不在）。突然のことに、男子生徒と神殿騎士、ウイルは茫然とし、女子生徒達は黄色い声を上げながら騒いでいる。恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にして、若干涙目になっているテイオを見ながら、ハジメは「：フラグ立つところあったか？」と疑問に思っている。

「妾は、妾より強い男しか伴侶と認めないと決めておつたのじゃ：でも、里にはそんな男は一人もおらんくての：あの時、ユウキ殿に頬を打たれて、腹を打たれて、更には全身を：」

「待て待て待て：：分かったから：：変な誤解を生むからそこまでにしろ」

第三者には、悠姫が女性に暴行を働いたようにしか聞こえない。その証拠とも言うべきか、この場で唯一事情を知らぬ神殿騎士達の中で、悠姫の評価が凄まじい勢いで低下していく。さすがにハジメが待ったをかけて、テイオの話しを止める。

「：一応言っておくが、悠姫には既に心に決めた相手がいる。想いを伝えていない相手がさらに二人。つまり、三人いるわけだ」

「ならば妾が四人目になればよいだけじゃ」

さすがに吹っ切れたのか、テイオも即答する。既に三人もの女性（ガイア、雫、香織）

がにいることに、生徒達や神殿騎士が驚く。愛子が不純異性交遊と騒ぎ立てるが、悲しいことに当人はここに居ない。加えて言うならば、悠姫は先生愛子の生徒ですらない。

「はあ……悠姫の説得は自分でやれよ。俺達は何も言わねえからな」

「！ 助かるのじゃ！」

ハジメとしては、反対する要素は特に見当たらない。強いていうならば、人数が増える、ということだが、テイオの実力や、万が一の飛行手段の一つとも考えれば、十分お釣りがくる。なお、悠姫の前で、ユエとイチヤつくことに、少し負い目があるということも、理由の一つではある。

「！……来たか」

ハジメが突然、北の山脈地帯の方角へ視線を向ける。眼を細めて遠くを見る素振りを見せた。肉眼で捉えられる位置にはまだ来ていないが、ハジメの「魔眼石」には無人偵察機からの映像がはつきりと見えていた。

大地を埋め尽くす魔物の群れだ。ブルタールのような人型の魔物の他に、体長三、四メートルはある黒い狼型の魔物、足が六本生えているトカゲ型の魔物、背中に剣山を生やしたパイソン型の魔物、四本の鎌をもったカマキリ型の魔物、体のいたるところから無数の触手を生やした巨大な蜘蛛型の魔物、二本角を生やした真つ白な大蛇など実にバリエーション豊かな魔物が、大地を鳴動させ土埃を巻き上げながら猛烈な勢いで進軍し

ている。その数は、山で確認した時よりも更に増えているようだ。五万あるいは六万に届こうかという大群である。更に、大群の上空には飛行型の魔物もいる。敢えて例えるならばプテラノドンだろうか。

見たところ、黒ローブの男は見当たらない。自分の力を証明したいと願う者は、大群最前線に姿を現すものだ。それでもいないということは、既にデイルグが確保しているのか、姿を隠しているということか。

「予定よりかなり早いのが、到達まで三十分つてところだ。数は五万強。複数の魔物の混成だ。先生、予定通り、万一に備えて戦える者は『壁際』で待機させてくれ。まあ、出番はないと思うけどな。テイオ、お前にも手伝ってもらおうぞ」

「わかりました……君をここに立つてくれることを望んだ先生が言う事ではないかもしれませんが……どうか無事で……」

「了解じゃ。なに、流石に本気は出せぬが、火と風の魔法なら遅れを取るつもりはないぞ」

そして、ハジメ達や居残り組は、外壁の向こう側に並び立った。居残り組は、その手に弓や魔方陣を携えている。しかし、その表情は皆一様に恐怖に染まっていた。既に魔物の大群は目視できる距離に迫っており、その進行によって巻き上がる砂塵は、さなが

ら大津波のようだ。

そこで、前に出たハジメは「錬成」で地面を盛り上げ、即席の演説台を作り出す。ハジメの隣には、愛子が並び立っている。

突然地面が盛り上がり、その上に立つハジメと愛子に、視線が集まる。

「聞け！ ウルの町の勇敢なる者達よ！ 私達の勝利は既に確定している！ なぜなら、私達には女神が付いているからだ！ そう、皆も知っている「豊穰の女神」愛子様だ！」

皆が口々に、愛子様？ 豊穰の女神様？ とざわつき始める。ハジメの隣の愛子は顔を真っ赤にしている。

「我らの傍に愛子様がいる限り、敗北はありえない！ 愛子様こそ！ 我ら人類の味方にして「豊穰」と「勝利」をもたらす、天が遣わした現人神である！ 私は、私達は愛子様の剣にして盾、彼女の皆を守りたいという思いに応えやって来た！ 見よ！ これが、愛子様により教え導かれた我らの力である！」

覚悟を決めた愛子は、魔物の方を向いて跪き、祈りの姿勢をとる。

それは、まるで全員に見せつけるようだった。

見よ、豊穰の女神の剣にして盾、彼の力を、と。

ハジメは「宝物庫」から、電磁加速式対物ライフル：シユラーゲンを取り出し、アン

カーを固定。プテラノドンもどきに照準を合わせ、全員の注目が集まる中——発射。

ハジメの紅いスパークを伴って放たれた、極大の閃光は、プテラノドンもどきを容易く撃ち抜き、そのまま後を飛ばす後続も同様に貫いた。さらに別のプテラノドンもどきに照準を合わせ——発射。照準を合わせ——発射。次の、次の、次のと撃ち抜いていき、空を飛ばすプテラノドンもどきを全て殲滅した。

空の魔物を駆逐し終わったハジメは、悠然と振り返った。そこには、啞然として口を開きっぱなしにしている人々の姿があった。

「愛子様、万歳——」

ハジメが、最後の締めめに愛子を讃える言葉を張り上げた。すると、次の瞬間……

「「「「愛子様、万歳！ 愛子様、万歳！ 愛子様、万歳！ 愛子様、万歳！」」」」

「「「「女神様、万歳！ 女神様、万歳！ 女神様、万歳！ 女神様、万歳！」」」」

ウルスの町に、今までの様な二つ名としてではない、本当の女神が誕生した。どうやら、不安や恐怖も吹き飛んだようで、町の人々は皆一様に、希望に目を輝かせ愛子を女神として讃える雄叫びを上げた。愛子は真つ赤になっっている顔を見せないようにと、祈りの姿勢は解いていない。

これが、ハジメが言った、大立ち回り。『豊穡の女神』という現人神として立つてもらい、人々の信仰を得る。必然的に発言権は強くなり、ハジメ達はその庇護下に入る。

これで、王国や帝国、教会も気軽には手出しできなくなる。もちろん、神が直接介入すればその限りではないため、気休め程度ではある。しかし、何も無いよりはマシだ。

ハジメは再び魔物へと向き直し、「宝物庫」から六砲身ガトリングレールガン：メツエライを二丁取り出し、両肩に担ぐ。右にはいつも通りユエが、左にはハジメが貸与えたオルカンを担ぐシアが、更にその隣には、テイオが並び立った。地平線には、プラノドンモドキが落とされたことなどまるで関係ないと言う様に、一心不乱に突っ込んでくる魔物達が視界を埋め尽くしている。

ハジメは、ユエを見た。ユエもハジメを見つめ返しコクリと静かに頷く。ハジメは、シアを見た。シアは、ウサミミをピンツと伸ばし自信満々に頷く。ハジメは、テイオを見た。テイオは、うむ、と頷いた。

ハジメは、視線を大群に戻すと獰猛な笑みを浮かべながら、何の気負いもなく呟いた。「じゃあ、やるか」

砲身を魔物へ向け――

――魔物の大群の一角で爆発が起きた。まだ誰も引き金は引いていない。つまり、ウル側に立っている誰かの攻撃ではないということだ。一人残らず、全員の視線がその方向へと固定される。

巻き上がった粉塵から飛び出してきたのは、人間一人と、一体の紫紺の竜。天津悠姫と、竜化したファヴニル・ダインスレイフだった。

第四十五話 怪物対邪竜

時は遡り、ハジメが愛子にその決意を示した頃、北の山脈地帯。

テイオと遭遇した場所から、三つほど山を越えた場所で、天津悠姫とファヴニル・ダインスレイフは戦っていた。既に通常の星辰奏者エスベラントという枠組みを超えている二人は、その化物染みた性能を遺憾なく發揮している。

「天昇せよ、我が守護星——鋼の恒星ほむらを掲げるがため」

そこに轟き渡る人外特有の起動詠唱ランゲージ。凶兆と破壊の咆哮は、あらゆる無機物を支配下に置く。

「美しい——見渡す限りの財宝よ。父を殺して奪った宝石、真紅に濡れる金貨の山は、どうしてこれほど艶めつやきながら、心を捉えて離さぬのか。

煌びやかな輝き以外、もはや瞳に映りもしない。誰にも渡さぬ、己のものだ。

毒の吐息といきを吹き付けて、狂える竜は悦に浸る」

奏でられるのは悪意に満ちた祝詞。謳い上げるは歪こを重ねた英雄賛歌。あの日、この目に焼きついた、二人の英雄の背中。その片割れがトータストータスにいる。ならば是非も

無し、その全てを奪い尽くそう。

戦乙女も、英雄の仲間も、そして人間族の国も、魔剣に滴る血となるがいい。

「その幸福ごと乾きを穿ち、鱗を切り裂く鋼の剣。」

巢穴に轟く断末魔。邪悪な魔性は露と散り、英雄譚が幕開けた」

ゆえに英雄よ、その輝きを魅せてくれ。悪しき邪竜は此処にいる、破滅へ導く魔剣は此処に在る。ならば、貴様が辿る結末はただ一つ。

「恐れを知らぬ不死身の勇者よ。認めよう、貴様は人の至宝であり、我が黄金に他ならぬと。壮麗な威光を前に溢れんばかりの欲望が朽ちた屍肉を蘇らせる。

故に必ず喰らうのみ。誰にも渡さぬ。己のものだ。滅びと終わりを告げるべく、その背に魔剣を突き立てよう」

この男こそ、邪竜にして魔剣、魔剣にして邪竜——最強の人造機竜。欲望の赴くまま

に此処に暴力を具現する。

Her den Ring!

Her den Ring!

「超新星——邪竜戦記、英雄殺しの滅亡剣ツ!!」

無機物の支配者による大号令は、無数の劍鱗と竜爪の具象として表れた。視界を埋め尽くす劍鱗は立ちはだかる全てを喰い殺さんと、必殺の波動を放っている。しかし、

「無駄だー！」

オルタレーション
星環境変性

—— // 殲^A嵐^Pの齋^Oす終^c焉^aに、光^yは無^Pく //
s e T y P h o e u s

悠姫は、世界を終わりに導く、殲嵐の怪物を呼び起こす。

今、邪竜の前に立ちはだかるのは、英雄^{ヴァルゼライド}に並び立つ、不滅^天の怪物^{悠姫}。ならば、悠姫が

邪竜に敗北する理由も道理もある筈がない。

「クハハハハッ、ヒヤハハハハハッ！」

しかしその程度は、邪竜にとって絶対不変の法則の一つに過ぎない。英雄は朽ちぬ、怪物は死なぬ。たとえ世界から消滅しようとも、必ず何らかの方法で蘇り、英雄譚^{怪物譚}は紡

がれる。

「そう、この今のようになあッ！」

新西暦で消滅したユキ・ロスリック^{怪物}は、トータスにて見事に復活を遂げた。最高じゃ

ないか、血が滾る。

悠姫の一振りにて発生した嵐壁は、触れた剣鱗を文字通り削り取る。ダインスレイフは、その一切を微塵と化す殲嵐に自ら飛び込み、本気で殲嵐を踏み拉く。

「——それからどうしたッ！ 邪竜はまだまだ健在だぞー！」

「黙れよッ、この規格外が！」

「おいおい、それはお互い様ってやつだろうがあ！」

身体の数割が削り取られるが、その程度。飛び込んだ勢いのまま、籠手剣ジャマダハルを悠姫に突き立てる。心臓たからを寄越せ、すべてを寄こせ、強欲竜竜はここだと、狂気を宿して叫ぶ。

しかしこの戦場において、狂気は邪竜の専売特許ではない。悠姫は、無限の狂気死に戻りを乗り越えた男。その技量も精神も、通常の枠には納まらない。竜体化したテイオの竜鱗すら貫くほどの破壊力を持つその竜爪を、流れるように太刀を割り込ませ、ただの技術で衝撃を全身に拡散させつつ受け止めた。

嵐の中心で、二体の怪物は互いの武器太刀と爪を軋らせながら睨み合う。そして、ダインスレイフの血肉が蠢きながら接合し合い、傷が塞がっていく様子を見て、心底気持ち悪そうに吐き捨てる。

「——噂には聞いていたが、本当に気持ち悪い肉体からだだなそれは。人間やめるとか、やめなとか、そういう次元を超えてるぞ」

「それを言うならお前もじゃないか、英雄シグルド。身体が文字通り消し飛んでも、超純度の結晶体に包まれたかと思えば、完全復活。お伽噺にもなかなかいねえぞそんな奴！」

「チツ！」

悠姫の足元から竜爪が生え、下がって避けようとすれば、執拗にダインスレイフが肉薄しながら籠手剣ジャマダハルを振りかぶる。

ゆえに、悠姫は自ら腕を引き千切つて前方へ、つまりダインスレイフの後方へ投げ飛ばした。ダインスレイフはその腕に一瞬だけ気を逸らしたが、そのまま悠姫の肉体を切り刻んだ。さらに地面から竜爪が、周囲から竜鱗が飛来して、悠姫を颯り殺す。

足が千切れ胴を削がれ、眼球を貫き左脳が消し飛び——身体が硝子のように砕け散った。

そしてダインスレイフが聴いたのは、後方で何かが生える音と、大地を踏みしめた人の足音。振り返った先にいるのは、五体満足で無傷の悠姫だった。

「——なるほどな、砕けてから生えてきた。同じ部分は同時に存在出来ねえと言ったところか」

「ご名答、と言っておこう。無駄に頭の回転は速いな」

「本気で考えりゃなんとやらつてな。そういや、あれか。カンタベリーの頭は不老不死で、何百年も陰から支配してる、なんて噂を耳にしたことはあるが……」

「エルドラド・ジバンク極東黄金教の総本山、プラーガの議事堂と炉の存在、そして日本人であるお前とその力……クハハッ！　なんだなんだ、そういうことかよ！　面白そうな宝を見逃しちまつたのかもしんねえなあッ！」

哄笑するダインスレイフ。まさかあれだけの情報で、そこまで答えを出すとは……と悠姫はダインスレイフの導き出した答えに舌を巻く。

この二人が新西暦にいた頃、カンタベリー聖教皇国には、教皇スメラギと呼ばれる少年と、騎士団総代騎士グレンファルト・フォン・ヴェラチュールがトツプに君臨していた。この二人の男と、あと女性二人を加えた四人が神祖と呼ばれ、カンタベリー聖教皇国を建国、旧暦では星辰体研究チームアストラに所属していた、千年を生きる日本人だ。

つまり、実験体と研究者、アドラーとカンタベリーなど、他にも色々な部分は異なっているが、太源的には同じ、大破壊に巻き込まれた日本人。ゆえに、悠姫が神祖と同じ系統の能力を保有していても、何も不思議ではない。

しかし、断片的な情報だけで正解に辿り着く、ダインスレイフの頭脳と勘の良さは、凄まじい。だからこそ、不可解だ。

「お前、どうして魔人族側に付いた？」

「人魔族の敵と言うのは、そんなに不満かい？」

「別に。人魔族、魔人族、そして亜人族。あれこれ言われてはいるが、結局全部同じじゃないか」

「ああ、まったくその通りだ。神を名乗る奴の玩具でしかねえ」

そうだ。仮にもこのダインスレイフは、氷雪洞窟を攻略している。ならば、世界の歴史というものを知ったのだろう。

それでも、この男は魔人族側として戦争に参加している。自ら、神の玩具として振舞

っている。

「で？ お前なら、第三勢力として巧く立ち回ると思ったが？」

「なに、本気の男を見たんでな。あいつは本気で、魔族の繁栄を願っている。磨けば輝く原石で、戦争やお前等が手っ取り早い研磨剤だ。それに、なあ！」

ダインスレイフは再び籠手剣ジャマダハルを振るう。死なぬ殺せぬ、知ったことか、その背に魔剣を突き立てよう。壮絶な暴力を悠姫に叩き付けながら、怒りと歓喜を込めて咆哮した。

「天勇之河光輝者はつまらねえ奴だった。世界の為とほざいていながら、結局は聖劍純振り回して遊ぶガキだ！ 本気で世界を救いたいというのなら、一体どうして迷宮なんかにとどまっている！」

自分こそ正義、自分こそ勇者、だから悪を倒して世界を救うと、字面だけなら典型的なヒーローだ。だが、本気で生きぬ天偽之河光輝物が英雄など、ダインスレイフは認めない。紛い物如きが英雄勇者を語るな、ふざけんじゃねえと、怒りによつて壁を超える。

「それに比べりゃ、あの戦フルキユレ乙女達は実に良いッ！ お前の背中を追おうと、本気で足掻いている！ なにやら面白い物にも目覚めたみたいだしなあ！」

悠姫放こそ英雄、私達の希望ヒカリ、だから貴方に尽くしますと、典型的なヒロインだ。それでも守られるだけではないのだと、本気で己を錬磨している。二人がテルスで覚醒した瞬間を思い出し、感極まったダインスレイフはまた一段階覚醒する。

「つまりは、利害の一致だ。魔人族は人間族と戦いてえ、俺は奴らのが本気で生きるところが見てえ。それだけだアツ！ だから存分に魅せてくれ、我が麗しの英雄オオツ！」
 ダインスレイフを中心に劍鱗と竜爪が再度展開される。雑木林の如く乱立され、コンマ一秒でも判断が遅ければ、その雑木林を彩る紅き血の華となるのは必然だが、
 「いい加減、見飽きたんだよ！」

星環境変性
オルタレシヨ

—— 神罰靦面、神敵粉碎、豪放磊落。神威を此処に ——

“宝物庫” から取り出した大槌を、筋力強化の星辰を使って、地面に叩き付ける。一種の爆弾にも匹敵する強大な一撃は地面を砕き、劍鱗と竜爪を破壊する。

そして大槌と星辰を太刀と殲嵐に切り替え、獣の如き咆哮と共に、幾度目かダインスレイフと衝突する。

「ウオオオオオオツ——！」

「シャアアアアツ——！」

戦闘開始から、既に数時間。本来なら、単純な能力値と手数の差によって、決着はついている筈だった。

だが、異常な精神力（気合と根性）、そして神代魔法によって、維持性などという限界は遙か遠くに捨てられている。

そして、都合三十六回の覚醒を果たしたダインスレイフは、たつた今三十七回の限界を超え、ついにダインスレイフの身に変化が起きた。

悠姫の一太刀がダインスレイフを肩口から斜めに両断する。擦り落ちる右半身、絶死不可避の致命を受けて――

「――読んでるんだよその程度オツ！」

――だが、この程度は想定済み。自身に放った竜爪で無理やり繋ぎ合わせて籠手剣（ジャマダハル）を振るう。

悠姫も悠姫で、何かとんでもないことを仕出かすだろうとは思っていたので、冷静に飛ばされてきた劍鱗を切り落とし、籠手剣（ジャマダハル）を弾く。が、

「――ツ、ぐオ！」

空いた脇に、鞭のようにしなやかで、しかし凄まじい重量感のある何か、背後から襲いかかった。

油断はしていなかった。限界まで特化した干渉性は、かの死想恋歌（エウリユナイケ）のように星辰体（アストラル）に

直接干渉することはできないまでも、その流れを感じ取ることはできる。そのため、たとえどの方向から劍鱗を射出しようとも、それこそ大地が邪竜の顎門と化そうとも、その初動を見逃すことはありえない。しかし、今回の一撃は、その流れが読めなかった。何かに殴り飛ばされた先で体制を整え、その何かの正体を見据えたとき、悠姫は思わず呆然と呟いた。

「――尻尾？」

まるで地面から生える触手のように、根本が太い紫紺の尻尾が、ゆらゆらと揺れている。あの形をした尻尾を、悠姫は見たことがある。つい数時間前、ティオ・クラルスという竜人族が、竜化した姿の尻尾と同じ形で……。

まさか、と悠姫はダインスレイフを見る。不敵に嗤うダインスレイフは、なぜかその位置から全く動かない。悠姫は咄嗟に、ダインスレイフの首を落とそうと突貫し――

「――手遅いぜ」

ダインスレイフの背から生えた竜翼が起こした暴風に、悠姫は再び吹き飛ばされた。そして――

――周囲数十メートル規模の大地が一斉に隆起する。

「さあ、もつとだ。もつと、もつともつともつともつと!!」

『もつと楽しもうぜ! 英雄オオ!!』

シゲルド

英雄オオ!!

まるで膨張するかのように巨軀へと変わる。籠手剣ジャマダハルや腕は、鋭き爪を持つ腕へと変わり、その巨体を支える逞しき剛足が、そして胴が顔が、黄金を求めし強欲の化身竜へと変成する。

「…おいおい…本気マジかよ」

邪竜狂乱。

僅かながら面影を残し、ファヴニル・ダインスレイフは正真正銘、邪竜ファヴニルへと変貌した。

第四十六話 ウル防衛戦開幕

魔法が広く浸透した世界観で、銃火器と言った技術が発展することは少ない。なぜならば、魔法の方が汎用性が高いため、そもそも銃火器という選択に辿り着くことさえ少ないからだ。

それは、このトータスでも同様だ。異世界召喚といった、現代科学でも立証できないような存在がある、そもそもその基盤体系が違う世界と地球を比べるのは不毛なのかもしれないが、少なくとも、トータスに「銃」という概念は存在しなかった。

今日までは。

広い平原に轟き渡る銃火の轟音。毎分一万二千発を放つハジメのメツエライが、硝煙の軌跡を描く弾頭を飛ばすシアのオルカンが、その平原を埋め尽くすように広がる魔物を、肉塊に変えていく。

さらに、ユエが重力魔法「壊劫^{えこう}」で、四方五百メートル深さ十メートルのクレーターを作り出し、魔物を大地のシミに変え、テイオが放つ黒い閃光^{フレッシュ}が、魔物を微塵も残さず

消し飛ばす。

ウルを囲う壁付近にいる者達は、その圧倒的な殲滅に目を奪われた。それが特に顕著なのは、戦いの経験がない、或いは少ない居残り組よりも、愛子や生徒達、神殿騎士だ。愛子や生徒達は、黒竜戦でも見たが、あのハジメがこれほど強くなっていることに驚き、神殿騎士は未知のアーティファクトの存在に驚いていた。

しかし、さすが神殿騎士トエリトと言うべきか、亜人族がアーティファクトを使う姿から、魔法や技能によるものではないことを見抜いている。シアは魔力持ちの異端児なので、その見抜き方は間違っではないのだが、実際のところ、誰でも扱えるという点、全くの precedents がないことから、ハジメが作成したという二点は正解している。

結果、どうすればあのアーティファクトを手に入れられるか、ハジメを引き込めるか、作成できるのかと考えている。この日、トータスに「銃」というアーティファクトの概念、その雛形が生み出されることになった。

その一方的な殲滅の中で、少し不安気な顔をしながらティオは、ハジメ達も殆ど手を出さない群れの一角に視線を向けた。

そこには、周囲の魔物を巻き込みながら暴れ回る一匹の邪竜と、その邪竜に対峙する

悠姫の姿があった。

「テイオ、気持ちには分かるが、まずは魔物こっちに専念しろ」

「う、うぬ。分かつてはおおるのじやが…」

ハジメから忠告されるが、テイオの表情はまだ晴れない。その間も、二人の手は一切止まっていない。ハジメの信頼は、付き合いの長さと同儉からくるもので、テイオが心配になるのも無理はない。

「…まずはやることをやる。その後に助けに入れば、好感度、アップ」

「こ、好感度?! い、いや、そういう意図は…ま、まあ、ちよつとだけ…」

「…恋愛雑魚め」

ユエがぼそりと悪態を吐いている。既に魔物の数は数千規模にまで減っているからか、かなり四人には余裕が出来ている。その大きな要因は、湯水のように使用できる魔力源があるという点だ。発信機アストラル(兼爆弾)として愛子達に渡された悠姫の黒星晶鋼アキシオンだが、あれは物質結晶化した星辰体、つまり魔力だ。それをユエとテイオが使用することで、ほぼ無制限に「壊劫えいこう」や「雷竜ライリウ」、黒い閃光ブラックフラッシュを連発できる。

「ッ！ 皆さん、あれ！」

「なッ！ まじかよ！」

その時、唐突にシアが空を見て驚いた。釣られてハジメが空を見上げると、そこには

五体の竜が滞空していた。感じる圧は、洗脳されていたティオと同等かそれ以上。つまり、真のオルクス大迷宮の最下層クラスということであり、それなりに本気でやらなければ、ハジメ達でも敗ける可能性は十分にある。

このような魔物を、一体どうやって操っているのか。そもそも、一体どこから連れてきたのか、疑問は絶えないが、それはそれ。この場を切り抜けなければ、悠姫の元に行くことはできない。

「…悪いな、ティオ。まだ愛しの悠姫を助けには行けねえみたいだぜ」

「ぬ、ぬう…ハジメ殿までそのように…いや、分かっておる。別に竜人族同という訳でもないのじゃ。直ぐに方を付けさせてもらおうのじゃ！」

『ハハハハハハハッ!!』

「この、出鱈目が！」

そして、平原へ場所を移した悠姫と邪竜フアヴニルの戦いは、さらに苛烈を極めていた。制空権というフィールドを一方的に支配され、不死身と手札星辰光の多さによる優勢を、力づくで抑え込まれる。

そこで、竜ならばこういうことをするものだろうと、上空へ飛び上がり大きく開けた

顎門から炎と毒が混じり合ったブレスを吐く。

邪竜フアグニルの真下から距離を取りブレスの範囲から脱しようとするが、そうはさせない。たとえ竜体へ変貌しようとも、星辰の輝きは消えてはいない。約半径百メートルの大地を陥没させ、全方位の壁が劍鱗が射出させながら檻を形成して迫ってくる。

足場は消え逃げ場も一切なし。絶死不可避な状況、だが――

「この、程度！」

――悠姫に至つてはその限りではない。炎毒も劍鱗も、不死身である悠姫からすれば己を殺す脅威ではないのだから。

星環境オルタレーション変性――

――無窮L i b r a r yたる星女神、掲げよ正義A s t r oの天秤e aを

太刀を振り抜くと同時に派生させた竜巻が炎毒を振り払い、竜巻に触れた劍鱗は瞬間に塵へと化していく。

そして頭上から雷を墜とし、落下してくる邪竜を両断し――

『読んでるんだよ、その程度オ！』

――お前をこの程度で仕留められるわけないだろうと、悠姫の一連の迎撃を全て読んだ邪竜は悠姫が雷を発生させるより前に、地上が波打ちながら巨大な顎門へと形を変え、圧殺させんと牢獄ごと呑み込みながら降ってくる。

「——シッ！」

だが悠姫としても読まれることを読んでいる。

地上が流動し始めている時点で既に星辰光は切り替えている。
オルタレイション
アステリズム

星環境変性——

——天光礼賛、限界突破の鋼魔弓

“宝物庫” よりもう一振りを取り出し、破壊弩と化した斬風が迫りくる顎門へと怒涛の勢いで叩き付ける。次いで飛ばされてきた劍鱗を、直撃するものは斬り、その他を足場にして、邪竜ファウニルに接近する。が、

「チッ！」

たとえ音速に匹敵する速さで近づいても、当然のように邪竜ファウニルはそれを読み、悠姫も読まれることを読み返す。だが、いくら読み返しても、そのまま接近できるのかは全く別。四方八方より竜腕が迫ってくれば、破るのに一瞬は時間が掛かり、その一瞬で再び距離を離される。悠姫は地下から地上に帰還した。

悠姫はチラリとハジメ達が五体の竜と戦っているところを見て、眉を顰めながら邪竜ファウニルに問いかけた。

「……清水幸利の能力では、五体もの竜を従えるなんて出来ないと思うんだが？」

『ああ、その通りだ。竜あれは俺が創った魔物だ』

「創った？」

『変成魔法』、氷雪洞窟の神代魔法だ。極端に言えば、生物を魔物にする魔法だ』

「なるほど、それで自分を竜にした、か」

なるほど、これなら魔人族が魔物を従えているという話も納得できる。そして同時に、人間族の敗北も悟った。天^男之河光輝^者が、今どれほど強くなっているのかは定かではないが、あの竜一匹倒すだけで、多大な犠牲がでることは容易に想像できる。

これからどうなるか、と苦笑しながら太刀を握り直し、地を這うように疾走した。邪^{ファヴニル}竜も、迎え撃つと高々に咆哮し――

「『豪炎槌』」

――上空に、全てを焼き尽くさんと言わんばかりの大火が広がった。そこから一か所に集束され、悠姫に向けて墜とされた。

「ッ！」

判断は一瞬、九十度方向転換し、直径数十メートルの豪炎の墜落を回避する。急激な方向転換に肉体が悲鳴を上げる。だが、それが功を成し、魔法を無傷で回避した。

その魔法が墜ちてきた方を見ると、

「…天使？……いや、お前は…」

「ノイントと申します。『神の使徒』として、主の盤上より不要な駒を排除します」

悠姫が呟いたように、天使を思わせるような美しい外見。銀髪を揺らし、背には一對の銀の翼。しかし、慈母のような天使とは逆に、感情を感じない無機質な瞳に、物騒極まりない二振りの大剣。

“真の神の用途”ノイント。創造神^{エヒト}の命により参上した、悠姫を殺せる存在だ。

一方、ハジメ達と竜の戦いは、現状拮抗していた。言うなれば、竜体のテイオを五体分、同時に相手しているようなもの。いや、ファヴニル・ダインスレイフが改造して生まれたこれらの個体は、竜体のテイオの戦闘力を凌駕し、さらにその五体は巧みな連携まで行ってくる。ならば苦戦するのも当然で、ピンチを迎えるのも当然だった。

純粋な攻撃力不足、耐久不足、そして数の差。ユエの重力魔法では地面に縛り付けることしかできず、他の属性魔法では竜鱗に傷を付けることしかできない。シアのドリユッケンも、防御を考えない、勢いをつけた一撃でなければ弾かれる。テイオの風魔法、炎魔法は竜鱗を貫けず、プレスでさえ多少のダメージにしかない。ハジメのパイルバンカーやシューラーゲンでようやく貫通できるが、固定や溜めが必要になる。

しかし、ただでさえ戦闘力が高い竜を相手に、数でも劣っているのだ。しかも、敵竜のプレスが直撃すれば、テイオと戦った時の悠姫のように、文字通り消し飛ばされるこ

とは間違いない。

そして、ついにその均衡が崩された。

「ツ！ あ…！」

突然、シアの「未来視」が発動する。それは即死級の危険が迫った証拠だが、既に遅い。前方には収束された魔力と大口を開けた竜の姿。間違えようもなく、ブレスの体勢だ。ハジメにユエ、テイオは遠く間に合わず、回避するための逃げ場がない。

（死ぬ…）

竜の顎門に集束された魔力がシアに向けて解き放たれ——

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

——「不落」の城塞が、死の閃光を弾き飛ばした。

「この身を甦るは不死身の英雄、戦車を操す半神半人。その駿足に敵は無く、我が敗北も必然なのか」

「勇を競いしその果てに得た敗北ならば是非も無し。冷たき無明の奈落へ降り、悍おぞましき亡者の一人に成るだろう」

それは一人の男の物語。新しき世界で生を受けた彼は、世界に祝福されぬ亜人であり、さらにその根底を覆す異端児だった。

それでも同胞たちはそれを祝福した。異端であろうと家族に違いはないのだからと。

後に生まれた妹もまたしかり、兄妹は心から愛された。

「ああ、だがしかし、聞こえるのだ、苦しみに喘ぐ家族の声だ。見えるのだ、燃え盛る故郷と家々が。」

この身が朽ちた果てに、我が愛する家族が穢されるといふのなら、この死を否定しよう

「だが、異端^{魔力}以上の異端^魂を抱えているために、彼は知った。この世界の歪さを、一族の末路を。それは、我が愛する家族には毒となる。故に、彼は家族の元を離れることを決意した。」

自分がこの世界に生まれたならば、同士二人も世界にいるはずだ。そして、いつか怪物もこの世界に呼び出される。

その時に、末路^{みらい}を覆す物語が始まるのだ。全ては、愛する家族の為に。

「それが天^{カミ}に仇名^{カミ}す叛逆ならば是非も無し——我は化生へ墜ちようぞ」

「輝く兜と不滅の槍を携えて、汝の前へ立ちはだかん。たとえその駿足を以てしても、たとえ幾度と敗北しようとも——この先一步も通さぬと誓いを立てよう」

「超^{Meta}新^{nova}星——不落城塞^{不落城塞}の守り人よ、此処^{此処}にあれッ！」

星光^{ほし}を身に宿し、槍一本でプレスを薙いだ男は、家族を守る守護者として、竜の前に

悠然と立ち塞がる。

「妹をやらせはせん。

不落^{ヘクトール}、

デイルグ・ロートレク。いざ参るッ！」

第四十七話 デイルグ・ロートレク

デイルグ・ロートレク。新西暦ではユキ・ロスリック直属の部下であり、近衛^{アリエス}白羊に所属していた彼は、アスクレピオスの大虐殺にて命を落とした。だが、元々帝国兵だったという訳ではなく、アンタルヤ商業連合国の十氏族、マドロック家の私兵の一人だった。

デイルグがマドロック家の私兵となった理由は、単純に“生きる為”ということに起因する。

物心がついた頃、口減らしとして、アンタルヤに奴隷として売り飛ばされた。その^奴デイルグ^隷を買い取ったのがマドロック家だった。

幾度と捨て駒のように扱われ、切り捨てられ、それでも“死にたくない”の一心で生き残り続けた。ただの奴隷でありながら根強く生き続けるその有様が気に入られたのか、やがてデイルグは、奴隷からマドロック家の私兵という名の^{人形}となった。

奴隷から私兵へ、一種の栄転を果たしたデイルグは、これで死の危険がなくなつたのか、といえそうではない。奴隷^駒を使い潰しては利益^{意味}がない場合においては、私兵^{人形}が駆

り出される。むしろ、危険度と言う点でいえば、こちらの方が上だろう。

結果として、*「死にたくない」*の一心で生き続けたデイルグは、マドロック家の私兵人形としてより過酷な、より危険な戦場を巡ることになる。

だが、その運命に亀裂が入ることになる。それが新西暦1012年、東部戦線でのことだった。

その日、彼が遭遇した帝国兵は、明らかに異常だった。銃火が飛び交う戦場で、軍刀を振るっている。全身が血に濡れているが返り血ばかりで、負傷らしい負傷はしていない。

他の私兵や傭兵達が一齐に銃を構えるが、遅かった。私兵の首が宙を飛ぶ、傭兵が銃を握る両腕が消える、腹から臓物が零れ落ちる。一人、一人、また一人と次々と命を落とす。

その下手人を目が合った。

輝き満ちた光と、先が見えぬ闇が混ざり合った、混沌の瞳。まるで機械のように蹂躪しながらも、冷徹な機械では持ちえぬ、確かな熱がある。

その異常な強さと狂気に、デイルグは心の底から恐怖して、そのまま有象無象の一人として、怪物に切り捨てられた。

デイルグが目を覚ましたのは、殆ど人が来ない場所に建てられた教会だった。老年の神父と、妙齡なシスター、数人の子供が住む小さな教会。どうやらデイルグは深手を負いながらも生き残つたらしく、子供達が教会まで連れて来たらしい。

他の私兵や傭兵達は簡易的な墓を建てられ、デイルグは教会に温かく迎え入れられた。

最初は傷が癒えたらすぐに出ていこうと思っていたのに、その居心地の良さゆえか、傷が癒えても一日、また一日と教会で過ごした。ある日、デイルグは神父達に聞いた。

——俺は、此処に居てもいいのか？ 迷惑じゃないのか？

しかし、神父も、シスターも、子供達も、皆が同じことを言った。

——家族を迷惑だなんて、思うわけがない

その時、デイルグはどこか救われたように感じた。口減らしで捨てられた幼少期、生き残るために力を磨き、心を殺し、マドロツク家の人形はぐるまとして生きてきた。

だからこそ、家族と呼ばれたのは、生まれて初めてで、デイルグの「死にたくない」という願いは、「家族を守りたい」という願いに変わっていった。

しかし、幸せは長く続かなかつた。

ある日、教会に帰つてくると、とても教会が静かなことに気が付いた。いつもなら、子

供達の遊ぶ声が、騒がしいほどに響いているのに。それに、どこからか漂う血の匂い。手に持っていたものを全て投げ捨て、急いで教会の中に入ると、そこに広がっていたのは、まさしく地獄。頭部が弾け飛んでいる、神父らしき遺体、インテリアのように並べられ、首だけになった子供達、そして神像の御前で、襲撃者と思わしき男達に犯されている、既に事切れたシスターだった。

怒り狂ったデイルグは、襲撃者を殴り飛ばす。突然のことに驚いて固まっている中、デイルグは転がった襲撃者に跨って、その顔に鉄拳を浴びせ続ける。動かなくなるまで何度も、何度も、何度も、何度も……

状況を理解した襲撃者たちはデイルグを取り囲む。周囲を見渡したデイルグは、襲撃者たちの顔に見覚えがあることに気が付く。かつての同僚、マドロックの私兵だと。

つまり、脱走者デイルグを追ってここまで来たらしい。偶然にも、追った先に教会があり、邪魔な男や子供を殺して、見目麗しいシスターをと。

ああ、自分のせいじゃないか。自分が此処に居たから襲われた、自分が弱かったから殺された、守れなかった。

この時点で、デイルグの心が折れるのは当然の流れだった。結局、最後までマドロックの^{はくろま}人形でしかなかった。都合のいい様に捨てられて、新しい願いも踏みにじられて。

そのまま死を受け入れようとしたその時、怪物は地獄よりやってきた。

一刀で数人の首が飛ぶ、一刀で数人の腹が斬り裂かれる。あの日、デイルグに恐怖を覚えさせた張本人は、一切の傷を負うことなく、デイルグを除いた全員を斬殺した。

なんで今助けに来た、なんでもっと早くに来なかった、それなら皆助かったのに。

そんな責任転嫁の言葉が喉から出かかると、絞り出すように出たのは、「殺してくれ」という一言。

だが、デイルグは怪物の未来の部下。殺すわけがない。だからこそ、でも本心で、怪物はデイルグに言った。

——償いたいなら生きろ。そして今度こそ守り抜け。

それは、「死」という最初に願った否定が無数に待ち受ける、地獄への片道切符。だが、デイルグはその切符を、手に取った。

その後、シスターの名を貰い、デイルグ・ロートレクと名乗った彼はアドラーに渡り、帝国軍に入隊する。星辰奏者エスプレラントになり、怪物に引き抜かれ、近衛白羊アリエスに所属する。そして、アスクレピオスの大虐殺で、その人生に幕を降ろした。

だが、デイルグ・ロートレクの物語は終わってはいない。トータスという異世界で、彼は新たな生と家族を得た。

ゆえに、今度こそ願うのだ、
“家族を守り抜くのだと”。

「お兄さまー！」

シアは窮地を助けてくれた兄の背中をみて、歓喜の声を上げた。幼い頃から、辛いとき、苦しい時に助けてくれるヒーローこそ、この兄だったのだから。

突然の乱入者にブレスを防がれた竜は、その強靱な前足を振り上げるが、

「軽い」

デイルグは後ずさることもなく、軽々と片手で受け止めた。そして、竜の顔面に回し蹴りを叩き込み、全長数メートル体重数十トンという巨体を、数十メートルも蹴り飛ばした。

「うつそだろ…」

それを見ていたハジメでさえ、思わず驚いて茫然としてしまう。様々な技能を用いても、あれだけ軽々と攻撃を受け止めたり、ましてや数十メートルも蹴り飛ばすなんて、ハ

ジメでさえも不可能だ。

だが、これがデイルグの星辰光アステリズムなのだ。

「ふッ！」

吹き飛ばした竜に向かって、デイルグが地を蹴って疾走した。竜は翼を羽ばたかせて上空へと飛び立つ。しかし、不落ヘクトルは竜を逃がさない。デイルグが飛んだ竜へ手をかざすと、まるで重くて飛べないというように、竜は翼を羽ばたかせながら落下する。

「シアー！」

「はいですー！」

そして、超重量の物体が落下したような爆音を響かせて墜落し、その隙にシアが竜の頭部にドリユツケンを叩き込む。シアはインパクトの瞬間、ドリユツケンが重くなったように感じ、事実としてドリユツケンは、竜の頭部を木端微塵に破壊した。

「うわ……」

「……これは酷い」

「……うっつぷ」

当のシアは非常に清々しい顔をしているが、ハジメ達三人はその様子に少し引いている。あれが自分の過去だったのかもしれないと思うと、テイオは吐き気すら催している。気持ち、竜達も引いているようにも見える。

しかし、何はともあれ、竜は一体沈黙した。首を失っても動いてくるのでは？ とも思っていたが、この個体はそうでないらしい。ハジメ達は残り四体の竜に向き直した。

赤子の手を捻るように、竜を手玉に取ったデイルグの星辰光アステリズムの正体は、質量加減能力。竜の質量を軽くすることで、前足を受け止め、蹴り飛ばす。次に、竜の質量を重くすることで、翼で飛べなくなり、最後にドリユツケンの質量を、インパクトの瞬間に重くすることで破壊力を上昇させた。

一瞬は竜側へと傾いた天秤は、一気にハジメ達へと傾いた。

数の不利は逆転し、竜はデイルグの未知の強さに警戒する。しかし、その警戒が、竜の命取りになる。

「――ぶち抜け」

固定と溜めを終えたハジメのシュラーゲンが、一体の竜の核心臓を打ち抜く。これで二体。

「グルアアア!!」

更に一体討ち取られ、竜達は怒り狂ってハジメへと襲い掛かるが、ハジメは冷静に再びシュラーゲンをチャージする。一体は撃ち抜けるだろうが、残り二体は間に合わない。しかし、そこに臆する必要はない。今、ハジメは一人ではないのだから。

「…行かせない」

「もう俺を忘れたか?」

一体をユエが「禍天」で墜とし、一体をデイルグが、先と同様の手段で墜落させる。その内、ユエが落とした方をハジメがシユラーゲンで撃ち抜き、デイルグの方を、シアがこちらでも先と同様に粉碎した。

そして残ったもう一体は、

「妾を忘れてもらっては、困るのじゃ!」

開いた口内に、ティオが直接ブレスを叩き込む。するとどうなるだろうか。文字通り、爆発四散する。体表の竜鱗は、ブレスに対する耐久を備えていても、体内まではそうでなかったようだ。

これで五体の竜は全て倒した。周囲を見渡しても、残っている魔物はいないようだ。清水を確保したことで洗脳が解け、本能に従って山脈に逃げていったか、それともメツエライやらブレスやら、徐々に激しさを増していった人対竜の戦いに巻き込まれたのかは定かではない。

だが、魔物がいなくなったのならそれでよし。この平原で、一番激しい戦いをしていく場所に目を向けると、ティオが目を見開いて驚いた。

「あやつは……あの時の……」

「……ティオ?」

尋常ではない様子に、心配になったユエが声をかける。しかし、テイオの様子も当然なのだ。

約500年前、竜人族の里は襲撃され、竜人族は歴史の中に消えていった。テイオの父母は、その襲撃によって命を落としている。

その襲撃者こそ、悠姫と戦っているノイント、正確にはノイントと同じ姿形をした、真の神の使途。

つまり、厳密には個体が違うものの、テイオにとつては親と同胞の仇とも言える。

「もう500年じや。父上のごとも、母上のごとも、受け入れておる。じやが、それとこれとは話は別じや！」

父母を殺され、いいように弄ばれて、歴史に葬られて、それでも長い年月を掛けて受け入れた。だが、恨みが無いというのは、全く違う。

不条理に虐げられたからこそ復讐を。そうでなくとも、妾達竜人族は此処で生きていくのだと、天に叩きつけたい。

「なら、俺たちであの竜を殺る。テイオは悠姫と、あの女を頼む」

ハジメがドンナー・シユラークを構える。ユエは魔力を回復し、シアはドリユツケンを構える。そしてデイルグも、少し笑いながら発動体を構える。

「主様を守って見せろよ、竜人族」

「ツ、無論じゃ！」

五人は、もう一つの戦場へ向けて駆け出した。

第四十八話 三体の化物

この平原で最も激しい戦いは、三体の化物たちによつて繰り広げられていた。

初手、ノイントが銀翼を飛ばたかせる。そこから放たれるのは、銀色の魔力が込められた無数の羽弾。恐るべき連射速度により、悠姫の前方を遮る弾幕と化している。

その上で、真の神の使途の攻撃である以上、生半可な威力ではないのは明白。まずは小手調べだと、悠姫は己の不死性を最大限に活用して羽弾の壁に突撃し――

「！」

――両足が千切れ飛ばん限り横へ急加速して、羽弾を回避した。永年に涉り磨き上げられた直感が、羽弾あねに触れてはいけない、己を殺すものだと警報を鳴らす。

羽弾が直撃した地面は物理的なものが直撃したような袂れ方ではない。まるで触れた地面が消えているかのようだ。よく見ればノイントが持つ双大剣からも同じような性質を感じる。着弾地点の状態と、己を討てる可能性を合わせて考えれば――

「――分子間結合崩壊、いや魔力を含めた構造体結合崩壊能力。さしずめ、分解魔法と言ったところか」

確かに、魔力による結合すらも分解するならば今の悠姫を殺せるだろう。悠姫は特異点から無限の魔力供給を受けているからこそ不死性を発揮できている。たとえ悠姫の肉体がトータスから完全に消滅しても、特異点とのパスが繋がっている限り永久に復活する。

だが、逆に言えば、特異点とのパスが途切れれば復活できなくなる。そして、魔力結合を分解するあの魔法は特異点とのパスすらも分解される可能性は十分ある。血肉が一片でも残っていれば、たとえパスを断絶されても時間を掛けて復活できるだろうが、此処は戦場でノイントは敵。完全消滅されない可能性に賭けるのは、あまりに分が悪い賭けだろう。

「消えなさい、イレギュラー 例外」

「面白い。やってみろよ、コッベリア 人形」

『おいおいおい！ 邪竜おれを忘れてんじやねえぞおツ！』

そこに、邪竜ファヴニルのブレスが迫るが、悠姫とノイントはそのブレスを難なく躲す。

今現在、この三体の間には、奇妙な拮抗状態が生まれていた。

ステータス含め全体性能トータルスペックが最も優れているのは悠姫。そのステータスに追い付くように覚醒し続ける邪竜ファヴニル。ステータス上は劣るものの分解魔法や様々な属性魔法を使うノイント。

通常の戦いならば、悠姫が優勢のはずだった。しかし、悠姫には飛行手段がない。加えて厄介なことに、邪竜ファウニルとノイントはお互い味方ではないと認識しているものの、わざわざ悠姫を置いて攻撃する相手ではないと判断している。

つまり、悠姫対邪竜ファウニル対ノイント、と言うよりは、悠姫対邪竜ファウニル、悠姫対ノイントという二つの戦いが同時に行われているようなもので、基本全ての攻撃が悠姫に襲い掛かるのだ。

邪竜ファウニルだけなら問題ない。不死と言う特性があるのだから、星辰ほしもプレスも効果をなさない。

ノイントだけでも大した問題は無い。当たらなければよいだけであり、見方を変えれば不死性が機能しないだけなのだから。

しかし、同時となれば話は変わる。邪竜ファウニルの攻撃を不死性により耐えきっても、その復活の一瞬がノイントに狙われる。連携しないというマイナスを、圧倒的な戦闘能力によりプラスに覆す。

「厄介極まりない！」

斬空真剣で迫りくる羽弾を切り落とし、そのままノイントに斬撃を伸ばすも、両手の双大剣に受け止められる。ならばと、羽弾を縫ってノイントに接近しようと足に力を籠めるが、左右から迫りくる土竜爪に気付いて、星辰ほしを切り替える。

オルタレーション
星環境変性

—— // 義なく仁なく偽りなく、死虐に殉じる戦神 //

物質崩壊の瘴気は土竜爪を塵に変え、流星のように高速で突撃してきた邪竜を、横にずれて躲しながら頭部側面を蹴りつける。

だがしかし、効果が無い。崩壊の瘴気を纏わせた蹴撃だというのに、邪竜の厚鱗は削れる様子も見せていない。

そこに、邪竜も巻き込むように、ノイントの雷撃が放たれる。不規則な軌跡を描きながら十数に枝分かれし、四方八方より襲い掛かる。加え追撃する分解の羽弾。

非物質である雷撃は、この瘴気では防げない。電撃で悠姫を焼き殺せばよし、それだけでなくとも感電した瞬間を羽弾で止めを刺す算段だろう。ならば地面を盛り上げ壁とするか？ いや、自ら邪竜の殺戮領域を自ら作り出し、まして囲まれに行くなど愚の骨頂。

ならばと悠姫は太刀を二刀構え、

「押し通る！」

オルタレーション
星環境変性

—— // 天霆の轟く地平に、闇は無く //

極光の斬撃で、雷撃ごと羽弾を消し去る。そのままノイントと邪竜に極光斬が襲い掛

かるも、二体の化物はひらりと躲す。

そのまま滞空する二体。邪竜フアグニルは悠姫が英雄の殲滅光ちからを使ったためか、竜面でも分かるほどに嬉しそうににやけ、ノイントは目を細め、悠姫を見下ろしながら大剣を突き付ける。

「……やはり、その力は異常です。主の駒に相応しくない」

大剣の切先を中心に大量の魔方陣が展開され、炎の槍が形成されていく。ユエも使用する、イレギュラー「緋槍」だ。

「相応しくなくて結構だ。駒になるつもりなど微塵も無い」

極光を纏う二刀を構える。

「盤上、例外、駒…世界を、人を、命を、想いを一体何だと思ってる！」

「全ては主の御心のままに」

オルタレーション
星環境変性——

——Sigurd banedain slieir
「邪竜戦記、英雄殺しの滅亡剣」

悠姫の咆哮に返し、同時にノイントによる「緋槍」の槍衾が放たれる。一発一発が必殺の殺意を宿し、さながら連射砲ガトリングのように絶え間なく襲い掛かる炎の槍を、悠姫はジグザグに回避しながら射出した剣鱗を足場にノイントに接近する。

そして、悠姫の太刀がノイントの首に叩き込まれるその瞬間、悠姫とノイントを中心

に多数の魔法陣が展開され、そのすべてに「緋槍」がセットされている。

ノイントは太刀を大剣で防ぎながら銀翼は羽ばたかせて魔法陣の外に退避し、同時に悠姫を多数の「緋槍」が包み込む。

空中において足場がなく、防御することも回避することも不可能な豪炎は、一切の容赦なく悠姫を焼き尽くした。

ノイントは勝利を確信するが、だがしかし、

「シッ！」

「なッ!？」

ノイントの眼前に飛ばされてきた目玉から復活した悠姫が、その両太刀を叩きつける。驚きながらも双大剣で両太刀を受け止めるが、純粋な臂力と出力パラメータの差により、ノイントは地に叩き落された。

悠姫が「緋槍」で消し飛ばされなかった原因、それは単純に「分解」の魔力が付与されていかなかったことによる。

最初の「豪炎槌」に先の雷撃、そしてこの「緋槍」に共通するのは、どれも「分解」の魔力が付与されていなかったこと。

現状、悠姫を殺せるのは「分解」のみ。つまり、ノイントの羽弾か、双大剣だけになる。ノイントはそれを理解できておらず、悠姫はその理解を突いた形になる。

「ですが、これで！」

「そう来るだろうさー！」

地に落とされたノイントを悠姫は追撃し上段から振り下ろすが、ノイントはその一撃を右の大剣で下に受け流す。すると生まれるのは、体勢を崩して隙を晒した悠姫と、左の大剣を振りかぶったノイントの姿。

構図としては、悠姫がノイントに切り裂かれる一寸前、そしてその流れの通りに、ノイントは左の大剣を振り下ろす。

だが、悠姫からすれば想定通り。追撃時の一瞬に星辰^{ほし}を切り替え、付属^{エンチャント}した聖印^{ステイグマ}を連鎖起爆。その衝撃を利用し、通常では不可能な軌道で左の大剣を避け、その大剣を上から踏みつけることで、左を封じる。同時、ならばとノイントが振り上げた右の大剣を、多重化された聖印^{ステイグマ}の一齐起爆により吹き飛ばす。

「終わりだ！」

「ッ！」

再び太刀に殲滅光^{ガンマレイ}を纏わせる。そして、ノイントに振り下ろす。そこに、

『よそ見してんじやねえぞおッ！』

「しまッ?!」

死角から巨体が顎門を開きながら迫る。右の一振り^{フエウニル}で殲滅光を放ち、邪竜の竜鱗を蒸

滅させていくが、邪竜は止まらない。その顎門は悠姫の右腕を喰い千切らんと噛り付いた。

だが、悠姫の防御力は文字通りの桁違い。邪竜の牙が肉を貫いても、そのまま喰い千切るには至らない。しかし、その防御力が仇となる。

繋がっている右腕を基点に、数十トンという巨体が重りとなり、悠姫をその場に固定したのだ。そして当然、それは大きな隙となる。そこに、ノイントが銀色の魔力を纏った双大剣を振りかぶる。

「終わりです」

「チツ、まだー」

左腕一本、更には邪竜に体を固定されている。その状態ではノイントの攻撃を捌き回ることなど出来る筈がない。

ならばと、悠姫は自分から右腕を引き千切り、ノイントの双大剣を躲そうとする。しかし、さすがに無理のある体勢だったためか、右の大剣が悠姫の左腕を斬り飛ばした。

さらに左の大剣で悠姫に止めを差そうとするが、地面から生えるように出現した土壁がノイントの行く手を遮り、悠姫はその土壁を蹴って距離を取る。

欠いた両腕の内、既に右腕は復活した。だが、分解魔法で断られたため、左腕の回復が異常なまでに遅い。ただでさえ敵は強力だというのに、左腕が使用できなくなるの

は、もはや致命傷と言えるだろう。

「悠姫！」

「主殿！」

そこに、五体の竜を倒したハジメ達が合流する。

傍から見ればズタボロな悠姫を見て息を飲むが、各々が覚悟を決めた顔をしながら武器を構える。

「俺達はあのファヴニル^竜をやる。悠姫はテイオと人型のほうを頼む」

「……油断するなよ」

「そんな恰好のお前に言われたくなねえよ」

それもそうかと、悠姫は苦笑する。そして、悠姫はテイオと、ハジメはユエ、シア、ディルグと、それぞれノイント、邪竜^{ファヴニル}と対峙する。

「行くぞ！」

ウル防衛戦線、最終戦が開始された。

第四十九話 ありふれた職業で邪竜討伐

「まず一発目、喰らっつけや！」

初撃はハジメの、シユラーゲンによる一撃。

現代兵器を大きく上回る破壊力を宿した超速の弾丸が、紅いスパークが迸りながら邪竜ファヴニルに向けて射出された。ファヴニル・ダインスレイフによって改アップグレード造された竜すら貫いた貫通特化の砲撃は、堅牢な邪竜ファヴニルの竜鱗すら貫けるだろう。

そして、それは目で追えるような速度ではなく、取れる選択は避けるか貫かれるかの二択のみ。

『しやらくせええッ!』

だからこそ、邪竜ファヴニルの行動に、ハジメ達は目を見開いた。

「は?! うそだろ!」

ファヴニル・ダインスレイフは戦闘の天才であり、邪竜と化した今でさえその戦闘技巧センスに衰えはない。むしろ冴え渡る感覚と蓄積された知識量が合わさり、さらに覚醒し続けることで常に進化を重ねている。

ならば必然的に、その凶悪なフォルムと紅いスパークからシユラーゲンがレールガンであることを見抜くのは初歩（当たり前）の初歩（前）。そして、自身の竜鱗に這わせるように竜体を動かすことで、超速の弾丸を往なすという離れ業すら行える。

「おいおいおい、冗談じゃねえぞー！」

『さあ行くぜ、お返しだアツ！』

驚き固まるハジメ達に邪竜（ファウニル）はブレスを放つ。同時、まるで闘技場（コロツセオ）のように土壁が高く隆起し大地も壁も、その全てが命を刈り取る邪竜の牙となる。

それは即席の竜の巣穴。生き残りたければ英雄となれ。邪悪な魔性を露と散り、英雄譚を輝かせると語っている。

ハジメ達は放たれたブレスをそれぞれ散開して回避する。そして、次に邪竜（ファウニル）が狙ったのは、後方から右手をスツと掲げて魔法を行使しようとしているユエだった。

理由は単純、支援・回復役の後方を先に討つのが定石（セオリ）だからだ。

ハジメが注意を裂こうとドンナー・シユラークを撃つが、二人である邪竜（ファウニル）にその考えは通じない。更には邪竜の竜鱗は非常に硬く、仮にもレールガンであるドンナー・シユ

ラークの銃弾が直撃しても僅かな傷しかできず、ダメージが通っているとは言い難い。

邪竜（ファウニル）は顎門を大きく開け、そのままユエを噛み砕こうと突撃する。が、この巣穴（コロツセオ）に閉じ込められているのは二人ではなく四人。デイルグが邪竜（ファウニル）の突進を受け止め、運動エネ

ルギーが無くなったところを質量を増加、シアが邪竜ファウニルの横腹を殴り飛ばした。

「…助かった…ありがとう」

「妹の仲間なら守るのは当然だ」

『存外やるじゃないか。それなら、こいつはどうだアツ！』

邪竜ファウニルは爆炎と猛毒が入り混じった炎毒ブレスを扇状に放射する。触れば炎と毒で

焼け爛れるブレスは、ハジメ達に回避という選択しか与えない。

そして、ブレスで邪竜ファウニルの姿が見えなくなった時、シアは自分が竜腕に押しつぶされる

光景を“視た”。

「ツ！」

それは“未来視”による光景で、このままでは訪れる自身の死。シアは咄嗟に後ろにジャンプすると、次の瞬間には自分が立っていた場所に、邪竜ファウニルが竜腕を振り下ろしていた。

『こいつを避けるか。なら、これはどうだ？』

「ツ、そんな?!」

再び“視えた”死の光景。飛んで避けようと足に力を籠めるが、足元に生えた剣鱗がシアを地面に縫い付けて、その身体は上空へと飛び立てない。

「きやああああアツ！」

そしてその身に叩き込まれる竜尾サマーソルト。ドリユツケンを盾にしたことで即死は免れたものの腕と肋骨が数本砕ける重傷を負い、同時に剣鱗が消えたことで空中に投げ出される。その空中で無防備なシアに、今度は逆に竜尾を上から叩き付けるように追撃する。

「シアー！」

『そう来ると思っただぜ不ヘットル落。質量加減お前はこれを受けられるのか？』

「なッー！」

兎人族としての気配察知でシアの危機を察知したデイルグは、空中のシアの前に飛び上がり、尻尾を受け止めるために槍を構えた。しかし、デイルグに触れる瞬間に反転、炎毒を構えた顎門を兄妹に向けて放射した。

原子、分子単位の精密操作など、デイルグに出来る芸当ではない。結果、視界が晴れてハジメとユエの目に映ったのは、全身が爛れながら地面に倒れ伏す兄妹と、それを見下すように悠々と滞空する邪竜フラグニルだった。

「シアー！ デイルグー！」

『クハハハハアッ！ さあさあさあ、次のこれはどうやって防ぐよー！』

邪竜は攻撃の手を止めず、巢穴コロッセオの中心部で飛び上がると、その顎門に魔力を収束していく。誰が見ても判るほどに明確な、極大威力の必殺技だ。

巢穴コロッセオは逃げ場を塞いでいる。そもそも、倒れた兄妹を見捨てハジメとユエの二人で逃

げる選択などある筈がない。

ハジメとユエは兄妹の元に駆け、未だ魔力を収束している邪竜ファウニルの方向に向けて大盾を展開する。下部のアンカーで大盾を固定し、自分達を含めて大盾を“金剛”で強化する。

さらに追加で、金属製の十字架を七つ展開する。ハジメ製のアーティファクト、クロスビットだ。縦六十センチ横四十センチほどの大きさで、内部にはライフル弾や散弾が大量に搭載されている。表面金属には生成魔法で“金剛”が付与されているので、防御性能も高い。

北の山脈地帯の探索で使用した鳥型無人偵察機と同じ原理で動いており、つまるところライセンス大迷宮の攻略報酬としてもらった“感応石”による遠隔操作。操作という性質上僅かばかり意識を裂くことになる為、極限状態では相性が悪いという欠点もある。

そのため、魔物殲滅戦では使えたのだが、先ほどの竜との戦いでは、そもそも攻撃が通らないということもあり使用できなかった。

ハジメはそのクロスビットの内一つを大盾の前に、残り六つをさらに前に二つずつ並べて配置。クロスビット全ての“金剛”を起動し、計五重の守りを構築した。

そして邪竜ファウニルの顎門から、直径十五センチほどまで圧縮された魔力塊が落下した。その

魔力塊が地面に触れた瞬間、ハジメ達の世界は閃光に染まった。

「ツッ！ グツ、オオオオオオツ!!」

大盾から伝わる凄まじい衝撃に、ハジメは雄叫びを上げて抗う。魔力塊の起爆から、一瞬で「金剛」ごとクロスビットは砕け散り、大盾もまた「金剛」が剥がされ砕けようとしていた。しかし、「金剛」が剥がされた瞬間に張り直し、大盾に罅が入ったり融解しかける前に、「錬成」で修復する。

「ツソオオオオツッ！」

だが、それも時間の問題だ。「金剛」や大盾の守りは、あくまで防御力に準ずるものであり、圧力を消すものではない。アンカーを固定していた地面そのものも消滅し、ハジメは「限界突破」を使用して筋力を底上げすることで、なんとか耐えている。

しかし少しずつ後ろ擦さり、このままではハジメ諸共四人はこの世から一片残らず消滅するだろう。

「——いいや、まだだ。ハジメは一人ではないし、ここには不^他落もいる。ならば仲間が一人でも死ぬことなど、断じてありえないのだから！」

その時、今まで倒れていたデイルグが立ち上がり、大盾にそつと手を添えた。そして輝照する星辰光^{アステリズム}、大盾に質量増加の付与^{エンチャント}。それにより大盾の重量は数十倍にまで増加し、アンカーで固定することもなく、襲い掛かる衝撃に対してピクリとも動かなくなる。

そして、その援護はハジメにとつては非常にありがたいものだ。これで「金剛」と「錬成」にのみ集中できる。

「オオオオオオオオオオオオッ！」

二人は雄叫びを上げる。同時、ハジメの「金剛」と「錬成」の速度も上がり、この破壊の雫を前にしても鉄壁の大盾と化していた。

衝撃波が収まり、邪竜はクレーターとなつた地面に降り立つ。周囲を見渡すと、巢穴^{コロッセオ}を形成していた土壁がすべて消し飛んでいる。しかし一点、それらの爪痕の形が不自然な場所を見つけた。それはまるで、何かクレーターを作り出すほどの衝撃波を防ぎ切つたよう。

邪竜は嬉しそうにニヤリと嗤つた。そんなことが可能な者などそうそういるわけも

ないが、その例外を可能にする者達を相手に、たった今邪竜ファウズニルは戦っていたのだ。

『魅せてみるよ、てめえらの“本気”をなあッ!』

「は、知ったことかよ。そんなに“本気”が見てえなら、てめえ一人やってろや!」

「“雷龍”」

大盾を消したハジメの影からユエが飛び出した。発動させた魔法は、ユエが即時発動できる中では最大規模の威力を誇る“雷龍”で、それを五体。

ファウズニル 邪竜は雷龍の出現と同時に、術者であるユエにブレスを放っていた。戦闘者の感と言うべきなのか、ユエの位置をよく見ることなく放たれたそのブレスは、ユエの半身を消し炭に変えていた。

それでも、“雷龍”は止まらない。五体の“雷龍”は邪竜ファウズニルの身体に巻き付き、焼き尽くそうと火力が跳ね上がる。

しかし――

『まだだアッ!』

「ええ、まだですッ!」

咆哮と共に覚醒、雷龍を無理やり引きちぎり、邪竜ファウズニルは口内に超高密度の魔力を収束させていく。先ほどの周囲の全てを破壊しようとした極大の一撃を、ブレスとして吐き出そうとしている。

そこに、上空からシアが邪竜の頭上からドリユツケンを振り上げる。ドリユツケンの爆裂による反動で数回転していることで、その一撃には遠心力がたつぷりと乗っている。代償に腕に千切れんばかりの反動と激痛を与えるが、それを歯を食いしばり「まだ」と耐える。

そのシアに向けて、邪竜の尻尾が容赦なく襲い掛かる。捨て身でドリユツケンを振るっているシアには、回避も防御も不可能。しかし、尻尾の軌道上に現れた守人が、シアの脅威を排除する。

ならばと翼を広げて飛び立って避けようとするが、凄まじい重力が邪竜を襲い、邪竜を含めた周囲の地面まで陥没する。

「……逃がさないッ」

ユエだ。左半身が消し炭のまま、しかし途切れそうな意識を気合で繋ぎ合わせ、範囲だけを絞り、出力の制御を無視した重力魔法を行使している。

剣鱗を射出しようとも、重力魔法が周囲の地面まで影響を及ぼしている為に、土塊一つ動かせない。

「でりやああああッ!!」

身動き取れない邪竜の頭部に、シアのドリユツケンが咆哮と共に叩き込まれた。竜鱗を砕き、肉を潰すが——骨までは砕けない。

「ツ、あああああッ！」

『まだ、まだあッ！』

何度も爆裂させることでドリユツケンを押し込もうとするが、まだだ、まだだと覚醒し、邪竜フェアヴニルの頭部に刻まれた傷は、押し込みを上回る速度で回復しようとする。

「——シア！　そこをどけ！」

そこに、ハジメがシアに代わり、右手に構えた大型のアーティファクト、漆黒のピイルバンカーを突き出す。ミレディ・ライセンとの戦闘時よりも超強化され、それこそシアのドリユツケンをも超える破壊力を叩き出す。

そして遂に、凄まじい轟音とともに打ち出された杭は邪竜フェアヴニルの頭部を完全に貫通した。だがしかし——止めを刺すには至らない。

「——だからこそ二段構えだッ！」

打ち込まれた杭から放射状に走った罅に、ギミックの「振動破碎」と「炸裂シヨットガン」、そして「豪腕」を使って義手を叩き込む。竜骨を砕き、口内まで貫通した拳に握られたのは、臨界点まで魔力を注ぎ込まれた、漆黒に輝く黒星晶鋼アキシオン。

「その馬鹿みたいに溜めた魔力に、この黒星晶鋼アキシオンを投げ入れたらどうなる？」

目を見開く邪竜と、ニヤリと嗤うハジメ。言うなれば人為的に生み出した神結晶である黒星晶鋼アキシオンと、その黒星晶鋼アキシオンに匹敵する魔力塊。それがぶつかり合えばどうなるかは、

もはや言うまでもない。

『クハハハッ！ 正気かよ、自滅まっしぐらだぜそれは！』

「はッ！ 誰が死ぬかよ、さっさとくたばれッ！」

そして、ハジメは握りしめた黒星晶鋼アキシオンを握り砕く。超密度の魔力が口内で解放され、それは邪竜ファウニルのブレスと連鎖反応を起こし、辺り一帯を巻き込んだ超爆発を引き起こした。

「ハジメー！」

「ハジメさんー！」

爆心は容赦なくハジメも呑み込み、ユエとシアの音が響き渡った。そして、爆煙が晴れたそこには、今にも義手が砕けそうなほどに満身創痍なハジメと、上顎から上の頭部しか残っておらず残骸としか形容できない邪竜ファウニルがいた。

『ハハハハハッ——認めようじゃないか、英雄シグルドに集いし勇者たちよ……お前等は我が魔剣を打ち砕くに相応しい。ならばこそ、英雄ヤツの足跡に続くがいい』

「……英雄シグルドだの魔剣だの、うるせえよ……俺達ヒカリは、悠姫の足跡に続くんじゃないやねえ……悠姫ヒカリと足跡を刻んでいくんだよ」

発声器官諸共吹き飛んでいるはずなのにも関わらず、何故か響く邪竜ファウニルの声に悪態を吐きながら、右手でシユラーゲンを構える。そして引き金を引き、残った頭部残骸を消し

飛ばす。

邪竜戦記の幕は閉じた。

第五十話 神の使徒

開戦された悠姫、テイオとノイントの戦闘。この戦いの天秤は、ノイントの方へ傾いていた。つまり、悠姫達が不利な状況にあるということだ。

理由の一つとして、やはり悠姫が左腕を失ったことによる戦闘力の低下が上げられる。両手で構えることによる一撃威力の上昇、そして二刀で手数を増やすことは不可能になり、さらには左右のバランスが崩れることで重心の位置が変化している。

そして、テイオ自身の戦闘力の問題もある。トータスという大きな枠組みで言えば竜人族はトップクラスの戦闘力を誇っている。その竜人族の中でも上澄みであるテイオの戦闘力は、当然上から数えた方が遥かに早い。しかし、今現在戦っている真の神の使徒はその上を行くのだ。

結果、悠姫とテイオに不利な状況が出来上がる。

羽ばたかせたノイントの翼から、雨のように分解の羽弾が降り注ぐ。悠姫が自分とテイオに当たるものを含めて、斬空真剣で斬り落とすがやはり手数が足りず、悠姫の端々を削り取る。

「主殿！」

「問題ない。しかし、このままだと競り負けるか」

不死性を活用できない以上、羽弾だけで身体を削られるのは敗北^死への階段を降り始めているに等しい。ならば選択肢は一つ。

「『嵐焰風塵』」

ノイントに羽弾を使わせないように攻め続けること。テイオが放つ魔法は『嵐焰風塵』。直径約十メートルの火炎竜巻を発生させる魔法で、プレスには及ばないものものなりの威力を誇っている。

しかし、直撃してもノイントを倒すには至らない。そこに、

「咲き誇れよ結晶華。天より見下ろす人形を撃ち落とせ」

オルタレーション
星環境変性

——美醜^{G l a c i a}の憂鬱^{c i}、気紛れ^{a l i p e}なるは天空神^{r i o}

触れたものを凍らせる氷杭をノイントに向けて連射する。が、空中を自由自在に飛び回るノイントには当たらない。

氷杭の連射が途切れた一瞬に、双大剣を構えたノイントが悠姫に、凄まじいスピードで斬りかかる。重い双大剣を受け止めた悠姫には運動エネルギーも合わさり、身体が碎けそうな衝撃をもたらすが、技能の『身体強化』と『部分強化』を使って耐える。

「これ以上の抵抗は無意味です」

「しぶとく生きるのは生物の専売特許なんだ。意味なんて知るかよ」

太刀と双大剣で火花を散らせながら相對する二人だが、依然悠姫が不利な状況。徐々に後ろに後退しつつあるのが、それを証明している。

「なるほど。感情がない私には理解できないことです」

「…つまり、自分は無機質な人形だと?」

「肯定です、イレギュラー例外。我々は主に創造された駒にすぎません。ゆえに、我々は主の命じるままに行動するのみです」

「——それは、妾たちの里を襲ったのも同じか!」

そこに、テイオの縮小された竜巻がノイントに放たれる。ノイントは上空へ飛ぶことで竜巻を回避する。

「そういえば、あなたは竜人族でしたか」

「そうじゃ! 五百年前、お主等に滅ぼされた竜人族の生き残りじゃ! 妾たち竜人族は、人間族や魔人族の争いに関わらぬよう、ひっそりと生きてきたはずじゃ! それなのに、あの日妾たちは滅ぼされた! それもお主等の主が望んだというのか!」

「その通りです。この世界に存在する全ては主の物。ゆえにその命を捧げなさい」

「お断りじゃ!」

ティオに向けて「緋槍」が放たれる。ティオは中級防御魔法「嵐空」で防ぎつつ「緋槍」を回避するが、威力や攻撃速度はノイントの方が上。やがて「嵐空」の展開が間に合わなくなり、ティオに「緋槍」が直撃するかと思われた時。

「俺を忘れないでくれよ」

星環境界性——
オルタレイション

——^{T u a t h a D e D a n a n B r i o n a} 烈しく輝き震えろ灼槍、戦神の威光を放て。

悠姫から放たれた灼熱の槍が、ティオに直撃する。「緋槍」を撃ち落としたり。

「なあ、神の使徒。お前は、エヒトの考えに疑問を抱いたことはないのか？」

「ありません。そもそも、疑問を抱くという機能そのものが、我々には備わっていません」

駒に余計なものはないのだから当然だとノイントは悠姫に言った。だが、悠姫にはそうは見えない。

不意を突かれた時の詰り、追い詰められた時の言葉の節々。感情を持たぬ人形なら、そこに起伏など生まれるはずがないのだから。

「…なるほど、よく理解した。お前はここで殺すつもりだったが、気が変わった」
「どういう意味です？」

「分からないかな？ お前が主と崇めてる奴は、塵屑だと言ってるんだよ」

「……消えなさい」

感情がないと言う割には、やはり明らかに怒っているようにしか見えないノイントに、悠姫は笑いながら邪竜の星光ほしに切り替える。

上空のノイントに、射出した劍麟を足場に接近する。依然左腕を失ったままの悠姫だが、そこに不利など存在しないと言うような行為に、ノイントは顔を顰めながらも羽弾を悠姫に発射する。足場の劍麟を次々と消し飛ばされ、空中で身動きが取れなくなる状況に追い込まれつつあっても、悠姫は止まらない。

「やらせないのじゃー！」

そこにテイオがノイントに向けて竜巻を放つが、ノイントはテイオに一瞥すらせず、緋槍ひやりで竜巻を散らせつつ、テイオを近づかせないよう牽制する。不可解な行動をとる悠姫に止めを刺すつもりだ。

そして残り数十メートルまで悠姫が接近し、

星環境変性オルタレーション

——煌翼Mたれ、蒼穹kを舞う天駆翔b・紅焰rの型o

「煌赫墜翔、発動ツ」
ニュークリアスラスト

「なツ！」

切り替えた天駆翔ハイベリオンの星光ほしによる燃料加速装置ロケットブースターを模した急加速で、残りの距離を一瞬で

詰めた悠姫に、ノイントは驚いて一瞬の隙が生まれた。

悠姫はその一瞬に、バーナーと化した一刀がノイントを斬り上げ、流れるように袈裟斬りを叩き込む。吹き出る血潮は、猛る焰にて蒸発する。

悠姫の超出力によって輝照されたこの星光ほしは、煌翼の覚醒時と同等の威力を誇っている。すなわち、一撃が必殺の威力を持つといっても過言ではない。

ノイントはその攻撃を受け、しかし倒れず双大剣を構えた。

「これで終わりです、イレギュラー例外」

「主殿オー」

ノイントが持つ分解魔法を宿した大剣が、悠姫の胸へと突き立てられた。一切の容赦なく、分解の魔力が悠姫を塵へと変えていく。

テイオやハジメ達の奮闘空しく、不死身だった悠姫は此処で死亡し――

「――アナライズ解析完了、アップグレード改質、開始」

——まだまだと、その敗北に否を唱える。

既に八割もの身体を消失しながらも発せられた静かな結果報告に、ノイントは思わず瞠目した。

アナライズ、アツプデート、この男解析、改質、どちらの言葉もノイントは理解できなかったが、悠姫を殺せていないということは即座に理解した。その証拠に、散ったはずの身体が、まるで時間が巻き戻るように再生し始めている。

すぐにもう一方の大剣を振り上げるが、

「させないのじゃー！」

テイオが振り上げられた大剣を弾き飛ばした。

舌打ちとともに悠姫から離れようとしますが、もう遅い。再生した両腕両腕がノイントをしつかり掴み、体内で暴走させた星辰光アステリズムが悠姫のいたるところから溢れ出ている。

「お前の護りが硬いのは判ったが、この距離ならロクな防御もできないだろう？」

星環境変性オルタレーション

—— // M u r a k u m o B l a d e G o s p e l g a i n
叢雲に響け福音、雷鳴剣 //

「ツアアアアア！」

超高出力の雷撃が、悠姫とノイントを襲う。常人ならば、いやハジメ程度のステータスでなければ、僅かな掠りでも即死は免れず、とたえハジメでも直撃すれば死ぬかギリ

ギリといったところだろう。

咄嗟に、ステータスを三倍にまで上昇させる「限界突破」を疑似的に再現する「禁域解放」を使用していなければ、ノイントも危険だったはずだ。

雷撃で鈍った身体で悠姫を蹴りつけ、その反動でどうにか星光の範囲から離脱する。悠姫の行ったことは単純明快、分解魔法を解析し、耐性を持つ身体へと自己改造したのだ。

左腕を斬り飛ばされた時から解析を初め、その解析に自身の能力の大部分を割いていたために攻めあぐねていた。しかし、先ほど心臓を含めて身体の殆どに分解魔法の効果があんだため解析が急速に進み、土壇場で分解魔法を弱化させる身体へと改造することができたのだ。

原初神話テオゴニアに連なる本来の星光ほし、限界まで特化した干渉性、そして悠姫自身も把握できていない■■■■という技能。これらによって真正正銘の反則技が実現した。

距離を取ったノイントに対して、テイオの風魔法による援護の元、悠姫がノイントに追撃をかける。この瞬間、天秤は悠姫達に傾き始めた。

罅迫り合いに発展した二人の距離は、当然超近距離。つまり、最も悠姫の強さが発揮される距離と言うこと。ノイントに悠姫が復活した理由について考える暇も与えずに畳みかけた。

「この戦いもそろそろ終わりにしよう。」 酸性星辰爆弾^{アシッドボム}、爛れ墜ちろ」
「無駄です！」

新西暦で使用していた殲嵐^{ほし}へと切り替え、触れたものを強酸性で溶かすという星辰爆弾を創造する。

しかし、星辰光^{アステリズム}、つまり魔法による攻撃は軒並みノイントの分解魔法によつて無力化される。が、その程度悠姫は既に把握済み。

「知つてるさ、さあ次だ。」 閃光手榴弾^{フラッシュグレネード}」

眼前に放り投げられたのは星辰光^{アステリズム}による攻撃、ではなくハジメが錬成した閃光手榴弾。真の神の使徒^トに対して生半可な攻撃は通じないが、これはただ爆光と爆音を出して知覚情報を妨害するもの。連続投下による隙を狙われ、加えて眼前で起爆されたことで、さすがのノイントも視覚と聴覚が狂わされた。

「ッ、この程度で」

「そら次だ。」 焼夷手榴弾^{インセンダリーグレネード}、焼かれろよ」

「二度目は、ありませんッ」

再び手榴弾がノイントの眼前に放り投げられる。ノイントからは何も見えず聞こえないが、何をしてくるかは想定できる。一度、それも直前に掛かった攻撃をくらうはずもなく、大剣で焼夷手榴弾を切り裂く。が、その中から出てきたのは金属、

アダム特殊合金マンタイト製の金属球。

「それはそうだ。同じ手に引つかかる神の用途がいろいろあるのかよ」

星環境オルタレシジョン変性——

——”重縛Tyrribind羈束よ、貪る欲に戒めを”

「なッ、ツが!」

展開されたのは超重力。金属球を基点に発せられた超重力の檻は容赦なく、ノイントを地に叩き落した。陥没させかねない勢いで地面に叩きつけられたノイントだったが、身体的ダメージは小さく、重力に逆らって立ち上がり——

「この、程度で!」

「感情が出てきてるぞ、無機質な人形はどこに行つた?」
”純粹爆熱ハイドロバスター星辰光」、共に逝こ

うか」

——顔を上げたノイントの視界一杯に広がる悠姫の掌に、収束された爆熱魔力。瞬時に星辰光アステリズムを切り替えた悠姫の放つ自爆技に、両者諸共吹き飛ばされる。密接距離からの直撃は、今度こそノイントに致命傷と言える大ダメージを与えた。

「くううううっ!!」

悠姫に止めを刺せた矢先に、物の数分での格差。視界と聴覚は回復したが身体的に檻襖檻襖のノイントと、自らの自爆星辰光技で木端微塵に吹き飛んでも数秒で完全復活してい

る悠姫。戦いの趨勢は誰の目が見ても明らかだ。

この日、神の盤上に現れた悠姫怪物によりノイント神の使徒の敗北という汚点ことわりが、トータスの歴史に刻まれることになる。

「なぜ、なぜそこまでして、抗うのですか！ 主に従い服従することこそこの世界の理ことわりであり秩序、幸福を得る唯一の道だというのに！」

幸福、と言う言葉を口にしてはいるが、ノイント自身はその意味を殆ど理解していない。なぜならば、神ノイントの使徒は人形であり、人形に心はいらないから。

それでも、命の危機に脅かされず日々を笑って過ごせること、エヒト神の意志に従いその身を捧げること、それらは何にも勝る幸せなのだノイントと人形は識しっている。

「この世界の存在ではないあなたが、主が敷いた秩序を壊す。それこそあなたが唾棄すべき『悪』ではないのか！ 一体どのような理由で、世界から幸福を奪い取るというのだ！」

だからこそ、長い歴史の中で収集した知識から最もらしいことを言うのだ。それでも「エヒトだれかの敷いた人レール生の上を歩くだけで得られるものが、幸福な訳がないだろう」

——悠姫はノイントの認識世界を真正面から否定した。

「自由意志を縛られて得られるものなど虚無同然、幸福などとは真逆の存在だ。涙がな

い？ 笑顔だった？ そんなわけないだろうが。涙が枯れた笑みしかない色を失った地獄、それを否定するために、彼女たち解放者は立ち上がったんだろうが」

「自由、虚無、涙……？」

悠姫が連ねる言葉はノイントの心を強く刺激して、ノイントの認識に次々と亀裂を入れていく。

主の考えは絶対、なのになぜこの男は主に抗う？

幸福を得られないというならば、主を否定するならば、一体どうすればいい。そもそも、幸福とはいったいなんだ？ 自由とは？ 涙とは？

わからない、なんだ、なんなのだ……

「イ、レギュ、ラー……」

「世界を壊して自由を得ることが悪だというならば、俺は悪で構わない。イレギュラーならばイレギュラーとして、お前たちの世界を壊す。涙を笑顔に変えるために、俺は進み続ける」

私の中に響くこれはいったいなんだ？ お前は一体、私に何をした？ それでも――

――不快ではない。

「イ、レギュラー」

「切っ掛けは作ったぞ。あとはお前次第だ、ノイント。俺は、お前の能面も笑顔にしたい

のだから。ゆえに、まずは感情こころを学んで出直してこい」

「イレギュラー！」

”天^G霆^aの轟^mく地^a平^rに、闇^yは無^Kく”

ああ、私は——

第五十一話 罪と罰

清水幸利にとって、異世界召喚とは憧れであり、夢だった。現実には存在しない、ありえないと分かっているながらも、ラノベの主人公を自分に置き換えて夢想する毎日。何度も世界を救い、何度も沢山のヒロインと大団円ハッピーエンドを迎える夢を見てきた。

清水幸利は生粋のオタクだ。地球の自室には、ポスターにフィギュア、漫画にラノベ、薄い本や美少女ゲームが山のように置いてある。

だが、それらを知るのは家族のみ。特にクラスメイトには徹底的に隠してきた。オタクだと苛められているハジメを見れば、理由など言わずとも分かるだろう。

特別親しい友人はおらず、話しかけられたら最低限の受け答えはする、いなくなっても誰も気が付かないような典型的なモブ。それが、清水幸利という人間だった。

だからこそ、このトータスに召喚されたとき、清水は誰よりも歓喜に震えていた。「一クラスが丸ごと異世界に召喚され、カースト最底辺のモブが最強チートであり、ハーレムを築いて世界を救う」など、ありふれたストーリーだ。そして、清水幸利自分こそがチートのモブであると信じて疑わない。

事実、清水はチートスペックだった。いや、清水も十分チートスペックではあるが、それは他のクラスメイト達も同じ。加え、それ以上のチートがいたというのが正解だろう。

“勇者”という唯一無二の天職を持つのは天之河光輝で、自分達は“勇者の同胞”という、所謂その他大勢でしかない。唯一の例外は、^{特別}“未知”であるユキ・ロスリックのみ。

夢にまで見た理想とは異なる現実。これでは地球にいた頃と全く変わらないじゃないやないか、何故自分が勇者ではないのか、なぜ特別なのがユキなんだと、清水の心には不満が募っていった。

そんな理想を完全に砕いたのは、訓練でオルクス大迷宮に行ったとき。つまり、ユキ・ロスリックと南雲ハジメが死亡したときだ。トラウムソルジャーに殺されかけ、勇者すらものともしないベヒモス^{化物}を見て、ようやく清水は現実を理解した。そしてクラスメイトと、勇者より強い怪物^{ユキ}の死を目の当たりにしたことで、清水の心は当然のように折れた。

王宮の部屋に閉じこもった清水は、ラノベや漫画の代わりに自分の天職“闇術師”の本を読み漁った。そんな時、ふとあることを思いついた。闇術を極めれば、他人や魔物を洗脳して支配できるのではと。そしてその考えは正しく、弱い魔物であれば簡単に洗

脳することができた。ならば次は強い魔物を手に入れる為に、清水は愛子の護衛隊としてウルに向かうことにした。そしてこっそりと隊から抜け一人北の山脈地帯に入り――

「――で、今に至るか訳か」

全ての戦闘が終わった後、二十人以上の瞳が拘束された清水を射貫いていた。

ここはウルの町外れ。合流前のデイルグに気絶させられた清水は、騒動の元凶を町の中に入れるわけにはいかないと、この場所に転がされていた。

清水が目が覚めた時には数万に及ぶ魔物の軍勢は既に倒され、化物達がベヒモストラウマを遙かに超える決戦をしているところだった。

まず、最初に浮かんだのは困惑だった。俺の軍勢は一体どこに行つたのかと。しかしそれは無数に転がる魔物の死体から察することができた。次にありえない、と思うが、それが可能だと思わせる戦闘を繰り広げる悠姫達を見たら、不思議と納得してしまつた。

そして恐怖によって逃げ出そうと藻掻くが、手足が拘束されたままでは逃げられない。そのまま戦闘が終わり、次々と清水がいる場所に悠姫達と愛子達に加え、デビッド

たち神殿騎士とウイル、ウルの重鎮数名が集まり、今現在に至る。

「天津君、清水君の縄を解いてください」

「ダメだ。何をするか分からない」

「清水君と、先生として話したいんです。お願いします」

愛子の言葉に、悠姫は数拍置いて溜息を吐いた。やれやれと言うような感じ……ではなく、現状を全く理解していないのかと、半ば失望したというような溜息だ。

先生として生徒清水幸利の事を信用している。言葉にすれば簡単で、その信念は先生として素晴らしいことだ。しかし、生徒からの先生に対する考えを無視悪意している。

その考えを聞きたいのだろうか、少なくとも裏切りという行動悪意の後となれば、どういう考えなのか想像に難くない。危機感の欠如、或いは余程の自信があるのか……まあ、余程の自信があるから危機感が欠如しているのだろう。

悠姫が清水の拘束を解くと、焦って足がもつれて立ち上がれず尻餅をつき、ズリズリと後退りする。しかし、どう足掻いても逃げられないと分かっているのか直ぐに止まり、尻餅をついた状態のまま俯いた。

愛子は清水の傍に近づき、膝を折って視線を合わせて話し始めた。

「清水君、先生は清水君とお話したいんです。どうして、こんなことをしたのか……どんな事でも構いません。先生に、清水君の気持ちを聞かせてくれませんか？」

俯いたまま、清水はボソボソと喋り始める。

「なぜ？ そんな事もわかんないのかよ。だから、どいつもこいつも無能だつうんだよ。馬鹿にしやがって…勇者、勇者うるさいんだよ。俺の方がずっと上手く出来るのに…気付きもしないで、モブ扱いしやがって…ホント、馬鹿ばかりだ…だから俺の価値を示してやろうと思っただけだろうが…」

「てめえ…自分の立場わかってんのかよ！ 町がめちやくちやになるところだったんだぞー！」

「そうよ！ 馬鹿なのはアンタの方でしょー！」

「愛ちゃん先生がどんだけ心配してたと思ってるのよー！」

反省どころか、周囲への罵倒と不満を口にする清水に、玉井や園部など生徒達が憤りをあらわにして次々と反論するが、愛子が生徒達を宥めなるべく声に温かみが宿るよう意識しながら清水に質問する。

「そう、沢山不満があったのですね…でも、清水君。みんなを見返そうというのなら、なおさら、先生にはわかりません。どうして、町を襲おうとしたのですか？ もし、あのまま町が襲われて…多くの人々が亡くなっていたら…多くの魔物を従えるだけならともかく、それでは君の“価値”を示せません」

愛子のもっともな質問に、清水は少し顔を上げると薄汚れて垂れ下がった前髪の隙間

から陰鬱で暗く澱んだ瞳を愛子に向け、薄らと笑みを浮かべた。

「……示せるさ——」

「——魔人族になら、か?」

そこに悠姫が口を挟んだ。清水はなぜ知っているのか、と驚いた表情で悠姫を見る。同じように、愛子達もどういふことなのかと悠姫の方を向いた。

「なんでつて、魔人族側に付いている強欲竜団フアップニルが現れたんだ。なら裏で糸を引いてるのが何なのかは明白だろう」

まだ驚いた表情をしている清水を見ながら悠姫は話を続ける。

「ウルに到着する前から魔人族側と通じてたとは考え難い。おそらく、山脈地帯に入つた後に魔人族と出会つた。そこで、畑山教諭を誘拐、又は殺害を依頼されたんだろう。魔人族側に、勇者として招かれることを報酬として」

「——えッ…私、を…?」

「畑山教諭の能力は、文字通り世界を変えることができる。農地開拓の為に各地を周っているんだろ? それで人間族の兵糧問題が完全解決、なんて敵対勢力が見過ごせるわけがない」

それに、魔人族領は不毛の地でもある。それゆえに、“農作師”の力は非常に魅力的だつただろう。ならば、殺害よりも誘拐を優先する筈だ。

しかし実際はどうだ。あの清水が行っていた魔物の進軍で、特定の人間一人を攫うことが出来ただろうか？

答えは否だ。所詮、洗脳していたのは群長の魔物のみ。その配下にまで清水が事細かな指示など下せる訳がない。

ならば誘拐ではなく殺害を依頼した？ それはそれで疑問が残る。魔人族の繁栄を願うのに、魔人族の強化より人間族敵の弱体を望むなど、明らかに優先順位が逆転している。

つまり、魔人族を裏から操る黒幕が存在するということでもある。しかし聖教協会、エヒト信仰は魔人族の存在を認めていない。ということは——と、それ以上は今考えることではないだろう。

生徒や神殿騎士達は悠姫の「愛子の殺害」という発言に一瞬呆けるが、我に返ると一斉に清水を睨みつけた。清水は一斉に向けられた鋭い眼光に身を竦めたが、続いた悠姫の言葉に今度は清水が呆けることになった。

「まあ、畑山教諭を消せたところで、お前が本当に勇者として招かれる可能性はかなり低いだろうな」

「——はっ。」

「なぜなら、魔人族は既に強力な魔物を操る手段を手に行っているからだ。竜のような強

力な生物を洗脳するのに丸一日、しかも完全無抵抗が前提なんて、はつきり言つて使ひ物にならない。それなのに野心はある。それじゃあ、いつ魔人族自分達が洗脳されるか恐ろしいじゃないか。だから消す。最低限役に立つたらな」

「……んな……」

「……清水君？」

俯いて肩を震わせる清水に、愛子は心配そうに声をかける。なにかボソボソと言つて聞き取れないために、耳を寄せるように近づき、

「……ツギけんな！」

「キャッ！」

俯いていた姿勢から急にバツと起き上がり、愛子を引き寄せて首に腕を回して羽交い絞めにし、隠し持つていた十センチ程の針を取り出して突き付けた。

「動くなあ！　ぶっ刺すぞお！」

表情に狂気を宿し、裏返つた声で叫ぶ清水。周囲の者たちが、愛子の苦しそうな表情を見て咄嗟に飛び出そうとするが、清水が持つ針を見て必死に押しとどめる。

「いいかあ、この針は北の山脈の魔物から採つた毒針だつ！　刺せば数分も持たずに苦しんで死ぬぞ！　わかつたら、全員、武器を捨てて手を上げろ！」

顔を青ざめながら、生徒や神殿騎士たちは各々の武器を足元に置いて、次々と両手を

上げていく。その様子にニヤニヤと笑う清水は、悠姫やハジメ達に視線を移した。

「おい、手前らもだ！ さっさとその銃と刀を寄越せ！ 他の兵器もだ！」

そう叫ぶ清水に対し、悠姫とハジメはお互いに顔を合わせ、呆れるように溜息を吐いた後に清水を見て言った。

「いやいや、結局最後は殺すんだろ？ じゃあ渡し損じやねえか」

「人質って言うのは、どう転んでも得をするから機能するんだ。今の状況は一択だ」

「うるさいうるさいうるさいッ！ ごちゃごちゃ言わず全部渡せばいいんだよ！ お前らみたいな馬鹿どもは俺の言うことを聞いてればいいんだよオ！」

「……はあ」

悠姫が再び溜息を吐くと腰から太刀を抜き、従うように清水の方へ太刀を放った。興奮しつつも下手に警戒していた清水は、短い放物線を描く太刀に視線を奪われ――

「――ぐえー！」

次の瞬間には針を握った腕を振じられ愛子を奪還された挙句、腹に膝蹴りを入れられていた。そして、愛子にしていた時と同じ様に、今度は清水が悠姫に羽交い絞めにされる。

愛子はシアに抱き留められ、ケホケホと咳をしながら息を整えている。

「く、くそッ！ 俺は勇者なんだ、主人公なんだッ！ 離せッ！」

「いい加減諦めろ。やりすぎなんだよ、お前は…ッ！」

「悠姫さん！ 避けてッ！」

直後、シアが抱き留めている愛子を何かから庇うように身を捻った。そして、悠姫が羽交い絞めになっている清水を地面に組み伏せると同時に、蒼色の水流、おそらく「破断」と思わしき魔法が飛来した。

「破断」は、一瞬前まで愛子の頭があつた場所を狙つており、それは奇しくも、清水を地面に組み伏せたことで体勢が低くなつた悠姫の頭が射線上に存在していた。そして、「破断」は悠姫の頭部を容赦なく射ち抜いた。しかし、

「——まったく…元に戻るとはいえ、痛いものは痛いんだぞ…」

アキシオン
黒星晶鋼に包まれ悠姫は直ぐに復活する。その光景を初めて見る神殿騎士やウルの重鎮たちは、顔を青くしたり白くしたりと忙しそうにしている。

そしてそれは清水も同じで、先の「破断」が通過した位置は今も悠姫の頭部があつた場所だが、最初は清水と悠姫の胴があつた場所でもある。つまり、悠姫が動かなかつたら清水も討ち抜かれていたということでもある。

ハジメが「魔眼石」で「破断」の軌跡を辿ると、遠くで鳥型の魔物に乗つて逃走しようとしている魔人族の姿を捉えた。その背に向けてドンナーを両手で構えて発砲する。さすがに距離が離れすぎているためか、魔人族の片腕だけを吹き飛ばして逃げられ、ハ

ジメは舌打ちをしながらドンナーをホルスターに戻した。

「…分かったか？ 今の魔法はお前も巻き込んでいた。これが現実だ」

「……うそ、だ…俺は…勇者で…主人公で…」

ようやくただの駒でしかなかったことを理解できたのか、失意に沈んだ清水は組み伏せられたまま力なく倒れこんだ。

愛子はそんな清水に近づいて、優しく声をかける。

「清水君…もう一度やり直しましょう？ 大丈夫、先生が付いています。頼りないかもしれないけど、それでも、清水君は一人じゃありません」

「…せん、せい…でも…俺は…」

「私は先生ですから。どんな選択をしても、先生は生徒の味方です。だから、少し前を向いてみませんか？」

空っぽになった清水の心に愛子の言葉が染み渡る。少しずつ、少しずつ、愛子の言葉に清水は揺れ動いていた。

そして、愛子の手を取ろうとして――

「――クハハハッ！ そんなに英雄譚がお望みかい？ だったら体験させてやるよ」

――甲高い哄笑がそんな空気を吹き飛ばした。

「なッ！ 確かに頭をぶち抜いたはずだ、なんで生きてやがるッ！」

「竜が頭を潰された程度で死ぬものかよ」

止めは刺した筈だと戸惑うハジメに、ダンススレイフはその程度と嗤いながら否定する。

そして、悠姫たちから少し離れた場所に姿を現した。その手に持つのは浅黒い肌をした男の頭部。間違いなく、先ほど逃げた魔人族の頭だろう。

初めて見た生首に、愛子や生徒たちは生首から目を逸らしつつ、胃から込み上げてくるものを必死に抑えている。

「で、だ…なに、プレゼントを用意したんでな。だから…お前の^{本気}最期を見せてくれよ、シミズ」

「…え？ がぼッ?! おぶ…」

「チッ、全員離れろ！」

ダンススレイフが清水の名前を呼んだ瞬間に起きた清水の変容に、悠姫は近くの愛子を掴んで一気に跳び去った。ハジメ達も、清水の様子が変わった瞬間に、後ろに跳び去るように退避している。

そして、バタバタと体内で何かが暴れるように震えている清水の姿が変わったのはその直後だった。

全身の筋肉が膨張し、屈強な大男、いや、小型の巨人と表現するべきか。三メートル強という、ただの人間ではない身長になり、元の細見とは比べ物にならないほどに筋肉が盛り上がっている。

「——いあ……たす、け……死、にたく——」

結果、元の面影など欠片も残さず、清水幸利は魔物へと変貌した。

第五十二話 闇術師の末路

ウルの町の北に広がる平原で、怪物たちの大戦争が行われてから既に六日が経過していた。

当初、滅亡の危機に瀕したことで混乱の渦中だった町の様子も落ち着きを見せている。その混乱を治めるにあたって最も尽力したのは、「豊穡の女神」 畑山愛子だった。『何者かによって、ウルの町に魔物の大群が押し寄せた。しかし、女神の剣がウルを救った』

それが住民達に伝えられた事件の顛末になる。魔人族が魔物を操る方法を持つていと知られていても、魔人族でも使徒でもなく、何者かで納得させたのは豊穡の女神の名が在ってこそと言えるだろう。

そして、事件の犯人である清水幸人は――

「……………」

「……清水君」

――水妖精の宿の一室で、元の人の姿でベッドから体を起こして虚空を眺めていた。

ダインスレイフの罠プレゼントによつて異形の巨人と化した清水幸利。しかし、それで新しい戦いが起きたのかと言われれば、そうではなかった。

理由は単純で、巨人化に対して戦闘力が備わっていないなかつたのだ。勿論、質量増加により重さも筋量も増してはいる。しかし、その重さを支えられるだけの筋量がない。結果、自重で崩れ立つことすら出来ない不格好な巨人が出来上がる。

ならばその首を断つだけで、この巨人の生命活動は完全に停止するだろう。ゆえに悠姫が太刀を振り上げ巨人清水の首に狙いを定めるが、悠姫の正面に両手を広げて立ち塞がる影が現れた。当然、愛子だ。

生徒に裏切られ、命を狙われ、そして生徒が魔物に変貌したりと、目まぐるしく変わる状況の中心にいなながらも、生徒の味方であるという心だけは抜けていないようで、怯えるように震えている。

事実、怯えているのだろう。黒竜洗脳テイオや邪竜ファウニルとの戦闘は、愛子達はおろか勇者達天之河ですら真似できないレベルにある。そんな悠姫を前に立ちはだかり、恐怖を覚えな

い。それでも、愛子には捨ててはならないものがあるのだから。

その愛子に睨みつけられている悠姫は、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

通常ならば、愛子を押し退いて太刀を振り下ろしている。しかし、現在の消耗具合を考えれば一週間程度はウルで休息する必要がある。今、豊穰細山の女神等愛子と確執が深まっては、休めるものも休めない。

気が付けば、元凶のダインスレイフはいなくなっている。既に撤退したのか、影も形も見当たらない。仕方ないと太刀を戻し、どうしたものかと思案する。

可能か不可能かは無視しても、取れる選択肢はそう多くない。このまま放っておけば、自重に耐えられず自死するだろう。ならば人間に戻すしか選択肢はない。

それが可能なのかという問題になるのだが、別に手段が思いつかない訳ではない。

第一に、魔物化したダインスレイフが人型に戻っている時点で、何らかの方法はあると考えられる。

根本的な原理はティオの竜化と同系統なのだろう。それとも竜化には変成魔法が関わっているということなのか、しかしそれは今関係ない。

恐らく、鍵となるのは「魔力操作」だ。つまり、何らかの方法で清水幸利の魔力に干渉、情報を書き換えることができれば元の姿に戻すことが可能なはずだ。そして、その他人の魔力に干渉する手段がたった一つだけ存在する。

新西暦において、カンタベリー聖教皇国を建国し、神殺しが行われるまでの数百年間を支配してきた、神祖と呼ばれる不老不死の怪物たち。

その神祖たちが、他者を己の眷属にするために力を分譲する行為。

それこそ清水幸利を救う唯一の手段、〃洗礼〃。

正確には、洗礼によって生まれる主と眷属悠姫の繋がり清水と、原初神話テオゴニアを経由して行う強制

干渉が唯一の手段になる。

掌アキシオンに黒星晶鋼を生成し、悠姫はハジメ達の方に顔を向ける。

悠姫が納刀した段階で察していたハジメは、やれやれと言うような呆れた顔をしながら頷く。

愛子にどいてもらい、黒星晶鋼アキシオンを巨人清水を心臓に突き立て――

「で？ 清水の様子はどんなんだよ」

「意識ははっきりしてるし、反応はしないが一人になれば飯も食べてる。単純に、現実を

受け止められてないだけだろうな」

夕食後、修理した義手の調子を確かめながらハジメは清水の事を聞き、悠姫は何でもないように答える。

今、この部屋には悠姫やハジメ達一行が集まっている。ユエはハジメの背に寄りかかって読書をして、シアはデイルグと兄妹の話しを続けている。テイオはハジメの錬成風景を興味深そうに眺めていたが、時折悠姫の事を熱っぽい視線を向けている。

なお、テイオが旅に同行したいという旨は既に悠姫に伝えられ、悠姫もそれを受け入れている。ノイント戦で「主殿」と呼んだ時点で察していたらしい。

同時に盛大な告白プロポーズもされているのだが、将来的に受け入れる姿勢を見せながら、現状は保留にしている。

それで何をしていたのかと言うと、最初の数日は事後処理に加わっていた。だが、避難民や救援隊が来るようになると面倒事を避けるために宿に籠るようになっていた。

そして、残ったのは悠姫達にしか出来ない事後処理だけ。

まず事実として、悠姫としては初めての洗礼行為、そして清水を元に戻す作業は成功した。半日程度で目も覚ましているし、食事は置いておけば食べるので、その点は問題無いだろう。

なお、人間が魔物に、魔物が人間にという非常識を目の当たりにした神殿騎士やウル

の重鎮たちには、神の使徒の力であると無理やり納得させている。

しかしこれからが問題だ。殲滅戦より既に六日、ウイルスを送り届けるといふ依頼を受けている手前、これ以上の長居はできない。

ゆえに明朝にはウルを出発することになっているのだが……

「清水をあのままにしておくとは面倒なんだよな……」

全てに対して無気力になり一切反応を示さない清水は、起爆寸前の爆弾に等しい。

何故なら、今の清水は神祖悠姫の使徒だからだ。

星辰体の結晶を埋め込まれ神祖アキシオンの使徒となった者の特徴は、大きく二つ。

一つは高位の星辰奏者エスベラントとなること。最低限は本人の素養に依存するが、少なくとも平均以上の星辰奏者エスベラントになることは間違いない。

そして二つ目、神祖と同じ不死になること。つまり清水は悠姫と同じ、斬られ潰され貫かれ、それこそテイオのプレスで消し飛ばされても復活する不死バケモウになったのだ。

現状の例外は、ノイントが使用した分解魔法ではあるが、物質構造だけなら兎も角、魔力構造も分解できるような魔法は真の神の使徒位しか使えないはずだ。

そんな化物清水幸利が木偶同然となれば、不死ゆえに殺せ死ない実験動物モルモットに成り下がるのは目に見えている。さすがの愛子でも庇いきれない。

それで主に繋がるような何かが見つかっては、元も子もない。

もちろん、使徒化を解くこともできる。また巨人に戻ることは無いだろうが、それはそれで本来の苦難が清水に襲い掛かるだろう。

まあ何とかするさと、悠姫は話を切り上げて部屋を後にする。ティオを連れて向かうのは、当然清水の部屋だ。

コンコンコンとノックして、返事を受けてから入室する。部屋にいたのは変わらず虚空を見つめる清水と、返事をした愛子だった。

挨拶もそこそこに、悠姫は話を切り出す。明朝に出発すること、清水が無気力このままでは困ること、最悪の場合は使徒化を解くこと。

出発に関しては数日前に伝えていた。しかし、困るといふ点と使徒化の解除はピンとこなかったようで、愛子はきよとんとしながら首を傾げた。

困るといふのは文字通りで、実験動物の件を話すと愛子は当然憤慨する。だから使徒化を解除することになるのだが、そうなれば清水に残るのは、魔族に与した「逆者」という烙印だ。

そこまで話せば愛子も理解できたのか、顔を青くしながら慌てている。

悠姫は馬を宥めるようにどうどうと愛子を落ち着かせる。その尻目に清水を確認したが、一瞬だけピクリと反応したのを見逃していない。

そして悠姫は清水に対して語り掛ける。

「今のお前は勇者に決して劣らないだけの、いや短時間ならば勇者すら圧倒できるスベックがある」

再びピクリと反応する。心の底から求めた力が、今の自分にはあるのだと。

「起きていたなら知っているだろ。この忙しい中で可能な限り、畑山教諭はお前の看病をしていた。必ず味方であると願い、前を向いてくれると信じているからだ」

虚空を見つめていた清水がゆっくりと、手を握る愛子の方を向く。その清水の瞳を、愛子の決意が宿った視線が貫いた。

「仲間を騙し、信頼を裏切り、自らの欲望のままに力を振るうというならそれでいい。力を与えた責任として、俺が幕を閉じよう」

それはまるで、起こりえる可能性＊を予言しているかのよう。だが、

「勇者とは、誰かの為に本気になれる『勇ましい者』の称号だ。少しでも恩を返したいという気持ちがあるというならば立て。立って想いに応えて見ろ。」

明朝、その力をどう使うか答えを聞こう

お前の覚悟本気を魅せてくれと、悠姫は扉に向かう。次いで、完全に空気になっていたテイオが前に出る。

「洗脳されたことについて、妾から言うべきことではない。油断していた妾も悪いのじゃ。」

じゃが、一つ先人からの助言じゃ。妾は女じゃが、誰かの役に立ちたいと頑張るのも、気持ちが良い物じゃぞ」

そう言い、ティオを悠姫の後を追って部屋を出る。扉の外で待っていた悠姫と合流し、扉の影に隠れている六人分の影は見ないふりをして、ハジメ達が居た部屋に戻っていく。

部屋に残ったのは、瞳に光を取り戻して涙を浮かべる清水と、なおも清水の手をぎゅつと握る愛子のみ。

「…せん、せい…お、おれ…」

泣きじやくる清水を、愛子は子供をあやすように抱きしめる。

「ごめん、なさい…」

「いえ、私達の方こそ、ごめんなさい。なにかあるごとに天之河君と比べて、一人一人の事を蔑ろにしてしまった。清水君のことを、よく見ていなかった」

「違う！俺が、先生の言うことを、聞かなかったから…」

愛子の言葉に対して清水は直ぐに否定する。それを愛子は否定して、清水がそれも否定して…俺が私がいや俺がいいえ私が、ごめんなさいごめんなさいと謝罪合戦になつていくが、最初は扉の奥から聞こえていたすすり泣くような声が、吹き出しそうな笑いを堪えるような声が聞こえてきたあたりで、二人して冷静になり――

「…プツ」

「アハハハハッ!!」

二人同時に大爆笑した。つい数分前までの光が灯らない瞳の様子は全く無く、どんよりと沈んだ空気は吹き飛んでいる。

思えばこんな風に心の底から、腹が振れるように大笑したのはいつ以来だろうか。トータスに召喚されてからは一回もなかつた気もする。

既に二人が浮かべている涙の意味は、悲しみから笑いの涙に変わっている。数分後、笑いすぎて震えていたお腹も鳴りを潜め、愛子は目尻にうつすらと涙を浮かべて。

「それでは改めて、清水君」

「…はい」

声色は柔らかくだが真面目に名前を読んだ愛子に、清水は真剣な表情で向かい合う。

「私は、この世界に召喚された全員で地球に帰りたいと思っています。たった一人でも、欠けることは許しません。力を、貸してくれませんか？」

「……はい！」

明朝。

ウルから少し離れた位置に、出発の準備を済ませた悠姫達と、それを見送りに来た愛子達が集まっている。なお、面倒を避けるために神殿騎士達には教えていないのでここにはいない。

偶然にも、ウルに集った彼らは再び三組に分かれる。

「デイルグ、元気で」

「隊長こそ。二人によろしく頼む、隊長の方が先に会いそうだ。シアも、元気でな」

「はい、デイルグ兄さま！」

まずはデイルグ・ロートレク。金ランクの冒険者として色々と背負っているらしく、フューレンへの報告を悠姫達に任せて、別の依頼に向かうらしい。

「先生達はまだ残るんだろ？ 仮にも命を狙われてんだ、気を着けるよ」

「い、言わないでください。それよりも、不純異性交遊はいけません！ ましてや二股なんて…」

「おいおいおい、別の方向を見て見ろよ。将来四股確定してる奴がそこにいるぞ？」

「避○はしてる、問題ない。古○記にもそう書いてある」

「書いてねえし、なんでそのネタ知ってんだ?」

「そういう話じゃありません!」

次に愛子達農地開拓組。ウルでの復興作業をもう少し手伝ってから、清水星辰奏者幸利という強力な仲間を加えて次の町に向かうらしい。とは言うものの、元々被害という被害も出ておらず、平原の魔物処理程度ではあるのだが。

「…えつと…ロスリック、さん?」

「ああ、清水には言ってなかったな。天津悠姫だ。呼び方は任せる。細かい部分は園部達に聞いてくれ。それで、決意は決まったか」

「…はい」

そして悠姫達。悠姫達はこれからウィルをフューレンに送り届けた後に、大迷宮の一つ「グリューエン大火山」に挑むことになっている。

だがここで別れる前に、やっておかなければならないことがある。向き合った悠姫と清水の空気が変わり、自然と周りの全員も黙り込んだ。

「…俺は、許されなかったことを、しました。できることなら、償いたい。あんなことをしても、俺を見ていてくれた先生の為に、この力を使いたい」

清水の宣誓は決して大きな声ではなかったが、確かにこの場の全員に届いていた。前日の晩にも似た言葉を聞いているのに、愛子は感動して目元を潤ませている。

悠姫はそんな清水の宣誓を受けて、

「……いいだろう。ならば、清水幸利よ。汝に神託を授ける」

仰々しく声を張り上げた。突然のことに正面の清水だけでなく、ハジメ達を面を食らったかのように目を丸くする。

「なに、そんなに気負うことはない。神祖達センバイが行っていた予言みたいのものらしい。お前の末路はつてみたいにな。ただ、俺は多少の関わりで未来それを予言できるほど経験値を積んでない。だから、ただの発破だと思ってくれ」

苦笑しながらそう言われると、清水も釣られて苦笑してしまう。しかしおかげで、全身の強張りは取れたと言っている。そして改めて悠姫と清水は向き合っている。

「では改めて、清水幸利。お前は——」

「あれ、良かったんですか？」

フューレンに向かう魔道四輪の車内で、運転するハジメにウィルがそう言う。

魔道四輪に乗っているのは悠姫とティオを除いた四人だ。二人は魔道二輪でタンデム中である。

ティオは運転している悠姫の背中に、重厚な胸部装甲を押し付けながら抱き着いてい

る。プロポーズ保留の代わりに、この程度の甘えは許してほしいとのことらしい。

「良かったもなにも、大団円を迎えたんならそれでいいじゃねえか」

「……ハジメ、丸くなった」

「私、初めて会った時は死んじやうかと思いました…」

「…私は最初見捨てられそうになった」

「もし悠姫（さん）がいなかったら……」

「…後で覚えてろよ」

「あ、はは」

容赦ないユエとシアの口撃にハジメはこめかみをピクピクさせ、ウィルは乾いた笑いを零している。

とはいえ、ハジメが丸くなったのも事実ではある。召喚初期から悠姫ユキがいたことや、殲滅戦前の愛子の説得もあり、敵に容赦しないのは変わっていないくとも、現在は会話から入ろうしている。

「…まあ悠姫がいなかったら俺がもつと荒れてたのは確かだな」

懐かしむような遠い目をするハジメを見て、次に外で二人乗タンデムりする男を見てウィルがポツリと。

「…まるで勇者、いえ英雄みたいですね」

それが誰のことを指すのかは明白だ。ウィルにはハジメ達が最初から強かったように見えるのか、そんな強い人に影響を与えるなんて英雄みたいだということか。

更には、自分や洗脳された竜テイオ、魔物化した人間さえ救ったりと、上げてみれば救ってばかりな姿が、輪を掛けてウィルには輝いて見えたのだ。

そして愛子達は――

「じゃあ、やります。清水君、お願いします」

「はい、先生」

開拓予定の農地（仮）を前にして、愛子は農作師としての力を使うために祈りの姿勢になる。ウルで（羞恥を隠すために）行おこなった祈りの姿勢はどうやら周囲の受けが良かったらしく、農地開拓でも行おこなうようになっていた。

呼びかけに応じて清水が愛子の後に立ち、両手で杖を構えて詠唱を開始する。

その詠唱は、教会も知らない未知の星辰魔法光。一度は魔族に与した清水が使っては、異端認定される可能性は高い。それでも、清水は躊躇なくこの星光ほしを輝照する。

脳裏によぎるのは、あの日に悠姫に告げられた言葉。

『――自分が正しいと思つた道程みちを往け。その先に、お前を照らす希望ヒカリが待っている』
（これが、俺が正しいと思うこと）

「創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星」

第五十三話 フューレン、再び

中立商業都市フューレンは、相も変わらず活気づいていた。

高く巨大な壁に囲まれているにもかかわらず、壁内の喧騒は壁外にまで伝わっている。さらには門前にできた長蛇の列、唯の観光客から商人のよな仕事関係で訪れた者まで、厳しい入場検査を待っていた。

多くが気怠そうにしているところに、爆音と共に近づいてくる二つの影。なんだなんだと興味を引かれて見ると、黒鉄の箱と金属の馬が走ってきているではないか。

はつきり言つて恐怖でしかない。誰もが慌てて逃げ出そうとしたところで、二つの未知の物体は多少離れた場所で停止した。

そして停止した二つの物体、魔道四輪からユエとシアが、魔道二輪からテイオが降り立った。突然の美女・美少女の出現に、そこから感心やらうつとりとした溜息が漏れる。

次にハジメが降り、ボンネットに座つて先頭さきが長い行列を眺める。

「分かつちやいたが、やつぱり長えな。ざつと一時間位はかかりそうだ」

「時間も時間だ、仕方がない」

魔道二輪に跨ったまま悠姫が応えた。ずっと同じ姿勢で走り続けたということもあり、男二人は首をコキコキ鳴らしたり肩をグルグル回したりして身体の凝りを解している。

そんな二人を見てユエとティオがそれぞれハジメと悠姫の後に回って、二人の肩を揉んでマッサージを始めた。遅れた！ とばかりにウサミミをピンと伸ばしたシアだが手伝えることもなく、やがて寂しさを感じたのかハジメの傍らに座り込んで体を預ける。

なお、謎の勝負^{V S シア}に勝利したユエだが、恨めしそうな視線を横の魔道二輪に向けている。走行中と同じように、悠姫の背中に胸部装甲を押し付けているティオだ。謎の勝負^{V S ティオ}は開始前に敗けている。

「…所詮は脂肪の塊…別に悔しくなんて…でもハジメに…くっ！」

これほど成長しない体を怨んだことはない、恨み言をポツリポツリと零す様は負けヒロインのそれには見ええない。

それはともかく
閑話休題

「とこころで……このまま乗り付けて良かったんですか？ できる限り隠すつもりだった

のでは……」

「今更だ。ウル防衛戦^れから一週間が経過している以上、余程の辺境でもない限り、噂程度は広がっているさ。ほら、あその商人なんて、本当だったのか、なんて言ってる」

「いえ……僕には聞こえないんですが……」

窓から身を乗り出すようにして聞いてきたウイルに悠姫が答える。スペックが高いから遠くの会話が聞こえているのであって、当然だがウイルには聞こえない。

だが悠姫が言った通り、ウル防衛戦の噂は様々な所に広がっている。悠姫が聞いた商人の反応がその証拠だ。

「でも、そうなると教会とかお国にも伝わっちゃってますよね？ 当然と言えば当然なので確かに今更ですけど……何らかのアクションはありますよね。愛子さんやイルワさんが上手く味方してくればいいですけど……」

「そのための保険だ。教会が本腰を入れれば無意味だろうが、あつて困ることはねえさ。敵になると敵にならねえの、どっちが被害少なく得をするのかは言わなくても判んだろ」

まあ、そこに信仰が関わってきて面倒になるのが、宗教を語る上でのお約束なのだが。このようになんでもない様に話を続けている一方で、周囲はウルの噂の審議によって騒ぎが増していた。ありえないと、町民全員でどんな夢を見ていたのだと言われていた

噂は、しかし真実だったのだと商人を中心に広まっっていく。

「おい！ 一体何の騒ぎ……なッ、何だコレは！」

すると騒ぎを聞きつけた門番が近づいてくる。定番且つ当然の反応を見せてくれるが、流石は大陸一の規模を誇る商業都市の門番と言ったところで直ぐに冷静になり、やや高圧的になりながら悠姫達に話しかける。

あくまで、門番としての事情聴取で高圧的になっただけで、イチヤイチャしてるようにしか見えない一行に嫉妬しているわけではない、はずだ。

「この黒い箱？ 鉄の馬？ はお前達の物か？」

「ああ、俺のアーティファクトだ。俺達はこれ等に乗って来ただけで、周りはアーティファクトを誰も見たことがねえから、ざわざわと騒いでるだけだ。被害なんざ欠片も出てねえよ」

列に並んでいる者達から聞いた内容と一致していることを確認し、門番はそうかと納得した。しかしそれだけで、未知のアーティファクトと言うことも含めて怪しさしか感じない。

「あ、あの！ 彼らのことは、私が保証します！」

「ん？ 一体誰だ？」

「クデタ伯爵家の三男、ウィル・クデタと申します」

門番の前にウイルが名乗り出る。門番となれば、フューレンを貴族が出入りする様も少なからず見てきている。その際にも家名程度も確認するために、クデタ伯爵家の家名も聞いたことはある。

しかし門番としては別に引つかかるものがあるようである。

「ウイル・クデタ：もしや君達は、ユウキ、ハジメ、ユエ、シアという名前ではないか？」
「そうだが…ああ、冒険者ギルドフューレン支部支部長、イルワ・チャングから何か聞いているのか？」

門番から名前を言われ眉を顰めながら応えた悠姫だが、ウイルの名前を聞いて思い出したような反応からウイル搜索の依頼者の名前を出すと、そのまま通すように聞いてみると、門番は頷いた。

これらのやりとりで一番驚いたのはウイルや門番ではなく、周りで聞き耳を立てている商人たちだ。肩書を含めてイルワの名前を出したのは、自分達はフューレン支部長から指名依頼されるほどであると教えるため。

加え、伯爵家と繋がりがあるかのように迄示唆されてしまえば、並の商人では交渉の机に向かうことすら出来ないだろう。

そして狙い通りに、抜け駆け防止に牽制しあっていた多くの商人が、驚きながら足踏みをくらっている。

悠姫たちはその隙に門番の先導の元、再びフェーレンへと足を踏み入れた。

「ウイル！ 無事かい!? 怪我はないかい!？」

「イルワさん……すみません。私が無理を言ったせいで、色々迷惑を……」

最初にギルドに訪れた時と同じように応接室に通され、待つこと数分。以前の落ち着いた雰囲気をかなぐり捨てて、扉を蹴破る勢いでイルワが飛び込んできた。

心の底から心配していたのだろう。挨拶もなしに、ウイルを視界に捉えると直ぐに駆け寄り安否を確認する。

「……何を言うんだ……私の方こそ、危険な依頼を紹介してしまった……本当によく無事で……ウイルに何かあったらグレイルやサリアに合わせる顔がなくなるところだよ……二人も随分心配していた。早く顔を見せて安心させてあげるといい。君の無事は既に連絡してある。数日前からフェーレンに来ているんだ」

「父上とママが……わかりました。直ぐに会いに行きます」

そしてウイルはイルワから両親の滞在先を確認し、悠姫達に頭を下げた改めてお礼を言い、改めて挨拶に向かうと告げてから部屋を出て行く、前に。

「ああ、ちよつと待ってくれ。すっかり忘れてたんだが、このロケットはお前のじゃない

か？」

そう言い、悠姫は宝物庫からウィルを救助する前に拾ったロケットペンダントを取り出す。中に美しい女性が写っている写真が嵌っている。

「ああ！ 拾ってくださってたんですね！ ありがとうございますー！」

「綺麗な女性だ。それにかなり大事にしてるみたいじゃないか」

「はい！ 大好きなママの、若い頃の写真ですー！」

ビシリツと、応接室の空気が凍り付いた。嬉しそうなウィルだけは例外で、マザコンであることを知っていたイルワもロケットの写真は知らなかったらしく、悠姫達同様に固まっている。

「……まあ、うん。喜んでくれてよかった。そら、ママが待つてるぞ」

「はいー！」

一足先に再起動した悠姫に言われると、一礼して先ほどよりも嬉しそうに応接室を出ていった。

それからたつぷり十秒、時間を掛けて再起動思考放棄した一行は席付いた。そして、イルワは穏やかな表情で悠姫達に向き合い、深く頭を下げる。

「みんな、今回は本当にありがとう。まさか、本当にウィルを生きて連れ戻してくれるとは思わなかった。感謝してもしきれないよ」

「まあ、生き残っていたのはウイルの運が良かったからだろ」

「それに、先行してたデイルグや、ウイルが同行してた冒険者達のおかげでもある。冒険者達を救うことはできなかったがな。遺品も持ち帰ってる、手厚く吊ってくれ」

「ああ、彼らを死地に向かわせた責任がある。言われずとも、手厚く吊わせてもらうさ。だが、君達自身も何万もの魔物の群れから彼や街を守りきってくれたのは事実だろう？

女神の劍様？」

にこやかに笑いながら、ハジメが大群との戦闘前にした演説の内容から文字った二つ名を呼ぶイルワ。一応（しぶしぶながら）愛子公認の二つ名ではあり、分かっていたことではあるが、いざ面と向かつては気恥ずかしいものがある。

「……あんたの後ろ盾を依頼報酬にしたのと同じ理由だ。これでギルドが干渉できない方にも、繋がりが生まれたってわけさ」

「確かに、かの『豊穡の女神』が後ろ盾となれば、教会も強引な手段以外は取れないだろうね」

くつくつと笑うイルワだが、やがて真剣な表情をして悠姫達に聞く。

「しかし、女神の劍が何万もの魔物を殲滅した、では情報としては不十分だ。一応、現地にいた私の部下からの報告もあるんだが、やはり当事者から聞けた方が的確だからね。だから、教えてもらえないかな、一体何があったのか」

天職：守護者

筋力：770 [＋竜化状態4620]

体力：1100 [＋竜化状態6600]

耐性：1100 [＋竜化状態6600]

敏捷：580 [＋竜化状態3480]

魔力：4590

魔耐：4220

技能・竜化「＋竜鱗硬化」「＋魔力効率上昇」「＋身体能力上昇」「＋咆哮」「＋風纏」「＋痛覚変換」・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」・火属性適性「＋魔力消費減少」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」・風属性適性「＋魔力消費減少」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」・複合魔法

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

悠姫やハジメには劣るものの、勇者達ですら少数では歯が立たないほどのチートスペック。シアは兎人族以前に亜人族の常識をぶち壊す魔力持ちであり、シアとテイオに至っては、滅んだはずの種族の種族固有技能である「血力変換」と「竜化」を持っている。

「か、可能ならば、君達二人の分も見せてもらうことは、出来るだろうか？」

「……まあ、ここまで来たから見せないのも変な話か」

絶句しつつ、声を震わせながらイルワが悠姫に尋ねると、悠姫とハジメは顔を見合わせた後に、ステータス隠蔽を解いたステータスプレートを差し出した。

|||||

天津悠姫 ??歳 男 レベル:???

天職:神子 職業:冒険者 ランク:青

筋力:?? [+最大]

体力:?? [+最大]

耐力:?? [+最大]

敏捷:?? [+最大]

魔力:?? [+最大]

魔耐:?? [+最大]

技能:星辰光・■■■■・魔力操作 [+魔力放射] [+魔力圧縮] [+遠隔操作]・魔力

変換 [+身体強化] [+部分強化] [+治癒力変換] [+衝撃変換]・気配感知 [+特定感

知]・魔力感知 [+特定感知]・生成魔法・重力魔法・言語理解

|||||

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「こ、これは……いやはや……なにかあるとは思っていましたが、これほどとは……」

三人をはるかに超える、悠姫に至ってはそもそも数値化されたパラメータが一つもないという異常ステータスを確認し、再び思考放棄しそうになったが必死に繋ぎ止め、眉間を揉みながらイルワはどうか声を絞り出した。

多少イルワが落ち着いたところで、悠姫が事の顛末を語る。大まかには噂と同じで、百人が聞けば百人が馬鹿にするであろう内容。だが、その下手人が目の前にいて、尚且つ噂を裏付けるステータスの数値と技能を見れば、掌を返して信じることも間違いはない。

イルワは話を聞き終えると、一気に十歳くらい年をとったような疲れた表情でソファアーに深く座り直した。

「……道理でキャサリン先生の目に留まるわけだ。ユウキ君とハジメ君が異世界人だということとは予想していたが……実際は、遙か斜め上をいったね……」

「……それで、どうする支部長？ 俺達を危険分子だと教会にでも突き出すか？」

「……まさか、冗談だろう。出来るわけがない。君達を敵に回すのは、国家を敵に回すのと同等价か、それ以上だと解釈している。個人としても、組織ギルドとしても、自滅願望なんてないさ」

僅かに「威圧」を出しながら詰めるハジメに、冷や汗をかきながら苦笑してイルワは

言う。おそらくヘルジャー帝国と戦争しても、悠姫達が勝利するだろうと、半ば確信している。

「それに、君達は私の恩人なんだ。そのことを私が忘れることは生涯ないよ」

「それは良かった」

試して悪かったと、ハジメが「威圧」を解いて謝罪を示す。それに対して、当然の警戒さと、イルワが笑う。

「私としては、約束通り可能な限り君達の後ろ盾になろうと思う。ギルド幹部としても、個人としてもね。まあ、あれだけの力を見せたんだ。当分は、上の方も議論が紛糾して君達に下手なことはしない筈だよ。一応、後ろ盾になりやすいように、君達の冒険者ランクを全員「金」にしておく。普通は「金」を付けるには色々面倒な手続きがいるのだけど……事後承諾でも何とかなるよ。キャサリン先生と僕の推薦、それに「女神の剣」という名声があるからね」

「非戦闘職のランク上限は「黒」だった筈では？」

「「預言師」という非戦闘職で、「金」ランクのシエリア王女がいるからね。一度でも例外を許したなら、隙なんていくらでも作れる」

「……それもそうだ」

他にもイルワの大盤振る舞いにより、フューレンに在る間はギルド直営の宿のVIP

ルームを使わせてくれたり、イルワの家紋入り手紙を用意してくれたりした。少しでも友好関係を結んでおきたいということらしい。

その後、VIPルームで休んでいるとウイルのご両親である、グレイル・グレタ伯爵とサリア・グレタ夫人がウイルを伴って挨拶に来た。かつて、王宮で見た貴族とは異なり随分と筋の通った人のようで、ウイルもそうだったのだが、亜人族であるシアを一方的に見下したりしない辺りは、人柄の良さが窺える。ウイルの人の良さというものが納得できる両親だった。

グレイル伯爵は、しきりに礼をしたいと家への招待や金品の支払いを提案したが、悠姫とハジメが固辞するので、困ったことがあればどんなことでも力になると言い残し去って行った。

そして、食料等の買い出しは明日に済ませることにして、残りは休むことにした。

第五十四話 黒竜から見た怪物

翌日、悠姫達は悠姫とテイオ、ハジメとユエ、シアの二組に分かれて、フューレンの町を回っていた。

メインの買い出しは悠姫とテイオが担当し、ハジメ達は三人でデートに繰り出している。フェアベルゲンを出たあたりからシアの恋をユエが後押しするようになっていたが、ようやくハジメもシアの恋心に向き合うようになり、素直にデートの誘いを受けている。

一方の悠姫とテイオも買い出しは早々に済ませ、デート（仮）を行っている。

「うぬう……新参者の妾が、一番最初にこのような体験をするとは、申し訳ないというか、恥ずかしいというか……」

「フューレンに向かつてる道中であれだけアピールしてきたくせに、今更なにを恥ずかしがってるんだよ」

「そ、それとこれとは話が違うのじゃ。それにあの時は逞しい背中に父のような安心を感じて……冷静になれば、なんと恥ずかしいことをしていたのじゃ妾は……」

「…なるほど、これがユエの言っていた恋愛雑魚というやつか」

頭を抱えながら顔を真っ赤にして呻くティオを、悠姫は呆れたように見つめている。そういう悠姫も、色恋に関しては経験豊富というわけではないのだが。

周囲を見渡すと、予想以上に向けられる視線が多いことに気付く。それも当然で、周りから見れば美男美女カップルが歩いていっているようなもの。美女の豊満な胸部を見て前かがみになる男が多く、冷めた目で男を見たりパートナーの男をどつく女性もまた多いのは、この展開のお約束だ。

なお、「生ユウキちゃん」と呟いて倒れる冒険者らしき男がいたことには全力で目を逸らし、記憶の彼方に捨て去っている。なぜまだフーレンに留まっているのか…

そうしてデートを続けた悠姫達だが、時間が経てばさすがにティオも落ち着いたように、今は人目に触れることが少ない個室型の喫茶店で休憩している。

「……ところで主殿。一つ質問してもよいかの？」

「…？ まあ、構わないが…どうした急に」

畏まったように話を切り出したティオに、悠姫は首を傾げつつも頷いた。

「なに、主殿のことをちゃんと知っておきたいと思つての」

そう言うティオだが、悠姫からすれば益々頭に疑問符が浮かび上がる。

ちゃんと知るものにも、召喚されてからのことや、召喚される前の新西暦のことなど

粗方話しているはずだ。それ以上に何を知りたいというのか。

もちろん、純粹な個人の好き嫌い等といった細かいことについては話してはいないが、この真剣な雰囲気にしてまで聞きたいことではないだろう。

「い、一応、先に弁明させてもらいたいのだが、妾は主殿を不審に思っているわけではないし、主殿のことを想っているのも本当じゃ。竜人族の誇りにかけて、今の言葉も、ウルで告げた言葉も、嘘偽りは一切ないと断言するのじゃ」

「…少々気恥ずかしいが、分かっているさ」

悠姫の返答に、ティオはゴホンと息を整え、再び気を引き締めて口を開いた。

「主殿は、一体何になりたいと思っておるのじゃ？」

「……と、言うとは？」

そしてティオの口から出たのは、何になりたいのかという疑問。子供が口にする、将来の夢と言うような輝かしい希望などではない。

「人生を繰り返す、言葉にすれば単純じゃが、現実で考えれば「ありえない」の一言で片付けられることじゃろう」

あるいは気付いていないだけで、誰もが人生を繰り返しているのかもしれない。だが、それを知らなければ繰り返していかないのと同じだ。

だが、その例外が天津悠姫という人間。

「何度も死んで、何度も殺される。そして何人も殺し、何度も殺した。それでまともな精神を保てるわけがないのじゃ」

「ひどいな。まるで俺がまともじゃないと云つてるみたいじゃないか」

「じゃが事実じゃろう？」

「まあな」

クリストファー・ヴァルゼライドという英雄ヒカリの為に自らの人生を捧げる、そんな立派な光の亡者だった自分が、まともであつたはずなどないと理解している。

では、その「英雄ヒカリの為」という枷こしがなくなつた今はどうなのか。まともではないという精神は、はたしてまともになつたのか。

結論を言うならば、そこまで変わっていない。「英雄ヒカリの為」というお題目が、「トータスの為」という形に切り替わつただけ。

仲間や幼馴染、他の召喚された面々を地球に返す為、未だ地球で自分の帰りを待つているという父母に再会する為といった理由も少なからず含んでいる。

しかし、テイオにはそのどれもが違うように感じ——

「じゃが、妾には「英雄ヒカリの為」というのも「トータス世の為」というのも、唯の理由でしかないように思えるのじゃ」

「だから、何になりたい、か」

——悠姫はテイオの真剣な瞳に射抜かれて、苦笑して肩を竦める。まったく、その通りだと。

ヴァルゼライドの本質は、「英雄」ではない。光を守ることが目的ではなく、正義の味方という存在ですらなく、真実を寧ろその逆。邪悪を滅ぼす死の光、「悪の敵」こそヴァルゼライドの本質だ。それを貫いた結果が「英雄」という形であり、誰かが望んだ姿に他ならない。

ならば、その「悪の敵」の隣で進み続けた男の真実は——

「……勝利とはなんだ、と考える時がある」

「勝利？」

「ああ。生涯の果てに得た悟り、「生きる」という問いに対する答えと言ってもいい」

十秒ほど空けて悠姫の口から出た言葉は、今度はテイオにとって不可解なものだった。しかし、高位次元という情報データベースに触れ、さらに原初神話テオゴニアという特異点から生成された活動体である悠姫にとつては、ある意味ありふれた問いかけ。

ある敗者は、「気づくこと」だと言った。

ある英雄は、「進み続けること」だと言った。

ある境界線は、「あらゆる想いを許すこと」だと言った。

ある神祖は、「愛しい誰かに出会える事」だと言った。

ある人間は、^{ふたり}「託すこと」だと言った。

どれも間違っていない勝利だと思える。^{こたえ}ただ、それが自分とガイアが掲げる答えなのかと言え、それは違う。ならば――

「俺は――ッ?!」

――突如、轟音と振動が悠姫とテイオを襲った。どうやら外から聞こえたようで、悠姫とテイオは話を中断して、代金を置いて外へと駆け出した。

そうして飛び出した悠姫達が見たのは、倒壊した数棟の建物と、物理的に顔が歪んだり痙攣して倒れている強面の男たち。そして：

「お？　なんだ、ここにいたのかよ」

「…いったい何の騒ぎだ、ハジメ」

爆ぜた壁面から出てきたハジメとシア。それは休日が終わりを告げた瞬間だった。

「よし、潰そう」

それがハジメから事を聞いた悠姫の一声。事の次第は以下の通り。

まず、ハジメがデート中に地下の下水道から「気配察知」で何かを感じ取った。しかも、作業員のような大人という感じではなく、非常に弱りきった子供だという。

「錬成」を使って三人で向かうと、そこには衰弱した三、四歳程度の海人族の女の子、ミュウがいた。

海人族とは、亜人族の中でも特殊な立場にある種族だ。「グリュウエン大砂漠」を越えた先の海、その沖合にある「海上の町エリセン」で生活している。そして、その種族特性を活かして大陸に出回る海産物の八割を採って送り出している。そのため、差別される亜人族でありながら、王国に「保護」されている種族だ。

その海人族の子供であるミュウが下水道で衰弱していたという時点で、不穏な空気が漂ってくる。そしてその通りで、ミュウは人攫いに遭い、人身売買、オークションの商品として連れて行かれるところを逃げてきたらしい。

ミュウを保護した以上、無関係ではなくなったハジメ達だったが、最終的に保安所に預けるといふ判断を下した。理由としては、大迷宮「グリュウエン大火山」に挑むにあたって、砂漠地帯に一人残していくことになってしまうことが大きい。また、誘拐されたミュウを連れて行けば、自分たちが誘拐犯として扱われる危険性もある。

そしてハジメ達はミュウの駄々に必死で耐えつつ保安所に預けた。事情を聴いたと

きの保安官の様子からハジメ達も大丈夫だと判断し、ミュウの悲しげな声に後ろ髪を引かれながら保安所を後にする。

しかし数分後、保安所が爆発。ハジメ達が急いで駆け付けた時にはすでに遅く、ミュウは再び攫われた。代わりにあったのは負傷した保安官たちと一枚のメモ。

—海人族の子を死なせたくなければ、金髪の少女と白髪の兎人族を連れて〇〇に来い

しかし指定の場所に行ってみればミュウの姿は無く、武装した男達に囲まれていた。しかしそれでハジメ達を止めるなど出来るはずもなく即殲滅。拷問して情報を聞き出し、ギルドと保安所に突き出しつつアジトを襲撃、拷問して……というところで悠姫とテイオが合流した。

そして合流するまでの流れを説明して、悠姫の一声に戻る。

「ギルドはなんと?」

「連中、フリートホーフはまあまあ面倒な裏組織みたいでな、正式に討伐依頼が出た。生死は基本的には問わねえが、可能な限り幹部クラスは生け捕りにしてほしいそうだ。ただ、アジトが分かんねえから、風潰しにしてくしかねえ」

「まあ裏組織は往々にしてそんなものだ。ニルヴァーナの時も面倒だった」

「……ちなみにその時はどうやって?」

「本拠地に直接乗り込んだ」

その時と今の違いは、本拠地の場所が分かっている点ではないという点であるため、結局は虱潰しになることに変わりはない。しかし、人数が足らなすぎる。

ゆえに、悠姫は「宝物庫」から大量の機械蜂を取り出した。

オルタレイション
星環境変性——

——「妖媚神殿、蕩ける愛の蜂房なれば」

悠姫の指示により、無数の機械蜂の群れが一斉に飛び出して、フューレン各地に散っていく。路地に、下水に、経験と直感で判断した「裏」につながっていきそうな場所に、静かに機械蜂たちが侵入する。

「静かに、だが確実に、塵共には消えてもらうでしょう」

他者を弄ぶ「悪」は見逃さぬと、怪物の瞳は嚇怒に燃えていた。

第五十五話 錬成師、パパになる

「ハジメ、ユエ、観光区の十八番地の呉服屋「カイト」に行つてくれ」

『おう』

『ん』

その日、冒険者ギルドフューレン支部の支部長室では、慌ただしく多くの人が出入りしていた。そして、その中心には悠姫がいた。

「イルワ支部長、三ヶ所を無力化させた。捕縛用の人員を送つてくれ」

「聞いたな！ 一ヶ所ごとに五人を送れ。人が足りなければ保安局や冒険者も連れていけ！」

『は、はいッ！』

悠姫の言葉に反応して、同じく支部長室にいるイルワがギルド職員に指示を出す。指示を受けた職員は他数名の職員や冒険者と共に、機械蜂の案内の元、無力化されたフリートホークの拠点に向かつて行く。

今現在行われているのは、裏組織フリートホーク殲滅作戦。そして、指揮所が支部長

室であり、総指揮を執っているのが悠姫。

各地に飛ばした機械蜂で拠点を探り、ハジメ達が近いなら四人を向かわせ、四人が遠い又は別拠点にいるなら機械蜂で無力化することで、少しずつフリートホークの総体を削っていく。

ギルドを拠点としているのは、ギルド主導の殲滅戦なのだ。他の裏組織に知らせ、その活動を牽制するため。

しかし、未だフリートホーフの本拠地と、ミュウの居場所は分かっていない。

「いやまさか、あのフリートホーフに対して攻勢に出れるとは思っていなかったよ。このサイズだから、拠点到侵入されても気付かれない。それに構成員の無力化もできる。どの組織も、喉から手が出るほど欲しがるよ」

「残念だけど、アーティファクトじゃなくて俺の能力の一部なんだ。他組織で使われなだけで良しとしてくれ」

「仕方ない。そうしよう」

なかなか足を掴ませてくれない組織に対して、こうもあつさり攻められるとは、とイルワが感心しつつ、どの組織もと言いながら、掌の機械蜂を是非欲しいという視線を悠姫に向けるが、しかし残念。あくまで悠姫の星^魔辰^法光なので、分けることはできないのだ。

そこに、ドット秘書長が慌てるように支部長室に入ってきた。その慌てぶりに、イル

ワがドットに話しかける。

「何かあったのか」

「い、いえ。実は先程、手紙が届いているのを発見しまして」

「手紙？ それなら後にしろ。今はフリートホーフが優先だ」

「そ、それが、宛名は支部長ではなく、彼でして」

「俺？」

機械蜂を操作しながらイルワとドットのやり取りを聞いていた悠姫だが、ドットが持ってきた手紙が自分宛ということに疑問を抱いて手紙を受け取る。

—親愛なる天津悠姫殿へ 審判者より—

名前を見た瞬間に、悠姫は手紙を開封する。そしてその文面を読んで、悠姫は口元を笑うように歪ませた。

「フリートホーフの本拠地と、オークションの会場が分かった」

イルワとドットは悠姫の表情に一步引いた態勢になったが、次いだ悠姫の一言に引き締める。この殲滅戦で最も望んだ情報だ。

「ハジメ、オークション会場が分かった。ミュウという女の子もそこにいるらしい。シア、テイオも向かってくれ。俺は連中の本拠地に乗り込む」

『妾も主殿の方へ行つてよいかの？ 本拠地ともなれば、顧客リストなんかもあるはず』

じゃ。それなら人手は多い方が良いと思うのじゃ」

「……そうだな。テイオも本拠地の方へ来てくれ、案内を飛ばす」

『了解じゃ』

「それなら、ギルドの非戦闘職員の内、十名程をユウキ君側に行かせよう。露払いはしてくれるだろう？」

頷いて、悠姫達はそれぞれの持ち場に急行する。

悠姫、テイオ、ギルド職員十名はフリートホーフの本拠地へ。ハジメ、ユエ、シア他ギルド職員や冒険者達はオークシヨン会場へ。

フリートホーフ壊滅まで、あと——

「おい！ いったい何が起きてやがる！」

商業区の外壁近く、観光区や職人区から離れた場所。公的機関の目も届かない裏の世界、都市の闇深くにそれはあった。表向きは真つ当な人材派遣を商いとしているが、裏

では人身売買の総元締めをしている、裏組織フリートホーフの本拠地だ。

その本拠地では、ギルドの支部長室と同じように、慌ただしく多くの人が出入りしている。しかしギルド職員とは違い、その表情は困惑や焦燥、そして恐怖に歪んでいた。

「潰されたアジトは五十を超えました！ 二十が吹き飛んで、三十近くがギルドに抑えられてます！」

「ふざけた報告してんじやねえ！ 三十だあ？ 冒険者使ったつて、ギルドにそんな力があるわけねえだろうがッ！」

「そ、それが、ギルドに抑えられたアジトでは全員、毒か何かで動けなくなってたらしく……」

「毒う？ どいつか裏切りやがったか？」

しかし飲食で毒を盛るにしては、効果の出方が纏まりすぎていると、フリートホーフの頭、ハンセンは思考を巡らせる。さすが巨大な組織の頭と言うべきか、着眼点は良い。だが、相手が悪かった。

「あ？ なんだ？」

その時、先程以上に外が騒がしいことに気付いた。

ハンセンがいる部屋は七階、つまり最上階だ。しかし、階下の方から悲鳴が聞こえてくる。少しずつ、だが着実に、塵屑（ちんせつ）の首を刈り取らんと、死神が逃げ場なき最上階へ近

づいてくる。

そして、ハンセンがいる部屋の扉が轟音と共に吹き飛んだ。

入ってきたのは、全身を構成員の返り血で染め上げた怪物。剣呑な様子と、視線で人を殺してしまいそうな鋭い眼光、そして全身から滴る返り血が、中性的な様子を掻き消して本能的な恐怖を感じさせる。

「…フリートホーフの頭目だな」

「……てめえが俺らのアジトを襲撃してたつて奴か…一人で乗り込んでくるとは、ふざけた野郎だ…だが変態貴族共に好かれそうな見た目じゃねえか。おい！ 今すぐ投降すりゃあ命だけは助けてやるぞ！ 立派な雌になるように調k「黙れよ塵屑が」…あ？」

男娯趣味の変態貴族に売り飛ばせば、多大な利益が出ると喜ぶハンセンだが、悠姫が口を挟んだ一言に意識を奪われる。

「その汚い口を閉じろ。腐った声を垂れ流すな」

「……死ぬ」

悠姫の罵倒にキレたハンセンが親指で首を切り裂くようなサインを送ると、部屋の影に隠れていた構成員が、後ろから悠姫の首に剣を振り抜いた。

剣は当たり前のように悠姫の首と胴体を切断し、首はゴロリとハンセンの足元まで転げ落ちる。

「…は、ハハハハッ！ なんだこいつう？ こんな奴に良い様にやられたのかよ！」

転がってきた悠姫の首を踏みつけ、高笑いするハンセン。大金になる餌を殺してしまつたとか、フリートホーフのメンツを潰した奴を見せしめにするのを忘れてたとか、いろいろと考えるものはある。だがスツキリしたと溜飲が下がる。が、

「黙れと言つたはずだが？ それとも、目先の事しか見えていないのか。随分とおめでたい頭をしてるんだな」

「——は？」

足元から聞こえてきた死人悠姫の声に驚いて呆けた瞬間、踏みつけていた感覚が突然消える。そして正面には、血飛沫を散らしながら崩れる構成員と、切り落とした筈の首を生やした化物悠姫の姿が。

「ひッ！ な、なんなんだお前ッ！ ば、化物！」

「黙れと何度言えばいい」

太刀に流れる血を振り払いながら、ゆっくりと悠姫はハンセンに近づいていく。ハンセンは尻餅をついて後退りしながら逃げようとするが、出口は悠姫の背中の方にのみ存在し、ハンセンは自ら出口から遠ざかる形になっている。

「わ、悪かった！ もうお前らには関わらねえ！ 金なら好きに持っていいだ、だから、命だけは！」

「屑には、罰を」

壁まで後退り逃げ場を完全に失ったハンセンの眼前で、悠姫が太刀を振り上げる。その様子を、悠姫に追いついたテイオが固唾を呑んで出口から見ている。

「う、海人族のガキか?! それなら、観光区の美術館でやるオークションだ！俺が言うて、お前に渡す！」

「悪には、裁きを」

醜い命乞いを歯牙にもかけず、

「や、やめー！」

「奪われた希望には、相応しい闇と嘆きと絶望を」

その太刀をハンセンの首に振り下ろした。
ギロチン

「倒壊した建物十一棟、半壊した建物十八棟、死亡が確認されたフリートホーフの構成員三十四名、再起不能十一名、重傷百三十八名、行方不明者五十五名……まあ分かつては

いたけれど、これは事後処理が大変だね」

「ハンセンとかいう頭と幹部連中は捕まえた。他にも商品として捕まっていた子供たちも救ったし、フリートホーフと関わりがあつた貴族なんかの顧客リストも手に入れた。当の貴族も、オークション会場という言い逃れできない場所で捕まえた。まあ貴族に關しては教会の権力で揉み消されそうだが、これ以上ない快挙だろう。他にどんな不満がある」

冒険者ギルドの応接室で、報告書を片手に眉間を揉み込みながらぼやくイルワに悠姫が応える。

フリートホーフの本拠地を襲撃した悠姫とテイオだったが、実の所あの襲撃で死んだ構成員は殆どいない。最後にハンセンに振り下ろした太刀は、顔の横の壁を斬りつけ、ハンセンは恐怖によって失禁しながら気絶していた。

そして重要書類を確保して、大量の死傷者を出しながらフリートホーフ殲滅作戦が終了したのだ。

なおハジメ達は、丁度ミュウがオークションに出されていた時に襲撃、ミュウや他商品として捕まっていた子供達を救出し、オークションに参加していた客達は、周辺を確保していたギルド職員や保安官、冒険者に取り押さえられた。

子供達は保安局に保護されて、身元が確認がされ次第親元に戻ることになる。客達は

半ば決定的な証拠を握られたようなもので、いくら貴族という立場であつても闇に手を出すことは不可能になつたと言つていい。

そして肝心のミュウはというと、現在ハジメの膝の上に載つて茶菓子をモリモリと食べていた。

「まさかと思うけど……メアシユタツトの水槽やら壁やらを破壊してリーマンが空を飛んで逃げたという話があるんだけど……関係ないよね？」

「……ハジメ？」

「……ミュウ、これも美味いぞ？ 食つてみる」

「あゝん」

イルワが言つた内容を悠姫は知らないのだが、ハジメが目を逸らして聞いていない風を装うあたり、何か知っているのだろう。いや、ユエとシアの目が泳いだあたり、三人でやったことだというのは、悠姫含めテイオ、イルワ、ドット秘書長は察した。

「はあ……まあ、フリートホーフ壊滅に比べれば些事だ、対処のしようはある。目先の問題は、他勢力の動きだけ……」

「今回、ギルド主導という体でフリートホーフを壊滅させただけでも十分牽制になるはずだ。それでも調子付く奴がいるなら、支部長お抱えの“金”がやってくるでも宣伝すればいい」

「……いいのかい？ 利用されるのは嫌う質だと思っただけだ」

「実際嫌いさ。でも、こちらもフューレン支部長という後ろ盾に世話になる。お互いに利益がある、ウィンウィンの関係だ。過度な不利益が出ない限り、仲良くしよう」

悠姫の提案はイルワにとっても非常にありがたいもの。今回の件ではギルドと冒険者だけでなく保安局も入り混じっており、事実を併せれば“金”冒険者が抱えであるというのも納得されるだろう。

「ありがとう、なら適度に利用させてもらうよ。……さてそれで、そちらのミュウ君のことなんだけど」

支部長室に緊張が走る。その雰囲気、ミュウはまたハジメと離れることになるのはと、不安そうにハジメやユエ、シアの顔を見上げている。

「可能なら、このままミュウ君を君たちに預けて、依頼という形でエリセンまで送り届けてほしい」

これから暫く、事後処理の為にギルドも保安局も忙しくなる。原因の裏組織は壊滅したものの、保安局襲撃と誘拐されるという前科がある以上、真に安全とは言い難い。それなら、このままハジメ達に任せた方が、ミュウの安全や精神面で良いと判断したらしい。

「ハジメさん、悠姫さん……私、絶対、この子を守ってみせます。だから……」

「もう、二度と誘拐なんてさせないから……」

シアとユエが固い意志を宿してハジメと悠姫を見る。ティオは二人の判断に任せるように、何も言わずに見守っている。

「お兄ちゃん……一緒……め？」

ハジメはその一言によって、一瞬で陥落した。というより、最初からミュウ本人が一緒に居たいと望めば、そのまま領く程には陥落していた。

「まあ、この期に及んで放り出すなんて真似するわけねえさ」

「ハジメさん！」

「お兄ちゃん！」

シアとミュウが声を上げながら満面の笑みで喜びを表にする。ユエも声には出さないものの、二人と同じように笑みを浮かべる。

そして、ハジメに同意するように悠姫も頷く。

大迷宮に挑む際は、近くに「アンカジ」という国があったはずなので、其処のギルドで預かってもらえばよいだろう。

そして、ミュウを連れていくことが決まったが、一つの問題が発生した。

「ただな、ミュウ。そのお兄ちゃんつてのは止めてくれないか？ 普通にハジメでいい。何というかわむず痒いんだよ、その呼び方」

そう、呼び方である。所謂オタクであるハジメにとつて、血の繋がらない幼女から「お兄ちゃん」と呼ばれるのはむず痒いものがあるそうだ。

ミュウがしばらく首を傾げると、何か納得したように頷いて――

「パパ」

――全員の想像の斜め上に行く答えを出した。

「……………な、何だつて？ こめんな、ミュウ。よく聞こえなかったんだ。もう一度頼む」
「パパ」

「……………そ、それはあれだな。海人族の言葉で「お兄ちゃん」とか「ハジメ」という意味で――」

「ううん。パパはパパなの」
「うん、ちよつと待とうか」

ハジメが目元を抑えて情報を整理している間に、悠姫がミュウにどうということなのかを聞き出した。

「ミュウね、パパいないの……………ミュウが生まれる前に神様のところにいつちやったの……………キーちゃんにもルーちゃんにもミーちゃんにもいるのにミュウにはいないの……………だからお兄ちゃんがパパなの」

「そうか……………良かったなハジメ、早くも子供ができたぞ。おめでとう。ハジメパパ」

「いやパパじゃねえし、なに早々に受け入れてんだよ。なあ、ミュウ。頼むからパパは勘弁してくれ。俺は、まだ十七なんだぞ?」

「やつ、パパなの!」

「わかった。もうお兄ちゃんがいい。贅沢は言わないからパパは止めてくれ!」

「やつー!!」　パパはミュウのパパなのー!」

この後、何とか「パパ」だけは止めさせようとしたハジメだが、ミュウは「お兄ちゃん」よりも「パパ」の方がしつくり来たように、最終的にエリセンでミュウの母親に説得してもらうしかない、肩を落としながらも一時的に了承した。

なお、誰がミュウに「ママ」と呼ばせるかの紛争が勃発したが、ママは本物のママしか駄目らしく、ユエ、シア、テイオは「お姉ちゃん」、悠姫は「お兄ちゃん」で落ち着いた。

この日、南雲ハジメ十七歳（未婚）は、四歳の幼女ミュウのパパになった。

第五十六話 予言通りの敗北

淡い緑色の光だけが頼りの薄暗い地下迷宮に、激しい剣戟と爆音が響く。

「万象切り裂く光 吹きすさぶ断絶の風 舞い散る百花の如く渦巻き 光嵐となりて敵を刻め!」
「天翔裂破!」

光輝を中心に放たれる無数の光刃が、襲い掛かる魔物の群れを切刻む。同時、光輝の合図で後衛が残る魔物に対して魔法を放つ。

「刹那の嵐よ 見えざる盾よ 荒れ狂え 吹き抜ける 渦巻いて 全てを阻め」
「爆嵐壁!」

後衛を襲おうとする魔物は「結界師」谷口鈴が展開した攻勢防御魔法である空気の壁によって防がれ、魔物は暴れる空気によって爆散していく。

そして、後衛の魔法が魔物を吹き飛ばし、残る魔物も光輝たち前衛によって殲滅された。

「次で九十層か……この階層の魔物も難なく倒せるようになったし……迷宮での実戦訓練ももう直ぐ終わりだな」

「おう、今の俺達ならどんな相手だろうと、それこそ魔人族相手でも楽勝だぜ！」
感慨深そうに言う光輝に反応して、豪快に笑う龍太郎。拳を突き合わせて不敵に笑う二人だが、光輝の胸中には未だ晴れない不満があった。それは、自分のパーティではない。幼馴染の二人、雫と香織だ。

二人は勇者一行としてオルクス大迷宮に潜ってはいるものの、パーティとしてはアヤメ、シエリアの二人を加えた四人パーティとして基本独立している。理由は、香織の他に『治療師』が一人しかいない為迷宮攻略を共にしているだけで、戦闘や訓練では殆ど光輝たちに混ざることがない。

そして、一番大きな理由が二人のステータスが、『勇者』である光輝すら敵わないほどに高いからだ。

少し前二人は、二人の師匠せんせいであるアヤメとシエリアの冒険者としての依頼で王都を離れた。その時、俺がいないところで心配だと、光輝は着いていこうとしたのだがすでに遅く、更には行先も分からないので諦めた。しかし問題はその後だった。

数日後、王都に戻ってきた二人は、数日前よりもはるかに強くなっていたのだ。しかも、王国や教会も知らない技能を取得して。当然、光輝は危険だ、そんな怪しい技なんて使ってはダメだと説得しようとするも、二人は全く聞き入れない。

先程の戦闘でもそうだった。今、光輝たちが殲滅した魔物と同程度だったのに、掠

り傷一つ負うことなく、たった二人で勝利を収めている。

その戦闘結果が二人の強さの証明。自分が守るべき相手が自分より強いという現実^事、何よりもそれが光輝にとっては不満なのだ。

その二人は、アヤメ、シエリアと共に、普段以上に神経を尖らせながら周囲を警戒している。

未知の階層であるから、というのは理由の一つ。しかし、最も警戒しているの理由は、“預言師”であるシエリアが予知した未来が近づいているから。

その予知が正しければ、今日、二度と癒せない傷跡を残して勇者パーティは惨めに敗北する。

そんなシエリアの予言は、嘲笑と共に一蹴された。勇者が敗れるわけがないと。そして光輝も、俺は負けない、という一言でパーティを纏め上げる。

光輝が雫と香織の強さに不満を抱いているなら、雫と香織は光輝の自分勝手に不満を、いや嫌悪感を抱いている。

自分が正しいと思っているから正しい、という根拠の欠片もない正義。ユキとハジメを殺したという事実を、混乱していたなどという支離滅裂な理由で終わらせる正義。

今だって、光輝たちは完全に油断している。速度に特化した魔物が襲撃すれば、容易く一人は殺されるだろう。だが、もしそうなつてしまえば、それは“勇者”の負けでは

ないのか？

だからこそ、シエリアの予言を信じて雫と香織は警戒を怠らない。すべてはユキとハジメに再会する為、地球に帰る為、自分たちが正しいと思ったことをするのだ。

そして――

「さあ、この程度ではないだろう？
怪物英雄に並び立つというならば、その力を見せてほし

い」

――予言は正しく、オルクス大迷宮に潜っていた攻略組は完膚なきまでに敗北した。

「……あれからまだ四ヶ月……何年も前だったように感じるな……」

フューレンでの騒動を終えて出立した悠姫達一行は、オルクス大迷宮がある宿場町ホルアドにいた。イルワからの頼み事を受け、冒険者ギルドホルアド支部の支部長に手紙

を届けに来たのだ。

—そのホルアドの町並みを懐かしむように、悠姫とハジメは見ている。ユエと出会う前、ユキが悠姫になる前、ハジメが左腕を失う前、二人は約三十人の同郷とホルアドにきたのだから。

「…二人とも…大丈夫？」

「ん？ いや、問題ねえよ。ただ、ある意味ここから始まったんだよなって思つてな…すげえ緊張して、怖くて…でもまあ、隣に本心で仲間だつて言つてくれる奴がいて…次の日に迷宮に潜つて……んで落つこちて…」

運命の日とも言えるあの日の出来事をポツリポツリと呟くハジメの独白を、ユエたちは神妙に聞いていた。今に至るまで何があつたのか、そのことは聞いていても、辛く苦しいだろう出来事をどう感じたのかなどと、そんな無神経なことはユエでさえ聞いたことはない。

「ああでも、前日の夜にユキ悠姫に言われたことがあるんだ」

『そもそも、俺達は一人じゃない。ピンチになったら、素直に助けに来てくれって言えればいいんだから』

「まあ実際に助けてって言った覚えはねえけど、それでも孤独ひとりじゃねえんだって思っ
てな……」

「……ん。今は私もいる」

「私もです!」

「えつと……ミュウも!」

ユエ、シア、そしてミュウと続いて声を上げ、ハジメは少し恥ずかしそうにしながらも、朗らかに笑った。その様子を微笑ましそうに見る悠姫に、テイオは声を掛けた。

「……主殿は、その日をやり直したいとは思わないのかの? 少なくとも、雫殿と香織殿という二人は、主殿とハジメ殿の味方じやったのだろう? それに、主殿ならハジメ殿が最大限の力を発揮できる場所を整えたり、他の同郷の者たちを纏め上げることだって出来たのではないかの?」

「……そうだな……」

そう指摘され、悠姫は歩きながら思案する。今の記憶を持ったまま、あの月夜の日に戻れるなら? 召喚されたあの日なら? 記憶も持たずに戻ったなら? 色々と考えてみるが、辿り着く答えは一つ。

「全く思わない。これまでの選択に間違いはなかったと断言できるさ!」

奈落に落ちなければユエという仲間に出会うことはなかった。王都に残り続ければ

シアとも遭遇することはなく、ハウリアは全滅していた。

勇者パーティという陰に埋もれていれば、ティオに出会うのはもつと遅かっただろうし、そもそも会えていなかったかもしれない。ミュウは二度と日の目を見ることなく、下水の中で冷たい屍になってしまっただろう。

それぞれの出来事に至る過程はどうあれ、最高の結果だったのだから。

「…そうか…妾も、主殿に出会えたことは間違っていないのじゃ」

冒険者ギルドホルアド支部。その内装は、最初にハジメが抱いていた冒険者ギルドそのものだった。

床や壁の所々に壊れた跡に、それを大雑把に修復した跡。正面にギルドのカウンターがあり、左側に食事処がある。オルクス大迷宮があるためか、冒険者たちの目はギラついており、ブルツクのような雰囲気は全くない。

しかし、それらを抜きにしても異様に空気がピリついている。明らかに歴戦の冒険者といった風貌をしている者すら、深刻にさせるだけの何かが起きているようだった。

ギルドに入った瞬間に浴びせられる、冒険者たちの殺気の籠った鋭い視線。なんとなくの直感で、ギルドに入る前にミュウを肩車から片手抱っこにして視線を遮ったのは正

解だったとハジメは思った。間違いなく怖がって涙目になっていただろう。

頭に疑問符を浮かべているミュウを抱いたまま、ハジメはニツコリと冷たい笑顔を示しながら「威圧」と「魔力放出」を冒険者たちにぶつけた。生まれてこの方感じたことがないレベルの凶悪なプレッシャーに、冒険者たちは一人残らずガクガクと震えている。

幸か不幸か、ハジメの絶妙な加減によつて気絶を許されず、しかし生物としての本能がハジメに対して逆らう気力を失わせる。そしてついに、ハジメが口を開いた。

「笑え」

「[[[[…え?]]]]」

ギルドに入って開口一番に言ったのは、状況を無視した命令。戸惑う冒険者たちに、ハジメは表情を変えずに追い打ちをかける。

「笑え、と言ったんだ。俺のように、ほらニツコリと。怖くないおじちゃんだぞ〜てな。手も降つて、家の子が怯えちまうだろ」

「だつたらその「威圧」を止めろ。連中の顔が引き攣つてるだろ。まったく親バカめ」

む? とハジメが「威圧」と「魔力放出」を解くと同時に、悠姫が冒険者達に目で合図を送ると、ハツとした冒険者達はそれぞれができる最大限の笑顔でミュウに向けて手を振った。

ハジメが手を退けて冒険者達のことを見たミュウは、数秒置いてからニヘラと笑って冒険者達に手を振り返した。そのミュウの笑顔に浄化されたように、ピリついていた雰囲気は、ほんわかとした雰囲気に変わっていった。

ミュウが怯えることなく和んだことを確認したハジメ達は、ギルドの受付カウンターに向かった。受付では、沢山の冒険者を一瞬で黙らせる子連れ冒険者？ とその仲間たちの対応をしなければならぬと思つて、緊張で強張つた笑顔を張りつけた受付嬢が立っている。

「あゝ…冒険者ギルドフューレン支部支部長イルワ・チャングから手紙を預かつてるんだが、ホルアド支部の支部長はいるか？」

「は、はい…フューレン支部の支部長からの手紙、ですか？ それでしたらお預かりしますが…」

「いや、直接渡すように言われててな。確認してくれ」

自覚があるのか、受付嬢の緊張を見て苦笑いしそうなハジメだが、要件を伝えて同時にステータスプレートを差し出す。受付嬢はハジメのステータスプレートを受け取つて、表示されている情報を見て目を見開いた。

「き、〃金〃ランク!?!」

全冒険者において〃金〃のランクを持つ者は全体の一角に満たない。そして、〃金〃

のランク認定を受けた者についてはギルド職員に対して伝えられる。そして当然、この受付嬢も全ての「金」ランク冒険者を把握しており、ハジメのことを知らなかったのと思わず驚愕の声を漏らしてしまった。

その声は、他ギルド職員や冒険者たちも聞いており、受付嬢と同様に「金」の出現で一気に建物内が騒めきだす。

受付嬢は個人情報暴露してしまったことにより必死に謝り倒しているが、ウルやフューレンでの事も含めて隠すのは今更だと判断して、ギルド支部長への取り次ぎをお願いする。

受付嬢が報告の為に奥に消えて数分後、ギルドの奥から全身黒装束の少年が床を滑りながら凄まじい勢いで飛び出てきた。そして、誰かを探すようにキョロキョロと辺りを見渡し始めた。

ハジメと悠姫はその人物に見覚えがあった。ハジメにとってはクラスメイトで、悠姫にとつては色々な意味で特徴的だったため直ぐに覚えることができた地球出身の少年。

「……………遠藤?」

「……………遠藤浩介?」

第五十七話 魔法の言葉

「うっ……」

「鈴ちゃん！」

「鈴！」

九十層で敗北を経験した雫達は、八十九層最奥付近の壁内に身を隠していた。

「し、知らない天井だあ〜」

「鈴、あなたの芸人根性は分かったから、こんな時までネタに走って盛り上げなくていいのよ？」

喉が渴いているため、皸枯れた声でネタに走る鈴だが、状況は最悪と言っている。

まず、九十層に降り立った十七人は魔人族勢力による襲撃に遭った。肩に双頭の白い鳩のような魔物を乗せた赤髪の魔人族の女性と人間族の男性、その二人が従える魔物。

女魔人族による勧誘を蹴って始まった戦闘は、高い攻撃と防御だけでなく、姿を消す魔物に回復担当まで、それぞれに特化した魔物の連携によって、終始魔人族勢力の優勢によって決着した。

それは圧倒的なまでの経験不足によるもの。戦略を練り、戦術を駆使する知能を有する敵との戦闘経験。なまじ力押しで解決できるような相手ばかりだったからこそ、光輝達は罠に掛かってしまった。

しかし、仮に魔族の戦術を喰い破っていたとしても、敗北という予言からは避けられなかっただろう。

その理由こそ、一人の人間と二体の魔物。

人間の名は、ギルベルト・ハーヴェス。そして魔物の名は、マルス―N.O. ε 殺塵鬼カーネイジとウラヌス―N.O. と 氷河姫ペリオド。

たった一体一人でも王国を滅ぼし得る魔の星、ブラネテス人造惑星が三三人体も魔族と共に姿を現したのだ。

その三体に立ち向かったのは、雫、香織、アヤメ、シエリアの四人。『勇者』をも超える現最強のパーティ——のはずなのに。

「…………でも」

ぼそりと呟いた雫が思い出すのは、ギルベルトにいと簡単にあしらわれた自身と香織。純粋な技量、膂力、経験の差が、容易に越えられざる壁となって立ちほだかる。

ペリオド氷河姫とカーネイジ殺塵鬼に対しては、それぞれアヤメとシエリアが対峙したが、それでも勝利は掴めなかった。

結果、雫達は敗走を余儀なくされた。『暗殺者』遠藤浩介を地上に送りつつ、『土術師』野村健太郎の技能で壁に空間を造って身を隠し、そして今に至る。

「…アヤメさん、大丈夫ですか？」

「ええ、軽傷です。すみません、審判者の相手を貴方達に任せてしまつて…」

「いえ、アヤメさんの能力はあの人には効き辛いですし、判断は間違つていなかったはずです」

少なくとも、光狂いに対してアヤメの能力は相性最悪であり、逆に強いだけの魔物である二体の魔星フラネテスに対しては最優だった。

とは言え、一瞬でも気を抜けば死んでいたことに変わりはない。だが、過ぎたことを言つても仕方がない。問題はこれからどうするべきかであり、しかしそれも一択しかない。

「…私達四人で、審判者達を足止め、その間に天之河君達が包囲網を突破、脱出。逃げらなければ、これ以外の選択はないわ」

「なツ！ それはダメだ！ それでは四人を見捨てることになるじゃないか！」

「だったら他にどんな選択があんだよ！ そもそも、お前が負けたのが悪いんじゃないか！」

「次は負けない！」

シエリアが提案したのは、自分達四人を犠牲にして他十二人を生かすこと。利用価値が高い自分達が殺されることはないだろうと予想してのことなのだが、光輝は猛烈に反発する。

それに対して、檜山パーテイの近藤礼一が声を上げる。先の戦闘で、光輝は切り札でもある“限界突破”を使用してまで負けたのだ。先程よりも消耗している今、客観的に見て勝てる要素などあるわけがない。それでも光輝は負けないという一点張り。

険悪な空気が全員を包み込むが、今は敵から身を隠している途中でありそんな中で騒げば――

「ルウガアアアアアア!!」

――見つかるのは当然だ。

「ッ、戦闘態勢!」

「ちくしょうが!」

壁を粉碎してきたカメラ型の魔物、その後ろには他の魔物や魔族、ギルベルト達の姿も。光輝が聖剣を構えて叫び、それに続いて各々が軋む体に鞭を打って立ち上がり、悪態を吐きながらも武器を構える。

「光輝! あの子は私達で抑えるから、*“限界突破”*で魔族を一点突破しなさい!」
「そ、それじゃあ雫達が!」

「つべこべ言わずに早くしなさい！」

そんな中、零達四人は一足先にギルベルト達へ飛び出し――

「天■せよ、■が守■星――鋼の■■に■■を■せ」

――先手必勝とばかりに星辰光切り札を解放した。

「地に満ちる絶望、天に広がる憎悪、滅びの時代は訪れる。されど、決して希望ヒカリは途絶えない」

紡ランゲージがれる起動詠唱。

腕プレスレット輪に埋め込まれた黒星晶鋼アキシオンを通じ、二人を大地母神の祝福が包み込む。

「邪心に染まりし者よ、暗き闇でも見失わぬ輝く灯火を見るがいい。この猛き炎こそ、人間ヒトを繁栄へ導く宝なれば」

込められた想いは希望ヒカリへの、そして前へ前へと進み続ける怪物への羨望。

何年も夢を見続けて、無限に命を落とし続ける姿に心を痛め、それでも何度勝利失敗して

も諦めないあの強い心に憧れた。

「甦れ、渾沌の化身よ。汝が奈落を飛び立つ時、新たな神話は紡がれる」

「生まれよ泥の姫、大地の化身よ。たとえ災厄を解き放とうとも、不滅の箱ほむろを腕かいなに抱え希望ヒカリを明日へ繋ぐのだ」

だからこそ、怪物かかれの隣に立ち、支え、そして怪物かかれが創ろうとする新世界の姿を見てみたいと願った。

それはきつと、いや必ず、誰もが救われる世界なのだから。

「いつの日か世界が笑顔で満たさると信じて。さあ人々よ、絶望なみだを拭い立ち上げれ」

「約束された想いを胸に、星辰ほしを導く人と成れ」

「超新星——世L a s t E i p i sを覆う災厄の果て、一縷P aの希望nを与えておくれ “ ツ！ ”

神速の斬閃がギルベルトの眼下より襲い掛かる。それを身を振って躲し、次いで振られる鞘を大剣で難なく逸らす。さらに雫の影から杖が突き出されるが、大きく飛び退いた。

「ツ！」

剣閃が見えた上段に曲刀を構え——悪寒を感じた雫は横へステップしながら、下段の攻撃に備えるように曲刀を構え直す。そして腕に伝わる衝撃と僅かに削られる肩部。

血が噴き出すと同時に生じた痛み顔に顔を顰めた。

「雫ちゃん！」

香織が雫の傷を回復し、使用できる数少ない攻撃魔法「光穿矢」を飛ばしつつ、胴を薙ぐように杖を振るう。ギルベルトは最低限の動きで「光穿矢」を避けつつ、香織の杖を大剣で受け止める。

そしてその全てがギルベルトの読み通り。

「シッ！」

「雫がそうするなら」

「縛煌鎖！」

「次はそうくる」

唐竹割のごとく襲い掛かる剣閃も、動きを止めんと四方より飛来する光の鎖も、そうしてくるといふギルベルトの先読みは完璧だった。

(ツ、強い)

攻撃の手を緩めず、雫は内心で舌を打った。

あくまで表面上だが、ギルベルト・ハーヴェスという男のことは知っている。

ユキ悠姫の戦友、あらゆる方面に才能を持つ秀才、黄道十二星座部隊部長、光の奴隸亡者。そ

んな男が高々数手で測れる程度の相手である訳がない。

だが、純粋な戦闘力という点なら自分達も弱いわけではない筈だ。勿論、たった数ヶ月の努力で越えられるなど微塵も思っていない。それでも、戦い位にはなるはず、なのに——

（頂さきが見えないツ）

——なんだこの壁は。攻撃が全く当たらない。それどころか黒外套に掠らせることすら出来ない。

“縮地”を使い跳び回る雫は、既に音速の領域に足を踏み入れている。それでも、審判者は笑みを崩さずその瞳は雫を捉えて逃がさない。

「——ッ！」

ギルベルトの視界から外れた隙を狙い香織が杖を突き出す。完全な死角からの一撃、しかし審判者の慧眼は一挙手一投足残らず読み切り、杖を大剣で受け流しながら香織の頬に裏拳がめり込んだ。

「香織ッ！」

たたらを踏んで倒れる香織を見て、雫が過去最高速度で斬りかかる。ギルベルトの首へ吸い込まれた一閃は——

「——ッガ！」

——鳩尾を抉るような蹴撃によって中断される。肺胞の空気を全て吐き出し飛び掛

けた意識を歯を食いしばりながら繋ぎ止め、雫は香織を掴んで後バックステップ跳で審判者から遠ざかる。

「素晴らしい。今ので終わると思っていたのだが」

「…敗けられない理由が…あるんです」

「ああ、それで結構。やはり正義ヒカリとはそうでなくては」

光おの亡者前と一緒にするな、と内心で吐き捨てる。香織も復活し二人で息を整えるが余裕は全くない。

この少しの攻防ではつきりした。雫と香織では、ギルベルト・ハーヴェスには勝てない。いや、この場の全員でも勝利に届くかのかは怪しいだろう。

それでも、雫が言った通り、敗けられない理由があるのだから。

絶望的な戦力差、それを理解しても失われない瞳の輝きに、ギルベルトは二人の評価を上昇させる。

が、その決断に水を差すようで悪いがと、空いた手を差し出しながら微笑を浮かべて口を開いた。

「その勝利へ邁進する強き心を、力を、どうか私に貸してはくれないだろうか」

「……それは私達に、仲間になれ、ということですか？」

「少々違う。私が求めているのは、同じ未来を目指す同志なのだ。気付いているのだろ

う？ このトータスは、あまりに歪だと」

「……確かに、それは同意します」

宗教観による迫害と戦争。人間族、亜人族、魔人族の関係は分かり易く言えばその程度で、それ自体は地球の歴史にも存在している。価値観の違い、という点ならありふれたものだ。

しかし、いや待て。三種族とも、神が創り上げたのだろうか？ それなのに人間族のみ肩入れし、挙句異世界から強力な加護を与えてまで召喚する？

それではあまりにも俗人的すぎる。自分で創造して、気に入らないから滅ぼしてもらうなど、人を玩具か何かと勘違いしているのではないか。

「道や手段は違えど、怪物も邪悪を討つべく戦っている。だからその一助を、どうかしてくれないか。君達ならばそれが出来ると信じているのだから」

「それ、は……」

ギルベルトの口から出た異名は二人が慕う男のもの。つまり、あの日以降にギルベルトが会っているという証明でもある。だからだろうか、絶体絶命の状況も後押しして二人の意志は揺れ動いた。

「どうやら、あちらも終わったようだ」

ギルベルトに反応して、二人はギルベルトの視線の先を追った。

そこには、馬頭の魔物に首根つこを掴まれて吊るされた光輝。腹から血を流して倒れるメルド団長。それを絶望的な目で見る生徒達。

そして、壁に寄りかかる形で倒れているシエリアとアヤメの姿。止めを刺すつもりはないのか、二体の魔星は二人の前で立ったまま動かない。

「これで決着、だが…あと少しか」

なにやら意味深な呟き。なにがあと少しなのか謎に包まれているが、そこに何故か淡い希望を感じ――

「…………るな」

――光輝の呟きが全員の耳に響いた。それは光輝の敗北を受けて、降伏を受け入れようとした者達の耳にも確かに届き、降伏すると発しようとした檜山は言い知れぬ圧力に口を噤んだ。

魔人族は死にぞこないが何かを言っていると光輝を見たが、その両目は白銀に輝く眼光に睨まれて息を呑んだ。満身創痍の光輝から底知れ無いプレッシャーを感じ、後退ると同時に、警報を鳴らす本能に従って魔物に指示を出した。

「アハトド！ 殺れ！」

「ルウオオオ!!」

馬頭の魔物改め、アハトドが咆哮を上げながら両腕で光輝を圧殺しようと力を込め

た。すると、光輝を光が包み込み、竜巻のような魔力の奔流が巻き上がる。そして、光輝がアハトドの右手に対し同じように右の拳を振りつけると、簡単にアハトドの右手を粉碎した。

悲鳴と共に拘束していた光輝を落としたアハトドは、今度は光輝の負傷を感じさせない回し蹴りを喰らい、後方の壁へ凄まじい勢いで吹き飛ばされた。

強大な敵。全力の末の敗北。仲間の危機。

ここに、勇者の起爆剤が揃ったのだ。

「よくもメルドさんをおー!!」

力の正体は「限界突破」の派生技能「十覇潰」。『限界突破』が一定時間ステータスを三倍に引き上げる能力なら、『覇潰』は五倍に引き上げるもの。当然、疲弊している今では効果は三十秒程、更にその後の副作用も甚大だ。

しかし、光輝はそんなことを歯牙にもかけず、メルドの仇を討たんと復讐の念だけを魔族にぶつけている。魔族も土壇場の覚醒に焦り、周囲の魔物を光輝にけしかけるが聖剣の一振りで薙ぎ払われ、砂塵を操り盾にするも聖剣の前には効果が無く、あっさり盾ごと魔族は切り裂かれた。

「まいった、ね…あの状況で逆転なんて…まるで三文芝居だよ」

切り裂かれた衝撃で血飛沫を撒き散らしながら背後の壁に激突した魔族はズルズ

ルと崩れ落ち、聖剣を構えながら歩み寄る光輝の前にそう呟いた。

そして、懐からロケットペンダントを取り出し、ギョツと握りながら目を瞑り……

「ごめん……先に逝く……愛してるよ、ミハイル……」

瞬間、聖剣を振り下ろした光輝の手が止まった。魔族は覚悟していた死が訪れないことに訝し気に顔を上げ、頭上数ミリで停止した聖剣と、その政権を握る光輝の恐怖と躊躇いが宿った瞳を見た。それにより、光輝が聖剣を止めた理由を悟って、光輝を侮蔑の眼差しで睨みつけた。

「……呆れたね……まさか、今になってようやく気がついたのかい？　“人”を殺そうとしていたことに」

「ッ!？」

「まさか、あたし達を“人”とすら認めていなかったとは……随分と傲慢なことだね」

「ち、ちが……俺は、知らなくて……」

「ハッ、〃知ろうとしなかった〃の間違いだろ？」

「お、俺は……」

「ほら？　どうした？　所詮は戦いですらなく唯の狩りなのだろ？　目の前に死に体の

一匹がいるぞ？　さつさと狩ったらどうだい？　おまえが今までそうしてきたように

……」

「……は、話し合おう……は、話せばきつと……」

この瞬間、*「勇者」* 天之河光輝の戦意は完全に失われた。光輝の中で魔人族という魔物は人へと昇華したのだから。人殺しは罪、だからどんな理由があつてもしてはならないこと。だから、決断を誤った。

「アハトド！ 剣士の女と治癒師の女を狙え！ 全隊、攻撃せよ！」

聖剣の傷と衝撃から回復した魔人族の命令で、ギルベルトの下で膝をつく雫と香織へ魔物が迫る。人間族であるギルベルトの手を借りていることには不本意ではあるが、その飛びぬけた優秀さ自体は認められる。そのギルベルトが直々に相手しているのだ。つまり、この*「勇者」* 以上に厄介な相手であるということは明白だ。

「な、どうして！」

「自覚のない坊ちゃんだね……私達は*「戦争」* をしてるんだよ！ 未熟な精神に巨大な力、あなたは危険過ぎる！ 何が何でもここで死んでもらう！ ほら、お仲間を助けに行かないと、全滅するよ！」

光輝は蒼褪めて二人の元へ向かおうとするが、突然膝から力が抜け前のめりに倒れ込む。*「霸漬」* の制限時間が訪れたのだ。どれだけ踏ん張っても、聖剣を杖のようにして立ち上がるのが精一杯。光輝は絶望で顔を染め、二人に向けて叫んだ。

「香織ッ！ 雫ッ！」

その二人は互いに支え合いながら立ち上がり、迫る魔物達を一見した後に覚悟を決めた表情でギルベルトを睨みつけた。

「さて、どうかな？　時間はもうないが」

このままではアハトドを始めとした魔物達に殺されるぞと、暗に仄めかす。しかし二人の返答は決まっている。

「お断りします」

差し出した手を払いのけられたギルベルトだがそこに驚きはなく、二人がそうするだろうと分かっていたように不敵な微笑を浮かべていた。

「理由を聞いても？」

尋ねるギルベルトに、二人は先の弱々しい心を振り払い強い意志を視線に宿して睨みつける。

理由など分かっているだろうと。確かに、その手を取れば歪が正された、正しき新世界はやつてくる。だが、自分で言ったではないか。彼とは道と手段が違うと。

光の奴隷と道程が異なっているならば、目指す結果が異なっているのも当然。ならば、取るべき手がどちらなのかも当然だ。

「私達は、私達の怪物を信じているからです！」

叫ぶと同時に、香織が上位防御魔法「天絶」をギルベルトに対して多重展開。壁として自分達とギルベルトを隔離しつつ香織が限界寸前の加速でアヤメとシェリアを救助、雫が「縮地」を併用しつつ魔人族へと斬りかかる。

仕向けた魔物の全てを置き去りにして迫った雫に、魔人族は目を見開いて驚いた。瞬きをするような一瞬で訪れるであろう死を幻視した。

「し、雫……やめるんだッ！」

そこに、渾身の力を振り絞り魔人族を背に両手を広げて光輝が立ちはだかった。その背に対して感じるのは、やはり呆れと侮蔑。そんな魔人族の視線に一切気が付くこともなく、光輝はキリつとした表情で雫を見る。

「ッ！」

しかし、それで雫が止まることなどはない。呆れも侮蔑も既に湧かず、あるのは邪魔という一点のみ。ゆえに、雫は容赦なく光輝の横腹に蹴りを入れて退かし、そのまま魔人族に唐竹割を叩き込む。

しかし、勇者という壁が表れて生まれた隙を活用しないわけがなく、魔人族は魔物という盾を使つて後ろに跳んだ。その盾は有効に働き、雫の唐竹割は魔物を両断するも魔人族には届かない。

(ムフ)

瞬間、磁界操作という星辰ほしを使つて唐竹割によつて生じた慣性を無理矢理逆転させ、刀身を返しつつ魔人族へと切り上げた。

それは所謂「燕返し」と言われる剣術の再現で、磁界操作も用いたことによる人体構造を無視した技は、雫の両腕に捻じ切らなばかりの激痛が走つた。

しかし奇襲としては一級品で、事実魔人族は想定外の反撃に動けない。魔物は遠く、光輝は後ろで倒れ、雫を遮るものは何一つ存在しない。今度こそ、雫は両手を魔人族の血で染め上げ――

「すまないが、彼女を殺される訳にはいかないのだよ」

――雫の鳩尾で炸裂する聖印ステイグマ。戦闘開始前から輝照させていた星辰光アステリズムが、この時初めて解放された。

血反吐を吐き体をくの字に折り曲げて地面に崩れた雫に対して、容赦なくギルベルトの追撃ステイクマが炸裂する。

「ああ、悪いがそこもだ」

「雫ちゃんッ！」

「雫！」

たとえ「天絶」に遮られようとも関係なく、ギルベルトが指を鳴らすと同時に雫の足元が弾け飛ぶ。香織と光輝が叫ぶが、香織はアヤメとシエリアを魔星から護るために動けず、光輝は「霸潰」の限界時間を迎え疲労も加わり数メートルすら動けない。

「は、はははッ！ 止めを差しな、アハトド！」

「ルウオオオ!!」

アハトドの豪腕が勝利の咆哮と共に振り上げられる。

雫はその鉄槌を霞む両目で眺めていた。親友香織の声も聞こえない。代わりに、走馬頭のよう^ににこれまでの思い出が脳裏に過る。

香織達に出会うよりも前の幼い頃の悠姫をまず思い出した。それから悠姫がいなくなり、香織達と出会い、小学、中学、そして高校に上がって、トータスに召喚されて。夢が現実になって、想い人に再会して。あの、月下の一夜。

だから、あの日の言葉が掠れて漏れた。

それは曰く、魔法の言葉。女の子が唱えれば、どんな男でも無敵の英雄ヒーローになれる最強の呪文。

「助、けてッ」

「ああ、助けるさ。その涙を拭うために、そして笑顔を与えるために」

瞬間、アハトドの頭上の天井が轟音と共に崩落し、同時に溢れ出た極光がアハトドを欠片残さず消し飛ばした。

「これまでよく頑張った。雫、香織。もう大丈夫だ」

「…あ、ああ」

「…う、そ」

一人を除いて呆然とする中、天井から降り立ったその男の背と言葉を聞き、雫と香織の全身に電撃が走った。

最後に聞いた時とは違う声。だが知っている。何年も見てきたあの夢の、あの憧れの、あの想い人の声だと。

たなびく外套。片手に握られた一刃。黒い髪に黒い瞳。そして、情熱を宿した眼光。圧倒的な存在感を放ちながら、その男は現れた。

「そして、これも言わせてもらおう——」

辛いとき、苦しいとき、悲しいときに。どこからともなく現れて助けてくれる無敵のヒーロー。

魔法の言葉は唱えられた。ゆえに、怪物はやつてきた。

「——そこまでだ、魔人族。君の絶望は、此処で終わる」

「ユキさんツ!!」

第五十八話 影の薄い男の奮闘

悠姫達が遠藤浩介と遭遇した時まで遡る。

悠姫とハジメが遠藤の名前を呟くと、遠藤は辺りをキョロキョロと見回しながら声を張り上げて叫び始めた。

「南雲！ ユキさん！ いるのか！ 二人なのか！ 何処なんだ！ 南雲！ ユキさん！ 生きてんなら出て——」

「——喧しう！」

叫ぶ遠藤の後頭部に、悠姫がチョップを入れて中断させる。建物内の大勢が耳を塞いでいることから、遠藤の声が相当に煩かったことが分かるだろう。特に聴力が優れているシアはウサ耳を手で抑えて蹲っていた。

何やら必死な様子と所々がボロボロな遠藤の戦闘装束、そしてギルドのピリついていた空気から大体察した悠姫がそれなりの力でチョップを入れると、遠藤は突然の痛みに驚き、後頭部を擦りながら振り向いた。

「ユ、ユキさん?! ユキさん、なのか? あれ、こんなに若かったか?」

服装や面影がユキであると伝えてくるのに、年上の大人であるという記憶が目の前

男とユキが同一人物であるという情報を乱してくる。

とはいえ、死んで蘇ったなど言えるわけもなく、ブルツクでも同じことがあったなど思いながらユキ記憶悠姫自分であると納得させる。

すると今度はハジメの安否を確かめようとしたので、自分の後ろの白髪眼帯義手男（幼女片手抱っこ中）がハジメであると伝えたと、悠姫で多少気を取り戻したのか、遠藤はチョップ以上に驚きながらハジメかどうかを確認した。

「な、南雲なのか？」

「おう。死に物狂いで生き残ってやったぜ、影の薄さランキング世界一位」

「誰がコンビニの自動ドアすら反応してくれない影が薄いどころか存在自体が薄くて何時か消えそうな男だ！ 自動ドアくらい三回に一回はちゃんと開くわ！」

「いやそこまで言つてねえよ……てか三回に二回は開かねえのか……」

「電子機器すら騙せるのか。人狼リユカオンだったら羨ましが……るかは微妙か……」

新西暦にいたならば、少なくとも自分の部下にするか、裁剣ライブラ天秤にスカウトされていただろうと悠姫は思っていた。

ツツコミが入ったことで本当に冷静になれたのか、遠藤はハジメと悠姫の顔を交互に見て、生きていて良かったと息を吐くと、再び必死な形相になって二人に縋りつく様に懇願した。

「ふ、二人は『金』ランク冒険者で、迷宮深層からでも生き残れる位強いってことだよな?!」
「なら、一緒に迷宮に来てくれ! 皆を助けてくれッ!」

「待て待て待て。大体察したから、落ち着けて」

「落ち着いてられるかよッ! 今でも、皆が死んじまうかもしれないだよ!」

遠藤が騒ぎ始め、周囲の冒険者たちから再び不穏な雰囲気が始まった。すると、しわがれた声で静止がかかる。

「話しは奥でしてくれ。それに、その『金』達は俺の客らしいしな」

声の主は、六十歳過ぎくらいのガタイのいい左目に大きな傷が入った迫力のある男だった。全身から滲み出る覇気は、この男が歴戦の冒険者であったことを教えてくる。おそらく、この男がホルアド支部の支部長なのだろう。

悠姫達はギルドの奥へ歩いていく男の背に着いていった。

「魔族、ねえ…」

冒険者ギルドホルアド支部の応接室にハジメの眩きが響く。

魔族による襲撃。騎士団の壊滅。強力な魔物の群れ、そして身勝手な暴走による勇者の敗北。

遠藤から聞いたその内容は、殆どが悠姫が予想した通りではあった。しかし、アヤマとシエリアの二人もいて易々と敗けるとも思えない。ゆえに審判者がいることも予想はしていたのだが。

「氷の魔法を使う蒼い女に、赤い鬼のような魔物……」

遠藤の口から語られた二体の化物。人造惑星である氷河姫と殺塵鬼を再現した魔物に間違いはないだろう。

ダインスレイフから魔人族側が手にした神代魔法は「変性魔法」であることは聞いている。それで強化された魔物によって人間族は戦争に敗北すると予想し、そして勇者の敗北という形で先駆けて、今回現実になった。

だが、人造惑星プラネテスを造ることまでは予想していなかった。というより、造らないだろうと予想していたのだ。なぜなら、魔物と「変性魔法」で戦力としては事足りるから。

新西暦で猛威を振るった本物達ならともかく、態々魔物を人造惑星プラネテスにするなど無駄が多すぎる。

しかし、その予想の裏をかき審判者ラダマンテイスは人造惑星を再現して投入していた。

「さて、ユウキ、ナグモ。イルワからの手紙でお前達の事は大体分かっている。随分と大暴れしたようだな？」

「大体は成り行きか正当防衛だろ」

「無償の施しという訳でもない。しつかりと得はある」

遠藤の話しが途切れたのを見計らい、ホルアド支部支部長ロア・バワビスが悠姫達が持ってきた手紙を片手に口を開いた。

「手紙には、お前達の『金』ランクへの昇格に対する賛同要請と、できる限り便宜を図ってやって欲しいと書いてあった。一応、事の概要くらいは俺も報告を受けているが…… たった数人で六万近い魔物の殲滅、半日でフューレンに巢食う裏組織の壊滅……にわかには信じられんことばかりだが、イルワの奴が適当なことをわざわざ手紙まで寄越して伝えるとは思えん……お前達が実は魔王やその使いだと言われても、俺は不思議に思わんぞ……いや、天職で考えればユウキは『神の子』なのかもな？」

「俺は人と人の間に生まれた、人の子だ。神の子なんかじゃない」

正直、高位次元や原初渾沌^{テオゴニア}、死に戻り等が絡まって、人と人の間に生まれた存在かどうかは怪しいところではある。しかし、『神』という超常存在が家系に存在しないことは確かはずだ。

「ふつ、まあいいさ。あれ等の報告が真実であるという確信は持てた。では、冒険者ギルドホルアド支部長からの指名依頼を受けて欲しい」

「……勇者達の救出だな？」

悠姫が言った、救出という単語に反応して、項垂れていた遠藤がハツと我を取り戻し、

身を乗り出して悠姫に捲し立てる。

「そ、そうだ！ 皆を助けてくれ！ そんなに強いなら、絶対に皆を助けられる！」

目を輝かせる遠藤だが、悠姫を含めハジメ達の反応は芳しくない。

そもそもとして、遠藤の考えは間違っていると云つていい。なぜなら、遠藤がそんなに強いと言つたのは、「金」ランク冒険者ということが分かったから。しかし現に、「光姫」シエリアと「幻姫」アヤメという二人の「金」ランクが同行していて敗走しているのだ。

確かに、悠姫とハジメなら戦力としては十分だろうが、それを知らない遠藤の判断材料としては不十分と言える。つまり、遠藤は「皆の代わりに死んでくれ」と言っているに等しい。それなら他冒険者含めて、首を縦に振るはずもないだろう。

「お、おい…どうしたんだよ！ 今、こうしている間にもアイツ等は死にかけてるかもしれないんだぞ！ 仲間だろ?! 助けてくれよ?!」

仲間という一言に、ハジメが眉を吊り上げながら反応して遠藤を睨みつける。睨まれた遠藤は、ハジメの瞳から感じる冷たさに思わず一步後退った。

「…仲間？ 何言つてんだ。お前を含めて勇者達が仲間な訳ねえだろ」

「なッ！ 何言つてんだよッ?!」

「はあ…」

ハジメの言葉に反論する遠藤に、悠姫が溜息を吐きながら握りしめた拳を突き出す。その溜息で遠藤やロアの視線が集中し、悠姫は折り曲げた指を伸ばしながら口を開く。「二つ、俺とハジメは仲間だという男に殺されかけた。二つ、その悪党の犯行は幾人もが目撃し、決して言い逃れできない状況だったにも関わらず、一人の勇者によつて無罪となった」

一つ、二つと罪状を上げる度に、その当事者だった遠藤とそれを初めて聞くロアが顔を引きつらせる。あえて状況を明文化することで、より二人に起きた出来事の深刻さが浮き彫りになる。

「三つ、『無能』と『未知』の死は既に終わった過去として、捨て置かれた。四つ、『無罪の悪党』と『勇者』は仲間として迷宮にいる……さて遠藤」

ビクリと肩を震わせて驚いた遠藤が、恐る恐る悠姫の顔をみる。呆れたというような表情をしつつも冷めた瞳に睨まれ、さらに遠藤は肩を震わせて縮こまる。

「これは一般論だと俺は思うんだが、悪意で殺そうとしてきた相手は仲間ではない思うし、そいつを仲間という奴等もまた仲間ではないと思うんだが、違うのか？」

「あ、いや……その通りだと、思います」

先のハジメ以上の冷めた瞳に、遠藤は思わず敬語で答えてしまう程に震えている。しかし、遠藤としても引き下がる訳にもいかないのだ。

仲間の命を救うためならば土下座でもなんでもしよう、遠藤が膝を折り始めたところで、だがと続けて悠姫が口を開く。

「俺が提示する条件を呑めば、救出依頼を受けてもいい」

「ほ、本当かッ?! 何をすればいい?!」

悠姫の提案に遠藤はテーブルから乗り出して反応する。ロアが何か言いたげな目線をハジメに送るものの、ハジメは静かにとジエスチャーをしてロアを制止する。

「簡単だ。俺の部下になれ」

そう言い、悠姫は「宝物庫」から一個の腕輪を出した。それは、「念話」を可能とする念話石と黒星晶鋼アキシオンが埋め込まれたもの。つまり通信機だ。虚空から突然現れた腕輪に遠藤とロアは驚き、その腕輪をマジマジと見つめる。

「同郷のよしみだし依頼でもある、今回は助けよう。だが、依頼が終わり次第、俺達は仲間と共に旅に出る。当然、仲間ではないお前達の同行は認めない」

はつきりと仲間ではないと断言され項垂れる遠藤だが、一筋の光に縋りつく様に顔を上げ、不安そうな顔で悠姫を見る。

「王国や勇者の動向が把握できないのも中々に面倒だ。だから、遠藤浩介。お前が逐次、その情報を教えてくれ。つまりは問者スバイだ」

「…それだけ?」

「それだけだ。ああ、可能ならメルド団長も引き入れてくれ。そして、他の誰にも間者スパイであることを教えない。簡単だろ？」

この条件は、遠藤にとつてそれほど難しいものには見えなかった。なぜなら、何かあつたら教えればいい、それだけなのだから。メルド団長に関しても、遠藤は死んでしまったと思つているようだが、悠姫はそう考えない。

曰く、ギルベルト・ハーヴェスならばメルド・ロンギス騎士団長は必ず生かすのと。
と。

少々納得できないところがあるものの、遠藤はそれでいいなら、と決死の思いで頷いた。この咄嗟の選択が、遠藤浩介の未来を決定づけることになるとは誰も思わなかつただろう。

「よし、契約成立だ」

悠姫は腕輪を遠藤に放り、パンと手を打つて立ち上がり、ハジメ達も続く様に立ち上がった。放られた腕輪を受け取つた遠藤は、悠姫が手首を指差していることに気が付いて、腕輪を嵌めながら恐る恐る言った。

「え、えつと、結局、一緒に行つてくれるんだよな？」

「ああ、ロア支部長。一応、対外的には依頼という事におきたいんだが……」

「上の連中に無条件で助けられると思われたくないからだな？」

「当然だ。それともう一つ。帰ってくるまでミュウのために部屋貸しといてくれ」
「ああ、それくらい構わねえよ」

そして悠姫達は応接室を出て、テイオをミュウの子守兼護衛として残し、オルクス大迷宮へと歩を進めた。

第五十九話 前世の因縁

崩落した天井から降り立った悠姫に視線が集中する。

その殆どが困惑であり、アハトドを一瞬にして消滅させたという事実から金縛りにあったかのように動くことができない。そんな中、悠姫はへたり込む雫の頭をポンポンと撫でている。

「え、えつと…ユキさん…」

「こんなにボロボロになるまでよく頑張ったよ。香織、雫に回復魔法をかけてくれ」

「は、はい！ あ、でも…」

声を掛けられて反応した香織が雫の回復に向かおうとするが、香織の後ろにはアヤマとシエリアが倒れている。前には二体の魔星も立ちほだかり、二人を置いて雫の元に向かうことはできない。

しかし次の瞬間、天井の穴から紅雷を纏った二発の弾丸が魔星を襲う。咄嗟に回避行動をとったことで、二体はそれぞれ片腕を失うものの大きく跳び退いて、二発三発と続いた追撃を回避する。

そして、穴から飛び出してきたハジメと、その隣にふわりとユエが、そしてユエの反対側にシアが降り立った。

「いきなりで悪いが、ハジメはあれをそのまま警戒してくれ」

「了解だ」

ハジメはドンナー・シユラークの銃口を魔星に向けたまま返事をする。その名を聞くと雫達は驚いてハジメを見るが、白髪眼帯義手と様変わりした姿に困惑の声を上げる。

「え、うそ…ハジメ君なの？」

「おう、まあ驚くのも無理はねえけどな。正真正銘、無能の錬成師、南雲ハジメだぜ」

それは確かにクラスメイトの南雲ハジメの声であり、悠姫同様に生きていたと涙ぐむと、ハツと我に返った香織が雫に駆け寄って回復魔法を施した。

「ゆ、悠姫さんッ！ ちょっと！ 余波で吹き飛ばされたんですが?! って言うかなんすか今の光?! いきなり床をぶち抜くとか何してんすか?!」

「物質を構成する最小の核が壊れる時に放出される皆殺しの光。つまり核分裂だが？」

「だが？ じゃないんすよッ?! ほんと、何してんすか?!」

そして最後に全身黒装束の少年、遠藤浩介が降り立った。当たり前前だろ？ という風になざらりと言った悠姫に対して、遠藤が騒いでいる。

なお、核分裂反応によく似た性質を持っているだけなので、厳密には違ったりする。

「浩介！」

「重吾！ 健太郎！ 助けを呼んできたぞ！」

その遠藤の言った「助けを呼んだ」という一言に、魔人族や光輝達がハツと我を取り戻した。そして再び悠姫に視線が集中する。

しかし悠姫はそんな周囲の様子に一切構うことはなく、何故か笑顔の元同僚へと視線を固定しながら三人に指示を出す。

「ユエは一塊になつて連中の護衛、シアは向こうで倒れてる騎士甲冑の男の容態を見てください」

「ん…わかった」

「はいですッ！」

「ハジメは魔人族の女性と魔物の相手を頼む」

「氷女と赤鬼はいいのか？」

「俺の部下二人がやる気みたいだ」

ハジメがチラリとアヤメとシエリアの方を見ると、二人は己の発動体を握り尽きぬ闘志を宿した眼光で魔星を睨みつけていた。なるほどと納得するとハジメは両銃を魔人族へ向け、余裕そうに笑いながら口を開く。

「おい、その女魔人族。お前らに勝ち目はねえ、俺等へ投降しろ。」

「……何だつて？」

それは、今まさに魔物に囲まれた人間の発言ではない。たった数人増えただけで、戦力差は相変わらず魔人族側が圧倒的に優勢なのだ。だからこそ、ハジメの言ったことが理解できず、魔人族は思わず聞き返した。しかし、ハジメの余裕が崩れることはなく言いたい間違いではないと理解すると、魔人族は表情を消して一言命令する。

「…殺れ」

この瞬間、女魔人族は致命的な間違いを犯した。天井を崩落させて階下へ降りるというありえない事態、敬愛する上司より賜ったアハトドの消滅などで、明らかに冷静さを欠いていたということが原因で、普段であればもう少し冷静な判断が出来ていた筈だ。しかし、既に賽は投げられた。

そう、人間族と戦争をする者として、致命的な間違いを犯した。

しかし魔人族の幸福を願う者として、女魔人族——カトレアは正しい選択肢を選び取ったのだ。

そしてハジメの標的から外れた二体の魔星は、

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

二人の金ランク冒険者によって、一方的に蹂躪されていた。

それは良く言えば「覚醒」であり、逆に言えば「異常」。少なくとも、先までの敗北が嘘のように思えるほどの何か二人に起きていることは間違いない。

「無謬の空を従えるは、燦爛たる天空神。穢れに満ちた大地を見下し悦に浸る」

「だからこそ、天の醜悪さが目に余る。高貴で奢侈たるその傲慢、さぞや愉しく生き易からう——虫唾が走る」

そして呪怨を宿して紡がれる起動詠唱。原初の女神、闇夜の女王が天王を滅ぼさんちから暴力を振るう。

「血筋も力も運命も、魂の一片残らず腐り果てた哀れな天よ。我を伴い母の閨を侵そうなどと、なんとも度し難き痴愚なのか」

アヤメ・キリガクレ、否、アヤメ・淡・アマツにとつて、前世の生家は何よりも嫌いな場所であり、中でも実姉は特筆して嫌悪していた相手だった。

口を開けば「血筋が」「高貴な」「選ばれた」そればかり。極めつけには、実妹であるアヤメは姉を着飾る宝石などと言う始末。

なんだそれは、ふざけるな。と反発したところで、実姉から自分への扱いが良くなるわけがない。

ゆえに、アヤメは唯の帝国民として軍の門を叩いたのだ。そしてそれから暫くして、改革派によつて生家が肅清され実姉含めて処刑されたのだと聞いた。

「やはり貴様のような愚神には、奈落の底こそ相応しい」

「その罪業（か）の滅却を以つて、我は天を彩る宝石（か）から解放されるのだ」

家族全員皆殺され唯一の生き残りとなつたアヤメだが、そこに哀しみは全く存在しない。寧ろ清々しい位だ。なぜなら、これで忌々しい悪夢を終わつた過去にできるのだから。

それなのに、実姉は恒星（か）の使徒として蘇つた。より悍ましく、より醜く、天王星の名を冠して蘇つた。

「それでも血族の縛鎖から逃れられぬというならば——我は化生へ変わろうぞ」

「輝け、昼光の女神。墜ちろ、天空の氷河姫。鬚（あ）と、砕け散れよ結晶華。其れぞ無間の地獄なり」

ならば粗野で野蛮な暴力で、何度でもその天空を粉碎しよう。アマツではない、一人の（にんげん）アヤメとして生きるために。

「超新星——巡り覆え夜女神、天王が狂する闇の如くッ！」

氷河姫^{ピリオド}の視界から、アヤメの姿が掻き消える。一体どこに消えたのかと、上下左右を見回してもアヤメの姿は見当たらない。

その答えは、正面からやってきた。

「はいです」

アヤメの武器、旋棍^{トフア}が唸りを上げながら氷河姫^{ピリオド}の右頬を打ち抜いた。続く左アッパーカット、さらに崩れて無防備な胴体に右ストレートが直撃し氷河姫^{ピリオド}を玉のように弾き飛ばす。

アヤメは別に氷河姫^{ピリオド}の視界外に移動した訳ではない。氷河姫^{ピリオド}が勝手に見失っただけで、アヤメは真正面から近づいたのだ。

「次です」

再びアヤメの姿が掻き消える。上下左右と見回しても見当たらない。ならば二度目は喰らわれないと、氷河姫^{ピリオド}は正面に氷塊を弾幕のように放射する。しかし。

「連続してするわけがないでしょう」

側頭部に衝撃が轟いた。氷河姫^{ピリオド}は踏鞴^{たたら}を踏みながら耐え抜いたが、その威力は並の魔物なら最低でも頭部が歪むほど。

それは氷河姫^{ピリオド}の防御力が高いことの証拠ではあるが、だからと言って決して無視して

良い事柄ではない。

一方的に勝利を取めたはずの相手に、しかも一刻も経たない内に逆転されている。その事実が、氷河姫（ペリオド）の神経を逆撫でする。

「ガアアアアッ！」

視界の端にアヤメを捉えた瞬間、顔を憤怒に歪ませ見た目に合わない魔物としての咆哮と共に、全方位に極寒の氷結世界（キリングフィールド）を展開する。

それは本物の氷河姫（ペリオド）には遠く及ばないものの、足を踏み入れたもの全てに停滞を促すこの空間は、決して獲物を逃がさぬという殺意に満ちている。

「これだから拡散型はッ！」

そして例外なく、アヤメは氷結世界（キリングフィールド）の餌食となっていた。

視覚情報認識能力。それがアヤメ・キリガクレ（アステリズム）の星辰光の正体であり、その全てと言える。

相手の視界に映った「アヤメ・キリガクレ」という情報体を変換することで、「アヤメ・キリガクレが其処にいる」という認識を妨害する。

誰かに変装することも、今のように透明になることも可能。しかし、姿が見えなくなつても消えたわけではない。

この氷結世界のような範囲攻撃をされてしまえば、アヤメを視界に入れずとも場所な

ど直ぐに特定されてしまう。

ゆえに。

「バトンタッチよ。殺塵鬼カーネイジの時間稼ぎはよろしく、幻姫ニユクス」

「了解しました。氷河姫ビリオドは任せます、光姫アポロン」

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

躊躇なく相手へと選手交代バトンタッチした。

「予言を此処に、私は必ず勝利を刻む。たとえ天カミの山より追放されようとも」

そして、シエリアは声高々に起動詠唱ランゲージを謳い上げる。

「ラピテスの子孫シよ、半人半馬の賢者に学びなさい。さすれば死者をも蘇らせる医神となるでしょう」

「吟遊詩人よ、私の豎琴を奏でながら黄泉を降りなさい。悲哀の音色は冥府の全てを魅了するでしょう」

一対の曲剣に光輝が宿る。それは邪悪を滅ぼす死の光などではない、灼熱の太陽の輝き。

前世かつて、シエリアは東部の貧民窟スラムで暮らしていた。貧民窟は弱肉強食が基本であり、シエリアのいた貧民窟スラムも例外ではない。

物心がつく頃には既に孤独ひとり。自分をこの新西暦せかいに産み落とした両親はどこにもいな

い。貧民窟スラムから抜け出せたのか、捕まったのか、それともどこかで死んだのか。

だが確かなことは一つ。当時のシエリアは最底辺の弱者であり、全てを奪われ、犯される、最底辺スラムの強者の道具にんぎょうでしかなかったということだった。

「これぞ私の示す予言の形、世界に輝く星々の海。あの日に憧れた神統記テオゴニアの具象なり」
その数年後、人攫マンハントいに捕まって売られそうになったあの日に、シエリアは怪物に助けられ、地球を照らす陽光の如き暖かさを、自由ヒカリを知った。

そして、自由ヒカリを教えてくれたあの背中に憧れた。その背の正体が独善ドクゼン的なものだったとしても、自由ヒカリという太陽の輝きに偽りはないのだから。

「そして始まる巨人大戦、私の強弓は遍く敵を撃ち貫く。しかし、この身は十二の二柱、巨人を討つには一手足りぬ」

「この森羅を照らす太陽使命が、勝利の軌跡の妨げというならば——私は化生へなりましよう」

「そして巨人を射抜き、私は勝利を刻むのだ。それで天カミの山より追放されようとも」
ゆえに、シエリア・ハムは剣を手取る。理ルリに縛られたまでは、勝利を掴めないを知ったから。

たとえ世界が変わろうとも、自由ヒカリを掲げた太陽が陰ることはない。そして、遍く衆生へ自由ヒカリを照らそう。

「超新星——巨人を射抜け、太陽よ。勝利をその手に掴むため！」

理想を、羨望を、憧憬を。いざ形にせんが為に、雄々しくシエリアは宣言する。
「勝つのは私達よ！」

第六十話 眞実の一端

神なる巨山の最奥。外界の光や音の一切から遮断された空間に、星々の母たる彼女は封印されていた。

肢体したいを壁に埋め込まれ、まるでオブジェのように吊らされながら美しい裸体を晒している。

そして、ゆっくりと双眸が開かれた。

「……あと少し……」

ポツリと、小さく声が零れる。

彼女が見ていたのは、瞳の裏側ではなく愛する男の軌跡。星辰ほしの母、力を与えた者としての特権を駆使し、八重樫雫の視覚から怪物の雄姿を覗き見ていたのだ。

勇者の敗北、審判者ラダメンテイスとの対峙、そして魔族との邂逅。それはまさしく、物語の分岐点ターニングポイントに他ならない。

ゆえに、彼女の願いが成就する日は近い。

「……ああ、悠姫、悠姫、悠姫」

恍惚としながら狂ったように男の名を口にす。宿る心は愛であり、恋であり、そして罪。

彼をどれほど愛しているかなどと言うまでもなく、さらにあの輝く雄姿に再び恋に落ちる。

だがそれ以上に、彼に対して贖罪しなければならぬのだ。

なぜなら、彼が振るう力こそ彼女の取り返せない罪の証であり、果たさなければならぬ使命の象徴なのだから。

「…私が必ず、
 ■■■■■から。だから待つているわ、気高き私達の子……」
お父様

ありふれない怪物達
 勇者救出依頼によつて、戦端は開かれた。

錬成師VS魔人族+魔物、ニユクス 幻姫+アポロン 光姫VS ピリオド 氷河姫+カーネイジ 殺塵鬼。

そして、テュボエウス 怪物VS ラダメンテイス 審判者。

「——シッ！」

「——ハア！」

一切の手心を加えることもなく、斬り殺さんとする斬風が互いに向けて放たれる。し

かし二人とも当然のように外套の端に掠らせることもなく避け、そして再び斬り結ぶ。戦端が開いてから約三分が経過した今現在、二人が激突した回数には既に四桁を超えており、さらに激しさを増していく戦鬪に外野は全く目が離せない。

「……なんなんだよ……あれ……」

一人が恐る恐る口を開いた。自分達のこの数ヶ月の訓練や戦鬪が、園児の遊戯のようだと錯覚してしまうほどだ。しかし次に口から洩れたのは別の一言。

「……化物じゃねえか……」

その一言が、数名の生徒に染み渡った。助けられた、という事実など既に忘れていいる。そんな恥知らずな感想を抱いた原因は単に、人对人の構図だったからだろう。これが人对黒竜のような魔性退治であったならば、悠姫は喝采を浴びていたのかもしれない。勿論、今その感想を抱いたのは極数名で、殆どは助けられたという感謝と何者なのか警戒が入り交じり、他数名が凄まじい戦鬪に魅入っている。

しかし当の悠姫は生徒達の反応など気にする余裕などあるはずもない。審判者の刑戮烙印は、確実に天津悠姫を捉えているのだから。

「それでもツッ！」

オルタレイション
星環境変性

—— M i s s e r a b l e A l c h e m i s t s
雄弁なる伝令神よ。汝、魂の導者たれ。——

磁界操作という伝令神の星辰で、聖印で弾かれた己の獲物を審判者へと飛ばし、己もまた引き寄せられるように審判者へと殴り掛かる。

しかし、その程度では白夜の審判者は動じない。

太刀に付属させていたもう一つの聖印を多重解放。飛来する太刀を、磁界を引き裂くほどの衝撃で遠方へ弾き飛ばす。

次いで悠姫が踏もうとしている地面を起爆させよう——悠姫の行動に驚いて動きを止めた。

悠姫は取り出したもう一振りの太刀で己の右足を切断、磁気反発で射出したのだ。すなわち、ロケットパンチならぬ「ミサイルキック」である。

さすがのギルベルトもこれには驚いた。常識とか常識外とかそういう話ではない。一体どこに、生身の足をミサイルにする馬鹿がいるというのか。

しかし動きを止めたのも一瞬。冷静に足を切り払い、渾身の力で振り下ろされた悠姫の太刀を受け止めた。

「文字通り、自身の身体を武器にする。なるほど、貴官のような不死者が執るには効率的な戦術だ。身をもって体験させてもらったよ」

「ありがたい。お前の驚いた顔が見ただけで収穫は十分だ」

もつとも、この男には二度と通用しない戦術だ。

既に生えた足で地面を踏みしめ金属音を鳴らして斬り合いながら、しかし妙だと悠姫は一つの疑問をギルベルトにぶつけた。

「滅亡剣もそうだったか、お前等少しおかしいぞ？」

「ほう？　おかしい、とは？」

「強くなりすぎなんだよ。再強化措置を受けていたにしても限度がある。戦闘用人造惑星より性能が高い？　馬鹿を言え。たとえ戦闘向き星辰奏者でも、上位種の人惑星に性能で敵う訳がないだろうが」

確かに少数だが例外はある。戦い方によっては勝てるだろうし、誰かの援護があったり、隙を突けば一発逆転だって当たり前に起きるだろう。

しかし、この審判者と滅亡剣は話が違う。援護や隙といった要素に関係なく、真正面から魔王と戦い、順当に勝利するだけの性能を備えている。

ならばそれはもう、星辰奏者でも人造惑星でもない別の何かだ。

「…私は貴方だと思っていたのだが…いや、そういうことか」

と、何やらギルベルトが意味深に呟く。そして何かに納得すると、悠姫の足元を起爆、たたらを踏みながらも態勢を崩した悠姫へと脚撃を入れ後方へと離脱した。

悠姫はギルベルトを追撃することなく、その場に止まっている。それは、ギルベルトの「貴方だと思っていた」という一言に引かかかるものがあつたからだ。

つまり、この光の亡者等が超強化された犯人は悠姫だと思われていた、ということだ。冗談じゃないと吐き捨てそうになるが、可能性が0とは言えないのは事実だ。

悠姫達ほど謎に包まれた人間はいないだろう。

悠姫本人が自分のことを理解しきれていないのだから、完全に否定できる材料など当然ないし、逆に新西暦の星辰奏者^{エクスラント}という接点から浮上する方が自然とも見える。

しかし、審判者^{フラグマンデイス}だけは違う。この短時間の会話で、真実へと急接近している。

「やはり貴方は素晴らしい。私のような凡夫には不可能なことを実現できるのだから。ならば私は、貴方が報われる世界を創りたい」

「いらぬいんだよ、そんなものッ！」

悠姫は太刀を構え駆け出し、両者は再び激突する。

シエリア・S・B・ハイリヒ。ハイリヒ王国第一王女でありながら王位継承権を放棄し、冒険者として自ら野に下ったという異端の経歴を持つ“天才”であり“英雄”。

英雄視されるようになったのは数年前、突然魔物が大量発生した時。清水幸利が引き起こしたウル事変程ではないものの、凡そ数千近くの魔物が古都テルスに接近していたことがあった。

原因は依然不明で、対処には少なくとも国家規模の戦力が必要だとも言われていた。しかし、解決したのは三人の冒険者。それが当時黒ランクだった、シエリア、アヤメ、デイルグのパーティ「ケイオス」である。

光姫。一部の者からは光姫アホロンと呼ばれる彼女と、アヤメ、デイルグの異名はその時に付けられたものだ。

灼熱の光輝を纏い一騎当千を現実とする彼女の戦いは、文字通り一際強く輝き、人々の心に強烈な希望を与えたのだ。

加え、王国内での治安維持活動にも尽力している。残虐な悪事を働くものは貴族であろうと容赦なく粛清し、生きるために悪事に身を染めた者には更生するために手を差し伸べる。

老若男女種族身分に分け隔てなく平等に接する人柄が、彼女の「英雄」としての姿を形作ったのだ。

「ガアアアアアッ！」

「無駄よー！」

氷河姫の咆哮と共に再度展開される氷結世界。あらゆる存在へ停滞を与える寒波、しかしシエリアの歩みに淀みは全く無い。寧ろ猛る心のような光熱が氷結世界を塗り替える。

シエリアに向けて射出される氷弾の群すら一振りの光波によつて蒸滅され、シエリアの身を傷つけるには遠く及ばない。

無駄だと悟ったのか、敗けると確信したのか、氷河姫はユエに護られ固まっている生徒達へと片腕砲身を向けた。

当然、ユエの護りがその程度で破れる訳もなくそれこそ無駄な足掻きなのだが、氷河姫が戦っていたのはシエリアであり、それは決定的な隙となる。

「させるわけ、ない！」

一瞬の踏み込みで氷河姫へと接近し、勢いのままに片腕を斬り飛ばす。更に光熱を纏うもう一振りで氷河姫の胴を切り裂いた。

「グギャアアアッ！」

「幻姫！」

顔を憤怒に歪ませながら叫ぶ氷河姫。しかし背後からアヤメに心臓魔石を砕かれ、その命

を無様に散らすこととなった。

「グルルウアアアツ！」

そこに大質量の巨体で突進してくる殺塵鬼^{カーネイジ}。

本家と同じ物質崩壊^{能カ}は有しておらず、筋力強化という分かり易い能力を持つこの殺塵鬼^{カーネイジ}だが、巨体が組み合わさることで唯の突進でも凄まじい破壊力を誇っている。

ゆえに、直撃すればシエリアでも無事では済まないのは明らかだ。

「フツ！」

ならば当たらなければよいだけで、対応法など無数にある。

殺塵鬼^{カーネイジ}の剛足に光の矢が突き刺さる。犯人は当然シエリアだ。

二振りの曲剣の柄尻を合体させ、弦^矢が張られていない弓へと変わった発動体を構えている。そして引き絞り、連射連射と光熱矢の弾幕^矢を形成する。

初撃の足部だけでなく、胴、肩、片腕、鬼面と、殺塵鬼^{カーネイジ}の全身に突き刺さり、突進の勢いが削がれていく。

そして弾幕^矢に押し負け膝から折れる瞬間に、鬼面にアヤメの旋棍^{トシフアイ}が直撃する。たまらず転げた殺塵鬼^{カーネイジ}に、光剣に切り替えたシエリアが追撃する。

「これで終わりよ、殺塵鬼^{カーネイジ}。いえ、殺塵鬼^{カーネイジ}を模した何か。人^人が笑顔で生きていく世界に、人殺し^人が好きな化物は必要ないのよ」

断頭台ギロチンの刃が殺塵鬼カーネイジの首を斬り飛ばす。そして念には念をと、灼熱の光輝が殺塵鬼カーネイジの全細胞を死滅させた。

こうして、一度は完全勝利を手にした惑星を模した二体の化物は、二人の冒険者エスベラントによつて討滅されたのである。

第六十一話 審判者よ、怪物の殲嵐に散るべし

オルクス大迷宮深部にて繰り広げられる最後の戦いは、その場の全員の視線を釘付けにしていた。それには驚愕があり、羨望があり、そして恐怖が入り交じる。

その観客達を一瞥した審判者ラダマンティスは、悠姫との死闘を演じながら周囲へ言い聞かせるように口を開いた。

「この世界に召喚された私は、正直深く失望した。地球とトータス世界が、変わろうとも人間は全く変わらないと」

火花を散らしながら剣戟を交わす。

星辰光手数、不死身特性、性能ステータス。どの線から見ても、戦況は審判者ラダマンティスが圧倒的に不利だ。いくら審判者の慧眼をもつてしても、絶体絶命の一言に尽きるだろう。

それでも知らぬ存ぜぬと、審判者ラダマンティスは言葉を紡ぐ。

「だが同時に、素晴らしいものも見た。不毛の地で飢えに苦しみ、寒さに震える彼女達魔族は、そのような過酷な状況においても希望を捨てずに抗っている」

悠姫もまた応えるように口を開く。

「だから魔族に付いていると?」

それはダインスレイフに聞いた問いかけと似たようなもの。しかし返ってくるであろう応えは想像がつく。

「勿論それも一つの理由ではあるが、極楽浄土に種族の垣根など必要ない」

そう、審判者が目指す極楽浄土にあるのは個人単位の優劣思想。人間族、魔族、亜人族という種族差など一切関係ないのだから。

「そういえば、ダインスレイフが魔族の繁栄を願う本気の男がいると言っていたが」
「そうだ。彼こそ、魔族を導く英雄に他ならないッ！」

それを待っていたと言わんばかりに、審判者は昂りながら剛剣を振るう。そしてラダマンテイス審判者は語り始めた。己の夢、新西暦で実現できなかった偽りなき理想の世界を。

「世界とは嘆かわしい程に正しく生きる者が身を削ることで成立するもの。そして、その正道を往く者はとても少ない。なぜなら、正道を往くよりも悪道を行く方が人間とは楽に生きることができるからだ。正道ほど見合う輝きが返ってこない生き方はない」

「これは、歴史という足跡が示す純然たる事実である。群衆の為に身を削って生きる聖者ほど痩せ細り、死んでいく。逆に、肥え太るのは他者の利得を貪り食う、悪道を往く醜悪な塵屑ばかり」

「しかし、それが今ある世界の真実。ならば私が創り上げよう。正しき者が評価され間違った者が罰を受ける、正道こそ真に報われる理想郷をッ！」

熱を帯びる言葉が紡ぐ世界像は、所謂物語の悪役が望むような暴虐の限りを尽くす支配世界などではない。心から人の世を憂い、今より良い世界にしたいという正義が夢見る世界だった。

「そしてその為にも、完璧に公平な、一切の恣意が介入する余地のない人間の評価システムが必要なのだ。善き行いは加点され、一定に達すればそれに見合う報奨を得る。逆に、悪しき行いは減点されそれに伴う刑罰を受ける」

「そうすればはつきりと証明できる。どちらが上でどちらが下か。どちらの方が素晴らしく、どちらの方が醜悪か」

つまり因果応報、信賞必罰。究極的には、誰かの為に生きる英雄が溢れる理想郷が完成する。

「正しき道を往く者に、それに見合ひし幸福あれッ！ それこそ私の願い、ギルベルト・ハーヴェスというつまらない男の夢であるッ！」

審判者が目指す極楽浄土の姿がオルクス大迷宮へと響き渡る。

何も間違つたことは言っていない。楽園の守護者が語つたその在り方は紛れもなく

「——正義の…味方？」

誰かが呟いた一言が全員の心に浸透する。審判者が語つた極楽浄土を否定する語句

は一切浮かばない。

事実、完全無欠だと思つた光輝達は正義の味方の夢に慄き、尊敬の念すら浮かび始めている。

しかし、その理想の影に隠された現実を知る者は心底から嫌悪しながら否定する。

「ふざけるな」

炸裂した地面を踏み拉き、流れるような悠姫のカウンターが審判者へと叩き込まれた。審判者の肩部を僅かに削ぐ程度ではあつたものの、それは優勢が悠姫へと傾き始めた証拠でもあつた。

「お前、一体クリスから何を学んだ？」

嚇怒の炎を両眼に宿し、悠姫は音と空気を引き裂きながら斬空真剣で審判者を斬り刻む。至近距離からの間合いを無視した攻撃は回避行動の一切を許さない。

「確かに正道ほど見合う輝きが返つてこない生き方はないし、悪道ほど楽な生き方もないだろう。なぜなら、正しいことは痛いものだから」

辛く険しい道を苦しみながら進むくらいなら、苦しみを我慢するくらいなら、怠惰を選び諦めてしまった方がずっと楽になれる。だから最終的に悪を選択するものは多いのだ。

「常に誰かの為にあれ、輝く希望を胸に抱き、雄々しく前へ進むのだから……素晴らしいと

言いたいのは山々なんだがさ……阿呆かよ。そんな世界で生きられる奴なんて俺達のような破綻者だけだ。全人類の過半数は生きられない、不可能なんだよそんな世界の実現は」

しかし、この極楽浄土エリユシオンが切り捨てるのは、正善しくはない全ての存在だ。悪に墜ちた者は言わずもがな、善でも悪でもない中間も切り捨てられる全てに当てはまる。そして、この中間が全人類の大部分を占めていると言っても過言ではない。

正しいことは痛いものだから。だが弱音を吐くことも、諦めることも、嫌な事から目を逸らすことも一切の弱楽さが許されない光の楽園レシク。人類の滅びは避けられない未来だ。

「いいや、可能だ。弛まぬ努力は如何なる不可能も突破する。越えられざる困難が訪れた、それがどうした？ 頑張りさえすれば出来るのだよ。なぜ言い切れるか、なぜなら、それを実現した存在を私は知っている！ 貴方達が教えてくれたのだッ！」

「それが希少例破綻者だと言ってるんだよ！ もう一度言うぞ、一体クリスから何を学んだ？ ああ、でもそれよりさ……」

更に問い詰めようとした悠姫だがある可能性が頭を過り、それゆえにこれ以上何を言っても無駄だと悟った。

滅亡剣を含めて超強化されているという点を除いて、この審判者フラダマンテイスには一つの謎が残っている。

それは新西暦で、優劣を絶対至上とする男が極楽浄土エリユシオンを否定されながら敗北し、それでも全く同じ極楽浄土エリユシオンを掲げているということ。

地球とは異なる世界だからという理由なのかは定かではないものの、一切の改善アップグレードも行われないのはあまりにも不可解だ。

加え魔人族側に付く理由もよく解らない。

英雄と呼ぶべき男の力になりたい。それは理解できる。

正しき者が評価魔人族報酬される極楽浄土エリユシオンを創りたい。それも理解しよう。

しかしそのために人間族との戦争に協力し、且つ魔人族を勝利に導く？
極楽浄土エリユシオンに種族の垣根はないと言っておきながら？

個人価値が絶対の世界を掲げながら集団を尊重しているなど、それでは理想郷ルールの法則ルールに反している。

あのギルベルト・ハーヴェスにしては、余りにもちぐはぐなのだ。

結果、それらから導き出される答えは――

「だれだお前？」

――これはギルベルト・ハーヴェスではないということ。

「いや、違うな。俺が先に勘違いしていたんだ。お前はある意味、正しく人造惑星プラネテスだったところか」

つまり審判者ラダマンティスという個体ではあるが、ギルベルト・ハーヴェスという個人ではないの
 だろうと悠姫は判断した。

人造惑星ブラネテス。通称、魔星と呼ばれる兵器は大きく二つの出自に分かれる。

一つは完全人造型。天津悠姫という少年が存在していた西暦末期、日本国にて製造されたアストラル運用決戦兵器であり、基本的に迦具土神壺型とその兄弟機が該当する。

もう一つが、人間を素体としたもの。その内の最初期に製造された殆どが死者を素体としたものであり、先程討伐された氷河姫ペリオドと殺塵鬼カーネイジの再現元が該当する。

その死者を素体とした人造惑星ブラネテスの特徴に、生前の衝動に強く引き攀られるというものがある。血統主義であり、殺人衝動であり、弱者籠絡であり、そして英雄信者英雄信者であり。

だが、いくら厭離穢土を謳おうと極楽浄土に至ることは不可能。なぜなら先には生前時に縛止られた死者が溢れる地獄しか存在しないのだから。

星環境オルタレイション変性

—— 〃^A 穢^P嵐^Cの齋^Aす終^P焉^Sに、光^Tは無^Pく^H〃^O

左手を上上げると悠姫の背後に広がるように、星辰魔体が次々と収束されていく。夜空に浮かぶ星々を彷彿させるそれは範圍攻撃を目的としたものに違いはないだろうが、その矛先は一人に対して向けられている。

そして、後にハジメが「王の〇宝」と表現したそれらが——

「消えろよ、動く死体。お前に英雄賛歌は謡えない。」

ガスマレイミーティア
殲滅光流星雨——降り注げ」

——振り下ろされた悠姫の左手を号令に、容赦なく審判者一人へと放たれた。

一発一発が小威力の天霆の殲滅光。一掠りでも動きを縛るほどの激痛が走り、直撃すれば最低でも致命傷となることは避けられない。

「ぐう……ッ！ いや、まだだッ！」

しかし、審判者の本質は光の亡者、致命を受けた程度で止まるはずもない。むしろ、咄嗟に床面を剥がし衝撃多重を組み合わせて壁とし、更に壁だけでは足りぬと片腕を生贄にすることで幾発と喰らいながらも致命傷に抑えた判断と力量こそ、審判者という個体の優秀さを物語っているだろう。

そして、光の亡者だからこそ理想を否定された程度では止まるはずもない。

「分かっているはずだ、否、知っているはずだッ！ このまま往けば、貴方は世界に喰い潰される。だからこそ、——」

「——だからこそ、託された希望の光を世界に見せつけなければならぬんだよ」

悠姫のような英雄こそ報われる世界を創らなければならない。そんな審判者の想いを遮り、悠姫は宣言する。

「これは逆襲劇だ。神を恨み、憎み、天空の座から引き摺り下ろす敗北者の祈り。つまり

負犬の願いだ」

「まさか、貴方は……」

そう、解放者 反逆者達は敗北者なのだ。それは逆立ちしようが変わらない事実であり、変えることができない歴史だ。しかし、未来を変えることはできる。

「それでも、彼女達の願いは決して間違つたものではない。そして、彼女達に託された以上、俺はこの旅路みちを貫かなければならない。いや、俺自身がこの旅路みちを貫きたいと思うのだから」

「人々の希望、幸福、未来、輝き。守り抜き、そして切り拓かんと願う限り俺は無敵だ。かかってくるがいい。明日の光は奪わせない、勝つのは俺だッ！」

煌めいた剣閃が審判者の首へと吸い込まれるように叩き込まれた。対する審判者ラダマンテイスは一步遅く、両断される前に剣を弾き返したものの頸動脈に深く入り込み、誰が見ても即死レベルの傷を負った。

しかし、当の本人は致命傷にすら一切気にすることなく、悠姫が選択した旅路みちも果てにある結末を読み取って呆然としている。

嘶きを上げる暴馬のように荒れ狂う殲嵐が、巨人の目の如く悠姫の頭上へと収束されていく。誇張なく一国を削る暴風圏が密閉空間に形成され――

「ああ、ならば喝采しよう。貴方の末路はやはり英雄だよ」

「…是非もない。そうしなければならぬのなら」
——ラダマンティス審判者を肉片残さず葬り去った。

第六十二話 静寂と帰還

人間一体を文字通り消し飛ばした嵐が止み、一帯には静寂が漂った。しかし、生徒の一人が呟いた一言が静寂を引き裂いた。

「……人殺し」

その生徒とは悠姫ユキとハジメを奈落へ落とした直接的原因を作った、檜山大介だ。件に居合わせた九割九分は、どの口で、と異を立てるだろう一言。しかし今の状況が状況な為に他の誰も口を開くことはなかった。

「ユキさんッ！」

そして、凄惨な戦闘を繰り広げ、最終的に人間一人を殺した正体不明の化物人間に二大女神が抱き着くという光景を見て、ようやく生徒達は我を取り戻し始める。

真つ先に声を張り上げたのは、大切な幼馴染が殺されそうになっている天之河光輝だ。

「二人から離れろッ！」

「覇潰」の反動が残っているのか、ふらつきながら聖剣を振り上げる。しかしそれで

悠姫
化物を切り裂くことなど出来るはずがない。

「…危ないな。二人に当たったらどうする?」

「ぐッ!」

「光輝ッ!」

無造作に振り抜いた太刀で聖剣を弾き飛ばし、前蹴りマシザキツクで光輝を蹴り飛ばす。聖剣を持ち上げるだけでふらつく程なのだから、反撃など当然出来るはずもなく、そのままパーティーメンバーの元へと転がった。

光輝を受け止めた坂上龍太郎が化物悠姫を迎え撃つために立ちあがって拳を構えるが、悠姫は光輝達を見ながらも動かず、漂う緊張感が周囲の視線を釘付けにする。

だからこそ、ハジメの行動に悠姫達以外は誰も気が付かなかった。

乾いた銃声が鳴り響く。銃声の発生場所には、銃口から煙を出すドンナーを構えたハジメと、頭を仰げ反らせながら後ろに倒れる魔人族カトレアの姿。銃を知る地球組なら見間違えるはずもなく、ハジメがカトレアの頭部を打ち抜いたのだ。

「な、なんで……」

突然の光景に呆然とする光輝達を尻目に、悠姫は二人と共にハジメ実、香織に近づく。ハジメが近づいてきた悠姫に対し口を開く。

「……これでいいか?」

「ああ、助かる。まずは逆襲撃の第一歩だ」

何かを頼まれていたのだろうハジメが悠姫に確認を取り、悠姫が満足気に頷く。何を頼んだのかは一目瞭然であり、それに気が付いた香織が声を上げようとするが首を横に振る悠姫を見て口を噤んだ。

「なぜ、なぜ殺したんだ…殺す必要があつたのか」

光輝が、まるで大切な誰かを殺されたかのような憎しみを宿した眼光で悠姫とハジメを睨みつける。しかし二人は意にも介さずメルドの容態を診ているシアへと歩を進め、もう護衛は不要だろうとユエも悠姫達の方へと向かった。

「シア、メルドの容態はどうだ？」

「危なかつたです。あと少し遅ければ助かりませんでした。……言われた通り『神水』を使っておきましたけど……良かったのですか？」

「ああ、この人にはそれなりに世話になつたんだ。それに、メルドが抜ける穴は色んな意味で大きすぎる。特に、勇者パーティーの教育係に変な奴がついても困るしな。まあ、あの様子を見る限りメルドもきちんと教育しきれていないようだが……人格者であることに違いはない。それに……」

「言い方は悪いが、利用価値が高い。色々な意味で死なせるには惜しいし、助けられるならそもそも助けるさ」

魔族という人との戦争において、異世界から勇者という子供達を召喚し、人殺しという罪を背負わせることを強要する。たとえ勇者が神の使徒であっても、それら全てがエヒト神の信託によるものだとしても、心を痛め本気で己を恥じる。

少なくとも、召喚からの二週間で悠姫ユキはメルドがそういう人間なのだと感じ取っていた。それを人格者と言わずしてなんというのか。

「おい、南雲、それにお前もだ。どうして殺し……」

「あの、ユキさん？　メルドさんは大丈夫なんですか？　正直、助かるような傷じゃなかったと思うんですけど」

ハジメと化物悠姫を問い詰めるような光輝を遮り、香織が悠姫ユキに尋ねた。

「そうだな……飲めば一瞬で傷も魔力も全て完全回復する、魔法の霊薬を飲んでもらった伝説になってるらしいから、普通では手に入らないけどな」

「そんな貴重なものを……」

「シアにも同じことを言ったが、助けられるなら助けるさ」

香織だけでなく、他生徒達もメルドが一命を取り留めたと理解し安堵の息を吐いている。そこに、光輝が再び口を開く。

「おい、メルドさんの事は礼を言うが、なぜ、か……」

「ユキさん。メルドさんを助けてくれてありがとうございます。それに私達のことも

……助けてくれてありがとうございます」

そして、再び香織によって遮られた。光輝が物凄く微妙な表情をする。だが、香織は光輝のことなど一切気にすることなく、雫と共に真つすぐ悠姫だけを見る。

生きて死んでいないいることは知っていた。なぜなら、天津悠姫ユキ、ロスリツクがどういふ怪物にんげんなのか、誰よりも知っているのだから。それでも、不安がないわけではないのだ。

「そして……ごめん……なさい……支えるつて……言つたのに……」

「あの時……守れなくて……ごめん……なさい」

そんな涙を浮かべる二人の心境を読み取つたのか、悠姫は二人の頭を撫でながら慈愛と安堵を込めて微笑んだ。

「俺もハジメも、あの日のことは全く後悔していない。確かに苦しいと思うことは何度もあつた。それでも、意味がなかつたわけじゃないんだ」

それはホルアドに付いたときにティオにされた質問と同じ答え。やり直したいとは思っていないし、間違つていたとも思っていない。だから、後悔もしていない。

「ここで二人に謝られたら、俺達はその思いを無下にしてしまうことになる」

過去おもいでを振り返つて、こんなこともあつたなど、気付いて受け入れるだけで十分。未来はずつと先まで続いていくもの、だからこそ、今ここで二人がするべきは謝罪ではない。

二人は涙を拭い、笑顔で悠姫を見つめ。

「また会えてうれいすッ!」

「これからも、よろしくお願ひしますッ!」

「ああ、よろしく」

それが、勝利を得るといふことだから。

三人の間に独特な雰囲気^しが作られる。女子生徒や一部の男子生徒といった、トータスに召喚されてからの雫と香織の様子から悠姫^{ユキ}への気持^想ちを察していた者達は生暖かい視線を向け、檜山達子悪党組は苦虫を潰したような顔で悠姫を睨みつけ、光輝と龍太郎は何もわかつていない顔でキョトンとしている。

珍しいことに、二人がよく作り出していた雰囲気^しを第三者目線で見ているためか、ハジメとユエまで居心地悪そうな顔で目を逸らしている。作成者の一人が悠姫であるといふことも、居心地の悪さに拍車をかけている。作成者の一人が悠姫であると

しかし、そんな空気を壊す輩^{読まない}というのがここに存在していた。

「……ふう、香織と雫は本当に優しいな。クラスメイトが生きていた事を泣いて喜ぶなんて……でも、二人は人を殺した、しかも南雲は戦えない女の人をだ。話し合う必要がある。もうそれくらいにして離れた方がいい。いや、直ぐに離れるんだ。その人は危険だ」

一部の生徒から空気を読めというような非難の眼差しを光輝に対して向けている。

しかし、光輝はそれに全く気付かず雫と香織を悠姫から引きはがそうとしている。

「光輝…ユキさん達が助けてくれなかつたら、私達は全員死んでいたかもしれないのよ？ 助けてくれた相手にその言い方は失礼じゃない」

「勿論、助けてくれたことには感謝している。でも、それとこれとは話が別だ。彼女とは話し合いができた。戦争と止めるために、分かり合うことができたんだ。それなのに、南雲がしたことは許されることじゃない。その人も…」

光輝の物言いに雫が目吊り上げて反論する。クラスメイト達は、どうしたものかとお口お口するばかりであったが、子悪党組は元々ハジメと悠姫ユキが気に食わなかったこともあり、光輝に加勢し始める。

そんな中、悠姫は遠藤に、光輝の言葉の中で疑問に感じていたことを尋ねた。

「……なあ遠藤。ハジメのことを南雲と呼んでるから言っているとは思っただけ…俺のこと言った？」

「俺に気付いてくれたツ！ あ、いや、もちろん言いましたよ。でも、ありえないとか、死んだとかで、その…」

影の薄さ世界一を誇る遠藤は一瞬で自分を見つけてくれた悠姫に感動しかけるも、直ぐに気を取り戻して説明した。纏う雰囲気や姿が変わっているが、間違いなく二人は二人だと。しかし、明らかに若返っている悠姫ユキだけは信じられないと。

「……くだらない連中。早く戻ろう？ ミユウとテイオも待つてる」

「あー、うん、そうだな」

仕方ないか、と悠姫が考えていると、ユエが光輝の物言いやそれに加担する者達を、くだらない、とバツサリ切り捨てる。それはハジメに対して言ったものであり、眩きに等しい音量だったが、やけに明瞭に全員の耳に届いた。

ミユウ、テイオという悠姫達以外にはわからない名前が混じっていたが、光輝達に引つかかったのは最初の一言。

「待ってくれ。こっちの話は終わっていない。南雲の本音を聞かないと仲間として認められない。それに、君は誰なんだ？ 助けてくれた事には感謝するけど、初対面の相手にくくだらないなんて……失礼だろ？ 一体、何がくだらないって言うんだい？」

「……」

既に見切りをつけたユエは反応を返さない。そんなユエに少し苛立ったのか眉をピクリと動かし、光輝は、直ぐにいつも女の子にしているような優しい微笑みを携えて再度、ユエに話しかけようとした。しかし、今度は悠姫が割って入る。

「つまりお前は、どうして『殺害』という選択を取ったのかを知りたいんだろ？ それなら簡単、必要だったからだ」

「なッ?! ふざけるな!」

「ふざけているものか、本気だよ。そもそも、お前は どうするつもりだった？」

「それは…：そうだ、捕虜にすればよかつたんだ。それなら彼女を殺す必要なんてない」

「…はあ」

返答を聞いた悠姫は、思わず深い溜息を吐いてしまった。勿論、含む感情は失望と呆れである。

光輝は捕虜にすればいいと言つたが、戦時国際法が制定されていないトータスで、捕虜となつた敵の女性がどんな末路を辿ることになるのか想像は難くないだろう。

「即処刑、或いは性欲を吐き捨てるための道具にされるか…：まあそんなところだろう。少なくとも、二度と陽を浴びることはできなくなるだろうし、身体からだが生きてても精神こころは死

ぬぞ」

なお、ラダマンティス 審判者を捕虜にした場合は、王国側が滅亡の一途を辿ることになるだろう。

ラダマンティス 審判者が敗れた相手は悠姫であり、勇者達王国ではない。優劣至上主義である

ラダマンティス 審判者が己より弱劣等い勇者や王国に従うはずもなく、たとえ捕虜であろうと内側に光の亡者を入れてしまえば言わずもがなだ。

「そんなことはないッ！ 俺がそんなことは許さない！」

「どうやって？ 四六時中共にいるのか？ 訓練をしている間は？ 仮に仲間だと言つ

て連れて行くこうとすれば、王国や教会は必ず止めるだろう。それは敵だと。さらに敵を

仲間にしたと民衆に知れ渡つたら？

ひなんこうごう
非難轟々だ。教会はともかく王国は求心力を

失つて滅亡の一途を辿るかもしれない」

「そ、そんなことあるわけない！」

「まあ、そうだな。滅亡云々は極端かもしれない。だが、お前の選択は彼女を壊すぞ」

怒りを宿した鋭い眼光で射抜かれ、光輝は身震いして竦み上がる。しかし、皆の為に引き下がるわけにはいかないと自分を奮い立たせ、再び声を張り上げようとして…

「よせ、光輝」

「メルドさん！」

メルドは少し前に意識を取り戻していたらしく、雫と香織から状況を聞き、そして悠姫と光輝の会話を聞いていた。

「…ユウキ、でいいか？」

「ああ。ぜひともそう呼んでくれ」

「…そうか」

メルドは少しふらふらしながら悠姫とハジメの前に立つと、土下座する勢いで謝罪し始めた。

「…すまなかつた。あの日、ユウキとナグモがいたから俺達は生き残つた。それなのに
お前達を見捨て、あまつさえその犠牲に何一つ報いることが出来なかつた…」

「…悠姫がさつき言ったことだけだな、俺達はあの日のことは後悔してねえんだよ。まあ、一部を放置してるとか、教育係としてとか、色々と言いたいことはあるが…少なくとも、あんたが俺らに謝罪する必要はねえよ」

「…すまん…いや、ありがとう」

ハジメの返答に悠姫も頷くと、メルドは感謝を言葉に出し、今度は光輝へと向き直し悠姫達にしたように謝罪した。

「ど、どうして、メルドさんが謝るんだ?」

「当然だろ。俺はお前等の教育係なんだ……なのに、戦う者として大事な事を教えなかった。それは、人を殺す覚悟のことだ。時期がくれば、偶然を装って賊をけしかけるなりして、人殺しを経験させようと思っていた……魔族との戦争に参加するなら絶対に必要なことだからな……だが、お前達と多くの時間を過ごし、多くの話しをしていく内に、本当にお前達にそんな経験をさせていいのか……迷うようになった。騎士団団長としての立場を考えれば、早めに教えるべきだったのだろうか……もう少し、あと少し、これをクリアしたら、そんな言い訳で先延ばしし続けて、今回の出来事だ……私が半端だった。教育者として誤ったのだ。そのせいで、お前達を死なせるところだった……申し訳ない」

そう言って、再び深く頭を下げるメルドに、生徒達はあたふたと慰めに入る。どうや

ら悠姫が思っていた通り、メルドは光輝達についてかなり悩んでいたようだった。

メルドの心の内を聞き、光輝は押し黙った。魔人族を殺しかけたことを思い出したのだ。同時に、メルドが人殺しを自分達に経験させようとして居た事にシヨックを受けていた。ただの賊が相手なら、圧倒して拘束する程度はできるのにと……

それからしばらくして、メルドと遠藤の頼みを聞き入れた悠姫達は、光輝達も引き連れて地上への帰路についていた。先行は悠姫達、中団は光輝達、そして最後尾にアヤメ、シエリア、シアだ。

道中の魔物を悠姫達が瞬殺していく。かつて「無能」や「未知」と呼ばれていた者達の今の強さを見て、生徒達は様々な表情をしている。青褪めながら睨む檜山や、妬みの視線を送る子悪党達。他にも複雑そうな視線であったりと。

当然だが、悠姫達はそんな生徒達の心境など全く気にしていない。雫と香織は、時折ハジメとユエも混じりながら悠姫と話し、シアは兄の^{デルグ}ことでアヤメ、シエリアと会話している。

それから程なくして一行は無事に地上に帰還した。

第六十三話 抑えていた思い

「パパあー!! おかえりなのー!!」

地上へと帰還し、「オルクス大迷宮」の入り口広場まで到着した一行を一人の少女が出迎えた。周囲の喧騒に負けない声を張る少女の姿に、戦闘のプロである冒険者や傭兵、その他商人達が微笑ましいものを見るように目元を和らげていた。

「むっ! ミユウか」

そう言つて、ハジメはステテテテー! と可愛らしい足音と立てながら駆け寄つてきた少女、ミユウを受け止めた。

「ミユウ、迎えに来たのか? テイオはどうした?」

「うん。テイオお姉ちゃんが、そろそろパパ達が帰つてくるかもつて。だから迎えに来たの。テイオお姉ちゃんは……」

「妾は……じゃよ」

人混みをかき分けてテイオがゆつたりと現れる。

「おいおい、テイオ。こんな場所でミユウから離れるなよ」

「目の届く所にはおつたよ。ただ、ちよつと不埒な輩がいての。凄惨な光景はミユウに

は見せられんじやろ。まあ、きっちり締めておいたから安心するのじゃ」

「……それならいいだろう」

不服そうに受け入れたハジメに、子離れできるのかの？ と不安がるティオに悠姫が近づいて話しかける。

「留守番を頼んで悪かったな、ティオ」

「なに、気にするでない」

その光景に、本日何度目か分からない驚愕と共に呆然と悠姫達を見つめる生徒達。しかし、今の驚愕は当然ではあるのだろう。死んだと思っていたクラスメイトが、四ヶ月で子持ちになっているなど誰が予想するのだろうか。加え、その驚愕は周囲の冒険者達にまで伝播していた。

「南雲の…娘?!」

「一体誰との子だ…?」

「いや、黒髪の女性は南雲より天津さんロスリツクの方が距離近いぞ…」

「まさか二人のライバル出現?」

「な、生ユウキちゃん…グハツ!」

「…増えた…」

口々に言う生徒達に怒りで表情を引き攣らせるハジメに、周囲の冒険者に恐れ戦いて

表情を引き攣らせる悠姫。一身に注目を浴びる中、テイオが雫と香織に一步前に出て、そして最大級の爆弾を落としていった。

「お主等がシズク殿とカオリ殿かの？」

「は、はいそうですが…あなたは？」

「妾はテイオ・クラルス。主殿、悠姫殿の第四婦人の座を望む者じゃ」

それから暫く経ち、悠姫達は入場ゲートを離れ、町の出入り口付近の広場に来ていた。元々、イルワからロアに手紙を届けるためにホルアドに来たのであり、救出依頼も達成報告をすればホルアドに滞在する理由もない。

悠姫達についていく形で、そろそろと光輝達も町の出入り口広場に集まっている。というより、悠姫達ではなく、悠姫達の旅について行こうとしている雫と香織について行っているのだろう。

二人の覚悟を決めた、しかしどこか不安気な表情を見て悠姫はどうしたものかと思案

した。悠姫達が進んでいるのは間違いない、茨の道であり、世界を敵に回すことが半ば決まっている。

「…主殿。わら…」

「おいおい、どこ行こうってんだ？ 俺らの仲間、ボロ雑巾みたいにしておいて、詫びの一つもないってのか？ ア、ア、!？」

そこに、雫達以上に不安気な表情のテイオを遮り、世紀末に現れそうなガラの悪い男達が十人ほど現れた。口振りから恨みや報復が目的のようだ。もともと、テイオやシアを下卑た視線で見ることから、報復だけが目的でないことは明白だ。

「…俺が片しておくから、はつきりしとけよ」

「ありがとう、ハジメ」

なんでもないように振舞いながらハジメが一步前に出る。単純に雫達の件に決着をつけてほしかったからであり、ユエやシアを下卑た視線で見たり、ミュウを怯えさせたことに対する怒りはそんなにない。精々八割、九割程度だ。この瞬間、男達の命運は決まった。

不満顔のテイオを宥め、悠姫は二人の前に立つ。出鼻を挫かれた形になったテイオだが、言いたいことは伝わっている。というより、答えなど最初から出ていたのだ。

「雫、香織。俺達の旅路は、とても険しく苦しいものだ。無数の困難が待ち受けているだ

ろう。だから、こんなことを言う俺を許してほしい」

急に声を掛けられ背筋がピンと伸びた二人に、悠姫は告げた。

「俺と共に来てほしい。俺達と共に、戦ってほしい」

それは途中降車が許されない地獄への片道切符、しかし二人は迷いなくその切符を手にとった。

「はいッ！」

満面の笑みで応えた二人に、不安なことなど何一つない。この時を迎えるべく、絶望したあの日からずっと努力してきたのだから。

と、これで終わればハッピーエンドだっただろう。しかし、それを認められない者がここにいる。

「ま、待つんだ二人とも：何を言っているんだ?! ツ貴様! 二人に一体何をしたッ!」
「なにつて：：勧誘しただけだ。仲間として、共に戦ってほしいと」

「ふざけるなッ! 雫も香織も俺の大切な仲間だ! 平然と人を殺すような危険な貴様に、二人は絶対に渡さない!」

怒りで吠えながら、光輝は聖剣を悠姫に突きつけた。光輝の目には、麗しきお姫様を

攫おうとしている大魔王の姿でも映っているのだろう。

「どんな嘘を吐いて誑かしたのかは分からないが、俺は騙されない！ 二人は俺が——」

「何を言ってるの？ 嘘なんてないし、騙されてもないわよ」

「それに、好きな人と一緒にいたいって思うのは普通でしょ？」

「——え？」

しかし、勇者の誓いに対する返答はお姫様からの拒絶だった。お姫様達は大魔王に攫われることを望んでおり、勇者の救いなどそもそも求めていないのだ。

「す、好き……？ なにを言ってる……」

「それにさつきから、そいつ、とか、貴様、とか……いったい何様のつもりなの？ 助けて

もらったていうこと本当に理解してる？」

「そ、それはそうだが……危険なことには変わりな……」

「危険だ、危険だつて言うけど、一体何がどう危険なの？ 私達を殺めるつもりなら、誰

も来ない迷宮の底で殺されてるよ」

二人からの詰め寄りに、光輝はひどく狼狽する。二人はいつでも自分の味方で仲間だったはずなのに、どうしてこんなことになっているのだと、光輝の頭には困惑ばかりが押し寄せる。悠姫とハジメが奈落に墮ちたあの日から、味方とも仲間とも思われていないということに全く気付けないまま。

「……いや、やつぱりだめだ。これは二人の為に言っているんだ。見てくれ、あの南雲を。女の子を二人も侍らせて、あんな小さい子まで……しかも兎人族の子は奴隷の首輪まで付けさせられている。黒髪の女性だって、あの人のことを『主殿』って呼んでた。そう呼ぶように強制されてるに違いない。あいつらは女性をコレクションかなにかと勘違いしているんだ。最低だ。だから人だって簡単に殺せるんだ。あいつらに付いて行っても不幸になるだけだ。だからここに残った方がいい。いや、残るんだ。例え恨まれても、二人のために俺は止めるぞ。絶対に行かせはしないッ！」

徐々にヒートアップする光輝の物言いに、思わず雫と香織は啞然とする。しかし、もう光輝は止まらない。雫と香織へと向けられていた説得のための視線は、ユエ達へと向けられていた。

「君達もだ。これ以上、その男達の元にいるべきじゃない。俺と一緒にいこう！ 君達ほどの実力なら歓迎するよ。共に、人々を救うんだ。シア、だったかな？ 安心してくれ。俺と共に来てくれるなら直ぐに奴隷から解放する。テイオも、もう主殿なんて呼ばなくていいんだ」

そんな事を言って爽やかな笑顔を浮かべながら、いつの間にか悠姫へと合流していたユエ達に手を差し伸べる光輝。雫は顔を両手で覆いながら天を仰ぎ、香織は開いた口が塞がらない。

そして、誘いを受けたユエ達は…

「「……………」」

案の定と言うべきか、光輝から全力で目を逸らして、静かに両手で鳥肌が立っている腕を擦っていた。ユエとシアはハジメの影に隠れ、テイオですらユエ達と同じように悠姫の背中に縋りつくようにして光輝の視界から逃れるように隠れていた。

さすがに黙っていられなくなった悠姫が口を開こうとしたが、それを雫が前に出ることとで止め、雫は絞り出すように口を開いた。

「…ねえ、つまり幼馴染で仲間だから…安全だから…一緒にいるべきだって、そういうこと?」

「そうさ、当り前じゃないか。だから——」

俺の元に来るんだと、光輝は笑顔で雫に手を伸ばす。しかし、帰ってきた返答は、これまで以上に光輝には理解できないものだった。

「…なら私が、悠姫^{ユキ}さんは私の幼馴染だって言ったらどうするの?」

「え、なにを言ってる…雫の幼馴染は俺達だろ?!」

「ええ、光輝^{ミツヒ}達も幼馴染よ。でも悠姫^{ユキ}さんの方が先。事故で行方不明になって、その後光輝^{ミツヒ}達と出会ったのよ。だから、光輝^{ミツヒ}が幼馴染を理由にするなら、私が悠姫^{ユキ}さんを選んででも何も不思議じゃないでしょ?」

で言ってるのよッ！ 私達を困らせて、私達を傷付けてくるのは何時も光輝じゃないッ
！」

「し、雫？」

「あなたの正義に付き合うのは限界。私はもう我慢しない。私は悠姫君が好き、愛して
る。ずっと一緒にいたい。だから——」

だから。

「さようなら」

八重樫雫ははっきりと、天之河光輝幼馴染へと訣別の一言を口にした。

第六十四話 怪物の真実

涙交じりに告げられた雫の一言は光輝に最大級の困惑を齎し、次第に悠姫に対する怒りへと変化していった。

勸善懲惡。それが天之河光輝が信奉する考えだ。そして、元のスペックの高さゆえに地球で失敗も挫折も経験したことがない光輝は、己こそが絶対の善だと信じている。

だからこそ、審判者の語った極楽浄土エリユションは正しいと思つた。反対に、それを真つ向から否定し、さらには絶対善である自分から幼馴染ほうせきを奪おうとする邪悪な悠姫は許せない。

信奉する理想を実現する為、聖剣を構えた光輝は悠姫へと叫んだ。

「俺と決闘しろ、ユキ・ロスリック！俺が勝つたら、二度と二人には近寄らないでもらう！そして、その彼女達も全員解放してもらう！」

「……はあ、天津悠姫だと言ってるだろうに」

「何をぐちゃぐちゃ言っているッ！」

悠姫の返答を聞かずに駆け出す光輝。態々相手をする必要など悠姫にはないのだが、多くの注目を浴びている今の状況は都合がいい。悠姫は光輝へ向けて数歩踏み出し、

「太刀やいばをもって決闘の返答をした。

勇者VS怪物。それはありふれた対立構造であり、ドが頭に付くほどの王道的展開だ。そして、その物語は勇者の勝利によって決着する。なぜなら、それが英雄譚だからだ。

ゆえに、光輝勇者と怪物悠姫の対立も勇者が勝利を手にする——ということはない。年季、覚悟、積んだ研鑽、質と量。すなわち総トータル合値スベツクが越えられない壁となつて勇者の前に立ちふさがる。

そして何よりも、これは勇者の英雄譚ではなく、怪物の■■■■■なのだから。よつて、当たり前前に敵わない。

「貴様のような危険な奴は絶対に認めないッ！」

「……あれは二人の選択だ。お前が口を挟むことじゃない」

「ぐ……黙、れッ！」

悠姫が聖剣を刀身上で巧みに滑らせ、態勢を崩してよろめいた光輝の腹に膝蹴りを叩き込む。光輝は前屈みに倒れかけるも踏鞴を踏んで堪え、聖剣を悠姫へと振り上げる。

「俺が二人を、皆を守るんだッ！」

「皆を守る、ねえ……」

上体を反らして聖剣を躲した悠姫は、光輝の一言に反応し思案する。その様子を光輝は隙だと思つたのか、高速の剣撃を放つ。しかし、悠姫には一掠りもしない。

「そうだッ！ 二人は俺の幼馴染なんだ、ずっと一緒にいたんだ。これからだって、ずっとッ！ それなのに、人をコレクションみたいに扱う貴様には——」

「今すぐ鏡を見てみるよ。二人をコレクションみたいに扱う勇者の姿が写っているぞ」
「ふざけるなあッ！」

全く当たらないことに痺れを切らし、*“縮地”*と八重樫流剣術を織り交せて攻め立てるが、それでも悠姫には一撃も届かない。むしろ鏡合わせのように、後出しでありながら断刃ムラサメの剣術で捌く余裕すらある。

それに一番驚愕したのは光輝だ。なぜなら、このトータスで八重樫流剣術を修めているのは、光輝と雫の二人しかいないからだ。にも拘らず、光輝の目には悠姫が八重樫流剣術を繰り出しているように見えていた。

時代背景を考えれば、断刃ムラサメの剣に同じような技があつても不思議ではないが、光輝はそんなことはつゆとも知らない。凄まじいほどの技量で真似していると思つている。

「なッ！ この…」

「まだ勝てないと理解できないか？」

「ぐあああッ！」

当然のように悠姫は剣身を殴り、聖剣が光輝の両手を離れ飛ぶ。光輝は軽くあしらわれたことに混乱し、そのためか聖剣を呼び寄せる機能を使わずにそのまま悠姫へと殴り掛かった。が、結果は当然返り討ち。

鉄拳カウンターが光輝の顔面に命中し、まるでピンボールのように光輝を殴り飛ばした。邪悪な魔人族を滅ぼし人間族に栄光を齎すはずの勇者が木端のように宙を舞い、そして入れ替わるように、光輝が立っていた場所に聖剣が突き刺さる。

「ツ……なぜだ」

殴られた顔を手で覆いながら、呼び寄せた聖剣を杖に立ちあがる。だが重い一撃を喰らったことでようやく冷静になったのか、無鉄砲に悠姫に向かうことはしなかった。代わりに、悠姫を睨みつけながら叫んだ。

「それだけの力を持っていながら、なぜ皆の為に使わないんだッ！」

それが唯の強がりでしかないのは誰の目にも明らかだった。空気を読んだのか、或いは光輝の叫びに対する悠姫の応えが気になるのか、観客達は一斉に静かになった。そして、悠姫は口を開く。

「逆に聞くが、お前が言う皆って、誰のことだ？」

「——え？」

悠姫の言葉に光輝は言葉を失くす。単純に意味が理解できていないのだろう。

「別に個々人の名前を言えつてことじゃない。トータス全体のことか？ 人間族のことか？ ハイリヒ王国のことか？ それともお前達召喚組のことか？」

つまり規模の問題。そして当然、光輝勇者の答えは想像できる。

「——も、もちろん、トータスのことだ！」

「なら、どうしてこんなところにいる？ お前は世界を救うんだろう？」

「当たり前だ！ 俺が皆を——」

「で、お前はこれまで一体何人救ってきたんだ？ 王都と迷宮、あとはホルアドと他数ヶ所か？ おそらく、勇者の救いを求める誰かは数少ない場所ばかりだっただろう。それで一体誰を救えるのさ」

「そ、それは」

事実、勇者がこれまで救ってきた人の数など皆無に等しかった。精々、オルクス大迷宮内で遭遇した冒険者の危機を助けた程度。それで「世界皆を救う」など、酒の肴にしかならない笑い話だ。

「お前はウルの町が危機に陥っていたのを知っているのか？ あの町にいた畑山教諭たちの方が、お前の言う皆の命を救ってるぞ」

「お、俺達は訓練で」

「一番強いはずのお前達が、どうして訓練しかしてない。それなら訓練が必要なのは彼

女たちのはずだ。立ち位置が逆だろ」

片や勇者、片や農作師。光輝が言う皆の為に戦うのが、どちらが相応しいかは明白だ。容赦ない悠姫の口撃に、光輝は思わず後退る。

「加えて言うならば、俺達が居なければあの町は間違いなく滅んでいた。お前達よりも、皆のために戦っているのは間違いなく俺達だし、世界を救っているのも俺達だ」

「今回の危機だつて、半ばお前が原因だろ？ それに、覚醒したお前は勝利の一步手前まで行つたというのに、それすら溝に捨てたんだ。身近の仲間すら守れない、むしろ危険に晒すような奴が、一体誰の命を守れるっていうのさ」

光輝が怒りによつて「霸潰」を会得した瞬間に発したその強大な魔力を、数階層も隔てた先にいた悠姫達は感じ取っていた。それは間違いなくお伽噺のように大逆転を果たせるだけの力であつた筈なのに、光輝は「人殺しは悪」という心一つで無駄にしたのだ。

「ッ……」

対し、光輝は何も言い返せない。いや、言い返すことができない。なぜなら単純明快、悠姫の言っていることは事実正道なのだから。

「なんなんだよ……なんなんだよお前はッ！ 正義の味方にでもなつたつもりかよ！」

だからと言って悠姫を認めることは光輝にはできない。悠姫が雫と香織を連れて行

こうとしているのは事実、しかし悠姫には勝てないというご都合主義を上回る何か光輝の足を止め——

「俺達の絆を壊して、何が目的なんだ…何がしたいんだよ…」

——悲愴な表情で顔を歪め、光輝は呟いた。その両眼は悠姫を捉えているが、覇気は既に微塵もない。

そして、光輝の小さな問いかけは、奇しくもフューレンでテイオが悠姫に問いかけた内容と似たものだった。悠姫はテイオを一瞥し、まるで自分を落ち着かせるように深く呼吸をして、口を開く。

そして、悠姫は語りだす。『悪の敵』の隣で戦い続けた怪物の真実を。

「愛、友情、信念、決意……それら善の輝きは尊いものだ。守らなければならないと分かっているし、それを守り抜くために命をかけねばならないことにも、ああまつたくもって異論はない」

「だからこそ、腐った正義を語り、他者の夢を轢殺し、恥の欠片も感じない塵屑どもが許せない」

煮え滾る溶岩マグマのように熱を帯び始め、ハジメ達も含め誰もが気圧される。

「俺は別に、この世全ての悪を許せないとやっているわけじゃない。自分と他者との間に差というものは必ず存在するし、身を守るためにも力だつて必要だ。悲しい真実だ

が、必要悪は文字通り必要なんだよ」

「人の心は千差万別、正義も悪もそれぞれの価値観で大きく変わる。それでも、不要に誰かが傷つき、希望えがおが否定される日常は間違っているし、正義が絶望なみだを生むということは、何時いつの時代、それこそ異なる世界でも悪なのだと言言できる」

「俺はそんな正義正義を滅ぼしたい」

システイ達解放者叛逆者が立ち上がったように。新西暦新で、改革派として血統派邪悪を肅清したときのように。

「他者を貶め搾取することしか能がない塵どもが。正義という麻薬に酔って暴力を振りかざす屑どもが。人を駒と、箱庭を彩る人形などと嘯く■どもが」

「許すものか、認めるものか。俺たちは生きているんだよ、歩いているんだよ。だからこそ、皆が進む道を、未来を閉ざすことなど認めない。それでも正義が希望えがおを掻き消すというのなら、ああいいさ、俺がその正義を断罪ひていする」

「何が目的なのかと、何をしたいのだと、そう訊いたな天之川。つまりそういうことさ」
「皆が前を向いて歩けるように。」

誰もなみだが自らの意志で進めるように。

絶望なみだを希望えがおに変える為に」

人が自由な意志の元に生きられる世界ミライを創るために。誰かの明日が為に、解放者反逆者達の

意志を次いで神に抗う彼は正義に非ず。

「俺は真実、鍍金を纏う正義の敵に——「悪」そのものになりたいんだよ」

己に向けられる視線、そこに込められた確かな正道に貫かれ、光輝は尻餅をついて立ち上がれず言葉を紡げなかった。敵わない、太刀打ちできないという初めての感情が光輝の心を支配する。

「う、うあああああッ！」

「ッ光輝！」

恐怖に顔を歪ませて、光輝は聖剣を突き構えながら突撃した。そこに技など一切なかった。難しい考えもない。ただ純粹に、恐ろしい怪物を遠ざけたかった。逃亡ではなく攻撃をしたのは、僅かに残った正義だったのだろう。

だからこそ、光輝は再び間違えた。

雫の静止に意味はなく、聖剣の切先は悠姫の胸へと吸い込まれ——

「……え、あ……」

「……卒業おめでとう。それが、人を殺す感触だ」

——震えながら握られた聖剣は容赦なく、悠姫の心臓を貫いていた。それを自覚した

瞬間、
光輝の意識は暗闇へと墜ちていった。

第六十五話 狂気と嫉妬

「光輝君ッ！」

崩れ落ちるように気絶する光輝。それを見て中村恵理が叫び、周囲の静止を振り切つて光輝の元へと駆け出した。悠姫は恵理が駆けてくるのを確かめながら胸に突き刺さる聖剣を引き抜き、無造作に地面に転がす。

誰が見ても即死だと判断できるはずなのに、血が噴き出るところか一瞬で傷が塞がった姿には、生徒全員が本日何度目か分からない驚愕に包まれる。

「……まあ、そろそろ行くか」

「……ああ、そうだな……」

『……勇者の手綱はしっかりと握れよ、メテイア魔女』と、

悠姫が周囲には聞こえないような声量でぼそりと呟き、そして踵を返す。元々、町を出る直前だったということもあり、後は魔導四輪に乗り込むだけだ。

なお、パーティーメンバー二人が脱退するアヤメとシエリアは、再び金ランク冒険者としてトータス各地で活動することになっている。そのため、途中の町まで悠姫達に同行

する。

つまり、勇者一行からは離れるということでもあり、雫達含め最強パーティーが完全離脱する結果となる一行にとっては大きな痛手だ。

その為なのか、それとも他の理由があるからなのか、今度は檜山達子悪党組が騒ぎ立てる。曰く、香織達が抜ける穴が大きすぎる。特に香織は二人しかいない。治癒師の一人であり、今回のようなことがあつたら死人が出るかもしれない。だから何が何でも残つてほしいと。

しかし、二人の説得が不可能なのだと思つて、今度は悠姫達を説得させようと試み始めた。過去のことは謝る、どんな罰だつて受けるからと。

当然、悠姫達が首を縦に振るわけがない。寧ろ逆に説得を諦めさせる材料ネタはいくつもあるのだ。例えば――

「あの時みたいにな、裏切られて殺されかけるのは二度とごめんだ」
――と、言つてしまえばどうなるか。

今、悠姫達がいる場所はホルアドという町の出入り口付近の広場、つまり人の往来が非常に激しい場所の一つだ。そんな場所で行われた勇者パーティーの乱痴気騒ぎが注目されないわけがない。

そして、観客達には冒険者のみならず商人や一般市民も混じっているが、「裏切り」「殺

されかける」という二つが合わされば過去に何があったのか考えるのは非戦闘者でも想像するには難くない。

結果、当然のように檜山達へと批難の視線が浴びせられる。さらには当の檜山が否定しないのだから、批難は拍車をかけるように鋭くなる。

こうなつてしまえば悠姫達の説得など素振り一つ出来るわけがなく、檜山達は悔しそうな顔をしながら引き下がるしかなかった。

そして今度こそ出立の邪魔をするものはなくなった。ハジメと悠姫がそれぞれ魔導四輪を取り出す。未知のアーティファクトに周囲はどよめき、生徒達は車両まで作ったのかと驚きを超えて呆れの域に入っている。

「それじゃあ、私と雫ちゃんも行くね」

「急に抜けることになってしまって、ごめんなさい」

「ううん、二人のお胸を味わえなくなるのは寂しいけど、私達は大丈夫だよ。いっぱい揉まれて、もっと大きくなって帰ってきてね。ね、エリリン」

「ちよ、ちよつと、鈴ッ!」

「……」

「エリリン?」

「恵理ちゃん?」

「……えっ！ あ、うん。鈴の言う通り、私達は大丈夫だよ。それよりも、鈴？ セクハラはダメだよ？」

「え〜」

次々と魔導四輪に乗り込んでいくその間に、雫達は別れの挨拶をしていた。

純粋な戦闘力で頭二つは抜けている雫や強力な回復・支援役の香織が抜けるのは、勇者一行が大幅弱体化するということ。二人は檜山を擁護する気持ちなど欠片も持つてはいないが、仲間をより危険な目に遭わそうとしていることに心を痛めていた。

谷口鈴はそんな二人の気持ちに汲み取ったのか、いつも通りの調子で二人にセクハラ発言をした。同意を求められた恵理は何か考え込んでいたのか一拍遅れて反応するが、直ぐに普段の調子を取り戻した。

コントのようなやり取りに嘖き出すように笑い、手を振りながら二人の元を離れた。そして悠姫が運転する魔導四輪に乗り込み、悠姫達はようやくホルアドを後にした。

目的地はグリューエン大砂漠にある、七大迷宮の一つ【グリューエン大火山】。新しく二人の仲間を連れ、悠姫達の旅は続いていく——

「……そろそろ大丈夫か」

——と、ホルアドから出立して十数分。万が一の追手も振り切つただろうと、周囲に自分達以外は近くにいないことを確認した悠姫達は、街道から少し離れた場所にて停車した。

そして悠姫を含めた数名が魔導四輪から降り立ち、その中の一人へと目を向けた。

「それでは、これから未来の話をしよう。魔人族」

「……知ってるかい？ そういふのは話じやなくて、脅しつていふんだよ」

その一人とは、オルクス大迷宮でハジメが撃ち殺した筈の魔人族、カトレアだった。

「くそつ！ くそつ！ 何なんだよ！ ふざけやがって！」

時間は深夜。宿場町ホルアドの町外れにある公園、その一面に植えられている木々の一本に拳を叩きつけながら、押し殺した声で悪態をつく男が一人。檜山大介である。檜山の瞳は狂氣的と言っても過言ではない程に醜く濁り、憎しみと動揺と焦燥で激しく揺

れていた。

「案の定、随分と荒れているね……まあ、無理もないけど。愛しい愛しい香織姫が目の前で他の男に搔つ攫われたんだものね？」

そんな檜山の背に、嘲りと同情を含んだ声が掛けられた。振り返った檜山の前に立っていたのはこの密会の相手、檜山の共犯者であった。

この二人の關係は、悠姫とハジメが奈落に落ちた頃にまで遡る。

あの日、檜山大介は「火球」を使って悠姫とハジメを奈落へと落とした。しかし、その決定打となつた一発は檜山だけが放つた一発であり、魔法の機動、タイミングは明らかに悠姫達二人を狙つたもの。

その犯行は全員が目の当たりにし、檜山には味方殺しの烙印が押されたが、勇者・天之河光輝のご威光により直ぐにその烙印は撤回された。しかし、檜山にとってはそれ以上に重要なことがあつた。香織の事である。

香織が悠姫を好いていることは誰の目にも明らかであり、認めたくなかつたが檜山自身もそれは分かつていた。だからこそ、檜山が悠姫を落としたと言うのは、香織が檜山を拒絶する理由としては決定的だつた。

そんな時にその人物は現れ、悪魔の契約を持ち掛けてきた。

提示されたのは白崎香織、差し出すものは檜山大介と言う共犯者。そして、一度は潰えた歪んだ恋情が背中を押し檜山はその契約書にサインする。

恐怖に怯えながら何度も密会を重ねた、共犯者の計画に協力してきた。欲しいものを手に入れるには、他に選択肢などないのだから。それなのに――

「くそっ！ こんな……こんなはずじゃなかったんだ！ 何で、あの野郎生きてんだよ！ 何のためにあんなことしたと思って……」

――ヒーローの如く現れた天津悠姫によって、その一切が崩された。

「あのさあ……一人で錯乱しないで会話して欲しいのだけど？ この密会中のところを見られたら、後で言い訳が大変なんだから」

「……ふざけんな……お前に従う理由なんてないぞ……俺の香織は、もう……」

傍らの木に拳を打ち付けながら、檜山は苦々しく言った。檜山がこの人物に協力していたのは香織を自分だけのものにするためだった。だが、今回の一件によって香織のパーティーは解散し、その香織も悠姫達へと着いて行ってしまった。無理をして追いかけたところで、悠姫とハジメへの殺人未遂という罪が尾を引き、何をしても失敗する未来が目に見えている。

そんな檜山を蔑んだ目で見下すものの、共犯者としてすぐには言葉を紡ぐことができない

かった。何故ならこの人物もまた、悠姫に釘を刺されていたのだから。

悠姫にとつては、歪みに歪んだ重い感情は見慣れたものであつた為^レに気が付けたのだが、共犯者にとつては一瞬で心を見抜かれた気持だつたのだ。つまり、共犯者がどんな策を打とうとしているのかも見抜かれているようなのだ。

そして、審判者と呼ばれた男や光輝へと語つた言葉の節々からは、自己中心的な邪悪ラダマンティスに對する殺意が感じられた。そして、次の策が善悪のどちらによるものかと言えば、間違ひなく後者だろう。つまり、怪物悠姫の敵に他ならない。

「……ッ」

将来訪れるかもしれない末路を想像して身震いするものの、止まるつもりなど毛頭ない。檜山と同じように、手に入れたいものがあるのだから。しかし、妄信的に求め続けたいゆえに決定的な間違いにも気づけない。

折れた檜山をこのまま見限つていればよかつた。二大天使という最大の障害がいなくなつた以上、関係ない誰かを巻き込むことなく真つすぐにアピールしていればよかつたのだ。

だが、彼女は檜山を利用して、今度は王都で一騒ぎを起こそうと画策したのだ。たとえクラスメイト達を害することになろうとも。檜山もまた魔女の誘惑に乗せられた。愛しい香織を手に入れられるチャンスが残つていると思つたから。

月明りが二人を照らす。

「……や、やべえ事を聞いちまった……」

そして、二人は最後に致命的なミスを犯していた。

第六十六話 ヒカリの導き

町外れの公園で怪しげな密会が行われていた頃、一人の少年が月明かりに照らされて佇んでいた。

そこは一方の密会場とは異なり、町の裏路地や商店の合間を縫うように設けられた水路に掛けられた、小さなアーチを描く橋の上。ゆるりと流れる水面には下弦の月が写りこみ、そして反射した月明かりが橋の上で項垂れる少年の、天之河光輝の暗く沈んだ表情を照らしていた。

日付が変わる頃に目を覚ました光輝は、香織と雫が悠姫に自分の意志で着いて行ったことを知り、制止する龍太郎の声を振り切り自棄を起こすかのように宿を飛び出してきたのだ。そして脇目も降らずに走って辿り着いた先が、この橋の上だった。

「俺は……」

水面に映る月を眺める光輝の頭には、後悔ばかりが渦巻いている。

自分が弱く未熟だから敵に敗け、そしてあの魔族を救うことが出来なかった。結果、怪物にも敗北し大切な幼馴染達を止めることも出来なかった。

そうだ、あの怪物。ユキ・ロスリックもとい、天津悠姫。奴が自分達の全てを壊した。

奴は自分で言った通り、「悪」だ。平気で人を殺す極悪最低な怪物なのだ。それなのに。

天津悠姫はどこまでも輝いて見えた。それに比べて天之河光輝自分は……酷く惨めに見えた。

『皆が前を向いて歩けるように。』

誰もが自らの意志で進めるように。

なみだ えがお
絶望を希望に変える為。

俺は真実、鍍金メッキを纏う正義の敵に——「悪」そのものになりたいんだよ』

「……違うッ」

否。正真正銘、自分天之河光輝は「勇者」なのだ。鍍金メッキを纏つてなど断じていないと首を横に

振った。しかし、奴の語った信念があまりにも格好正道よく、そして全てが壊れたこの失敗敗北

という現実が何よりも恐ろしく、疑念が脳裏にしがみついて離れない。

自分は何かを間違えていたのではないか？ 二人が自分の元から離れて行ってしまったのは、そのせいではないのか？

その上で光輝にとって都合の良い所謂ご都合主義を展開するも、疑念が邪魔をしてその答えに納得することが出来ない。

「……ッ」

ふと、無意識の内にカタカタと震える右手が目映った。その震える右手を抑え込むように、左手で拳をギュッと握りしめる。なぜ震えているのか、その理由は実に明白だった。悠姫の胸を貫いた聖剣から伝わった、肉を切り裂く感触が、命を奪う感覚が手に残り消えないのだ。

疑う余地もなく、悪の所業。つまり善悪の内、悪は^{善は悠姫}光輝にあると心の奥底で理解していることであり――

「クソッ！」

悪態を吐きながらダンツと拳を手摺に叩きつけた。悲痛に歪んだ表情が水面に照らされる。

つまるところ、光輝にとつて悠姫は謎なのだ。

悠姫は自分を「悪」と言いながらも、その信念は「善」であった。ならば悠姫に付き従うティオやハジメ達は、その「善」によつて救われたのだろう。迷宮深部で光輝が言つたような、奴隷や洗脳などによるものではない。

そして、雫が悠姫を幼馴染だと言つたことも嘘ではないことが分かる。雫が意味のない嘘なんて吐くはずがないのだから。

だから――

「――成ればよい、君が目指す理想の姿に。そうすれば、万事解決だろう」

「ッ！ 貴様はッ！」

その時、光輝の思考を遮り話しかけてきた相手がいた。光輝は驚いてバツと声の主へと振り返ると、そこには眼鏡をかけた黒髪の偉丈夫が立っていた。

雫達ラダマンテイスが口にしていただけ呼び名は確か。

「審判者ッ！」

ギルベルト・ハーヴェス、迷宮深部で悠姫の手によって殺された筈の魔人族に与する男が、地上の人間族の町であるホルアドに、人間族の勇者である光輝の前に姿を現したのだ。

死んだ筈だ、いつの間にと、色々と考えていることはあるがそれはそれ。鎧も聖剣もないこの状況は絶体絶命のピンチと言えるだろう。しかし、審判者ラダマンテイスは臨戦態勢を取ろうとした光輝を制止した。

「ああいや、待つてほしい。私は戦いに来たわけではないのだよ」

「なに？」

想定外の行動に、光輝は怪訝そうに動きを止めた。普段の光輝であればその制止など無視していただろうが、苦悩の最中なる今だからこそ素直に聞き入れた。

そして当然、審判者ラダマンテイスは光輝がそうするだろうと読んでいた。

「まずは自己紹介をしよう。俺は天津悠姫。かつて怪物テュゴエウスという異名で母国の為に戦い、今はこの世界に未来を齎す為に暴力チカラを振るう、一人の破綻者バケモノだ」

ホルアドを出立して十数分、街道から少し離れた場所で、悠姫は迷宮深部でハジメが撃ち殺した筈の魔族の女性と向き合っていた。

なぜ彼女が生きているのか、理由は単純でハジメが撃ち込んだのはゴム弾だったからだ。光輝達が銃声に反応して見た時に、彼女は後ろに仰け反っていたため気が付かなかった。

そして、その後の悠姫と光輝の諍いの隙にゴム弾によって気絶していた彼女を拘束、ハジメ謹製のアーティファクトで姿を消しつつ此処まで連れてきたのである。

「……理解できないね。あんた、一体何がしたいんだい？ まさか本当に、あたしら魔族を救いたい、なんて言うつもりかい？」

彼女が目覚めたのは迷宮から地上に帰還している途中だった。拘束されているという状態や、悠姫バケモノ達が傍に居るといふことから荷物に徹し、その結果として悠姫と光

輝の決闘や悠姫の信念をしつかりと聞いていた。

だから、悠姫の信念が嘘偽りないものだど理解していた。

勇者を凌駕する圧倒的な力を持ちながらも勇者達と、延いては聖光教会とも対立する姿勢を取りながらも、彼女を殺さなかつたこと、王国に渡さなかつたことが一つの証明と言えるだろう。

「魔族も、だ。それに、救いたいんじゃない。救うんだよ、傲慢な神が作った遊戯から。人間族も、魔族も、亜人族も、種族なんて関係ない。皆が明日を生きるために」

「……ふん、信じられるかい」

しかし、二種族の争いは数世代にも亘って続けられてきた一種の呪いのようなもの。仮にも人間族側として召喚された存在である悠姫の言うことを素直に聞き入れるほど、二種族の確執は浅くはない。

だからこそ彼女は悠姫を拒絶するのだが、その表情は葛藤に苦しんでいるのが見て取れた。

悠姫のそれは理想論に過ぎず、男者光輝が「みんなを救う」と口にしてているのと同じこと。にも拘わらず、悠姫の理想論にはヒカリ希望を感じさせる重みがあった。

時間にして半日程度、彼女から悠姫に対する印象は最悪で、会話は今が最初なのに、この男なら仕方がないと思ってしまう。

「……それなら、私の話を聞いてもらえませんか？」

そこに魔導四輪から降り立った一人、アヤメが彼女の前に出た。そして、アヤメが耳飾りを取ると、彼女の顔は葛藤から驚愕へと変わった。

風に揺れるさらりとした黒髪は赤く染まり、きめ細かな白い肌は浅黒くなる。特徴的なその二点は、紛れもなく相対する彼女と同じ特徴だった。

「……まさかあんた、魔人族？」

「私の名は、アヤメ・バグアー。魔国ガーランドの将軍、フリード・バグアーの実妹です」

アヤメ・バグアーの今生は魔人族の国、魔国ガーランドにて始まった。

今生は家族にも恵まれ、特に兄は前世の傲慢な実姉とは違い、本気で魔人族の幸福を願う硬骨漢。民に、部下に慕われる兄の姿は家族として誇りに感じ、アヤメ自身もそんな兄を敬愛していた。

そして、兄の背を追って軍人となったのは、前世キガフレを考えれば当然だったのかもしれない。

しかし、敬愛はいつしか疑念へと変わり、そして嫌悪へと墜ちていった。そのきっかけは、兄が大迷宮の一つ【氷雪洞窟】を攻略してきた後だった。

当時、アヤメはアーティファクトを用いて外見を人間族に変え、冒険者として活動していた。役割は有事の際に人間族の兵士として徴兵されるであろう冒険者達の戦力調査、つまりスパイ活動だった。

途中、自分と同じようにトータスに転生した前世の同僚に再会しスパイ活動に葛藤を抱くなど様々な経験をしてきたが、十分な程に充実していた。

そんなある時、兄が大迷宮を攻略したとの報告を受けガーランドへと戻ると、そこには変わり果てた兄が待っていた。

他種族を見下す思想は強まり、「魔族の為に」という理想は「神の為に」と摩り替る。そして、それは兄の周囲にも伝搬し、国や民に尽くす誇りある軍ではなく、神に尽くし神命を絶対とする狂信者の集団が出来上がったのだ。

ゆえに、アヤメ・バグアーは逃げ出した。兄から、ガーランドから、魔族から。なぜなら、怖かったから。前世の実姉のようになってしまるのが、見ていられなかったから。

この逃亡を、アヤメはずっと後悔してきた。そして将来、悠姫ユキがトータスに召喚されるということをシエリアから聞かされた時、確かな希望を見た。

「もし、あれが私達魔人族が辿る運命だというのなら、それは認められない、認めてはいけない。だから、同胞の未来を救うために、力を貸してほしいのです」

「な…そ、そんなこと」

アヤメの話に彼女は動揺して後退る。その荒唐無稽な話を信じるなら、敬愛するフリード・バグアー上司や同じ釜の飯を食った同胞達は、何者かに洗脳されてしまっているということだ。

当然、彼女にとって信じられるはずもなく。

「し、信じられるわけだないだろ?! それに、だつたらあたしはどうなんだい!? 魔人族が洗脳されてるって言うなら、あたしだって——」

「おそらく、国の中枢に近い者、洗脳の正体に近づいた者、そして思想に疑惑を抱いた者だけでしよう。それにあなたは、あの審判者ラダマンティスが連れてきた魔人族です。洗脳などはされていないでしょう」

実際、彼女はギルベルトのことを、人間族だから気に食わないが、非常に優秀な人間族であると認めている。それこそ、未だ彼女が洗脳されていない証拠でもある。

「神は、地上の全ては己の駒であり、二種族の戦争は遊びに過ぎないと嘯いている。仮に魔人族が戦争に勝利して人間族を滅ぼしても、神の戯れで魔人族も滅ぼされるだろう」

「——ッ」

絶句する彼女に対し、悠姫は畳みかけるように言葉を紡ぐ。

「だからこそ、その神の遊戯という運命から皆を救いたいんだ。だって誰もか、明日を自由に生きる権利があるんだから。その為に、力を貸してほしい。この通りだ、頼む」

頭を下げて頼み込む二人の姿に彼女は数秒の間固まり、そして項垂れると声を震わせ呟くように言った。

「……あたしにはミハイルが……恋人がいるんだ。戦争が終わったら、二人で幸せにつて……そんな将来も、やってこないってことかい……？」

「ああ。もしかしたら、もっと苦しい思いをするかもしれない」

「……あんたは、ミハイルの事も、救ってくれるのかい……」

「必ず」

力強く肯定した悠姫に彼女は数秒置くと、ゆっくりと顔を上げ強い意志を宿して悠姫を見た。

「カトレア。あたしの名前だよ。さっきの言葉、破ったら永遠に恨むからね」

「……ありがとう。改めて誓おう。必ず君達を、皆を、神の支配無き世界へ救うと」

ここに、怪物と一人の魔人族との間に盟約が交わされた。魔人族の明日を守るために。

「初めまして、と言っておこう。私はギルベルト・ハーヴェス。雄々しき英雄より審判者ラダマンティスという名を授かった、どこにでもいる凡庸な男だ」

「……天之河光輝だ」

そして、カトレアが悠姫の協力者となった日の同日深夜。オルクス大迷宮の入り口があるホルアドの町では、互いの名乗りから始まった。

「まあ、そうだな。まずは君が抱いているであろう疑問に答えていこうか」

最初は審判者ラダマンティスから切り出した。光輝は審判者ラダマンティスの一挙手一投足見逃さないと正面に捉えながら、その話^に耳を傾ける。

「まず一つ、大迷宮で君達と会ったのは私ではない。あれは疑似的な人造惑星ブラネテス、分かり易く言うなら私を基にした魔物だ。だから彼は死んだが私は生きている。初めましてと言ったのはそういうことだ。

そして二つ目、これはまあ、普通に近づいただけだ。私は外見上、唯の人間族だからな。一般と同じように町に入り、歩き、そして君に近づき話しかけた、という訳だ」

「……それで？」

言外に、何故近づいたのかと続きを促す。冷静でなによりと満足げに頷くと、懐に手を入れながら話し始めた。

「では、単刀直入に言おう。君は強い力が欲しくはないか？ 守りたいものを守ることができる、強大な力が」

「……な、それは」

同時、審判者ラダマンティスは懐から、赤ん坊の手位の大きさのものを取り出した。透明感のある黒い結晶であるそれは、どこか吸い込まれそうな魔力を放っている。

そして、光輝はその結晶に見覚えがあった。それは古都テルスでの依頼後、王都に戻った香織と雫が身に着けていた腕輪プレスレットに裝飾されていた宝石と同じもの。

「これは黒星晶鋼アキシオンという。魔力が結晶化したものだと思えばいい」

「黒星晶鋼……」

「見ての通り、非常に多くの魔力が込められている。この黒星晶鋼アキシオンを間違えずに使えば、君は今の何倍にも強くなれる」

審判者の言葉に、光輝は生唾を飲み込んで黒星晶鋼アキシオンをじつと見る。既に、敵であるという警戒などどこにもなかった。

その光輝の様子にフツと微笑むと、審判者ラダマンティスは手の黒星晶鋼アキシオンを光輝へ差し出す。光輝

はまるで腫物を扱うかのように黒星晶鋼アキシオンを受け取ると、ゴクリと喉を鳴らし黒星晶鋼アキシオンと審判者の顔を交互に見る。

「二応注意しておくのだが、あくまでも間違わずに使えば、だ。使い方が分かるまでは懐に入れておくだけにしたほうがいい。それだけでも、窮地には女神が力を貸してくれるだろう」

そして、用は終わったと審判者ラダマンテイスは踵を返す。疎らな人影に埋もれ、すぐにその背は見えなくなつた。その場には、立ち尽くす光輝とその手に握られた黒星晶鋼アキシオンだけが残つた。

突然の襲来と手に入れた貰い物に光輝は呆然としているが、その心は妙に澄み渡つていた。悠姫と比べた善悪も、命を奪つた感覚も、そして大切な幼馴染の事も、憂いは既に取り払われていた。

この時、黒星晶鋼アキシオンが鈍く輝いていることなど欠片も気付かず、そしてこれは、更なる苦難が降りかかる試練の始まりだった。

【グリユーエン大火山】最奥。解放者解・叛逆者放・ナイズ・グリユーエンの隠れ家。

数百年以上もの間、空気が揺らぐことがなかった小さな世界で、魔法陣が輝いた。その光に照らされ、一人の影が浮かび上がる。

「……神代魔法……これで、一つ……」

近づいた、と小さく漏れた呟きが空気を引き裂いた。微かに口元が吊り上がる。影の主は、さつそくと言わんばかりに手に入れたばかりの神代魔法を行使し、「グリユーエン 大火山」から脱出した。

そして再び、小さな世界は静寂に包まれた。

三章人物紹介・設定補足

・天津悠姫

本作主人公。

徐々に多勢力で自身の影響下にある者達を増やしている。現状では、愛ちゃん護衛隊（愛子＋召喚組）、冒険者ギルド（ティルグ、イルワ、ロア）、魔族（カトレア、アヤメ）、王宮（遠藤、シエリア）。

「悪」になりたい。それこそ、怪物が抱えてきた理想であり目指す形。その先に誰か（みんな）が笑顔で明日を進んでいると信じているから。そして、悪の敵に滅ぼされる結末が待っている。と信じているから。

・大地母神

本作メインヒロイン。

「悪」になりたい。そのために邁進する怪物を支えるために、彼女は数え切れない罪を

犯す。それがたとえ、怪物に裁かれるべき邪悪だとしても。その先に、怪物が叶えたい世界の姿が存在するから。そして、怪物の原初の誓いを叶えるために。

・八重樫雫

サブヒロイン。

十年來の恋心が実った。「魔法の言葉助けて」を唱えたり、一番ヒロインをしている。

・白崎香織

サブヒロイン。

今更だが、夢女子ガチ恋勢というのは相当にヤバイのではないかと思う。

・ティオ・クラルス

サブヒロイン。

原作とは違い、性癖が開花されていないのでパーティーの中では一位二位でまとも。今後、性癖が開花する予定はない。

・アヤメ・キリガクレ

(アヤメ・バグアー)

今生では魔人族の将軍、フリード・バグアーの妹。元魔人族側のスパイ。

キリガクレの敬愛心は悠姫ではなくフリードへと向けられている。前世の血筋はアマツのパチモンなので、極度の地雷になるような重い愛は持っていない。今後インモラルになるかは未定。

・デイルグ・ロートレク

(デル・ハウリア)

今生ではシアの実兄。約十年ぶりに再開した。

アヤメと違い、冒険者活動で亜人族であることを隠していない。そのため舐められることも少なくないが、金ランクという証と圧倒的な実力によって周囲を黙らせている。

・清水幸利

救われたキャラの一人。

悠姫神組の使徒化、星辰光アステリズム所有と、カタログスペック上は召喚組トップ3の一人（悠姫と

ハジメは除く）。

清水幸利が辿る末路は愛ちゃん先生にかかっている。

・カトレア

救われたキャラの一人。

魔人族全体の命運を左右する重要な位置付けになった。魔人族の恋人ミハイルがいたので、将来は結ばれて幸せになれるはず。

・ノイント

救われそうなキャラの一人。

現状、悠姫を殺すことができる唯一の存在。超至近距離からの爆熱、殲滅光ガンマレイ直撃など、そもそも生きていること自体がおかしいのだが、そこは真の神の使徒。むしろ悠姫に

よって光成分が注入されているので、原初の人造惑星のような壊れキャラになる可能性がある。

・天之河光輝

幼馴染を取られたり、悠姫と自分を見比べて善悪に葛藤したりと、原作と同じく色々大変な目に遭っている勇者。

と思いきや、ギルベルトによって別の興味へと挿げ替えられたので、心はとても晴々としている。しかし、それが吉と出るか凶と出るかは光輝次第。

・アキシオン黒星晶鋼

神祖達とは違い半永久的に現界させられる、星辰体魔力が結晶化したもの。その特性を利用し、ハジメの「錬成」を用いて加工を施すことで蓄魔器バッテリーや発信機（遠隔爆破機能付）といったアーティファクトを作成している。なぜ翠色や紅色ではなく、漆黒なのかは不明。

第四章

第六十七話 大砂漠とトラブル

「グリユーエン大砂漠」、そこは赤銅色の世界と呼ぶに相応しい場所だった。赤銅色の微細な砂が風によって吹き上がり、大気の色すら赤銅色に染め上げる。そして、三百六十度、見渡す限り一色となった世界は方向感覚を狂わせる。

また、天より燦々と照り付ける太陽と、その太陽から溜め込んだ砂より放出される熱気は、軽く四十度は超えているだろう。間違いない、旅人や商人には最悪と言つていい環境だ。

しかし、それは勿論普通の旅人や商人ならばの話である。

赤銅一色の世界を黒い箱型の乗り物、ハジメ謹製の魔導四輪が爆走していた。道と言う道など欠片もないが、車内に設置された方位磁針が進むべき方向を指し示している。

「……外、すごいですね……普通の馬車とかじゃなくて本当に良かったです」

「全くじゃ。この環境でどうこうなるわけではないが……流石に、積極的に進みたい場所ではないのお」

「トータスにこんな場所があつたんだね……」

「恐らく、夜はホルアドやブルック以上に冷え込むだろう。そう考えればハジメ様様だな」

窓にビシバシ当たる砂と赤銅の世界を眺めながら後部座席のシアとテイオ、前部座席の香織はしみじみと呟き、悠姫は膝上の丸みを帯びた黒いものを優しく手で梳きながら同意した。

「前に来た時と全然違うの！ とつても涼しいし目も痛くないの！ パパはすごい！」

「……うん、ハジメパパは凄い。ミュウ、お水飲む？」

「飲むう〜」

そして、前部座席の窓際でユエと一種に座っているミュウが、誘拐されて通つた時との違いに興奮して万歳する。

無理もないだろう。海人族、それに四歳という幼さも考慮すれば、砂漠の横断など衰弱しても不思議ではない程に過酷なものだったはずだ。そんな劣悪環境に耐えたミュウにとつては、冷暖房に冷蔵庫まで完備されているこの魔導四輪は、天国とも思える快適空間だろう。

「いや、ユエ……パパ呼びは勘弁してくれねえか？」

「でもハジメ君、ミユウちゃんには普通にパパって呼ばれてるよね？」

「いや、ミユウはもういいんだよ。ただ、同級生やユエ達からそう呼ばれるのは、な」

「…むう、仕方がない」

将来像を思い浮かべていたユエは、頬を膨らませ渋々ながらも引き下がった。でもいつかは、とユエが口を開くその前にハジメは蒸し返されてたまるかと、今度はその矛先を後部の二人へと向けた。

「てかいつまでいちやついてんだよ」

「そうだよ雫ちゃん、次は私なんだから」

「…その後でよいから、妾も…」

「いやそうじゃねえんだよな…」

間違った同意をする香織とティオに、呆れたような声を出すハジメ。しかし、傍から見れば俺やユエもあんな感じだったのかと思うと、正直強くも言えないのも事実ではある。

その話題の種は勿論、

「ほら、ハジメもああ言ってるし、そろそろ、な？」

「……もう少し…」

悠姫と、悠姫に膝枕をされている雫である。ホルアドを出立して暫くはハジメ達の目

もあつて自重していたが、我慢できなくなつたらしい。仲間以外に見られる心配がなくなつた時は甘えるようになっていた。

「……八重樫つて、こんな奴だったか？」

「話を聞いた限りあの勇者のフォローもしていたようじゃし、その反動もあるんじやろうな……ん、なんじゃあれは？」

とうとう香織も悠姫に引つ付き始め、ユエが「…香織、意外とやる」と呟き、シアは「香織さん、大胆です」と目を輝かせ、ミュウが「お兄ちゃんとお姉ちゃん達、仲良しなの」と興奮する。そんな様子を面白げに見ていたティオだが、どうやら窓の外に何かを見つけたらしい。

「ハジメ殿、三時の方向で何やら騒ぎが起こつておる」

「あれは…確かサンドワームだったか？」

ティオに促されてそちらを見ると、大きな砂丘の向こうにサンドワームと呼ばれるミズ型の魔物が相当数集まっている様子が見えた。

体長は平均二十メートル、大きいものと百メートルにも及ぶという。グリューエン大砂漠にしか生息しておらず、普段は地中を潜航し、獲物が近くを通ると三重構造に並んだ牙を生やした大口で真下から襲い掛かる。この奇襲を察知することは難しく、砂漠を横断する者達からは死神として恐れられている。

とはいえ、サンドワーム自身の索敵能力は決して高いとは言えず、潜航場所の近くを通らなければ狙われることはないという。つまり、サンドワームの群れに補足されてしまった、不運な獲物がいるということなのだが……

「なんで同じ場所をグルグル回ってんだ？」

奇妙なことに、そのサンドワームの群れはその獲物がいると思われる場所を中心に、何かを窺うように周囲を旋回していたのだ。テイオが言うには、獲物を食べるか食べないか迷っているよう、らしいのだが。

「じゃが、奴らは悪食じゃ。獲物を前に躊躇するなんてことはないはずなのじゃが……」
「まあ、態々首を突っ込む必要は……ッ!? 掴まれッ！」

突然そう叫ぶと、ハジメは一気に四輪を加速させた。その直後、車体を僅かに浮き上げらせながら砂色の巨体、大口を開けたサンドワームが後方より飛び出してきた。

「下だ！ まだ来るぞ！」

「チッ！」

咄嗟に感知系の星辰光アステリズムを輝照させた悠姫が、四輪の真下から迫りくる巨体を感じ取り叫んだ。それに呼応して、ハジメはさらに右に左にとハンドルをきり、砂地を高速で駆け抜けていく。

そして車体に擦れるように飛び出してきた二体を含め、三体のサンドワームが四輪を

睥睨した。奇襲を躲されたサンドワームは、今度はその巨体に物を言わせ大口を開けて襲い掛かる。

これが唯の馬車であつたならば、この攻撃で終わっていただろう。しかし、この四輪馬車は南雲ハジメのオタク魂が作り上げたアーティファクトだ。ただ食らいつかれた程度ではビクともしない。

「そう言えば、何気に使うのは初めてだな！」

そんな事を言いながら、ハジメは四輪をドリフトさせて車体の向きを変え、バック走行すると同時に四輪の特定部位に魔力を流し込み、内蔵された機能を稼働させる。

四輪のボンネット部分が一部スライドして開き、中から四発のロケット弾がセツトされたアームがせり出してきた。そしてアームは獲物を探すようにカクカクと動き、迫りくるサンドワームへと砲身を向けると刹那の間に発射。サンドワームの口内へと吸い込まれていった。

「香織、ミュウを」

「うん、分かっているよ」

次の光景を予見した悠姫は、その凄惨な光景を見せないようにと香織に声を掛ける。香織は分かっているとミュウを正面から抱きしめて、そして次の瞬間、悠姫が予見した通りの光景が表れた。

サンドワームは爆音と共に内側ら弾け飛び、真つ赤な血肉がシャワーのように降り注いだ。バックで走る四輪のフロントガラスにもベチャベチャとへばりついた。これには見えていないミユウ以外の全員が顔を顰める。

「うへえ……ひでえなこりゃ」

「殺つた本人が言うことか、それ？ それよりも次が来るぞ」

爆音と衝撃に気が付いたのだろう、砂丘の向こう側にいたサンドワーム達が一齐に動き始めた。地中の浅い部分を移動しており、砂が盛り上がっているために隠密性が無い。おそらく、奇襲よりも速度を優先しているのだろう。

ハジメは四輪を砂丘の方へと向かわせた。そして三体を瞬殺したロケットをしまい、別の兵器を起動させる。ボンネットの中央が縦に割れ、なかから長方形の箱が表れ、軽快な音でライフル銃へと変形した。

その直後、一体のサンドワームが勢いよく地上へと飛び出した。ライフル銃は紅いスパークを迸らせながらサンドワームの頭部に狙いをつけ――

「fuc」

――目標が宙を舞ったことで、スパークは鳴りを静めた。宙を舞ったのだ、サンドワームの頭部が。胴体から斬り飛ばされて。そして、その頭部へと。

「星環境変性」
オルタレイション

——^V焰の神器、^B焼炎魔杖。顯現すべきは黄泉國^L——

魔杖の熱戦が血肉ごと焼き消した。サンドワームを斬ったのは雫だった。悠姫にくっ付いていたところを、襲われて中断することになったことへの腹いせである。そこに、悠姫が援護射撃を行った形になる。

雫に気が付いて地上へと現れたサンドワーム達を、雫は殺気を籠めて睨みつけた。たった一体を屠ったところで雫の怒りが収まるわけがなく、サンドワームが雫に蹂躪されたのはある意味当然の結末だった。

そして、一行はサンドワームが捕食するのを躊躇していた人の元へと向かった。白い衣服と外套を身に纏った人が、砂丘の向こうで倒れ伏していたのが見えたからだ。

“治療師”である香織がその人物へと近づき、その顔を見ると目を見開いて驚いた。歳は二十代半ばくらい若い青年なのだが、香織が驚いたのは年齢ではない、青年の状态だった。

苦しうに歪められた顔には大量の汗が浮かび、呼吸は荒く、脈も速い。服越しでも判るほどの高熱を発しており、圧力を掛けられているように血管が浮き出ており、目や鼻といった粘膜から出血もしている。唯の日射病や風邪ではない、尋常ではない様子

だ。

香織はその人物に、対象を診察して、その結果を自分のステータスプレートに表示する技能「浸透看破」を使った。それと同時に、悠姫が男の状態を読み取った。

「これは、体内の魔力が暴走してるのか？」

「…うん、そうみたい」

「…どういうことだ？」

「変なものでも食べたのか、或いは飲んだのか、それが原因で体内の魔力が暴走状態になってる。何故か、魔力を外に排出することもできないから、内側から強制的に活性化・圧迫してる。……ああ、魔物の肉を食べた時に似ているんだ」

「なるほどな」

最後の一言はハジメは直ぐに理解できる内容だっただろう。なぜなら、奈落で自分が実際に体験しているのだから。この青年ほど軽い症状ではなかったが、つまり急いで対応しなければ行き着く結末が同じ可能性は高い。

「このままだと、内臓や血管が破裂して死ぬだろう。香織、まずはこの男から魔力を吸いだしてくれ」

「うん、分かった。光の恩寵を以て宣言する。ここは聖域にして我が領域。全ての魔は我が意に降れ。『廻聖』」

香織は悠姫の指示に従い、光系の上級回復魔法「廻聖」を行使した。これは一定範囲内の人間の魔力を他者に譲り渡す魔法であり、その応用として他者の魔力を強制的に吸い出すドレイン系の魔法としても使用できる。

そして青年から吸い出された魔力は、神結晶の腕輪へと蓄えられていく。すると、徐々に青年の呼吸が安定し、出血も収まってきた。香織は「廻聖」の行使を止めると、初級回復魔法「天恵」で、青年の傷ついた血管を癒していった。

「取り敢えずこれで……今すぐ、どうこうなることはないと思うけど、根本的な解決は何も出来てない。魔力を抜きすぎると、今度は衰弱死してしまうかもしれないから、圧迫を減らす程度にしか抜き取っていないの。このままだと、また魔力暴走の影響で内から圧迫されるか、肉体的疲労でもそのまま衰弱死する……可能性が高いと思う。勉強した中では、こんな症状に覚えはないの……ユエとテイオは何か知らないかな？」

「……正直、こんな病気は聞いたことはないのう。じゃが、主殿の言ったことが答えに近いんじゃないかの？」

「……魔物の肉を食べた、か」

テイオの言葉に反応して、悠姫が呟いた。とはいえ、悠姫は魔物の肉を食べた時の症状は、ハジメから聞いた範囲でしか分からない。つまり、当時のことを知っているのはハジメだけなのだ。

そして、悠姫がハジメへと顔を向けたところで、青年が意識を取り戻したらしく呻き声を上げ、目蓋がふるふると震えた。ゆつくりと目を開けて周囲を見渡す青年は、心配そうに自分を見つめる香織を見て。

「女神？　そうか、ここはあのYオツ!?!」

「雫!?!」

「雫ちゃん!?!」

「……あ、ごめんなさい。つい……」

香織へと手を伸ばそうとした青年の腹を、苛立ちが残っていた雫が刀の鞘で突き刺した。結果、ひどい呻き声を上げて止めを差された青年は、再びその意識が彼方へと旅立つことになった。

第六十八話 アンカジ公国

再び気絶した青年を魔導四輪の中に避難させて暫く、青年は目を覚ました。同時に正気も取り戻したようで、外の砂漠と比べると天国と言える快適な環境や自分を囲む悠姫達にひどく混乱したが、悠姫達が命の恩人だと理解すると頭を下げ、礼を言い自己紹介を始めた。

青年の名前は、ビイズ・フォウワード・ゼンゲン。悠姫達が「グリユーエン大火山」に挑戦する際の中継拠点に考えていた、アンカジ公国領主の子である。

これには、さすがの悠姫達も驚きを隠せなかった。アンカジ公国はエリセンから運送される海産物の鮮度を極力落とさずに運ぶための要所で、その海産物の産出量は北大陸の八割を占めている。つまり、北大陸の食糧供給の一分野において、独占的な権限を得ているに等しいのだ。ハイリヒ王国の中でも信頼の厚い屈指の大貴族である。

そんな大貴族の子が、謎の奇病によって砂漠で息絶えようとしていたということは、アンカジ公国に何かがあったということなのだろう。

ビイズの方も、香織や雫の素性（「神の使徒」として異世界から召喚された者）や悠

姫達の冒険者ランクを聞き、目を剥いて驚愕をあらわにして天へと祈り始めた。神が我らに女神を遣わしてくださったのだと。

そして、ビイズが語った内容はまさにアンカジ公国の危機だった。

まず四日前、アンカジで原因不明の高熱を発し倒れる人が続出した。それは本当に突然のことで、初日だけで人口二十七万人のうち三千人近くが意識不明に陥り、症状を訴える人は二万人にも上ったという。当然、直ぐに医療院は飽和状態となり、公共施設を全開放しつつ医療関係者が総出で当たったが、香織がビイズに行つたのと同じく、進行を遅らせることは出来ても完治させる事は出来なかつた。

更には医療関係者の中から倒れるものが現れ始めた、遂に死者が出始めた。それも発症してから僅か二日だという事実には、絶望が立ち込め始めた。

そんな中、一人の薬師が飲み水に魔力の暴走を促す毒素が含まれていることを突き止めた。そしてその毒素がアンカジの生命線であるオアシスを汚染していたことが、奇病の原因だったのだ。

つまり、新たな水の確保が出来ないということでもある。いずれ水の備蓄は尽きるという事実にもなる絶望が立ち込めるが、解決策がないわけではない。

それは、砂漠のずっと北方にある岩石地帯か〔グリーンエン大火山〕で少量採取できる「静因石」という希少鉱石を使うこと。「静因石」には魔力の活性を抑制する効果

があり、粉末状にしたものを服用すれば体内の魔力を鎮めることが出来るだろう。

「だが、新たに『静因石』の採取に行ける冒険者は皆倒れてしまった。水の備蓄も圧倒的に足りない。ゆえに私と護衛隊で救援要請の為に王国へ行こうとしたのだが……」

「自分も感染していた、ということか。健康だった護衛隊はサンドワームに喰われ、奇病に罹ったビイズ殿は喰われずにこうして助かったとは、幸運と言うか不幸と言うか」

「ああ、情けない。今もなお、アンカジの民は苦しんでいるというのに。……だが、私は幸運だ。君達に、いや、貴殿達にアンカジ公国領主代理として正式に依頼したい。どうか、私に力を貸して欲しい」

そう言い、ビイズは深く頭を下げた。車内を静寂が包み込む。

悠姫とハジメに視線が集中する。二人は軽く目を合わせ、静かに頷いて口を開いた。「受けてやるよ、その依頼。元からアンカジには寄る予定だったし、グリユーエン大火山にも挑むつもりだ。そのついでに『静因石』を採ってくるくらい問題じゃねえ」

「さすがに二十万人の無辜の人々を見捨てるほど非情じゃない。それに……」

「それに？」

「……いや、何でもない。依頼の内容は、ビイズ・フォウワード・ゼンゲンをアンカジ公国まで送り届けること。使える水と『静因石』の確保。であつてるか？」

——アンカジ公国に魔族の陰がある等、言えるわけがない。

カトレアからの情報提供によって、魔人族がアンカジ公国に何かをするということを知っていたが、カトレアが別動隊だったからかその何かまでは分からなかった。

しかし、兵站の一角を担う要所であることは間違いはない。魔人族が狙う場所としては当然だ。

「あ、ああ。それで、まずは王国に」

「いや、水の確保には当てがある。このままアンカジに向かうぞ」

「当て？ そんなのどうやって」

数十万人分の水の確保などどうやるのかと、ビイズは訝しむ。それは当然の疑問なのだ、ここには魔法の天才であるユエがいる。そして、大気中の水分を集めて水を作るなど、常識的には考えつかないだろう。

それを掻い摘んで説明する香織と、背後に宇宙を展開する猫のような表情になったビイズを尻目に、ハジメは魔導四輪をアンカジ公国に向かわせた。

乳白色の外壁に囲まれ、その各所から登る光の柱が緩やかな曲線を描きながらアンカジ全体をドーム状に覆い、砂嵐から都を守っている。内部も乳白色の建造物が立ち並び、外界の赤銅色とのコントラストが美しさを際立たせている。

しかし、その美しさとは裏腹に、アンカジは暗く陰気な雰囲気な霧に覆われていた。通りに出てくる者は極めて少なく、ほとんどの店も営業していないようだ。誰もが戸口をしつかり締め切つて、まるで嵐が過ぎ去るのをジツと蹲つて待っているかのような、そんな静けさが支配していた。

「……使徒様やハジメ殿達にも、活気に満ちた我が国をお見せしたかった。すまないが、今は時間がない。都の案内は全てが解決した後にも私自らさせていただこう。一先ずは、父上のもとへ。あの宮殿だ」

「父上！」

「ビイズ！ お前、どうしつ……いや、待て、誰だそいつら!?」

ビイズの顔パスで宮殿内に入った悠姫達は、そのまま領主ランズイの執務室へと通された。衰弱が激しいと聞いていたのだが、どうやら治癒魔法と回復薬を多用して根性で執務に乗り出していたらしい。

そんなランズイは、一日前に救援要請を出しに王都へ向かったはずの息子が帰つてきたことに驚きをあらわにした。ビイズは悠姫の肩を借りながら、ランズイへと事情を説明した。

話はトントン拍子に進み、執事らしき人が持ってきた静因石の粉末を服用して完治させたビイズに香織が回復魔法を掛けると、全快とまでは行かずとも行動を起こすに支障がない程度には治ったようだ。

なお、完治といっても、体内の水分に溶け込んだ毒素がなくなったわけではなく、単に静因石により効果を発揮できなくなったというだけである。体内の水分に溶け込んでいる以上、時間と共に排出される可能性はあるので、今のところ様子見をするしかない。

「じゃあ、動こう。香織はシアを連れて医療院と患者が収容されている施設へ。魔晶石も持っていけ。ハジメ達は、水の確保だ。ランズイ殿、最低でも二百メートル四方の開けた場所はあるか？」

「む？ うむ、農業地帯に行けばいくらでもあるが……」

「なら、そっちはハジメとユエが行ってくれ。シアは、魔晶石がたまったらユエに持って行ってくれ。残りの俺達はオアシスに行つて汚染原因を調査する。ハジメとユエも水源を確保したら俺達に合流してくれ」

そして、悠姫の指示で行動を開始する。

香織とシアはビイズと同じ病状で倒れている住民の治療。その過程で抽出した魔力が溜まった魔晶石も用いてハジメとユエが水源の確保。

そして、悠姫達が原因とされてるオアシスの現状を調査、原因の特定・排除、という名目で原因の排除。その後、「グリユーエン大火山」に向かうという流れになった。

オアシスは、キラキラと光を反射して美しく輝いており、とても毒素を含んでるようには見えなかった。

しかし――

「……いるな」

「いるってことは……魔物？」

「恐らくな。なあ、ビイズ殿」

オアシスの中から魔力を感じ取り、悠姫がぼそりと呟いた。

「国で調査を行ったと言っていたが、どの程度を調べた？」

「ええと、オアシスとそこから流れる川、各所井戸の水質調査と地下水脈の調査です。ですが、話した通り地下水脈は特に異常は見つかりませんでした。とは言え、調べられたのはこのオアシスから数十メートルが限度で、オアシスの底まではまだ」

「オアシスの底には、何かアーティファクトでも沈めてるのか？」

「？ いえ。オアシスの警備と管理として結界系のアーティファクトは使われています」

が、それは地上に設置してるので、オアシスには何も…」

「なるほど…零とテイオは迎撃の用意を。他はオアシスから離れてくれ」

「分かったわ」

「了解じゃ」

「ユ、ユウキ殿？ 何を？」

ビイズの言葉に頷いた悠姫は、指示を出しながら太刀を片手にオアシスへと片腕を入れる。

「『オルタレーション星環境変性』——『Metallnova超新星』——『S i l v e r狂い哭け、罪深き銀の人狼よ』」

輝照するのは人狼の星光。

「『ソナ索敵振』」

腕を揺らして発生させた振動で索敵する。じつと動かない悠姫にビイズ達は困惑して近づこうとするが、零とテイオがオアシスを警戒しながら制止する。それから訳一分が経過し——

「『ハイモニクス増幅振』」

——水面に波が立ち始め、直ぐにビイズ達の足元にも伝わる大揺れへと変わる。ビイズ達は何が起きたのだとさらに困惑し、悠姫へと詰め寄ろうとしたその直後、

風を切り裂く勢いで無数の水が触手となって悠姫に襲いかかった。しかしそれは、零

の抜刀術とテイオの炎によって一つ残らず迎撃され空中へと霧散した。

そして、水面が突如盛り上がったかと思うと、重力に逆らってそのまませり上がり、十メートル近い高さの小山になったのである。

「な、なんだ……これは……」

ビイズの呆然とした眩きが響き渡った。

外章

前日譚 星辰戦争

新西暦1029年

軍事帝国アドラー政府中央棟地下。

軍高官でも極一部しか知らない極秘施設、旧日本国の遺産が眠るその場所で、二人の男が相對していた。

軍事帝国アドラー第37代総統閣下、クリストファー・ヴァルゼライド。

黄道十二星座部隊第一近衛部隊近衛白羊隊長、ユキ・ロスリック。

総統閣下とその副官、共に同じ戦場を駆けてきた戦友であり、そして幼少期からの幼馴染。その仲はとも良好で、両者と付き合いが長い者からも、意見が対立している所すら見たことがないと言われている。

そんな二人が今、アドラーの最重要極秘施設で、互いに殺気をぶつけながら向き合っていた。

「本当に俺と戦うつもりか、ユキ」

「そうだ。歪みを正し、この世界をあるべき形に戻して見せる。そのために」

それは、数えきれないほど繰り返してきた決別の言葉^合。

ユキは太刀を抜き構え、呼応するようにヴァルゼライドもまた二振りの太刀を抜き放つ。

「そうか、ならば是非もない。来るべき聖戦のため、俺はここで死ぬわけにはいかんだ」

「それはこちらと同じだ。人造惑星^{カグツチ等}と雌雄を決する戦いがクリスの聖戦ならば、この星辰戦争^{ギガントマキア}こそが、俺の聖戦。故に、求めしものはただ一つ——」

これより始まるのは、天頂神^{ゼウス}と大地^{テュポエウス}の末子の最終戦争。ここに、神話は紡がれる。

「勝つのは、俺だ!!」

「超新星^{Metainova}」——「殲嵐^{Apocaly}の齋^{ay}す終焉^{ps}に、光^{ph}は無^oくツ！」
 「超新星^{Metainova}」——「雷霆^{Gamm}の轟^aく地平^{ayk}に、闇^{ra}は無^oくツ！」

開幕初手から両者は星辰光の開帳を選択した。激突の衝撃が空気を震撼させ、空間が

悲鳴を上げる。

この選択は単に、互いの力量を信頼している故なのだろう。共に全力、様子見不要。何故なら、星辰光を輝照しなれば倒されるから。

双方共に、新西暦最高峰の星辰奏者。数多の不条理を踏み拉き、帝国に繁栄を齎さんとする光の奴隸。そのような男達の力が、生半可であるはずがない。

終末の天災は万象を喰らい尽くし、殲滅の光刃は邪悪を滅ぼし尽くす。

そして、約束された繁栄を民へ齎す為に。

「ッ、ハァー！」

「——シッ——」

光刃が怪物へと空気を斬り裂きながら襲い掛かるが、怪物は次撃すらも読み切った上で、まるでお手本を見せるかのように光刃を捌いた。そして捌いた流れに沿うように放たれた怪物の太刀筋が、英雄に傷を付ける。

致命傷どころか、英雄の動きを阻害することすらできない僅かな掠り傷。しかしそれが、この二人の差を物語っていた。

単純な性能ならヴァルゼライドに軍配が上がるだろう。怪物を上回る出力と極限域の集束性から放たれる斬撃は、怪物の持ち得るあらゆる守りを突破する。更には英雄が蓄積してきた戦闘経験値すらも加わり、間違いない過去最高の戦闘力を誇っている。そ

れ故に、ヴァルゼライドが優位に立っているのかと言えば、そうではない。

ユキが有する星光は、化学反応操作能力。そして、極領域の干渉性。それ即ち、万物万象に干渉できると言っても過言ではない。そしてそれは、英雄の星光に対しても有効だった。英雄が有する星光は、核分裂・放射能光発生能力。ならば、その核分裂反応を抑制すればよい。

結果、出力差によって無効化までは出来なかつたものの、英雄の極光斬はその威力を大きく減衰させていた。少なくとも、一撃必殺には確実に届かない。

加え、ユキの戦闘技巧。これこそ、戦局の天秤を傾ける最も大きな要因であつた。

英雄は、東部戦線という超激戦区を駆け抜け、また一切の努力を惜しまなかつた傑物ではあるが、その英雄の隣に常に立ち続けてきたのが怪物だ。ならば当然、英雄に匹敵するだけの戦闘経験を怪物も積んでいるということに他ならない。更に、「死に戻り」という怪物の謎の特異性がその戦闘経験を何千倍にも引き上げている。

「フツ、ハア！」

故に、英雄に傷を負わせるという怪物の強さが浮き彫りになるのだ。

徐々にだが確実に、怪物の刃は英雄を敗北へと誘っている。

「……見事、よいかは流石と言うべきか」

間隙を縫つてヴァルゼライドの口から出たのは称賛だつた。

「最初^{初め}から理解していたつもりだったが、それ以上だ。告白するが、お前以上に俺を知り、そして反対に俺以上にお前を知るものなどいないと思っていたのだが。お前は何時^{いつ}も、俺を理解を超えていくか」

「何を言うよ。お前のその告白には同意するが、だけどお前も何時^{いつ}だって俺の理解を超えていくじゃないか」

「必要ならばそうするまでだ。そしてやはり、俺にはお前の考えが読めんよ。ここで俺と戦つて、一体何になるといふ」

そして英雄は、怪物へと問う。怪物が星辰戦争と呼ぶ、その聖戦の意味を。そのうちに秘めた、怪物の真意を。

「今更野心に目覚めたか？ 純潔と呼ぶに相応しい尊き^{ブルーブラッド}血族として、己こそが民を導かねばならんと決意したか？ いや、違うな。お前は真に己の血に執着^{アマツ}したことなどなければ、興味すらない。血筋はあくまで血筋であり、才能や貧富の差こそあれど皆同じ人間だと考えるのがお前だ。俺の理解を超えていくとは言ったが、この程度の見誤りはないと断言しよう」

故に何故だと、ヴァルゼライドの眼光がユキを貫いた。対してユキはその眼光に一切怯むことはなく、むしろ僅かな微笑を含ませながら強く押し返した。

「なに、最初に言ったじゃないか。歪みを正し、この世界をあるべき形に戻して見せる、

とな。クリストファー・ヴァルゼライド、そして加具土神^{カグツチ}。お前達こそ、この世界を破壊させる歪みに他ならない」

英雄^{ヒカリ}と神星^{ヒカリ}の大戦争。聖戦^{せんもの}が現実となれば、誇張なくアドラーどころか新西暦そのものが消滅するだろう。止まることを知らない光の奴隷同志が衝突するとはそういうことなのだから。

このままでは、そんな結末を迎えてしまうと知っているから。

「誰かが生きる世界の為、お前達はここで消えるべきだッ！」

叫びと同時に、ユキはヴァルゼライドの右太刀を上へと弾き飛ばした。無防備に晒されるユキの胸。しかし、ヴァルゼライドはその隙を突くことはなく、後ろに大きく跳び退く。

「チッ！」

そしてヴァルゼライドがいた位置へと雨霰と鎌鼬が降り注ぎ、直ぐ様進路を地面からヴァルゼライドへと切り替え襲い掛かる。

即座に直撃するものだけを選び抜きそれらを光刃で消し飛ばしたが、残りの鎌鼬がまたもや進路を切り替えて向かってきた。ヴァルゼライドと言えど、これには無傷とはいかなかった。

腕を、脚を、頬を斬り裂く鎌鼬。更にはユキの一振りと共に発生した大竜巻が追撃し

て襲い掛かる。その大竜巻を突撃と同時に放った極光斬で消し飛ばすが――

「――シッ！」

「――オッ」

――ユキによる蹴撃がヴァルゼライドの胸部へ叩き込まれ、その体は宙へと飛ばされる。

これは誰もが言葉を失くす光景だろう。最強の星辰奏者^{エスベラント}、鋼の英雄、無敵のヒーローが、こんな簡単にあしらわれているなど。

しかし、当のユキ自身はヴァルゼライドをあしらっているなどとは微塵も思っていない。一つの間違いが致命の隙と敗北へと誘うこの攻防が、そんな軽いも尾であるはずがないのだから。

「……立てよ、クリストファー・ヴァルゼライド。お前がこの程度であるはずがない」

それに応えるように飛び出してきたヴァルゼライドの光刃を、ユキは受け止める。同時、反対の太刀による追撃を身を振って回避するが、体勢を崩されたことで押し込まれ、ユキはこの戦闘初めての傷を負った。

「ッ、ああ、やつぱり変わらないな！」

覚醒したと、ユキは傷口から蝕む殲滅光^{ガンマレイ}を耐えながら確信した。だがしかし、ここままで全て想定内、経験済みの流れに過ぎない。この覚醒もまたその内であり。

「ならばッ！」

「そう来るッ！」

斬撃斬撃斬撃刺突斬撃斬撃竈回避斬撃刺突斬撃竈。

斬撃斬撃斬撃竈斬撃刺突回避斬撃斬撃防御刺突竈斬撃斬撃、斬撃斬撃斬撃斬撃竈
 刺突竈斬撃斬撃斬撃刺突竈斬撃斬撃斬撃斬撃斬撃斬撃——

回転率は最高潮へと達している。劍舞の嵐は途切れる様子を全く見せない。

「……俺や加具土神^{カグツチ}が歪みと言うならば、ああその通りだ。否定はせんよ。だが、それがどうした？ まさか、その程度の理由で俺が止まると思っているのか？」

「ハッ、まさか！」

弾かれるように煌いた斬閃と真空の刃が、再びヴァルゼライドへと殺到する。致命となるもののみを回避し、ヴァルゼライドがユキへと刃を振るうが受け止め流され、返しの刃がヴァルゼライドを斬り刻む。

それでも、ヴァルゼライドは傷に一切の気を止めることはない。偽りなど一切許さぬと、その蒼き瞳でユキを見据えて。

「——ならば語れよ、親友。お前の胸の内を曝け出せ」

“親友”と、その一言にユキは総身を震わす何かを感じ取った。これまで何度も聞いてきたはずなのに、何度も経験してきたはずなのに、まだ何かしてくれるのか、と。

「俺はッ——」

そして、ユキは堰を切ったように初めて語りだした。ユキが目指した形を、数百数千と繰り返してきた戦いの果てに望むものを。

「——俺は、許せないんだよ。この歪んだ世界が、未来がッ！ お前が敗ける？ 俺に？ ふざけるなッ！」

憤怒で顔を歪ませながら、ユキは咆哮する。

「お前達はこの世界の特異点だ。数多の物語を終わらせ、そして数多の物語を生み出す。正しく、歴史が生み出した存在だよ」

「でも、俺は違う。本来、この時代に、この世界に存在するはずがない異端者。あるべき物語に歪みを生じさせる、究極最大の破壊者。そんな俺のせいで、お前の英雄譚を終わらせるなど、認められるわけがないだろうがッ！」

そう、ユキが口にする歪みとはヴァルゼライドと加具土神カグツチの事ではない。なぜなら、彼らはこの世界で生まれ育った存在であり、その運命を破綻させるのは銀の運命一つの失敗だと決まっているのだから。

ならば、歪みとはユキ・ロスリック本人に他ならない。異なる時間軸から飛来し、この世界に突如として発生した何か。それが今、ヴァルゼライドの運命を破綻させている要因であり、ユキにはそれが許せない。

英雄が怪物に倒されるなど、あつてはならないのだから。

「だからこそ、この星辰戦争ギガントマキアが必要なんだよ！ 神と怪物の最終決戦が！ 偉大な雷火が全てを焼き尽くした先に、繁栄に輝く新世界が待っているのだからッ！」

それなのに、英雄は怪物に敗北する。それが歪みユキによつて狂わされた結果であり、ヴァルゼライドが到達する敗北なのだから。つまり因果というものであり、それは意図的に変えることは出来ない結末でもある。

「ゆえに、勝つのは俺だッ！」

ゆえに、俺に敗北しやうりを与えてくれ。

激突は既に万の域へ到達し、常識的限界は彼方へと置き去つた。両者ともに傷を負っていない部位は存在せず、仮に第三者がこの光景を見れば、二体の死体が大戦争を繰り広げているように見えるだろう。

戦況は技量と経験で勝るユキへと僅かに傾いていると言え——

「ハアア——ッ！」

——そして決着は唐突に訪れた。

一瞬の間隙を縫って放たれた渾身の袈裟斬り。ヴァルゼライドから吹き出る血潮は星辰奏者をして致死量を超えている。

これにて、星辰戦争は終幕を迎えたのだ。

この結末を迎え、ユキは先ほどまでの熱が嘘だったかのように冷えた様子で、項垂れながら呟いた。

「……俺の勝ちだ、クリス」

あと一手、届かなかつたと。

これまでに経験してきた星辰戦争でも、この袈裟斬りによって決着していた。それはつまり、この一撃が英雄を確実に殺すのだと知っているから、今生でも勝利を確信する。

「……ああ、これで、また——」

また繰り返す。この終わりの見えない地獄を繰り返す。

もうまたか、としか感じる事が出来ない。英雄の腹から臓物が零れ落ち、致死量を超えた血の池に崩れ落ちる。そして光り輝く英雄譚は怪物譚に凌辱され、非業の死を遂げる。もう見慣れた光景だ。

何度繰り返してきたかなど、そもそも数えていない。たとえ数えていたとしても、数

百数千ではまず足りない。星辰戦争^此まで辿り着けなかった回数も含めれば、死に戻り
 “はその数倍を軽く超えてくるはずだ。

それでも尚、虜囚のようにユキ・ロスリックは因果^類に繋がれている。慟哭^{さげび}も涙も全て
 を抱え、回帰したユキ・ロスリックは再びこの星辰戦争^地を繰り返す。

「——いいや、まだだ」

いや、繰り返した。これまで。

「俺への勝利を、親友^{おまえ}に背負わせるなどできん。俺は止まる訳にはいかんだ」

「——は？ ツグオツ!」

ユキの耳朶に雄々しき宣言が聴こえて思わず呆けると、その無防備な胸を薙ぐように
 眼前の男の一閃がユキを斬り裂いた。

腹が斬り裂かれ傷口から侵食する、これ迄とは比べ物にならない程に強力な破壊の
 光。常人はおろか強化兵^{エスベラント}ですら即死しかねない激痛がユキを襲う。しかし、ユキはその
 程度の事は一切気にしていない。いや、そもそも己を蝕む殲滅光^{ガンマレイ}に気付いてすらいな
 い。なぜなら、それが立ち入れぬ程の異常事態が発生しているのだから。

ユキは、確かにヴァルゼライドを斬った。放った渾身の袈裟斬りはヴァルゼライドの

命を断ち切り、それが当然だと言うかのように星辰戦争は勝利する。それが必然の幕引きであり、そう幾度も繰り返してきた決着。それなのに――

「――な、んで……斬られ……て……」

「お前が抱えていた苦しみを理解した、などとは到底言えん。だが、お前が俺の勝利を信じているということは理解した。

ゆえに今一度、いや、何度でも宣しよう。勝つのは俺だ」

――今、自分は何をされた？ 斬られた。誰に？ 当然、ヴァルゼライドに。

何故？

ここで斬り返されたこと、永い死に戻りの中で一度たりともあつただろうか？

否。では何故と、更に疑問は深まっていく。

因果という理不尽の鎖に繋がれている以上、天頂神が怪物の敗北するという結末は

変わらないはずで。

「――あツ、ああツ。まさ、か」

因果という鎖に繋がれているから結果が変わらない。では逆に言うならば、結果が変わったならば、鎖はどうなった？

「越えたのか。このふざけた因果律を――」

鎖は断ち切られた。そう認識した途端に、何かから解放されたと感じ取った。

この新西暦に辿り着いて一度たりとも拭えたことがない違和感。

あの日、クリスに会ったときに感じた、決して無関係と思えなかつた感覚。

あの日、ガイアに会ったときに知った、何かに縛られているという感覚。

その一切が砕け散り、歪んだ軸は正された。

「——は、ははッ。ハハハハハッ！ 最っ高だ！ 素晴らしいぞ、クリストファー・ヴァルゼライド！ 我らが英雄！」

血涙を流し、血反吐を撒き散らしながらユキは歓喜の咆哮を上げる。

因果律という概念的な繋がりを断つ所業。常人はおろか人の身では不可能なことを、この英雄男は実行した。

原理は不明。

偶然なのか、奇跡なのか、はたまた必然なのか。しかし、この男男ならば仕方がないだろう。

先の一撃に続くように繰り出される光の剣を捌いていき、その一撃一撃を受ける度に殲滅光ガンマレイがユキの身を焦がす。だが、ユキはその致命傷程度は一顧だにしていな

なぜなら、既に己の末路は定まったから。因果律運命の歯車を破壊した英雄ヒカリに滅ぼされることこ

そ我が本望。

だから、さあ——

「——ああ、だからこの星辰戦争に終焉を！ 怪物の骸を越え、これから先の新世界に貴方が齎す繁栄を——」

「——天^G霆^aの轟ⁿく地^m平^aに、闇^rは無^yく」

怪物の懇願に答えるように轟いた、邪悪を滅ぼす死の光。

そして、天霆の極光が怪物を飲み込んだ。

血の池へ仰向けで倒れている星辰戦争の敗者^{勝者}、ユキ・ロスリック。彼の命は、本当の意味で死を迎えようとしていた。

「……は、はは。なんて顔を、してるんだよ」

ユキは倒れる自分を見下ろす勝者の表情を見て、掠れるように笑う。とはいえ、その表情の変化は永年の親友であるからこそ分かるようなものであり、もう一人の親友以外には変わらず仏頂面に見えるだろう。

それでも、そんな表情が理解できるほどの付き合いの長さが嬉しいから、自分の為に

そんな表情をしてくれることが嬉しいから、ユキは苦しそうに笑う。

「勝者の義務とは貫くこと、なんだろ？ 逡巡なんて、お前の柄じゃない」

「……ああ、そうだな。さらばだ、親友^{ユキ}。俺は、お前の屍を越えて行く」

「それでいいさ。それが、お前の英雄譚なのだから」

ユキは瞳から光を失いつつも、心から安心しきった表情で――

「あり、がとう、クリス。お前、たちに、会えて、本当に、よかった」

――静かに、息を引き取った。

アスクレピオスの大虐殺から二年が経過したその日、一人の帝国軍人の訃報が伝えられた。

横道^{ソデイ}十二星座^{アツク}が一角、第一近衛部隊・近衛白羊^{アリエス}部隊長ユキ・ロスリック、死去。

英雄の隣に立ち、多くから慕われてきた男の訃報は決して小さくない影響を与えた。

しかし、そもそも世界の異物であったためなのか、人々の記憶から徐々に消えていき、一年も経過した頃には誰からの記憶にも残っていないかった。

そして、新西暦の歴史は正しい形で紡がれる。

その数年後、銀^{シルヴァ}の運命^{アリオ}の邂逅によって逆種劇^{ヴェンデッタ}の幕が上がる。